九州横断自動車道関係
埋蔵文化財発掘調査報告書 (19)

西山田二本松遺跡

1996年3月

佐賀県教育委員会

佐賀県文化財調査報告書　第128集
九州横断自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書　(19)

西山田二本松遺跡

西山田二本松遺跡A区
（にしやまだにほんまつ）

西山田三本松A遺跡
（にしやまださんぼんまつ）

西山田三本松B遺跡
（にしやまださんぼんまつ）

1996年３月

佐賀県教育委員会

序

この報告書は佐賀県教育委員会が日本道路公団の委託により、昭和60・61年度に実施した佐賀郡大和町所在の西山田二本松遺跡A区・西山田三本松A・B遺跡の発掘調査の記録であります。

嘉瀬川の対岸に肥前国府跡を臨むこの地域は、古代の官衙に関連する遺跡を中心として原始・古代の遺跡がきわめて多く分布しております。本書に報告しました遺跡におきましても、弥生時代の集落や奈良・平安時代の官衙などに関する遺構・遺物が数多く確認されています。

これらの調査成果が、今後の関連する調査・研究の一助となり、さらに地域の歴史と埋蔵文化財に対するなお一層のご理解をいただく資料となれば幸いに存じます。

本書の発刊にあたり、長期にわたる多難な発掘調査や整理作業に従事されました地元の皆様をはじめ、多大なご協力をいただきました日本道路公団並びに関係者各位に対し、心から厚くお礼申し上げます。

平成8年3月29日

佐賀県教育委員会

教育長　林　田　重　人

例　　言

1　本書は九州横断自動車道建設に伴い、昭和60・61年度に実施した佐賀郡大和町大字川上所在の西山田二本松遺跡A区・西山田三本松A遺跡・西山田三本松B遺跡の発掘調査報告書である。なお、関連する参考資料として、近隣に位置する大久保三本松遺跡の概要も併わせて紹介しておく。

2　発掘調査は日本道路公団の委託を受け、佐賀県教育委員会が実施した。

3　本書の執筆分担は次のとおりである。

第１章　調査の経過……渋谷　格

第２章　地理的・歴史的環境……渋谷　格

第３章　遺跡各説

西山田二本松遺跡Ａ区……渋谷　格

西山田三本松Ａ遺跡……田平徳栄

西山田三本松Ｂ遺跡……田平徳栄

大久保三本松遺跡（概要）……田平徳栄

4　図面・写真等の記録類および出土遺物の整理作業分担は次のとおりである。

遺物復原……村瀬邦子・土井マサ子・室岡勝代・江口友恵・田村芳子・野田美恵子
嬉野みつ代・新井久美・瀬山由規子

遺物実測……久保恭枝・蒲原淑子・末吉由紀子・吉田雅子・宮島五月・谷澤裕美
北村真弓美・神田浩子・鶴田啓子・光石逸子・村里育子・江副朋子
久山高史

製　　図……末吉由紀子・鶴田啓子・村里育子

遺物写真撮影……高瀬哲郎・古賀栄子・黒木優子

写真現像焼付……古賀栄子・黒木優子

5　本書で扱った遺構・遺物図面および写真等の調査記録類並びに出土遺物については佐賀県教育委員会が保管している。

6　発掘調査にあたっては全般にわたり地元の方々から何かとご助力・ご便宜を得た。また、本書の作成にあたっては多くの方々よりご助言・ご教示をいただいた。記して心より感謝申し上げます。

7　本書の編集は渋谷格が担当した。

凡　　例

1　遺跡台帳（佐賀県教育委員会作成）に登録した遺跡の略号は次のとおりである。

西山田二本松遺跡A区……NYN－A

西山田三本松A遺跡……NYS－A

西山田三本松B遺跡……NYS－B

2　遺構の種別に応じた分類記号は既刊の九州横断自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書に従い次のとおり標記する。

SA：柱列

SB：竪穴住居・掘立柱建物

SD：溝

SE：井戸

SK：土壙

SP：土壙墓

SX：その他の遺構

3　遺跡の範囲が『佐賀県遺跡地図』とはズレているが、本書では発掘調査当時使用した遺跡名をそのまま使用する。

4　遺構図の用いた方位は、すべて真北（座標北）である。

5　挿図番号・表番号・図版番号・遺物番号は各遺跡ごとに一連番号とした。なお、図版の遺物番号は挿図内の遺物番号と共通させている。

6　本書に掲載した各遺物は、遺物台帳（佐賀県教育委員会作成）に登録している。西山田三本松A遺跡、西山田三本松B遺跡については、表にその各登録番号を付記する。西山田二本松遺跡A区については付記していないが、県文化財資料室において遺物番号と対応が可能なようにしている。

7　その他

・掘立柱建物の界線は20分の1個別図を用い、図上で検討・復原した。

・遺物の説明の中で中国産青磁・白磁については、以下の文献による分類を用いた。

横田賢次郎・森田勉1978「大宰府出土の輸入中国陶磁器について－型式分類と編年を中心として－」『九州歴史資料館研究論集』4

・遺物実測図のうち、断面塗りつぶしは須恵器、断面網伏せは瓦器、器面網伏せは黒色土器を示す。

目　　次

第１章　調査の概要

Ⅰ　調査の経過……2

Ⅱ　調査組織……7

第２章　地理的・歴史的環境……9

第３章　遺跡各説

西山田二本松遺跡A区

Ⅰ　遺跡の概要……16

Ⅱ　弥生時代

1　竪穴住居……20

2　掘立柱建物……58

3　周溝状遺構……66

4　土壙……67

5　河川跡……68

6　小結……72

Ⅲ　古代

1　竪穴住居……78

2　掘立柱建物……108

3　埋納遺構……123

4　井戸……125

5　土壙……126

6　緑釉陶器・小穴出土土器・ヘラ書き土器……128

7　小結……130

Ⅳ　中世

1　溝……142

2　掘立柱建物……144

3　集石遺構……148

4　井戸……148

5　土壙……154

6　土壙墓……163

7　小穴・検出面出土遺物……165

8　小結……166

西山田三本松A遺跡

Ⅰ　遺跡の概要

1　遺跡の立地環境 ……168

2　遺構の分布状況 ……168

Ⅱ　遺構

1　弥生時代

（1）竪穴住居跡……172　（2）掘立柱建物跡……176

2　奈良・平安時代

（1）掘立柱建物跡……181　（2）周溝状遺構……184

（3）土壙……186　（4）井戸跡……187

Ⅲ　遺物

1　弥生時代

（1）土器……187　（2）石器……191

（3）玉類……192

2　奈良・平安時代

（1）土師器・須恵器……192

西山田三本松B遺跡

Ⅰ　遺跡の概要

1　主な遺構の分布状況 ……196

2　各地区の遺構

（1）Ⅰ区の遺構……198　（2）Ⅱ区の遺構……200

（3）Ⅲ区の遺構……205

Ⅱ　遺構

1　弥生時代

（1）Ⅰ区の遺構

a　竪穴住居跡……208　b　掘立柱建物跡……213

（2）Ⅲ区の遺構

a　竪穴住居跡……214　b　掘立柱建物跡……219

c　周溝状遺構……220

2　奈良・平安時代

（1）Ⅰ区の遺構

a　掘立柱建物跡……221　b　土壙……224

c　溝……224

（2）II区の遺構
a　竪穴住居跡……225　b　掘立柱建物跡……228
c　土壙・井戸跡……234　d　溝……237
（3）III区の遺構
a　竪穴住居跡……238　b　掘立柱建物跡……241
c　土壙……245　d　溝……248
III　遺物
1　弥生時代
（1）I区の遺物
a　土器……249　b　石器……262
c　玉類……265
（2）III区の遺物
a　土器……266
2　奈良・平安時代
（1）I区の遺物
a　土師器・須恵器……270
（2）II区の遺物
a　土師器・須恵器……274　b　石器……281
c　鉄器……283
（3）III区の遺物
a　土師器・須恵器……284　b　鉄器……293
大久保三本松遺跡（概要）……296

挿　図　目　次

調査の概要

Fig. 1　九州横断自動車道路線図……3
Fig. 2　西山田三本松遺跡・西山田二本松遺跡A区発掘調査区位置図……4
Fig. 3　大久保三本松遺跡発掘調査区位置図……6

地理的・歴史的環境

Fig. 4　周辺遺跡分布図……11

遺跡各説

西山田二本松遺跡A区

Fig. 1　西山田二本松遺跡A区遺構配置図……17
Fig. 2　SB002竪穴住居……20
Fig. 3　SB002竪穴住居出土遺物……21
Fig. 4　SB004・005竪穴住居……22
Fig. 5　SB006・007竪穴住居……23
Fig. 6　SB004・006・007竪穴住居出土遺物……24
Fig. 7　SB008竪穴住居、出土遺物……25
Fig. 8　SB009・011竪穴住居、出土遺物……26
Fig. 9　SB012竪穴住居、出土遺物……27
Fig. 10　SB016・017竪穴住居、出土遺物……28
Fig. 11　SB022・024竪穴住居、出土遺物……30
Fig. 12　SB039・040竪穴住居、出土遺物……31
Fig. 13　SB043・053竪穴住居、出土遺物、SB054掘立柱建物……32
Fig. 14　SB075竪穴住居、出土遺物……33
Fig. 15　SB076竪穴住居、出土遺物……34
Fig. 16　SB080竪穴住居、出土遺物……35
Fig. 17　SB081・084竪穴住居、出土遺物……36
Fig. 18　SB085・086竪穴住居、出土遺物……37
Fig. 19　SB088竪穴住居、出土遺物……38
Fig. 20　SB089竪穴住居、出土遺物……39
Fig. 21　SB092竪穴住居、出土遺物……40
Fig. 22　SB093竪穴住居、出土遺物……41
Fig. 23　SB095竪穴住居、出土遺物①……42
Fig. 24　SB095竪穴住居出土遺物②……43
Fig. 25　SB096・097竪穴住居、出土遺物……44
Fig. 26　SB098竪穴住居、出土遺物……45
Fig. 27　SB099竪穴住居、出土遺物……46
Fig. 28　SB122・214・302竪穴住居……47
Fig. 29　SB122・302竪穴住居出土遺物……48
Fig. 30　SB148・155竪穴住居、出土遺物……49

Fig. 31　SB167竪穴住居、出土遺物 ……50
Fig. 32　SB168竪穴住居、出土遺物① ……52
Fig. 33　SB168竪穴住居出土遺物② ……53
Fig. 34　SB190竪穴住居、出土遺物 ……54
Fig. 35　SB204・205・301竪穴住居、出土遺物 ……55
Fig. 36　SB401・405竪穴住居、出土遺物 ……56
Fig. 37　SB418・419竪穴住居 ……57
Fig. 38　SB418・419竪穴住居出土遺物 ……58
Fig. 39　SB018・019掘立柱建物 ……59
Fig. 40　SB042・220掘立柱建物 ……60
Fig. 41　SB079・172掘立柱建物 ……61
Fig. 42　SB110・111・117掘立柱建物 ……62
Fig. 43　掘立柱建物出土遺物 ……63
Fig. 44　SB112・126・140・173掘立柱建物 ……64
Fig. 45　SB179・195掘立柱建物 ……65
Fig. 46　SX044周溝状遺構、出土遺物 ……66
Fig. 47　SK130・131・132・133土壙 ……67
Fig. 48　SK131・132・133土壙出土遺物 ……68
Fig. 49　SD058河川跡土層図、出土遺物① ……69
Fig. 50　SD058河川跡出土遺物② ……70
Fig. 51　SD058河川跡出土遺物③ ……71
Fig. 52　弥生時代遺構配置図 ……73
Fig. 53　SB026竪穴住居、出土遺物 ……78
Fig. 54　SB026竪穴住居カマド、SB027竪穴住居、カマド土層図 ……79
Fig. 55　SB035竪穴住居 ……80
Fig. 56　SB035竪穴住居カマド ……81
Fig. 57　SB035竪穴住居出土遺物① ……82
Fig. 58　SB035竪穴住居出土遺物② ……83
Fig. 59　SB035竪穴住居出土遺物③ ……84
Fig. 60　SB056竪穴住居 ……85
Fig. 61　SB057竪穴住居、出土遺物 ……86
Fig. 62　SB077竪穴住居、カマド ……88
Fig. 63　SB077竪穴住居出土遺物 ……89
Fig. 64　SB087竪穴住居、カマド、出土遺物 ……90
Fig. 65　SB094竪穴住居、出土遺物 ……91
Fig. 66　SB100竪穴住居 ……92
Fig. 67　SB105竪穴住居、カマド、出土遺物 ……93
Fig. 68　SB139竪穴住居、出土遺物 ……94
Fig. 69　SB150竪穴住居、出土遺物 ……95
Fig. 70　SB152竪穴住居 ……96

Fig. 71　SB161竪穴住居、出土遺物……97
Fig. 72　SB161竪穴住居カマド……98
Fig. 73　SB164竪穴住居……98
Fig. 74　SB183・185竪穴住居……99
Fig. 75　SB183竪穴住居出土遺物……100
Fig. 76　SB186竪穴住居、出土遺物……101
Fig. 77　SB188・192竪穴住居……102
Fig. 78　SB188竪穴住居出土遺物……103
Fig. 79　SB194竪穴住居、出土遺物……104
Fig. 80　SB196・197竪穴住居、出土遺物……105
Fig. 81　SB206・209・210竪穴住居……106
Fig. 82　SB206竪穴住居カマド、SB206・209・210竪穴住居出土遺物……107
Fig. 83　SB302竪穴住居……108
Fig. 84　SB013掘立柱建物……109
Fig. 85　SB015掘立柱建物……110
Fig. 86　SB020掘立柱建物、出土遺物、SB021掘立柱建物……111
Fig. 87　SB030掘立柱建物……112
Fig. 88　SB030掘立柱建物出土遺物……113
Fig. 89　SB033・045掘立柱建物、出土遺物……114
Fig. 90　SB090・103掘立柱建物……115
Fig. 91　SB091掘立柱建物、SB091・103掘立柱建物出土遺物……116
Fig. 92　SB113掘立柱建物……116
Fig. 93　SB127掘立柱建物……117
Fig. 94　SB128掘立柱建物……118
Fig. 95　SB138掘立柱建物・出土遺物、SB141掘立柱建物……119
Fig. 96　SB170・171掘立柱建物……120
Fig. 97　SB200・218掘立柱建物……121
Fig. 98　SB201掘立柱建物・出土遺物、SB222掘立柱建物……122
Fig. 99　SB312掘立柱建物……123
Fig. 100　SX181埋納遺構、SX181・216埋納遺構出土遺物……124
Fig. 101　SE031・142・191井戸、出土遺物……125
Fig. 102　SK060・061・107・118土壙、出土遺物……127
Fig. 103　SK124土壙、出土遺物……128
Fig. 104　緑釉陶器・小穴出土土器・ヘラ書き土器……129
Fig. 105　古代遺構配置図……132
Fig. 106　奈良・平安時代遺構変遷図①……135
Fig. 107　奈良・平安時代遺構変遷図②……136
Fig. 108　奈良・平安時代遺構変遷図③……137
Fig. 109　中世遺構配置図、SD068出土遺物……143
Fig. 110　SD078・101・187溝土層図、出土遺物、SB050・055掘立柱建物……145

Fig. 111　SB199掘立柱建物、出土遺物 ……147
Fig. 112　SX072・073・074集石遺構、出土遺物 ……149
Fig. 113　SE001・029井戸、出土遺物 ……150
Fig. 114　SE034・106井戸、出土遺物 ……151
Fig. 115　SE115井戸、出土遺物 ……152
Fig. 116　SE134井戸、出土遺物 ……153
Fig. 117　SE119・305井戸 ……154
Fig. 118　SK010土壙、出土遺物 ……155
Fig. 119　SK014・025土壙、出土遺物 ……156
Fig. 120　SK067土壙、出土遺物、SK114土壙 ……157
Fig. 121　SK114土壙出土遺物① ……158
Fig. 122　SK114土壙出土遺物② ……159
Fig. 123　SK116・120・180土壙、出土遺物 ……160
Fig. 124　SK203・306土壙、出土遺物 ……161
Fig. 125　SK036・037・038土壙、出土遺物 ……163
Fig. 126　SP046・202土壙墓、出土遺物 ……164
Fig. 127　小穴・検出面出土遺物 ……165
西山田三本松A遺跡
Fig. 1　西山田三本松A遺跡遺構配置図 ……169
Fig. 2　SB012竪穴住居跡 ……172
Fig. 3　SB013・014・015竪穴住居跡 ……173
Fig. 4　SB016・020竪穴住居跡 ……174
Fig. 5　SB021・029・041・043竪穴住居跡 ……175
Fig. 6　SB007・022・009・010掘立柱建物跡 ……176
Fig. 7　SB008・027・011・030・031掘立柱建物跡 ……177
Fig. 8　SB024・026掘立柱建物跡 ……178
Fig. 9　SB028・036・037掘立柱建物跡 ……179
Fig. 10　SB039・044・045掘立柱建物跡 ……180
Fig. 11　SB001掘立柱建物跡 ……181
Fig. 12　SB017・018掘立柱建物跡 ……182
Fig. 13　SB019・038掘立柱建物跡 ……183
Fig. 14　SX004・005周溝状遺構 ……184
Fig. 15　SX006・034周溝状遺構 ……185
Fig. 16　SK025・032・033・046土壙 ……186
Fig. 17　SE003井戸跡 ……187
Fig. 18　弥生土器① ……188
Fig. 19　弥生土器② ……189
Fig. 20　石器 ……191
Fig. 21　玉類 ……192
Fig. 22　土師器・須恵器 ……193

西山田三本松B遺跡

Fig. 1　西山田三本松B遺跡Ⅰ区・Ⅱ区遺構配置図 ……197
Fig. 2　西山田三本松B遺跡Ⅱ区・Ⅲ区遺構配置図 ……201
Fig. 3　SB104・105竪穴住居跡 ……208
Fig. 4　SB107・108・111竪穴住居跡 ……209
Fig. 5　SB114・115・112竪穴住居跡 ……210
Fig. 6　SB121・122・116竪穴住居跡 ……211
Fig. 7　SB117竪穴住居跡 ……212
Fig. 8　SB102・130・103・131掘立柱建物跡 ……213
Fig. 9　SB402・403竪穴住居跡 ……214
Fig. 10　SB419・433竪穴住居跡 ……215
Fig. 11　SB425・442・466竪穴住居跡 ……216
Fig. 12　SB501・462竪穴住居跡 ……217
Fig. 13　SB406・407・512竪穴住居跡 ……218
Fig. 14　SB460・455掘立柱建物跡 ……219
Fig. 15　SB417竪穴住居跡 ……220
Fig. 16　SX432周溝状遺構 ……220
Fig. 17　SB126掘立柱建物跡 ……221
Fig. 18　SB118・119掘立柱建物跡 ……222
Fig. 19　SB127・128・129掘立柱建物跡 ……223
Fig. 20　SK113土壙 ……224
Fig. 21　Ⅰ区溝断面図 ……224
Fig. 22　SB203・213竪穴住居跡 ……225
Fig. 23　SB216・247竪穴住居跡 ……226
Fig. 24　SB217・229・230竪穴住居跡 ……227
Fig. 25　SB305・266掘立柱建物跡 ……228
Fig. 26　SB265・125掘立柱建物跡 ……229
Fig. 27　SB267・277掘立柱建物跡 ……230
Fig. 28　SB310掘立柱建物跡、SB311・313柱列、SX306円形周溝状遺構 ……231
Fig. 29　SB295・307掘立柱建物跡 ……233
Fig. 30　SK202・299土壙 ……234
Fig. 31　SE308井戸跡ほか土壙 ……235
Fig. 32　SK244ほか土壙 ……236
Fig. 33　Ⅱ区溝断面図 ……237
Fig. 34　SB431・437竪穴住居跡 ……238
Fig. 35　SB405・408竪穴住居跡 ……239
Fig. 36　SB426・444竪穴住居跡 ……240
Fig. 37　SB429竪穴住居跡 ……241
Fig. 38　SB459掘立柱建物跡 ……241
Fig. 39　SB470・471掘立柱建物跡 ……242

Fig. 40　SB449・450掘立柱建物跡、SA452柱列 ……243
Fig. 41　SK424・436・427土壙……245
Fig. 42　SK439ほか土壙……246
Fig. 43　SK475ほか土壙……247
Fig. 44　Ⅲ区溝断面図……248
Fig. 45　Ⅰ区SX123出土弥生土器①……250
Fig. 46　Ⅰ区SX123出土弥生土器②……251
Fig. 47　Ⅰ区SX123出土弥生土器③……252
Fig. 48　Ⅰ区SX123出土弥生土器④……253
Fig. 49　Ⅰ区SX123出土弥生土器⑤……254
Fig. 50　Ⅰ区SX123出土弥生土器⑥……255
Fig. 51　Ⅰ区SX123出土弥生土器⑦……256
Fig. 52　Ⅰ区竪穴住居跡出土弥生土器……257
Fig. 53　Ⅰ区・Ⅲ区出土石器……263
Fig. 54　Ⅰ区出土玉類……264
Fig. 55　Ⅲ区竪穴住居跡出土弥生土器①……266
Fig. 56　Ⅲ区竪穴住居跡出土弥生土器②……267
Fig. 57　Ⅰ区溝出土土師器・須恵器①……270
Fig. 58　Ⅰ区溝出土土師器・須恵器②……271
Fig. 59　Ⅱ区溝出土土師器・須恵器①……274
Fig. 60　Ⅱ区溝出土土師器・須恵器②……275
Fig. 61　Ⅱ区溝出土土師器・須恵器③……276
Fig. 62　Ⅱ区溝出土土師器・須恵器④……277
Fig. 63　Ⅱ区出土石帯・紡錘車……282
Fig. 64　Ⅱ区出土砥石……282
Fig. 65　Ⅱ区出土鉄器……283
Fig. 66　Ⅲ区出土土師器・須恵器①……284
Fig. 67　Ⅲ区出土土師器・須恵器②……285
Fig. 68　Ⅲ区出土土師器・須恵器③……286
Fig. 69　Ⅲ区出土土師器・須恵器④……287
Fig. 70　Ⅲ区出土土師器・須恵器⑤……288
Fig. 71　Ⅲ区出土鉄器……293

大久保三本松遺跡

Fig. 1　大久保三本松遺跡遺構配置図 ……297
Fig. 2　曽畑式深鉢 ……299

表　目　次

西山田二本松遺跡A区

Tab.1　ガラス小玉観察表 ……75
Tab.2　弥生時代竪穴住居一覧表 ……76
Tab.3　弥生時代掘立柱建物一覧表 ……77
Tab.4　SB035竪穴住居出土土器一覧表 ……84
Tab.5　古代竪穴住居一覧表 ……141
Tab.6　古代掘立柱建物一覧表 ……141
Tab.7　SD101溝出土土師器観察表 ……144

西山田三本松A遺跡

Tab.1　西山田三本松A遺跡遺構一覧表 ……170
Tab.2　弥生土器観察表 ……190
Tab.3　土師器・須恵器観察表 ……193

西山田三本松B遺跡

Tab.1　西山田三本松B遺跡Ⅰ区遺構一覧表 ……199
Tab.2　西山田三本松B遺跡Ⅱ区遺構一覧表 ……203
Tab.3　西山田三本松B遺跡Ⅲ区遺構一覧表 ……206
Tab.4　Ⅰ区出土弥生土器観察表 ……258
Tab.5　Ⅲ区出土弥生土器観察表 ……268
Tab.6　Ⅰ区出土土師器・須恵器観察表 ……272
Tab.7　Ⅱ区出土土師器・須恵器観察表 ……278
Tab.8　Ⅲ区出土土師器・須恵器観察表 ……289

大久保三本松遺跡

Tab.1　大久保三本松遺跡遺構一覧表 ……300

図　版　目　次

西山田二本松遺跡A区

PL.1　西山田遺跡群周辺航空写真
PL.2　遺跡遠景・調査区上空から東方を臨む
PL.3　調査区全景
PL.4　調査区北東部・BOX部全景・CP部全景
PL.5　SB002竪穴住居・銅釦出土状況・銅釦、SB004竪穴住居
PL.6　SB006・007・008・016・017・011・012・022竪穴住居
PL.7　SB039・080・088竪穴住居
PL.8　SB092・093・095・155竪穴住居
PL.9　SB167・168・204・205竪穴住居
PL.10　SB079・110・117掘立柱建物

PL.11　SB018・019掘立柱建物、SX044周溝状遺構、SK131・132・133土壙
PL.12　SB004・006・008・009・012・016・017竪穴住居出土弥生土器
PL.13　SB085・088・089竪穴住居出土弥生土器
PL.14　SB095竪穴住居出土弥生土器
PL.15　SB122・167竪穴住居出土弥生土器
PL.16　SB168竪穴住居出土弥生土器
PL.17　SB190・205・419竪穴住居、172掘立柱建物出土弥生土器
PL.18　SD058河川跡出土弥生土器1
PL.19　SD058河川跡出土弥生土器2・SB002竪穴住居出土銅釦
PL.20　SB026・035竪穴住居
PL.21　SB056・057・087・094竪穴住居
PL.22　SB105竪穴住居・カマド、SB150・183竪穴住居
PL.23　SB150竪穴住居カマド、SB183竪穴住居・カマド、SB185竪穴住居
PL.24　SB188竪穴住居、SB206竪穴住居・カマド、SB209・210竪穴住居
PL.25　SB015・021・030掘立柱建物
PL.26　SB090・091・103掘立柱建物
PL.27　SB113掘立柱建物、SB113掘立柱建物P1・9
PL.28　SB127・128・200・218
PL.29　SB015・030・138掘立柱建物、SX181埋納遺構、SE142井戸
PL.30　SB035竪穴住居出土土師器・須恵器
PL.31　SB077・150・183・186、SB030・045掘立柱建物出土土師器・須恵器
PL.32　ヘラ書き土器、埋納遺構、SE142・191、小穴出土土師器・須恵器
PL.33　SB055竪穴住居、SX072集石遺構
PL.34　SX073集石遺構、SE034・106井戸
PL.35　SE134井戸、SP046・202土壙墓
PL.36　出土土師器・黒色土器・瓦器
PL.37　出土陶磁器

西山田三本松A遺跡

PL.1　調査区全景
PL.2　SB013・014・012・041・043竪穴住居、SX034円形周溝状遺構
PL.3　SB015・020・021・029竪穴住居、SX005円形周溝状遺構
PL.4　SX004方形周溝状遺構、SX006・034円形周溝状遺構
PL.5　北西隅掘立柱建物群・SB007・009・010掘立柱建物
PL.6　SB045・036・037・011掘立柱建物
PL.7　SB039・024・028掘立柱建物
PL.8　SK025・046・032・033土壙
PL.9　SB017・018・019掘立柱建物
PL.10　SB001・038・019掘立柱建物
PL.11　SB002・040掘立柱建物
PL.12　弥生土器

PL.13　弥生時代石器・弥生時代鉄器・土師器・須恵器
西山田三本松B遺跡
PL.1　Ⅰ区全景
PL.2　SB104・111・112竪穴住居
PL.3　SB107・108・116・117竪穴住居、119掘立柱建物
PL.4　SB121・122・114・115・105竪穴住居
PL.5　Ⅰ区東南部・SB117竪穴住居付近
PL.6　Ⅰ区北部・SB102掘立柱建物
PL.7　SD101溝、SK113・123土壙土器出土状況
PL.8　Ⅱ区全景
PL.9　Ⅱ区全景・中央部
PL.10　SB203・217・229竪穴住居
PL.11　SB118・125・265掘立柱建物
PL.12　SB266・277・295掘立柱建物
PL.13　SB266掘立柱建物柱穴内土器出土状況・SB128掘立柱建物付近土器出土状況
PL.14　SB310・267・305掘立柱建物、SB311柱列
PL.15　SD206・207・101溝
PL.16　SK211・212・215土壙
PL.17　SK202・210・215土壙
PL.18　SK250土壙、SE308・309井戸
PL.19　Ⅲ区全景
PL.20　Ⅲ区北西部・北辺
PL.21　Ⅲ区中央部
PL.22　Ⅲ区東北部・東辺部
PL.23　SB402・406・419竪穴住居
PL.24　SB417・419・421竪穴住居
PL.25　SB425・433・442竪穴住居
PL.26　SB433・426・429竪穴住居
PL.27　SB431・437・444竪穴住居
PL.28　SB466・458・512竪穴住居
PL.29　SB413・405・407・408竪穴住居
PL.30　Ⅲ区中央部・北辺部
PL.31　Ⅲ区西辺部・東南隅
PL.32　SB450掘立柱建物付近・SB450・449掘立柱建物
PL.33　SK439・440・448・502土壙
PL.34　SK412・424・468土壙
PL.35　SK427・411土壙ほか・SK475土壙
PL.36　Ⅰ区SX123出土弥生土器①
PL.37　Ⅰ区SX123出土弥生土器②
PL.38　Ⅰ区SX123出土弥生土器③

PL. 39　Ⅰ区SX123土壙出土弥生土器④
PL. 40　Ⅰ区SX123土壙出土弥生土器⑤
PL. 41　Ⅰ区出土弥生土器、Ⅰ・Ⅲ区出土石器
PL. 42　Ⅲ区出土弥生土器
PL. 43　Ⅰ区出土土師器・須恵器①
PL. 44　Ⅰ区出土土師器・須恵器②
PL. 45　Ⅱ区出土土師器・須恵器①
PL. 46　Ⅱ区出土土師器・須恵器②
PL. 47　Ⅱ区出土土師器・須恵器③
PL. 48　Ⅱ区出土石器
PL. 49　Ⅲ区出土土師器・須恵器①
PL. 50　Ⅲ区出土土師器・須恵器②
PL. 51　Ⅲ区出土土師器・須恵器③
PL. 52　Ⅲ区出土土師器・須恵器④
大久保三本松遺跡
PL. 1　調査区全景
PL. 2　SB002竪穴住居、SB003竪穴住居・カマド
PL. 3　SB011竪穴住居、SB013竪穴住居・カマド
PL. 4　SB014・015竪穴住居、SB016竪穴住居・カマド
PL. 5　SB019・020・021・047竪穴住居
PL. 6　SB004・005・006掘立柱建物
PL. 7　SB022・023・026掘立柱建物
PL. 8　SE033・034・035・038井戸
PL. 9　SK029・037土壙・SD042溝土層断面

報告書抄録

書名／ふりがな	西山田二本松遺跡／にしやまだにほんまついせき
副書名／巻次	九州自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書／19
シリーズ名／番号	佐賀県文化財調査報告書／128集
編著者名	田平徳栄・渋谷格
編集機関	佐賀県教育委員会
所在地	〒840　佐賀県佐賀市城内1丁目1－59　　Phone：0952－25－7232
発行年月日	西暦　1996年　3月29日

ふりがな 所収遺跡名	ふ り が な 所 在 地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 ° ′ ″	東経 ° ′ ″	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
西山田二本松 A区	佐賀県佐賀郡 大和町大字川上 字二本松	413054	2068 3083 4067 5066	33度 18分 50秒	130度 15分 56秒	19850820～ 19850909 19860306～ 19860812	5,800	道路（九州横断自動車道）建設に伴う事前調査
西山田三本松A	大和町大字川上 字三本松	413054	2069 3084 4068 5067	33度 18分 46秒	130度 15分 45秒	19850610～ 19850722 19851213～ 19860430	3,000	同　上
西山田三本松B	大和町大字川上 字三本松	413054	2069 3084 4068 5067	33度 18分 48秒	130度 15分 50秒	19850723～ 19850829 19851126～ 19860616	8,000	同　上

所収遺跡名	種別	主な時代	主 な 遺 構	主 な 遺 物	特 記 事 項
西山田二本松 A区	集落跡	弥生	竪穴住居80、掘立柱建物25、周溝状遺構1	弥生土器、石器、銅釦1	独立棟持柱がある掘立柱建物、竪穴住居から銅釦出土
	集落跡 官衙	古代	竪穴住居27、掘立柱建物23、埋納遺構2	土師器、須恵器、ヘラ書き土器、緑釉陶器片	「都」「厨」のヘラ書き 郡衙付属施設か
	集落跡 墓	中世	溝3、掘立柱建物3、土壙墓2、集石遺構2	土師器、須恵器、輸入陶磁器	細長い掘立柱建物
西山田三本松A	集落跡	弥生	竪穴住居10、掘立柱建物17、周溝状遺構4	弥生土器、石器、玉類	軒をそろえた掘立柱建物群
	官衙	古代	掘立柱建物7、井戸1	土師器、須恵器	計画的に配置された倉庫群
西山田三本松B	集落跡	弥生	竪穴住居30、掘立柱建物7、周溝状遺構2	弥生土器、石器、玉類 ガラス製垂飾1	大型廃棄土坑 玉類の出土が多い
	集落跡 官衙	古代	竪穴住居10、掘立柱建物21、柱列3、溝34	土師器、須恵器、墨書土器、石帯	地割りに基づく建物群、地鎮の可能性のある埋納遺構

第１章　調査の概要

Ⅰ　調査の経過

九州横断自動車道建設に係る埋蔵文化財調査は、昭和44年６月から佐賀県教育委員会が建設省九州地方建設局の委託によって、周辺地域を含め路線予定地全域を対象とした遺跡分布調査に始まる。その後、昭和48年９月の日本道路公団による路線発表を受けて、さらに詳細な分布調査を実施した結果、本格的な発掘調査の対象は鳥栖市から嬉野町にかけての路線延長約91.9kmにおいて、遺跡総数209ヶ所・総面積約135万m²にもわたる。

発掘調査は昭和52年１月に建設工事計画に合わせて、鳥栖－佐賀大和間から開始された。調査は佐賀大和－武雄間、武雄－嬉野間、佐賀大和ICと続き、昭和63年度の鳥栖ICを最後の調査として全調査を終了している。

幾多の遺跡が消失した代償として、数々の成果をあげることができた。時代は旧石器時代から近世にわたり、内容も生活、墓、生産と人間活動のあらゆる側面にかかわる多くの貴重な情報がもたらされたわけである。

さて、調査報告書の刊行は昭和54年度以降続けられており、これまでに計18集の作成が終了している。今年度は本事業の最終年度にあたり、第19・20集の計２冊を刊行する。

この第19集において報告するのは、昭和60・61年度に調査された佐賀郡大和町の西山田二本松遺跡A区・西山田三本松遺跡の２遺跡、及び大久保三本松遺跡の概要である。当初の報告書刊行計画では、これらの遺跡は第18集に掲載する予定であったが、遺構・遺物の数量が非常に多くなるため１冊にまとめるには困難であり、第18集を『東山田一本杉遺跡』、第19集を『西山田二本松遺跡』としてそれぞれ独立した形で刊行することとなった。

西山田二本松遺跡はA区とB区に分けている。遺跡のまとまりなどを考慮して、B区についてはすでに第18集に東山田一本杉遺跡Ⅱ・Ⅲ区とともに報告されている。A区もまた、橋梁（ボックス）部分とコンクリートパイプ埋設部分の計800m²の調査を昭和60年８月～９月に先行して行った。残りの5,000m²は昭和61年３月～８月にコンクリートパイプ埋設部分の西側をⅠ区、東側をⅡ区として調査した。その結果、弥生時代後期のかなり大規模な集落と飛鳥時代から平安時代前期の竪穴住居・掘立柱建物群が確認された。奈良・平安時代の建物は出土したヘラ書き土器などから官衙に関連する建物群であると考えられる。さらに、青磁椀を副葬した土壙墓など中世の遺構も確認された。

西山田三本松遺跡は大きくAとBに分けている。西山田三本松A遺跡は昭和60年６月～７月に橋梁部分の1,000m²を先行して調査を行った。その後、昭和60年12月～昭和61年４月にかけて前年度の調査区東側2,000m²を調査し、奈良・平安時代の倉庫建物群が整然と並ぶことが判明した。弥生時代においても倉庫群と考えられる掘立柱建物の配置など集落が確認された。

西山田三本松B遺跡も同様に橋梁（ボックス）部分1,000m²の調査を昭和60年７月～８月に

先行して行った。本格的な調査は昭和60年11月～昭和61年６月に7,000㎡をⅠ～Ⅲ区に分けて調査した。その結果、奈良・平安時代の区画溝やそれに囲まれた掘立柱建物などが確認された。出土遺物には墨書土器や石製鉈尾、丸鞆などがあり、官衙的な性格が推定される。また、弥生時代後期の多量の土器が出土した大型土壙など弥生時代後期の集落の一端が明らかになった。

大久保三本松遺跡は、昭和60年９月～昭和61年３月に調査が行われた。調査面積は4,800㎡である。奈良・平安時代の竪穴住居が中心で、カマドが良好に残存していた。また、曽畑式土器を中心として縄文土器も確認されている。

以上のように、本報告では弥生時代後期の集落と奈良・平安時代の官衙的な性格を持つ遺跡を中心として構成されている。なお、遺跡名こそ別々であるが、西山田三本松遺跡、西山田二本松遺跡、東山田一本杉遺跡Ⅱ・Ⅲ区は一連の遺跡としてとらえられるものである。

ところで、西山田三本松遺跡と西山田二本松遺跡の範囲については、『佐賀県遺跡地図』とズレが生じていることを明記しておきたい。二本松遺跡と三本松遺跡の境界が遺跡地図においては本報告書の西山田三本松B遺跡Ⅱ区とⅢ区の間にある。また、遺跡地図では二本松遺跡の西側の範囲はA区までで、その西側は西山田天神遺跡となっている。したがって、周辺の調査地区との対応をはかるときには注意が必要になる。

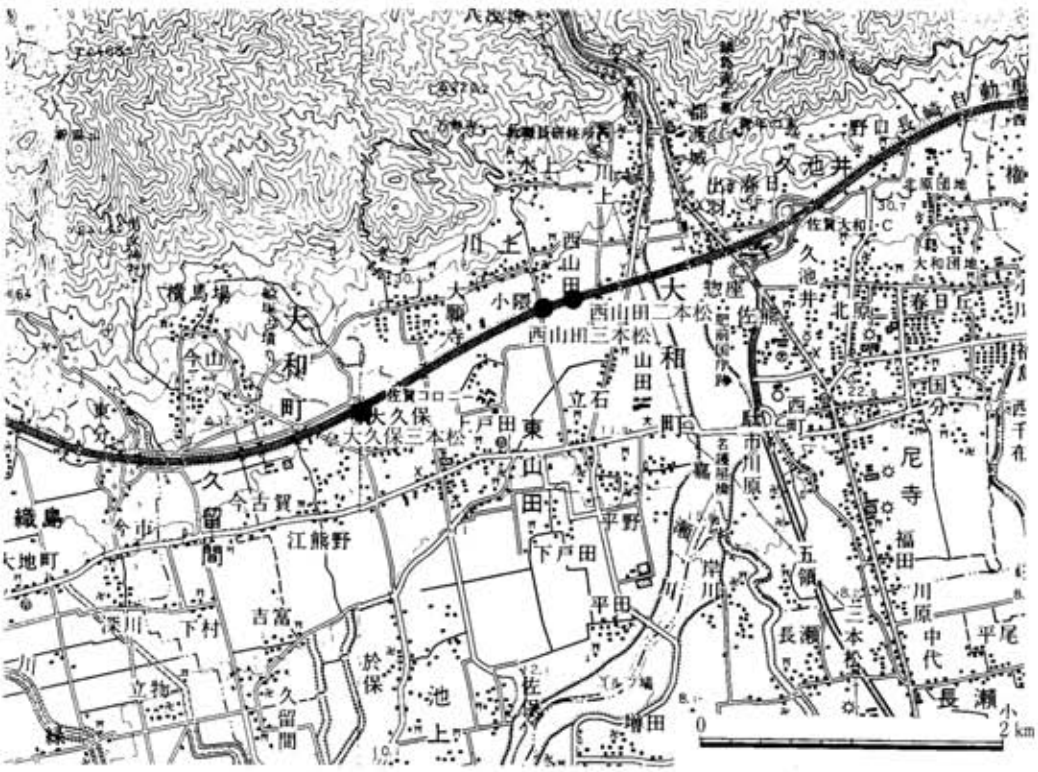
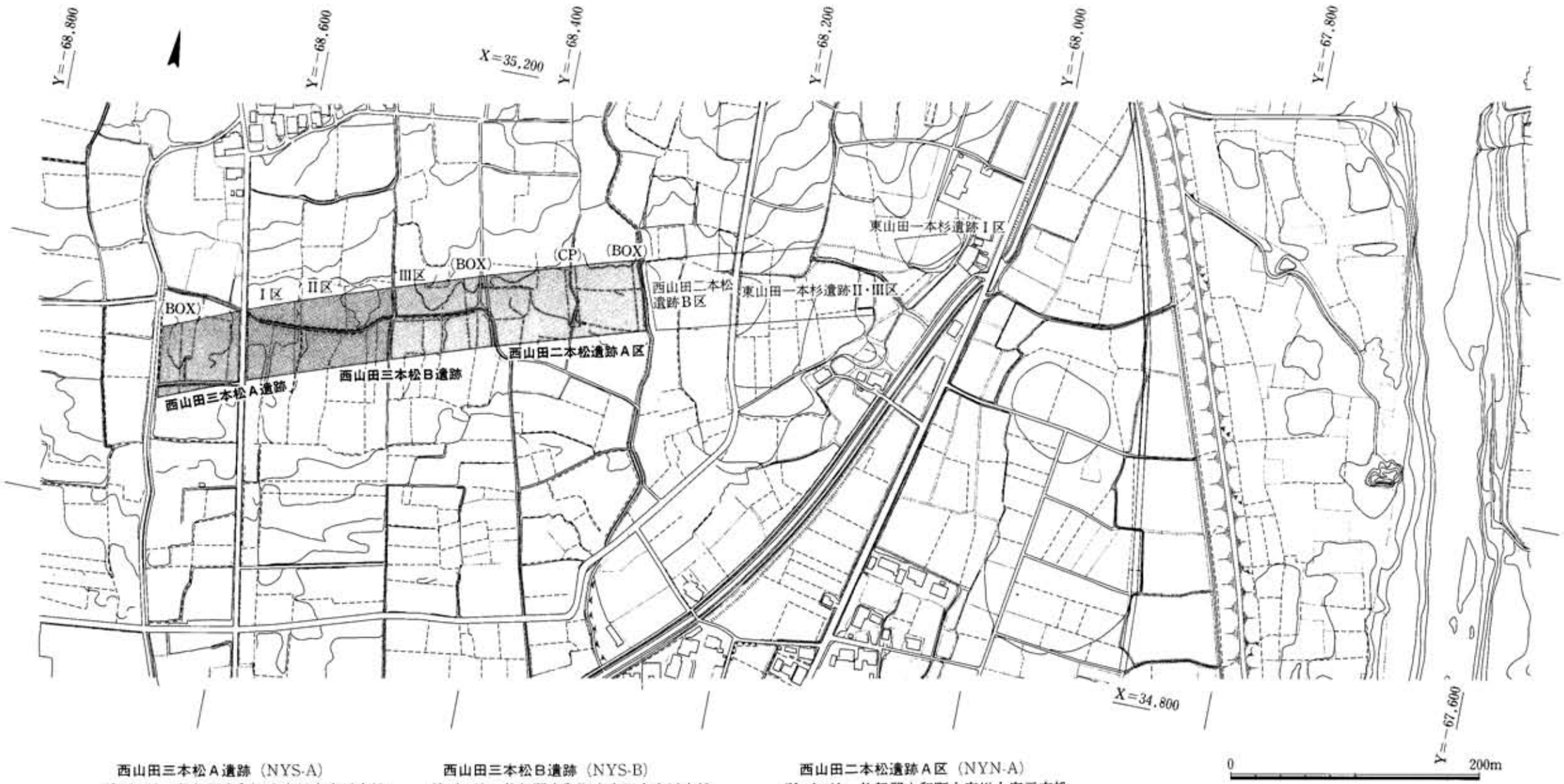


Fig. 1　九州横断自動車道路線図

大久保三本松遺跡（OKB）
所 在 地　佐賀郡大和町大字川上字大久保
調査面積　4,800㎡
調査期間　昭和60年９月18日～昭和61年３月５日
調査担当　天本洋一・副島正道
検出遺構　古代：竪穴住居・掘立柱建物・井戸・溝

Fig. 3　大久保三本松遺跡発掘調査区位置図（1/400）



西山田三本松A遺跡（NYS-A）
所 在 地　佐賀郡大和町大字川上字三本松
調査面積　3,000㎡
調査期間　昭和60年6月10日～
　　昭和61年4月30日
調査担当　天本洋一・副島正道・本田秀樹
検出遺構　弥生時代：竪穴住居・掘立柱建物
　　周溝状遺構
　　古　代：掘立柱建物

西山田三本松B遺跡（NYS-B）
所 在 地　佐賀郡大和町大字川上字三本松
調査面積　8,000㎡
調査期間　昭和60年7月23日～
　　昭和61年6月16日
調査担当　天本洋一・一ノ瀬憲昭・副島正道
　　船底聡一・本田秀樹・樋口秀信
　　小松　譲
検出遺構　弥生時代：竪穴住居・掘立柱建物
　　周溝状遺構
　　古　代：竪穴住居・掘立柱建物
　　柱列・溝・井戸

西山田二本松遺跡A区（NYN-A）
所 在 地　佐賀郡大和町大字川上字二本松
調査面積　5,800㎡
調査期間　昭和60年8月20日～昭和61年8月12日
調査担当　天本洋一・副島正道・本田秀樹・家田淳一
検出遺構　弥生時代：竪穴住居・掘立柱建物・周溝状遺構
　　古　代：竪穴住居・掘立柱建物・埋納遺構・井戸
　　中　世：掘立柱建物・溝・集石遺構・土壙墓

Fig. 2　西山田三本松遺跡・西山田二本松遺跡A区発掘調査区位置図（1/400）

II　調査組織

西山田二本松遺跡・西山田三本松遺跡の発掘調査は、佐賀県教育委員会の直営事業として実施した。発掘調査および報告に係る組織は下記の通りである。

発掘調査

総　括　　教　育　長　志岐常文（60・61年度）
　　教育次長　高橋一之（60年度）・堤　清行（60・61年度）
　　古賀信夫（60・61年度）・野角計宏（61年度）
　　文化課長　北村一義（60・61年度）
　　文化課参事　高島忠平（60年度）
　　課長補佐　宮原義幸（60・61年度）・尾形善郎（60・61年度）

発掘調査総括
　　文化課参事　高島忠平（60年度）
　　課長補佐　尾形善郎（61年度）
　　調査第１係長　中牟田賢治（60・61年度）

〈西山田二本松遺跡A区〉
　　文化財保護主事　天本洋一（60・61年度）
　　指導主事　副島正道（60・61年度）
　　嘱　託　本田秀樹（60年度）・家田淳一（61年度）

〈西山田三本松A遺跡〉
　　文化財保護主事　天本洋一（60・61年度）
　　指導主事　副島正道（60・61年度）
　　嘱　託　本田秀樹（60年度）

〈西山田三本松B遺跡〉
　　文化財保護主事　天本洋一（60・61年度）・樋口秀信（61年度）
　　指導主事　一ノ瀬憲昭（60年度）・副島正道（60・61年度）
　　嘱　託　舩底聡一（60年度）・本田秀樹（60年度）
　　樋口秀信（60年度）・小松　譲（61年度）

報　告

〈平成７年度〉

総　括　教　育　長　林田重人

教　育　次　長　宮原義幸・月岡英人
文 化 財 課 長　高島忠平
文化財課参事　木下　巧
文化財課課長補佐　深町昌司・田平徳栄
報　告　文化財課課長補佐　田平徳栄
指　導　主　事　副島正道（61年度）
文化財保護主事　渋谷　格
庶　務　文化課庶務企画係長　岩瀬茂生
主　　査　久保信行・鷲崎義彦
主　　事　富窪道代

第2章　地理的・歴史的環境

地理的・歴史的環境

地理的・歴史的環境に関しては、5集『久保泉丸山遺跡』、9集『礫石遺跡』、11集『惣座遺跡』、18集『東山田一本杉遺跡』などに既述されている。そこで、ここでは西山田遺跡群周辺で関連する部分について簡潔に述べるに留め、詳細はこれらの報告書に譲ることにする。

今回報告する諸遺跡が所在する大和町は、佐賀県東部のほぼ中央に位置している。西山田遺跡群は嘉瀬川の右岸、嘉瀬川が形成した扇状地の扇頂部（標高14～15m）に立地する。また、大久保三本松遺跡も標高18～19mの扇状地上に立地している。

縄文時代についてみてみると、大願寺二本松遺跡[1]において前期の轟式土器を中心としてほぼ各時期の土器が出土しており、大久保三本松遺跡との関係が考えられる。また、後期から晩期にかけての土器を用いた埋葬施設とみられる遺構が確認されている。

弥生時代になると、まず前期末から中期にかけての墳墓群を中心として遺跡が認められる。東山田一本杉遺跡[2]において、前期後半から後期中頃にかけて継続して営まれた甕棺墓を中心とする墳墓群が確認されている。また、七ヶ瀬遺跡[3]では前期から中期初頭、中期後半から後期の甕棺墓、木棺墓、箱式石棺墓などからなる墳墓群が検出されている。しかし、前期から中期の集落に関してはほとんど明らかになっていない。

弥生時代も後期になると、多くの遺跡が確認されている。東山田一本杉遺跡では後期前半を中心とした横口式土壙墓が主体の墳墓群と後期後半を中心とするかなり大規模な集落が確認されている。本報告書所収の西山田二本松遺跡、西山田三本松遺跡においても後期の集落が明らかとなった。嘉瀬川の対岸に目を移すと、弧状突出部をもつ二重環溝をめぐらせた惣座遺跡[4]をはじめとして環溝集落がいくつか確認されている。また、惣座B遺跡[5]では土壙墓に銀製指輪3点と6,810個のガラス小玉が副葬されていた。このように、弥生時代後期にはこの地域が佐賀平野の中で中心的な地域の一つとなったことが明らかとなっている。

古墳時代においては、全長114mで県内最大規模を誇る船塚古墳[6]を始めとする前方後円墳など墳墓の状況はかなり明らかとなってきている反面、集落の状況は全体像をつかむほどにはなっていない。

奈良時代になると、嘉瀬川左岸に肥前国府[7]が置かれ、この地域は佐賀平野の政治的な中心地となる。肥前国府は、昭和50年度以降行われた確認調査やその後の周辺の調査によって国庁の構造や周辺の官衙群がかなり明らかになっており、全国的にみても非常に重要な例である。国庁の構造は前殿、正殿、後殿が南北中軸線上に並び、前殿左右に南北各2棟の脇殿が配置される。正殿の左右には回廊がつき、全体を104.5×77.2mの側溝と築地に囲まれている。南門は築地を内側に曲げて八脚門をもうけている。このような構造は大宰府政庁II期の建物配置と類似している。国庁周辺においても、惣座遺跡では正倉とみられる鍵形に配置された倉庫群が明

1	老松山遺跡	**13**	**西山田三本松遺跡**	25	玉林寺古墳群	37	国分寺跡
2	織島東分遺跡	**14**	**西山田二本松遺跡**	26	春日山城跡	38	尼寺一本松遺跡
3	今山八幡原遺跡	15	東山田一本杉遺跡	27	前隈山古墳	39	鍵尼遺跡
4	船塚古墳	16	水上古墳群	28	春日遺跡	40	北畑遺跡
5	今山八幡籠遺跡	17	星隈古墳群	29	礫石B遺跡	41	増田遺跡群
6	今山古墳群	18	東山田三本松遺跡	30	礫石A遺跡	42	鍋島本村南遺跡
7	大願寺二本松遺跡	19	惣座六本杉遺跡	31	久池井一本松遺跡	43	本村籠遺跡
8	**大久保三本松遺跡**	20	惣座遺跡	32	北原遺跡	44	池上二本松遺跡
9	大願寺廃寺	21	肥前国庁跡	33	久池井二本松遺跡	45	風楽寺古墳
10	大願寺一本松遺跡	22	久池井B遺跡	34	小川遺跡	46	道善寺古墳
11	小隈古墳	23	岡裏遺跡	35	国分尼寺跡	47	久留間カミ塚遺跡
12	七ヶ瀬遺跡	24	高畠古墳	36	築山古墳・築山瓦経塚	48	於保三本松遺跡

Fig. 4　周辺遺跡分布図（1/50,000）

らかとなっており、久池井B遺跡[8]で国司クラスの館、あるいは行政機関とされる計画的に配置された大型建物群が確認されている。

嘉瀬川右岸においても、官衙的性格をもつ建物群などが確認されている。東山田一本杉遺跡では、全体の形態などは不明であるが、両側に溝をもつ築地が確認され、それに関連する大型建物が見つかっている。出土遺物に円面硯や刻印土器などがある。本書で報告する西山田三本松遺跡では、方1町ほどの方形と推定される溝を始めとする区画溝とそれに伴う掘立柱建物が確認され、石製鉈尾、丸鞆などが出土している。西山田二本松遺跡でも、「郡國」「厨」とヘラ書きされた土器が出土しており、この地区にも官衙的な性格が認められる。

また、大願寺二本松遺跡においても計画的に配置された建物群や青銅製鉈尾などの出土遺物から官衙的な性格が想定されており、国府、西山田遺跡群との関係が興味深い。さらに注目される遺跡として大願寺廃寺[9]があげられる。礎石が散布し、百済系単弁軒丸瓦や老司系軒平瓦、鴻臚館系軒丸瓦が採集されており、2町四方の寺域が推定されている。

このように、奈良時代から平安時代初期においてはこの地域が佐賀平野の中心的な地域であることがわかる。しかしながら、それ以降の動向についてはあまり明確にはなっていない。

中世においても多くの寺院関連の遺跡が位置しており、築山瓦経塚[10]の発見など徐々に明らかになりつつあるとはいえ、まだ全体像を把握するほどにはなっていない。

〈註〉

1　大和町教育委員会 1993『大願寺二本松遺跡』大和町文化財調査報告書第22集

2　佐賀県教育委員会 1995『東山田一本杉遺跡』佐賀県文化財調査報告書第125集

3　大和町教育委員会 1981『七ヶ瀬遺跡』大和町文化財調査報告書第2集

4　佐賀県教育委員会 1990『惣座遺跡』佐賀県文化財調査報告書第96集

5　1984年大和町教育委員会調査

6　松尾禎作 1959「船塚古墳」『佐賀県考古大観』祐徳博物館

7　佐賀県教育委員会 1978『肥前国府跡Ⅰ』佐賀県文化財調査報告書第39集
　佐賀県教育委員会 1981『肥前国府跡Ⅱ』佐賀県文化財調査報告書第58集
　佐賀県教育委員会 1985『肥前国府跡Ⅲ』佐賀県文化財調査報告書第78集

8　註4に同じ

9　松尾禎作 1940「大願寺廃寺址」『佐賀縣史蹟名勝天然紀念物調査報告』第七輯

10　大和町教育委員会 1994『築山瓦経塚』大和町文化財調査報告書第25集

第３章　遺跡各説

西山田二本松遺跡A区

にしやまだにほんまつ

遺跡名：西山田二本松遺跡A地区（略号　NYN－A）
所在地：佐賀郡大和町大字川上字二本松

西山田二本松遺跡A区

Ⅰ　遺跡の概要

西山田二本松遺跡は佐賀郡大和町大字川上字二本松に所在する。遺跡は嘉瀬川が形成する扇状地の扇頂部に立地している。地形は北から南へ向かう緩斜面で、標高は14～15mである。九州横断道関係の報告書では、東山田一本杉遺跡Ⅱ・Ⅲ区、西山田二本松遺跡（A・B区）、西山田三本松遺跡と区別されているが、一連の遺跡ととらえることができる。第１章で述べたように、『佐賀県遺跡地図』とは範囲にズレが生じている。遺跡地図での西山田二本松遺跡の範囲は、西側が本報告書所収の西山田三本松B遺跡Ⅱ区とⅢ区の間、東側が西山田二本松遺跡A区とB区との間にある。したがって、遺跡地図での西山田二本松遺跡は、横断道関係の報告書の西山田三本松遺跡BⅢ区・ボックス部分、西山田二本松遺跡A区となる。

調査は、まずコンクリートパイプ埋設部分（以下CP部分と略する）とボックス（橋梁）部分の調査を部分的に先行して行った。CP部分は昭和60年８月20日～９月９日、ボックス部分は昭和60年９月２日～９月20日に合計800㎡を調査した。CP部分は全体の調査範囲のほぼ中央、ボックス部分は範囲の東端にあたる。その後、昭和61年３月６日から残りの範囲全域の調査を行った。その際CP部分の西側をⅠ区、東側をⅡ区として設定した。調査面積は5,000㎡で、前年度調査部分と合計すると、西山田二本松遺跡A区として5,800㎡を調査したことになる。調査は南側から北側に向かって行った。６月７・８日には現地説明会が実施され、８月12日に調査を終了した。

調査範囲ほぼ全域において、遺構が確認された。時代を追ってその概要を述べていくと、まず縄文時代に関しては、石鏃数点と石匙１点が出土しただけであり、遺構は確認されていない。

弥生時代については、後期前半を中心としたかなり大規模な集落が明らかにされた。前期から中期にかけては遺構、遺物とも確認されていない。集落は、中期末にまでさかのぼる可能性が残るが、後期初頭から営まれていると考えられる。遺構としては、竪穴住居80棟（時代が明確ではないものも含む）、掘立柱建物25棟、周溝状遺構１基、土壙３基が検出された。また、同時期の河川跡と考えられる遺構も数条確認されている。出土遺物は土器が中心であるが、SB002竪穴住居から銅釦１点が出土していることは注目される。

弥生時代後期前半代の集落が、部分的な調査とはいえ、ある程度まとまって明らかにされたことは、大きな成果である。今後、隣接する西山田三本松遺跡や東山田一本杉遺跡の集落との関連が問題となろう。特に、東山田一本杉遺跡では中期末から後期前半の横口式土壙墓を中心とした墓地が確認されており、また集落は後期後半代を中心とするものである。集落と墓地との関係、集落の移動などの問題を提起することになろう。

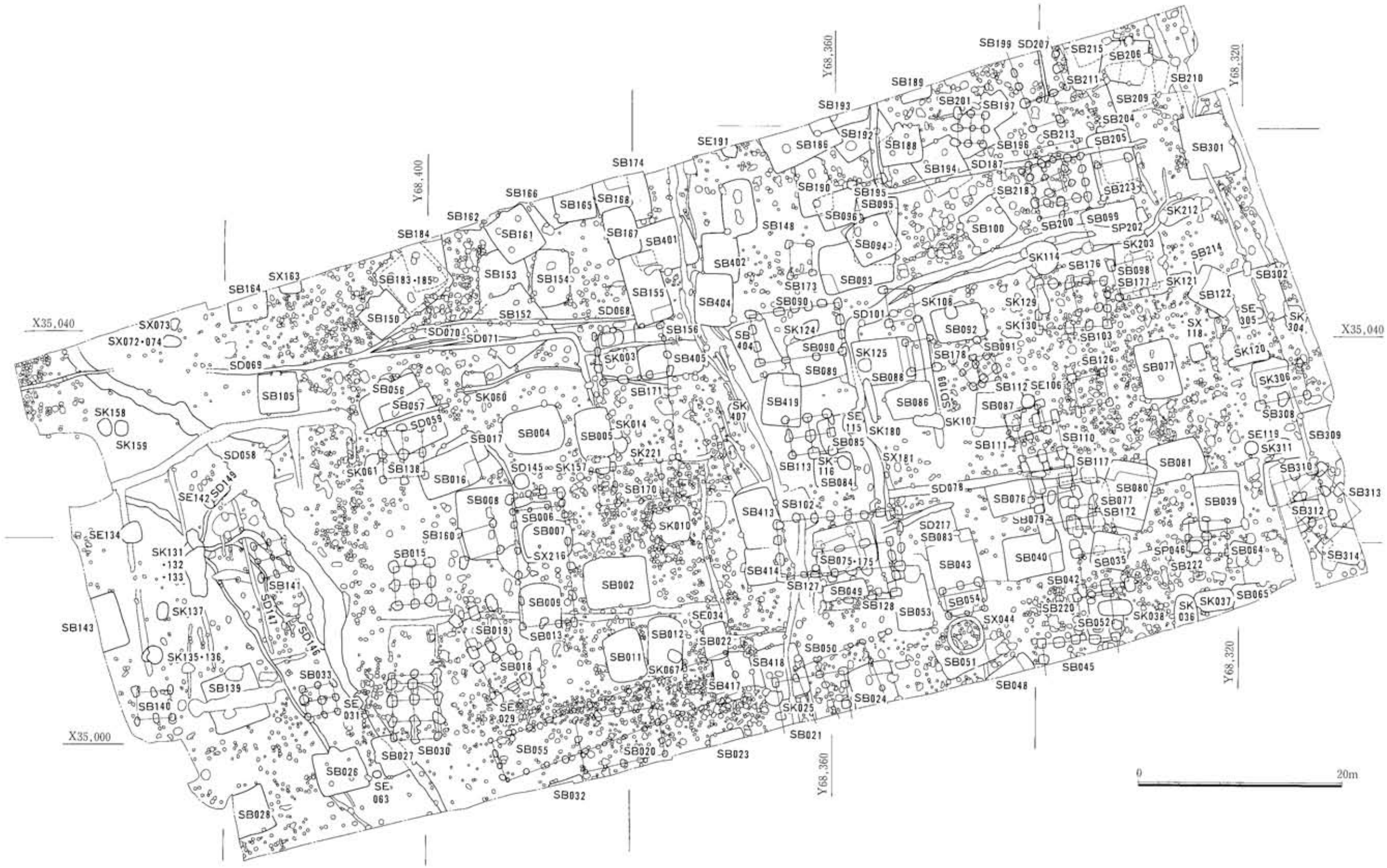


Fig. 1　西山田二本松遺跡A区遺構配置図（1/400）

また、西山田遺跡群では環溝が確認されていないが、嘉瀬川対岸のおいては惣座遺跡を始めとしていくつかの環溝集落が認められ、対照的な状況を呈している。弥生時代後期から古墳時代初頭の各遺跡の消長、首長墳のあり方などと関連づけると、大きな社会変化の中のこの地域の状況がより明らかになるものと考えられる。

6世紀後半～7世紀になると、再び竪穴住居を中心とする集落が営まれている。出土遺物では8世紀代の竪穴住居や掘立柱建物との判別が難しいが、竪穴住居15棟、掘立柱建物3棟、井戸1基、土壙3基が確認できる。

奈良・平安時代では、掘立柱建物を中心として官衙関連と想定される建物群が明らかとなった。この時期のものとしては、竪穴住居12棟、掘立柱建物20棟、埋納遺構2基、井戸2基、土壙2基が検出された。掘立柱建物は主軸方位によっていくつかのグルーピングが可能である。それぞれのグループに竪穴住居が伴うようである。特徴的な遺構として、土師器蓋と高台付坏がセットで埋納された遺構がある。建物などに関連する祭祀的な性格が考えられる。出土遺物の中には、ヘラ書き土器が4点確認できる。その中には「郡圖」「厨」などの文字があり、遺跡の性格を知る上で重要である。

ほぼ同時期には嘉瀬川のちょうど対岸に肥前国府が置かれている。また、本遺跡西側約1.1kmには大願寺廃寺が、約1.8kmには官衙的な性格が認められる大願寺二本松遺跡が所在している。これらの遺跡の関係が肥前の古代史を考える上で重要な問題となることはいうまでもない。

10～11世紀代の遺構、遺物は明確ではなく、再び空白の時代となる。

11世紀末～12世紀初頭に遺構がみられるようになり、13世紀代の遺構、遺物が多数確認されている。この時期の遺構として、溝3条、掘立柱建物3棟、井戸6基、土壙19基、土壙墓2基が検出されている。掘立柱建物は細長い構造で、2棟がL字状に配置されている。また、15世紀代とやや時期は下るが性格不明の集石遺構が2基明らかになった。

このように、本調査区においては弥生時代後期、7～9世紀、12～13世紀の3時期が主要な時期である。そこで、以下遺跡の連続性を考慮して、弥生時代、古代、中世と区分してそれぞれ遺構、遺物を説明してゆく。また、時期不明の遺構のついては中世の項で報告する。

なお、遺構番号に関しては、CP部分とボックス部分は別々に通し番号で、Ⅰ・Ⅱ区については通し番号でつけられている。そこで、遺構番号の重複と混乱を避けるために、報告書作成時点で改めることにした。Ⅰ・Ⅱ区の遺構番号については調査現場においてつけられた3桁の番号をそのまま使用した。CP部分とボックス部分には調査現場でつけられた番号が3桁であったが、遺構数が多くないために下2桁はそのまま残し、ボックス部分は300番台に、CP部分は400番台に変更した。したがって、遺構番号の頭の数字が0～2ならⅠ・Ⅱ区、3ならボックス部分、4ならCP部分の遺構であったことを示していることになる。

II　弥生時代

1. 竪穴住居

弥生時代の竪穴住居は、調査区外に大部分があるものや不確実なものも含め、80棟確認された。このうち、残存状況が良好なものや出土遺物が豊富なものを中心に50棟を図示した。なお、図示していないものも含め、一覧表（Tab. 2）にまとめている。

SB002竪穴住居（Fig. 2・3）

調査区中央南西寄りに位置する。平面形は長方形である。長軸6. 17m、短軸4. 9m、面積28. 62㎡で、調査区内の竪穴住居としては最大級のものである。主軸はN82° Eである。2本主柱で、中央に炉がある。北辺と、西辺から南辺にかけて周溝がめぐり、南辺ほぼ中央に壁際土壙がある。北東隅の床面からやや浮いた状況で銅鈕1点が裏向きで出土した。

銅鈕（**18**）は、遺存状態は比較的良好であるが、部分的に表面が剥離しており、周縁には数ヶ所小さな欠損がある。径5. 1cm、高さ0. 85cmを測る。半球座は径3. 6cmで、表面頂部はややくぼみ、裏面中央に孔径0. 2cmの鈕がつく。周縁は幅0. 7～0. 8cmである。厚さは全体的に0. 1～0. 15cmほどで、やや薄手である。表裏面ともに漆黒色を呈し、鈕の周辺には赤色顔料が観察される。

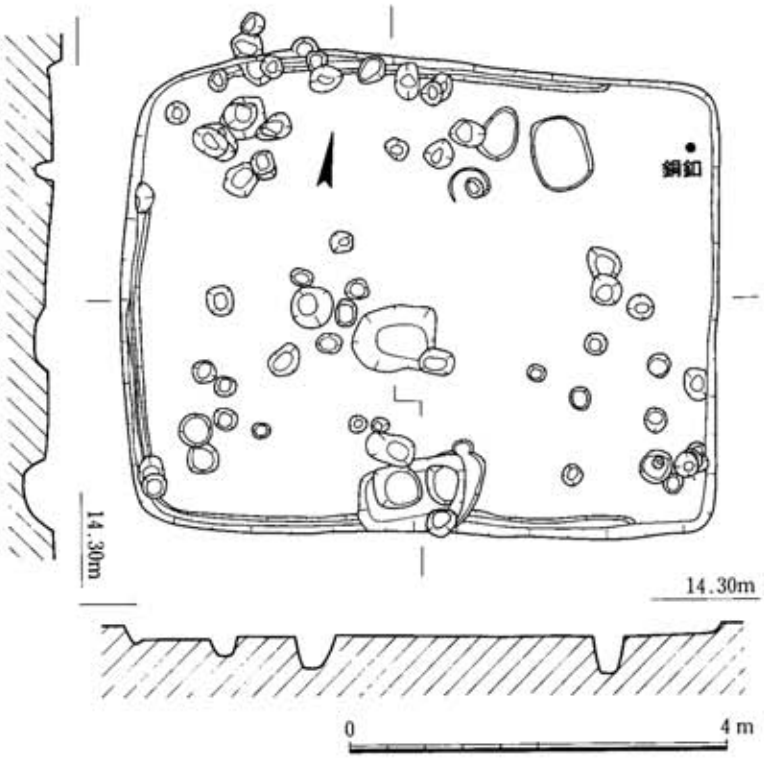


Fig. 2　SB002竪穴住居（1/80）

出土した土器は、いずれも小破片である。**1**～**5**はく字状口縁の甕である。全体的に口縁長が短く、比較的外反度が強いものが多い。**1**は復原口径16. 6cm、**2**は復原口径16. 0cm、**3**は復原口径17. 9cm、**4**は復原口径20. 0cm、**5**は復原口径22. 8cmである。**6**は複合口縁壺で、復原口径16. 4cmで

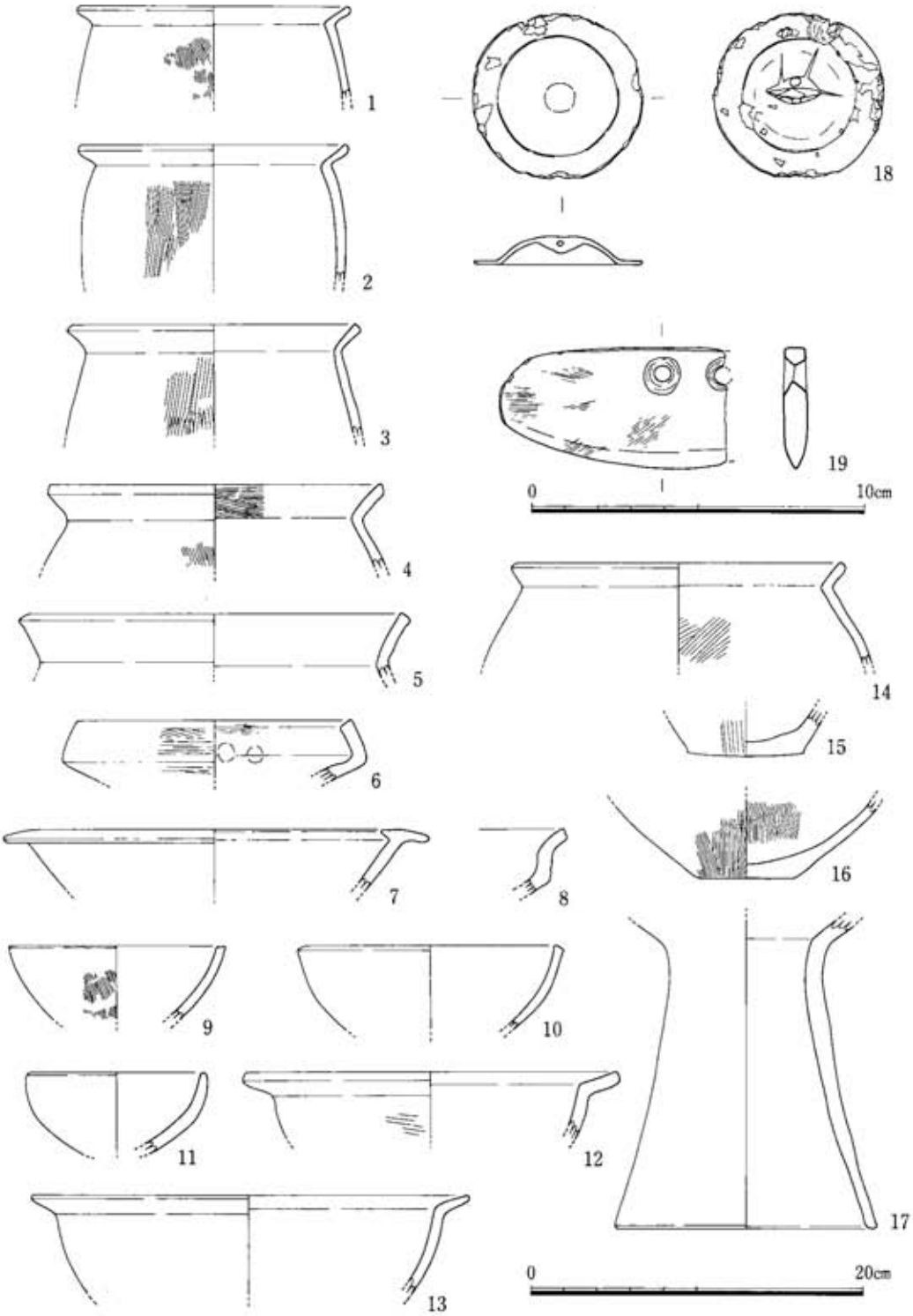


Fig. 3　SB002竪穴住居出土遺物（18･19；1/2、他；1/4）

ある。**7**は須玖系の鋤先状口縁の高坏で、復原口径22.0cmである。**8**は口縁部が直立してわずかに外反する高坏である。**9**・**10**は直口縁の鉢で、**9**は復原口径13.2cm、**10**は復原口径16.0cmである。**11**はミニチュアの鉢で、復原口径10.6cmである。**12**・**13**は屈折口縁の鉢で、復原口径は、**12**が22.4cm、**13**が26.4cmである。**14**は広口壺で、復原口径20.0cmである。**15**は甕の底部で、不安定な平底である。底径6.9cmを測る。**16**は壺の底部で、平底である。底径5.8cmを測る。**17**は器台で、復原裾径15.6cmである。**19**は長方形の石包丁で、残存長6.8cm、幅3.7cm、厚さ0.7cmである。石材は灰白色の泥岩系統のものである。

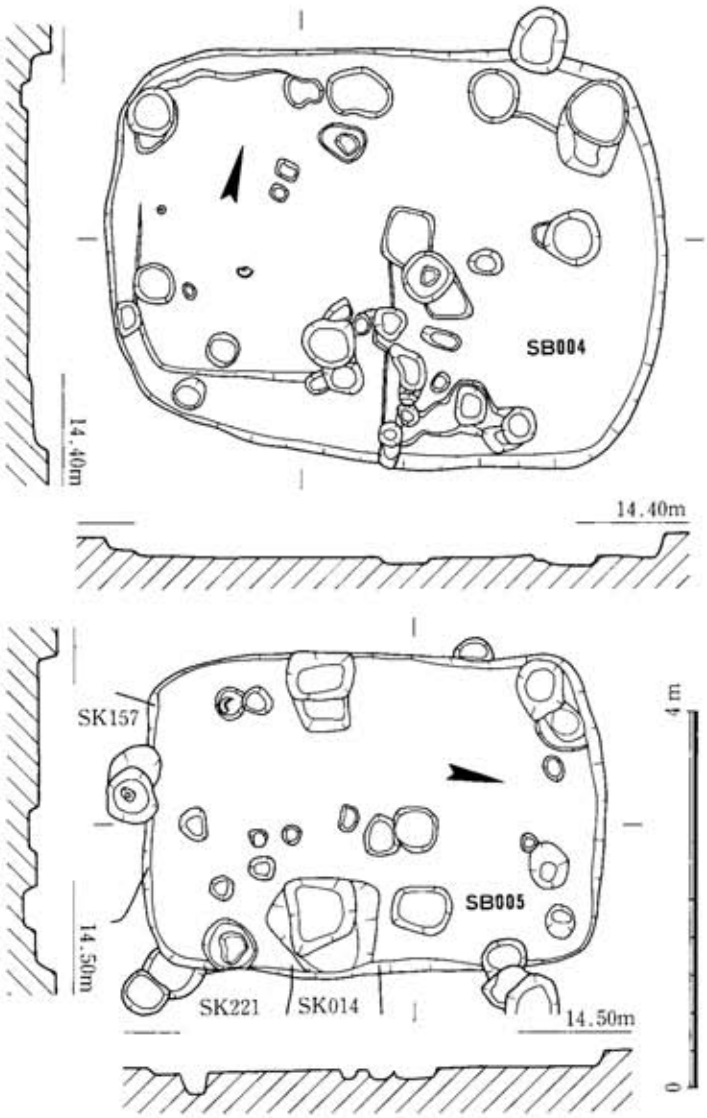


Fig.4　SB004・005竪穴住居（1/80）

SB004竪穴住居

（Fig.4・6）

調査区中央西寄りに位置する。平面形はやや不整形な隅丸長方形で、長軸5.78m、短軸4.17m、面積21.97㎡を測る。主軸はN76°Eである。主柱穴は不明確で、ほぼ中央に炉がある。

20はミニチュアの鉢で、口径8.3cm、器高4.5cm、底径2.3cmを測る。**21**は直口縁の鉢で、底部平底である。口径13.2cm、器高5.4cmを測る。**22**～**25**はガラス小玉である。ガラス小玉の計測値・色調については一覧表（Tab.1）にまとめている。

SB005竪穴住居（Fig.4）

調査区中央西寄りに位置する。中世のSK014・157・221土壙と重複する。平面形は長方形である。長軸4.7m、短軸3.29m、面積

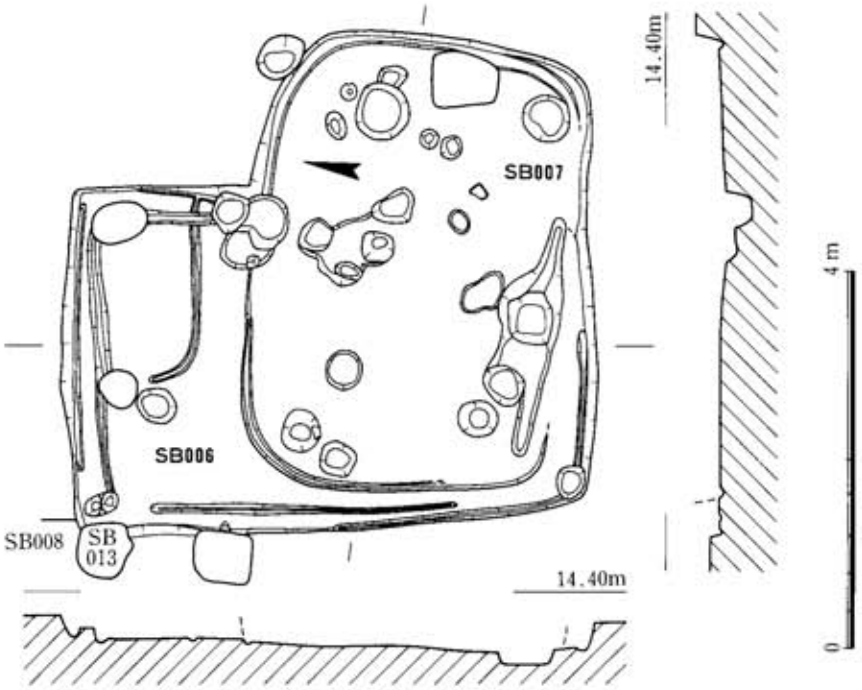


Fig. 5　SB006・007竪穴住居（1/80）

14.49㎡を測る。主軸はN10°Wである。主柱穴は明確ではない。中央に炉か。東辺中央南寄りに壁際土壙がある。

SB006竪穴住居（Fig. 5・6）

調査区中央西寄りに位置する。SB008竪穴住居より新しく、古代のSB013掘立柱建物と重複する。SB007竪穴住居との新旧関係は不明であるが、出土土器からするとSB006竪穴住居が新しいと考えられる。周溝の状況からみると建て替えられており、明確でないが拡張したものと思われる。また、拡張後には北西隅にベッド状遺構があったことが想定できる。平面形は長方形で、拡張以前のものは短軸3.12mを測る。拡張後は長軸5.44m、短軸3.5mを測り、主軸はN9°Wである。いずれも、主柱穴は不明確で、周溝は全辺にめぐるものと考えられる。

26はく字状口縁の甕で、復原口径20.4cmである。**27**はミニチュアの高坏で、復原口径11.8cmである。内外面ユビオサエ後ナデで、指頭圧痕が明瞭に残る。**28**は支脚である。**29・30**はガラス小玉である。

SB007竪穴住居（Fig. 5・6）

調査区中央西寄りに位置する。古代のSB013掘立柱建物、SX216埋置遺構と重複する。SB006竪穴住居より古いようである。平面形は隅丸長方形である。長軸4.78m、短軸3.3m、面積

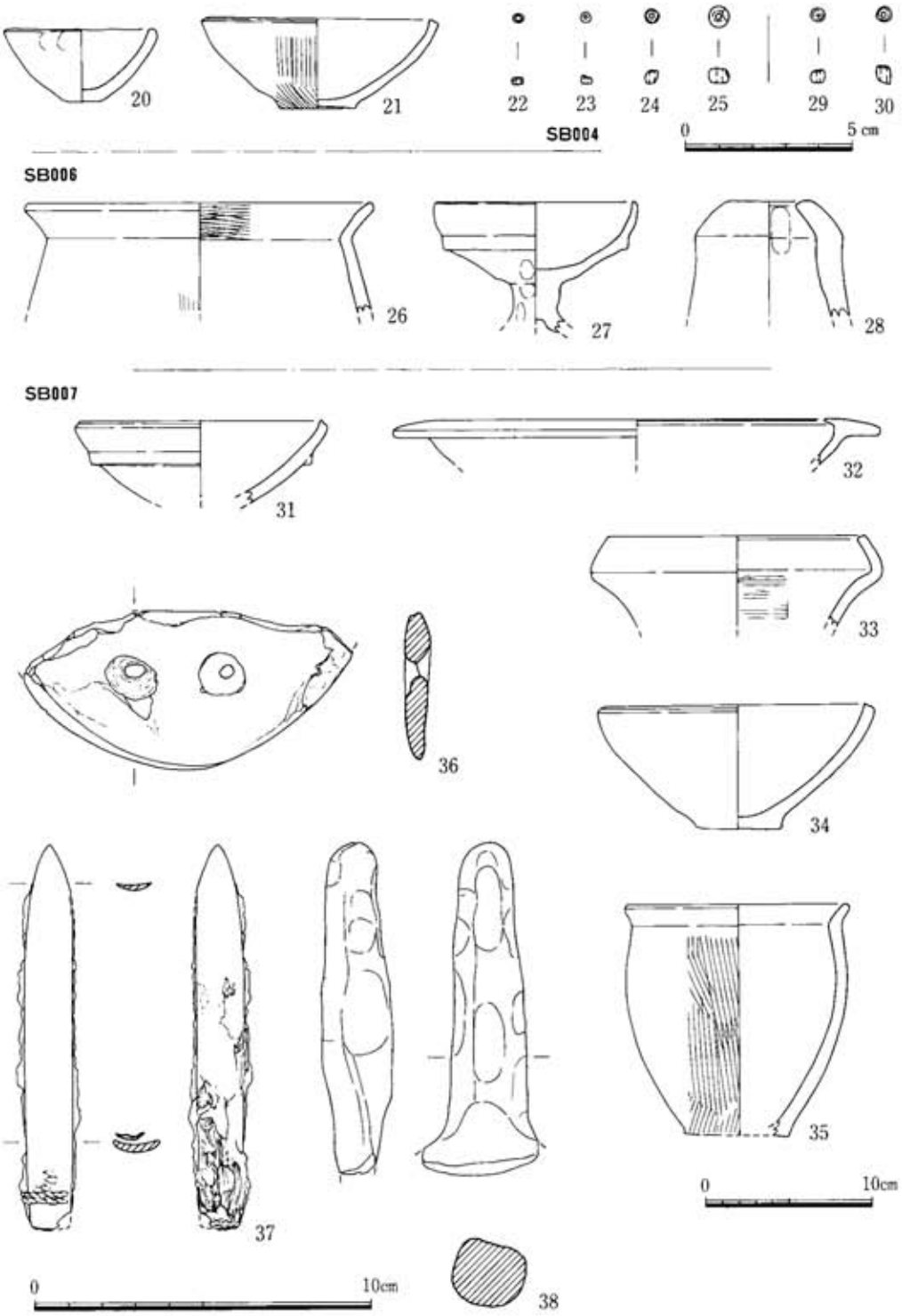


Fig. 6　SB004・006・007竪穴住居出土遺物（22～25･29･30･36～38：1/2、他：1/4）

約15.02㎡を測り、主軸はN89°Eである。主柱穴は明確ではない。周溝が東、北、西辺にめぐるが、南辺は不明確である。鉄鏃が出土しているが、SB006竪穴住居に伴う可能性もある。

31は復原口径14.4cmの直口縁の鉢で、三角突帯が1条めぐる。**32**は須玖系の鋤先状口縁の高坏で、復原口径29.2cmである。**33**は複合口縁壺で、復原口径15.5cmである。**34**は直口縁の鉢で、やや不安定な平底である。口径15.7cm、器高7.3cmを測る。**35**はく字状口縁の甕で、平底になると思われる。口径13.0cm、器高13.7cmを測る。

36は脊が直線の半月刃の石包丁である。片刃で、刃部左右で刃の付け方が異なる。残存長9.8cm、幅4.7cm、厚さ0.8cmを測る。石材は青灰色の砂岩系統の石材である。**37**は鉄鏃で、断面は

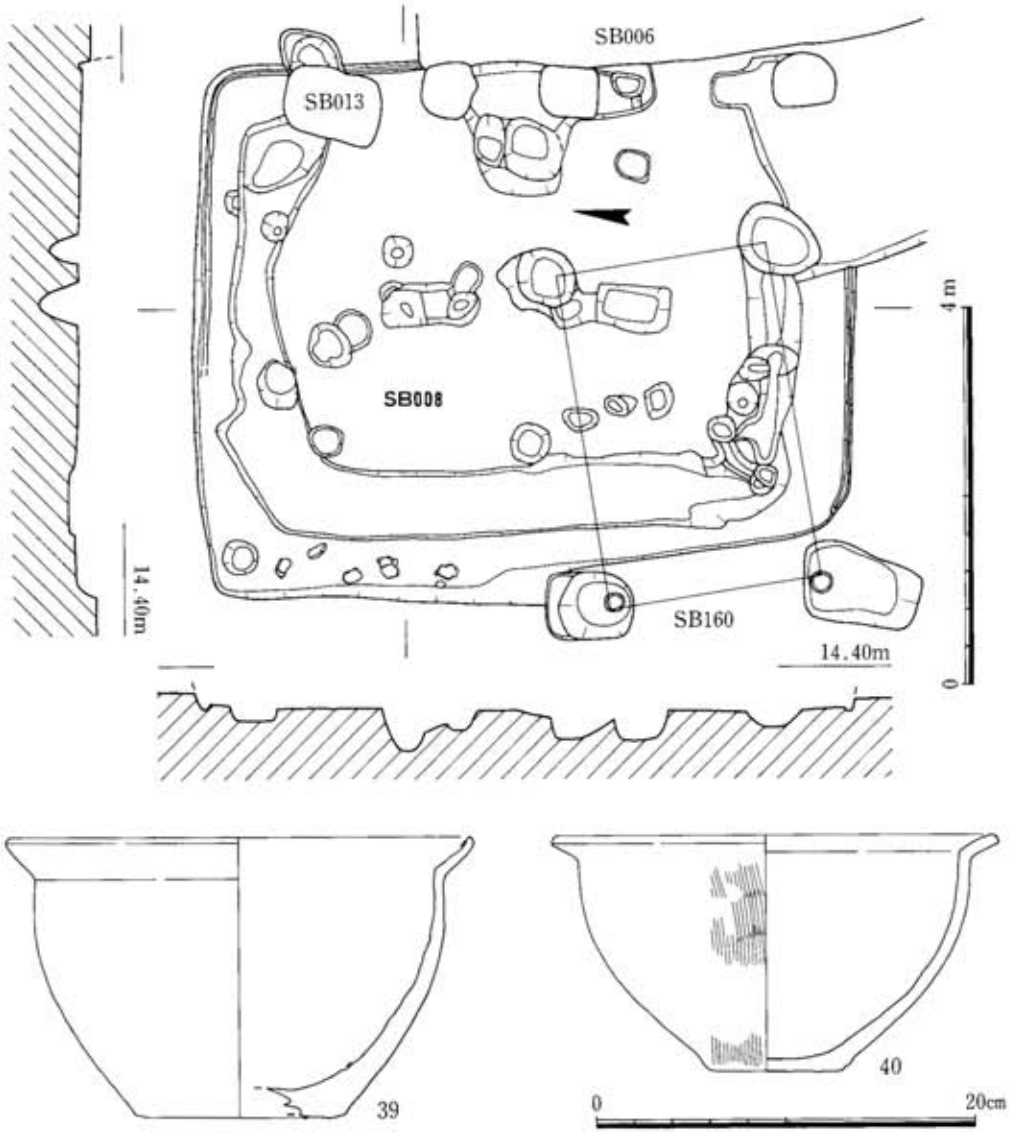


Fig.7　SB008竪穴住居（1/80）、出土遺物（1/4）

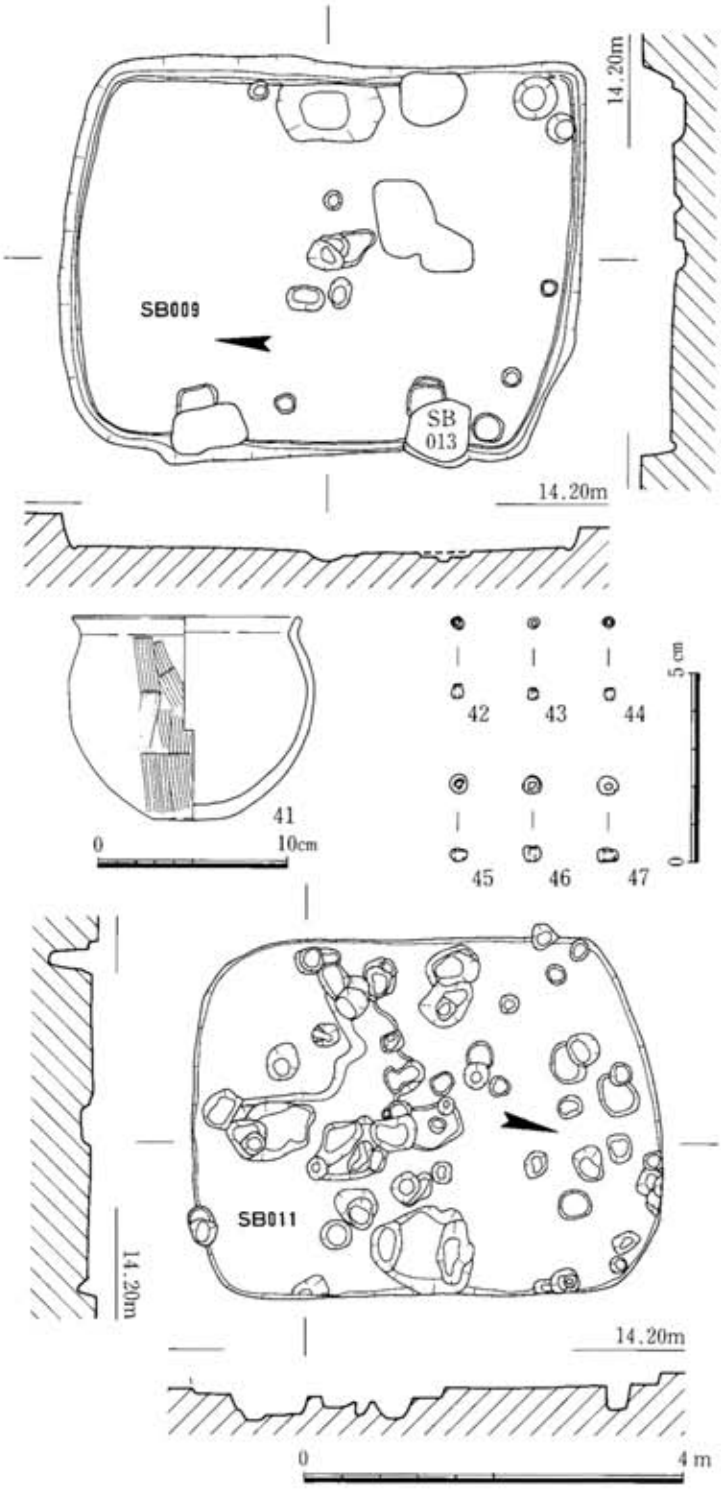


Fig. 8　SB009・011竪穴住居（1/80）、出土遺物（41；1/4、他；1/2）

弧状を呈する。ほぼ完存しており、全長11.4cm、幅1.4cm、厚さ約0.2cmを測る。裏すきに木質がかなり良好に遺存している。また、基部には紐状のものが観察され、柄を装着するためのものであろう。**38**はスプーン状の土製品で、匙の部分を欠失する。残存長9.9cm、幅3.5cmを測る。

SB008竪穴住居（Fig. 7）

調査区中央西寄りに位置する。SB006竪穴住居より古く、古代のSB013掘立柱建物と重複する。SB160掘立柱建物との新旧関係は不明である。南東部分が攪乱される。平面形は、西辺がやや不整形な長方形である。長軸6.87m、短軸5.51mを測る。主軸はN 7° Wである。床面は不明確である。2本主柱で、ほぼ中央に炉があるものと思われる。周溝が北辺と東辺、南辺にある。東辺ほぼ中央に壁際土壙がある。

39・40は屈折口縁の鉢である。**39**は平底になると思われ、内面は器面の剝離が著しい。口径24.5cm、器高

14.8cmを測る。**40**は平底で、口径23.0cm、器高12.4cmである。

SB009竪穴住居（Fig.8）

調査区中央南西寄りに位置する。古代のSB013掘立柱建物と重複する。平面形は平行四辺形気味の長方形である。長軸5.31m、短軸3.94m、面積20.19㎡を測る。主軸はN4°Wである。主柱穴は確認できない。中央に炉があるものと思われる。周溝が全辺にめぐり、東辺ほぼ中央に壁際土壙がある。

41は壺で、口径12.0cm、器高10.7cmを測る。底部は不安定な平底である。**42**～**47**はガラス小玉である。淡青色のものが多い。

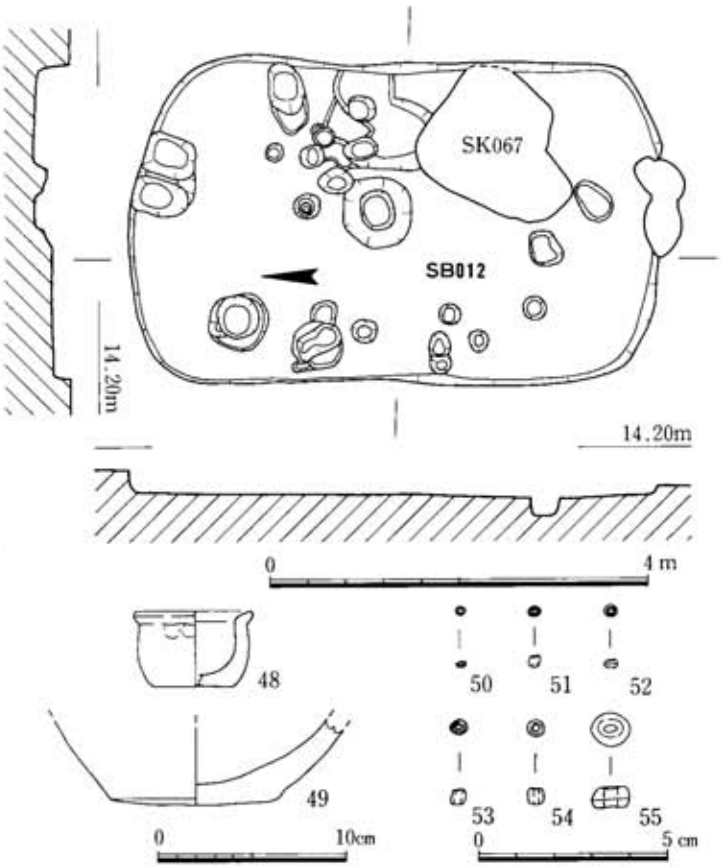


Fig.9　SB012竪穴住居（1/80）、出土遺物（48･49：1/4、50～55：1/2）

SB011竪穴住居（Fig.8）

調査区中央南西寄りに位置する。平面形は北辺がやや不整形な隅丸長方形で、長軸4.91m、短軸3.68m、面積16.83㎡を測る。主軸はN13°Wである。主柱は確実ではないが2本と考えられ、中央に炉か。南西隅にベッド状遺構、東辺ほぼ中央に壁際土壙がある。

SB012竪穴住居（Fig.9）

調査区中央南西寄りに位置する。中世のSB055掘立柱建物、SK067土壙と重複する。平面形は隅丸長方形で、長軸5.5m、短軸3.35m、面積16.94㎡を測る。主軸はN1°Wである。主柱穴は不明確である。中央に炉、東辺ほぼ中央に壁際土壙がある。

48はミニチュアの鉢で、口径6.1cm、器高3.9cmを測る。**49**は凸レンズ状を呈する壺の底部で、底径8.9cmを測る。**50**～**55**はガラス小玉で、いずれも紺色である。**55**は小玉にするにはやや径

が大きいが、平べったいことから小玉としておく。

SB016竪穴住居（Fig. 10）

調査区中央西寄りに位置する。SB017竪穴住居より新しく、古代のSB138掘立柱建物と重複する。平面形は長方形で、長軸5.8m、短軸3.74m、面積20.66㎡を測る。主軸はN67° Eで

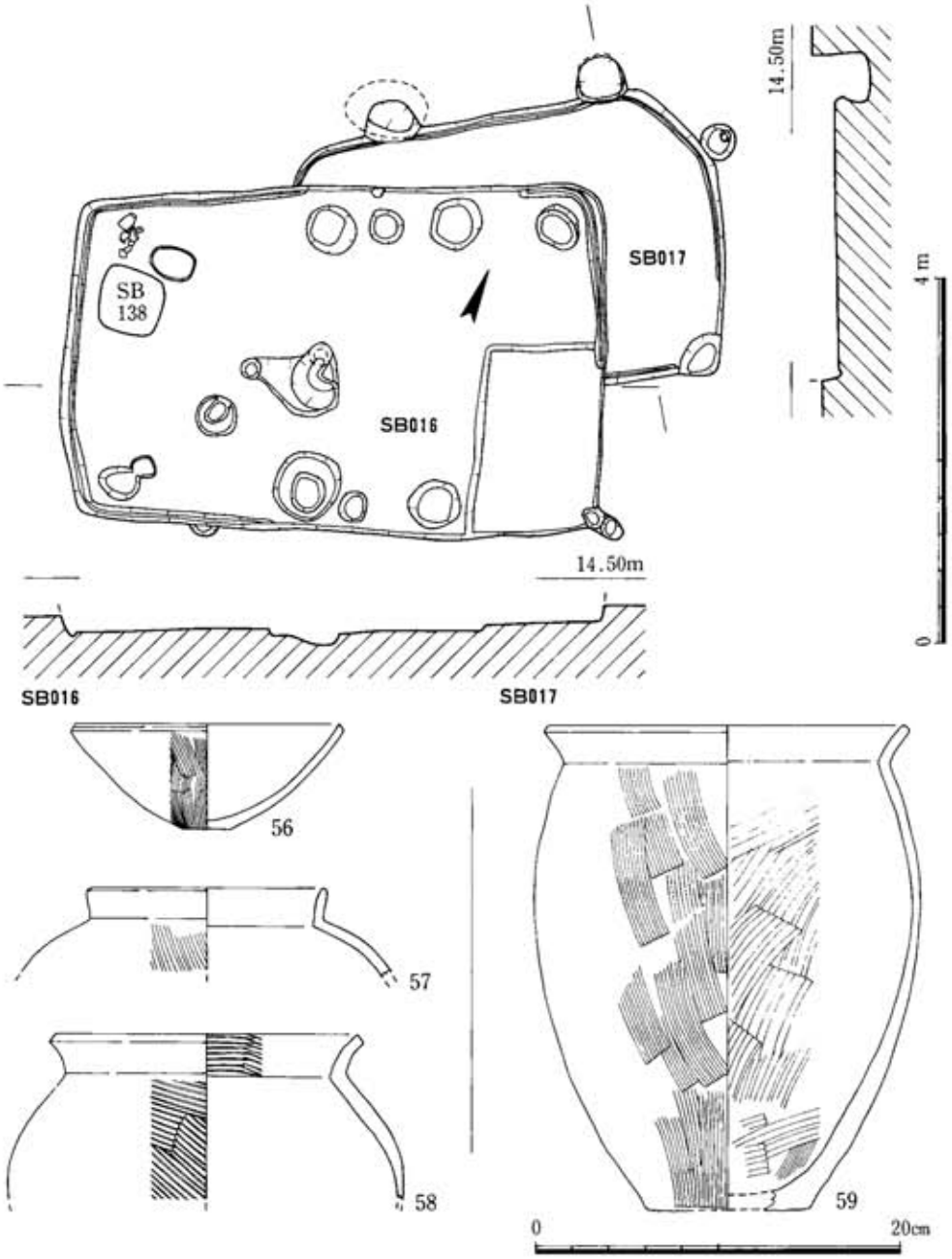


Fig. 10　SB016・017竪穴住居（1/80）、出土遺物（1/4）

ある。主柱穴は不明で、中央に炉、南辺ほぼ中央に壁際土壙か。北東隅と、北辺中央から西辺、南辺中央にかけて周溝がめぐり、南東隅にベッド状遺構がある。

56は直口縁の鉢で、復原口径14.4cm、器高5.7cmである。底部は平底であるが、底径2.5cmとかなり縮小している。**57**は口縁部が短く直立する壺で、復原口径12.4cmを測る。**58**は広口壺で、復原口径15.4cmを測る。

SB017竪穴住居（Fig. 10）

調査区中央西寄りに位置する。SB016竪穴住居より古く、半分以上削平される。平面形は隅丸長方形になると推定され、短軸3.01mを測る。主軸はN56°Eである。周溝が全周するようである。北辺に住居壁から掘りこまれたと考えられる柱穴が2ヶ所あり、住居の上部構造に関係すると考えられる。

59はく字状口縁の甕で、底部平底である。口径19.3cm、器高26.6cmを測る。

SB022竪穴住居（Fig. 11）

調査区中央南寄りに位置する。中世のSB055掘立柱建物と重複する。平面形は長方形である。長軸3.34m、短軸2.18m、面積7.05m²で、非常に小型の竪穴住居である。主軸はN9°Wである。主柱穴、炉は不明である。周溝が北、西辺にめぐる。

60は小型の鉢で、底部平底と考えられる。復原口径11.5cm、復原器高6.9cmである。**61**は屈折口縁の鉢で、復原口径22.8cmである。

SB024竪穴住居（Fig. 11）

調査区南端中央に位置し、南側約半分が調査区外にある。中世のSB050掘立柱建物と重複する。平面形は長方形になると考えられ、短軸4.23mを測る。主軸はN15°Wである。2本主柱と推定され、北東隅にベッド状遺構がある。

62～**84**はガラス小玉で、径3.0～4.0cmで、紺色のものが多い。**85**は長方形の石包丁で、長さ11.0cm、幅3.9cm、厚さ0.7cmである。青灰色の砂岩系統の石材である。

SB039竪穴住居（Fig. 12）

調査区南東隅に位置する。SB081竪穴住居より新しく、古代のSB222掘立柱建物と重複する。平面形は長方形で、長軸5.5m、短軸4.2m、面積23.22m²を測る。主軸はN9°Wである。主柱穴は不明で、中央に炉がある。南辺と西辺に周溝がめぐり、北辺にベッド状遺構、東辺やや北寄りに壁際土壙がある。

86は石製紡錘車で、径3.7cm、孔径0.7cm、重量32gである。

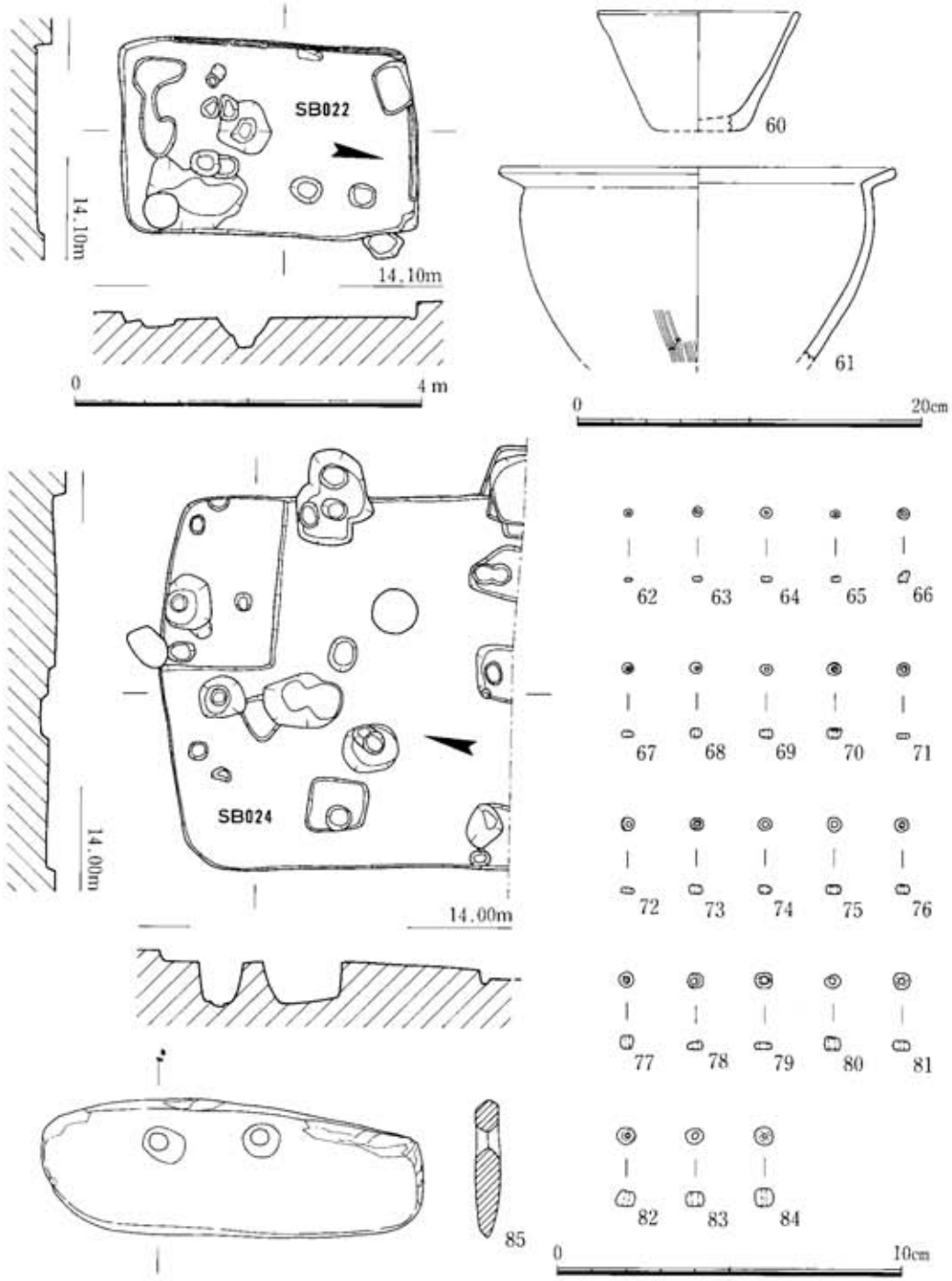


Fig. 11　SB022・024竪穴住居（1/80）、出土遺物（60・61：1/4、他：1/2）

SB040竪穴住居（Fig. 12）

調査区南東に位置する。SB079掘立柱建物より古いと考えられる。平面形は長方形で、長軸5.6m、短軸3.98m、面積約22.30㎡を測る。主軸はN79°Eである。主柱穴は不明で、中央やや南西寄りに炉がある。南東隅にベッド状遺構、南辺中央やや西寄りに壁際土壙がある。

87は須玖系の鋤先状口縁の高坏である。復原口径23.0cmを測る。

SB043竪穴住居（Fig. 13）

調査区南東に位置する。SB083竪穴住居より古い。SB054掘立柱建物との新旧関係は不明である。平面形は長方形で、長軸7.22m、短軸4.63mを測る。主軸はN15°Wである。主柱穴は不明確で、中央に炉、西辺ほぼ中央に壁際土壙がある。北辺についてはSB083竪穴住居に切られているため不明瞭であるが、両短辺に貼床によるベッド状遺構があるタイプと考えられる。

88は直口縁の鉢で、底部

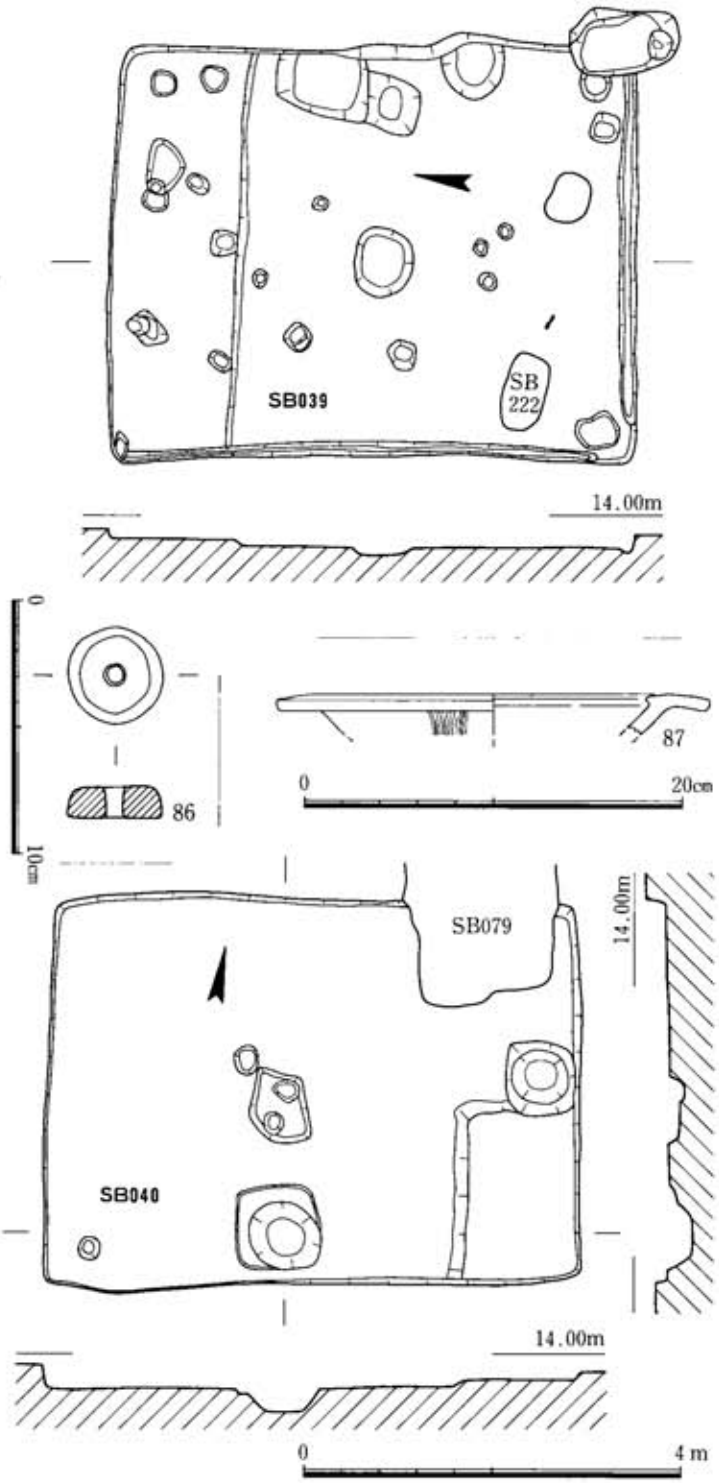


Fig. 12　SB039・040竪穴住居（1/80）、出土遺物（86：1/2、87：1/4）

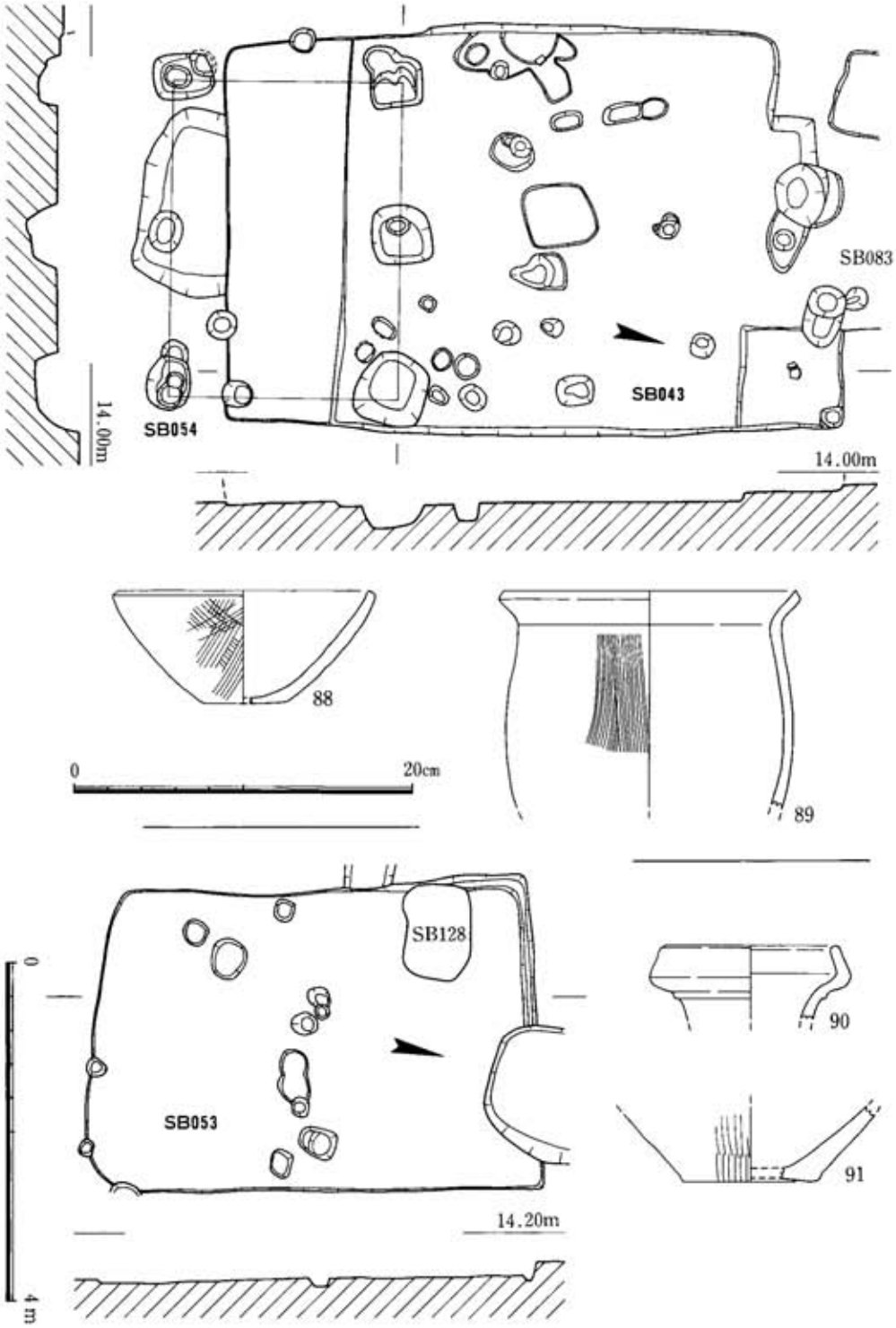


Fig. 13　SB043・053竪穴住居（1/80）、出土遺物（1/4）、SB054掘立柱建物（1/80）

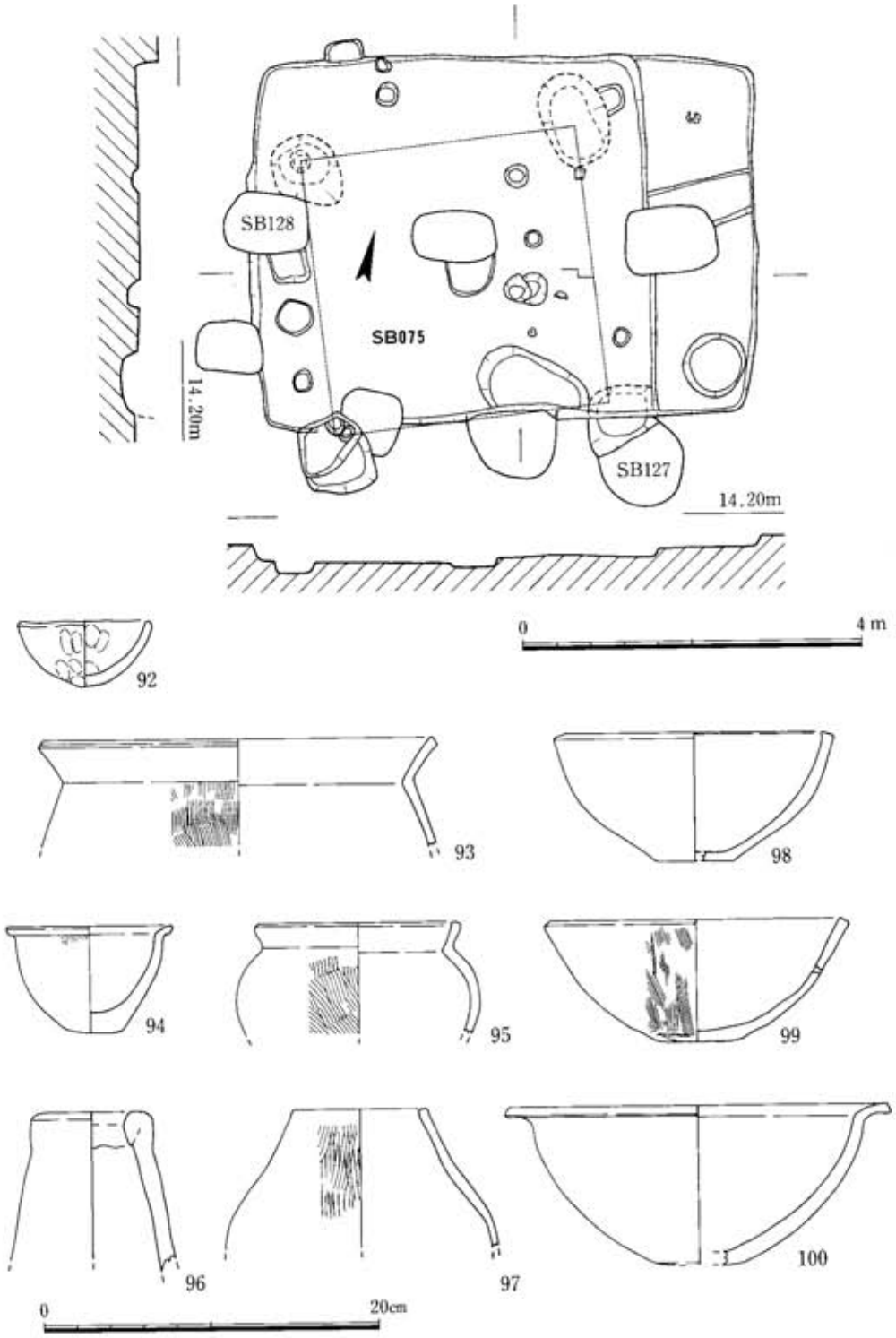


Fig. 14　SB075竪穴住居（1/80）、出土遺物（1/4）

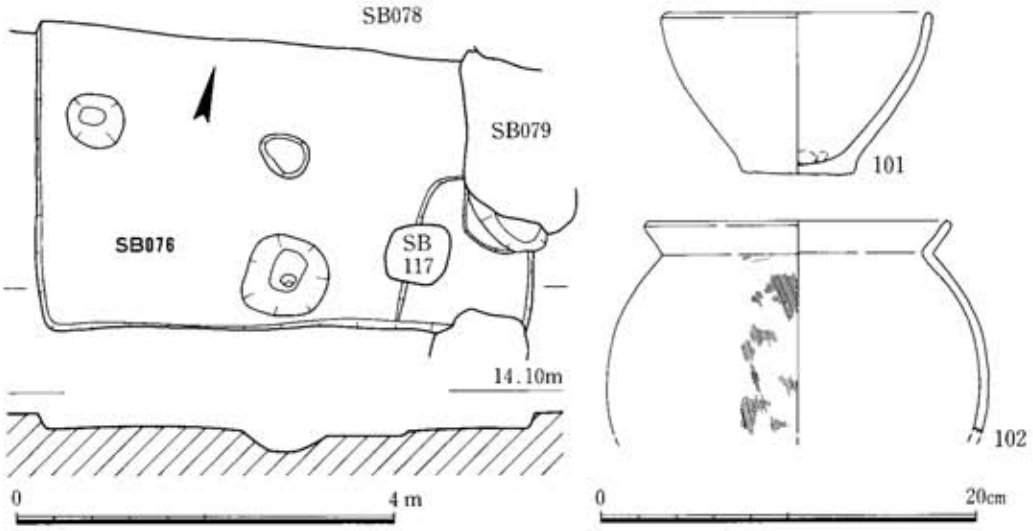


Fig. 15　SB076竪穴住居（1/80）、出土遺物（1/4）

は不安定な平底である。復原口径14.7cm、器高6.6cmを測る。**89**はく字状口縁の甕で、復原口径17.3cmである。

SB053竪穴住居（Fig. 13）

調査区南東に位置する。古代のSB128掘立柱建物と重複する。平面形は南辺がやや不整形な長方形で、長軸5.16m、短軸3.5m、面積18.06m²を測る。主軸はN12°Wである。主柱穴と炉は不明である。北西隅から北辺にかけて周溝がめぐる。

90は複合口縁壺の口縁部で、頸部に三角突帯が1条めぐる。復原口径10.0cmを測る。**91**は壺の底部で、平底である。復原底径8.0cmである。

SB075竪穴住居（Fig. 14）

調査区中央南東寄りに位置する。SB175掘立柱建物より新しく、古代のSB127・128掘立柱建物と重複する。平面形は長方形で、長軸5.85m、短軸4.2m、面積23.96m²を測る。主軸はN76°Eである。主柱穴は不明で、中央に炉がある。西辺にベッド状遺構、南辺中央やや東よりに壁際土壙がある。

92はミニチュアの鉢で、口径7.7cm、器高3.9cmである。**93**はく字状口縁の甕で、復原口径23.3cmを測る。**94**はミニチュアの鉢で、口径9.8cm、器高6.3cmを測る。**95**は小型の広口壺である。口径11.7cmである。**96**は支脚である。**97**は直口縁の壺と考えられる。復原口径7.7cmで、胴部上半部はハケメ、下半部はケズリである。**98**・**99**は直口縁の鉢である。**98**はやや不安定な平底で、胴部下半部はケズリである。復原口径15.2cm、器高7.6m²を測る。**99**は不安定な平底で、

口 径17.1cm、器 高7.2cmである。**100**は屈折口縁の鉢で、底部は凸レンズ状である。胴部上半部はハケメと思われ、下半部はナデである。底部付近にタタキが残る。復原口径22.1cm、器高9.4cmを測る。

SB076竪穴住居（Fig.15）

調査区南東に位置する。SB079・117掘立柱建物より古く、中世のSD078溝と重複する。平面形は長方形と推定され、長軸5.15mを測る。主軸はN75°Eである。主柱穴は不明である。中央に炉、南東隅にベッド状遺構、南辺ほぼ中央に壁際土壙がある。

101は直口縁の鉢で、底部は平底である。口径14.0cm器高8.5cmを測る。**102**は広口壺で、復原口径15.9cmである。

SB080竪穴住居（Fig.16）

調査区南東に位置する。SB081竪穴住居より新しく、古代のSB077竪穴住居と重複する。SB079掘立柱建物との新旧関係は不明である。平面形は長方形で、長軸

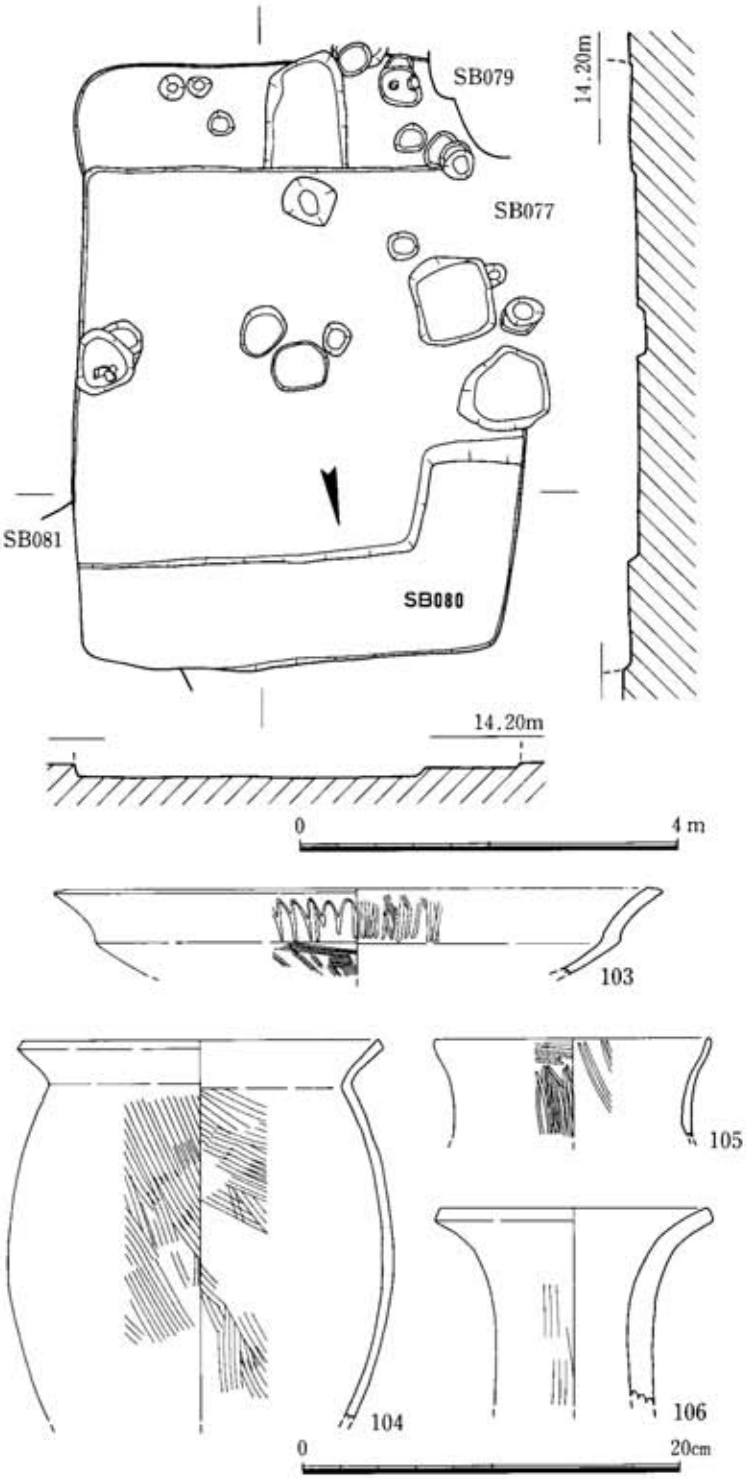


Fig.16　SB080竪穴住居（1/80）、出土遺物（1/4）

6.34m、短軸4.7mを測る。主軸はN13° Eで、大多数の住居とやや主軸方位が異なる。主柱穴と考えられるものは南には確認できるが、北にはなく、不明といわざるをえない。中央に炉、東辺ほぼ中央に壁際土壙がある。南辺と、北辺から北西隅にかけて貼床によるベッド状遺構がある。

103は高坏で、口縁部内外面に暗文を施す。復原口径30.8cmを測る。**104**はく字状口縁の甕で、復原口径18.9cmである。胴部外面下半部はケズリか。**105**は長頸壺の一種であろうか。内外面にヘラミガキが施される。復原口径14.6cmを測る。**106**は器台で、外面はハケメ後ナデである。

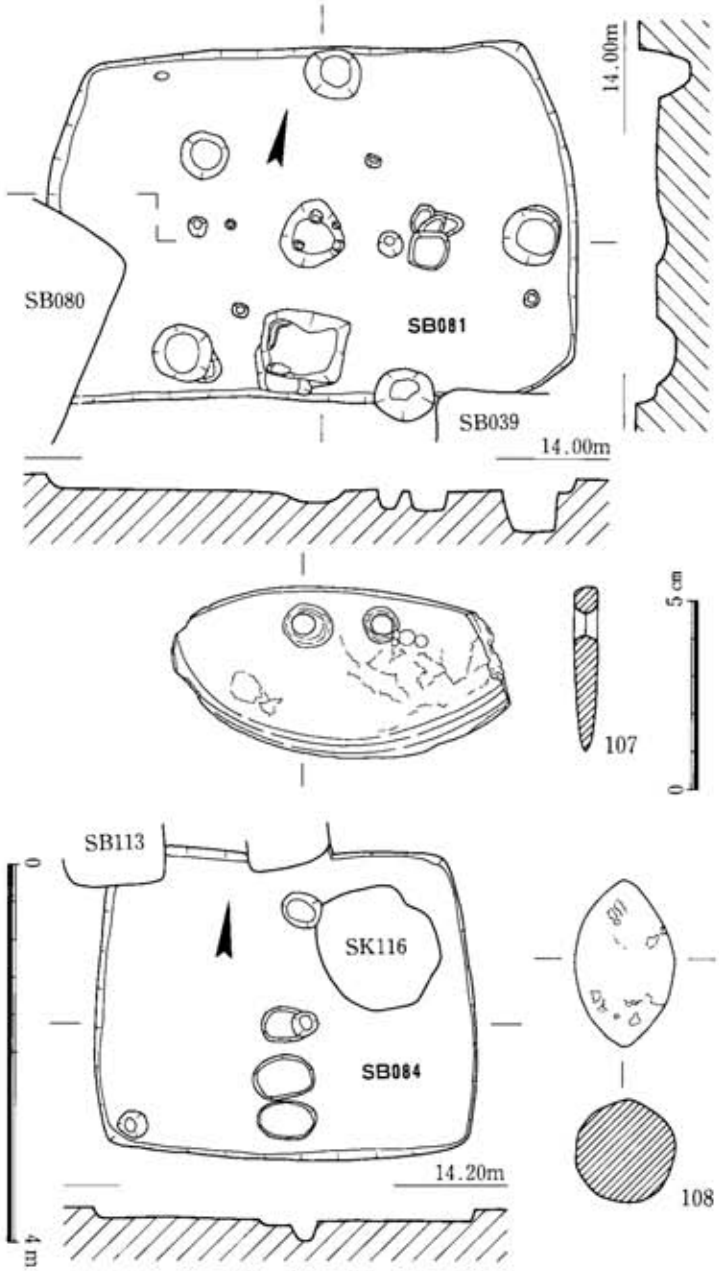


Fig.17　SB081・084竪穴住居（1/80）、出土遺物（1/2）

SB081竪穴住居（Fig.17）

調査区南東に位置する。SB080・039竪穴住居より古い。平面形はやや不整形な長方形である。長軸5.38m、短軸3.57mを測る。主軸はN77° Eである。主柱穴は不明確であるが、2本か。中央に炉、南辺ほぼ中央に壁際土壙がある。

107は脊が湾曲する半月刃の石包丁である。残存長9.0cm、幅4.5cm、厚さ0.6cmである。緑灰色の砂岩系統の石材である。

SB084竪穴住居（Fig.17）

調査区中央東寄りに位置する。SB085竪穴住居より古く、古代のSB113掘立柱

建物、中世のSK116土壙と重複する。平面形は長方形で、長軸3.96m、短軸3.06m、面積約11.61㎡を測る。主軸はN85°Eである。主柱穴は不明で、中央に炉がある。

108は土弾で、一部に欠損がある。長さ4.45cm、幅2.6cm、残存重量26gである。

SB085竪穴住居（Fig.18）

調査区中央東寄りに位置する。SB084竪穴住居より新しく、古代のSB113掘立柱建物、中世のSD101溝、SE115井戸と重複する。平面形は長方形と推定され、短軸3.2mを測る。主軸はN71°Eである。削平のため、主柱穴や炉などの詳細は不明である。

109は高坏の坏部で、復原口径31.8cmを測る。**110**は直口壺で、底部平底である。口径9.2cm、胴部最大径16.4cm、底径5.3cm、器高12.1cmを測る。胴部下半部はハケメ後ナデである。

SB086竪穴住居（Fig.18）

調査区中央東寄りに位置する。古代のSK107土壙と重複する。平面形はやや不整形な長方形で、長軸4.38m、短軸3.04m、面積12.86㎡を測る。主軸はN75°Eである。主柱穴は不明で、中央に炉、南辺

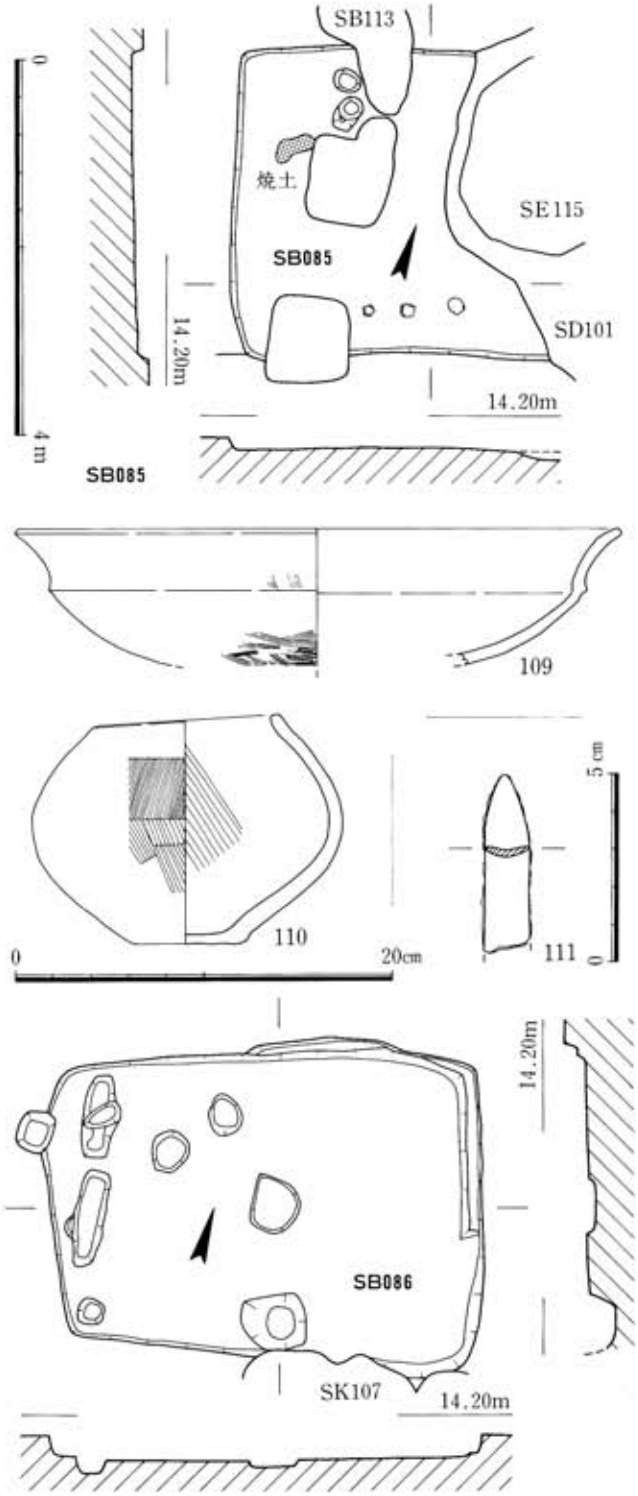


Fig.18　SB085・086竪穴住居（1/80）、出土遺物（111：1/2、他：1/4）

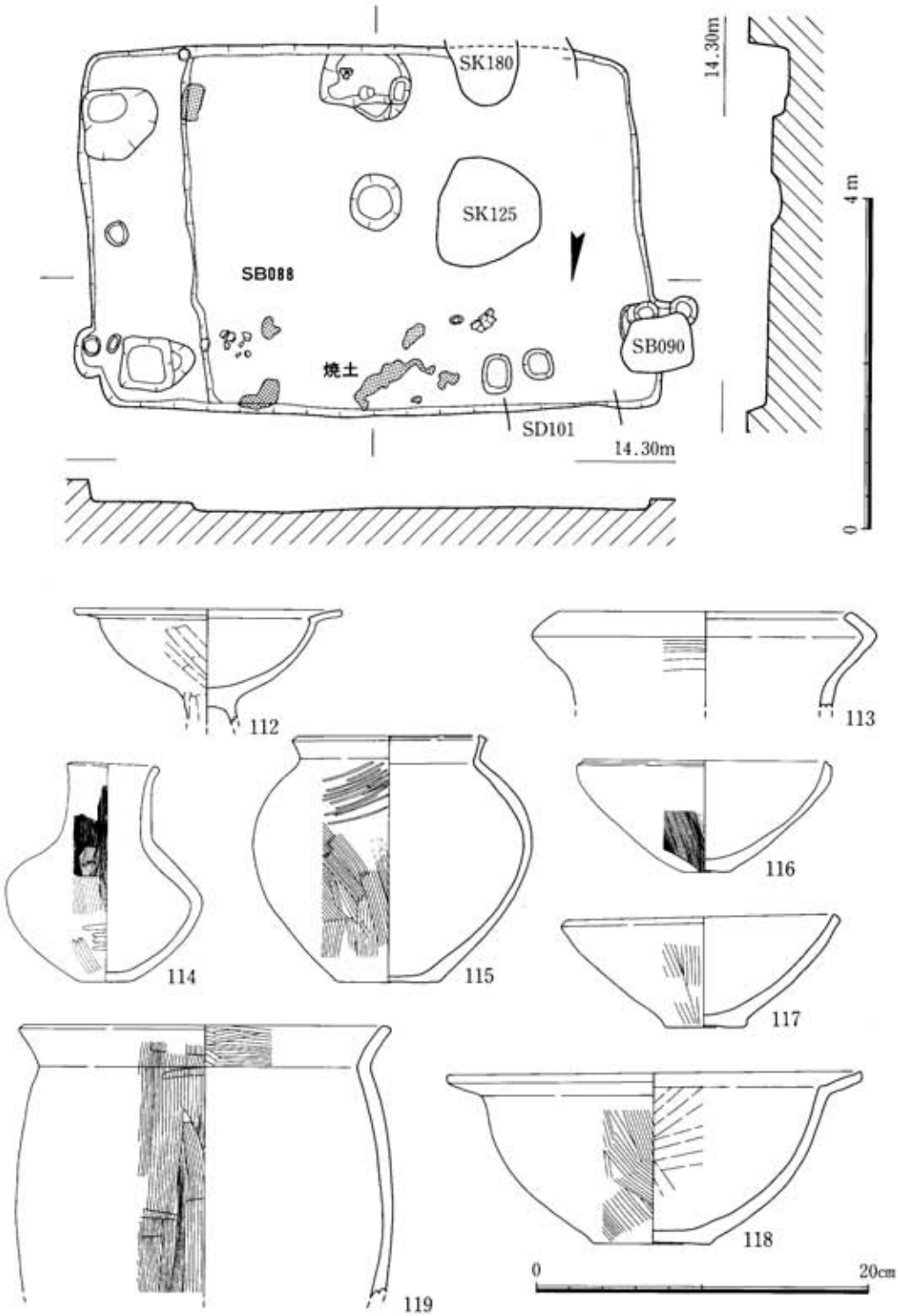


Fig. 19　SB088竪穴住居（1/80）、出土遺物（1/4）

ほぼ中央に壁際土壙がある。北西隅の本来の壁面は不明である。

111は鉄鉋で、先端が折れ曲がっている。断面は弧状を呈し、残存長4.3cm、幅1.2cm、厚さ0.2cmである。

SB088竪穴住居（Fig.19）

調査区中央東寄りに位置する。SB089竪穴住居より新しく、SB178掘立柱建物との新旧関係は不明である。古代のSB090掘立柱建物、中世のSD101溝、SK125・180土壙と重複する。平面形は長方形で、長軸6.54m、短軸4.25m、面積27.60㎡を測る。主軸はN84°Eである。主柱穴は不明で、中央に炉、東辺にベッド状遺構、南辺ほぼ中央に壁際土壙がある。

112は須玖系の鋤先状口縁の高坏で、口径15.9cmと小型である。坏部外面は板状工具による

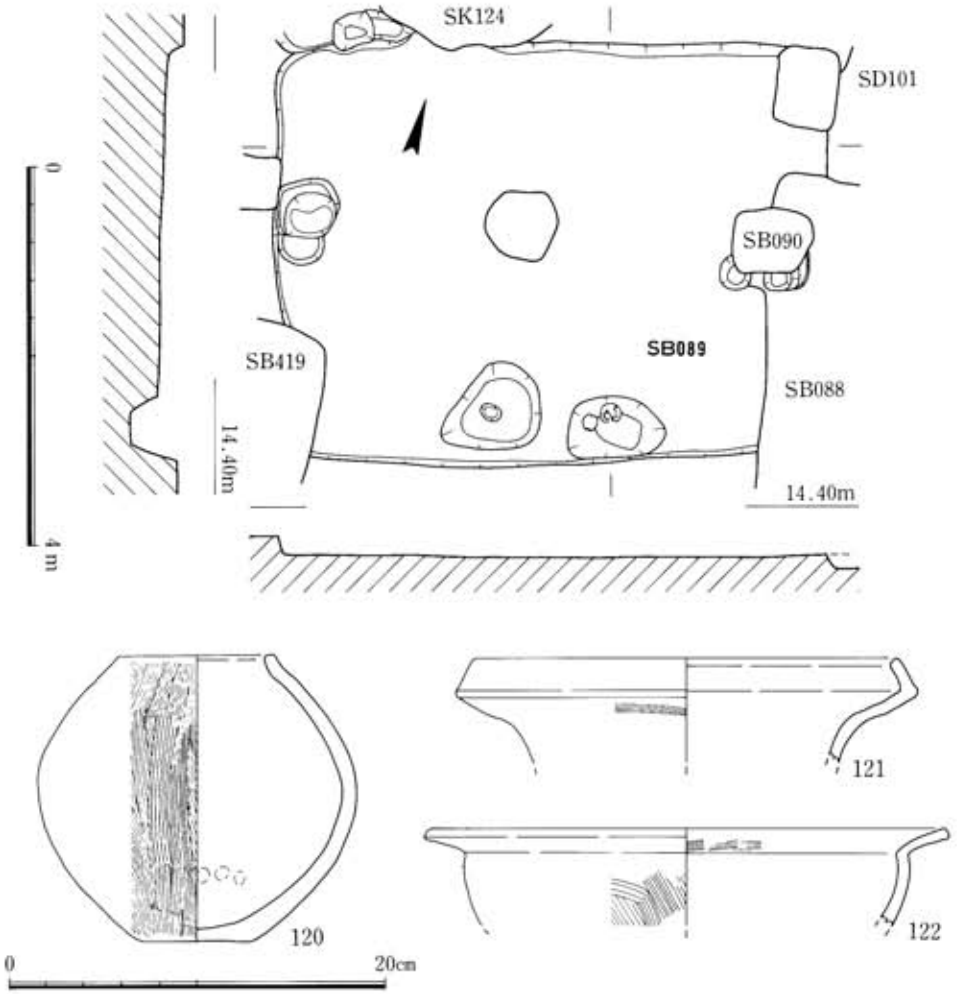


Fig.20　SB089竪穴住居（1/80）、出土遺物（1/4）

ナデである。**113**は複合口縁壺で、復原口径17.6cmを測る。**114**は精製の長頸壺で、底部は不安定な平底である。口径5.1cm、胴部最大径11.7cm、器高13.1cmである。胴部外面下半部はヘラミガキを施す。**115**は平底の広口壺で、口径11.0cm、胴部最大径16.8cm、器高14.9cmである。胴部外面上半部の一部にヘラミガキが施されており、暗文を意図しているものと考えられる。**116・117**はともに平底の直口縁の鉢である。**116**は復原口径14.5cm、器高6.7cmで、底径は2.8cmと縮小している。**117**は口径16.2cm、器高6.8cmを測る。**118**は屈折口縁の鉢で、口径24.3cm、器高10.4cmである。底部平底である。**119**はく字状口縁の甕で、復原口径22.0cmを測る。

SB089竪穴住居（Fig.20）

調査区中央西寄りに位置する。SB088・419竪穴住居より古く、古代のSB090掘立柱建物、SK124土壙、中世のSD101溝と重複する。平面形は長方形で、短軸

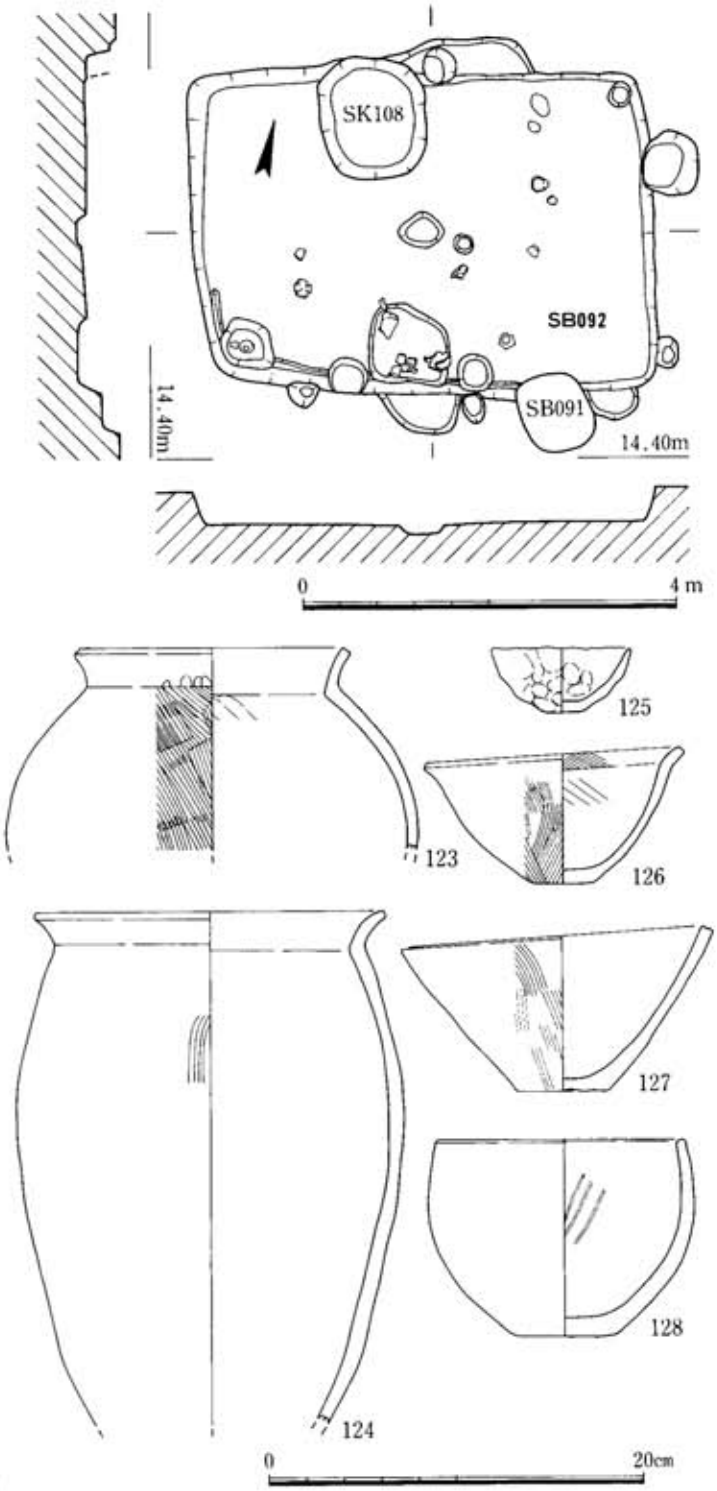


Fig.21　SB092竪穴住居（1/80）、出土遺物（1/4）

4.32mを測る。主軸はN74°Eである。主柱穴、炉は不明である。南辺中央付近に壁際土壙がある。

120は直口壺で、底部平底である。口径7.3cm、胴部最大径16.8cm、器高15.1cmを測る。**121**は複合口縁壺で、復原口径22.4cmである。**122**は屈折口縁の鉢で、復原口径27.2cmである。

SB092竪穴住居（Fig. 21）

調査区東側中央に位置する。古代のSB091掘立柱建物と重複する。SK108土壙との新旧関係

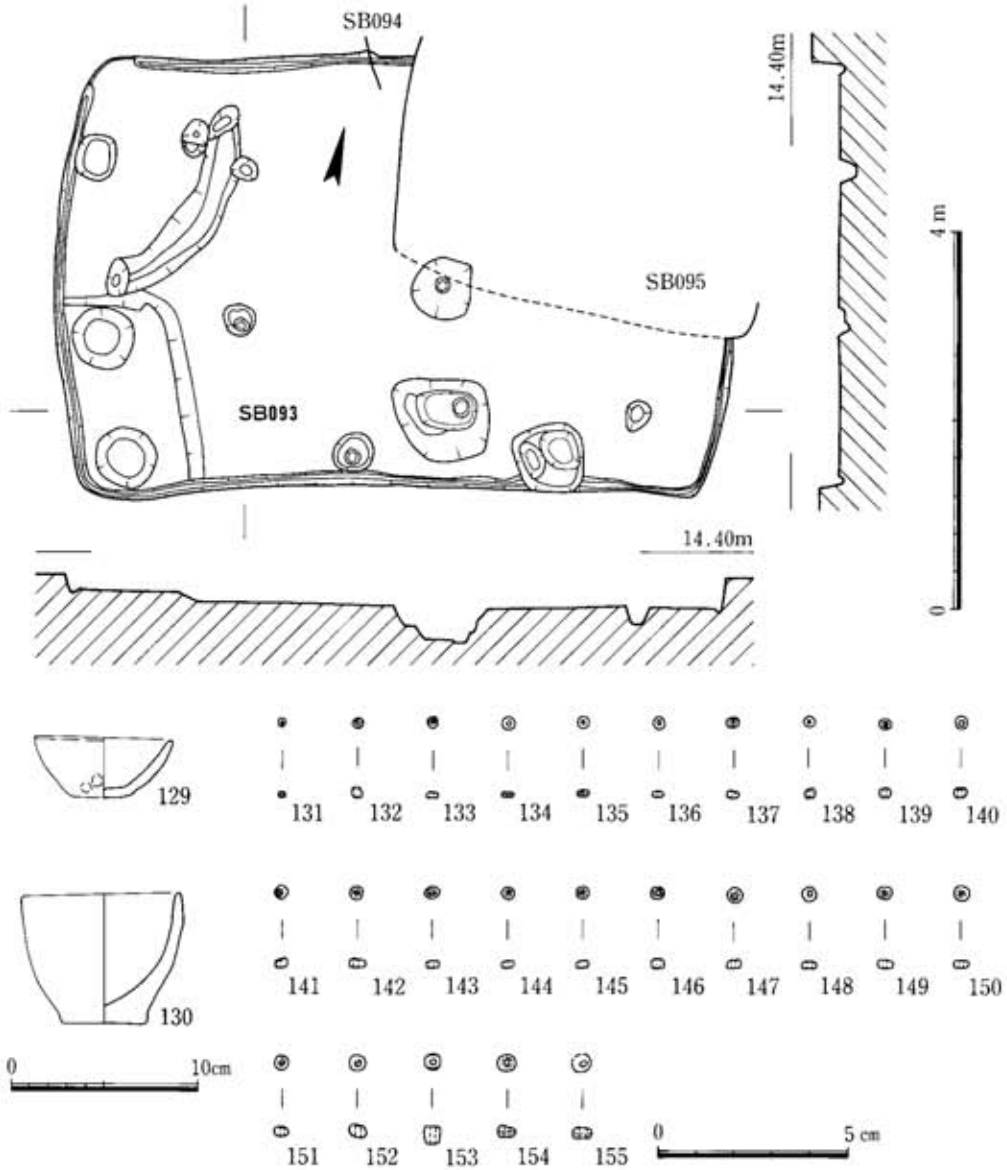


Fig. 22　SB093竪穴住居（1/80）、出土遺物（129・130；1/4、131～155；1/2）

は不明である。平面形はやや不整形の長方形である。長軸4.7m、短軸3.26m、面積14.54㎡を測る。主軸はN78° Eである。主柱穴は不明である。中央に炉、南辺中央やや西寄りに壁際土壙がある。周溝が南西隅から南辺にかけてめぐる。

123は広口壺で、口径14.6cmを測る。口縁屈曲部にハケメを施す際ハケメ原体側面が当たった痕跡が観察される。**124**はく字状口縁の甕で、復原口径18.2cmを測る。胴部外面上半部はハケメ後ナデ、下半部はケズリを施す。**125**はミニチュアの鉢で、復原口径7.4cm、器高3.4cmである。指頭圧痕が明瞭に残る。**126**は屈折口縁の鉢で、底部はやや不安定な平底である。口径13.9cm、器高7.3cmを測る。**127**は直口縁の鉢で、底部はやや不安定な平底である。口径16.7cm、器高8.6cmである。**128**は直口縁で深めの鉢である。底部は不安定な平底で、復原口径13.4cm、器高10.4cmを測る。内面にナデの際に砂粒が動いた痕跡が残る。

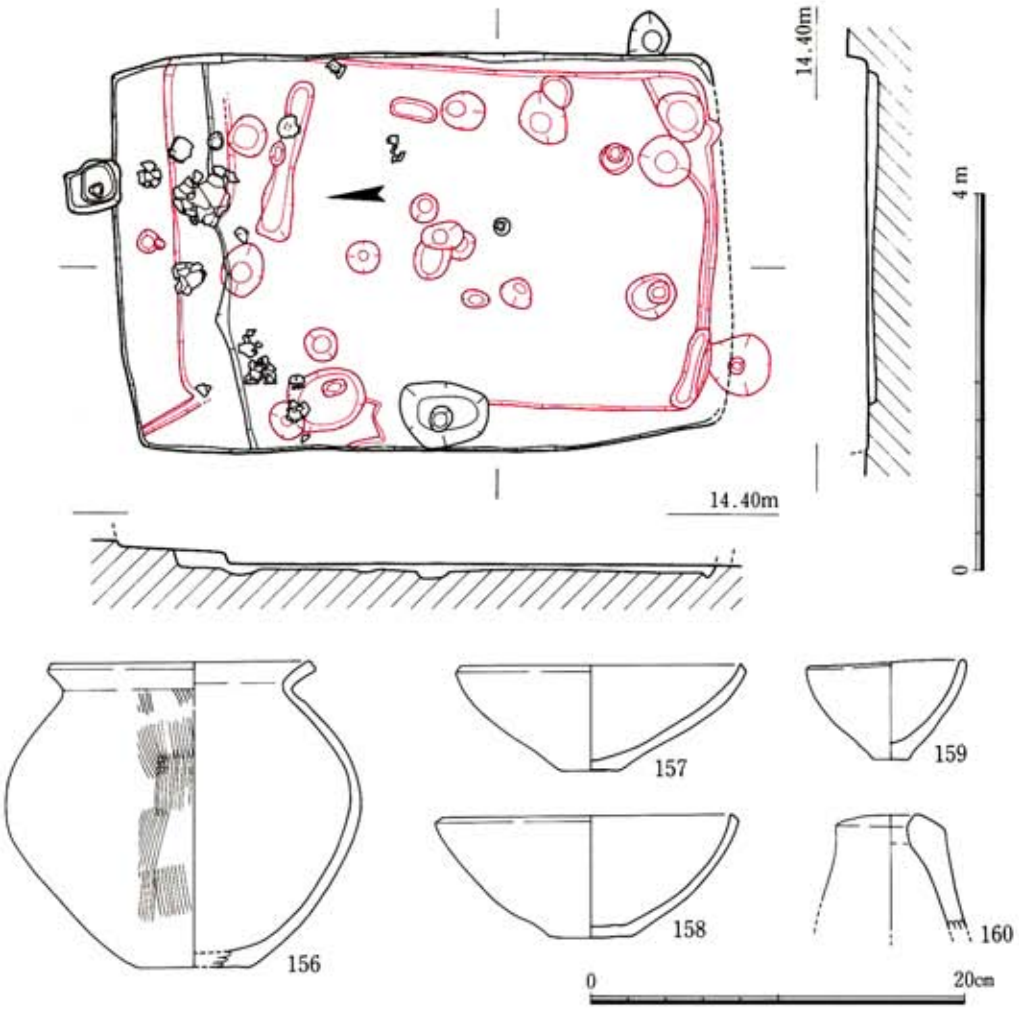


Fig. 23　SB095竪穴住居（1/80）、出土遺物①（1/4）

SB093竪穴住居（Fig. 22）

調査区中央北東寄りに位置する。SB095竪穴住居より古く、古代のSB094竪穴住居と重複する。平面形は短辺がやや張り出す長方形である。長軸7. 13m、短軸4. 43mを測る。主軸はN78°Eである。主柱穴と炉は不明である。周溝は北西隅で途切れているが、全辺にめぐっているものと考えられる。南西隅にベッド状遺構、南辺やや東よりに壁際土壙がある。

129・130はミニチュアの鉢である。**129**は口径7. 3cm、器高3. 3cm、**130**は口径8. 4cm、器高7. 0cmである。**131～155**はガラス小玉である。0. 3～0. 4cmで、紺色の色調が圧倒的に多い。

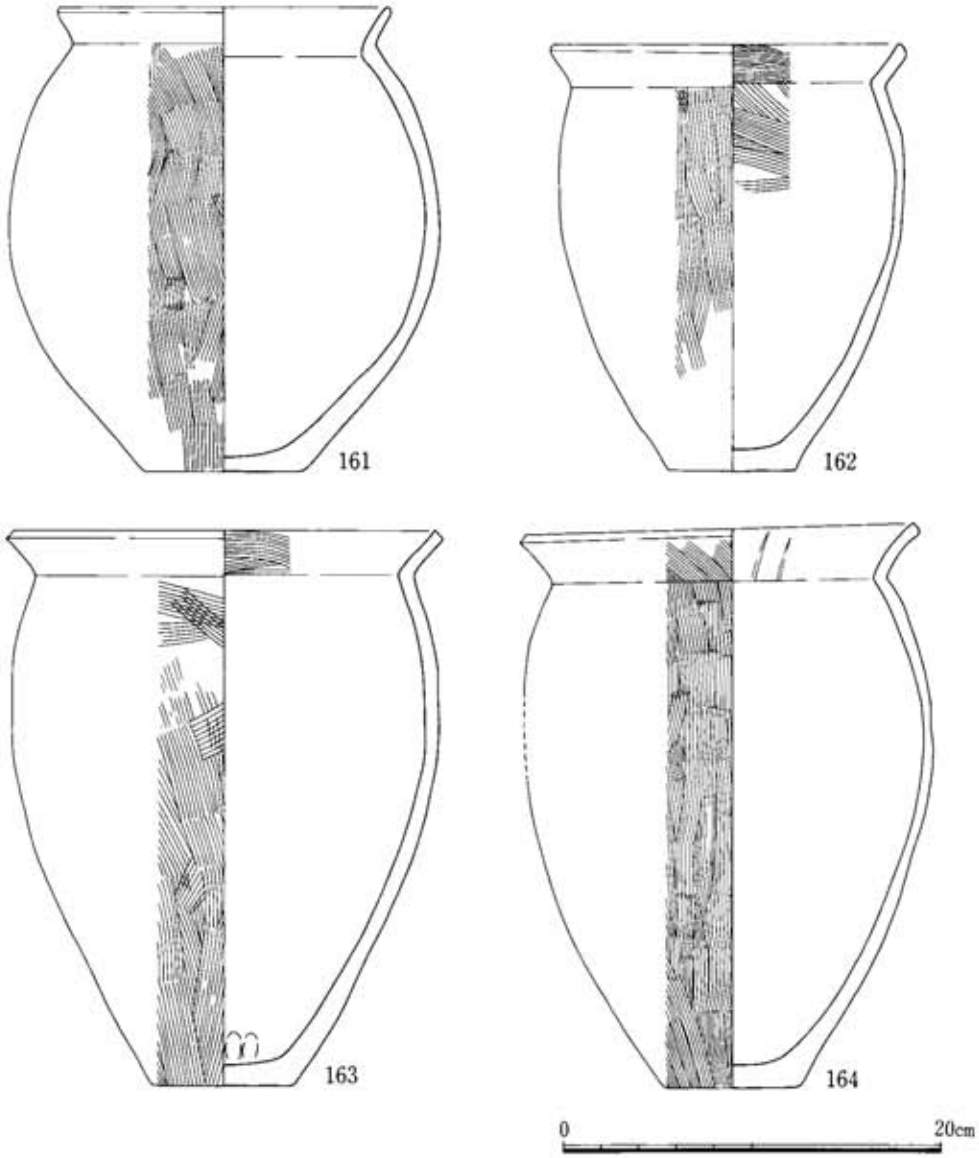


Fig. 24　SB095竪穴住居出土遺物②（1/4）

SB095竪穴住居（Fig. 23・24）

調査区中央北東寄りに位置する。SB093・096竪穴住居、SB195掘立柱建物より新しく、古代のSB094竪穴住居と重複する。１回建て替えがある。建て替え前は平面長方形で、長軸5.72m、短軸3.47mを測る。主軸はN６°Eである。中央に炉があるものと考えられ、南辺に周溝がめぐる。北東隅にベッド状遺構があった可能性がある。建て替え後は南壁が確認されていないが、平面長方形で、長軸約6.45m、短軸4.18mを測る。主軸はN５°Eである。北辺にベッド状遺構、西辺ほぼ中央に壁際土壙がある。いずれも主柱穴は明確ではない。

156は広口壺で、底部はやや不安定な平底である。胴部下半部にケズリがみられる。口径13.7cm、器高16.2cmを測る。**157**は直口縁の鉢で、底部は平底である。復原口径14.8cm、器高5.6cmを測る。**158**も直口縁の鉢で、底部はやや不安定な平底である。口径15.cm、器高6.6cmである。**159**はミニチュアの鉢で、口径8.3cm、器高5.3cmである。**160**は支脚である。**161**は壺か甕か判断に迷う。煤の付着はみられない。底部平底で、復原口径17.6cm、器高24.5cmを測る。**162～164**はく字状口縁の甕である。**162**は底部はやや不安定な平底で、口径18.0cm、器高22.6cmを

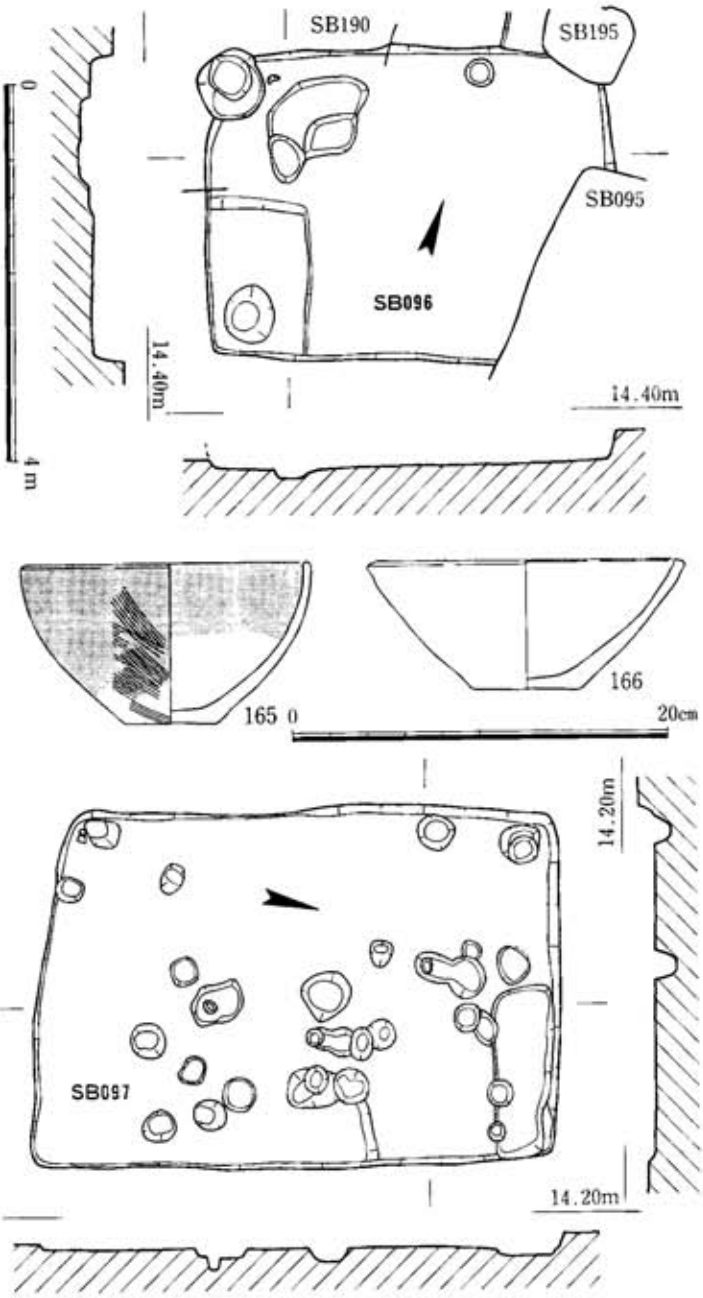


Fig. 25　SB096・097竪穴住居（1/80）、出土遺物（1/4）

測る。胴部外面下半部はケズリである。**163**は底部平底で、口径20.3cm、器高29.9cmを測る。**164**は底部やや不安定な平底で、復原口径22.3cm、器高29.4cmを測る。口縁部内面にハケメ起点の痕跡が残っている。

SB096竪穴住居（Fig.25）

調査区中央北東に位置する。SB095・190竪穴住居、SB195掘立柱建物より古い。平面形は長方形で、長軸4.2m、短軸3.26mを測る。主軸はN70°Eである。主柱穴と炉は不明である。南西隅にベッド状遺構がみられる。SB190竪穴住居との切合で明確ではないが、西辺全体にベッド状遺構があった可能性がある。

165・166は直口縁で、平底の鉢である。**165**はやや深めの形態で、内外面に丹塗りが施される。口径14.8cm、器高8.5cmを測る。**166**は復原口径15.9cm、器高6.9cmを測る。

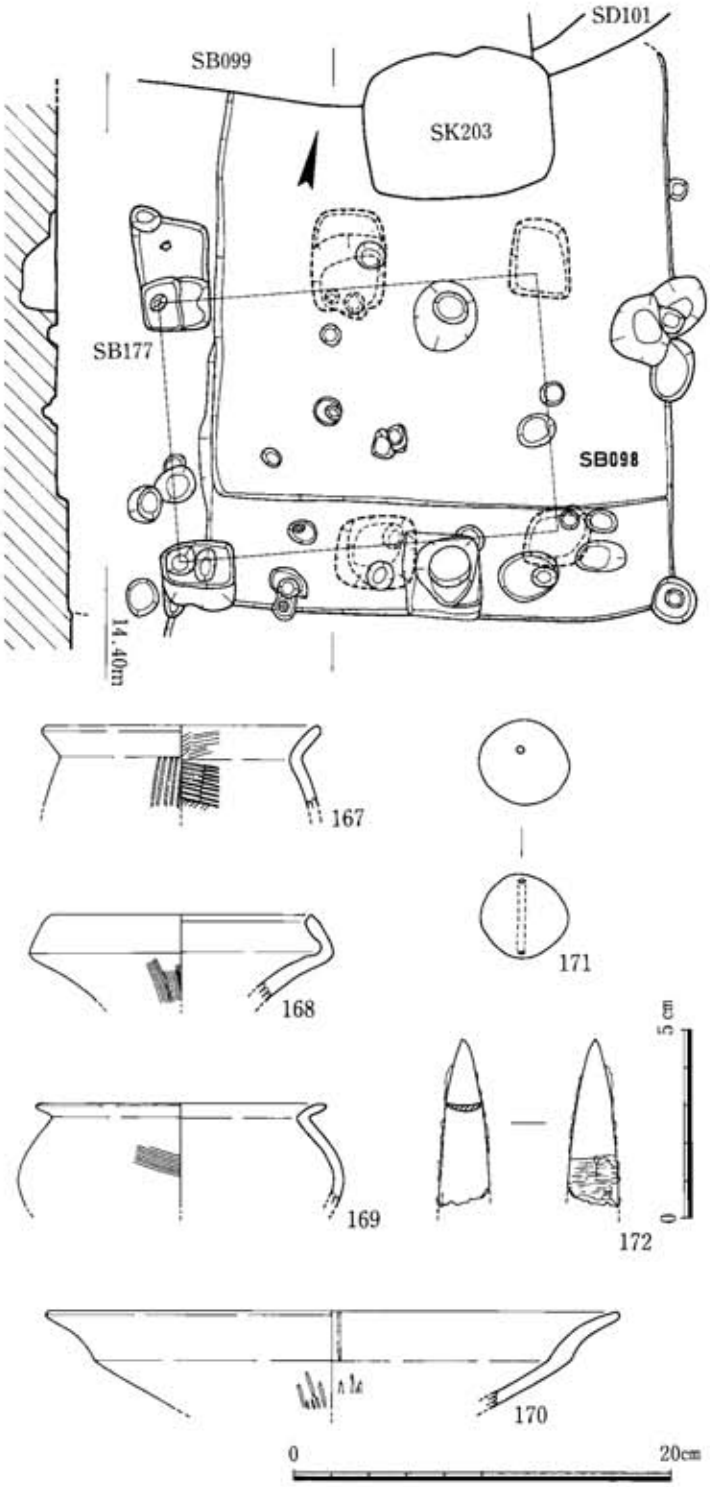


Fig.26　SB098竪穴住居（1/80）、出土遺物（171・172：1/2、他：1/4）

SB097竪穴住居

(Fig. 25)

調査区東側中央に位置する。平面形は南辺がやや不整形な長方形である。長軸5.46m、短軸3.62m、面積19.32㎡を測る。主軸はN75°Eである。2本主柱で、ほぼ中央に炉がある。

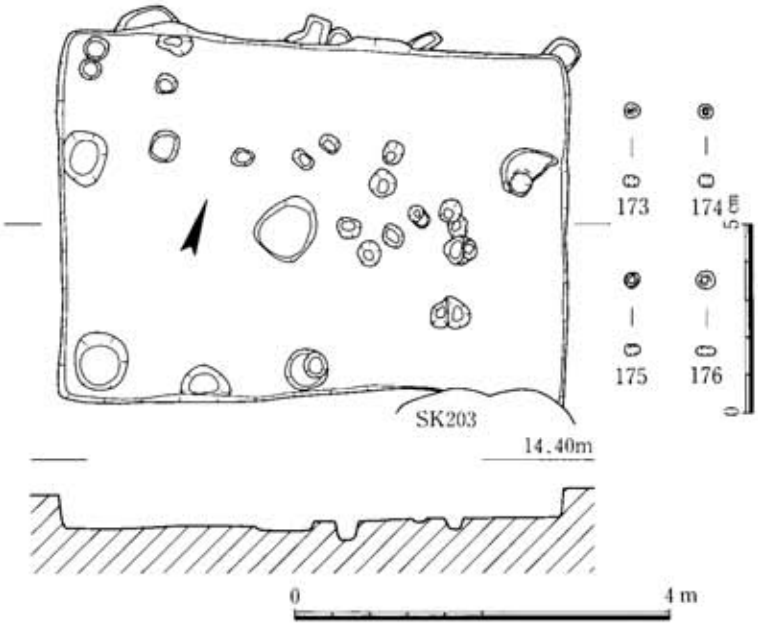


Fig. 27　SB099竪穴住居（1/80）、出土遺物（1/2）

SB098竪穴住居

(Fig. 26)

調査区東側中央に位置する。SB177掘立柱建物より新しく、SB099竪穴住居より古い。中世のSD101溝、SK203土壙と重複する。平面形は長方形と推定され、短軸4.75mである。主軸はN11°Wである。南辺に貼床によるベッド状遺構がある。中央に炉か。

167はく字状口縁の甕で、復原口径14.4cmと小型である。**168**は複合口縁壺で、復原口径13.7cmである。**169**は無頸壺で、復原口径14.8cmである。**170**は高坏の坏部で、復原口径30.2cmである。坏部内外面に暗文的なヘラミガキが施される。口縁部内面に暗文が施されている可能性がある。

171は土玉で、径2.4cmである。中央からややずれて径0.2cmの孔が開けられている。

172は鉄鉋で、断面弧状を呈する。残存長4.5cm、幅1.4cm、厚さ0.15cmである。表面に樹皮状のものが遺存している。

SB099竪穴住居（Fig. 27）

調査区東側中央に位置する。SB098竪穴住居より新しい。古代のSB200掘立柱建物、中世のSD101溝、SK203土壙、SP202土壙墓と重複する。平面形は長方形である。長軸5.3m、短軸3.84m、面積19.49㎡を測る。主軸はN71°Eである。主柱穴は不明確で、中央やや西寄りに炉がある。

173～176はガラス小玉である。**173・175**は淡青色、**174・176**は紺色である。

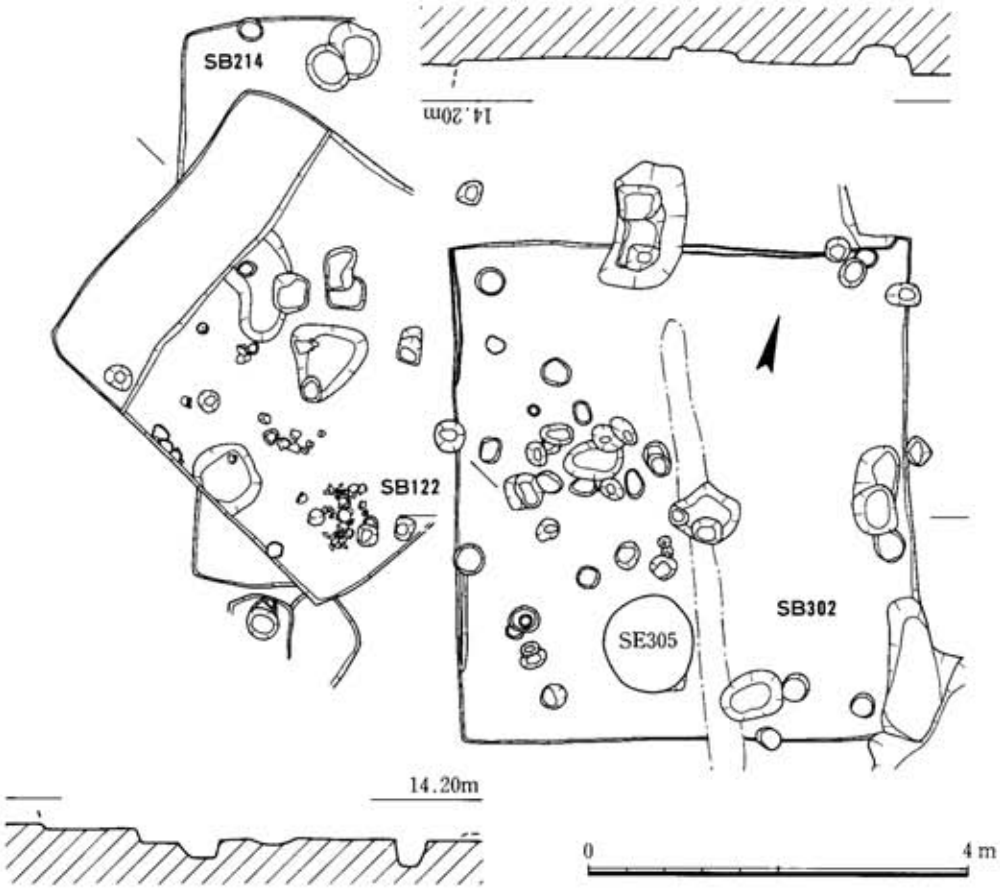


Fig. 28　SB122・214・302竪穴住居（1/80）

SB122竪穴住居（Fig. 28・29）

調査区東端に位置する。ボックス部分との境界にあり、全体の形状はやや不明瞭である。SB214竪穴住居より新しい。SB302竪穴住居との新旧関係は不明であるが、SB122竪穴住居が新しいと推定される。南東辺にもベッド状遺構があるものと考えられ、平面形は長方形と推定される。短軸は3.66mを測る。主軸はN61°Wであり、他の住居と大きく異なる。2本主柱である。中央に炉、北西辺にベッド状遺構、南西辺ほぼ中央に壁際土壙がある。

177はミニチュアの鉢で、口径8.0cm、器高4.7cmである。指頭圧痕を明瞭に残す。**178**は支脚で、裾径11.2cm、器高9.4cmである。**179・180**は直口縁の鉢である。**179**は口径14.7cmである。**180**は深めの器形で、底部は凸レンズ状底である。口径15.3cm、器高8.0cmである。**181**は口径23.8cm、器高15.4cmを測る大型の直口縁の鉢である。底部は不安定な平底で、胴部外面下半部はケズリである。**182**はく字状口縁の甕で、復原口径24.8cmである。**183**は短く直立気味の口縁部をもつ高坏で、口径31.3cmを測る。**184**は壺で、底部は凸レンズ状底である。頸部に三角突

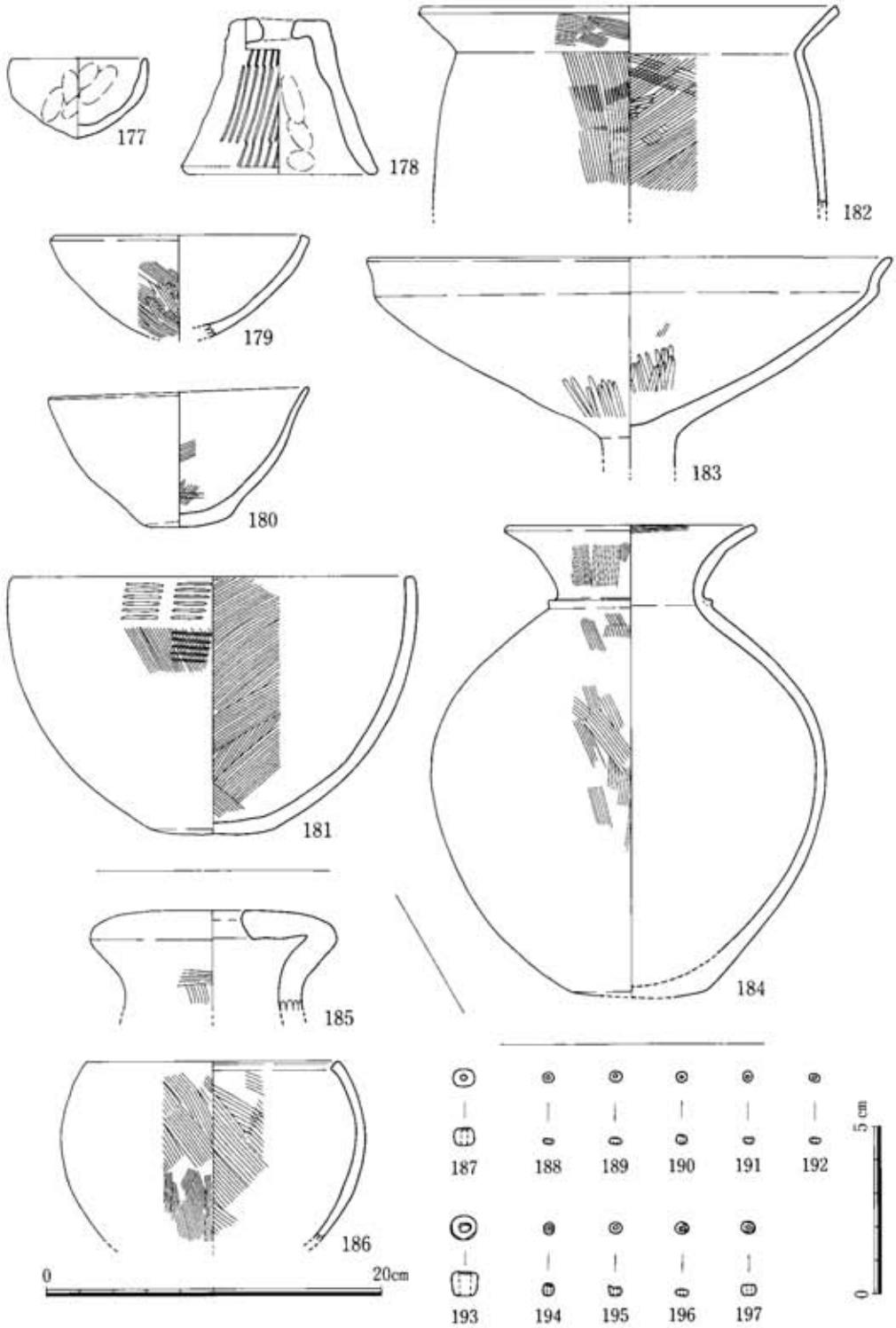


Fig. 29　SB122・302竪穴住居出土遺物（177～186：1/4、187～197：1/2）

帯が1条めぐる。胴部外面下半部はケズリである。

SB214竪穴住居（Fig. 28）

調査区東端に位置する。SB122竪穴住居より古い。大部分は削平されており、平面形は不明であるが、ボックス部分の調査の際に床面と考えられる部分が検出されている。南北軸は6.0

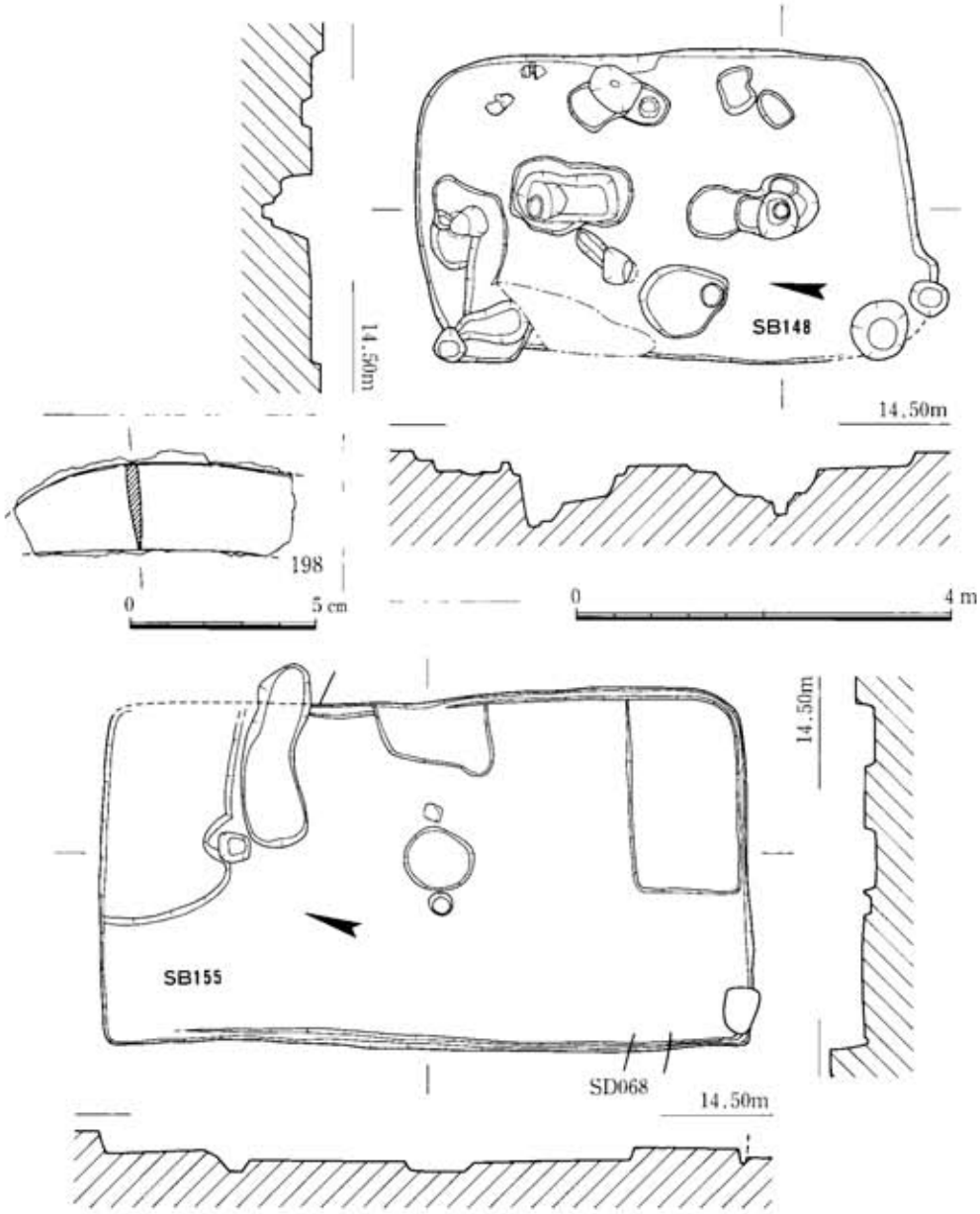


Fig. 30　SB148・155竪穴住居（1/80）、出土遺物（1/2）

mを測る、主軸はN12° Wである。

SB302竪穴住居

(Fig. 28・29)

調査区東端に位置する。SB122竪穴住居、時期不明のSE305井戸より古いと考えられる。平面形は方形に近い長方形である。長軸5.21m、短軸4.77m、面積約24.73m²を測る。主軸はN15° Wである。主柱穴は不明で、中央に炉がある。東辺ほぼ中央の土壙が壁際土壙になる可能性がある。北辺と西辺に周溝が途切れ途切れにめぐる。

185は支脚である。**186**は球状胴部をもつ直口縁の鉢である。口径15.2cmを測る。**187**～**197**はガラス小玉である。

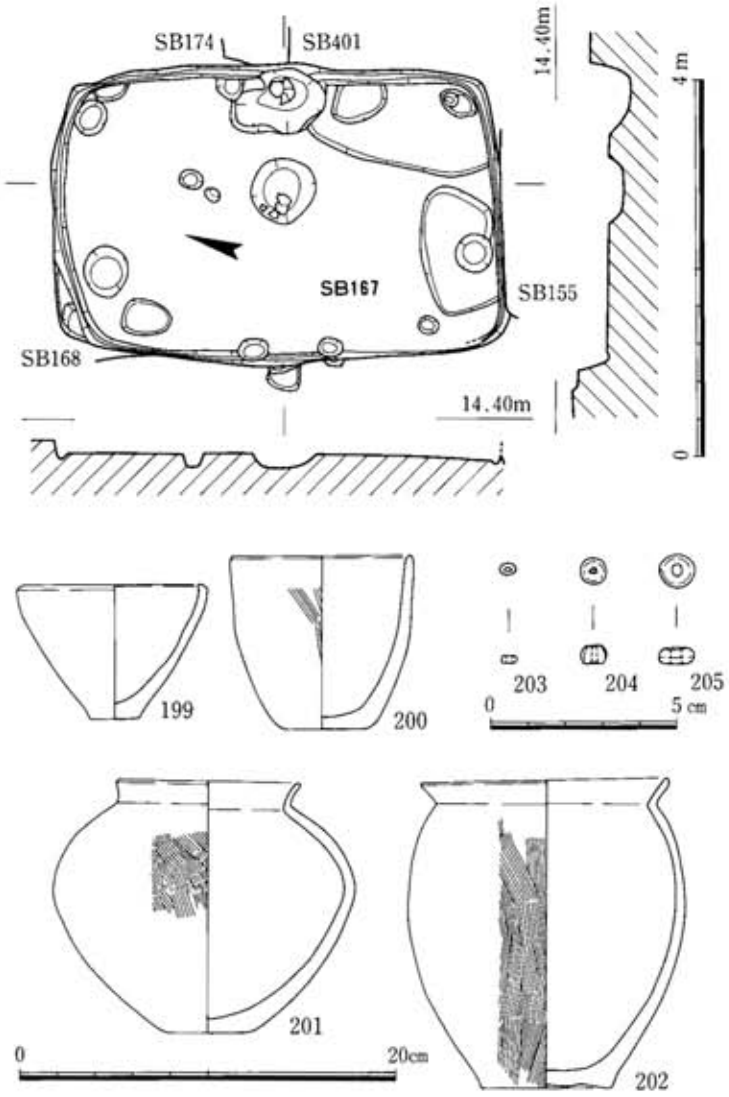


Fig. 31 SB167竪穴住居 (1/80)、出土遺物 (203～205：1/2、他：1/4)

SB148竪穴住居 (Fig. 30)

調査区中央北東寄りに位置する。平面形は隅丸長方形で、長軸5.25m、短軸3.25m、面積約15.76m²を測る。主軸はN 7° Wである。2本主柱で、径9、16cmの柱痕跡が確認される。

SB155竪穴住居 (Fig. 30)

調査区中央北寄りに位置する。SB156・167・401竪穴住居より新しく、古代のSB171掘立柱建物、中世のSD068溝と重複する。平面形は細長い長方形である。長軸6.9m、短軸3.8m、面積約25.0m²を測る。主軸はN17° Wである。北東隅はCP部との境界で不明である。主柱穴は不明であり、中央に炉がある。西辺から南辺、東辺にかけて周溝がめぐる。北東隅と南東隅に

ベッド状遺構、東辺ほぼ中央に壁際土壙がある。

198は鉄鎌である。残存長7.6cm、幅2.4cm、厚さ0.3cmを測る。

SB167竪穴住居（Fig.31）

調査区中央北端に位置する。SB174・401竪穴住居より新しく、SB155・168竪穴住居より古い。平面形は長方形に近い隅丸長方形である。長軸4.68m、短軸3.06m、面積13.59㎡を測る。主軸はN17°Wである。主柱穴は不明で、中央やや東よりに炉がある。周溝がほぼ全辺にめぐり、東辺ほぼ中央に壁際土壙がある。

199はミニチュアの鉢で、口径9.4cm、器高7.2cmである。**200**は長胴の小型の鉢としておく。底部はやや不安定な平底である。口径9.4cm、器高9.3cmを測る。**201**は底部がやや不安定な平底の広口壺である。口径9.6cm、器高13.2cmを測る。胴部外面下半部はケズリである。**202**はく字状口縁の甕で、底部は平底である。口径13.1cm、器高13.5cmである。**203**～**205**はガラス小玉である。**205**は径は大きいが、平べったいので小玉としておく。

SB168竪穴住居（Fig.32・33）

調査区中央北端に位置する。住居北側が一部調査区外にある。SB165・167・174竪穴住居より新しい。平面形は隅丸長方形になるものと推定される。短軸3.41mを測り、主軸はN15°Wである。主柱穴や炉は不明である。北東隅にベッド状遺構がある。

206は中型の鍛造袋状鉄斧で、錆や剝離が著しく、本来の形態を知ることは難しい。全長5.5cm、袋部幅2.5cm、刃部幅3.1cmほどである。

207・**208**はく字状口縁の甕である。**207**は復原口径13.6cm、器高15.1cmで、底部はやや不安定な平底である。**208**は復原口径24.4cmである。**209**は支脚で、裾径10.6cm、器高10.5cmである。**210**は無頸壺で、底部は不安定な平底である。口径12.5cm、器高11.2cmを測る。外面に荒いヘラミガキを施す。**211**は長胴の鉢で、底部は不安定な平底である。口径12.8cm、器高10.6cmを測る。外面と内面上半部に縦方向のヘラミガキを施す。**212**～**214**は屈折口縁の鉢である。**212**は口径16.5cm、器高10.0cmを測る。底部は不安定な平底で、胴部外面下半部はケズリである。**213**は口径23.4cm、器高14.1cmを測る。底部平底である。**214**は復原口径27.4cmで、底部はやや不安定な平底になるか。**215**～**218**は複合口縁壺である。**215**は口径19.7cmで、頸部に三角突帯が2条めぐる。**216**は頸部に2条、胴部に1条三角突帯がめぐる。**217**は頸部に1条、胴部に2条の三角突帯がめぐり、底部は平底である。**218**は口径18.7cm、器高36.4cmで、底部やや不安定な平底である。頸部に三角突帯、胴部にコ字状突帯がそれぞれ1条めぐる。**219**・**220**は広口壺である。**219**は復原口径16.0cm、器高29.1cmで、底部は平底であるが、端部に丸みがある。**220**は口径17.4cm、器高27.9cmを測る。底部はやや不安定な平底で、胴部外面下半部はケズリである。

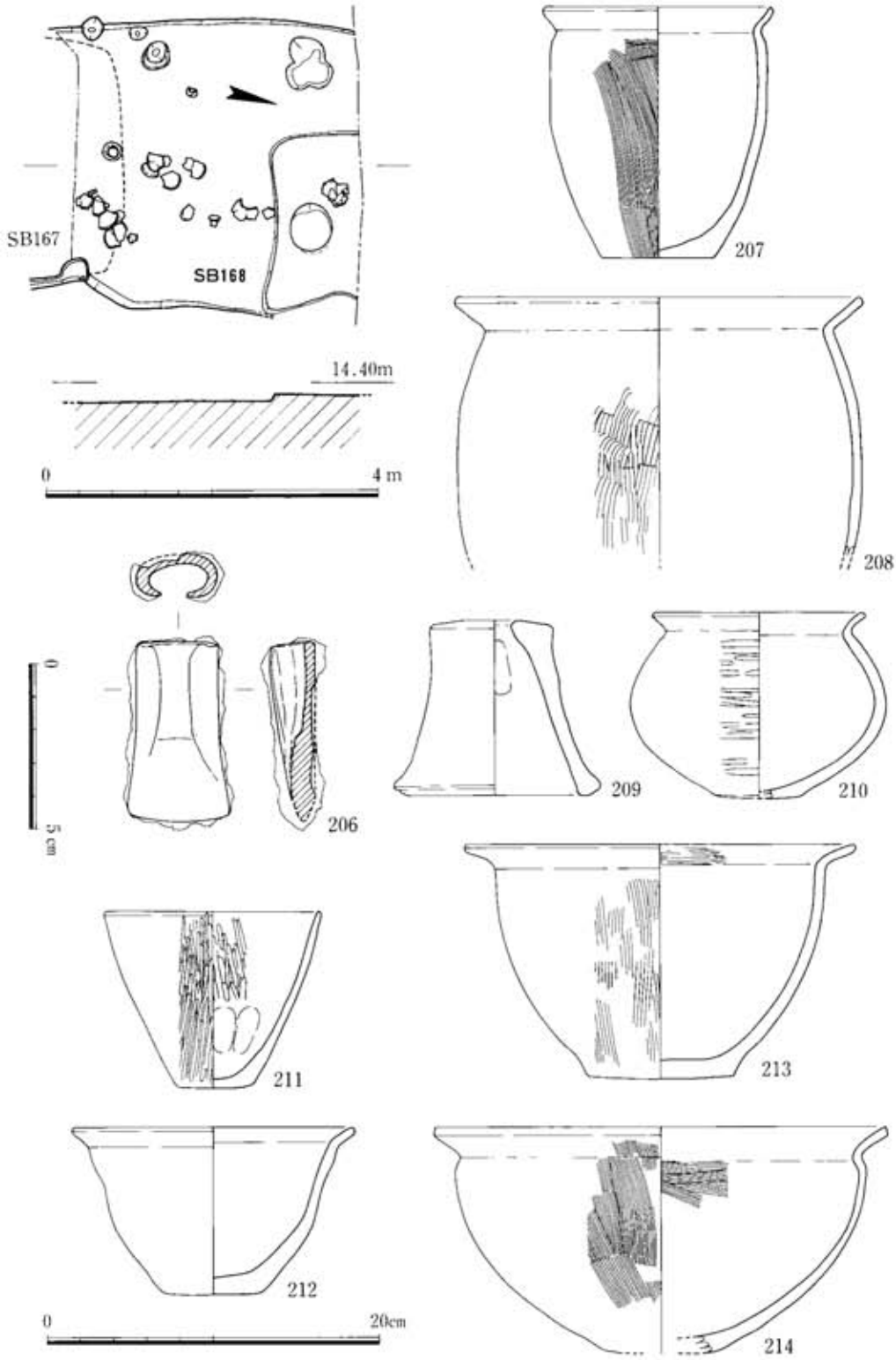


Fig. 32　SB168竪穴住居（1/80）、出土遺物①（206：1/2、他：1/4）

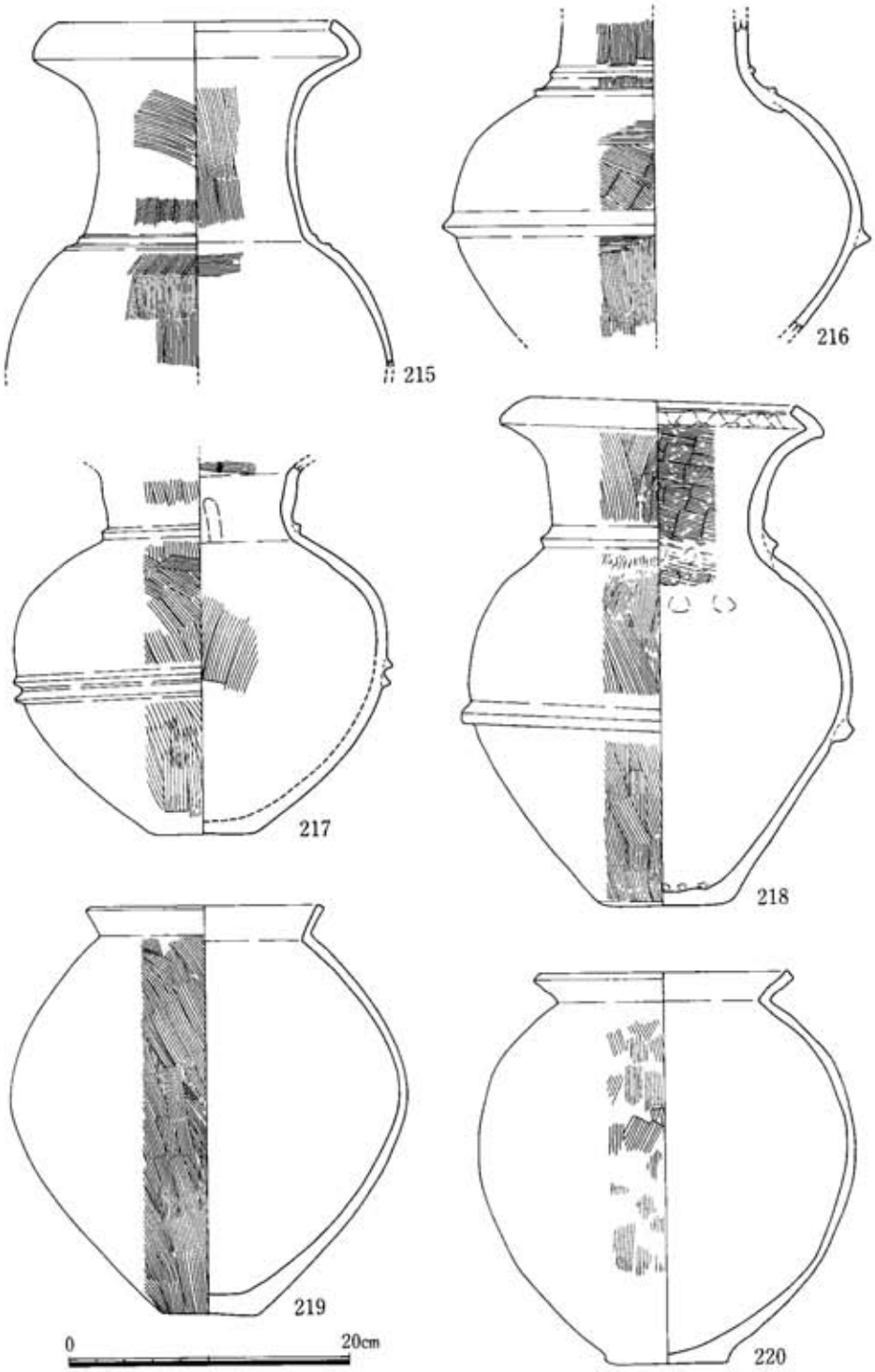


Fig. 33　SB168竪穴住居出土遺物②（1/5）

SB190竪穴住居（Fig. 34）

調査区中央北東に位置する。SB096竪穴住居より新しく、古代のSB186竪穴住居と重複する。平面形はやや不整形な隅丸長方形になるものと推測される。短軸3.2mを測る。主軸はN12° Wである。2本主柱で、中央に炉がある。周溝が東辺と西辺にめぐり、西辺ほぼ中央に壁際土壙がある。

221は無頸壺で、底部は不安定な平底である。口径13.5cm、器高14.9cmを測る。**222**はく字状口縁の甕で、底部平底である。口径15.6cm、器高23.5cmを測る。

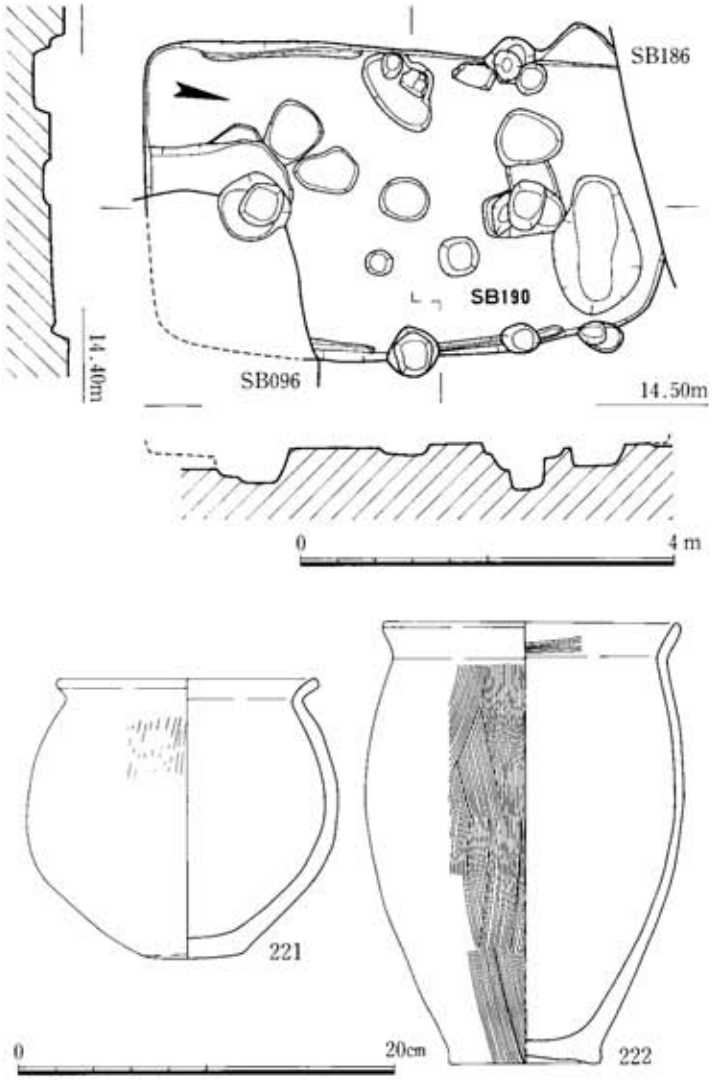


Fig. 34　SB190竪穴住居（1/80）、出土遺物（1/4）

SB204竪穴住居（Fig. 35）

調査区北東に位置する。SB205竪穴住居、時期不明のSD187溝より古い。SB223掘立柱建物との新旧関係は不明である。平面形は長方形で、長軸5.54m、短軸3.18m、面積約16.82㎡を測る。主軸はN11° Wである。主柱穴は不明確で、中央に炉がある。切合で不明瞭であるが、北辺にベッド状遺構がある。

SB205竪穴住居（Fig. 35）

調査区北東に位置する。SB204竪穴住居より新しく、SD187溝より古い。SB223掘立柱建物との新旧関係は不明である。平面形は長方形である。長軸5.96m、短軸4.0m、面積約23.35㎡を測る。主軸はN12° Wである。主柱穴、炉は不明確である。

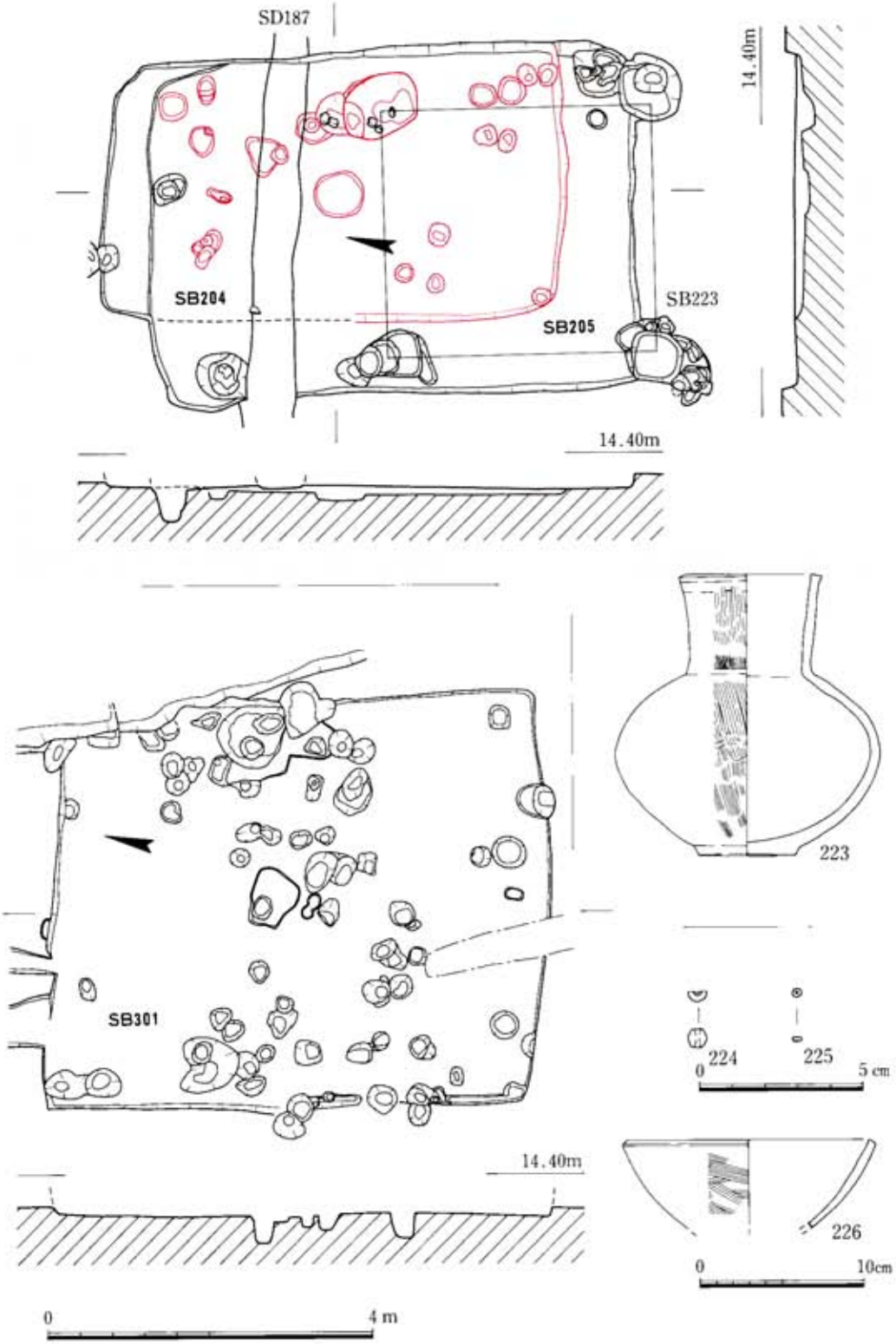


Fig. 35　SB204・205・301竪穴住居（1/80）、出土遺物（223・226：1/4、224・225：1/2）

223は長頸壺で、口径7.6cm、器高17.1cmを測る。底部は平底であるが、端部が丸みを帯び、ハケメが施される。

SB301竪穴住居（Fig.35）

調査区北東隅に位置する。平面形は長方形で、長軸6.02m、短軸4.98mを測る。主軸はN13°Wである。主柱穴は不明で、中央に炉か。西辺南側に周溝がある。東辺中央やや北よりに壁際土壙か。

224は切子玉で、約半分を欠失する。長さ0.55cm、幅0.55cmを測る。**225**はガラス小玉で、淡青色である。**226**は直口縁の鉢で、復原口径14.8cmである。

SB401竪穴住居（Fig.36）

調査区中央北寄りに位置する。SB155・167竪穴住居より古い。平面形はやや不整形な隅丸長方形になるものと考えられる。長軸5.92m、短軸4.74mを測り、主軸はN71°Eである。主柱穴は不明で、中央やや南寄りに炉がある。

227・228はガラス小玉で、いずれも紺色である。

SB405竪穴住居（Fig.36）

調査区中央やや北寄りに位置する。古代のSB171掘立柱建物と重複する。平面形は細長い長方形で、長軸6.17m、

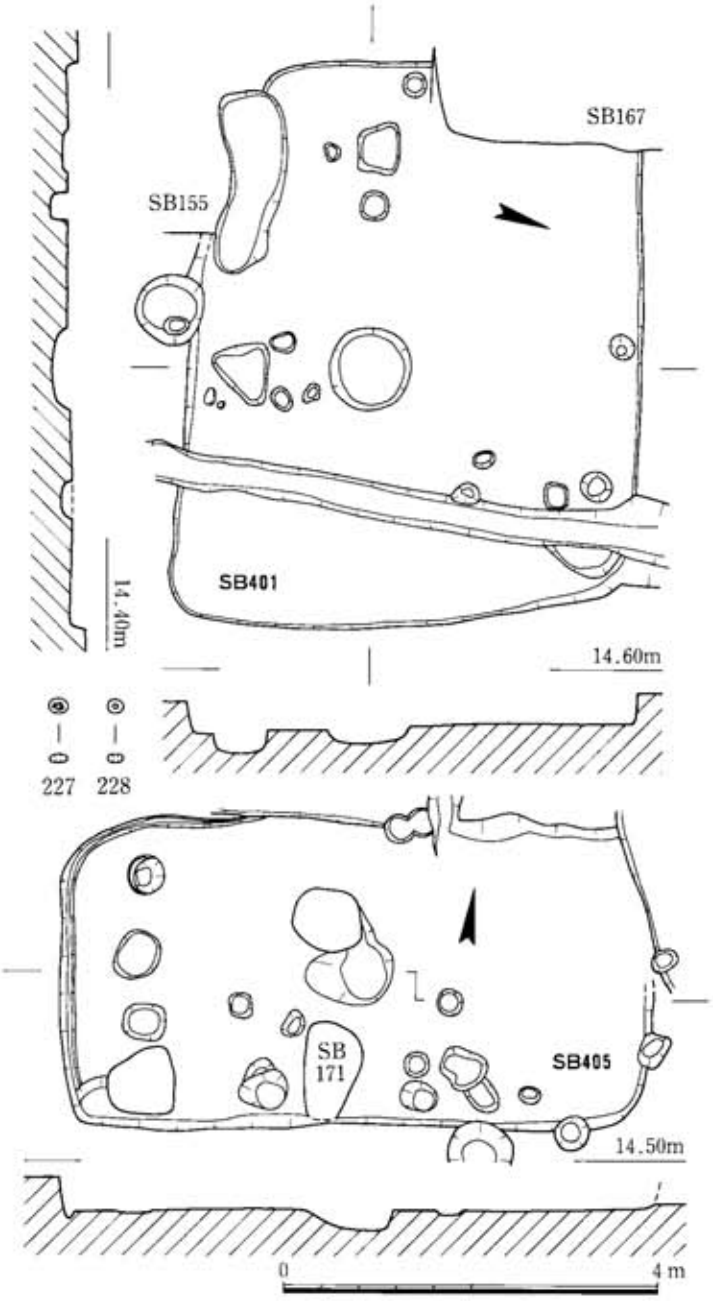


Fig.36　SB401・405竪穴住居（1/80）、出土遺物（1/2）

短軸3.17mを測る。主軸はN84°Eである。主柱穴は不明確で、中央に炉がある。北西隅から西辺に周溝がめぐる。

SB418竪穴住居（Fig.37・38）

調査区中央南寄りに位置する。古代のSB021掘立柱建物、中世のSB050掘立柱建物、SK025土壙と重複する。平面形はやや不整形な長方形で、長軸5.15m、短軸約3.9mである。主軸はN15°Wである。主柱穴は不明確で、中央に炉か。北東隅から北辺に途切れ途切れに周溝がめぐる。東辺やや北寄りに壁際土壙か。

229・230はガラス小玉である。**231**は石包丁で、残存長7.4cm、幅4.9cm、厚さ0.6cmである。灰白色の泥岩系統の石材である。

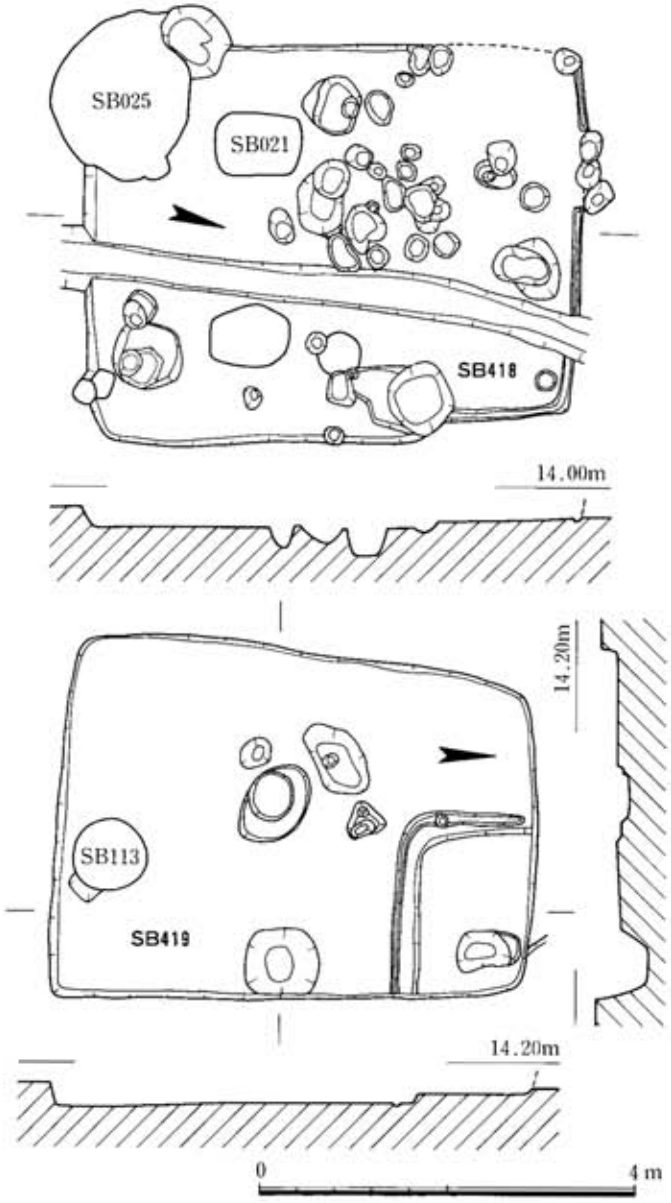


Fig.37　SB418・419竪穴住居（1/80）

SB419竪穴住居

（Fig.37・38）

調査区中央やや東寄りに位置する。SB089竪穴住居より新しく、古代のSB113掘立柱建物と重複する。平面形はやや不整形の長方形である。長軸4.98m、短軸3.7m、面積14.42m²を測る。主軸はN1°Wである。主柱穴は不明で、中央に炉がある。北東隅にベッド状遺構があり、それにそって周溝がある。東辺ほぼ中央に壁際土壙がある。

232は器台で、復原受け部径15.5cm、裾径16.6cm、器高

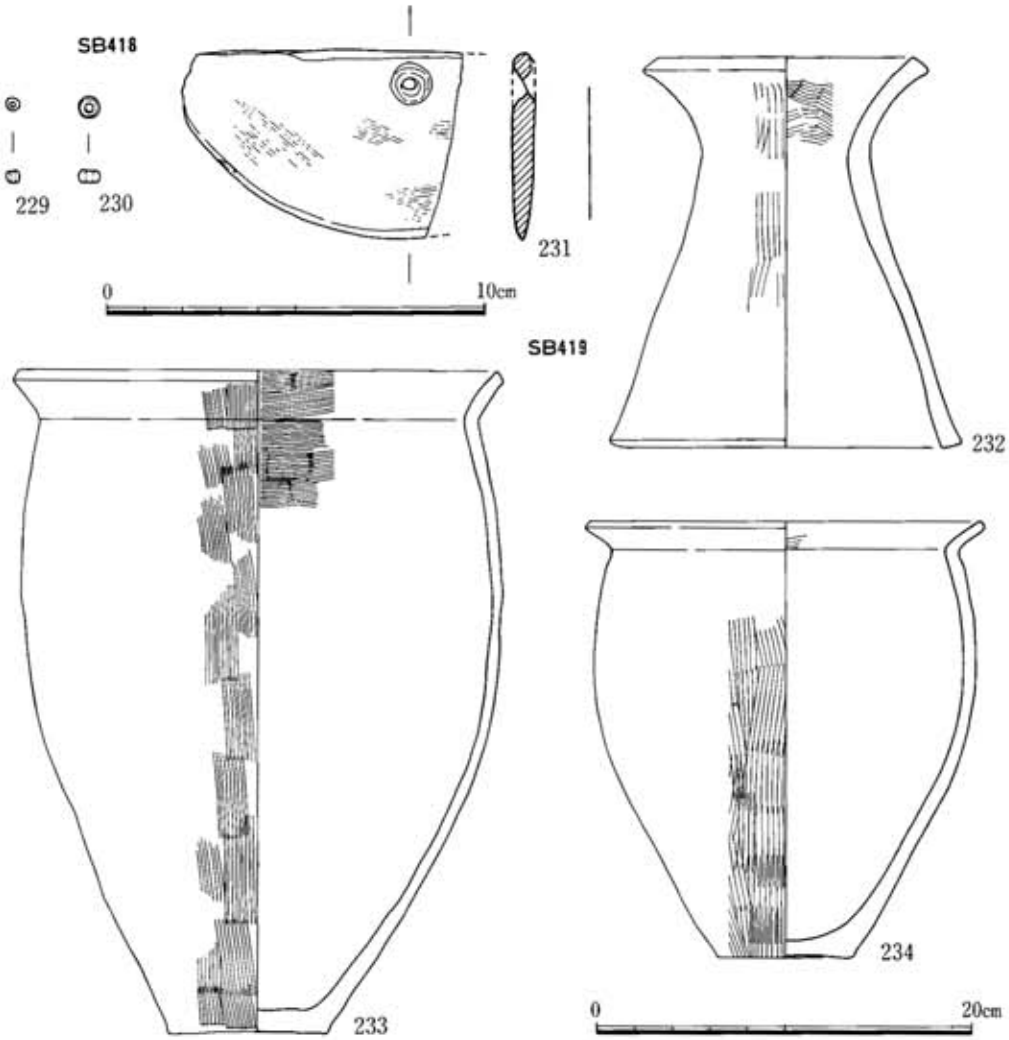


Fig. 38　SB418・419竪穴住居出土遺物（229～231：1/2、他：1/4）

20.7cmを測る。**233・234**はく字状口縁の甕で、いずれも平底である。**233**は口径25.1cm、器高35.0cmを測る。**234**はやや口縁部の屈曲が強い。復原口径21.2cm、器高23.2cmを測る。

2. 掘立柱建物

弥生時代の掘立柱建物は25棟確認され、20棟図示した。構造は1間×1間のものが12棟と1間×2間が13棟である。このうち特徴的なものとして、1間×2間の構造のSB079掘立柱建物には棟持柱がみられることがあげられる。なお、図示していないものも含め、一覧表(Tab. 3)にまとめている。

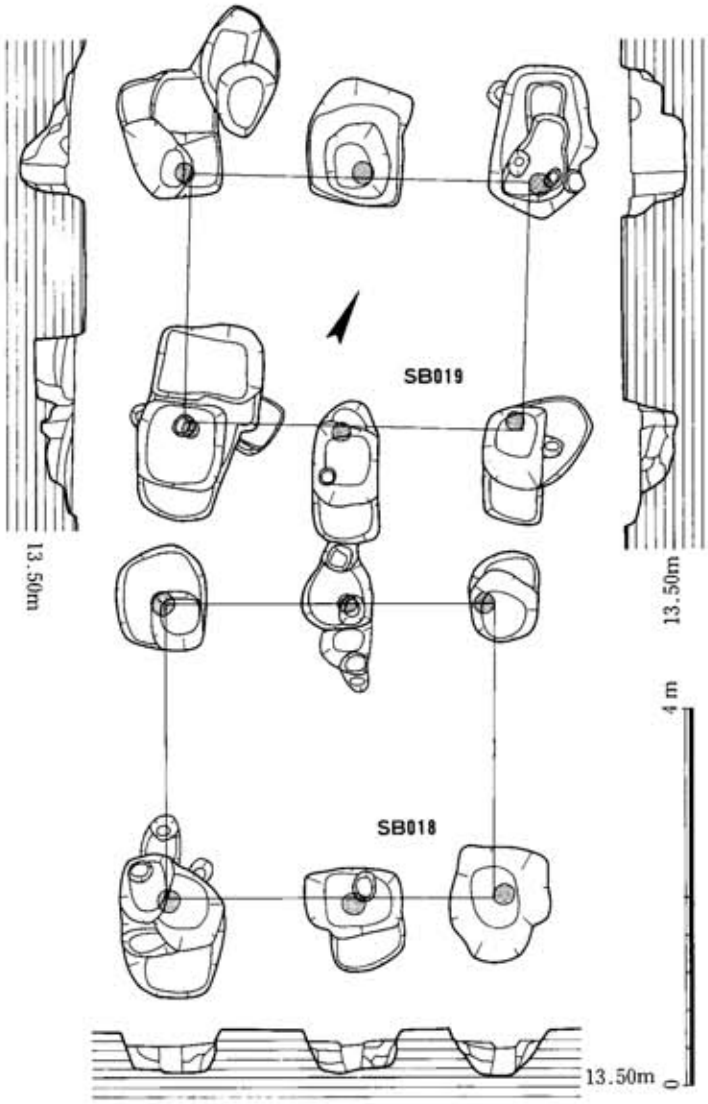


Fig. 39　SB018・019掘立柱建物（1/80）

SB018掘立柱建物

（Fig. 39）

調査区南西に位置する。SB019掘立柱建物とほぼ軸をそろえて並んでおり、同時に建っていた可能性が高い。構造は1間×2間で、梁 行3.13m、桁 行3.5mである。主軸はN61° Eである。柱の掘形は0.8×1.0mほどの隅丸長方形を基本としているが、不整形のものが多い。一部の柱穴に2段掘りがみられる。埋土は基本的に黒色土である。柱痕跡は径16～26cmである。

SB019掘立柱建物

（Fig. 39・43）

調査区南西に位置する。SB018掘立柱建物と並んでいる。構造は1間×2間で、梁 行2.63m、桁 行3.6mである。主軸はN63° Eである。柱の掘形は0.7×1.1mほどの隅丸長方形で、2段掘りを基本としているが、不整形なものが多い。埋土は暗褐色土と黒褐色土で、一部は版築状になっている。柱痕跡は径18～24cmである。

235はく字状口縁の甕で、復原口径25.0cmである。

SB042掘立柱建物（Fig. 40）

調査区南東に位置する。SB052竪穴住居、SB220掘立柱建物より新しく、古代のSB035竪穴住居と重複する。構造は1間×2間で、梁行3.2m、桁行4.76mである。主軸はN82° Eである。柱の掘形は0.8×1.2mほどの隅丸長方形で、2段掘りを基本としている。P2には礎石がみら

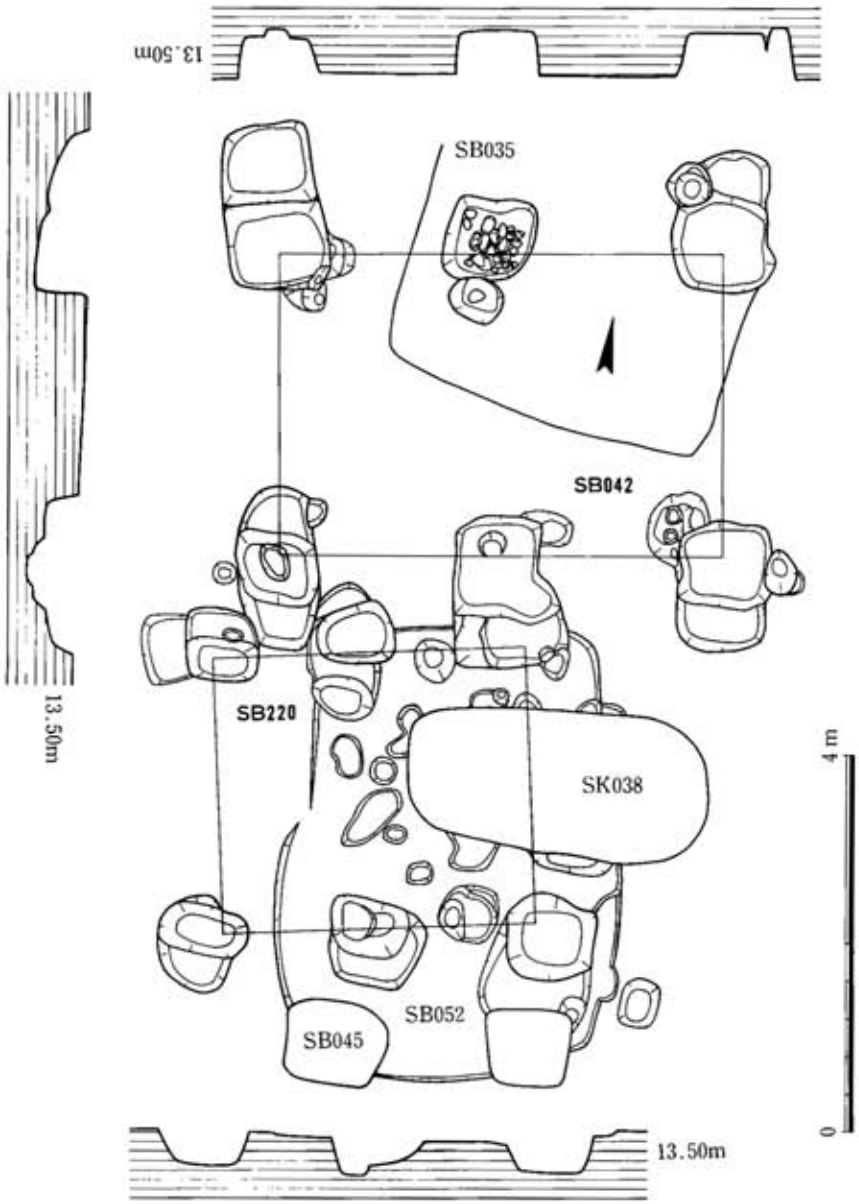


Fig. 40　SB042・220掘立柱建物（1/80）

れる。柱痕跡は確認されていない。

236は複合口縁壺で、復原口径11.5cmである。

SB220掘立柱建物（Fig. 40・43）

調査区南東に位置する。SB052竪穴住居より新しく、SB042掘立柱建物より古い。構造は1間×2間で、梁行2.92m、桁行3.32mである。主軸はN80°Eである。柱の掘形は一辺0.7mほ

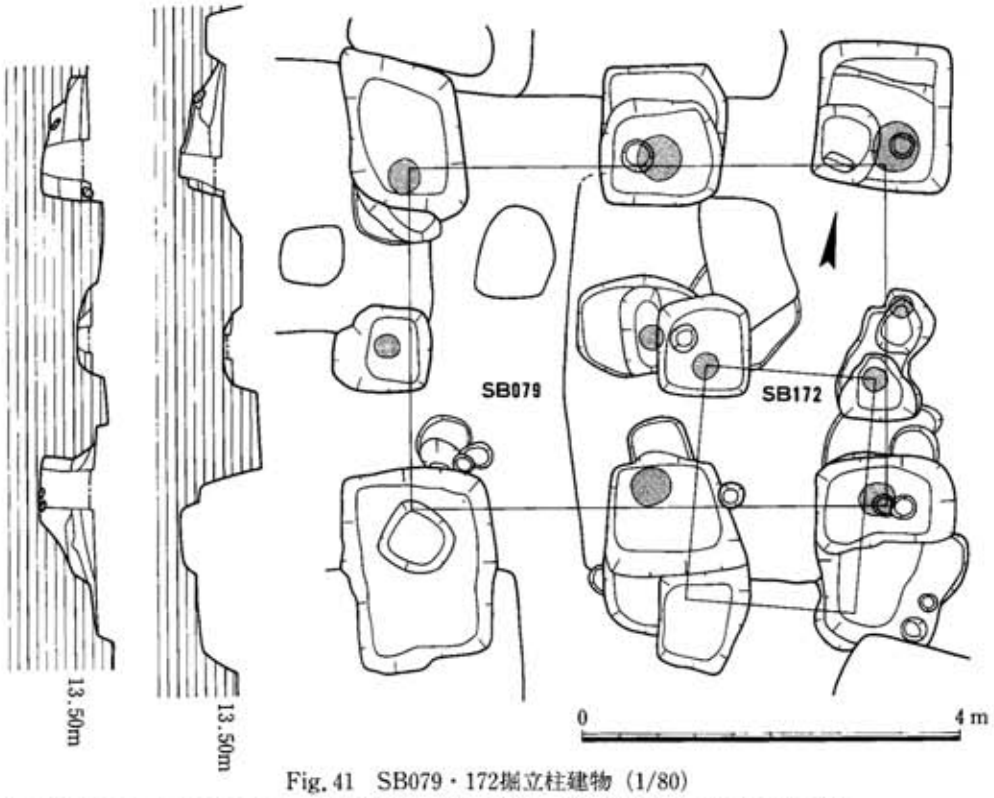


Fig. 41　SB079・172掘立柱建物（1/80）

どの隅丸方形を基本とするが、不整形なものが多い。柱痕跡は確認されていない。

SB079掘立柱建物（Fig. 41）

調査区南東に位置する。SB076・040竪穴住居、SB117掘立柱建物より新しく、古代のSB077竪穴住居、中世のSD078溝と重複する。SB172掘立柱建物より新しいと考えられる。構造は、2間×2間の総柱のようにみえるが、中央の3ヶ所の柱の掘形や柱痕跡が他のものに比べて小さく、浅いことから、中央に棟持柱をもつ1間×2間の掘立柱建物と考えられる。梁行3.51m、桁行5.04mである。主軸はN80°Eである。柱の掘形は1.1×1.5mほどの隅丸長方形で、2段掘りを基本としている。現状の深さは0.6mほどである。埋土は暗褐色土と黒褐色土で、一部黄褐色土（地山土）と版築状になっている部分もある。柱痕跡は38～48cmである。棟持柱の掘形は一辺0.7mほどの隅丸方形が基本で、現状の深さ0.3mほどである。埋土は暗褐色土と黄褐色土である。柱痕跡は径25～27cmと小さい。

SB172掘立柱建物（Fig. 41・43）

調査区南東に位置する。古代のSB077竪穴住居と重複する。構造は1間×1間で、梁行1.8m、桁行2.48mである。主軸はN5°Wである。柱の掘形は一辺0.8cmを基本としているよう

で、埋土は黄褐色土と黒褐色土で、確認できる柱痕跡は径24cmである。

238はミニチュアで、復原口径4.5cm、器高5.6cmである。胴部に三角突帯が2条めぐる。

SB110掘立柱建物（Fig.42・43）

調査区東側中央に位置する。古代のSB087竪穴住居と重複する。SB117掘立柱建物とほぼ軸をそろえて並んでおり、同時に建っていた可能性が高い。構造は1間×2間で、梁行3.04m、

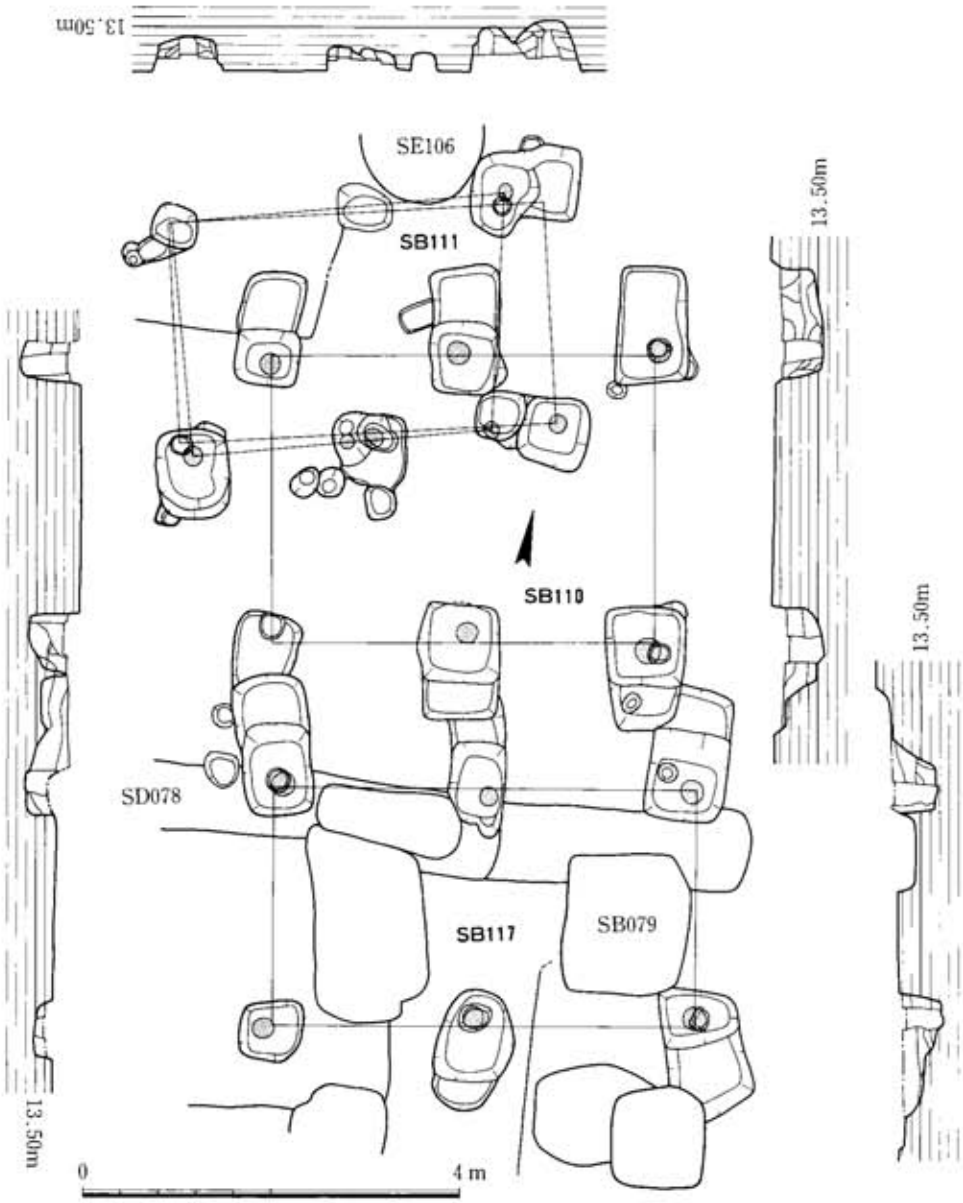


Fig.42　SB110・111・117掘立柱建物（1/80）

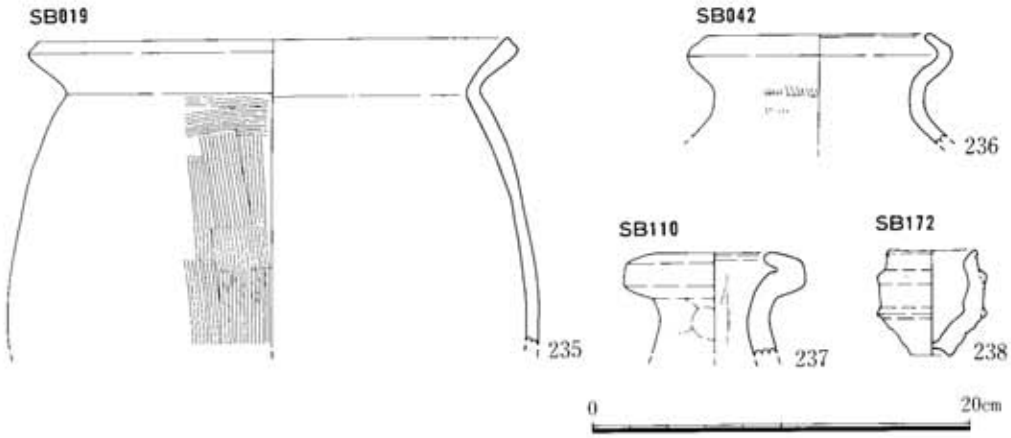


Fig. 43　掘立柱建物出土遺物（1/4）

桁行4.06mである。主軸はN78°Eである。柱の掘形は0.6×1.1mほどの長方形で、2段掘りを基本としている。埋土は基本的に暗褐色土と黒褐色土で、一部版築状になる部分がある。柱痕跡は径20～28cmである。

237は支脚である。

SB111掘立柱建物（Fig. 42）

調査区東側中央に位置する。古代のSB087竪穴住居と重複する。構造は1間×2間で、建て替えがある。建て替え前は梁行2.76m、桁行4.0mで、主軸はN75°Eである。建て替え後は梁行1.85mで、桁行は南辺が2.38m、北辺が2.68mといびつである。主軸はN73°Eである。柱の掘形は一辺0．5mほどの隅丸方形を基本としている。埋土は暗褐色土と黒褐色土、黄褐色土で、部分的に版築状になる。柱痕跡は建て替え前が径17～18cm、建て替え後が径14～19cmである。

SB117掘立柱建物（Fig. 42）

調査区南東に位置する。SB076竪穴住居より新しく、SB079・172掘立柱建物より古い。古代のSB077竪穴住居、中世のSD078溝と重複する。SB110掘立柱建物と並んでいる。構造は1間×2間で、梁行2.54m、桁行4.48mである。主軸はN78°Eである。柱の掘形は0.5×1.2mほどの隅丸長方形で、2段掘りを基本としている。埋土は暗褐色土が主体で、黒褐色土と黄褐色土で部分的に版築状になる。柱痕跡は径18～26cmである。

SB112掘立柱建物（Fig. 44）

調査区東側中央に位置する。古代のSB092掘立柱建物と重複する。構造は1間×1間で、梁行1.92m、桁行2.65mである。主軸はN14°Wである。柱の掘形は一辺0.5mほどの隅丸方形

を基本としている。埋土は暗～黒褐色土と黄褐色土である。柱痕跡は径14～18cmである。

SB126掘立柱建物（Fig. 44）

調査区東側中央に位置する。構造は１間×１間で、梁行2.7m、桁行3.12mである。主軸はN76° Eである。柱の掘形は一辺0.5mの隅丸長方形を基本としている。掘形の形状から柱が抜き取られている可能性がある。

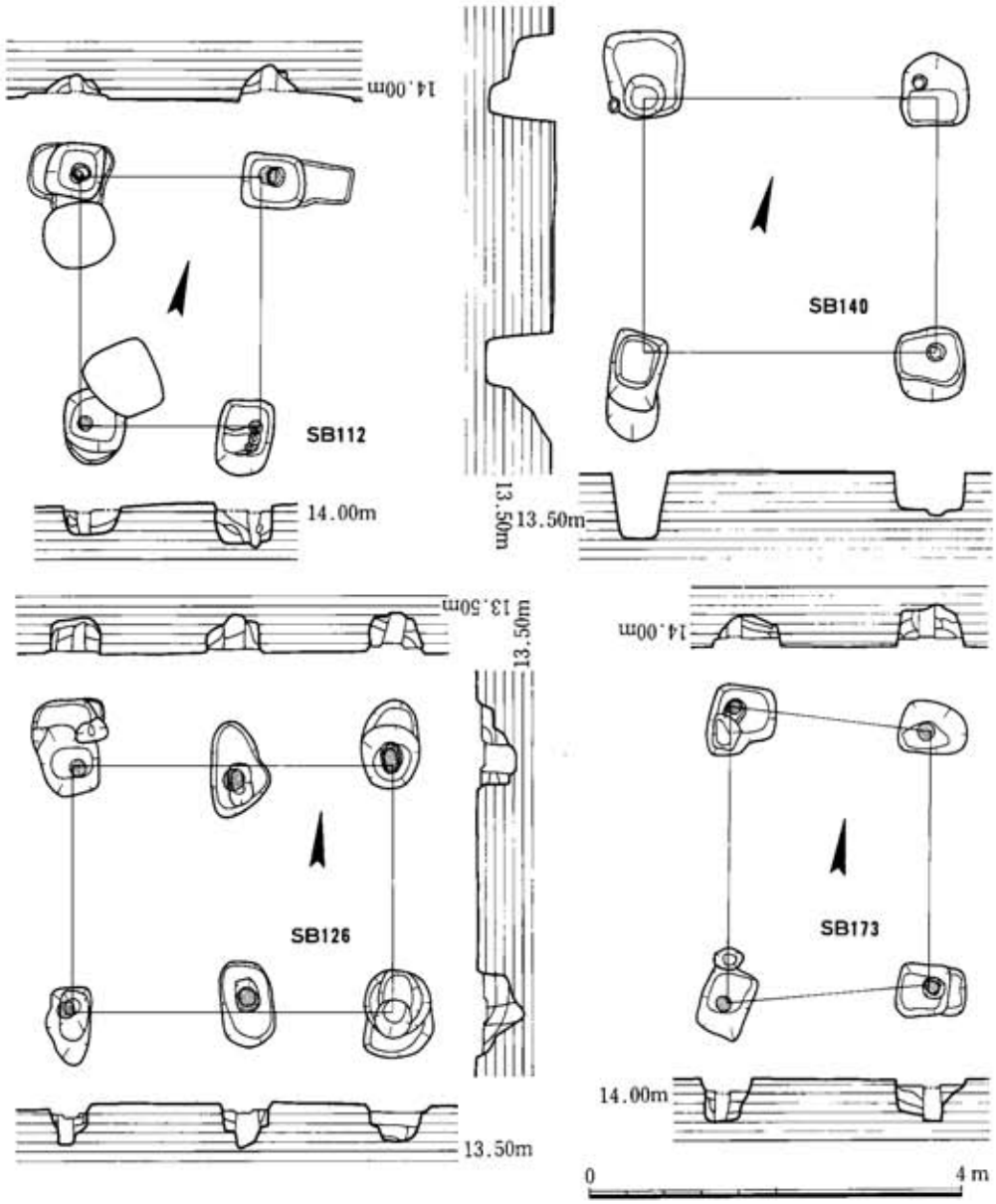


Fig. 44　SB112・126・140・173掘立柱建物（1/80）

SB140掘立柱建物（Fig. 44）

調査区西端中央に位置する。構造は1間×2間で、梁行2.63m、桁行3.4mである。主軸はN87°Eである。柱の掘形は径0.4～0.5mの円形を基本としているようであるが、柱が抜かれている関係か全体的に不整形である。埋土は黒色土を主体として、黒褐色土と黄褐色土で部分的に版築状になる。柱痕跡は径15～23cmである。

SB173掘立柱建物（Fig. 44）

調査区中央北東寄りに位置する。構造は1間×1間で、梁行2.15m、桁行3.16mである。主軸はN5°Wである。柱の掘形は一辺0.4mほどの隅丸方形を基本としているが、不整形なものが多い。埋土は暗褐色土が主体で、黒褐色土と黄褐色土で部分的に版築状になる。柱痕跡は径16～18cmである。

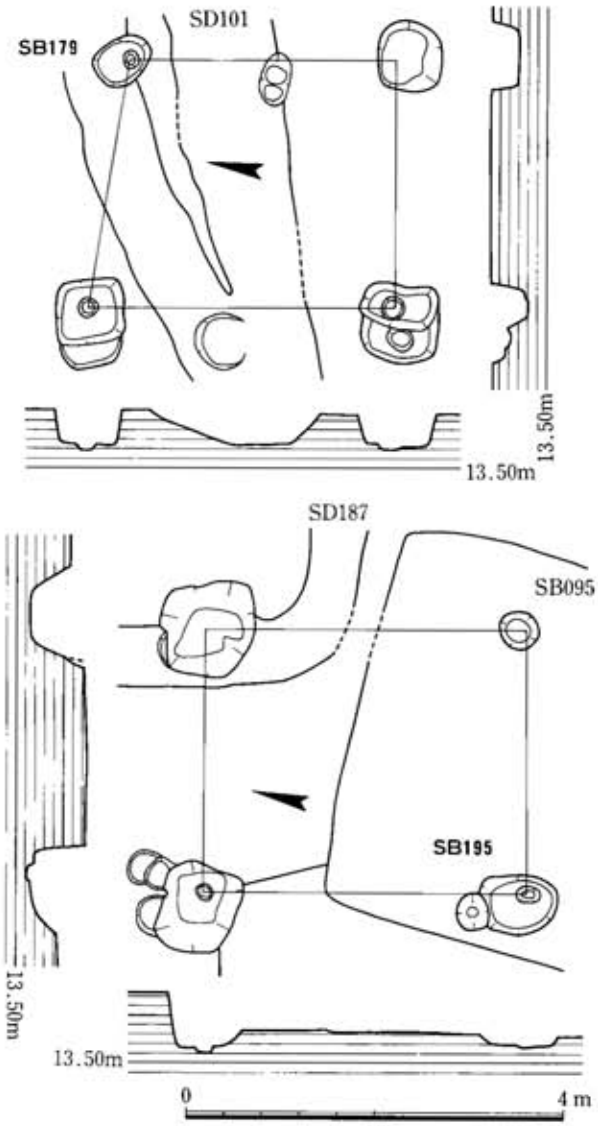


Fig. 45　SB179・195掘立柱建物（1/80）

SB179掘立柱建物（Fig. 45）

調査区東側中央に位置する。中世のSD101溝と重複する。構造は1間×1間で、梁行2.79m、桁行3.4mである。主軸はN10°Wである。柱の掘形は一辺0.6mほどの隅丸方形を基本としている。柱痕跡は確認されていない。

SB195掘立柱建物（Fig. 45）

調査区北東に位置する。SB096掘立柱建物より新しく、SB095竪穴住居、時期不明のSD187溝より古い。構造は1間×1間で、梁行2.63m、桁行3.25mである。主軸はN13°Wである。柱の掘形は一辺0.5mほどの隅丸方形を基本としている。柱痕跡は確認されていない。

3．周溝状遺構

SX044周溝状遺構（Fig. 46）

調査区南東に位置する。SB051竪穴住居との新旧関係は不明である。平面形は隅丸方形に近い円形である。外径3.45m、内径は東西2.94m、南北2.85mを測る。周溝内に小穴が多数検出されているが、この遺構に伴うものがあるかどうかは不明である。埋土は褐色土から黒褐色土である。遺物はほとんど出土していない。

239はく字状口縁の甕で、復原口径18.0cmである。胴部内面の屈曲部付近に板を当てた痕跡が観察される。

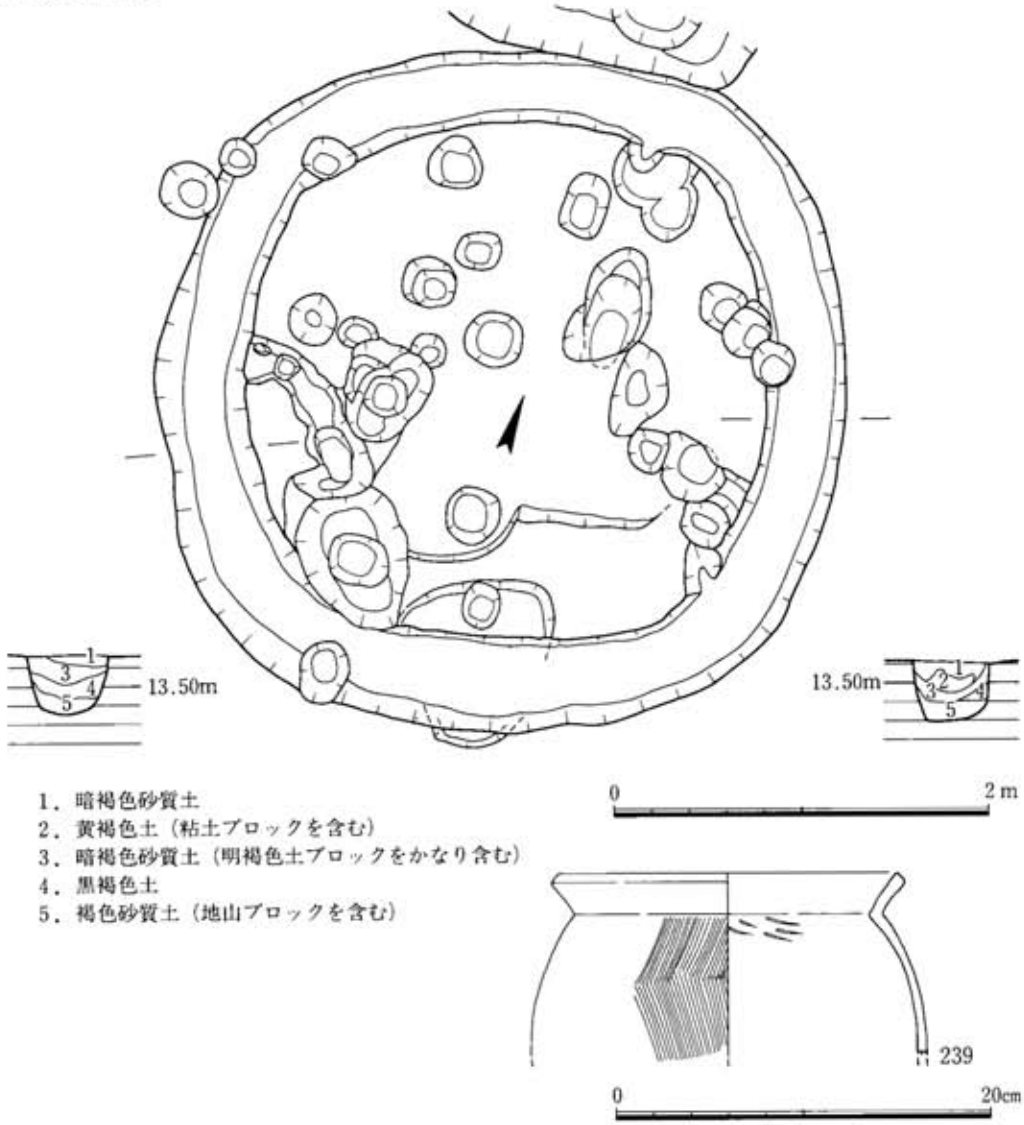


Fig. 46　SX044周溝状遺構（1/40）、出土遺物（1/4）

4．土壙

弥生時代の土壙と確認できるものは３基検出された。

SK108土壙（Fig. 21）は調査区東側中央に位置する。平面は隅丸方形である。

SK130土壙（Fig. 47）は調査区東側中央に位置する。平面は不整形な楕円形で、立ち上がりは緩やかである。いずれの土壙も弥生土器の小破片が出土したのみで、性格不明である。

SK131・132・133土壙（Fig. 47）は調査区西端中央に位置する。調査時には３基の土壙の切合としていたが、土層図をみるともっとも新しいとされるSK131土壙も何回か掘り直されているようである。したがって、これら３基の土壙はほぼ同一場所に何回か掘り直された一連の土壙と考えられる。埋土は暗褐色土から黒褐色土で、砂を含む層が多い。

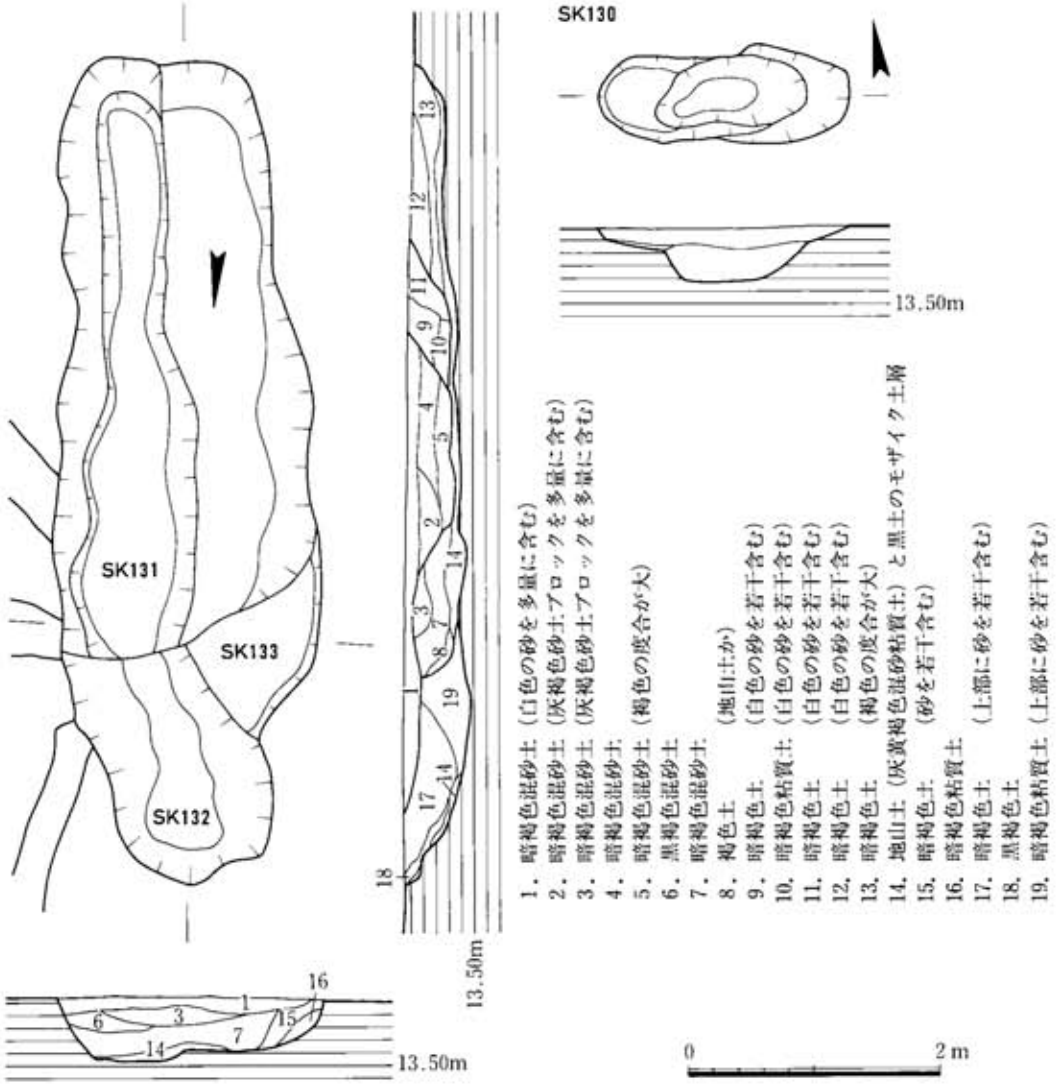


Fig. 47　SK130・131・132・133土壙（1/60）

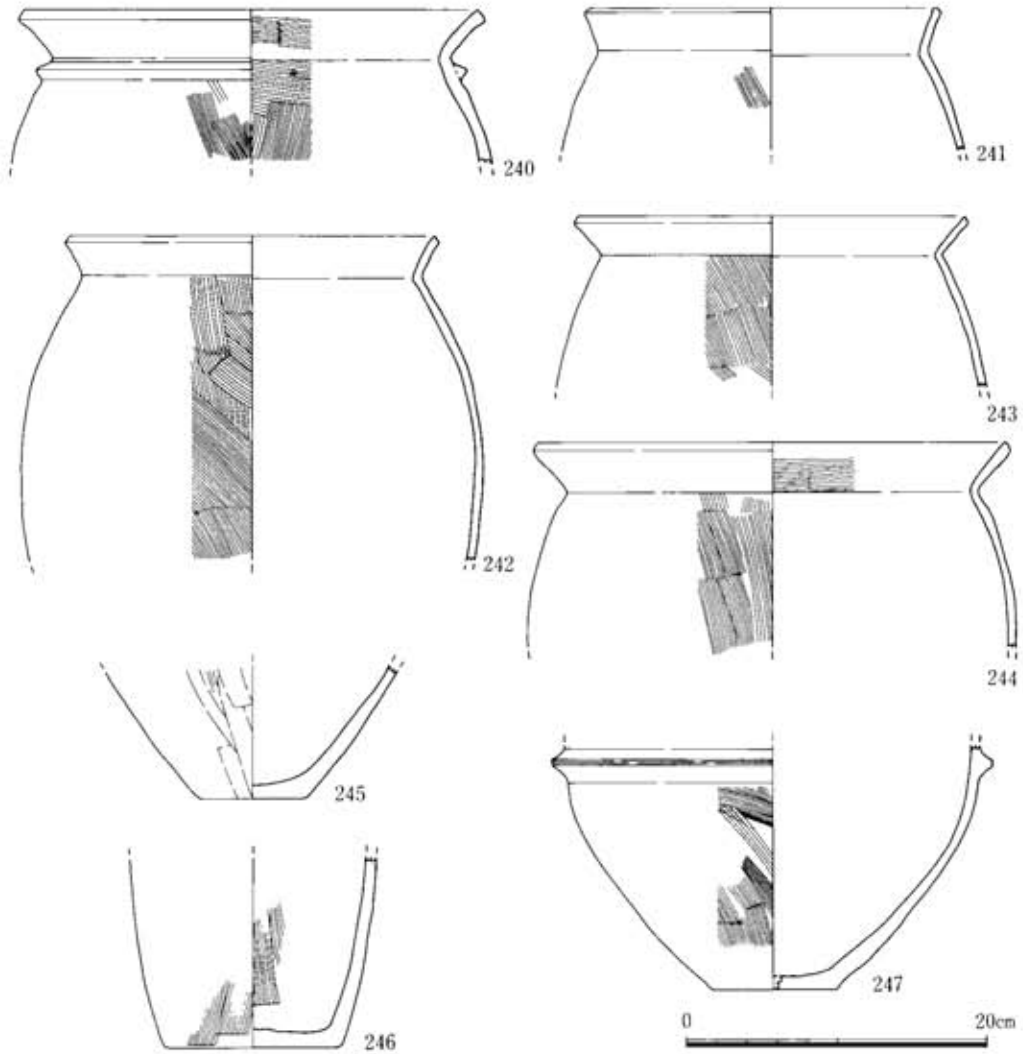


Fig. 48　SK131・132・133土壙出土遺物（1/5）

240～**244**はく字状口縁の甕である。**240**は復原口径30.2cmで、三角突帯が1条めぐる。**241**は復原口径23.0cmで、胴部外面はハケメ後ナデである。**242**は復原口径24.3cm、**243**は復原口径26.0cm、**244**は復原口径31.4cmである。**245**は甕の底部で、平底である。外面はハケメ後ケズリである。**246**は長胴で平底の鉢の底部と考えられる。**247**は複合口縁壺の胴部下半部から底部で、平底である。いずれもSK132土壙から出土している。

5. 河川跡（Fig. 49～51）

調査区西側に数条確認できる。もっとも大きなものがSD058で、それにほぼ並行するようにSD062・146・147、SD058から分かれるようにSD149がある。SD058は、埋土が灰白色から灰

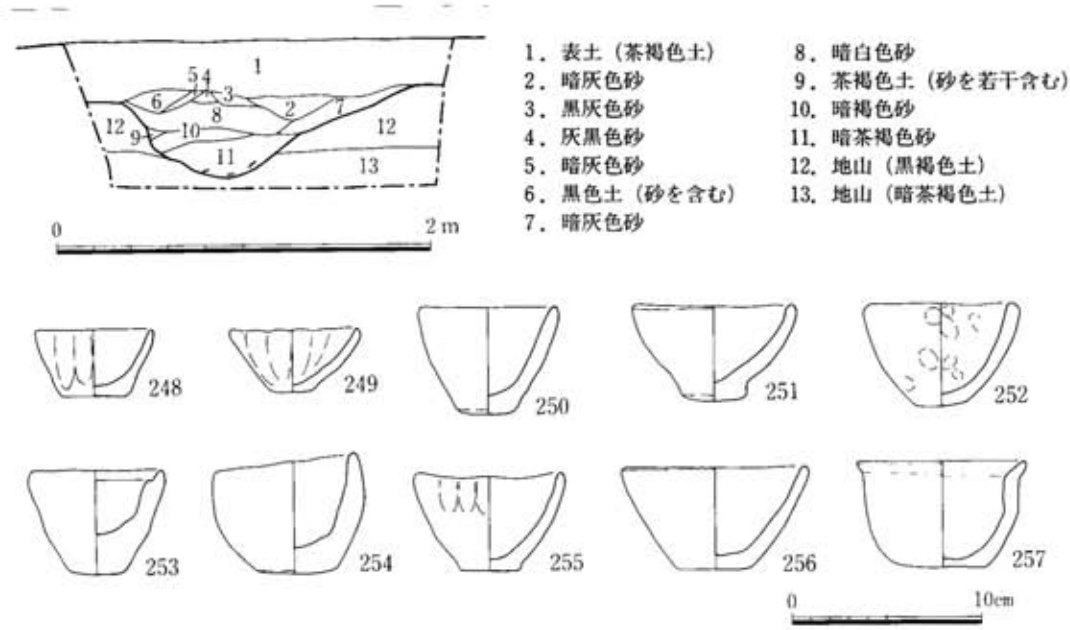


Fig. 49　SD058河川跡土層図（1/40）、出土遺物①（1/4）

黒色の砂であることやその堆積状況、形状、また出土遺物、切合関係から弥生時代の河川跡と考えられる。SD058以外もほぼ同じような状況であり、同様に河川跡とみられる。SD058河川跡からは完形のものも含め、相当量の土器が出土している。なお、SD058河川跡は大和町が調査した西山田二本松遺跡４区SD85溝状遺構[(1)]に続くものと考えられる。

248～**285**はSD058河川跡出土遺物である。**248**～**257**はミニチュア土器で、**249**は指頭圧痕を残す。**258**は平底で直口縁の鉢である。口径14.9cm、器高7.2cm。**259**は長胴の鉢としておく。復原口径14.4cmで、不安定な平底と考えられる。**260**は口縁部がわずかに外反する鉢で、やや不安定な平底である。口径15.0cm、器高6.6cm。**261**は直口縁の鉢で、不安定な平底と考えられる。復原口径17.2cm。**262**は屈折口縁の鉢で、やや不安定な平底である。口径20.0cm、器高9.1cm。**263**は平底で球形胴部の直口縁の鉢である。口径15.1cm、器高9.4cm。**264**・**265**はやや不安定な平底のコップ形の鉢である。**264**は復原口径8.8cm、**265**は口径12.4cm、器高12.6cm。

266～**270**は広口壺である。**266**・**267**は不安定な平底、**268**・**270**は平底である。**266**は口径12.3cm、器高15.3cm。**267**は復原口径12.8cmで、胴部に穿孔がある。**268**は口径14.0cm、器高16.6cm。**269**は復原口径13.0cm。**270**は口径14.0cm、器高17.2cm。**271**は長頸壺で、不安定な平底である。胴部下半部はケズリである。**272**は直口縁のミニチュアの壺としておく。復原口径8.2cm、器高9.1cm。**273**・**274**は小型の壺である。**273**は口径9.2cm、器高10.1cmで、胴部外面には雑なヘラミガキが施される。**274**は口径11.4cm、器高11.6cm。

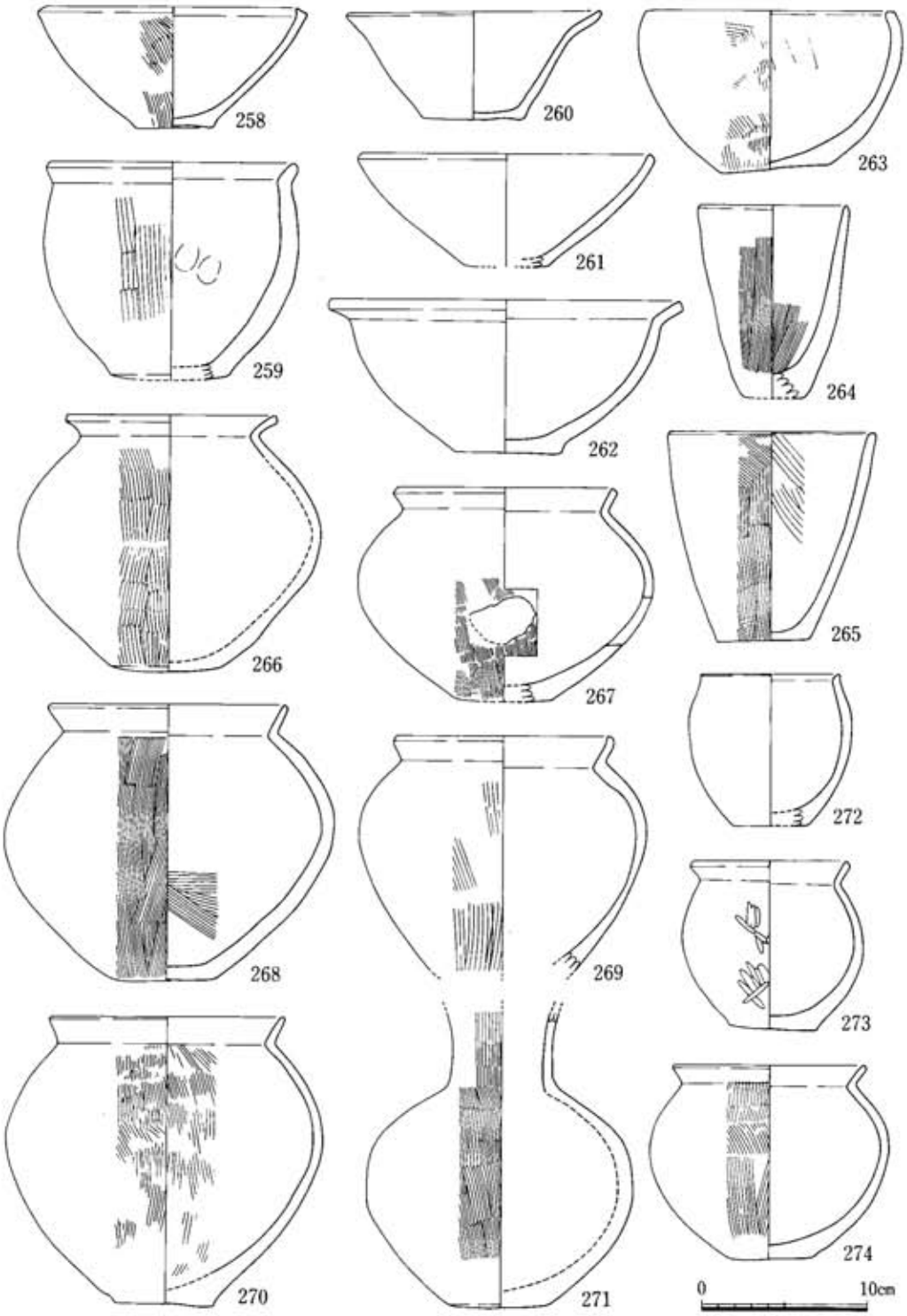


Fig. 50　SD058河川跡出土遺物②（1/4）

275はく字状口縁の甕で、平底である。口径16.0cm、器高20.2cm。**276**は鋤先状口縁の高坏で、復原口径30.0cmである。**277**は高坏脚部で、外面に上部ほど丁寧なヘラミガキが施される。**278**・**279**は支脚である。**278**は内面に板状工具によるナデの痕跡が残る。**280**～**284**は器台である。

285は石包丁で、２ヶ所で穿孔の中止が確認される。刃部も研ぎ直しの途中のようである。暗緑色の粘板岩系統の石材である。残存長11.1cm、残存幅1.1cm、厚さ1.1cmを測る。

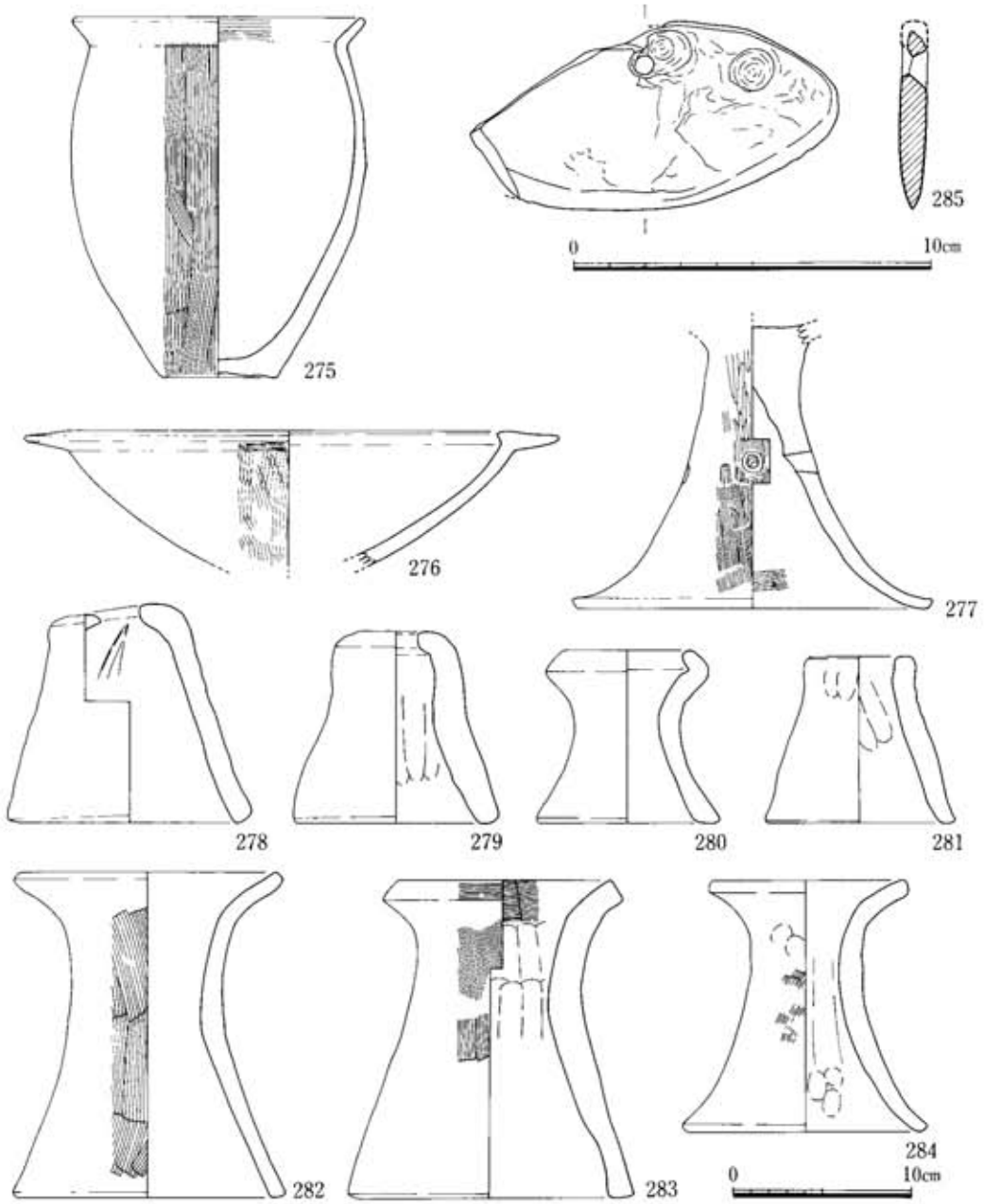


Fig. 51　SD058河川跡出土遺物③（285：1/2、他：1/4）

6. 小結

以上のように、この調査区では弥生時代後期前半代を中心とする集落が確認された。検出された遺構としては、竪穴住居80棟、掘立柱建物25棟、周溝状遺構1基、土壙3基、河川跡数条である。ここでは、それぞれの遺構の特徴などをまとめてみたい。

竪穴住居は平面が長方形と隅丸長方形のものである。主柱穴は、明確なものはすべて2本であるが、不明なものも多い。主軸方位は、長軸を南北にとるものはN10～15° W、東西にとるものはN75～80° Eのものが多い。これは住居の主軸を決める際に10° ほど西傾した基準のようなものがあったことを示唆する。後述するように、7世紀代の竪穴住居も西傾しており、方位に関する別の規制がない場合には主軸がやや西傾するのがこの地区の癖である可能性もある。ただ、弥生時代後期後半代のSB080・122竪穴住居はその他の住居とは主軸方位がかなり異なっており、時期的に主軸が変化するようでもある。後期後半代に斜行する主軸の竪穴住居があることは本調査区の東に隣接する東山田一本杉遺跡II・III区[(2)]でも似たような状況がみられる。

ベッド状遺構は住居の全容が明確な68棟のうち、27棟に確認される。この調査区では時期的に新しいSB080のベッド状遺構が床面での占有率がもっとも高い。全体的にみても、時期が下るにつれて占有率が高くなるようで、すでに指摘されている変化[(3)]の中で理解できる。

また、壁際土壙は41棟に確認される。南辺と東辺につくものが多い。完形の土器が出土したものがかなりみられ、ミニチュアなどの出土こそ明確ではないが、祭祀的な場所であったという推定[(4)]を支持するものと思われる。

時期は出土土器からすると後期前半のものが多い。集落の上限は、中期末までさかのぼる可能性もあるが、明確なものとしては後期初頭である。下限は後期後半であるが、後半代の住居は少ない。ただ、これらの状況は本調査区内でのものであり、周辺の状況と合わせて検討することで集落の動向を考えていかなければならない。

掘立柱建物は調査区南東部分にかなりまとまって検出されているが、特に倉庫群を形成しているわけではない。主軸方位も周辺の竪穴住居と似ており、住居に伴う倉庫と考えられる。

特徴的な掘立柱建物としては、棟持柱があるSB079があげられる。規模も3.51×5.04mと大きく、柱痕跡も径40cmを越えるものが多い。したがって、かなり高層の建物であったことが考えられ、単なる倉庫とは考えにくい。集落におけるシンボリックな建物ではないだろうか。時期は明確ではないが、切合関係や主軸方位などからすると後期中頃であろう。

調査区西側には**河川跡**が検出されている。特にSD058からは完形を含む相当量の土器が出土している。器種は甕、高坏が少なく、壺が多い。またミニチュア土器が多数みられる。これは、この小河川が集落に生活用水を運ぶ機能をもっており、祭祀の対象であったことを示唆しているものと考えられる。

また、何回も掘り直されている**SK131・132・133土壙**は、SD058を始めとする河川跡の周囲

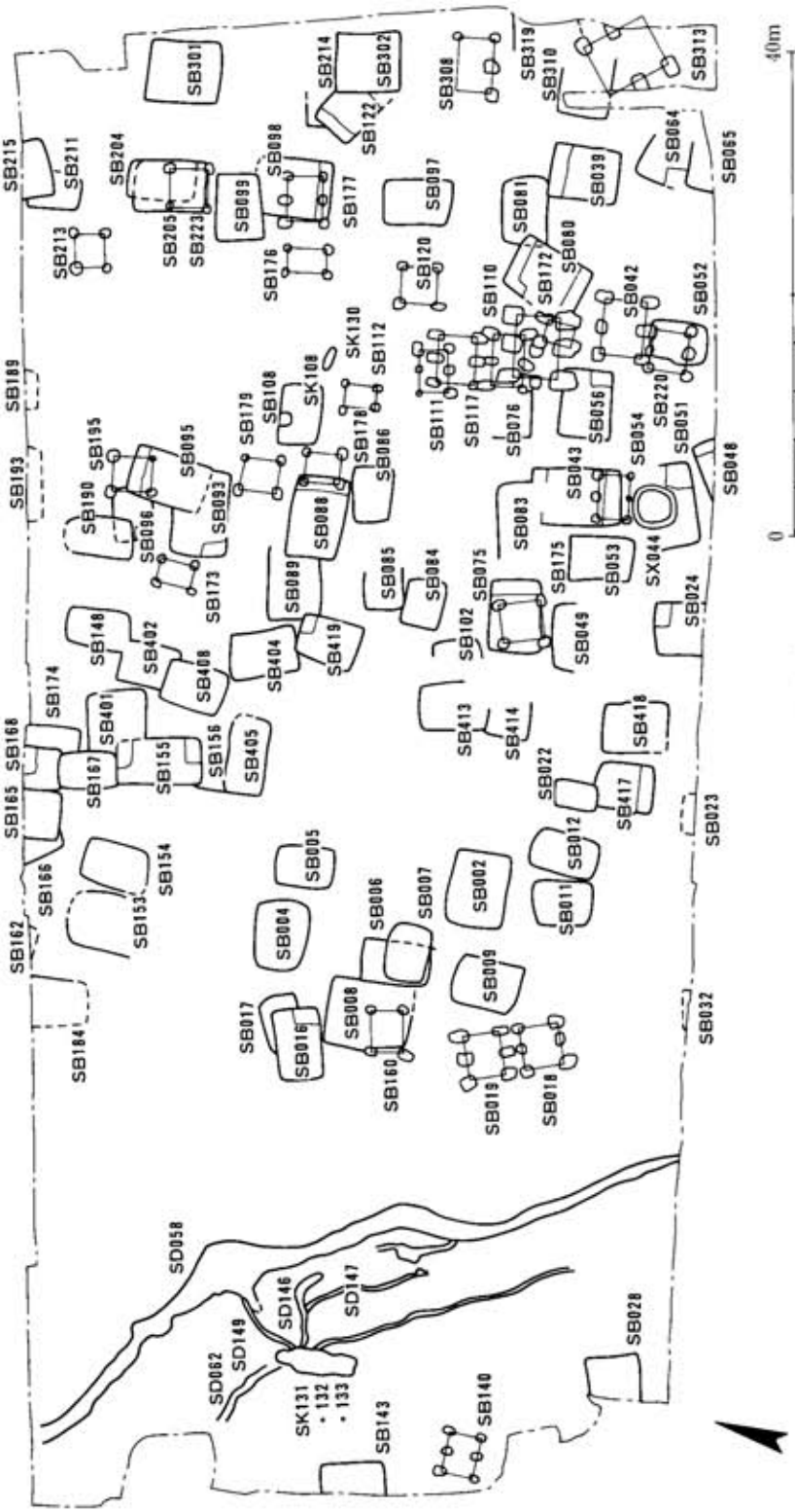


Fig. 52　弥生時代遺構配置図（1/600）

に弥生時代の遺構がみられない中、唯一確認される弥生時代の土壙である。水くみ場などの機能が考えられるかもしれない。

出土遺物の中で注目される遺物として、**銅釦**がある。SB002竪穴住居から出土した銅釦は、時期が判明する例として貴重である。住居の時期は、出土土器が小破片が多く明確ではないが、前半代のものが主体で、一部中頃のものが確認できる。銅釦は本例と佐賀県小城町布施ヶ里遺跡22号土壙墓3点[5]、熊本県神水遺跡23号住居址1点[6]、京都府三山木遺跡1点[7]で、日本において4遺跡から6点が出土している。

このように、数多くの竪穴住居、象徴的な掘立柱建物、銅釦などから後期前半から中頃の時期は、この地域の中でも中心的な集落であったことが考えられる。

ここで、調査区周辺との関係を若干述べてみたい。調査区の西側には本報告所収の西山田三本松遺跡があり、やはり後期前半代を主体とする集落が確認されている。二つの竪穴住居群が認められるようである。

東側に隣接する西山田二本松遺跡B区、東山田一本杉遺跡II・III区では、後期前半の横口式土壙墓を主体とする30基ほどの墳墓群と後期後半を中心とするかなり大規模な集落が確認されている。出土土器には須玖系高坏が少なく、後期前半の住居は少ない。東西に細長い調査区のため北側や南側の状況が明らかにされる必要はあるのだが、このような状況から、後期前半の墳墓群を営んだ集団は西山田二本松遺跡A区の集落である可能性が高いと思われる。また、西山田三本松・二本松遺跡では後期前半を主体とする集落で、後期後半になって東山田一本杉遺跡II・III区に集落の主体が移動したものと考えられる。

以上のように、今回の調査によってさまざまな成果を上げることができた。ここでは、調査区とその周辺の様相をまとめるだけに終わったが、嘉瀬川対岸の惣座遺跡[8]などの環溝集落群との対比など興味ある問題が数多くある。今後、この地域の弥生時代から古墳時代への社会の動態が解明されることが期待される。

〈註〉

1 大和町教育委員会 1992『東山田一本杉遺跡・西山田天神遺跡・西山田二本松遺跡・西山田三本松遺跡』大和町文化財調査報告書第13集
2 佐賀県教育委員会 1995『東山田一本杉遺跡』佐賀県文化財調査報告書第125集
3 福岡県教育委員会 1977『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告』XIX
4 福岡県教育委員会 1992『椎田バイパス関係埋蔵文化財調査報告』第8巻
佐賀市教育委員会 1994『大野原遺跡』佐賀市文化財調査報告書第48集
5 1984年度小城町教育委員会調査
6 熊本市教育委員会 1986『神水遺跡発掘調査報告書』
7 山田良三 1970「三山木出土の異形青銅器」『日本古文化論攷』
8 佐賀県教育委員会 1990『惣座遺跡』佐賀県文化財調査報告書第96集

Tab. 1　ガラス小玉観察表

遺物番号	出土住居	径	孔径	厚	色	登録番号
22	004	0.3	0.15	0.2	紺	95－1446
23		0.3	0.1	0.3	淡青	95－1464
24		0.4	0.2	0.4	淡青	95－1447
25		0.6	0.2	0.45	淡青	95－1463
29	006	0.45	0.1	0.4	淡青	95－1470
30		0.5	0.2	0.5	淡青	95－1445
42	009	0.25	0.15	0.35	淡青	95－1451
43		0.3	0.1	0.3	淡青	95－1466
44		0.3	0.15	0.3	紺	95－1454
45		0.45	0.25	0.35	淡青	95－1453
46		0.5	0.2	0.4	淡青	95－1452
47		0.55	0.25	0.35	淡青	95－1472
50	012	0.25	0.1	0.15	紺	95－1469
51		0.3	0.15	0.3	紺	95－1468
52		0.4	0.15	0.2	紺	95－1467
53		0.45	0.2	0.4	紺	95－1456
54		0.45	0.15	0.45	紺	95－1830
55		1.0	0.35	0.5	紺	95－1443
62	024	0.2	0.05	0.1	紺	95－1893
63		0.3	0.1	0.15	紺	95－1892
64		0.3	0.1	0.18	紺	95－1891
65		0.3	0.1	0.25	紺	95－1846
66		0.3	0.1	0.35	淡青	95－1882
67		0.35	0.1	0.2	紺	95－1881
68		0.35	0.1	0.25	淡青	95－1884
69		0.38	0.1	0.28	淡青	95－1894
70		0.4	0.2	0.3	淡青	95－1883
71		0.4	0.15	0.15	紺	95－1890
72		0.4	0.15	0.18	紺	95－1889
73		0.4	0.15	0.25	青緑	95－1886
74		0.4	0.2	0.25	青緑	95－1885
75		0.4	0.2	0.25	淡青	95－1848
76		0.4	0.15	0.28	紺	95－1880
77		0.45	0.1	0.4	紺	95－1844
78		0.48	0.2	0.28	紺	95－1888
79		0.5	0.25	0.2	紺	95－1879
80		0.5	0.15	0.4	紺	95－1847
81		0.52	0.18	0.25	紺	95－1887
82		0.55	0.15	0.45	紺	95－1878
83		0.55	0.2	0.4	紺	95－1845
84		0.55	0.15	0.5	紺	95－1877
131	093	0.15	0.05	0.2	紺	95－1855
132		0.28	0.1	0.3	紺	95－1903
133		0.3	0.1	0.18	紺	95－1902
134		0.3	0.1	0.2	紺	95－1869
135	093	0.3	0.1	0.2	紺	95－1862
136		0.3	0.1	0.2	紺	95－1867
137		0.3	0.1	0.2	紺	95－1901
138		0.3	0.1	0.25	紺	95－1858
139		0.3	0.1	0.3	紺	95－1868
140		0.3	0.1	0.3	淡青	95－1866
141		0.3	0.1	0.3	紺	95－1864
142		0.35	0.15	0.2	紺	95－1865
143		0.35	0.15	0.2	紺	95－1854
144		0.35	0.1	0.2	紺	95－1900
145		0.35	0.1	0.2	淡青	95－1904
146		0.35	0.15	0.25	紺	95－1899
147		0.4	0.15	0.2	紺	95－1861
148		0.4	0.15	0.2	紺	95－1863
149		0.4	0.1	0.2	紺	95－1898
150		0.4	0.1	0.2	紺	95－1897
151		0.4	0.1	0.3	紺	95－1860
152		0.4	0.15	0.35	紺	95－1857
153		0.42	0.15	0.45	青緑	95－1905
154		0.5	0.15	0.3	紺	95－1856
155		0.5	0.2	0.3	紺	95－1859
173	099	0.4	0.15	0.3	淡青	95－1908
174		0.4	0.1	0.3	紺	95－1907
175		0.4	0.18	0.3	淡青	95－1839
176		0.5	0.2	0.2	紺	95－1906
187	302	0.65	0.2	0.5	淡青	95－1907
188		0.35	0.1	0.15	紺	95－1611
189		0.35	0.15	0.2	淡青	95－1616
190		0.3	0.1	0.3	淡青	95－1615
191		0.3	0.1	0.2	紺	95－1610
192		0.3	0.1	0.18	紺	95－1612
193		0.75	0.35	0.7	淡青	95－1606
194		0.35	0.12	0.35	紺	95－1609
195		0.4	0.15	0.3	淡青	95－1613
196		0.4	0.15	0.2	淡青	95－1614
197		0.4	0.15	0.35	紺	95－1608
203	167	0.45	0.2	0.25	淡青	95－1460
204		0.7	0.18	0.5	緑	95－1444
205		0.95	0.3	0.4	紺	95－1473
225	301	0.3	0.1	0.15	淡青	95－1605
227	401	0.5	0.2	0.25	紺	95－1602
228		0.4	0.15	0.25	紺	95－1603
229	418	0.35	0.15	0.35	紺	95－1850
230		0.55	0.25	0.35	淡青	95－1625

単位はcm

Tab. 2　弥生時代竪穴住居一覧表

遺構番号	平面形	規模（m）	面積(㎡)	主軸方位	主柱	炉	周溝	ベッド	盛土	時期	備考	挿図番号
002	長方形	6.17×4.9	28.62	N82° E	2	○	3	N	南	II	銅鉇出土	2
004	隅丸長方形	5.78×4.17	21.97	N76° E	2 ?	○	×	N	×	I～II		4
005	長方形	4.7×3.29	14.49	N10° W	×	?	×	N	東	II		4
006	長方形	5.44×3.5		N 9° W	×	?	4	N→A	×	II～III	建替？	5
007	隅丸長方形	4.78×3.3	(15.02)	N89° E	×	?	3 ?	N	×	I～II		5
008	長方形	6.87×5.51		N 7° W	2	?	3	N	東	I		7
009	長方形	5.31×3.94	20.19	N 4° W	×	?	4	N	東	II～III		8
011	隅丸長方形	4.91×3.68	16.83	N13° W	2 ?	?	×	A	東	?		8
012	隅丸長方形	5.5×3.35	16.94	N 1° W	×	○	×	N	東？	II～III		9
016	長方形	5.8×3.74	20.66	N67° E	×	○	4	A	南？	II～III		10
017	隅丸長方形	短軸3.01		N56° E		?	4 ?	N?		II		10
022	長方形	3.34×2.18	7.05	N 9° W	×	?	2	N	×	II ?		11
023	?	一辺(3.35)								時代不明	大部分調査区外	
024	長方形	短軸4.23		N15° W	2 ?	?	×	A?	?	III	約半分調査区外	11
028	長方形？	短軸4.38		N67° E	×	?	×	N?	南？	?	約半分調査区外	
032	?									?	大部分調査区外	
039	長方形	5.5×4.2	23.22	N 9° W	×	○	2	B	東	II ?		12
040	長方形	5.6×3.98	(22.30)	N79° E	×	○	×	A	南	I～II		12
043	長方形	7.22×4.63		N15° W	×	○	×	D	西	II		13
048	長方形？			N53° E	2 ?			B?		?	大部分調査区外	
049	長方形？	長軸(5.28)		N75° E			2			?	大部分削平	
051	長方形？	長軸6.76		N64° E				A	南？	?	大部分削平	
052	長方形	4.75×2.9		N 5° W	2 ?	○	×	N	?	I～II		40
053	長方形	5.16×3.5	18.06	N12° W	×	×	1	N	×	II ?		13
064	?							A?		?		
065	?									?		
075	長方形	5.85×4.2	23.96	N76° E	×	○	×	B	南	II～III		14
076	長方形？	長軸5.17		N75° E	2 ?	○	×	A	南	II		15
080	長方形	6.34×4.7		N13° E	2 ?	○	×	D	東	IV		16
081	隅丸長方形	5.38×3.57		N77° E	2 ?	○	×	N	南	?		17
083	長方形？	短軸(4.64)		N71° E	2 ?	×	×	A?	×	II ?		
084	長方形	3.96×3.06	(11.61)	N85° E	×	○	×	N	南？	II ?		17
085	長方形？	短軸3.2		N71° E		?	×	N?	?	III		18
086	長方形	4.38×3.04	12.86	N75° E	×	○	×	N	南	II ?		18
088	長方形	6.54×4.25	27.60	N84° E	×	○	×	B	南	I		19
089	長方形	短軸4.32		N74° E	×	×	×	N	南	I		20
092	長方形	4.7×3.26	14.54	N78° E	×	○	1	N	南	II		21
093	長方形	7.13×4.43		N78° E	×		4	A	南	I		22
095	長方形	6.45×4.18		N 5° E	2 ?	○	×	B	西	I～II	建替	23
096	長方形	4.2×3.26		N70° E	×	×	×	A	×	I		25
097	長方形	5.46×3.62	19.32	N75° E	×	○	×	N	×	II ?		25
098	長方形	短軸4.75		N11° W	×	?	×	B	?	IV		26
099	長方形	5.3×3.84	19.49	N71° E	×	○	×	N	×	IV ?		27
102	?	一辺(3.4)								?	大部分削平	
122	長方形	短軸3.66		N61° W	2	○	×	D	南西	III		28
143	長方形	6.62×5.25		N68° E	×	×	×	N?	×	?		
148	隅丸長方形	5.25×3.25	(15.76)	N 7° W	2	×	×	N	×	?		30
153	隅丸長方形？					?	2	N?		II ?		
154	隅丸長方形	5.44×3.59	(18.17)	N 1° E	2	○	4	N	東	II～III		
155	長方形	6.9×3.8	25.00	N17° W	?	○	3	A	東	II		30
156	長方形				2 ?					?		
162	?						2			?	大部分調査区外	
165	長方形？	短軸3.9		N 9° W	×	○	2			?	約半分調査区外	
166	?						1 ?			?	大部分調査区外	
167	隅丸長方形	4.68×3.06	13.59	N17° W	×	○	4	N	東	II		31
168	隅丸長方形	短軸3.41		N15° W	?	×	×	A	×	II		32
174	長方形？			N12° W						?		

遺構番号	平面形	規模（m）	面積(㎡)	主軸方位	主柱	炉	周溝	ベッド	壁際土壙	時期	備考	挿図番号
184	長方形	短軸2.66		N10° E	×		×	A	東	?		74
189	?	一辺3.08								時代不明	大部分調査区外	
190	隅丸長方形	短軸3.2		N12° W	2	○	2	N	西	II		34
193	?	一辺5.84		N72° E				N?		時代不明	大部分調査区外	
204	長方形	5.54×3.18	(16.82)	N11° W	×	○	×	B	×	I		35
205	長方形	5.96×4.0	(23.35)	N12° W	×	?	×	N	×	I		35
211	隅丸長方形？	短軸2.89		N 9° W	×	○	×	N?	東	?		
214	?	一辺6.0		N12° W			×			?		28
215	?									II ?		
301	長方形	6.02×4.98		N13° W	×	○	1	N	東？	?		35
302	長方形	5.21×4.77	(24.73)	N15° W	×	○	2	N	東	III		28
309	?					○				?		
310	長方形	短軸4.18		N80° E	2 ?	×	×	N?	南	?		
401	隅丸長方形	5.92×4.74		N71° E	×	○	×	N	南	I ?		36
402	長方形	4.72×3.5		N 2° W	×	×	4	N	東	?		
404	長方形	5.72×3.5		N27° W	?	×	×	N	東	?		
405	長方形	6.17×3.17		N84° E	2 ?	○	2	N	×	II～III		36
408	長方形	5.04×3.65	(17.56)	N 2° E	2 ?	○	2	N	東	?		
413	長方形	短軸3.85		N16° W	2	○	×	N	東	I ?		
414	長方形			N82° E	2 ?	○	?	N?	南？	?		
417	長方形	4.7×3.8		N10° W	2 ?	○	×	B	×	?		
418	長方形	5.15×3.9		N15° W	2 ?	?	2	N	東	I ?		37
419	不整長方形	4.98×3.7	14.42	N 1° W	×	○	○	A	東	I		37

ベッド状遺構の分類は次の文献による；寺井誠　1995「古墳時代前後の竪穴住居の変遷過程」『古文化談叢』34
N；なし　A；壁隅　B；短辺の一辺　C；短辺の一辺と壁隅　D；両短辺
時期は東山田一本杉遺跡II・III区、西山田二本松遺跡B区（第19集『東山田一本杉遺跡』）での区分による。

Tab.3　弥生時代堀立柱建物一覧表

遺構番号	構造	梁行（m）	桁行（m）	主軸方位	柱痕跡（cm）	備考	挿図番号
018	1間×2間	3.13	3.5	N61° E	16～26		39
019	1間×2間	2.63	3.6	N63° E	18～24		39
042	1間×2間	3.2	4.76	N82° E			40
054	1間×2間	2.7	3.74	N76° E			13
079	1間×2間	3.51	5.04	N80° E	38～48	中央棟持柱	41
110	1間×2間	3.04	4.06	N78° E	20～28		42
111	1間×2間	2.76	4.0	N75° E	17～18	建替（古）	42
		1.85	2.68	N73° E	14～19	〃　（新）	
112	1間×1間	1.92	2.65	N14° W	14～18		44
117	1間×2間	2.54	4.48	N78° E	18～26		42
126	1間×1間	2.7	3.12	N76° E			4
140	1間×2間	2.63	3.4	N87° E	15～23		44
160	1間×1間	2.25	3.58	N75° E			7
172	1間×1間	1.8	2.48	N 5° W	24～25		41
173	1間×1間	2.15	3.16	N 5° W	16～18		44
175	1間×1間	3.26	3.3	N20° W			14
176	1間×1間	1.96	3.59	N 8° W		1間×2間か	
177	1間×2間	2.74	4.0	N75° E	22		26
178	1間×1間	2.4	3.05	N11° W			
179	1間×1間	2.79	3.4	N10° W			45
195	1間×1間	2.63	3.25	N13° W			45
213	1間×1間	2.55	3.04	N70° E			
220	1間×2間	2.92	3.32	N80° E			40
223	1間×1間	3.02	3.3	N13° W			35
308	1間×2間	3.2	4.57	N77° E			
313	1間×2間	4.13	5.55	N44° W			

Ⅲ　古代

1. 竪穴住居

SB026竪穴住居（Fig. 53・54）

調査区南西に位置する。弥生時代のSD062河川跡と重複する。平面形はやや不整形な長方形で、長軸4.97m、短軸3.9m、面積18.75㎡を測る。主軸はN14°Wである。4本主柱で、西壁は内外どちらの立ち上がりが本来のものかは不明である。

カマドは北辺ほぼ中央に設置され、壁外方に掘りこむ形態である。右袖は調査時に掘り誤っている。燃焼部床面は住居床面から15cmほど掘りくぼめている。右袖内に径20cmほどの礫石があり、補強材の可能性がある。

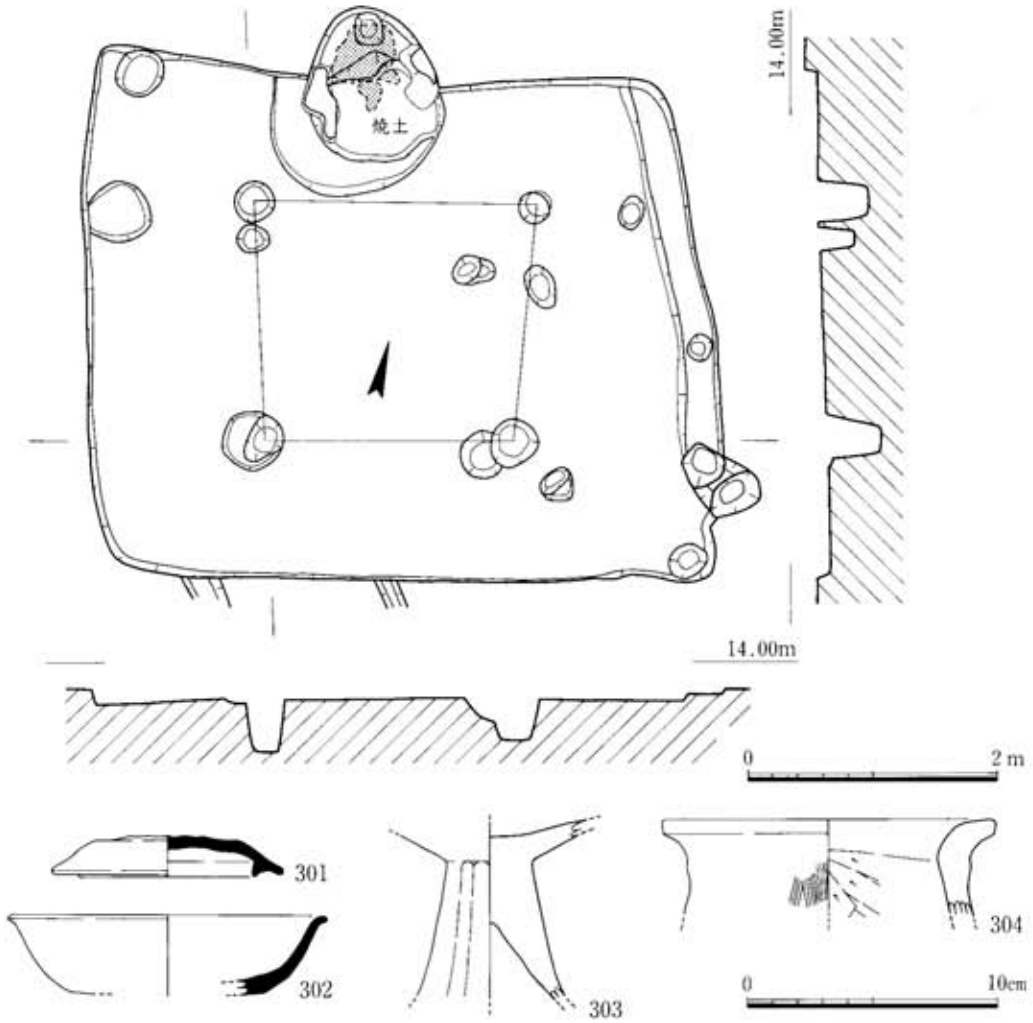


Fig. 53　SB026竪穴住居（1/60）、出土遺物（1/3）

301は須恵器小蓋で、復原口径6.8cmである。天井部は回転ヘラケズリである。**302**は須恵器坏で、復原口径12.6cmである。底部は大部分欠失し不正確であるが、手持ちヘラケズリのようである。**303**は高坏で、脚部外面ヘラケズリである。**304**は小甕で、復原口径13.3cmである。

SB027竪穴住居（Fig.54）

調査区南西に位置する。SB030掘立柱建物より古いものと考えられ、弥生時代のSD058河川跡と重複する。残存状況が悪く、東半部は削平され、平面形は不明である。南北軸3.86mで、主軸はS70°Wである。主柱穴は不明である。

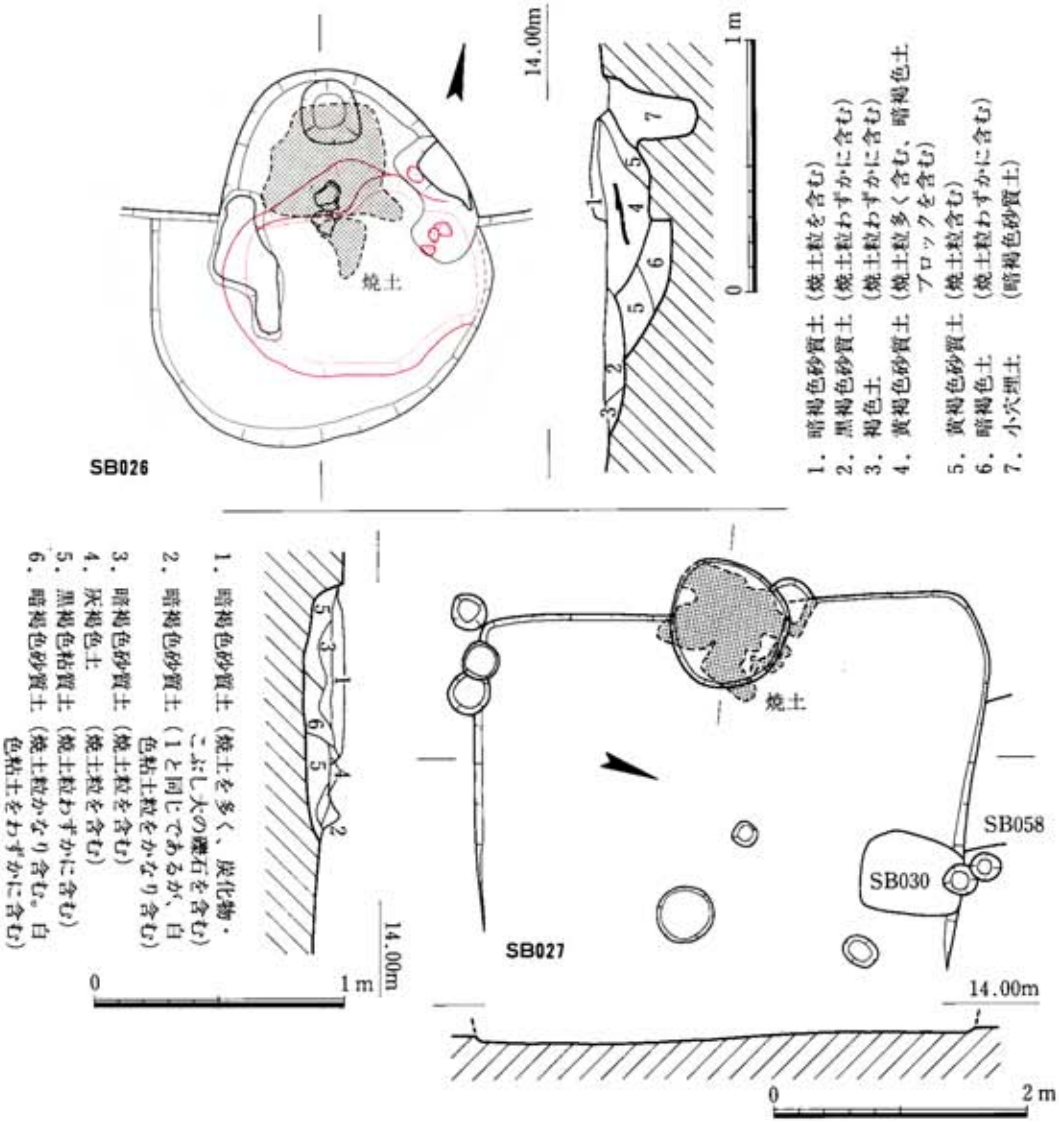


Fig.54　SB026竪穴住居カマド（1/30）、SB027竪穴住居（1/60）、カマド土層図（1/30）

カマドは西辺中央に設置され、壁外方に掘りこむ形態である。燃焼部床面は住居床面よりやや掘りくぼめている。袖などは確認できなかった。

SB035竪穴住居（Fig. 55～59）

調査区南東に位置する。弥生時代のSB042・079掘立柱建物と重複する。平面形は3.5×3.4mほどの方形である。面積は11.33㎡、主軸はS81° Eである。4本主柱で、北辺に周溝がある。

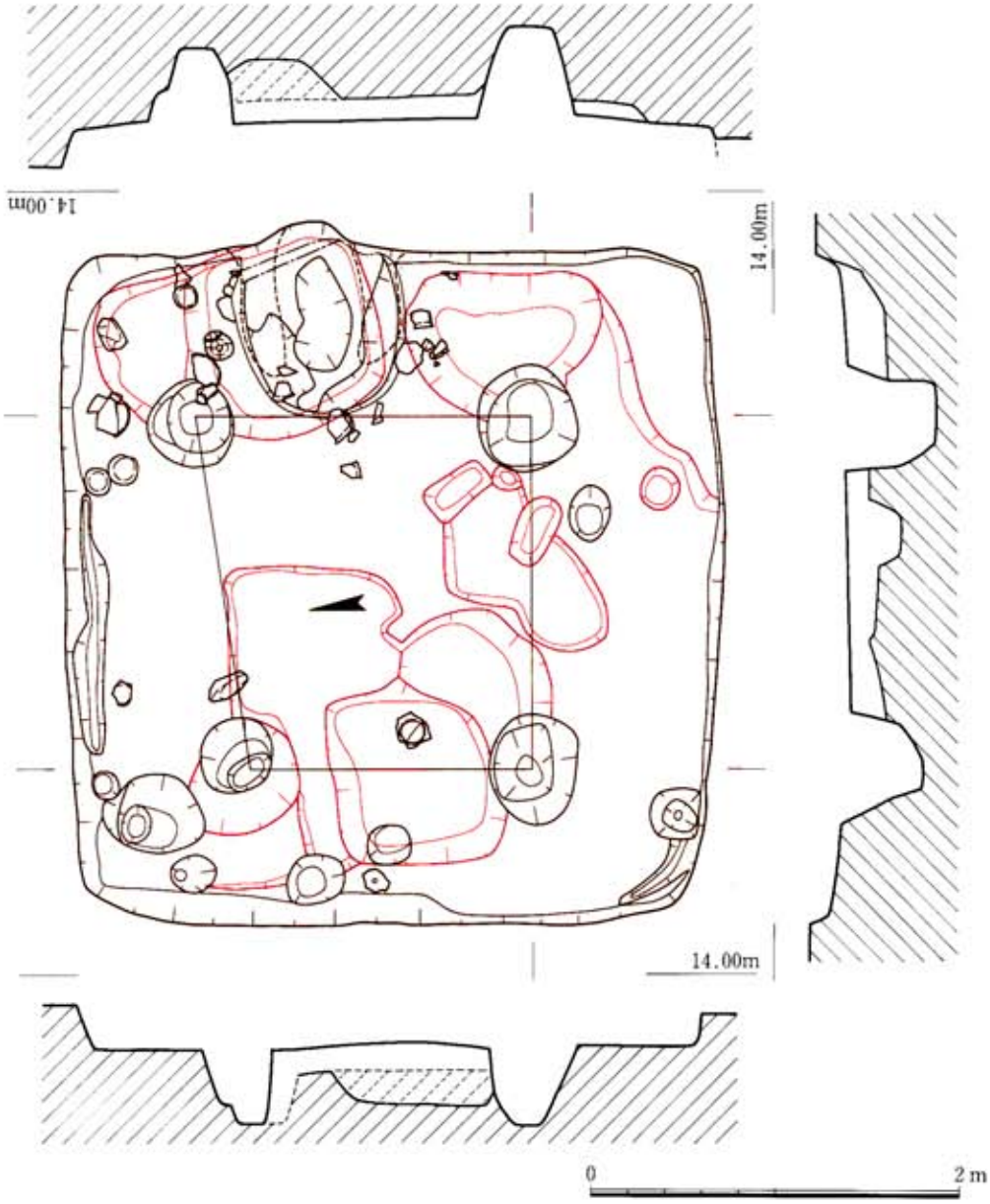


Fig. 55　SB035竪穴住居（1/40）

貼床が10cm強みられる。

カマドは東辺中央北寄りに設置され、煙道部がわずかに壁外方に張り出す形態である。袖などは明確には検出されておらず、断面形でその形態を復原した（Fig. 55）。住居床面上に構築されている。まず、住居床面を掘りくぼめ、その上に黒褐色土と暗褐色土を置き、袖部の基礎と燃焼部床面としている。袖部は灰白色粘土で築かれている。燃焼部床面は赤く焼け硬化しており、袖部内側は赤変している。カマド内と周辺に土器が集中して廃棄されている。

305～308は須恵器蓋である。**306**はつまみが欠失しており、天井部はヘラ切り後ヨコナデである。**307**は扁平なつまみがつき、天井部はヘラ切り後ヨコナデである。**308**は扁平なつまみで、天井部は粗雑な回転ヘラケズリを施す。

309は須恵器坏で、底部は回転ヘラケズリを施す。やや焼成が悪く、灰黄色～にぶい黄橙色を呈する。**310・311**は須恵器長頸壺である。**312**は須恵器鉢で、胴部下半部は回転ヘラケズリである。須恵器は**307・308・312**を除き、小破片のものが多い。

313・314は把手付の土師器甕である。**314**は胴部下半部に回転ヘラケズリを施す。**315・316**は土師器甕で、**316**は厚みや内面ヨコナデの状態から土師器と判断した。

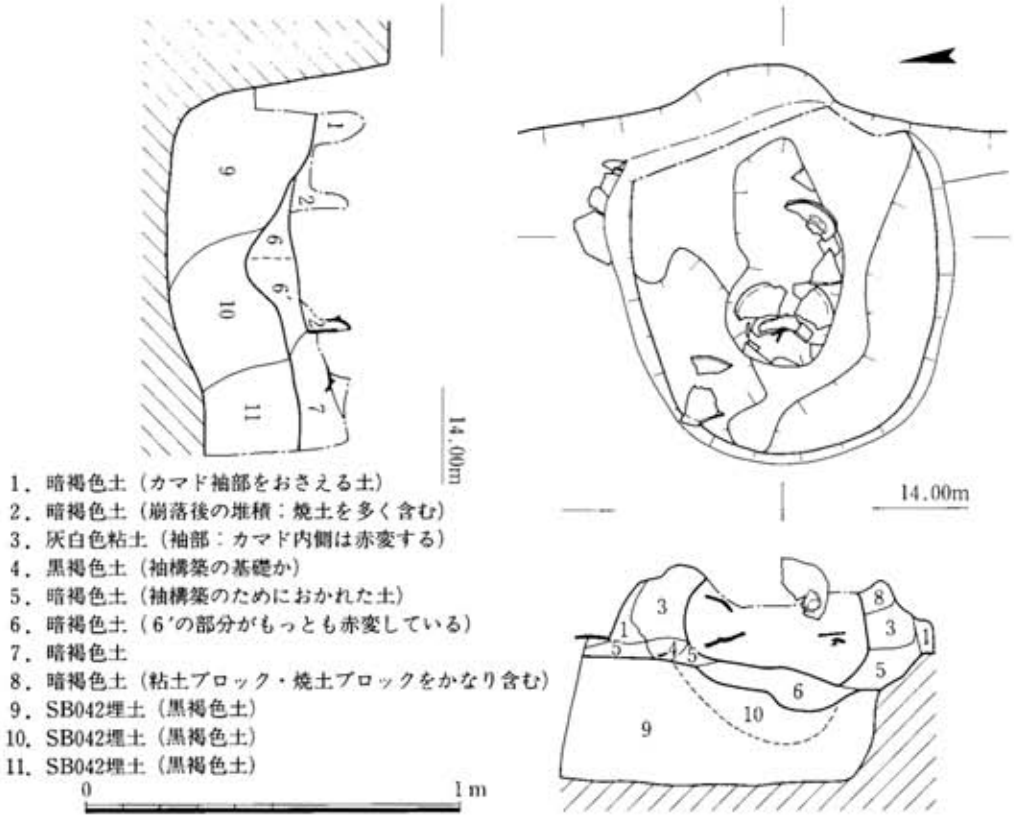


Fig. 56　SB035竪穴住居カマド（1/20）

317は土師器壺蓋で、つまみがつかない形態である。天井部は手持ちヘラケズリで、口縁部内外面は回転ヘラミガキで、他の部位にはヘラミガキが施される。**318**～**323**は土師器蓋で、いずれも天井部回転ヘラケズリで、全面に回転ヘラミガキが施される。**321**にも扁平なつまみがつくものと考えられる。**324**は環状のつまみがつく土師器蓋である。外面は回転ヘラケズリ後回転ヘラミガキ、内面ヘラミガキである。

325～**331**は土師器坏である。**325**のみ回転ヘラミガキが施される。底部は**325**・**326**が回転ヘラケズリ、**327**が外縁部のみ回転ヘラケズリ、**328**がヘラ切り未調整、**329**が手持ちヘラケズリ、**330**・**331**が外縁部のみ手持ちヘラケズリである。**332**～**339**は土師器高台付坏である。いずれも

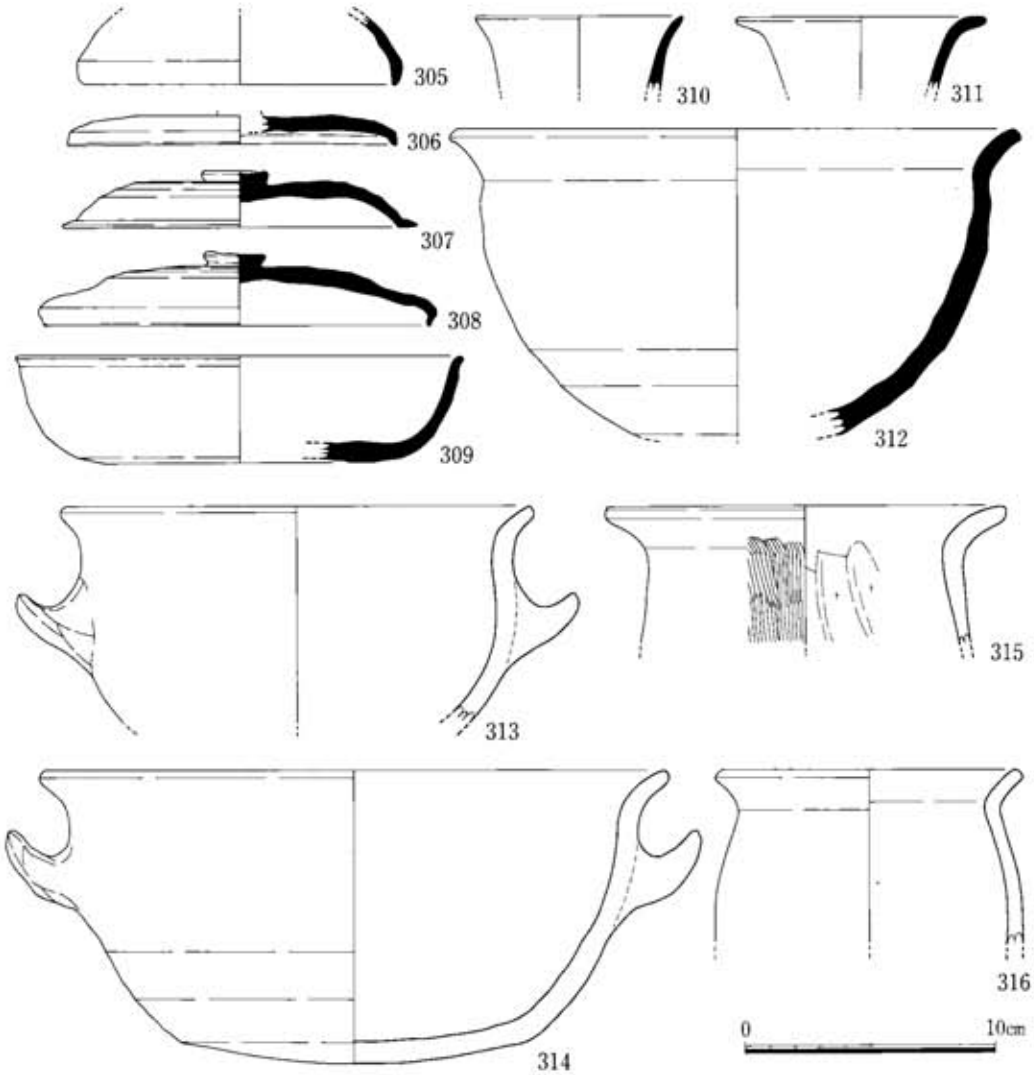


Fig. 57　SB035竪穴住居出土遺物①（1/3）

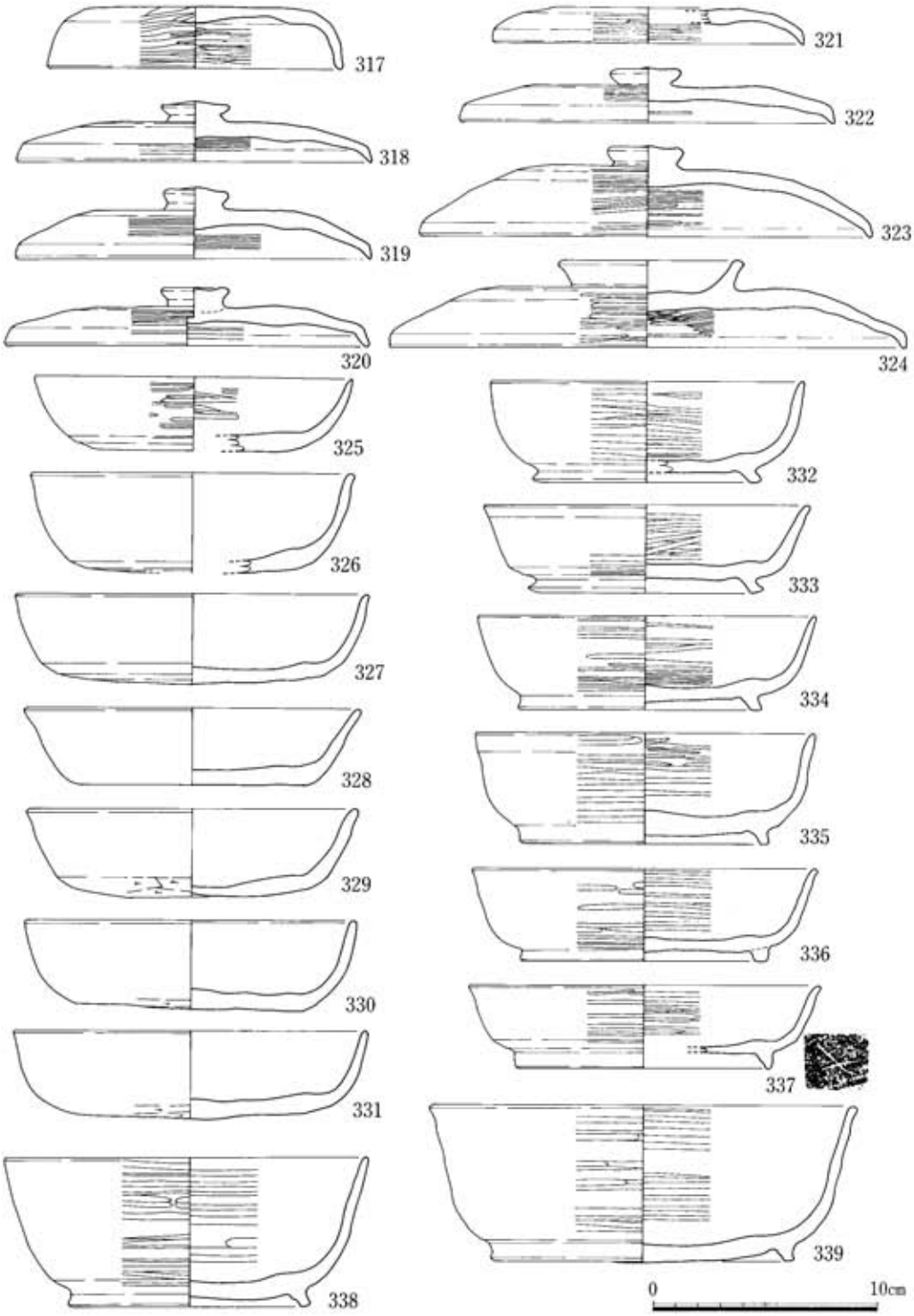


Fig. 58　SB035竪穴住居出土遺物②（1/3）

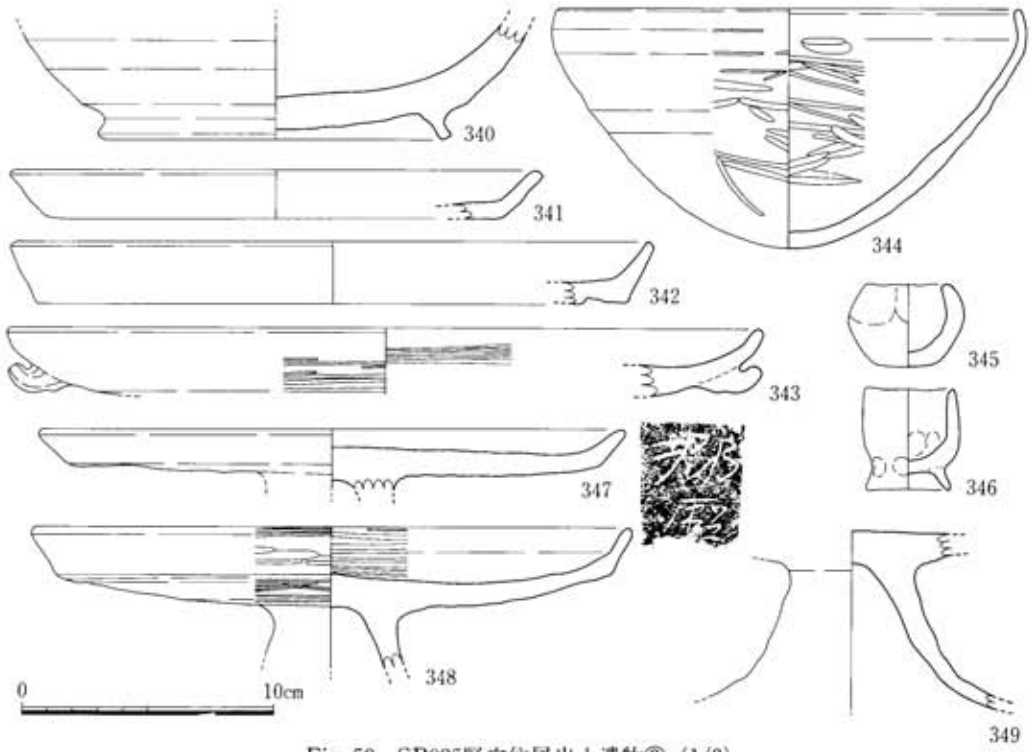


Fig. 59　SB035竪穴住居出土遺物③（1/3）

Tab. 4　SB035竪穴住居出土土器一覧表

遺物番号	種別	器種	口径	底径	器高
305	須恵器	蓋	(12.2)		
306			(13.6)		
307			(14.0)		2.2
308			15.4		2.9
309		坏	(17.6)		4.2
310		長頸壺	(8.2)		
311			(10.0)		
312		鉢	(22.1)		
313	土師器	把手付甕	(24.4)		
314			(33.0)		15.5
315		甕	(21.4)		
316			(15.6)		
317		壺蓋	13.0		2.75
318		蓋	(15.7)		2.65
319			(15.8)		3.15
320			16.2		2.6
321			(14.0)		
322			(16.6)		2.5
323			(20.2)		4.0
324			23.0		3.9
325		坏	(14.2)		3.2

遺物番号	種別	器種	口径	底径	器高
326	土師器	坏	(14.4)		4.4
327			(15.6)		4.0
328			(14.7)	(10.0)	3.4
329			(14.8)		3.9
330			14.5	10.2	4.0
331			(15.6)		3.9
332		高台付坏	(13.8)		4.45
333			(14.6)		3.9
334			(15.0)	(10.8)	4.2
335			15.0		4.9
336			15.0	10.9	4.1
337			(15.6)		3.8
338			(16.0)	(10.3)	6.6
339			(19.0)	(13.5)	6.95
340		高台付鉢		14.0	
341		皿	(20.6)	(18.1)	1.9
342			(25.0)	(23.4)	2.5
343			(30.0)		
344		鉢	(18.2)		9.5
347		高坏	23.2		
348			23.8		

回転ヘラミガキを施す。底部は**332・333**は回転ヘラケズリ、**334・337・338**はヘラ切り未調整、**335**はヘラ切り後ヨコナデ、**339**は外縁部のみ回転ヘラケズリである。

340は土師器高台付鉢で、胴部下半部から底部にかけて回転ヘラケズリを施す。**341～343**は土師器皿である。**341・342**の底部にはヘラケズリは観察されない。**343**は把手がつき、底部は回転ヘラケズリで、全面回転ヘラミガキが施される。**344**は土師器鉢で、胴部下半部は回転ヘラケズリである。全面に粗いヘラミガキを施す。**345・346**はミニチュア土器である。弥生時代のものの可能性がある。**345**は口径3.1cm、器高3.25cmを測る。**347～349**は土師器高坏である。**347**は坏部外面に「郡國」のヘラ書きがある。調整は磨滅により正確ではないが、坏部内面が回転ヘラミガキで、口縁部はヨコナデである。坏部外面はかなり雑に回転ヘラケズリを施し、ヘラミガキは不明である。**348**は坏部外面は回転ヘラケズリであるが、器面の凹凸のためにケズリが施されていない部分が目立つ。坏部内外面には粗い回転ヘラミガキを施す。**349**は坏部内外面回転ヘラミガキである。

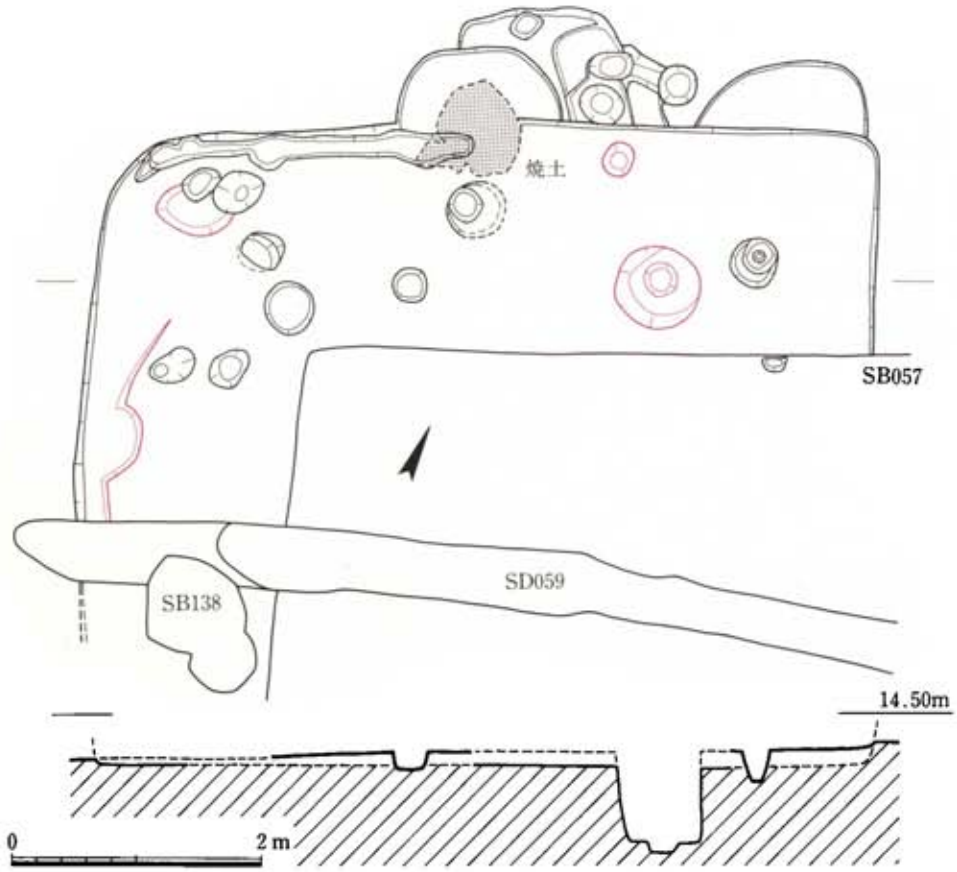


Fig. 60　SB056竪穴住居（1/60）

SB056竪穴住居（Fig. 60）

調査区中央北西寄りに位置する。SB057竪穴住居、SB138掘立柱建物、時期不明のSD059溝より古い。平面形は一辺6.16mほどの方形になるものと推定される。主軸はN26° Wである。主柱穴は不明で、10cmほどの貼床がある。北辺西側に周溝がめぐる。

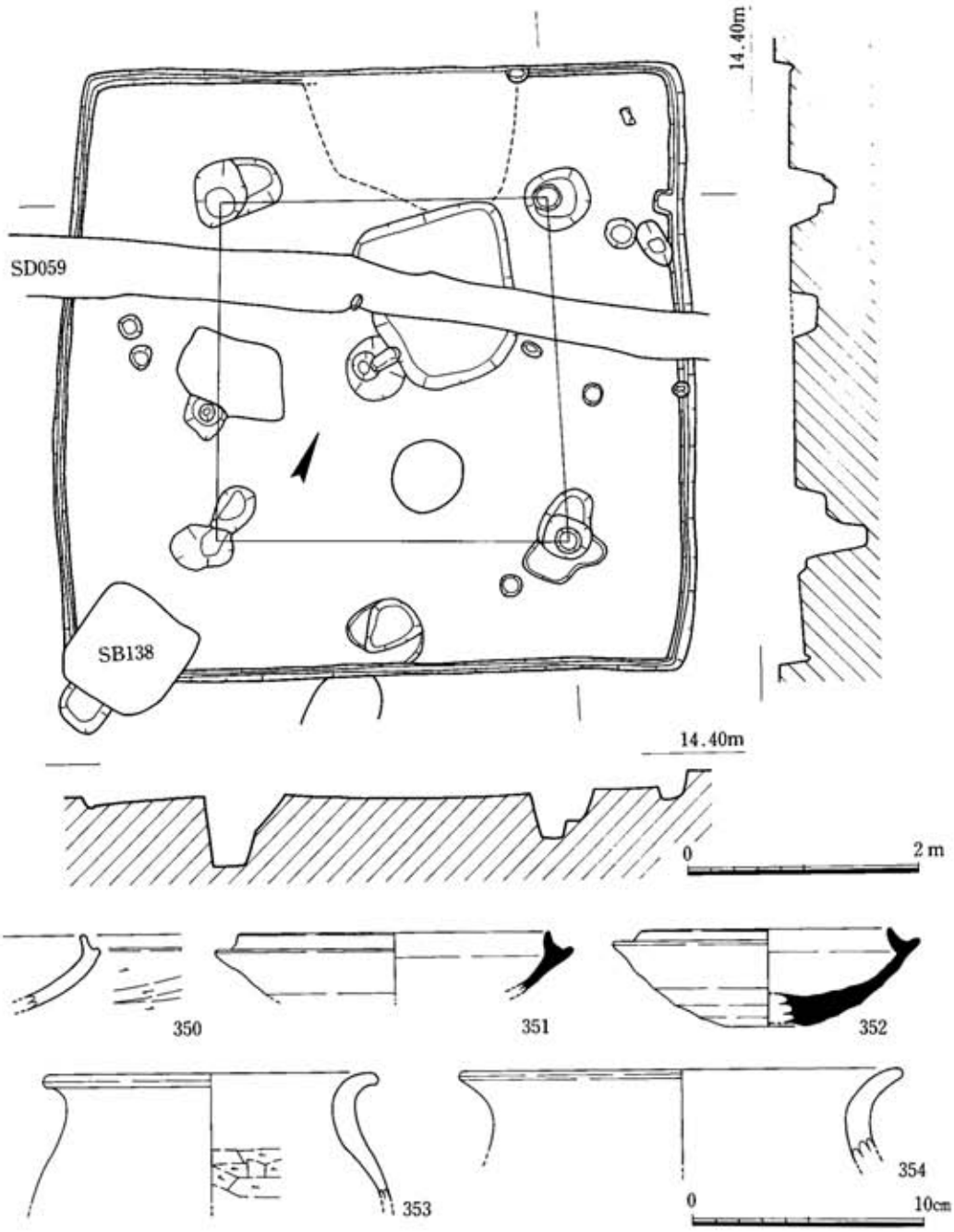


Fig. 61　SB057竪穴住居（1/60）、出土遺物（1/3）

カマドは北辺ほぼ中央に設置され、壁外方を掘りこむ形態である。袖など詳細は不明である。ただ、図示はしていないが、土層図からみると焼土が広がっている範囲程度の張り出しであったと考えられる。

SB057竪穴住居（Fig. 61）

調査区中央北西寄りに位置する。SB056竪穴住居より新しく、SB138掘立柱建物、時期不明のSD059溝より古い。平面形は5.42×5.16mの方形である。面積は約27.31㎡で、主軸はN25°Wである。4本主柱で、全辺に周溝がめぐる。北辺ほぼ中央の床面にわずかな掘り込みが確認されており、カマドの痕跡であったと考えられる。

350は土師器模倣坏で、外面手持ちヘラケズリで、内面ヘラミガキである。**351・352**は須恵器坏である。**351**は復原口径13.2cmで、底部回転ヘラケズリである。**352**は復原口径10.6cmで、底部回転ヘラケズリと思われる。**353・354**は土師器甕で、**353**は復原口径13.8cm、**354**は復原口径18.6cmである。

SB077竪穴住居（Fig. 62・63）

調査区南東に位置する。弥生時代のSB080竪穴住居、SB079・117・172掘立柱建物と重複する。調査時は弥生時代の竪穴住居と考えていた。ただ、SB080上層焼土としていた部分の土層断面図にカマドの断面とみられる土層があり、その焼土周辺には完形に近い土師器が10点ほど分布していた。報告書作成段階で、そのカマドと考えられる部分が西辺から考えられる住居東辺のほぼ中央にあることから、奈良時代の住居と判断した。

西辺は判明するものの、南辺が一部確認できるのみで残存状況は非常に悪い。平面形は、残存している部分とカマドと考えられる焼土の状況から、5.4×4.5mほどの長方形に復原できる。主柱穴、床面などの詳細は不明である。

カマドは東辺中央部にあるものと考えられる。カマドの袖は灰黒色土と黒褐色土で構築される。土層断面図からみると、燃焼部床面はややくぼめられている。

355～358は土師器蓋である。すべてつまみがつくものと考えられ、いずれも内外面に回転ヘラミガキを施す。355は復原口径13.3cm、**358**は口径20.4cm、器高3.0cmで、ともに天井部回転ヘラケズリは施されていない。**356**は復原口径15.2cm、**357**は口径16.0cm、器高3.0cmで、天井部は回転ヘラケズリを施す。

359・360は土師器高台付坏で、内外面に回転ヘラミガキを施す。**359**は口径13.2cm、器高4.0cmで、底部ヘラ切り後ヨコナデか。**360**は復原口径14.3cm、器高4.0cmで、底部は一部粗い回転ヘラケズリか。**361～363**は土師器坏である。**361**は口径14.2cm、器高4.0cm、**362**は復原口径15.0cm、器高3.6cm、**363**は口径15.4cm、器高4.2cmである。底部は**361・362**が手持ちヘラケズリ、

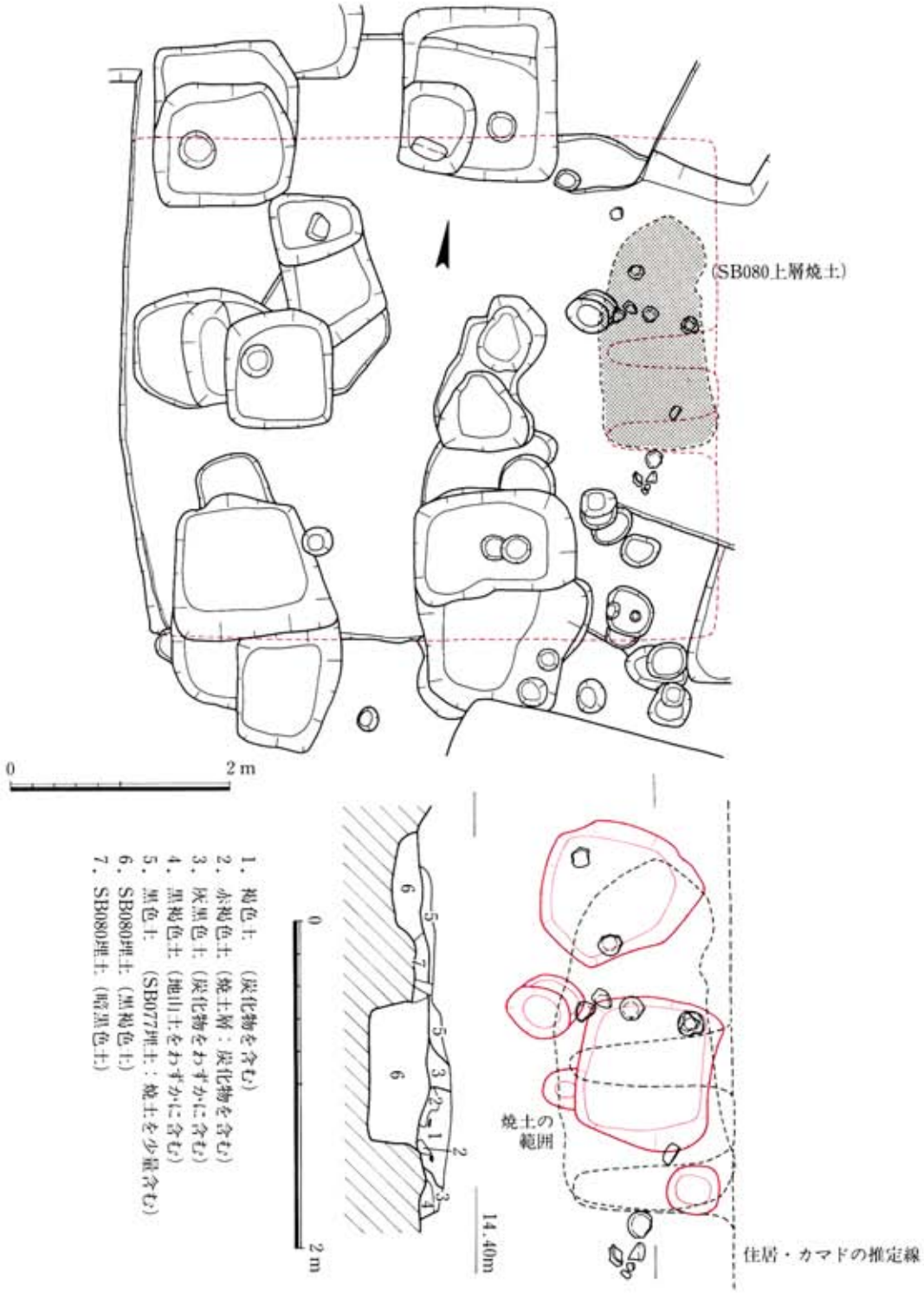


Fig. 62 SB077竪穴住居（1/60）、カマド（1/30）

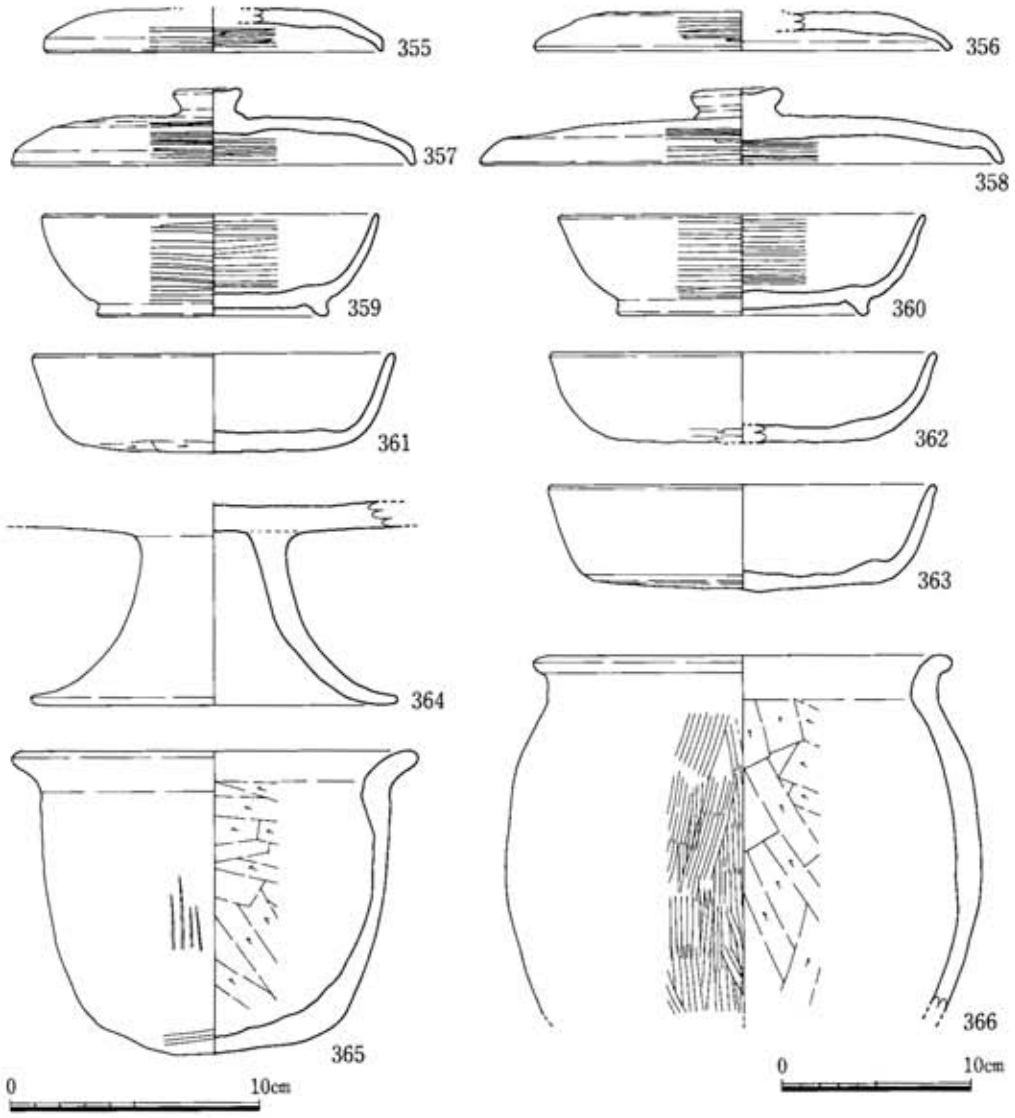


Fig. 63　SB077竪穴住居出土遺物（366：1/4、他：1/3）

363が回転ヘラケズリである。**364**は高坏で、裾径14.6cmである。坏部内面は回転ヘラミガキである。**365**は土師器小甕で、復原口径16.2cm、器高11.9cmである。外面はハケメ後ナデである。**366**は土師器甕で、復原口径22.1cmである。

SB087竪穴住居（Fig. 64）

調査区東側中央に位置する。弥生時代のSB111掘立柱建物、中世のSE106井戸と重複する。平面形は長軸4.46m、短軸3.38mの平行四辺形で、面積約14.77m²である。主軸は長辺に合わせるとN88°Eで、短辺に合わせるとS85°Eである。

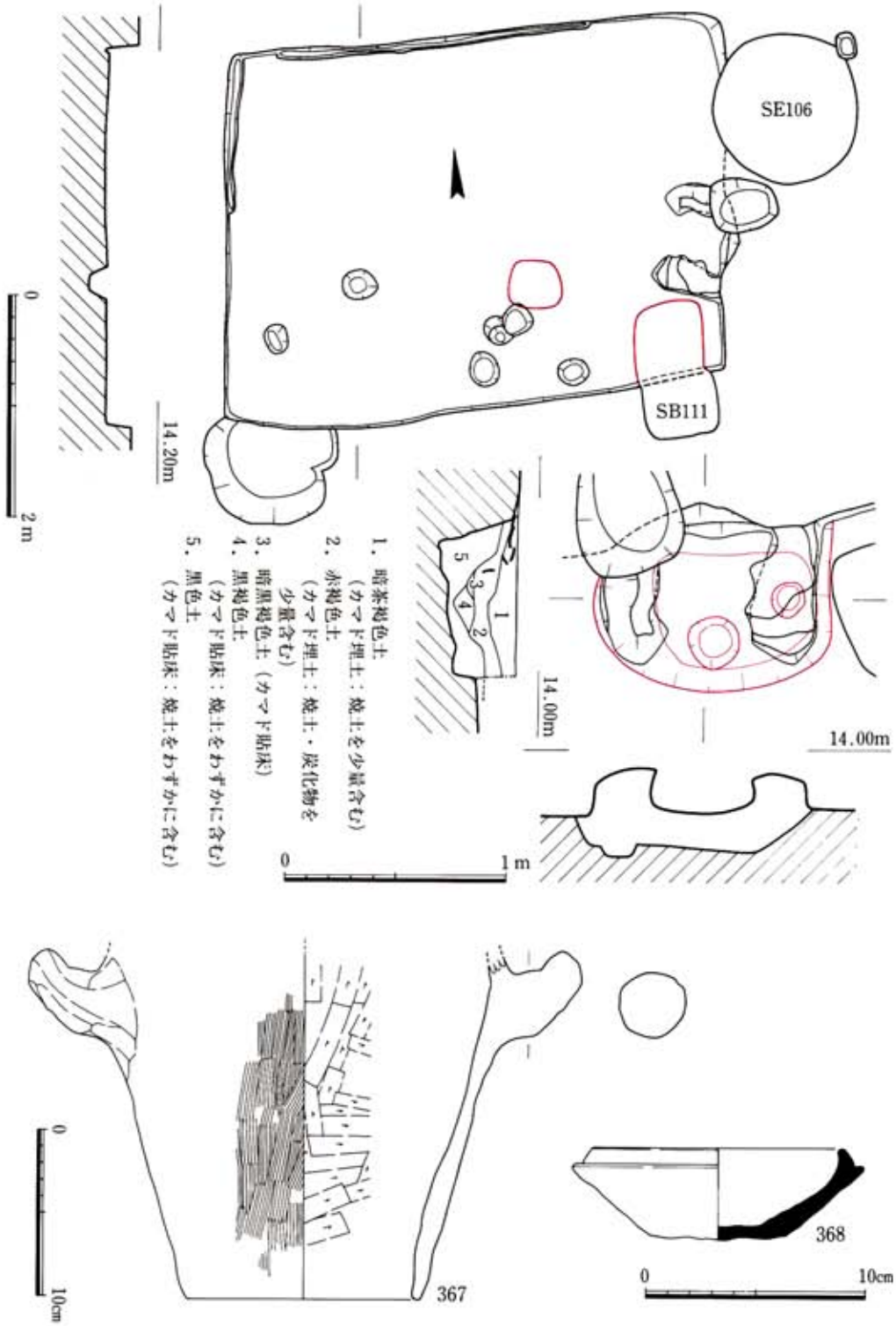


Fig. 64　SB087竪穴住居（1/60）、カマド（1/30）、出土遺物（367：1/4、368：1/3）

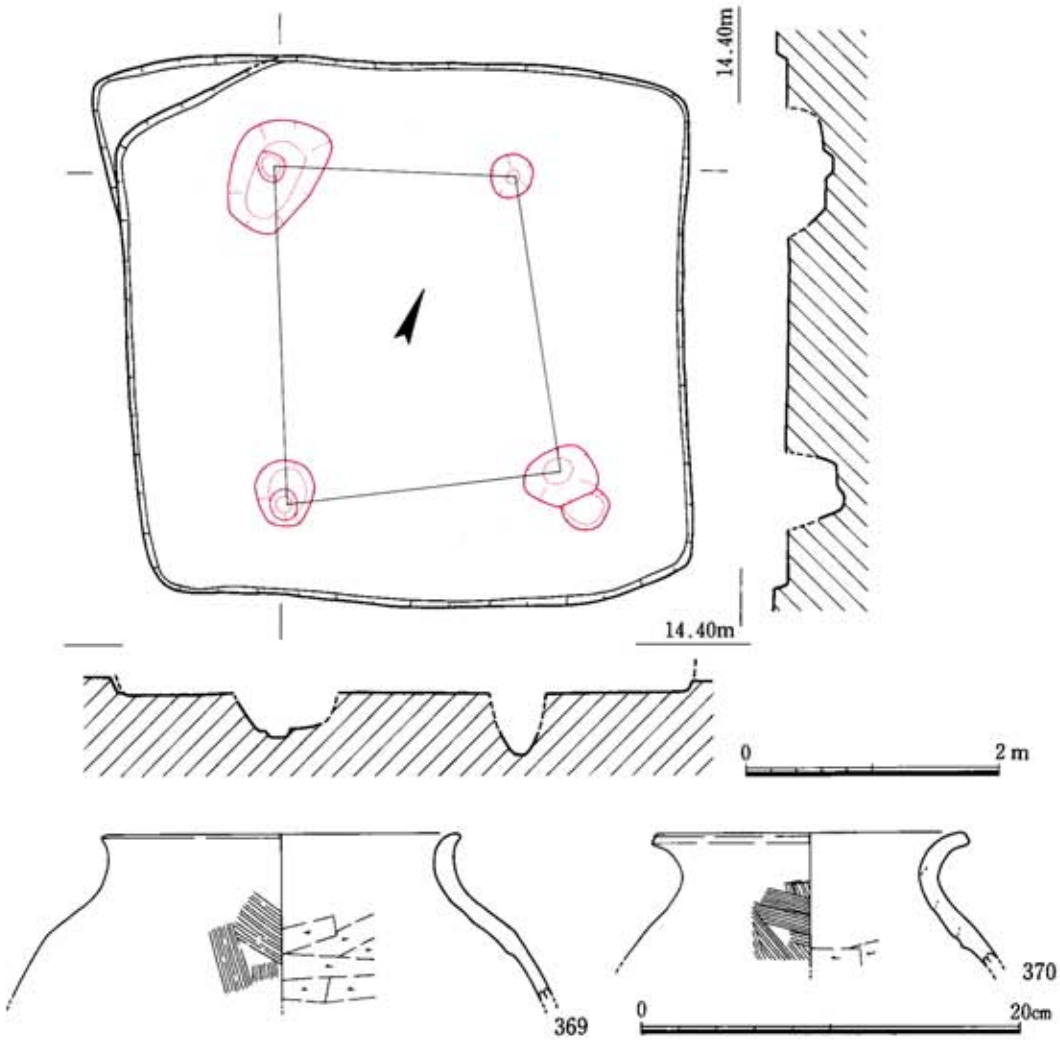


Fig. 65　SB094竪穴住居（1/60）、出土遺物（1/4）

カマドは東辺中央南寄りに設置され、煙道部がわずかに壁外方に張り出す形態である。住居の平面形からみると不自然な方向に袖が向いている。

367は土師器甑で、破片のため傾きなどは確実ではない。復原底径約14.0cmである。**368**は須恵器坏で、復原口径11.5cmである。底部はヘラ切り未調整である。

SB094竪穴住居（Fig. 65）

調査区中央北東寄りに位置する。弥生時代のSB093・095竪穴住居と重複する。平面形は4.36×4.2mのやや不整形な方形である。北西隅は明確ではないが、内側が本来の壁のようである。面積17.67m²で、主軸はN24° Wである。4本主柱で、カマドは確認できない。

369・370は土師器甕である。**369**は復原口径15.8cm、**370**は復原口径18.6cmである。

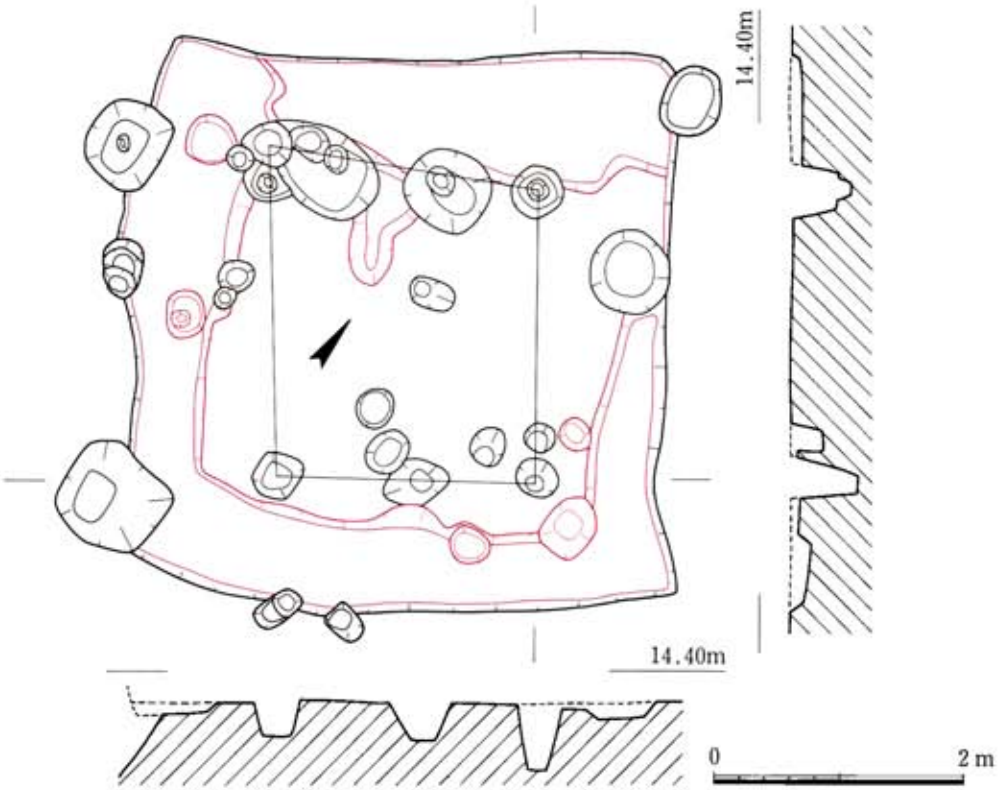


Fig. 66　SB100竪穴住居（1/60）

SB100竪穴住居（Fig. 66）

調査区北東に位置する。平面形は一辺4.28mほどのやや不整形な方形で、面積約17.64㎡を測る。主軸はN39°Wである。4本主柱で、床面の標高がほぼ検出面と一致しているために、正確な床面については不明である。住居掘形は壁周辺が掘りくぼめられている。カマドは不明である。

SB105竪穴住居（Fig. 67）

調査区北西に位置する。中世のSD069溝と重複する。平面形は一辺3.8mほどの方形で、面積14.29㎡を測る。主軸はN5°Wである。主柱穴は不明で、10cm弱の貼床が確認できる。

カマドは北辺ほぼ中央に設置され、壁外方に掘りこむ形態である。袖は砂混じりの褐色粘質土で構築されているようである。袖の内側には焼土や上部構造の崩れと思われるものが落ち込んでいる。

371は土師器甕で、復原口径20.4cmである。**372**は須恵器高坏脚部で、裾径14.6cmである。透かしがある。

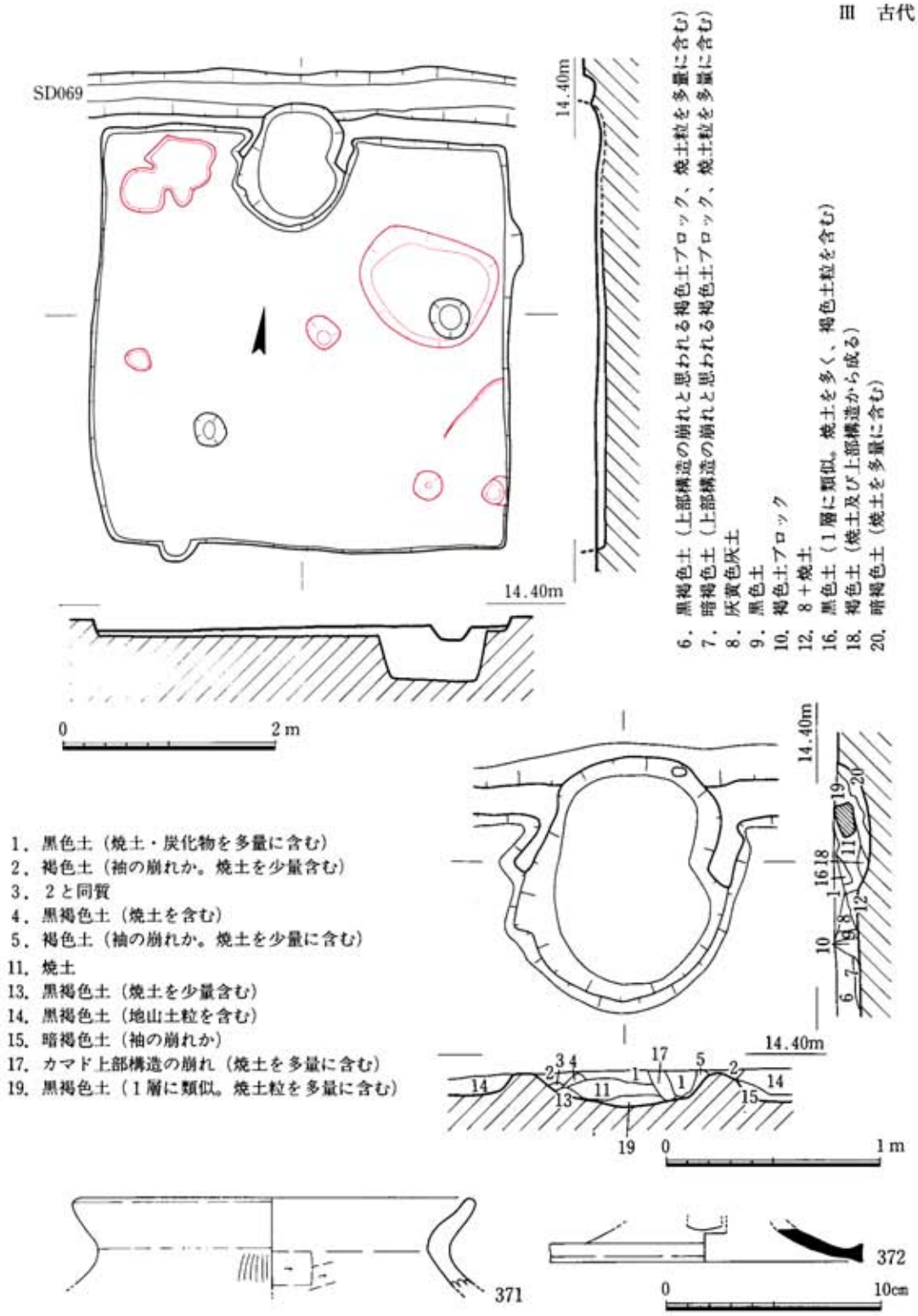


Fig. 67　SB105竪穴住居（1/60）、カマド（1/30）、出土遺物（1/3）

SB139竪穴住居（Fig. 68）

調査区西端ほぼ中央に位置する。住居中央が攪乱されている。平面形は5.5×5.36mの方形である。面積約29.66㎡で、主軸はN21° Wを測る。主柱穴は不明である。カマドも不明であるが、北辺中央やや東寄りにあった可能性がある。北辺に周溝がある。

373は土師器甕で、復原口径18.4cmである。**374**は須恵器坏で、復原口径12.0cmを測る。底部は回転ヘラケズリである。

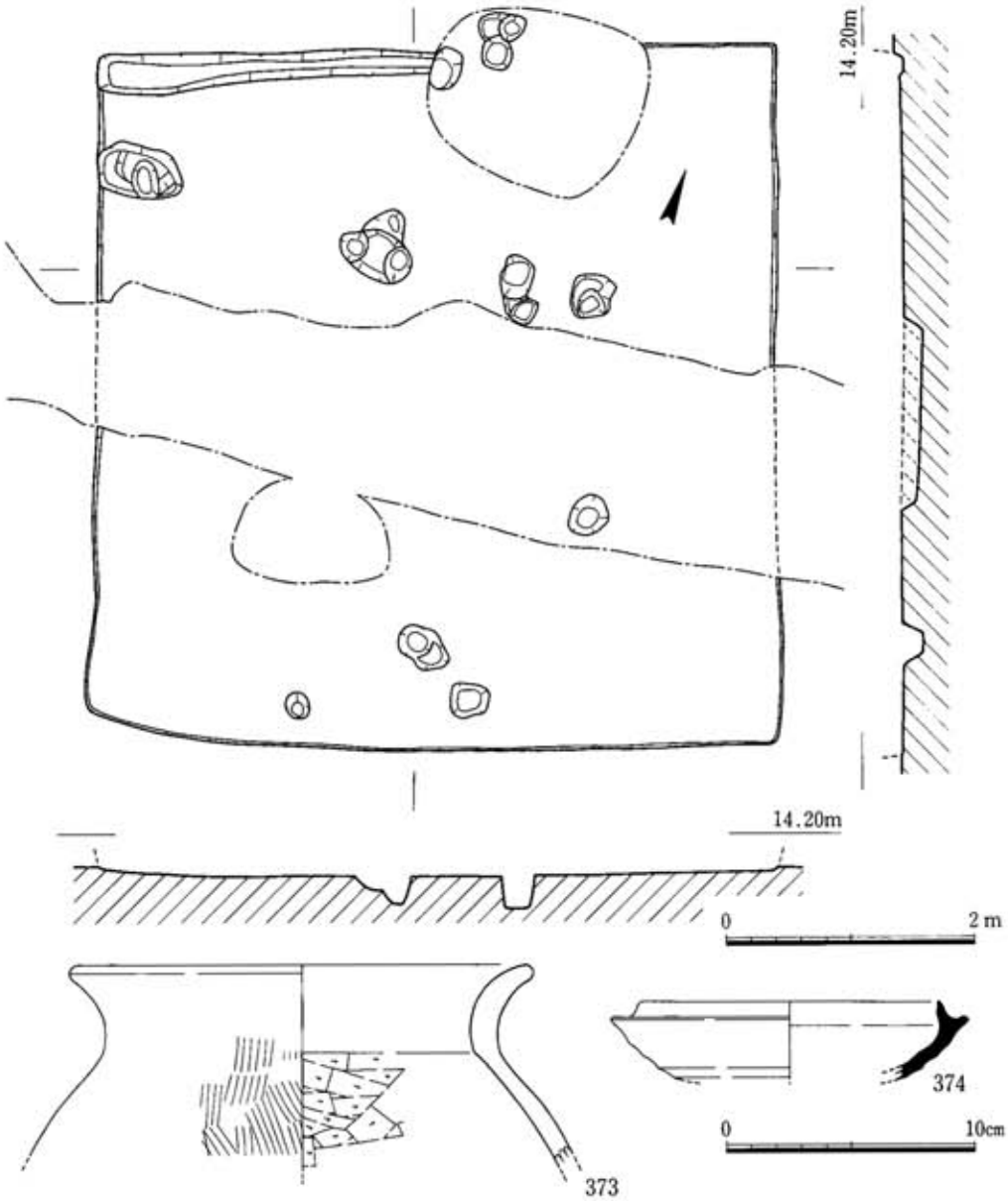


Fig. 68　SB139竪穴住居（1/60）、出土遺物（1/3）

SB150竪穴住居

(Fig. 69)

調査区北端の中央やや西寄りに位置する。SB183・185竪穴住居より新しい。平面形は3.85×3.3mのやや不整形な方形で、面積約12.80㎡を測る。主軸はN40°Wである。主柱穴は不明である。5～7㎝ほどの貼床がみられる。

カマドは北西辺ほぼ中央に設置され、壁外方に掘りこむ形態である。カマド周辺には柱穴などがみられるが、どれがカマドに関連するかどうかは不明である。袖などについても不明である。袖付近と考えられる位置から、土師器椀が出土している。

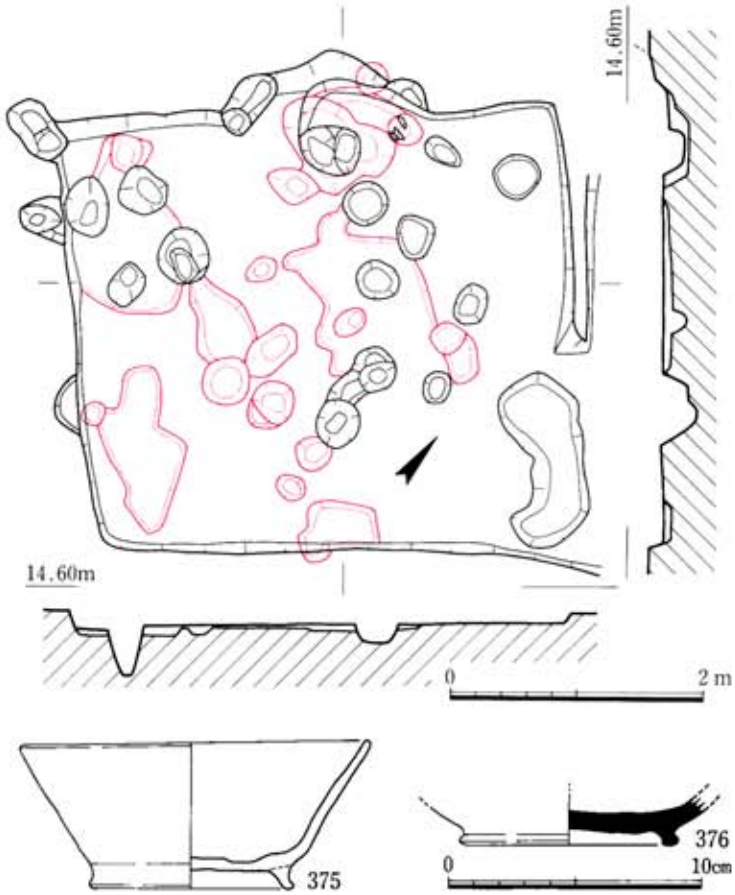


Fig. 69　SB150竪穴住居（1/60）、出土遺物（1/3）

375は直線的な体部の土師器椀である。口径13.9㎝、器高5.9㎝、高台径8.1㎝を測る。底部はヘラ切り後ヨコナデである。**376**は須恵器高台付坏で、高台径8.6㎝である。磨滅により不明瞭であるが、底部は回転ヘラケズリと思われる。焼成が悪く、灰白色を呈する。

SB152竪穴住居（Fig. 70）

調査区中央北西寄りに位置する。弥生時代のSB153・154竪穴住居、中世のSD068・069・070溝と重複する。平面形は一辺5.97mほどの方形で、主軸はN31°Wである。4本主柱で、北東辺と南東辺に周溝がめぐる。

カマドは北西辺の形態や炭化物が確認されていることから、北西辺ほぼ中央に設置され、壁外方に掘りこむ形態であると推定される。袖などは確認されていない。

SB161竪穴住居（Fig. 71・72）

調査区中央北端に位置する。平面形は4.48×4.43mの方形で、面積19.42㎡を測る。主軸はN33° Wである。4本主柱で、全辺に周溝がめぐる。住居掘形には壁に沿って幅0.3mほどの掘り込みがある。

カマドは北西辺中央部に設置され、壁外方に掘りこむ形態である。袖は地山土である砂混じ

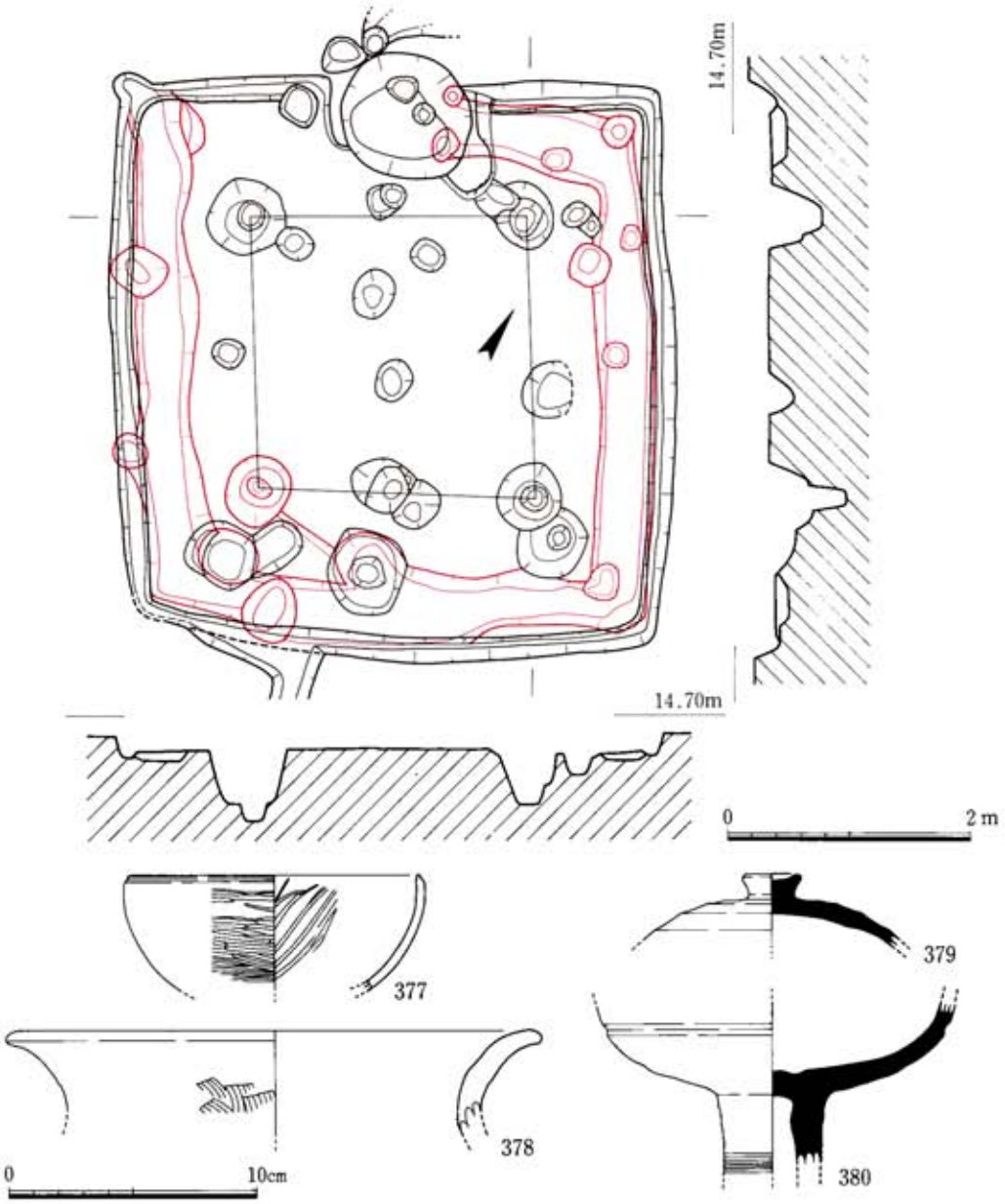


Fig. 71　SB161竪穴住居（1/60）、出土遺物（1/3）

りの灰黄褐色粘質土と暗褐色土で構築される。燃焼部床面は住居床面より若干掘りくぼめられている。

377は土師器坏で、復原口径11.6cmである。口唇部外面に沈線が1条めぐる。外面は横方向のヘラミガキで、内面は暗文を意図したと思われるヘラミガキを斜めに施す。**378**は土師器甕で、復原口径20.6cmである。

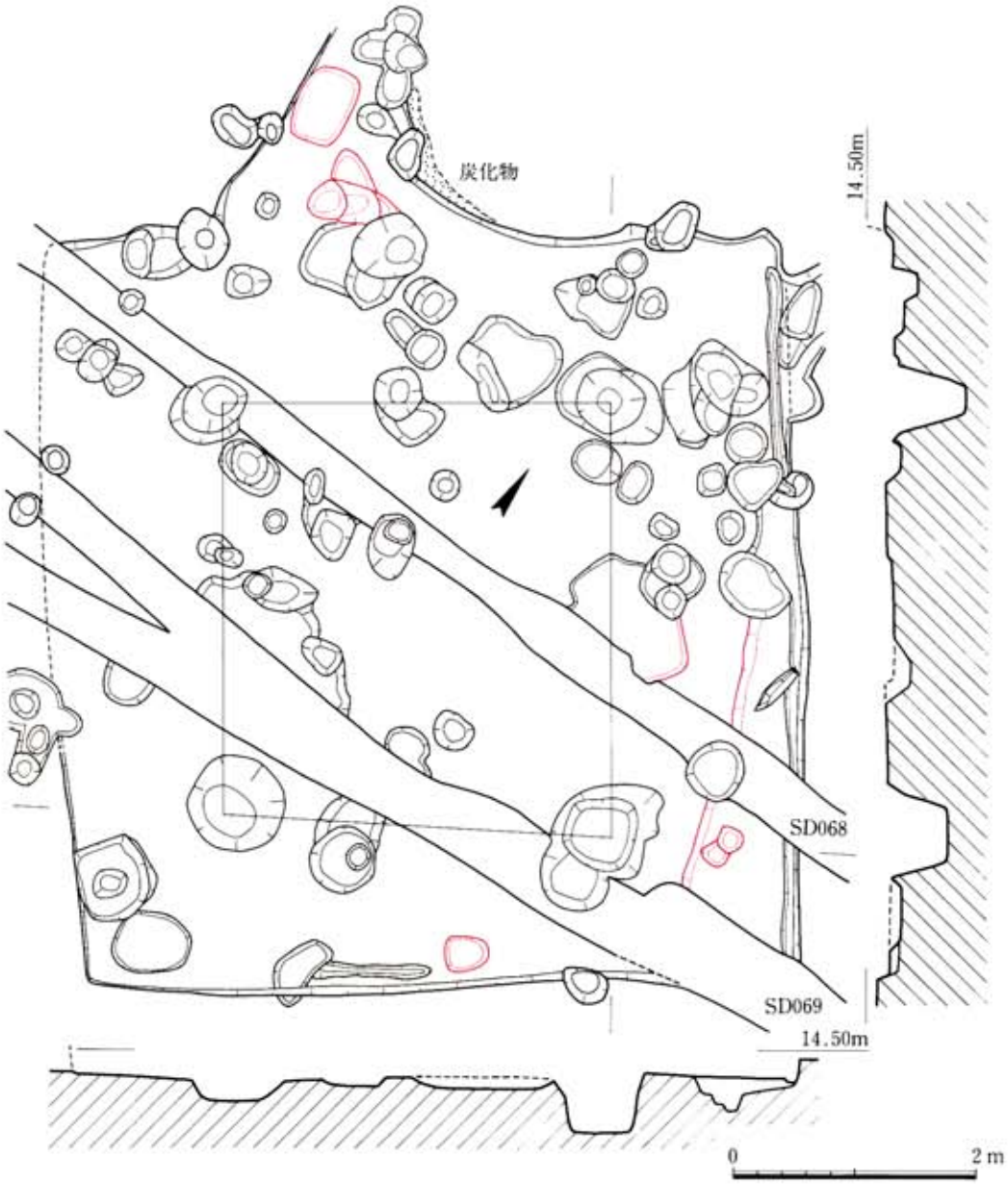


Fig. 70　SB152竪穴住居（1/60）

1．暗褐色土（地山土の灰黄褐色粘質土粒を含む）
2．暗褐色土（カマド上部構造の崩れ、地山土粒を多量に含む）
3．暗褐色土（地山土粒、焼土を含む）
4．暗褐色土（焼土・地山土を多量に含む）
5．褐色土（焼土・地山土を多量に含む）
6．地山土ブロック（上部の構造の崩れ）
7．褐色土（地山土を多量に含む）
8．暗褐色土（地山土・焼土を含む）
9．8と同じ
10．褐色土（地山土粒を多量に、焼土を少量含む）
11．黒褐色土（炭化物を多量に、地山土粒・焼土を含む）
12．褐色土（地山土粒・焼土を含む）
13．暗褐色土（地山土粒・焼土・炭化物を含む）
14．暗褐色土（1層に類似するが、地山土粒をより多く含む）
15．暗褐色土（焼土・地山土粒を含む）
16．褐色土（焼土・地山土粒・炭化物を多量に含む）
17．褐色土（焼土・地山土粒・炭化物を多量に含む）

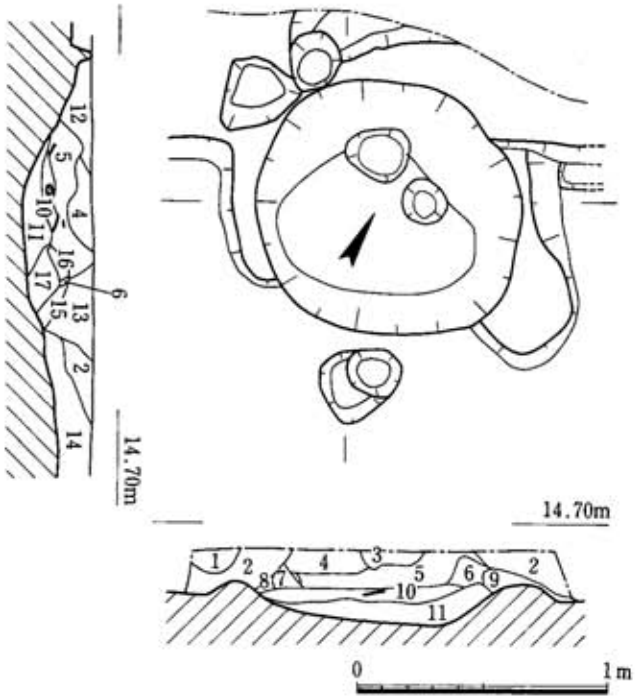


Fig. 72　SB161竪穴住居カマド（1/30）

379は須恵器蓋で、高いボタン状のつまみがつく。天井部は回転ヘラケズリである。**380**は須恵器高坏である。坏部外面に1条沈線がめぐり、脚部にも沈線が施されているようである。焼成がやや不良で、にぶい黄橙色を呈す。

SB164竪穴住居（Fig. 73）

調査区北端西寄りに位置する。北側約半分が調査区外にある。平面形は方形になるものと考えられ、東西軸は3.82mである。4本主柱と推定できる。調査時にはカマドが西辺にあったとされるが、不明確である。

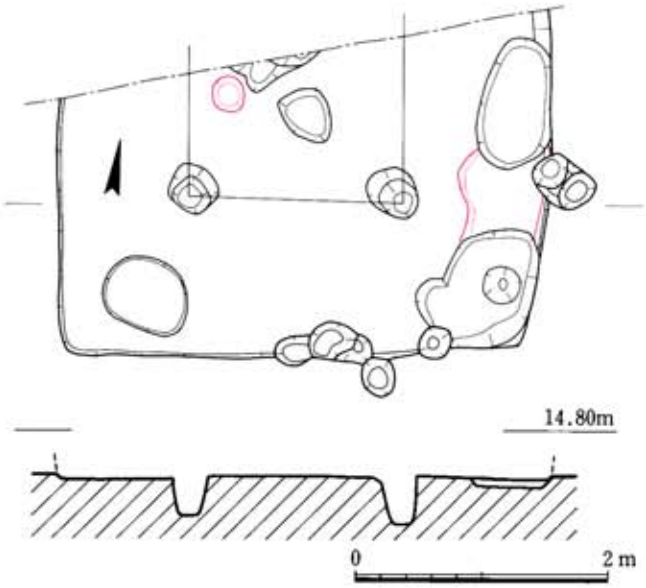


Fig. 73　SB164竪穴住居（1/60）

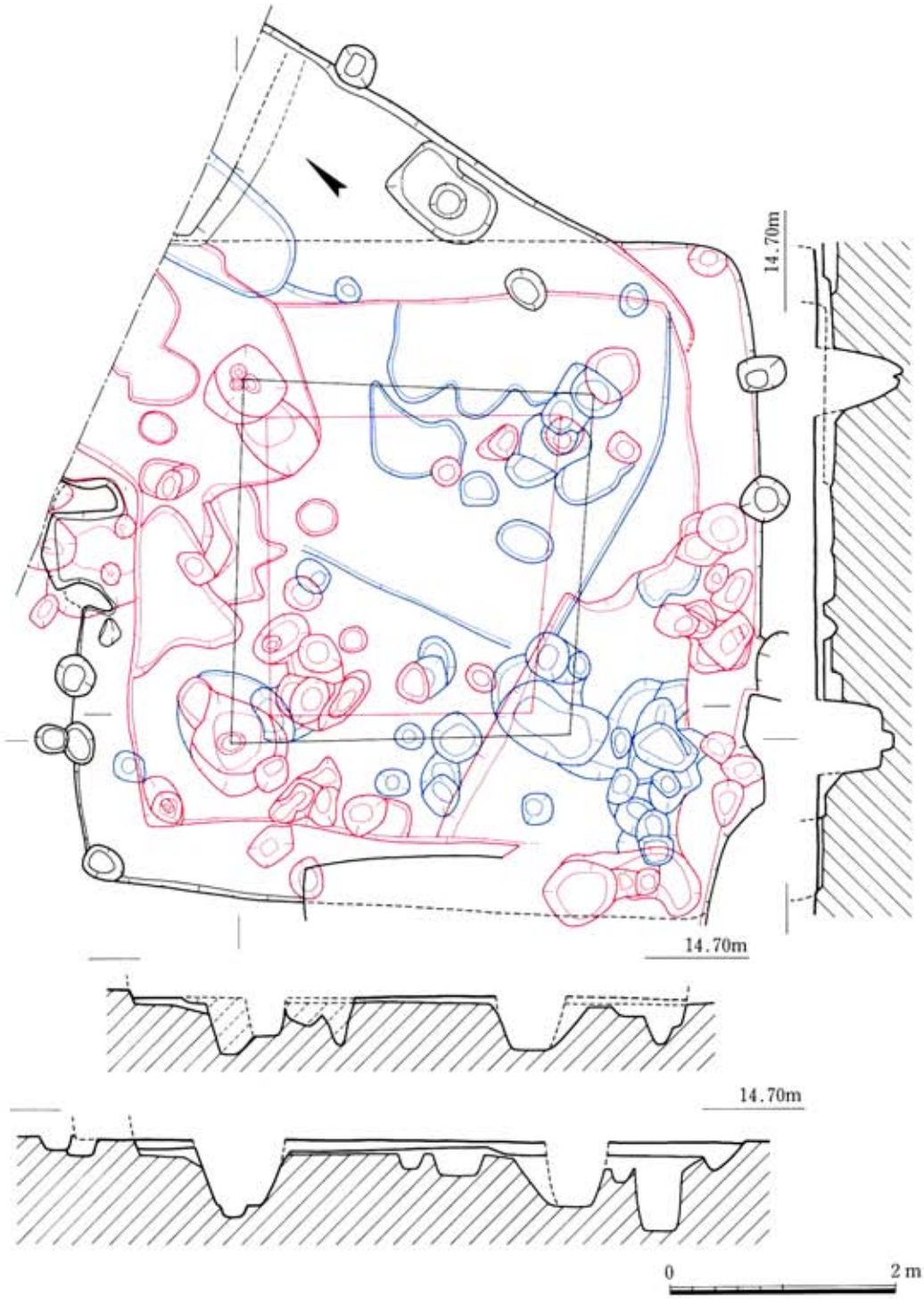


Fig. 74　SB183・185竪穴住居（1/60）

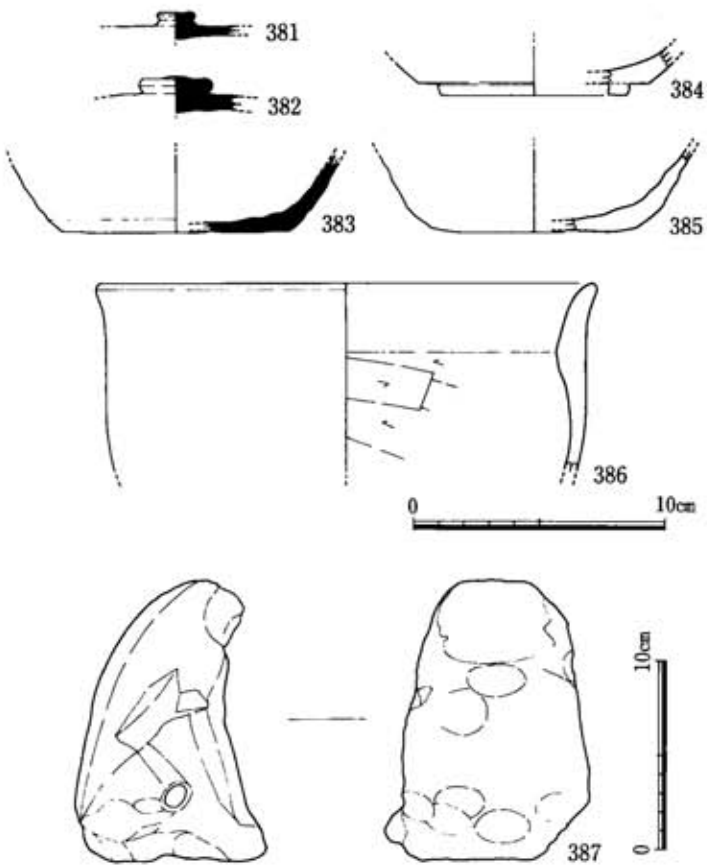


Fig. 75　SB183竪穴住居出土遺物（387；1/4、他；1/3）

SB183・185竪穴住居

（Fig. 74・75）

調査区中央北端西寄りに位置する。SB150竪穴住居より古く、弥生時代のSB184竪穴住居と重複する。

調査時には北西、南西部分をSB183竪穴住居、南東部分をSB151竪穴住居、中央をSB185竪穴住居として、三つの遺構番号を付していた。しかし、平面図でみる限り、SB183とSB151は同一住居とみられる。また、SB185は位置的にみて、建て替え以前のものと考えられる。そこで、ここでは同一住居の建て替えとして報告し、SB151を欠番とした。

建て替え以前のSB185竪穴住居は、平面形が4.92×4.82mの方形である。主軸はN43°Wで、4本主柱である。カマドは北西辺ほぼ中央にある掘り込みがその痕跡と考えられる。

建て替え後のSB183竪穴住居は、北東部が不明確であるが、平面形が一辺5.94mほどの方形になると考えられる。主軸はN42°Wで、4本主柱である。カマドは北西辺ほぼ中央に設置され、壁外方に掘りこむ形態である。袖は灰白色粘土で構築される。

381・382は須恵器蓋で、扁平なつまみがつく。381はつまみ径1.5cmと小さなものである。**382**は須恵器坏で、復原底径9.0cmである。底部はヘラ切り未調整である。**384**は土師器高台付坏で、復原底径7.4cmである。**385**は土師器坏で、復原底径8.2cmである。底部ヘラ切り未調整である。**386**は土師器甑で、復原口径19.4cmである。**387**は土製支脚である。図示できないが、土製カマドの破片が出土している。

SB186竪穴住居（Fig. 76）

調査区中央北端東寄りに位置する。住居の北側約半分が調査区外にある。SB192・193竪穴住居より新しく、弥生時代のSB190竪穴住居と重複する。平面形は、カマドの位置を南西辺中央とすると長方形となり、東西軸7.15mである。主軸はS64°Wで、4本主柱と考えられる。

カマドは南西辺に構築され、わずかに壁外方に張り出す形態である。右袖は不明である。

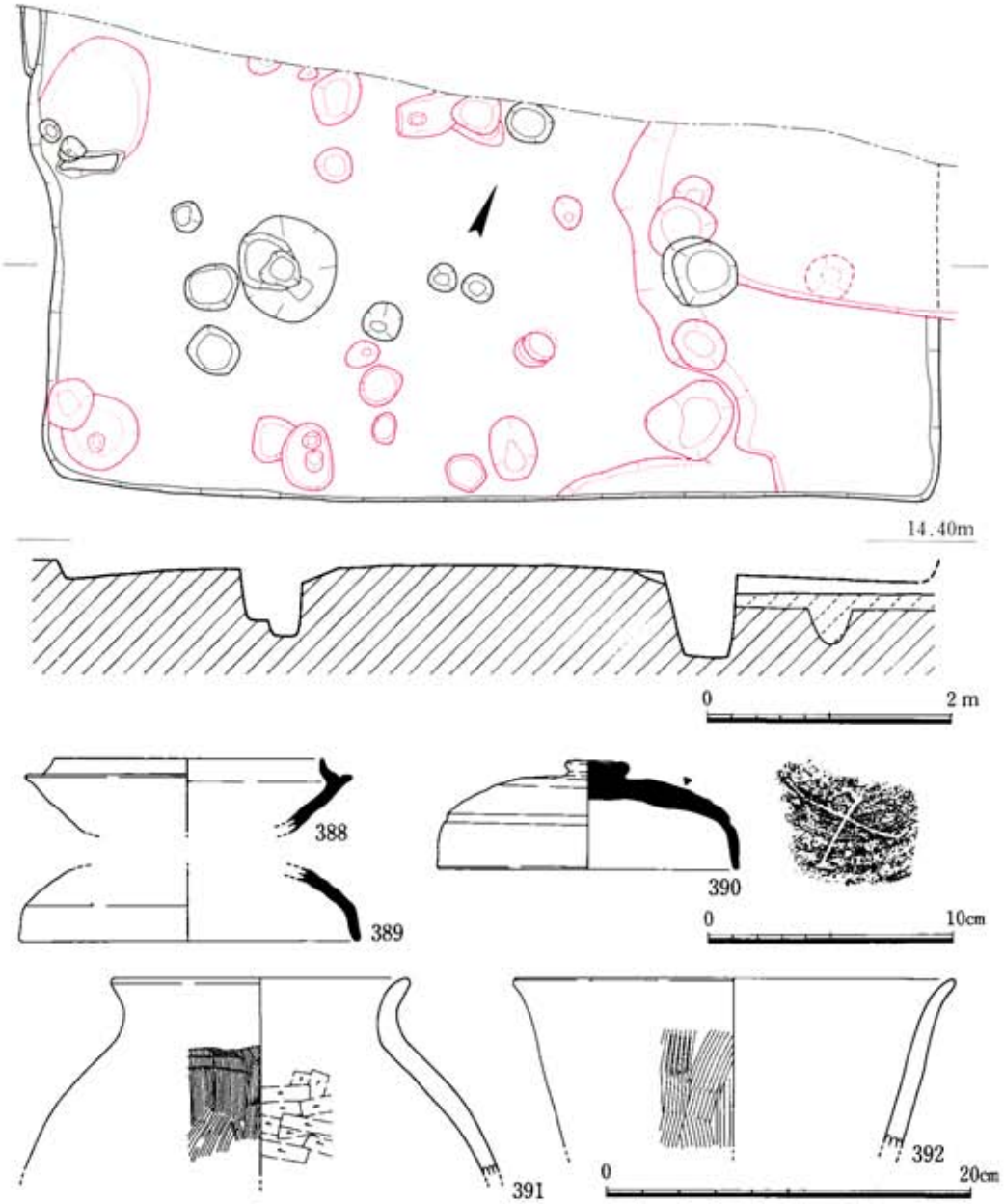


Fig. 76　SB186竪穴住居（1/60）、出土遺物（388～390；1/3、391・392；1/4）

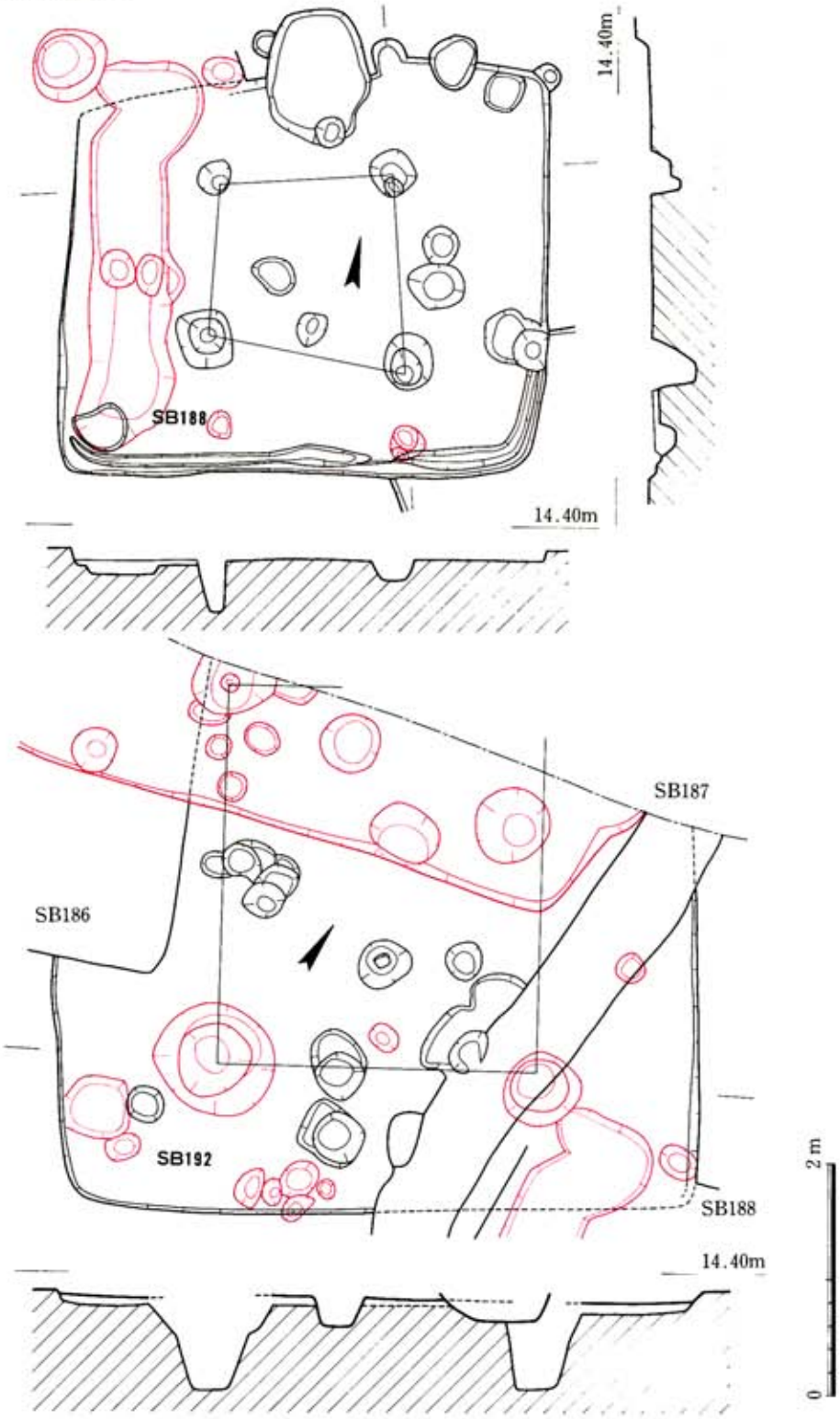


Fig. 77　SB188・192竪穴住居（1/60）

388は須恵器坏で、復原口径11.2cmである。**389・390**は須恵器蓋である。**389**は復原口径14.2cmである。**390**は復原口径12.4cm、器高4.4cmで、扁平なつまみがつく。天井部は回転ヘラケズリで、「×」のヘラ記号がある。にぶい黄橙色を呈する。**391**は土師器甕で、復原口径24.2cmである。**392**は土師器甑で、復原口径16.6cmである。

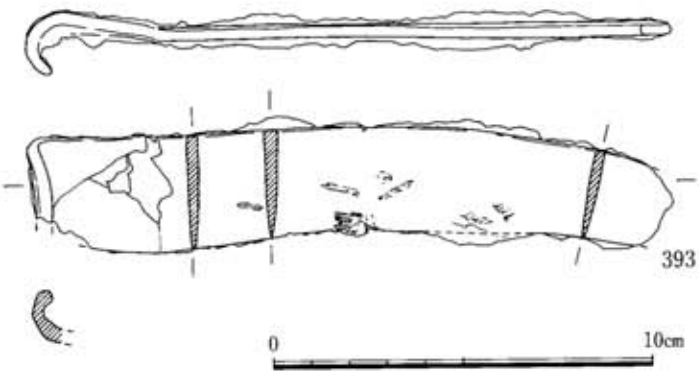


Fig.78　SB188竪穴住居出土遺物（1/2）

SB188竪穴住居（Fig.77・78）

調査区北東に位置する。SB192・194竪穴住居より新しい。平面形は長軸4.13m、短軸3.56mの長方形である。主軸はN10°Wで、4本主柱である。南東隅から南辺にかけて周溝がめぐる。カマドは北辺ほぼ中央に設置され、壁外方に掘りこむ形態である。袖などは不明である。

393は鉄鎌である。ほぼ完存しているが、基部が一部欠損している。先端部は錆のためどこまでが欠損しているか正確には不明である。残存長17.2cm、幅3.1cm、厚さ0.4cmである。

SB192竪穴住居（Fig.77）

調査区中央北端東寄りに位置する。住居北側が調査区外にある。SB186・188竪穴住居、時期不明のSD187溝より古く、SB193竪穴住居より新しい。平面形は方形になるものと考えられ、東西軸5.51mである。主軸はN34°Wで、4本主柱である。カマドは不明である。

SB194竪穴住居（Fig.79）

調査区北東に位置する。SB188竪穴住居、SB201掘立柱建物、時期不明のSD187溝より古い。SB196竪穴住居との新旧関係は不明である。平面形は西辺が不整形な4.92×4.6mほどの方形である。主軸はN28°Wで、4本主柱である。北辺中央西寄りに焼土が検出されており、カマドの痕跡と考えられる。壁外方に張り出さない形態のものが想定される。

394は須恵器椀で、復原口径12.8cmである。体部下半部に沈線が1条めぐる。底部は外縁部のみ回転ヘラケズリで、他は手持ちヘラケズリか。**395**は須恵器壺の口縁部で、復原口径14.7cmである。

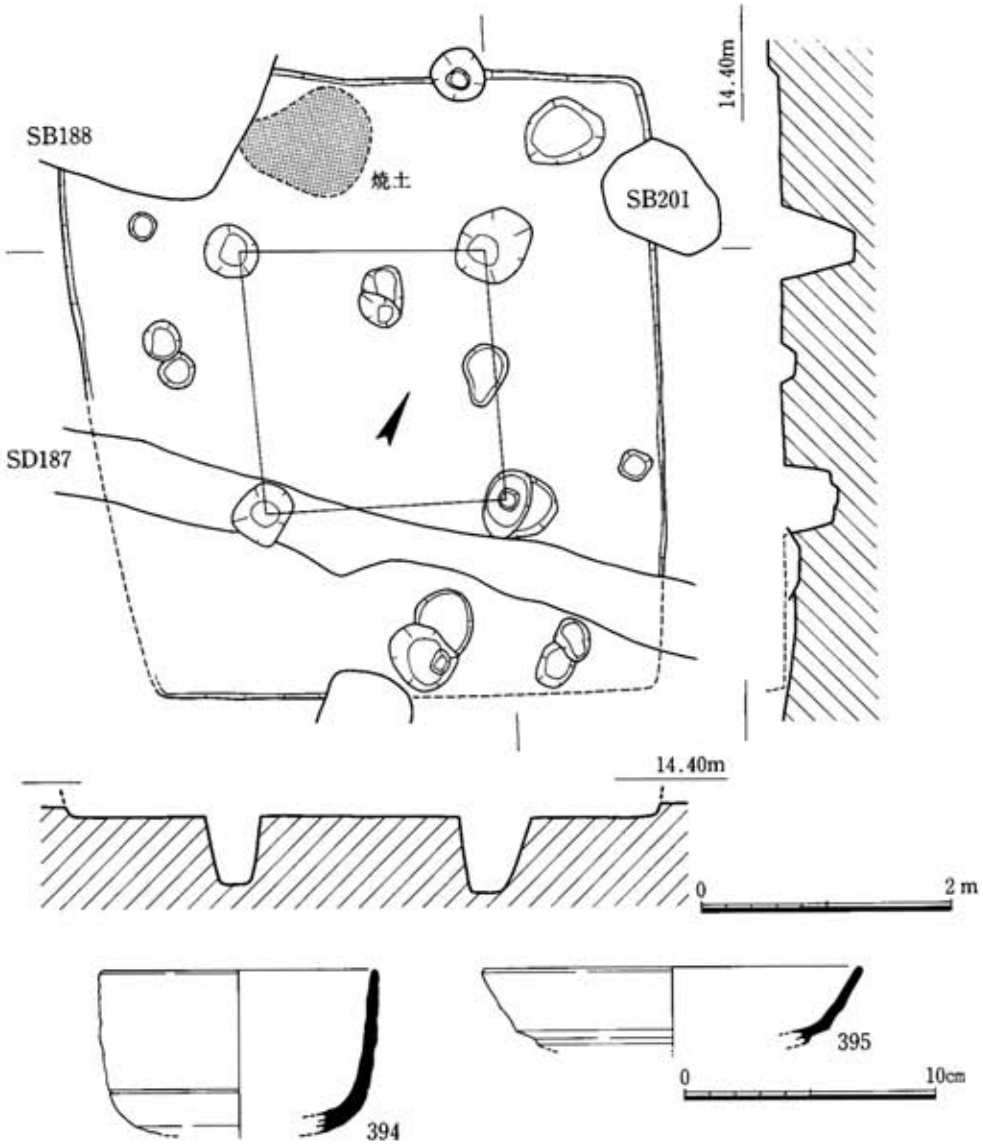


Fig. 79　SB194竪穴住居（1/60）、出土遺物（1/3）

SB196竪穴住居（Fig. 80）

調査区北東に位置する。SB197竪穴住居、SB201掘立柱建物より古い。SB194竪穴住居との新旧関係は不明である。平面形は方形になるものと考えられるが、北側半分は明確ではない。東西軸3.88mで、主軸はN28°Wである。主柱穴は不明である。カマドは西辺にあった可能性がある。

なお、調査時にはこの住居の北側をSB198竪穴住居としていたが、住居とするには難しいと考えて報告書では欠番とした。

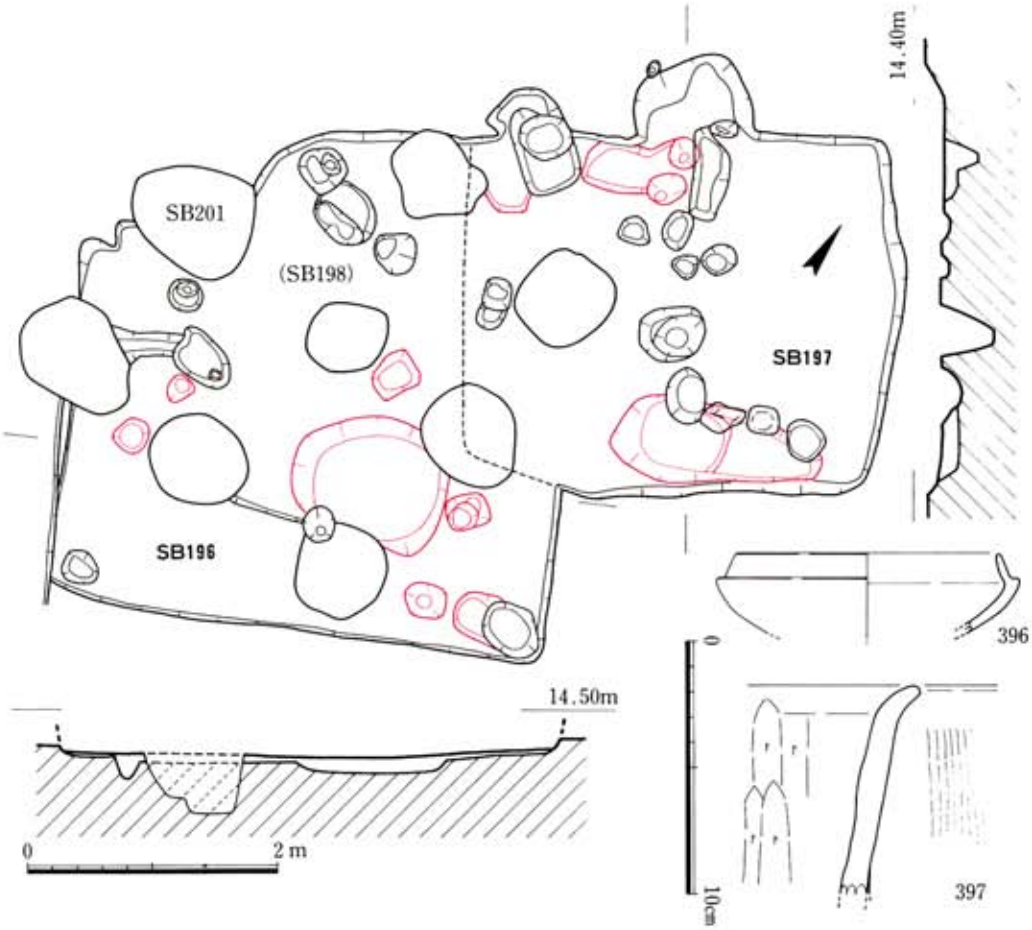


Fig. 80　SB196・197竪穴住居（1/60）、出土遺物（1/3）

SB197竪穴住居（Fig. 80）

調査区北東に位置する。SB196竪穴住居より新しく、SB201掘立柱建物との新旧関係は不明である。平面形は正確には不明であるが、カマドの位置などからみて長方形になるものと推定される。短軸2.68mで、主軸はN35°Wである。主柱穴は不明である。

カマドは北西辺に設置され、ほぼ中央にあるものと考えられる。壁外方に掘りこむ形態で、袖などは不明である。

396は土師器の模倣坏で、復原口径10.2cmである。内外面に黒塗りが施される。**397**は土師器甑で、胴部に把手の痕跡がみられる。

SB206竪穴住居（Fig. 81・82）

調査区北東隅に位置する。SB210竪穴住居より古いと考えられ、SB209竪穴住居より新しい。弥生時代のSB211・215竪穴住居と重複する。平面形は4.4×4.02mの不整形な方形になると推

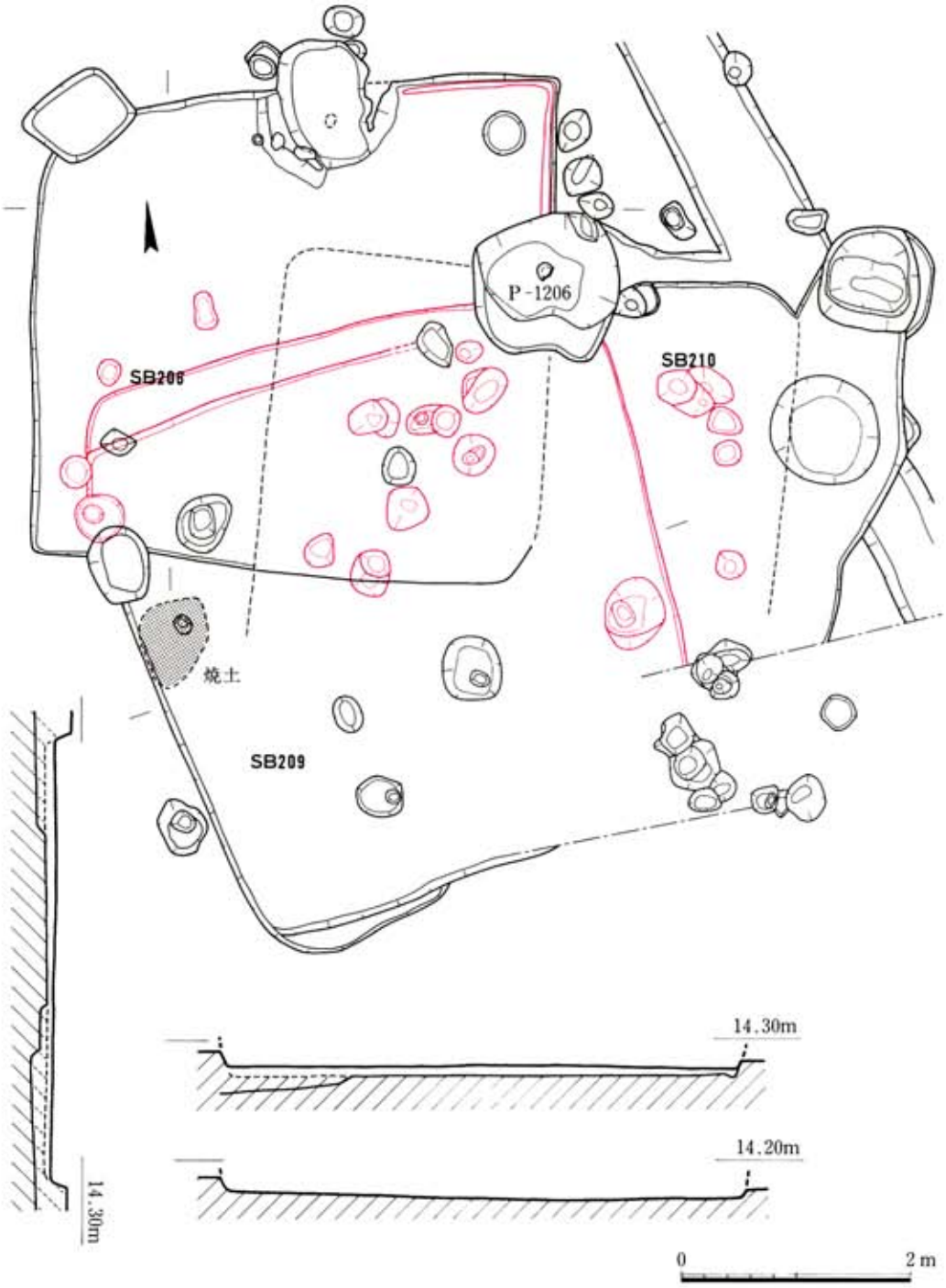


Fig. 81　SB206・209・210竪穴住居（1/60）

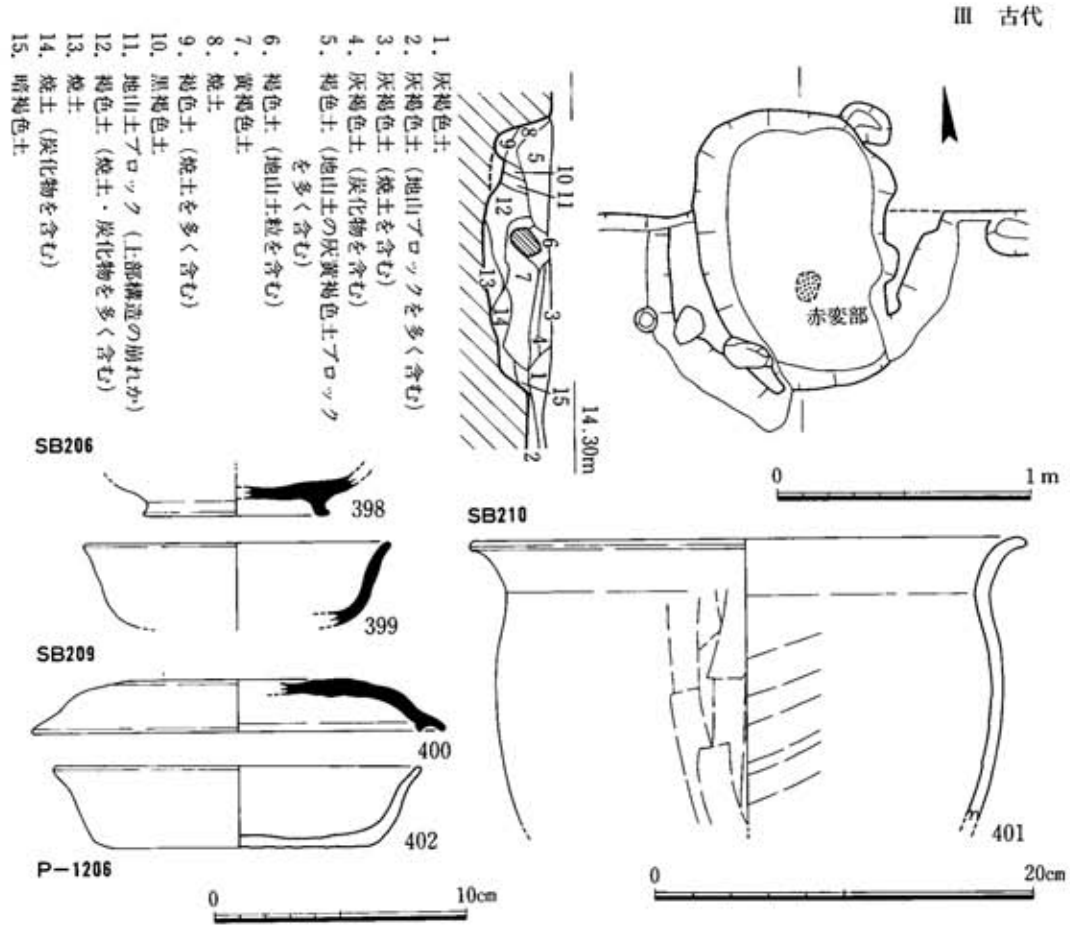


Fig. 82　SB206竪穴住居カマド（1/30）、SB206・209・210竪穴住居出土遺物（401：1/4、他：1/3）

定され、主軸はN 5° Eである。主柱穴は不明である。6～8cmほどの貼床がみられる。北東隅の貼床下に壁に沿って深さ3cmほどの小溝がある。

カマドは北辺ほぼ中央に設置され、壁外方に掘りこむ形態である。燃焼部床面は住居床面から15cmほど掘りくぼめられ、一部焼けて赤変している部分がある。左袖などに礫石があるがカマドとの関連は不明である。

398は須恵器高台付坏で、復原高台径7.4cmである。底部はヘラ切り未調整である。**399**は須恵器坏で、復原口径12.2cmである。

SB209竪穴住居（Fig. 81・82）

調査区北東隅に位置する。SB206・210竪穴住居より古い。平面形は4.6×4.54mのやや不整形な方形で、主軸はS76° Wである。主柱穴は不明である。カマドは西辺やや北寄りの焼土がその痕跡と考えられる。

400は須恵器蓋で、復原口径14.4cmである。天井部回転ヘラケズリである。

SB210竪穴住居（Fig. 81・82）

調査区北東隅に位置する。SB209竪穴住居より新しい。SB206竪穴住居上に貼床が確認できたことから本竪穴住居が新しいと考えられる。残存状況は非常に悪く、明確なのは北東隅のみである。主軸はN10° Eほどと考えられる。北辺のほぼ中央にある小穴（P－1206）は、深さからは本住居に直接的な関係がないとみられるが、カマドに何らかの関連がある可能性もある。

401は土師器甕で、復原口径28.7cmである。SB206から出土した破片と接合する。胴部内外面は板状工具によるナデである。**402**はP－1206小穴出土の土師器坏で、口径14.5cm、器高3.3cm、底径11.3cmである。底部は手持ちヘラケズリである。

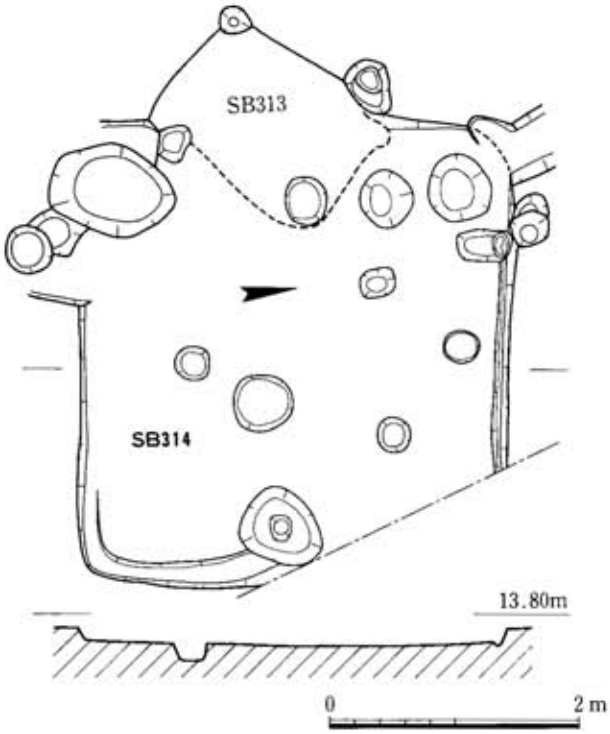


Fig. 83　SB302竪穴住居（1/60）

SB302竪穴住居（Fig. 83）

調査区南東隅に位置する。北東隅が調査区外にあり、弥生時代のSB313掘立柱建物との重複などで南西隅は不明確である。平面形は方形で、南北軸3.32mである。主軸はN 7° Eで、主柱穴は不明である。北辺と南東隅に周溝がめぐる。カマドが構築されているとすれば、東辺やや北寄りと考えられる。

2. 掘立柱建物

SB013掘立柱建物（Fig. 84）

調査区中央西寄りに位置する。弥生時代のSB006・007・008・009竪穴住居と重複する。梁行3間（5.08m）、桁行5間（12.6m）で、主軸をN 6° Wにとる南北棟建物である。北辺から1間目の中間の柱穴列は、建て替えなど別の掘立柱建物のものとは考えにくいので、確実ではないが半間の庇としておく。P 8 －P15間に間仕切りとみられる柱穴がある。柱間距離は梁行平均1.69m、桁行平均2.52mであるが、それぞれ1.62～1.74m、2.3～2.8mとばらつきがあ

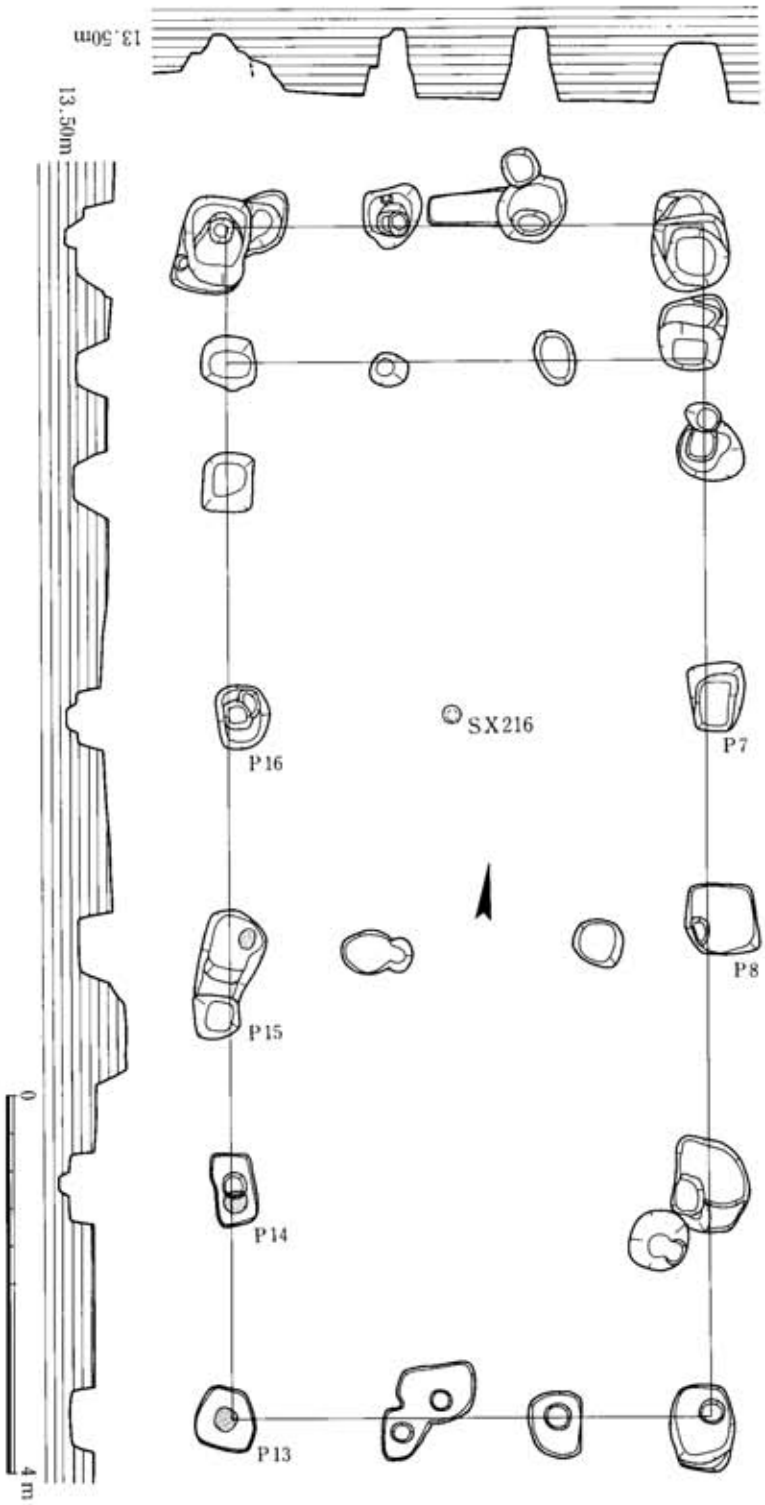


Fig. 84　SB013掘立柱建物（1/80）

る。柱痕跡はP13、P14、P15で平面的に検出されており、土層断面での確認ではないが、径16～20cmである。柱の掘形は0.6×0.7mほどの隅丸長方形を基本としているが、やや不整形なものが多い。

P7とP16のほぼ中間に土師器高台付坏と蓋がセットで埋納されたSX216埋納遺構があり、位置的にみて本掘立柱建物に関係するものと考えられる。何らかの祭祀的な意味があると想定される。

SB015掘立柱建物

（Fig. 85）

調査区西側中央に位置する。2間(3.56m)×2間（3.84m）の総柱建物で、主軸はN 4°Wである。SB030(古)・138掘立柱建物と東辺をほぼそろえて並んでいる。柱間心々距離は桁行で1.92mとほぼ等間隔であるが、梁行は1.66mと1.9mと　均等ではない。柱痕跡は

径20～32cmで、平均24cmである。柱の掘形は一辺0.6～0.9mの隅丸方形を基本としている。埋土は暗褐色土と黒褐色土で、版築状をなす部分がある。

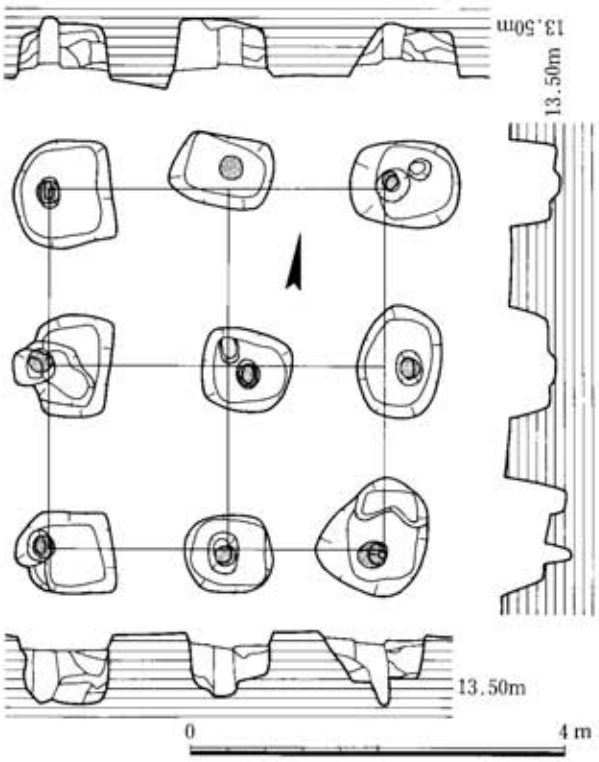


Fig.85　SB015掘立柱建物（1/80）

SB020掘立柱建物（Fig.86）

調査区南端中央西寄りに位置する。中世のSB055掘立柱建物と重複する。梁行3間、桁行4間の東西棟建物であるが、ややゆがんだ構造である。梁行東辺4.82m、西辺5.02m、柱間距離1.24～1.94m、桁行北辺8.24m、南辺7.92m、柱間距離1.64～2.32mと全体的に不揃いである。主軸は、柱穴の形状を考慮してなるべく長方形に近い形で復原するとN80°Eとなる。また、平面のみでの検出で不確実ではあるが、柱痕跡から北辺の柱筋を主軸にとるとN79°Wとなる。SB021掘立柱建物と北辺をほぼそろえている。土層断面での確認ではないが、柱痕跡は径17～20cmである。柱の掘形は一辺0.3～0.4mの隅丸方形を基本としていると考えられるが、切合をもつものがあり、明らかにできなかったが建て替えがあった可能性もある。

403は須恵器高台付坏で、復原口径14.0cm、器高5.4cmである。全体的に雑なつくりである。

SB021掘立柱建物（Fig.86）

調査区南端中央に位置する。弥生時代のSB418竪穴住居、中世のSB050掘立柱建物、SK025土壙と重複する。南半が調査区外にある。東西は3間（6.94m）で、南北は3間まで確認できる。それぞれの柱間心々距離を考慮すると、東西棟建物であろうか。主軸は、柱穴を考慮して長方形に復原すればN80°Eで、北辺の柱筋をとればN79°Eとなる。SB020掘立柱建物と北辺をほぼそろえている。柱間心々距離は北辺で平均2.31mであるが、P1－P2間は2.12mであり、ばらつきがあるようである。東辺でも1.5mと1.8mほどで、梁行、桁行ともばらつきがあるものとみられる。柱痕跡は径18～20cmである。柱の掘形は0.6×0.8mほどの隅丸長方形で、埋土は黒褐色系統土と暗灰褐色土である。

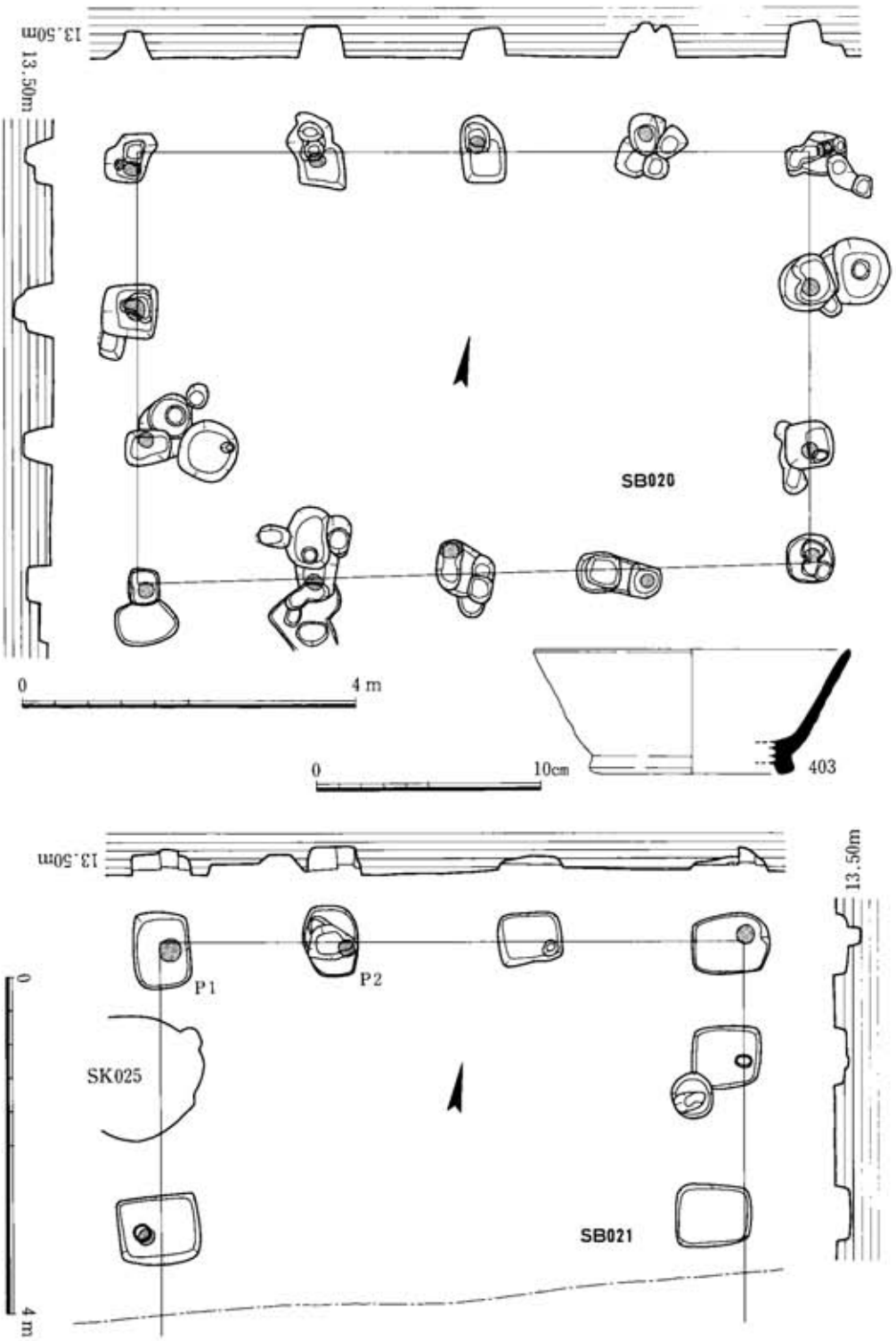


Fig. 86　SB020掘立柱建物（1/80）、出土遺物（1/3）、SB021掘立柱建物（1/80）

SB030掘立柱建物

(Fig. 87・88)

調査区南西に位置する。SB027竪穴住居より新しいと考えられ、弥生時代のSD058河川跡と重複する。発掘調査時点では1棟の建物と考えられており、2間×3間の総柱建物で、北に庇がつく掘立柱建物と考えられなくもない。しかし、庇の部分が半間にも満たないことや、柱穴に切合があるものが存在するなど建て替えとした方がよいと思われる。そこで、新旧関係は確実ではないが、2間×2間の総柱建物から2間×3間の建物への建て替えとして、それぞれSB030（古）、SB030（新）として報告することにする。

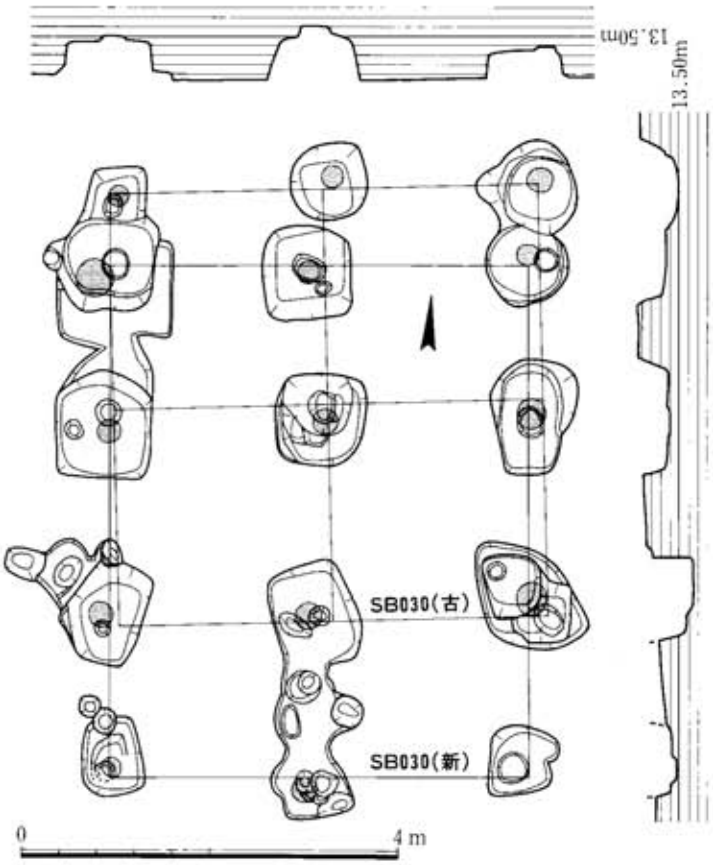


Fig. 87　SB030掘立柱建物（1/80）

SB030（古）掘立柱建物は、2間（4.54m）×2間（4.58m）の総柱建物で、主軸はN 4° Wである。SB015・138掘立柱建物と東辺をほぼそろえて並んでいる。柱間距離は約2.28mである。柱痕跡は土層断面での確認ではないが、20～30cmである。柱の掘形は一辺（径）0.5～0.7mの隅丸方形から円形である。

404はかえりがある須恵器蓋で、復原口径12.2cmで、天井部に「×」のヘラ記号がある。天井部は回転ヘラケズリである。**405**は須恵器椀で、復原口径12.3cmである。胴部に沈線が3条めぐり、底部は回転ヘラケズリである。

SB030（新）掘立柱建物は、梁行2間（4.44m）、桁行3間（5.42m）で、主軸をN 2° 30′ Wにとる南北棟建物である。柱間距離は梁行2.22m、桁行1.8mとほぼ等間隔である。柱痕跡は土層断面での確認ではないが、20～40cmとばらつきがある。柱の掘形は一辺0.6～0.9mの隅丸方形を基本としている。

406・407は須恵器蓋で、ともにかえりがある。**406**は復原口径10.6cm、**407**は復原口径12.5cm

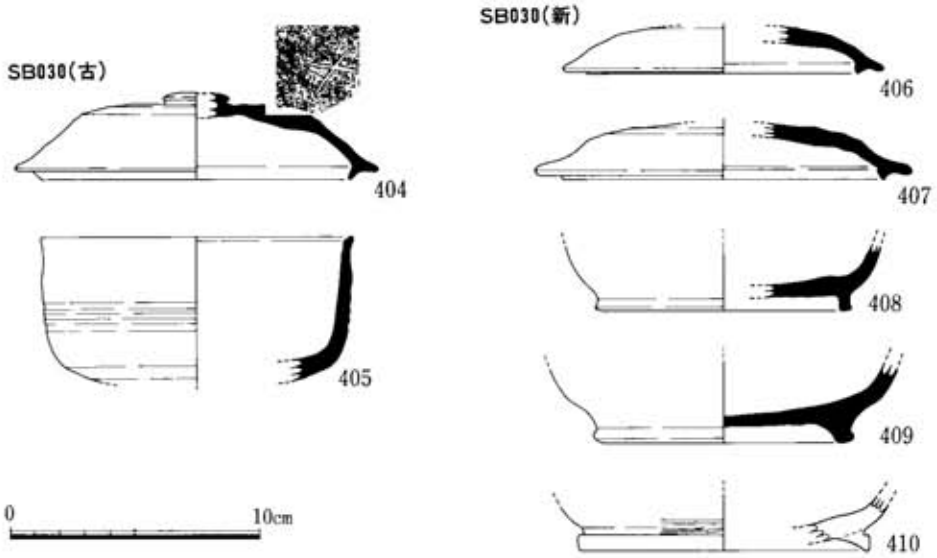


Fig. 88　SB030掘立柱建物出土遺物（1/3）

である。天井部はいずれも回転ヘラケズリを施す。**408・409**は須恵器高台付坏である。**408**は復原底径10.0cm、**409**は復原底径10.2cmで、ともに底部はヘラ切り未調整である。**410**は土師器高台付坏で、復原底径11.4cmである。坏部内外面回転ヘラミガキである。

SB033掘立柱建物（Fig. 89）

調査区南西に位置する。弥生時代のSD062河川跡と重複する。2間（2.78m）×2間（3.02m）の総柱建物で、主軸はN12°30′Wである。柱間距離は平均で梁行1.39m、桁行1.51mとなるが、ばらつきがあると推定される。柱の掘形は径0.5mほどの円形を基本としている。柱痕跡は確認されていない。

411は須恵器蓋で、かえりがある。復原口径10.6cmで、天井部は回転ヘラケズリである。

SB045掘立柱建物（Fig. 89）

調査区南端東寄りに位置する。弥生時代のSB052竪穴住居と重複し、南半が調査区外にある。東西は4間（7.3m）で、南北は2間確認できる。主軸はN84°Eで、東西棟建物であろうか。北辺の柱間心々距離は平均すると1.83mであるが、1.66～2.0mとばらつきがある。西辺のP5－P6間の柱間心々距離は1.56mを測る。柱痕跡は径20～25cmである。柱の掘形は一辺0.8～1.0mの隅丸方形で、本調査区の中ではもっともしっかりとしたものである。埋土は黒褐色土が主体で、特に版築状をなしてはいない。

412は須恵器蓋で、復原口径16.0cmである。天井部は回転ヘラケズリである。**413**は土師器坏で、復原口径14.2cm、器高3.0cmである。底部は回転ヘラケズリを施す。

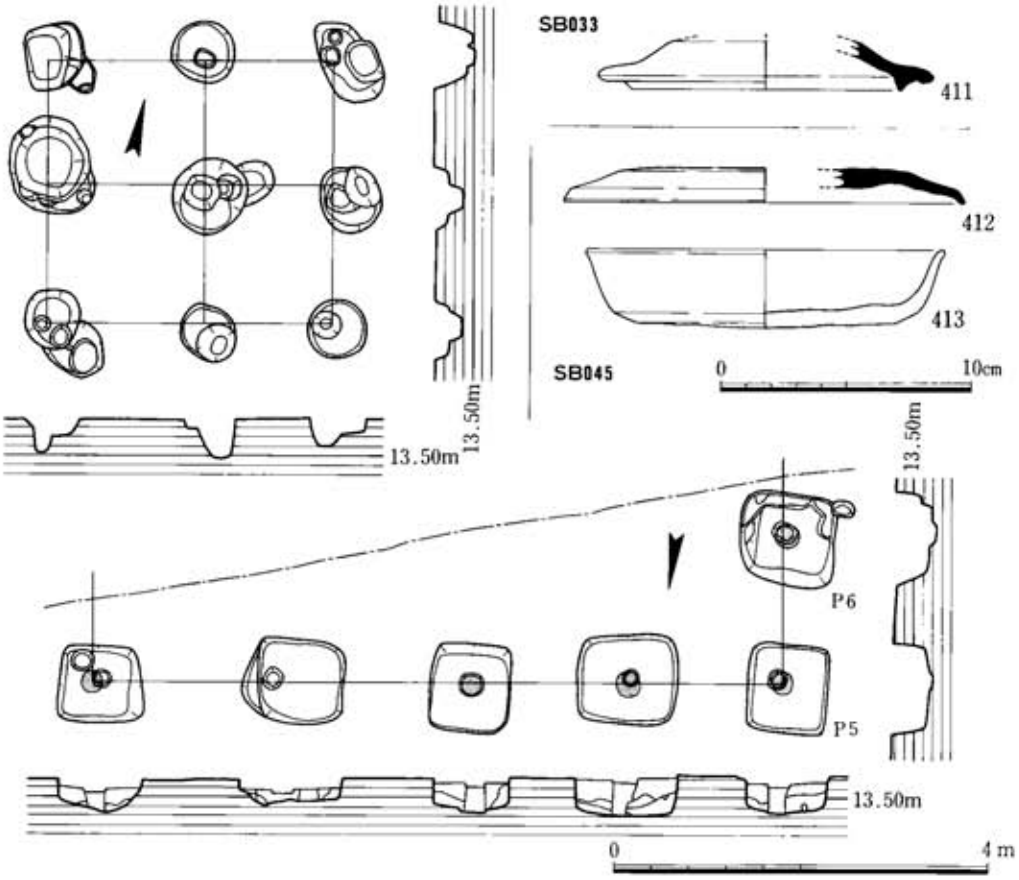


Fig. 89　SB033・045掘立柱建物（1/80）、出土遺物（1/3）

SB090掘立柱建物（Fig. 90）

調査区中央北東寄りに位置する。SK124土壙より新しく、弥生時代のSB088・089・404竪穴住居と重複する。梁行は3間（東辺4.8m・西辺4.84m）で、桁行は北辺で5間（9.1m）、南辺で3間（8.28m）と不規則で、北辺の柱間距離をほぼ均等とみれば北辺は本来6間となる。3間×3間の東西棟建物とみるのがよいだろうか。梁行がゆがんでいるが、桁行を基準とすると主軸はN82° Eとなる。柱間距離は梁行1.35～1.78m、桁行は北辺1.26～1.92m、南辺2.62～3.0mとばらつきがある。柱痕跡は径約20cmである。柱の掘形は0.7×0.5mほどの隅丸長方形を基本とする。埋土は黒褐色系統土が主体で、一部灰黒色土と版築状をなす。

SB103掘立柱建物（Fig. 90・91）

調査区東側中央に位置する。時期不明のSK129土壙より古く、弥生時代のSB176掘立柱建物と重複する。3間（4.42m）×4間（6.78m）で、主軸をN86° 30′ Eにとる東西棟建物である。SB171掘立柱建物と並ぶ。柱間心々距離は梁行1.47m、桁行1.70mとほぼそろっている。

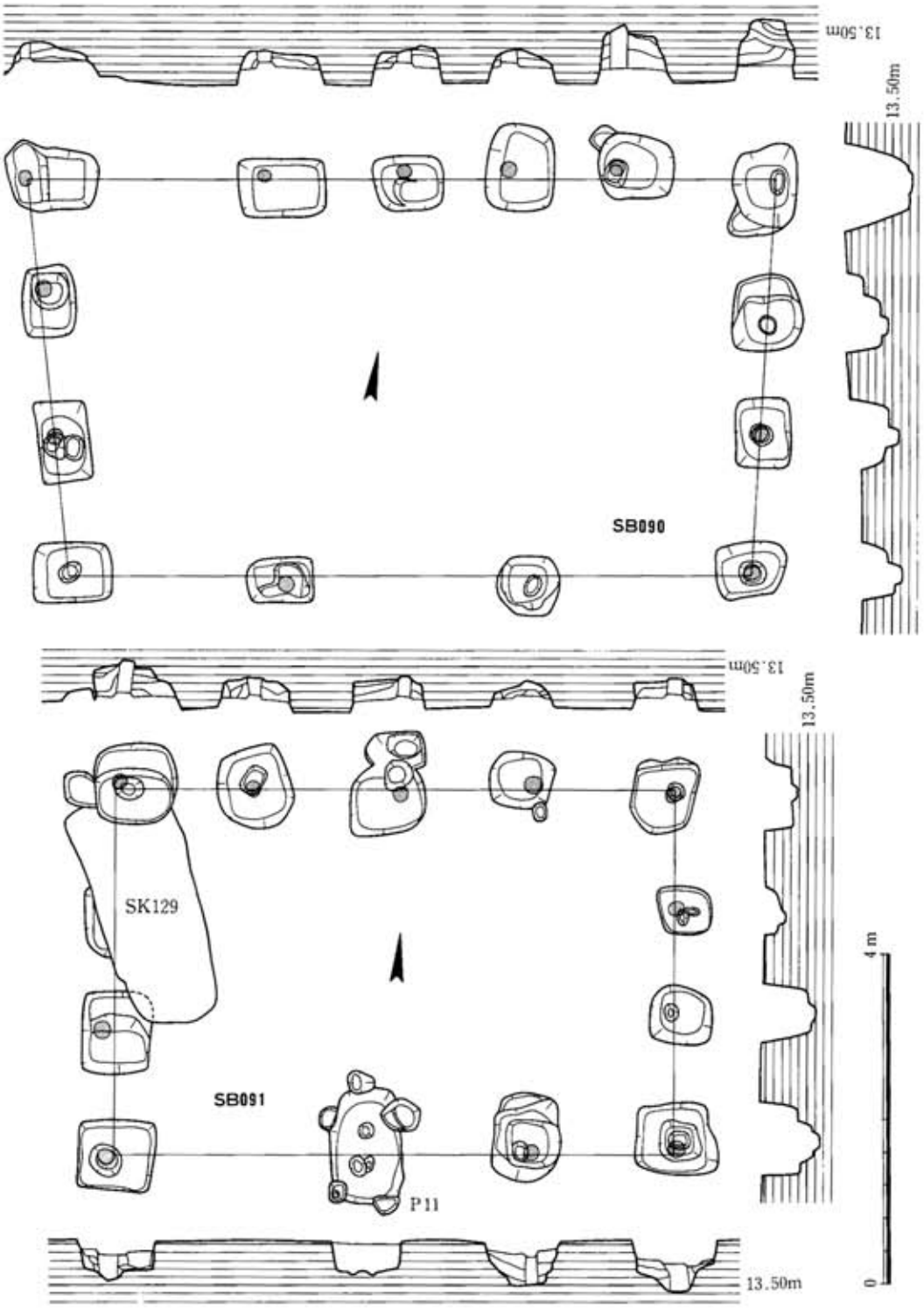
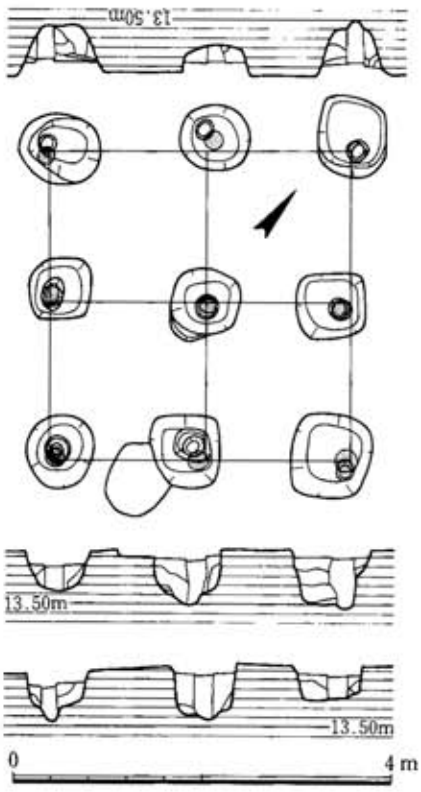


Fig. 90　SB090・103掘立柱建物（1/80）



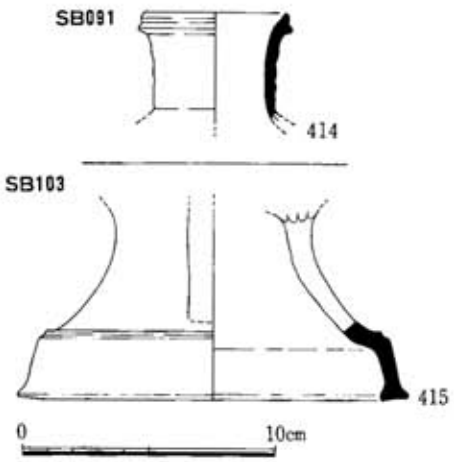


Fig. 91　SB091掘立柱建物（1/80）、
SB091・103掘立柱建物出土遺物（1/3）

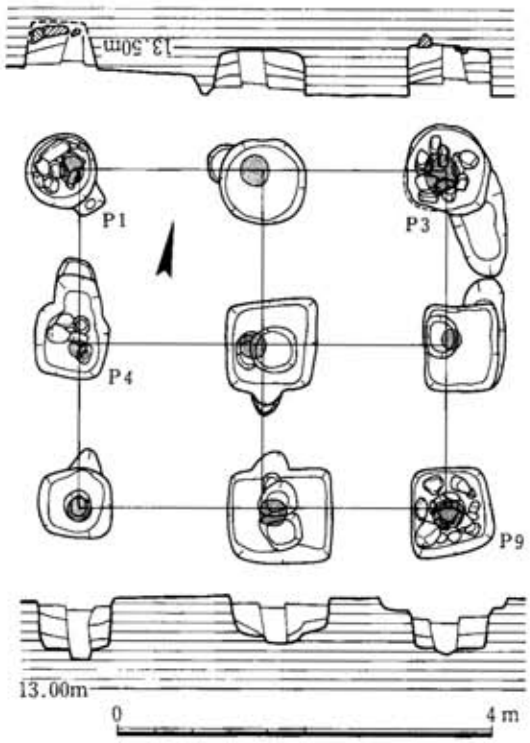


Fig. 92　SB113掘立柱建物（1/80）

（3.28m）の総柱建物で、主軸はN39°Wである。柱間距離は梁行1.59m、桁行1.64mである。柱痕跡は径17～24cmで、平均20cmである。柱の掘形は一辺（径）0.5mほどの隅丸方形から円形である。埋土は暗～黒褐色土と黄褐色土で、部分的に版築状をなす。

414は須恵器壺で、復原口径5.9cmである。

柱痕跡は径13～25cmで、平均19cmである。柱の掘形は一辺0.5～0.8mの隅丸方形が基本である。埋土は茶褐色系統と黄褐色系統の土で、版築状をなす。ただ、P11のみ灰褐色砂質土（地山土）で、地山との間に明茶色の鉄サビのような土が数mmはさまっている。また、柱痕跡も検出されず、特異な柱穴である。

415は須恵器高坏で、復原裾径15.4cmである。長方形の3方透かしがある。

SB091掘立柱建物（Fig. 91）

調査区東側中央にある。弥生時代のSB092竪穴住居、SB112掘立柱建物と重複する。2間（3.18m）×2間

SB113掘立柱建物

(Fig. 92)

調査区中央やや東寄りに位置する。弥生時代のSB084・085・419竪穴住居と重複する。2間（3.6m）×2間（3.9m）の総柱建物で、主軸はN9°Wである。柱間距離は梁行1.8m、桁行1.95mとほぼそろっている。柱痕跡は径18～30cmで、平均25cmである。柱の掘形は一辺（径）0.6～0.8mの隅丸方形から円形であるが、不整形な部分は柱の抜き跡と考えられる。P1・3・4・9には根石がある。埋土は暗褐色土と黒褐色土が主体で、版築状をなしている。

SB127掘立柱建物

(Fig. 93)

調査区中央やや南東寄りに位置する。SB128掘立柱建物と重複するが、切合での新旧関係は不明である。弥生時代のSB075・083

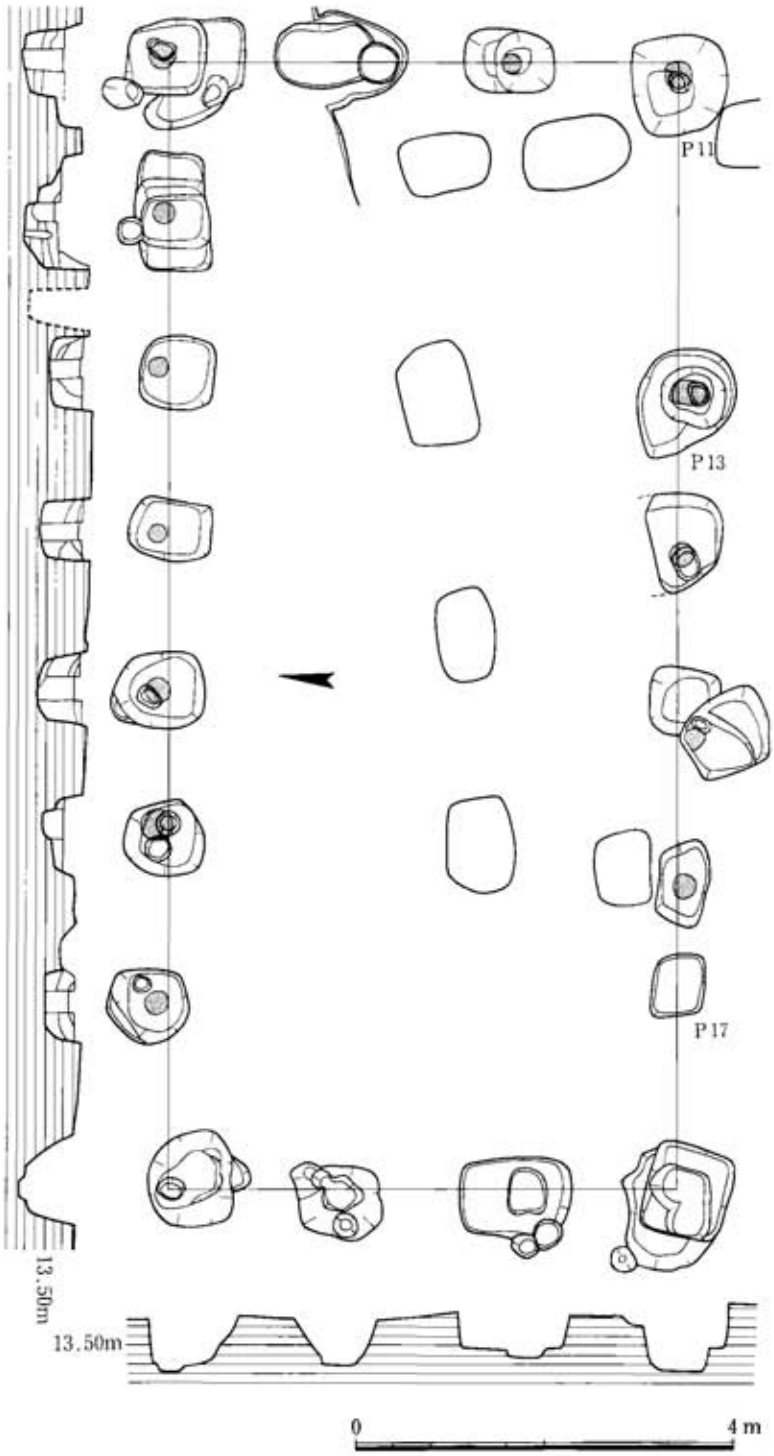


Fig. 93　SB127掘立柱建物（1/80）

・102・413・414竪穴住居、SB175掘立柱建物、中世のSD101溝、時期不明のSD217溝と重複する。梁行3間（5.4m）、桁行7間（11.94m）で、主軸をN84° 30′ Eにとる東西棟建物である。桁行南辺ではP12が検出されず、P17も等間隔ではない位置にある。柱間距離は梁行1.8mではほぞろっているのに対し、桁行は平均で1.71mであるが、1.42～1.96mとばらつきがある。柱痕跡は19～31cmで、平均24cmである。柱の掘形は一辺0.6～0.9mの方形を基本としているが、やや不整形なものが多い。埋土は暗～黒褐色土、黄褐色系統土、茶褐色系統土で、版築状をなしている。

SB128掘立柱建物（Fig.94）

調査区中央南東寄りに位置する。SB127掘立柱建物との新旧関係は不明である。弥生時代のSB049・053・075竪穴住居、SB175掘立柱建物、中世のSD101溝と重複する。梁行3間（4.8m）、桁行3間（7.32m）で、主軸をN81° Eにとる東西棟建物である。柱間距離は梁行で平均1.6mであるが、中央の1間が2.06mと長いため不均等である。桁行は2.44m等間である。柱痕跡は

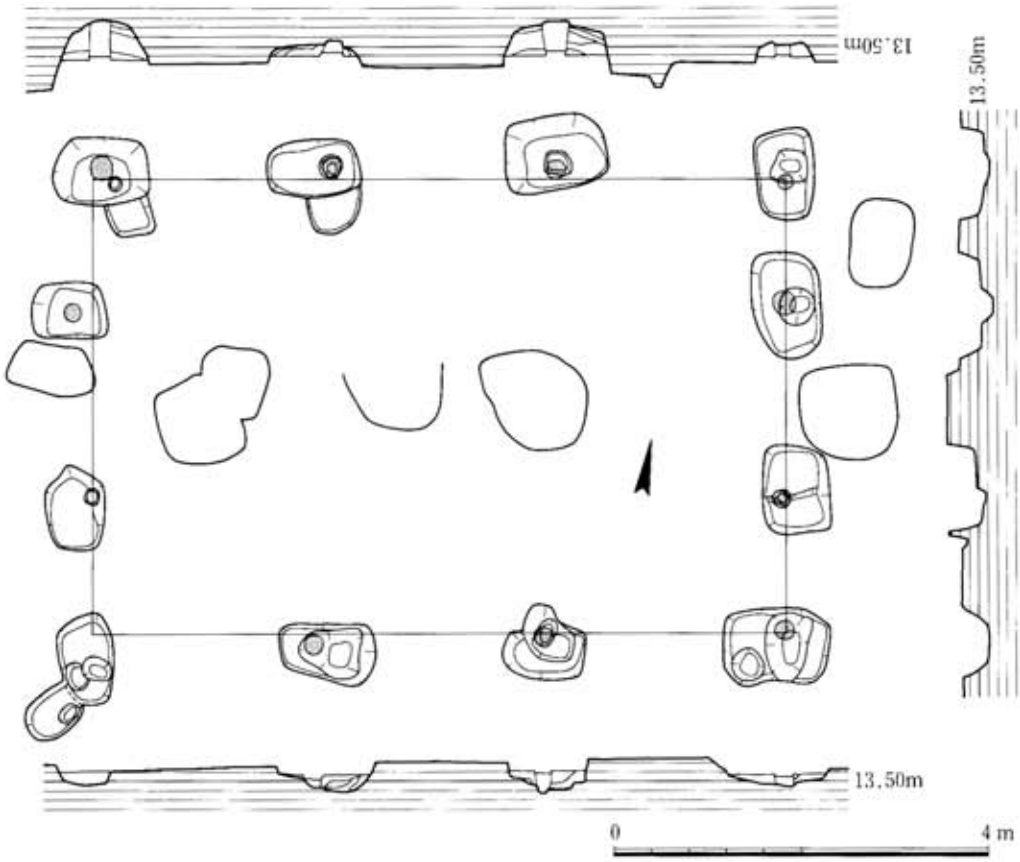


Fig.94　SB128掘立柱建物（1/80）

径16～26cmで、平均20cmである。柱の掘形は0.5×0.8mほどの隅丸長方形を基本とする。埋土は暗～黒褐色土、黄褐色系統土、茶褐色系統土で、版築状をなしている。

SB138掘立柱建物（Fig.95）

調査区北西に位置する。SK061土壙より新しく、弥生時代のSB016・056・057竪穴住居と重複する。2間（4.04m）×2間（4.56m）の総柱建物で、主軸はN4°Wである。柱間距離は梁行1.88mと2.16m、桁行2.28mである。柱の掘形は一辺（径）0.5～0.8mの隅丸方形から円形である。柱痕跡は確認されていない。

416は須恵器で、胎土は精選され、焼成も緻密であり、墨の痕跡はないものの硯と考えられる。横田分類[1]のⅣ－B類特殊円形硯にあたるであろう。復原口径20.7cmである。

SB141掘立柱建物（Fig.95）

調査区北西に位置する。弥生時代のSD058・146・147河川跡と重複する。2間（3.13m）×2間（3.33m）の総柱建物で、主軸はN15°30′Wである。柱間距離は梁行1.57m、桁行1.67mであるが、やや不揃いである。柱痕跡は径10～16cmである。柱の掘形は径0.3～0.4

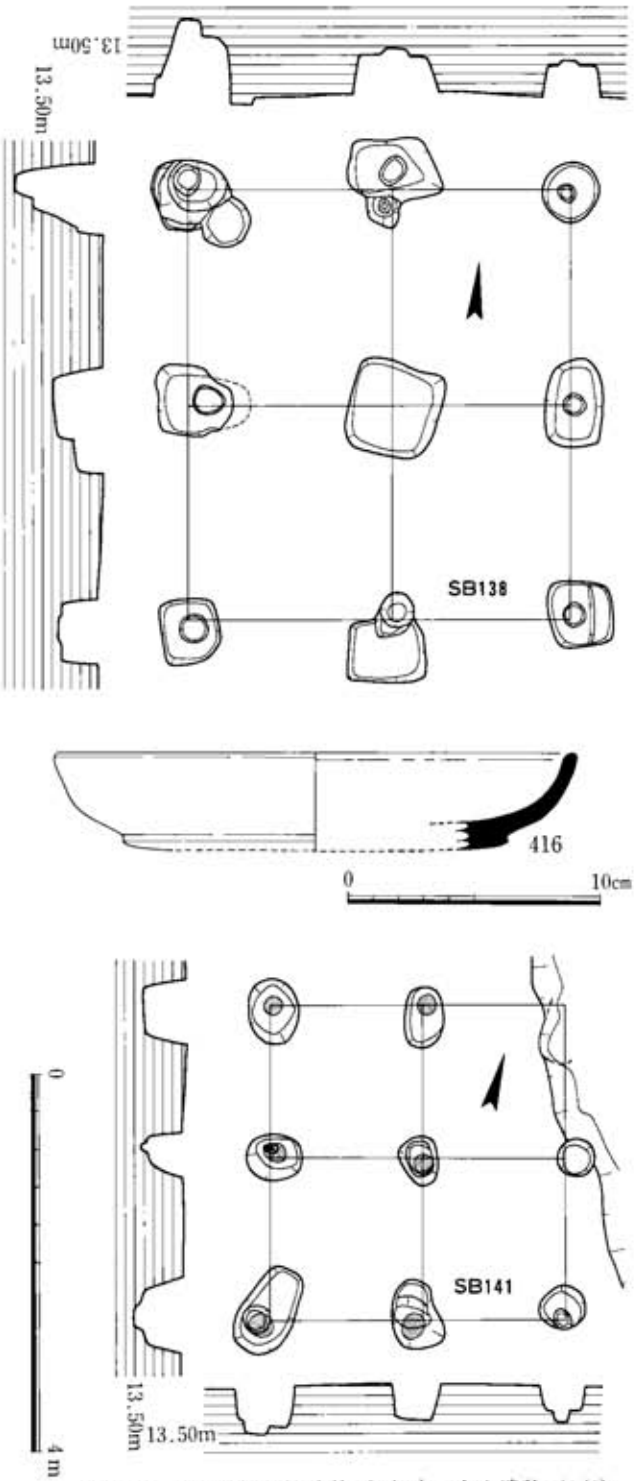


Fig.95　SB138掘立柱建物（1/80）・出土遺物（1/3）、SB141掘立柱建物（1/80）

cmの円形を基本としているが、柱の抜き跡のためか不整形なものがある。埋土は黒褐色砂質土、暗褐色砂質土、灰褐色砂質土で、版築状をなす部分もある。

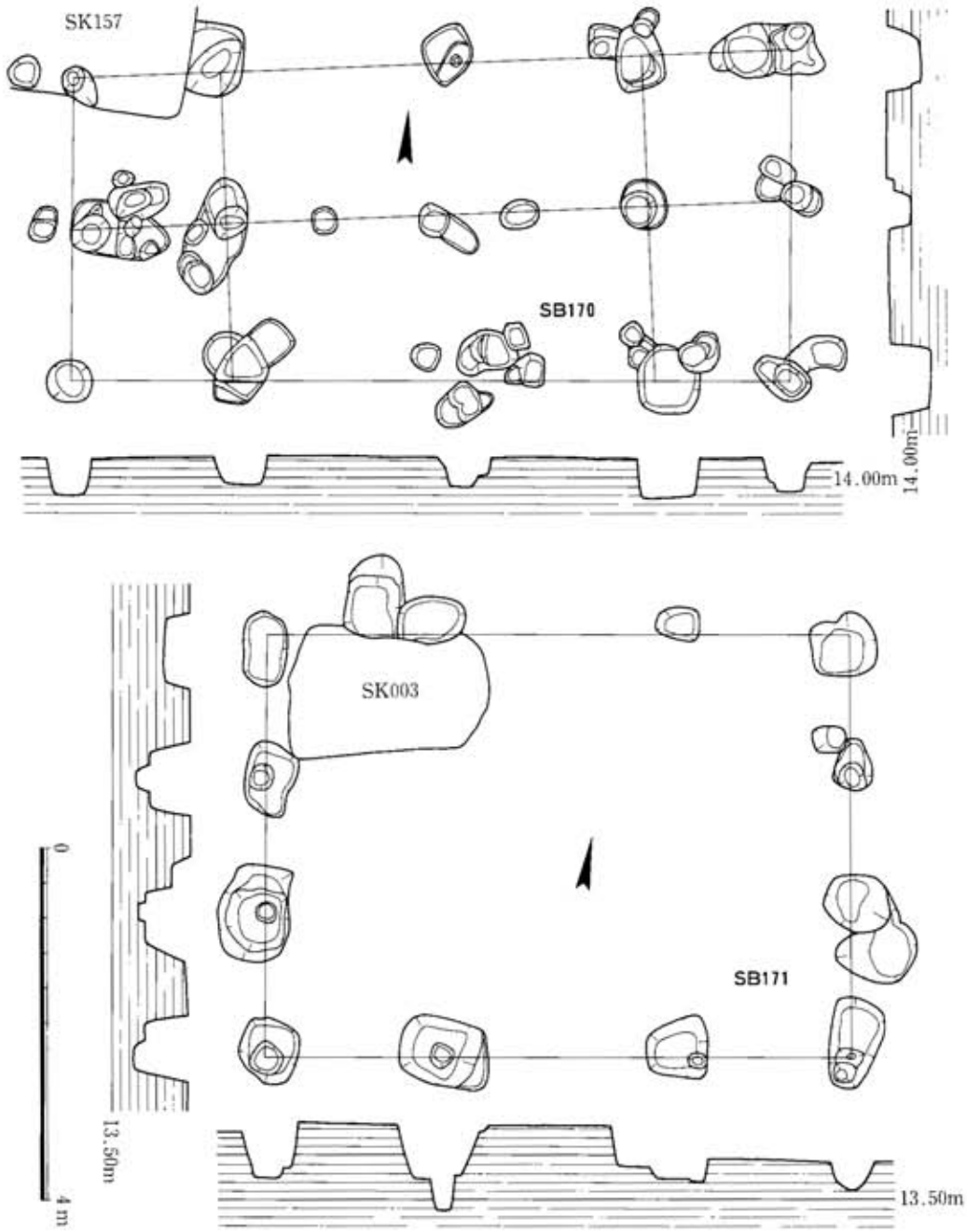


Fig. 96　SB170・171掘立柱建物（1/80）

SB170掘立柱建物（Fig. 96）

調査区中央西寄りに位置する。中世のSK157土壙と重複する。身舎が梁行２間（3.6m）、桁行２間（4.8m）で、東西２面庇の東西棟建物である。身舎は総柱になる可能性がある。全体にゆがんだ構造をしているが、北辺を基準にすると主軸はN83° 30′ Eである。身舎の柱間距離は平均梁行1.8m、桁行2.4mであるが、ばらつきがある。庇は両面とも出１間（1.65m）である。柱の掘形は一辺（径）0.4～0.6mの隅丸方形から円形であるが、不整形なものがほとんどである。柱痕跡は確認されていない。

SB171掘立柱建物（Fig. 96）

調査区中央北西寄りに位置する。弥生時代のSB155・156・405竪穴住居、中世のSK003土壙

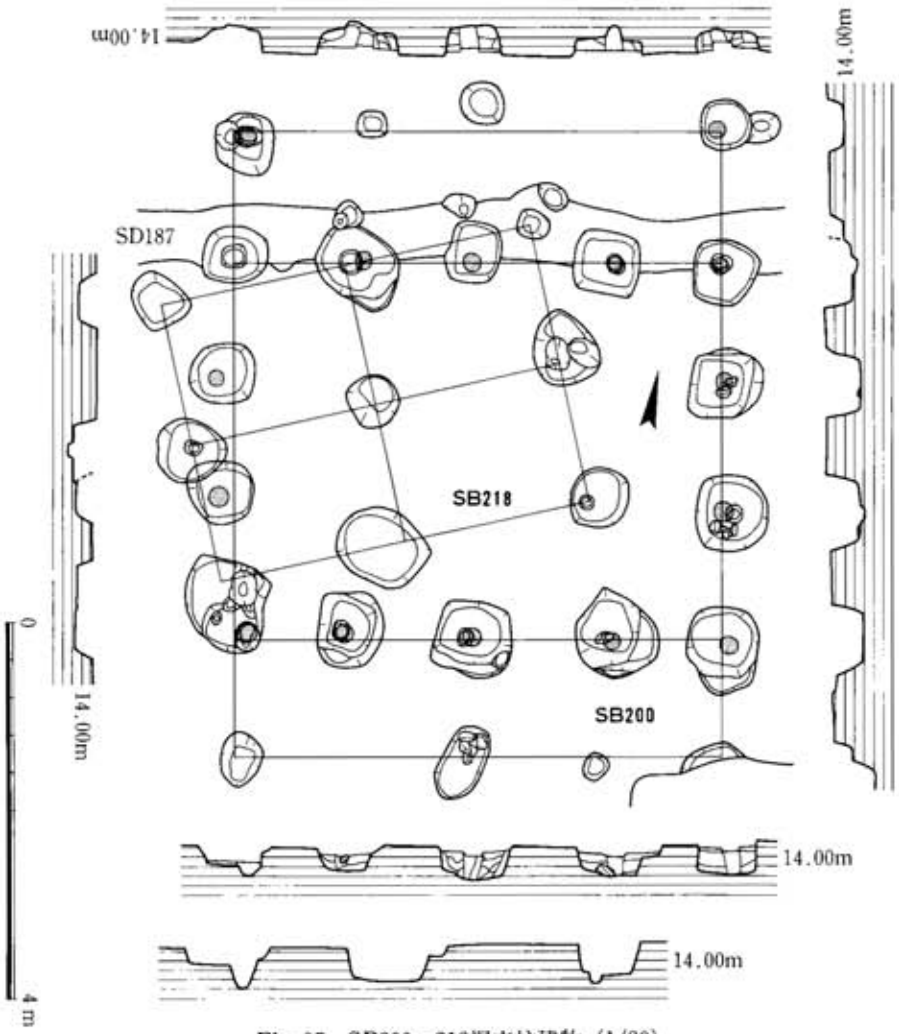


Fig. 97　SB200・218掘立柱建物（1/80）

と重複する。梁行3間（4.8m）、桁行3間（6.64m）で、主軸をN80°30′Eにとる東西棟建物である。SB090掘立柱建物と並列する。柱間距離は梁行が1.6m等間で、桁行は平均2.21mであるが、不均等である。柱の掘形は一辺0.3～0.5mの隅丸方形を基本としているようであるが、不整形なものがほとんどである。柱痕跡は確認されていない。

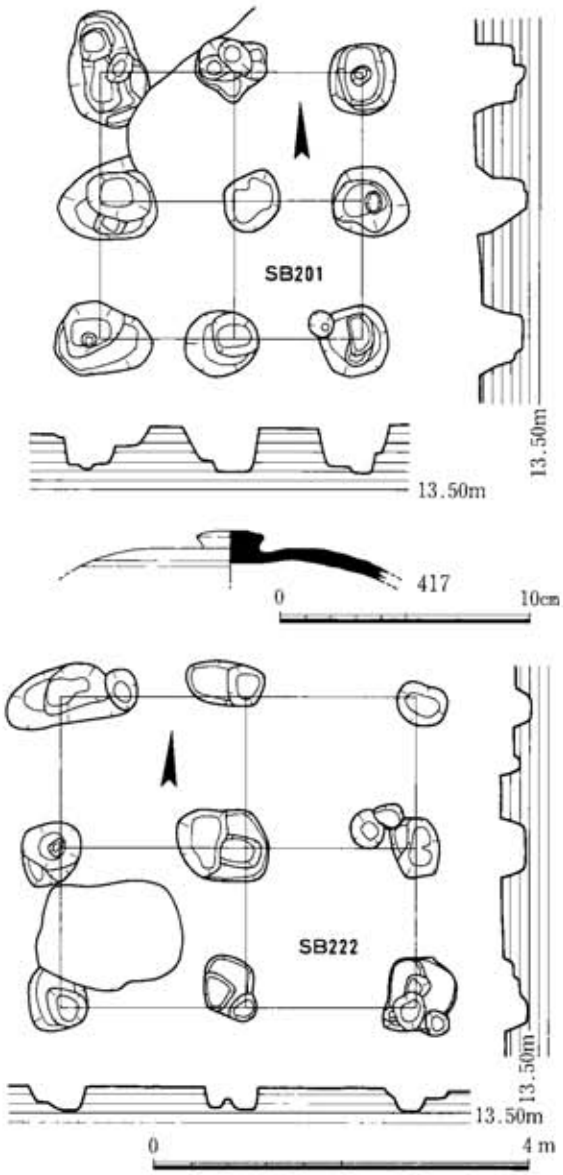


Fig. 98　SB201掘立柱建物（1/80）・出土遺物（1/3）、SB222掘立柱建物（1/80）

SB200掘立柱建物（Fig. 97）

調査区北東に位置する。SB218掘立柱建物より新しく、時期不明のSD187溝より古い。弥生時代のSB099竪穴住居と重複する。構造は、身舎梁行3間（4.0m）、桁行4間（5.16m）、南北2面庇の東西棟建物である。主軸はN78°30′Eである。身舎の柱間距離は梁行1.3m等間で、桁行は平均1.29mであるが、1.0～1.52mとばらつきがある。庇部は出1間で、削平されたためか桁行と対応する位置に柱穴がないところがある。柱痕跡は径14～22cmで、平均18cmである。柱の掘形は身舎部は0.5mほどの隅丸方形で、庇部は0.3～0.4mほどの略円形である。埋土は暗～黒褐色土を基本とし、版築状をなす部分がある。

SB201掘立柱建物（Fig. 98）

調査区北東に位置する。SB194・196竪穴住居より新しい。SB197竪穴住居との新旧関係は不明である。2間×2間の総柱建物で、主軸はN3°Eである。規模は方形になるように復原すると、一辺2.8mほどであるが、全体的にゆがんだ構造であると考えられる。柱間距離は単純に平均すると1.4mとなるが、不均等であろう。柱の掘形は径（一辺）0.4～0.5mの円形か

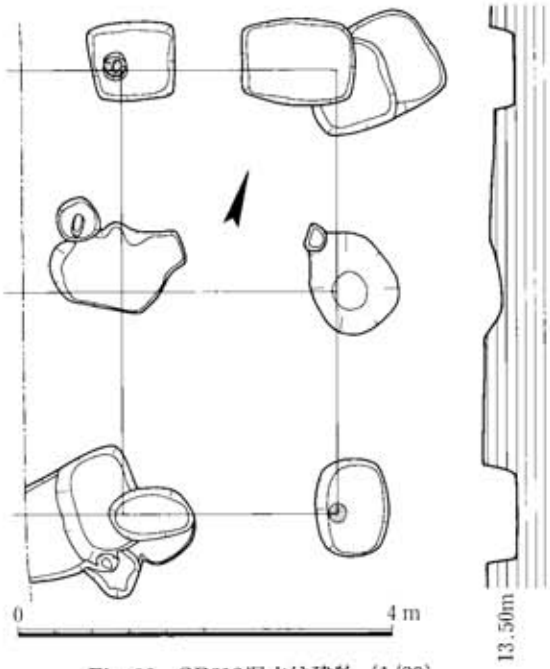


Fig. 99　SB312掘立柱建物（1/80）

ら隅丸方形を基本としている。柱痕跡は確認されていない。

417は須恵器蓋で、扁平なつまみがつく。つまみ径2.6cmで、天井部は回転ヘラケズリである。

SB218掘立柱建物（Fig. 97）

調査区北東に位置する。SB200掘立柱建物、時期不明のSD187溝より古い。2間（3.0m）×2間（4.0m）の総柱建物で、主軸はN24°Wである。柱間距離は梁行1.5m、桁行2.0mである。柱の掘形は径0.5mほどの円形である。柱痕跡は確認されていない。

SB222掘立柱建物（Fig. 98）

調査区南東に位置する。弥生時代のSB039・064竪穴住居、中世のSP046土壙墓と重複する。図上で確認した。2間（3.3m）×2間（3.78m）の総柱建物である。主軸は不正確ではあるが、N2°Wほどである。柱間距離は梁行1.65m、桁行1.82～1.96mである。柱の掘形は径0.3～0.5mの略円形であるが、かなり不整形である。柱痕跡は確認されていない。

SB312掘立柱建物（Fig. 99）

調査区南東隅に位置する。弥生時代のSB310竪穴住居、SB313掘立柱建物と重複する。2間×2間の総柱建物とみられるが、西辺は調査区外にある。主軸はN18°Wである。東辺の柱間距離は2.35m、東西の柱間距離は2.3mである。柱痕跡は20～25cmである。柱の掘形は0.7×0.9mほどの隅丸長方形を基本としているが、不整形なものが多い。埋土は黒茶褐色土を主体としている。

3．埋納遺構

SX181埋納遺構（Fig. 100）

調査区中央東寄りに位置している。平面形が検出面で0.33×0.39mほどの不整な長方形で、残存する深さ0.23mの小穴に、底面から0.1mほど浮いた状態で、土師器の高台付坏と蓋をセットで埋納している。個別の建物に伴うような位置にはない。

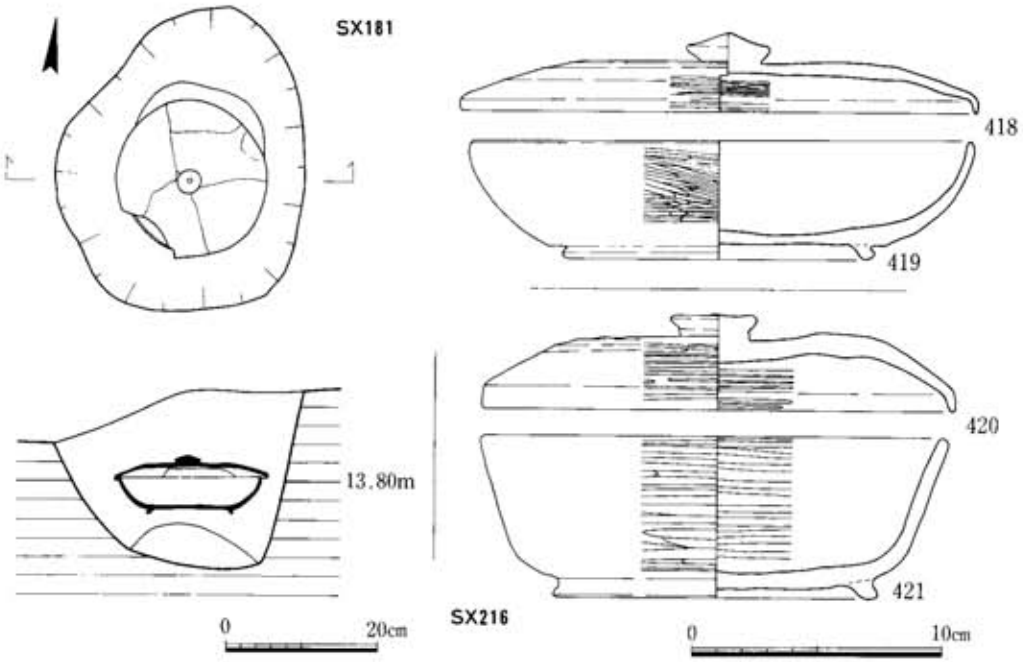


Fig. 100　SX181埋納遺構（1/10）、SX181・216埋納遺構出土遺物（1/3）

418は土師器蓋で、口径20.5cm、器高3.1cmである。口縁部の屈曲は明瞭で、断面ひし形のつまみがつく。天井部は回転ヘラケズリ、外面は磨滅が著しく不明確ではあるが回転ヘラミガキ、内面はナデ後精緻な手持ちヘラミガキが施される。橙色を呈する。

419は土師器高台付坏で、口径19.8cm、器高4.7cmである。内外面ともに精緻な手持ちヘラミガキで、特に内面は単位を判別できないほどである。底部も回転ヘラケズリの後に回転ヘラミガキを施し、高台部にもヘラミガキがみられる。橙色を呈する。

SX216埋納遺構（Fig. 84・100）

調査区中央西寄りのSB013掘立柱建物のほぼ中央に位置する。掘形は確認できなかったが、出土状況や位置的にみて埋納遺構と推定される。SB013掘立柱建物に関連する祭祀的な意味をもつものと考えられる。

420は土師器蓋で、口径18.7cm、器高3.8cmである。口縁部の屈曲はやや不明瞭で、扁平なつまみがつく。天井部回転ヘラケズリで、内外面ともに回転ヘラミガキが施される。橙色を呈する。内面に墨が付着しており、墨入れとして使用されていたものと考えられる。

421は土師器高台付坏で、口径18.3cm、器高6.4cmである。内外面ともに回転ヘラミガキが施される。底部はヘラ切り未調整である。橙色を呈する。

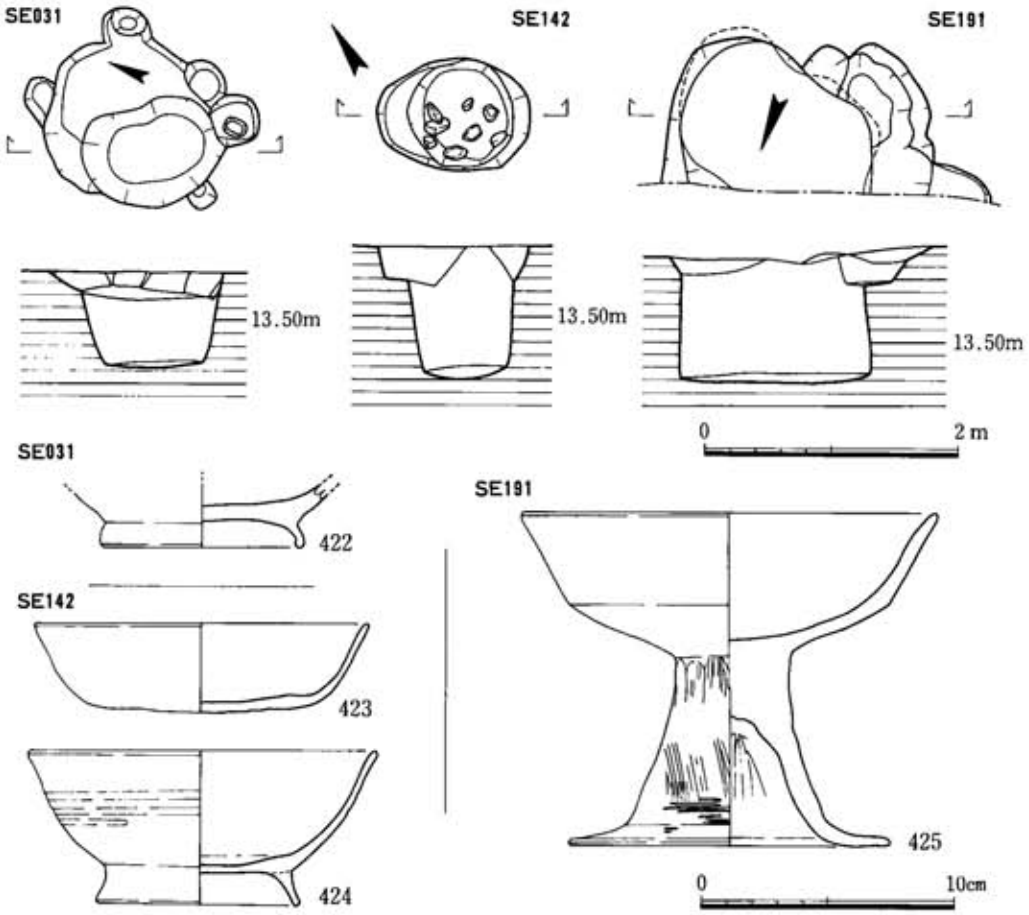


Fig. 101　SE031・142・191井戸（1/60）、出土遺物（1/3）

4. 井戸

SE031井戸（Fig. 101）

調査区南西に位置する。弥生時代のSD058河川跡とちょうど重複する。素掘りで、平面形は1.3×1.5mの不整楕円形である。断面形は2段掘りで、壁はややきつく立ち上がる。底面の標高は13.12mである。

422は土師器椀で、底径7.7cmである。

SE142井戸（Fig. 101）

調査区西側中央に位置する。弥生時代のSD149河川跡と重複する。素掘りで、平面形は0.9×1.2mの楕円形である。断面形は2段掘りで、壁は垂直に近く立ち上がる。底面の標高は13.0mである。礫石が埋土上部にみられる。

423は土師器坏で、復原口径13.2cm、器高3.5cmである。底部はヘラ切り未調整で、板状圧痕

がみられる。**424**は高台が高い土師器椀で、口径13.9cm、底径8.2cm、器高6.1cmである。磨耗が著しく不明瞭であるが、坏部外面に沈線がめぐるようである。底部に板状圧痕がみられる。

SE191井戸（Fig.101）

調査区北端中央に位置する。北半部が調査区外にある。素掘りで、平面形は径1.6mほどの不整な円形で、壁は垂直に立ち上がる。底面の標高は13.19mである。

425は土師器高坏で、口径16.4cm、裾径12.7cm、器高13.2cmである。坏部内外面に丹塗りがみられる。脚部外面はヘラミガキである。

5. 土壙

SK060土壙（Fig.102）

調査区北西に位置する。残存状況は悪い。平面形は2.0×2.3mの不整な長方形である。

426は土師器坏で、復原口径13.5cm、器高3.5cmである。底部は手持ちヘラケズリである。**427**は須恵器鉢で、復原底径9.4cmである。底部はヘラ切り未調整である。

SK061土壙（Fig.102）

調査区北西に位置する。SB138掘立柱建物より古い。平面形は1.28×2.24mほどの不整形で、2段掘りになっていると考えられる。

428は須恵器小坏で、復原口径8.8cm、器高3.3cmである。底部回転ヘラケズリである。**429**は須恵器坏で、復原口径10.3cmである。底部回転ヘラケズリである。**430**は土師器高坏で、復原裾径10.0cmである。

SK107土壙（Fig.102）

調査区中央西寄りに位置する。弥生時代のSB086竪穴住居、中世のSD109溝と重複する。2、3基の小土壙の切合のようであるが、新旧関係などは不明で、1基の土壙として報告する。東側は1.3×1.5mほどの不整な方形である。

431は土師器模倣坏で、復原口径12.0cm、器高4.0cmである。坏部内外面ミガキで、底部は手持ちヘラケズリである。内外面に黒塗りが施されているようである。

SK118土壙（Fig.102）

調査区東側中央に位置する。平面形は1.5×1.6mの方形である。埋土中から土師器などの小片が出土したが、図示はできなかった。

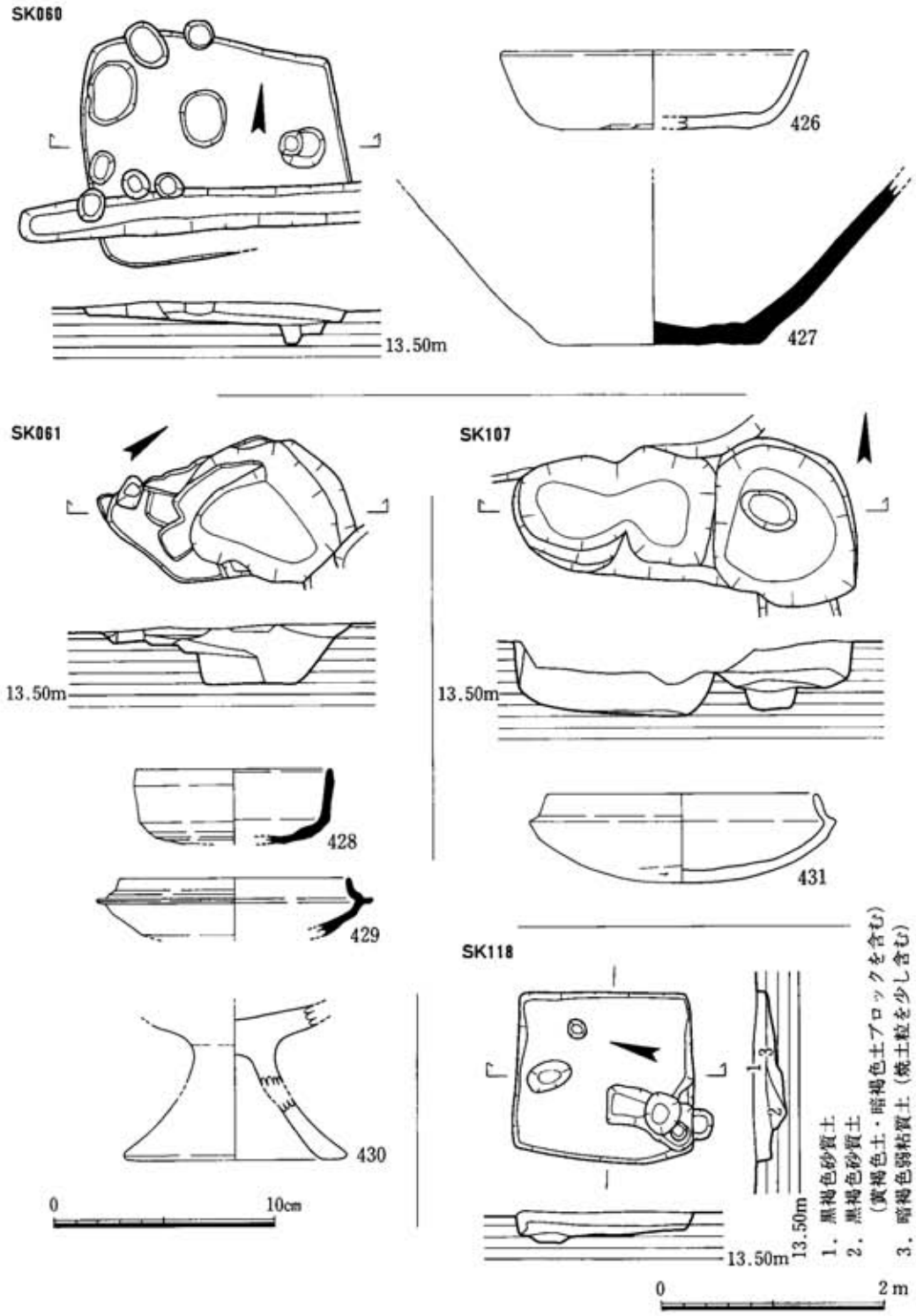


Fig. 102　SK060・061・107・118土壙（1/60）、出土遺物（1/3）

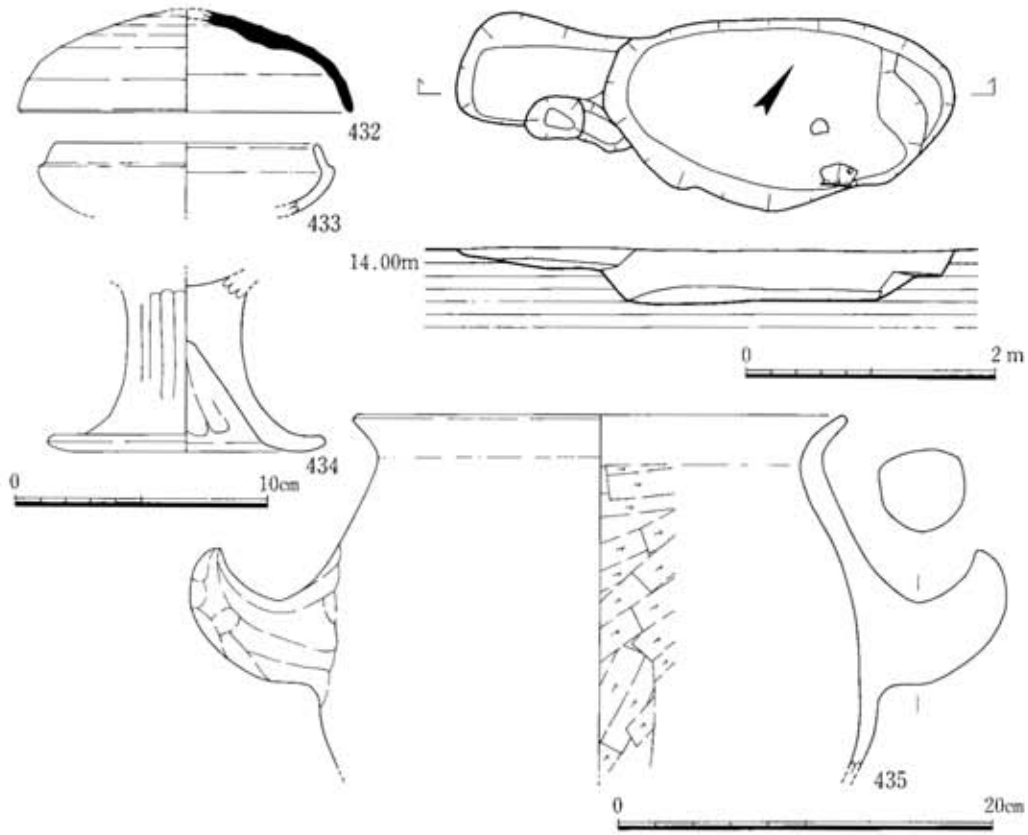


Fig. 103　SK124土壙（1/60）、出土遺物（435；1/4、他；1/3）

SK124土壙（Fig. 103）

調査区中央北東寄りに位置する。SB090掘立柱建物より古く、弥生時代のSB089竪穴住居と重複する。平面形は1.52×2.8mほどの楕円形である。

432は須恵器蓋で、復原口径13.2cmである。天井部は回転ヘラケズリである。**433**は土師器模倣坏で、復原口径10.4cmである。**434**は土師器高坏で、復原裾径11.0cmである。脚部外面はヘラミガキである。**435**は土師器把手付甕で、復原口径26.2cmである。

6. 緑釉陶器・小穴出土土器・ヘラ書き土器（Fig. 104）

436は緑釉陶器皿で、復原底径6.2cmである。胎土は灰白色を呈する。ボックス部検出面出土である。

437はほぼ完形の土師器椀で、口径12.9cm、底径7.8cm、器高5.6cmである。底部ヘラ切り未調整で、他の部位はヨコナデである。Ⅰ区P23出土である。**438**は完形の須恵器坏で、口径12.4cm、底径6.1cm、器高4.0cmを測る。底部ヘラ切り未調整である。Ⅰ区P13出土である。**439**は須恵器壺で、復原口径10.4cm、器高11.6cmである。口縁部を約1／2欠失する。胴部下半は回

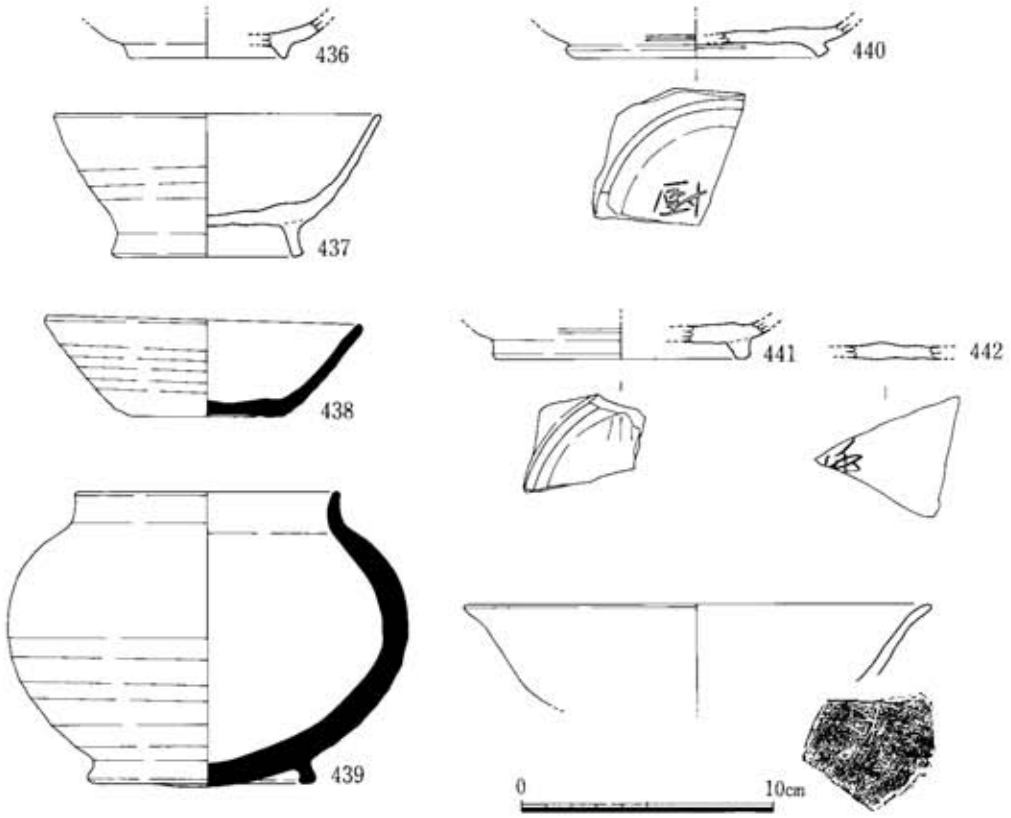


Fig. 104　緑釉陶器・小穴出土土器・ヘラ書き土器（1/3）

転ヘラケズリである。弥生時代のSB005竪穴住居内小穴出土である。これら３点はいずれも意図的に小穴内に埋置された可能性が高い。

440～442はヘラ書き土器である。**440**は土師器高台付坏で、復原底径10.3cmである。底部外面に「厨」と記されている。底部外面にもヘラ切り後回転ヘラミガキが施される。弥生時代のSB005竪穴住居埋土出土である。**441**は土師器高台付坏で、復原底径9.7cmである。底部外面に「川」と記されている。底部ヘラ切り後ヨコナデである。SB035竪穴住居出土である。**442**は土師器皿底部と思われる。ヘラ書きで文字が記されているが、破片のため正確に読みとれない。中世のSK157土壙埋土出土である。**443**は土師器坏で、復原口径18.2cmである。坏部外面にヘラ書きがみられるが、文字であるかどうかは不明である。SB035竪穴住居埋土出土である。

本調査区内で出土したヘラ書き土器は、「郡圖」と記されたSB035竪穴住居出土土師器高坏を合わせて確実なものは計４点である。

7．小結

古代の遺構は、竪穴住居27棟、掘立柱建物23棟、埋納遺構２基、井戸３基、土壙５基が確認された。これらはおおよそ７世紀代から９世紀代のものである。このなかで掘立柱建物は計画的な配置がみられることや、ヘラ書き土器などから官衙的な性格が想定される。そこで、それぞれの遺構の特徴をまとめ、この建物群の性格について考えてみたい。

竪穴住居

竪穴住居は平面が方形か長方形で、カマドをもつ形態である。主柱数は４本のものと主柱がみられないものがある。ほとんどの住居からは時期を明らかにするような遺物が出土していない。そこで、出土土器から時期が明確になる竪穴住居の規模、平面形、主軸方位、カマドの位置などの特徴を手がかりとして、竪穴住居の時期を区分してみたい。

出土土器から時期が判明する竪穴住居としては、SB035・057・077・139・150・161・186竪穴住居があげられる。これらをおおよそ時期的に区分すれば、SB057・139・161・186が７世紀代、SB035・077が８世紀代、SB150が９世紀代となる。

SB057・139・186から出土した須恵器蓋坏は口径10.5～12cmほどで、回転ヘラケズリが施されており、小田編年ⅢB～ⅣA期にあたる。これより明らかにさかのぼるような遺物を出土する竪穴住居はみられないようで、この時期に集落が形成されるものと考えられる。九州における須恵器編年の実年代については、最近従来の年代観を引き下げている山村信榮氏の研究[(2)]があり、まだ流動的な部分が大きい。ここではとりあえず集落の出現を６世紀後半代としておく。SB161からは高いボタン状のつまみがつく須恵器蓋や暗文を施した土師器坏が出土しており、これは７世紀代のものである。

これら６～７世紀代の竪穴住居に共通する点として、SB186（一辺7.15m）に代表されるように大型であること、主軸が21～33°と大きく西傾すること、カマドが北辺から西辺に設置されることがあげられる。主柱数もしっかりとした４本のようである。

８世紀代の竪穴住居のうちSB077は形態が明確ではない。そこで、SB035の特徴を７世紀代のものと比較すると、3.4×3.5mと小型化していること、主軸が10°ほど東傾すること、カマドが東辺に設置されることが異なる。ただ、主柱は４本であることは変化はない。SB077も主軸はやや西傾するが、正方位に近い主軸をとるようである。なお、大宰府での編年[(3)]を参考にすれば、SB035、SB077出土土器はいずれも８世紀後半代とみられるが、坏の形態がやや開き気味になる点、須恵器が出土していない点でSB077出土土器の方が後出するものととらえることができよう。

９世紀代のSB150は、3.3×3.85mと小型である点はSB035と同様であるが、主軸はN40°Wと大きく西傾し、カマドが北西辺に設置されている。主柱は不明である。

これらのことから、出土遺物からは時期が明確にできない竪穴住居を時期区分する基準として次のようなことがあげられる。

①住居の規模が縮小する。

②主柱が不明になる（無主柱と思われる）。

③主軸方位が20～40°西傾するものから東傾、または正方位に近いものになる。ただし、9世紀代になると再び西傾するようになる。

④東辺にカマドをもつものは8世紀代の可能性が高い。

①・②の傾向は大願寺二本松遺跡でも指摘されている。[4]

この基準により時期区分すると、以下のようになる。

6～7世紀；SB027・056・094・100・152・183・185・192・194・196・209

8世紀；SB026・087・105・164・188・206・210・314

9世紀；SB197

このうち、問題となりそうなのは8・9世紀代のものであろう。SB105・164・188は小型で、ほぼ正方位に主軸をとり、SB206・210・314は主軸が東傾することから8世紀代であろう。SB

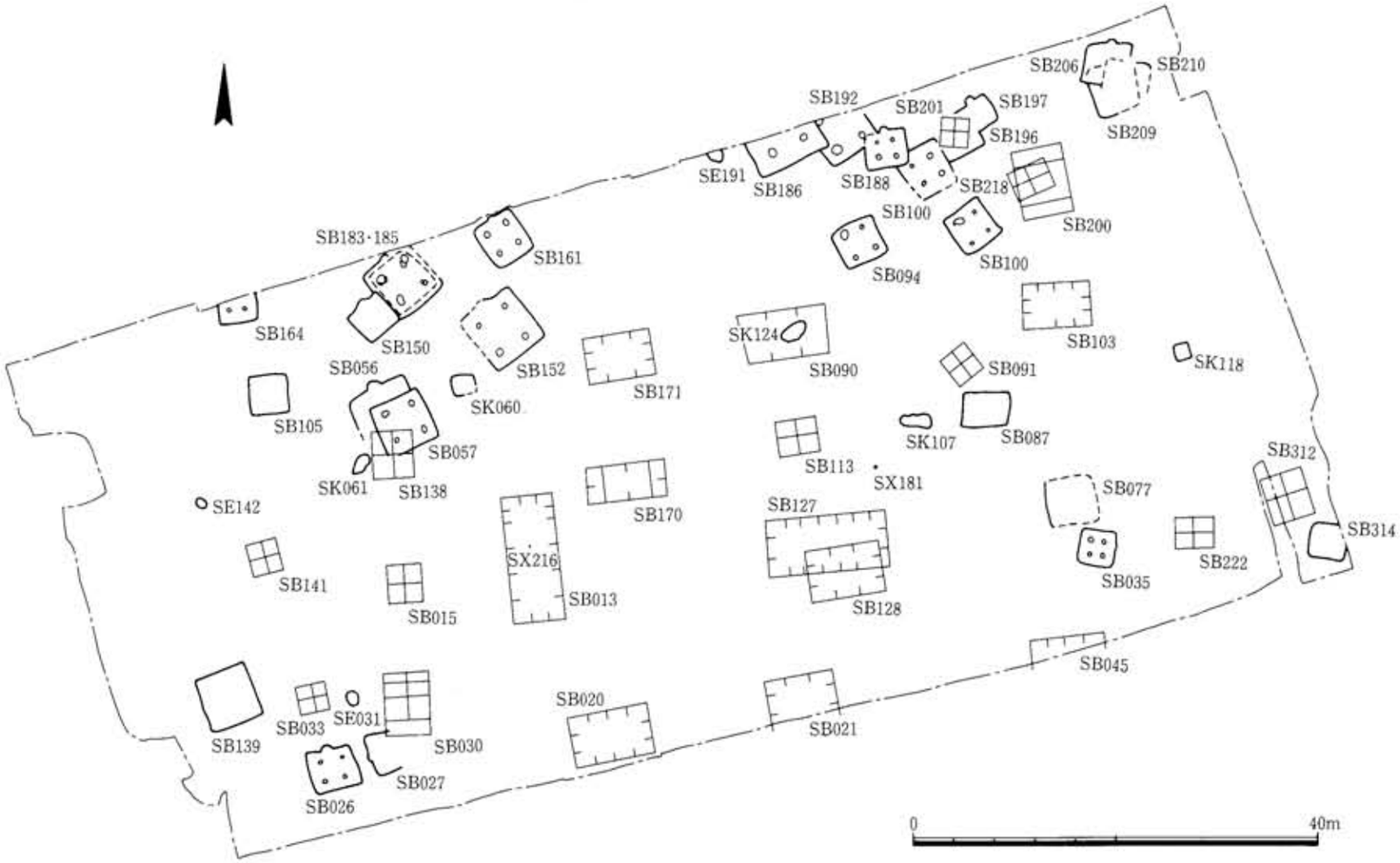


Fig. 105　古代遺構配置図（1/600）

026は主軸がN14°Wであることから8世紀代としたがやや不確実である。SB087は東にカマドをもち、不整な平面形をもつことから7世紀代にはさかのぼらないであろう。

掘立柱建物

掘立柱建物は倉庫棟と考えられる2間×2間の総柱建物とそれ以外に分かれる。まず、主軸方位によってグルーピングしてみることにする。

まず、4°西傾し、東辺をそろえ南北に並ぶSB030（古）・015・138のグループがある。規模は若干異なるものの、いずれも2間×2間の総柱建物で、倉庫群と考えられる。N2°30′Wとやや主軸は異なるものの建て替えとみられるSB030（新）、離れているが3°30′西傾するSB103がこのグループに含まれる。SB222は主軸方位からはこのグループに含まれてもおかしくないが、主軸方位そのものがやや不正確であるため可能性としてあげておく。

次に、6°西傾するグループをあげることができる。SB013・045・127・171がこれに含まれる。3間×5間（SB013）、3間×7間（SB127）とこの調査区内の中ではもっとも規模の大きな2棟がある。

また、8～9°西傾するグループがある。SB090・113・128・171が含まれ、SB090・171がほぼ並列しており、全体的にはL字形に近い配置をとる。SB128が6°グループのSB127と重複するのでそれぞれ区別する必要がある。

さらに、10°～12°西傾するグループがある。SB020・021・033・200が含まれ、SB020・021は棟をそろえて並列するようである。8～9°グループとの区別するのは、他のグループがある角度でほぼ一致していることからばらつきの幅が大きくなると思われるからである。

また、以上のように主軸方位でグルーピングが可能なもの以外に、5棟グルーピングできないものがあるが、いずれも2間×2間の総柱建物である。これらについては全体の変遷の中で考えていくことにする。

これらのグループの時期については、柱穴出土遺物が直接的に建物の時期を知る手がかりであるが、時期を明確にするほど土器が出土している例はほとんどない。ここではおおよその時期について示しておく。4°グループの中ではSB030出土遺物が手がかりとなる。かえりのある須恵器蓋が多く、土師器高台付坏が1点ある。8世紀前半代が考えられる。6°グループでは、SB045から底部回転ヘラケズリの土師器坏のやや大きめの破片や口縁部の屈曲がない須恵器が出土しており、8世紀後半代であろう。10～12°グループは、SB020出土の須恵器高台付坏の形態から8世紀末～9世紀初頭の年代が与えられるものと思われる。このようにみてくると、時期が下るにつれ西傾の度合いが強くなる傾向を読みとることができよう。

ここで使用尺について若干考えてみてみたい。いずれの建物も小尺が用いられているようである。奈良時代の尺については、713年の大尺が廃止された度量衡改正以後小尺のみが用いら

れているわけであるが、8世紀末から9世紀になると1尺が間延びすることが指摘されている。[5] そこで、ここでは仮に1尺を0.295mと0.3mの二つの数値を用いて、図上作業ではあるが使用尺について調べてみることにする。柱痕跡が明らかなものでみてみると、4°グループのSB015・103については1尺＝0.295mの方がよく適合する。それ以外のグループでは0.3mの方が適合する。前述したように4°グループは8世紀前半代と考えられ、尺が間延びすることがこの遺跡でもいえそうである。

埋納遺構

2基確認されている。SX181埋納遺構は、出土土師器の形態、手持ちヘラミガキなどの特徴から8世紀前半代と考えれる。しかし、個別の掘立柱建物に直接的に関係するような位置にはない。SX216埋納遺構は、出土土師器の形態、回転ヘラミガキなどの特徴からSX181より時期が下り、8世紀後半代とみられる。さらに、SB013掘立柱建物のほぼ中央にあり、建物にかかわる祭祀的な意味合いがあるものとみられる。なお、出土した土師器高台付坏と蓋のセットは墨入れとして用いられていたものを転用したものと考えられる。

時期的変遷

以上のことから、西山田二本松遺跡A区の時期的変遷（Fig.106～108）をまとめてみたい。

まず、6～7世紀代に竪穴住居を中心とする集落が営まれる。竪穴住居は主軸が20～35°ほど西傾する。これに対応するものとして、2×2間総柱のSB141・218・312掘立柱建物がこの時期に位置づけられよう。この集落の上限は須恵器小田編年ⅢB期とみられるが、下限は特定することが難しい。ただ、かえりのある須恵器蓋がSB209竪穴住居や調査区全体でかなり出土しており、7世紀代には継続して集落が営まれたように思われる。ただ、この竪穴住居を中心とする集落と次の掘立柱建物を中心とする建物群との間には空白期間がある可能性がある。

8世紀代になると掘立柱建物を中心にした建物群が確認される。竪穴住居も8世紀代のものがあり、掘立柱建物がほぼ間断なく変遷するようであるので、掘立柱建物のグループのいずれかに伴うものと考えられる。竪穴住居も掘立柱建物と同様主軸方位をグルーピングの参考にし、また掘立柱建物の配置から考えられる景観も考慮したい。

8世紀前半代に掘立柱建物の4°グループが出現するものと考えられる。SX181埋納遺構も単独で存在するとは思えないので、このグループに何らかの関連があるものと推測される。主軸方位からこのグループにSB105・164竪穴住居が伴う可能性がある。このグループはSB138・015・030（古）と2間×2間の総柱建物が南北に並んでおり、倉庫群の性格が強い。また、この3棟は規模こそやや異なるものの東辺をほぼそろえており、東からの景観を意識しているようである。

次に、8世紀後半代には東にカマドをもち、東傾する竪穴住居を中心とするグループ、6°グループ、8°グループが存在するが、時代が下るにつれ西傾する度合いが強くなる傾向からすると東傾→6°→8°と変遷するものと推定される。これは、東傾するグループに含まれるSB035竪穴住居出土土器の方が8°ないしは6°グループに含まれるSB077竪穴住居出土土器より古相を呈することにも矛盾をきたさない。

東傾グループは、SB035・087・206・210・314竪穴住居、SB201掘立柱建物で構成される。調査区の東側半分に集中して確認される。位置的にみると、SB222掘立柱建物はこのグループ

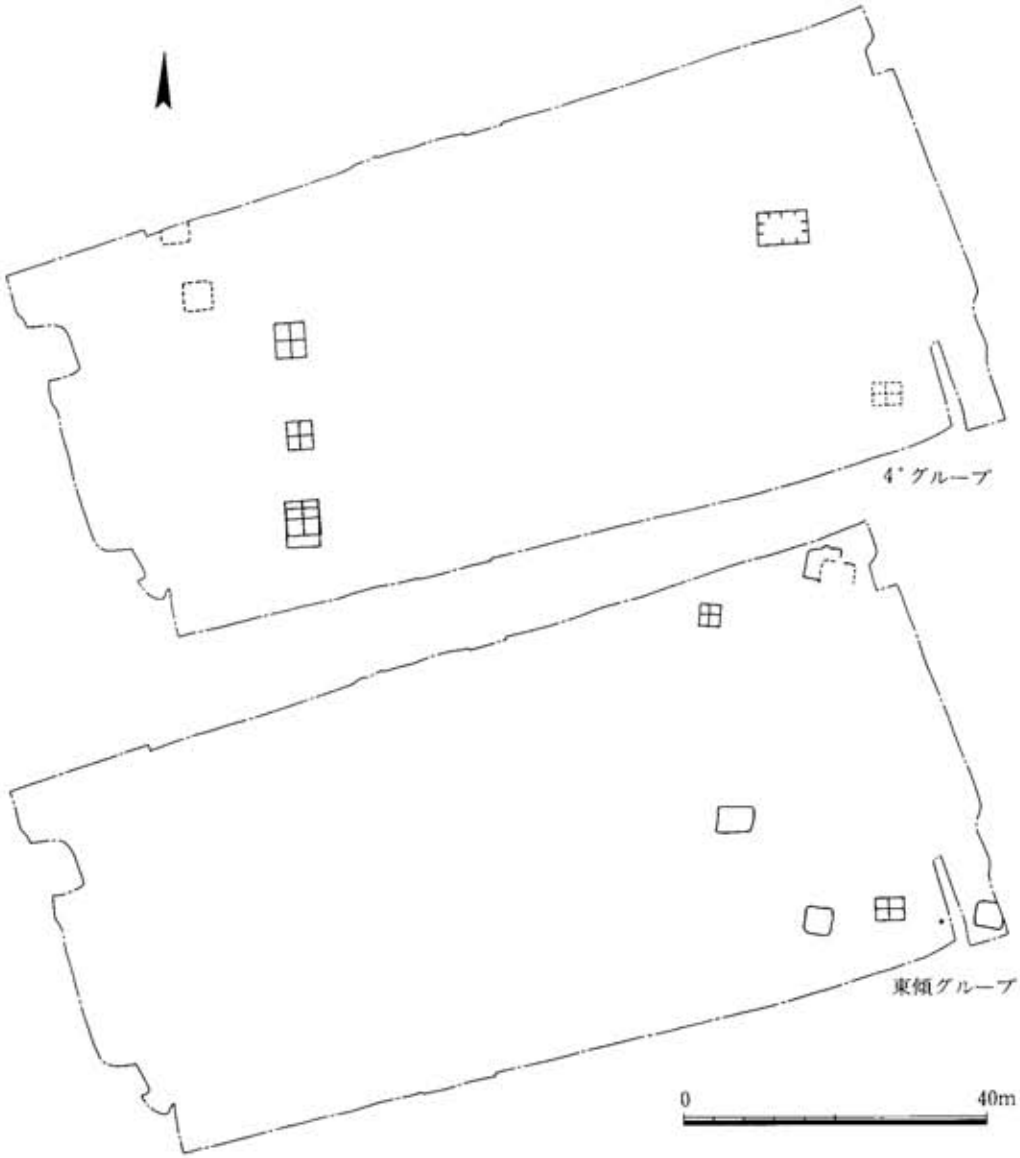


Fig. 106　奈良・平安時代遺構変遷図①（1/1,000）

とした方がよさそうである。

6゜グループには前述の掘立柱建物群で構成され、SB013とSB170は不規則ながらL字形に配置されている。主軸方位からするとSB077・105・164竪穴住居がこの群に含まれる可能性がある。ただ、SB013・170のL字形配置状況など掘立柱建物の配置は、南東ないしは南方向からの景観を重視しているようである。景観的にはSB013掘立柱建物と20mほどの空間地があるSB105・164竪穴住居は同時に存在する可能性があるが、SB077竪穴住居はSB045・127掘立柱建物と並ぶことになり、景観的には同時存在の可能性は低いものとみられる。

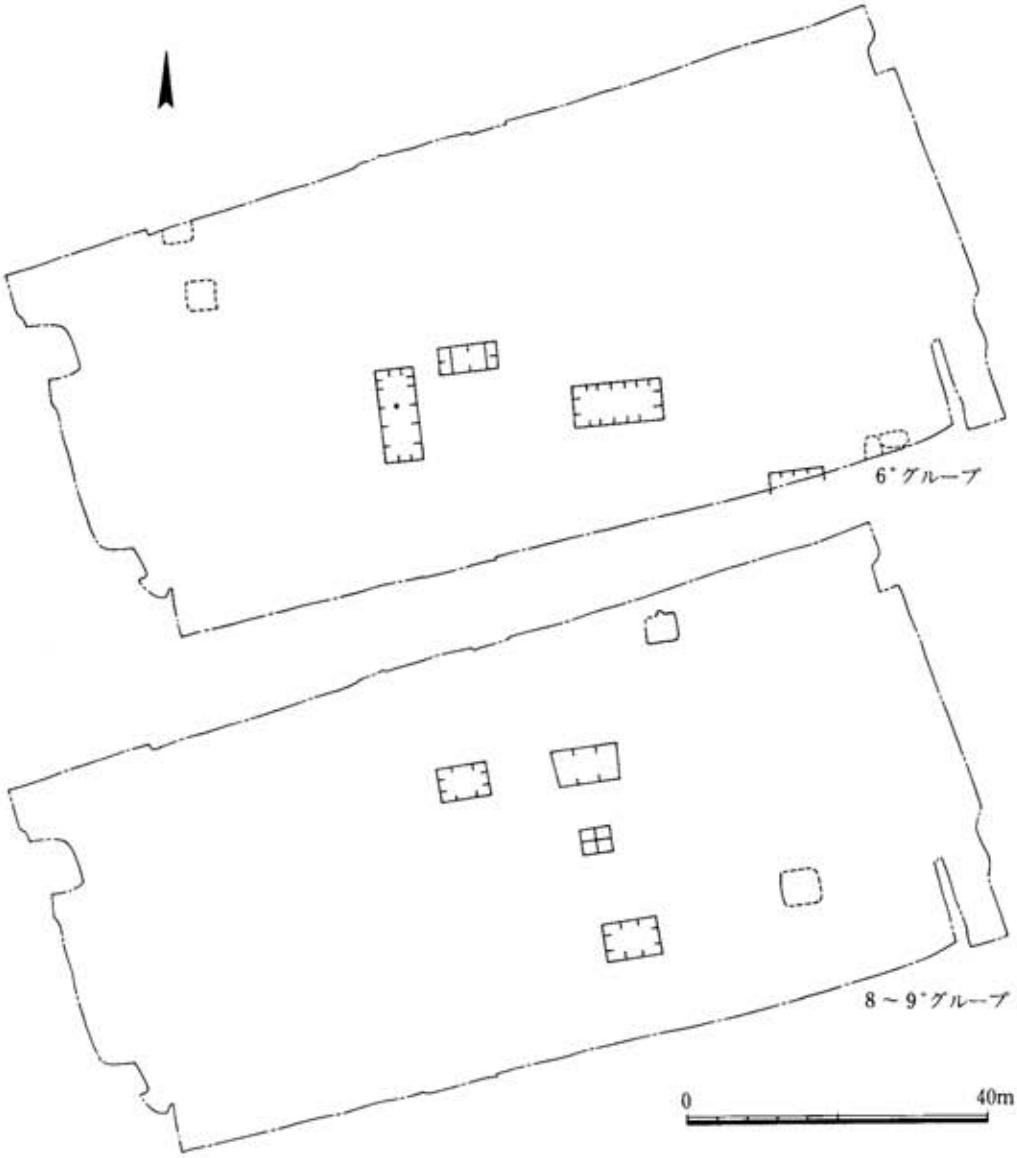


Fig. 107　奈良・平安時代遺構変遷図②（1/1,000）

なお、時期不明の遺構として中世の項で報告しているが、方位からこの6°グループに伴う可能性のある遺構としてSK036・037土壙がある。この二つの土壙は直角に配置され、かなり類似する形態である。調査区外の状況が不明であるが、東山田一本杉遺跡Ⅱ・Ⅲ区[(6)]で検出されているような両側に側溝をもつ築地のコーナーになることも考えられなくはない。ただ、東山田一本杉遺跡のものと比べ、幅が広いことが異なる特徴としてあげられる。

8～9°グループは、やや不規則ではあるが、掘立柱建物全体がほぼL字形に配置されている。ただし、SB113のみ2間×2間の総柱建物である。主軸方位からSB077竪穴住居が伴うと

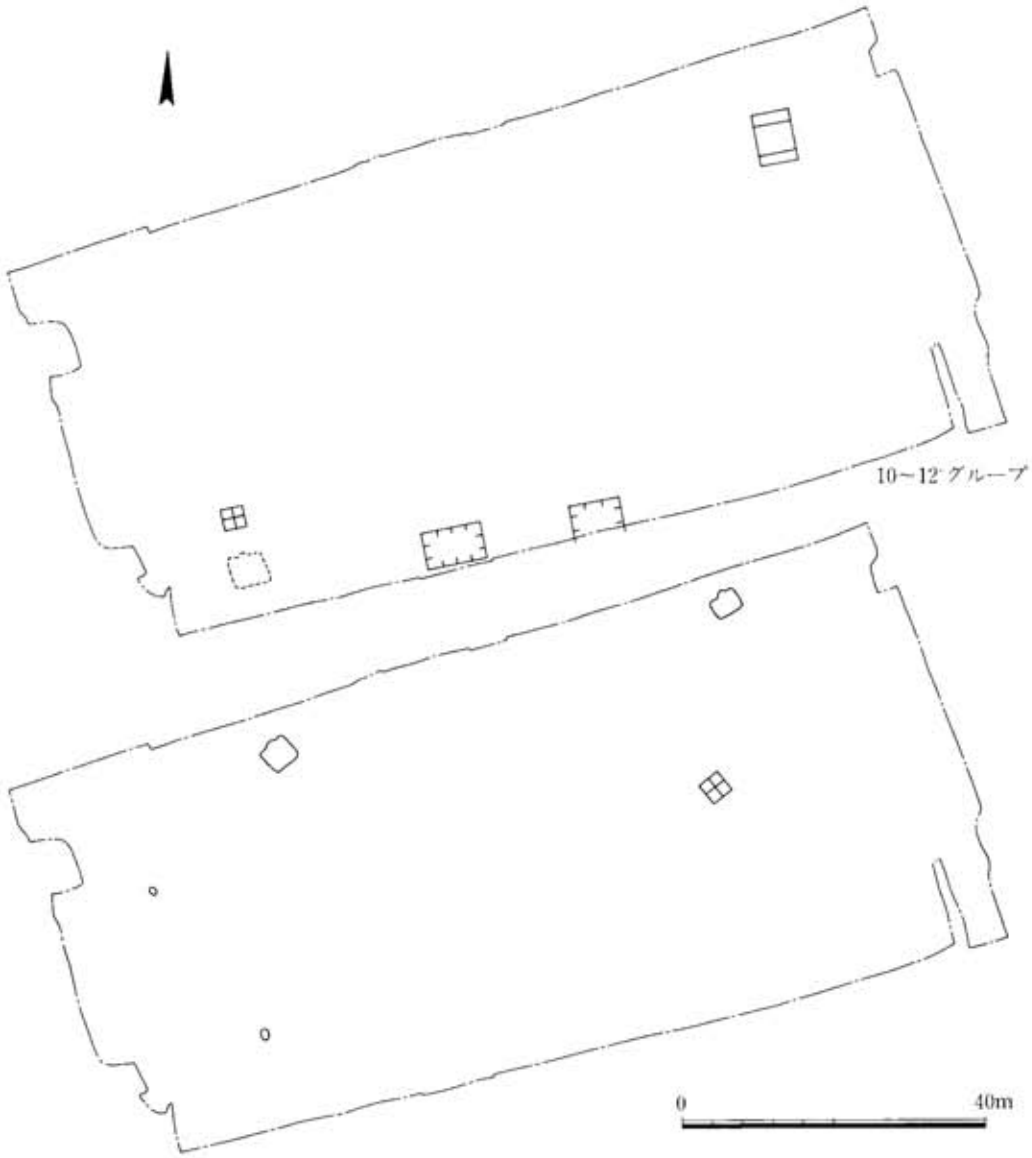


Fig. 108　奈良・平安時代遺構変遷図③（1/1,000）

考えられ、SB188竪穴住居も含まれる可能性がある。L字形配置からすれば南西あるいは西からの景観を重視していると思われるので、景観的にも同時に存在していたとしても不思議ではない。

8世紀末から9世紀初頭にかけては10～12°グループが存在したものと考えられる。主軸方位からすればSB026・188竪穴住居が伴う可能性がある。しかし、SB026はSB033掘立柱建物に、SB188はSB200掘立柱建物にかなり近接しており、景観的には同時に存在するかどうかは疑わしい点がある。

9世紀代にはSB150・197竪穴住居、SE031・142井戸があり、SB091掘立柱建物も含まれるものと考えられる。主軸方位がN40°Wほどと再び大きく西傾するようになることが大きな特徴である。

遺跡の性格

これまでみてきたように、時期ごとに建物の変遷がとらえられたので、それぞれの建物群の性格について考えてみたい。

6世紀後半～7世紀は竪穴住居を主体としており、一般的な集落であったものと考えられる。8世紀代の建物とは異なり、西傾度が強いことが特徴としてあげられよう。遺構の分布は調査区の北側に偏っており、集落の中心は調査区北にあるものと推定される。この集落の下限については不明な点が多いが、次の4°グループが出現する間にある程度のヒアタスがあった可能性が高いと思われる。

8世紀前半代と考えられる4°グループは、東辺をほぼそろえて直線的に配置された倉庫群に特徴がある。また、それまでとは異なり、ほぼ正方位に近い主軸をとることも特徴の一つである。これらの特徴から官衙に伴う倉庫群、「正倉」的な性格をもつことが推測される。ただし、建物自体の規模は大きくなく、周辺を含めて1列しか現時点で確認できないことから大規模なものとは考えられない。

時期的にこのグループに関係があると考えられるSX181埋納遺構は、建物群にかかわる何らかの祭祀的なものであろう。倉庫群とSB103掘立柱建物の配置をL字形とみれば、「広場」的な空間に位置していることになる。建物群を建てる際の地鎮的な意味があるのだろうか。

8世紀後半代には東傾→6°→8～9°グループが次々と建てられる。東傾グループは竪穴住居を主体とするが、SB035竪穴住居から「郡圖」のヘラ書き土器が出土しており、一般的な集落とは考えにくい。やはり官衙、それも郡衙の付属施設とみられる。弥生時代のSB005竪穴住居埋土から「厨」のヘラ書き土器が出土しており、あるいは郡衙の中で「厨」的な性格をもつ竪穴住居群の可能性もある。

次に建てられると思われるのが6°グループである。これにはこの調査区内ではもっとも大

きい3間×7間（SB127）、ほぼ同規模の3間×5間（SB013）の掘立柱建物が含まれている。また、SB013とSB170がやや不規則ながらもL字形に配置されている。しかし、竪穴住居を伴う可能性があることや、調査区周辺を含めてみてもこれらの建物を囲む溝、柵列などの区画が存在しないとみられることなどから官衙の中心的な建物群とは考えにくく、やはり付属施設の可能性が高い。

次に出現するとみられる8～9゜グループは掘立柱建物全体がおおよそL字形に配置されている。また、8世紀末～9世紀初頭の10～12゜グループはほぼ並列する掘立柱建物（SB020・021）や、南北両面に庇をもつ東西棟建物（SB200）などから、いずれのグループもまた官衙的な性格をもつものであろう。しかし、建物の規模などを考慮するとやはり付属施設と推測される。

9世紀代になると、再び竪穴住居が主体となるようで、主軸がいずれも大きく西傾することと合わせて一般的な集落であると考えられる。

まとめ

これまでやや冗長に述べてきたが、以上のことから西山田二本松遺跡A区における古代の建物の変遷と性格をまとめると、次のようになる。7世紀代は竪穴住居を中心とする一般的な集落であったが、ある程度の空白期間をおいた後に8世紀前半から9世紀初頭にかけて掘立柱建物を中心とする官衙の付属施設が次々と建てられていく。しかし、9世紀代には再び一般的な集落へと性格を変化させている。

8世紀前半～9世紀初頭の建物群は、「郡國」「厨」などのヘラ書き土器から郡衙の付属施設と考えてよさそうである。厩・厨とも『上野国交替実録帳』にみられる。出土遺物のなかで硯に注目してみると、円面硯などは出土しておらず、実際に使用されたかどうか不明の特殊円形硯と埋納遺構に転用された土師器墨入れのみ確認される。これは、佐藤浩司氏が示した律令体制下での地方支配の各クラスと硯の配備との関係のモデル[(7)]に符合する。また、西山田二本松遺跡の西方約1.1kmには「佐賀郡司（大領）佐賀君を壇越とする「椅寺」に比定される公算がきわめて大きいであろう」[(8)]とされる大願寺廃寺が所在している。このことから、古墳時代中期以降この地域で有力な地方豪族であった「佐賀君」の本願地が近いことが推測され、その本願地付近に佐嘉郡衙が置かれた可能性は高い。

それでは、郡衙の中心である郡庁と考えられるような遺構は周辺で確認できるのであろうか。4゜グループには東辺をそろえた倉庫群が認められ、東傾グループは調査区の東側に集中して確認される。そこで、調査区東側に所在する東山田一本杉遺跡Ⅱ・Ⅲ区、西山田二本松遺跡B区[(9)]ついてみてみよう。ここでは、8世紀前半から中頃とみられる築地側溝とそれに伴う掘立柱建物が確認されている。築地内部の状況など全体像は明らかになっていないが、この築地の

内部に郡庁があった可能性がある。側溝や掘立柱建物の主軸方位もわずかに西傾するほぼ正方位であり、時期的にもほぼ二つのグループと一致する。また、出土遺物も8世紀後半代のものはごく少量のようである。

6°グループの建物配置は南東方向からの景観を重視しているようであるが、その方向については現在のところまったく不明である。ただ、前述したようにSK036・037土壙が築地側溝のコーナー部になる可能性がないわけではないので、調査区南東部に郡庁が所在するのかもしれない。

8～9°・10～12°グループはいずれも西側からの景観を重視しているようである。調査区西側の西山田三本松遺跡では、掘立柱建物群と区画溝が確認されている。掘立柱建物の主軸方位はこれらのグループと類似している。区画溝は数条確認されているが、特に方1町ほどの方形と推定される区画溝があることは注目される。この区画溝は南端のみが調査されているため、その内部の状況は不明であるが、この内部に郡庁が置かれていた可能性がある。時期的にもほぼ同時期のようである。

このように、西山田二本松遺跡周辺には郡庁に関連すると考えられる遺構がいくつか確認されている。西山田二本松遺跡A区の状況と合わせて、8世紀前半から9世紀初頭にかけてこの地域が郡衙として機能していたことが推測される。この中で本調査区の地区は付属施設として利用されているようである。

ただ、以上のような推定では郡庁が数回移動していることになる。また、この地域の周辺には肥前国府、大願寺廃寺、大願寺二本松遺跡などほぼ同時期の官衙、寺院関連の遺跡が展開しており、これらとの関係など今後検討すべき課題が数多くある。これらの問題を解明してゆけば、この地域の古代の様相やその特徴などが明らかになっていくであろう。

〈註〉

1 横田賢次郎 1983「福岡県内出土の硯について―分類と編年に関する一試案―」『九州歴史資料館研究論集』9
2 山村信榮 1995「八世紀初頭の諸問題」『大宰府陶磁器研究』
3 太宰府町教育委員会 1982『大宰府条坊跡』太宰府町の文化財第5集
太宰府市教育委員会 1983『大宰府条坊跡II』太宰府市の文化財第7集
太宰府市教育委員会 1984『大宰府条坊跡III』太宰府市の文化財第8集
4 大和町教育委員会 1993『大願寺二本松遺跡』大和町文化財調査報告書第22集
5 町田章 1986「都市」『岩波講座日本考古学』4
6 佐賀県教育委員会 1995『東山田一本杉遺跡』佐賀県文化財調査報告書第125集
7 佐藤浩司 1993「墨書土器、ヘラ書き土器と硯に関する一考察―律令時代の豊前地域と大宰府を中心にして―」『古文化談叢』第30集（下）
8 小田富士雄 1995「肥前の奈良時代寺院跡」『風土記の考古学』⑤
9 註6

Tab. 5　古代竪穴住居一覧表

遺構番号	平面形	規模（m）	面積（m²）	主軸方位	主柱	カマド	周溝	時期	挿図番号
026	長方形	4.97×3.9	18.75	N14° W	4	北	×	8c?	53・54
027	?	南北3.86		S70° W	×	西	×	(7c)	54
035	方形	3.5×3.4	11.33	S81° E	4	東	1	8c後半	55～59
056	方形?	6.16×6.16		N26° W	?	北	1	7c	60
057	方形	5.42×5.16	(27.31)	N25° W	4	北?	4	7c	61
077	長方形?	5.4×4.5			?	東	×	8c後半	62・63
087	平行四辺形	4.46×3.38	(14.77)	S85° E	×	東	2	(8c)	64
094	方形	4.36×4.2	17.67	N24° W	4	×	×	(7c)	65
100	方形	4.28×4.28	(17.64)	N39° W	4	?	×	(7c)	66
105	方形	3.85×3.8	14.29	N 5° W	×	北	×	(8c)	67
139	方形	5.5×5.36	(29.66)	N21° W	×	?	1	7c	68
150	方形	3.85×3.3	(12.80)	N40° W	×	北西	×	9c	69
152	方形	5.98×5.96		N31° W	4	北西	2	(7c)	70
161	方形	4.48×4.43	19.42	N33° W	4	北西	4	7c	71・72
164	方形?	東西3.82			4?	?	×	(8c)	73
183	方形	一辺5.94		N42° W	4	北西	×	(7c)	74・75
185	方形	4.92×4.82		N43° W	4	北西?	×	(7c)	74
186	?	東西7.15		S64° W	4?	西	×	7c	76
188	長方形	4.13×3.56		N10° W	4	北	1	(8c)	77・78
192	方形?	東西5.51		N34° W	4	?	×	(7c)	77
194	方形	4.92×4.6		N28° W	4	北?	×	(7c)	79
196	方形?	東西3.88		N28° W	×	西?	×	(7c)	80
197	長方形?	短軸2.68		N35° W	×	北西	×	(8c)	80
206	方形	4.4×4.02		N 5° E	×	北	?	(8c)	81・82
209	方形	4.6×4.54		S76° W	×	西?	×	(7c)	81・82
210	?			(N10° E)	×	北?	×	(8c)	81・82
314	方形	南北3.32		N 7° E	×	?	2	(8c)	83

Tab. 6　古代掘立柱建物一覧表

遺構番号	構造	庇	主軸方位	梁行（m）	桁行（m）	グループ	挿図番号
013	3間×5間　南北棟	北?	N 6° W	5.08(17尺)	12.60(42尺)	6°	84
015	2間×2間　総柱		N 4° W	3.56(12尺)＊	3.84(13尺)＊	4°	85
020	3間×4間　東西棟		N79° E	5.0(16.5尺)	8.24(27尺)	10～12°	86
021	東西3間　東西棟?		N79° E	東西	6.94(23尺)	10～12°	86
030(古)	2間×2間　総柱		N 4° W	4.54(15.4尺)＊	4.58(15.5尺)＊	4°	87・88
(新)	2間×3間　南北棟		N 2° 30′ W	4.44(15尺)＊	5.42(18.4尺)＊	4°	87・88
033	2間×2間　総柱		N12° 30′ W	2.78(9.2尺)	3.02(10尺)	10～12°	89
045	東西4間　東西棟?		N84° E	東西	7.3(24.4尺)	6°	89
090	3間×3間　東西棟		N82° E	4.8(16尺)	9.1(30尺)	8～9°	90
091	2間×2間　総柱		N39° W	3.18(10.6尺)	3.28(11尺)	(9c)	91
103	3間×4間　東西棟		N86° 30′ E	4.42(15尺)＊	6.78(23尺)＊	4°	90・91
113	2間×2間　総柱		N 9° W	3.6(12尺)	3.9(13尺)	8～9°	92
127	3間×7間　東西棟		N84° 30′ E	5.4(18尺)	11.94(40尺)	6°	93
128	3間×3間　東西棟		N81° E	4.8(16尺)	7.32(24.4尺)	8～9°	94
138	2間×2間　総柱		N 4° W	4.04(13.6尺)＊	4.56(15.4尺)＊	4°	95
141	2間×2間　総柱		N15° 30′ W	3.13	3.33	(7c)	95
170	3間×4間　東西棟	東西	N83° 30′ E	3.6(12尺)	8.1(27尺)	6°	96
171	3間×3間　東西棟		N80° 30′ E	4.8(16尺)	6.66(22.2尺)	8～9°	96
200	5間×4間　東西棟	南北	N78° 30′ E	6.62(22尺)	5.16(17.2尺)	10～12°	97
201	2間×2間　総柱		N 3° E	2.79(9.3尺)	2.82(9.4尺)	東傾	98
218	2間×2間　総柱		N24° W	3.0	4.0	(7c)	97
222	2間×2間　総柱		N 2° W	3.3(11尺)	3.78(12.6尺)	東傾?	98
312	2間×2間　総柱		N18° W			(7c)	99

＊　1尺＝0.295m

Ⅳ　中世

1．溝（Fig. 109・110）

中世の溝として確認できるものは6条遺構番号が付されているが、SD068～071は一つの溝の掘り直しなどととらえることができ、3条検出されたことになる。さらに、SD078・101は一連の区画溝と考えられる。

SD068・069・070・071溝は調査区北西部に位置する。SD069溝が中央やや北西寄りの部分で屈曲していることから区画溝の一種とみられる。SD069溝は西側が調査区外にのびている。南側は溝底と検出面の標高がほぼ一致するために検出できておらず、本来どこまでのびていたかは不明である。SD068溝は東側の本来の状況が不明である。SD070溝はSD069溝の掘り直しとみられる。いずれも溝底はほぼ水平である。この区画溝に伴うとみられる建物などは認められない。図示したものの他にSD069溝から龍泉窯系青磁椀Ⅰ－1類の破片などが出土しているが、遺物の量は少ない。

501～503はSD068溝出土である。**501**は底部糸切りの土師器小皿で、口径8.0cm、器高1.4cmである。板状圧痕がみられる。**502**は白磁皿Ⅸ類で、復原口径9.2cmである。**503**は須恵器甕で、復原口径17.0cmである。

SD078溝は調査区南東部に位置する。SD101溝とほぼ同時期と考えられ、位置的な関係から一連の区画を形成するものであろう。西端はやや不明瞭であるが、立ち上がるようであり、SD101溝とは連続していないようである。溝底は東側の方が0.1mほど低くなっている。

504～508は底部糸切りの土師器小皿で、いずれも板状圧痕がみられる。**504**は復原口径8.2cm、器高1.0cm、**505**は復原口径8.3cm、器高1.4cm、**506**は復原口径8.6cm、器高1.3cm、**507**は復原口径8.6cm、器高1.0cm、**508**は復原口径8.9cm、器高1.2cmで、平均口径8.5cm、器高1.2cmである。**509・510**は底部糸切りの土師器坏で、ともに板状圧痕がみられる。**509**は復原口径13.7cm、器高2.6cm、**510**は復原口径14.2cm、器高3.3cmである。**511**は龍泉窯系青磁椀で、復原底径5.4cmである。Ⅰ－4類であろうか。

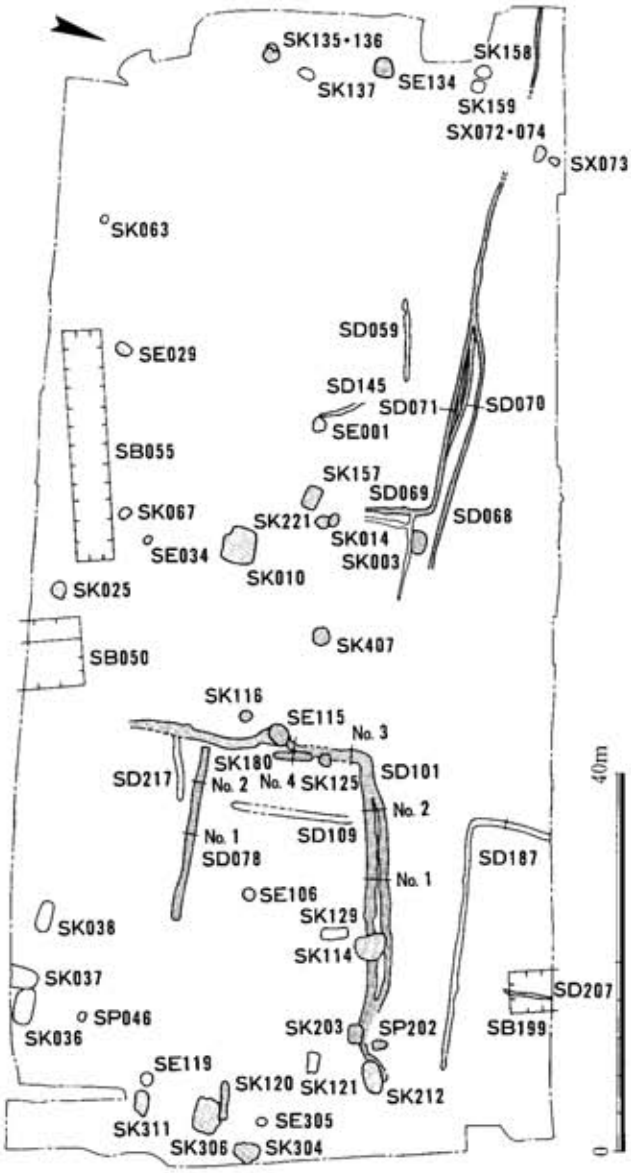
SD101溝は調査区西側に位置し、中央やや北西寄りの部分で屈曲する。SD078溝、時期不明のSD109溝と関連する可能性が高い。2～3回掘り直されており、SK180土壙が掘り直される以前の溝の一部である可能性もある。SE115井戸付近でやや張り出す。溝底は0.15mほど北西側が高くなっている。溝の南側は溝底と検出面の標高がほぼ一致しており不明であるが、東側はレベル的には検出されるはずであり、SK212土壙の手前で終わっていると推定される。屈曲は100°ほどを測り、直角ではないことから、方形区画の一部であるとは思われない。図示したものの他に瓦器椀、龍泉窯系青磁椀Ⅰ－5類などが出土している。

512～525は底部糸切りの土師器小皿で、ほとんどのものに板状圧痕がみられる。口径7.7～

8.8cm、器高1.0～1.3cmで、平均はそれぞれ8.4cm、器高1.2cmである。**526～533**は底部糸切りの土師器坏で、いずれも板状圧痕がみられる。口径12.0～14.7cm、器高2.1～3.5cmで、平均はそれぞれ13.8cm、3.0cmである。**534**は龍泉窯系青磁椀Ⅰ－1類で、底径5.8cmである。内面見込みに1ヶ所目跡が残る。**535**は黄釉陶器盤で、復原口径30.4cmで、器高20cmほどに復原できる。図示していないが、同一個体破片の内面に褐釉で文様を描いたものがある。口縁部内面から外面には施釉しない。

また、時期不明の溝が6条確認されている。このうち、前述したように**SD109溝**はSD101溝との関連性が強い。また、**SD187溝**は屈曲がみられ、区画溝の可能性が高い。調査区北側で大和町教育委員会が調査した西山田二本松遺跡[1]2区SD11溝に続くものとみられる。**SD207溝**もこの溝と関連する区画溝と考えられ、大和町教委調査西山田二本松遺跡1区SD27溝と同一の可能性がある。ともに出土遺物が乏しく、時期比定はできない。他の溝については性格不明である。

536・537はSD187溝出土で、ともに底部ヘラ切りの土師器坏である。**536**は復原口径11.4cm、器高



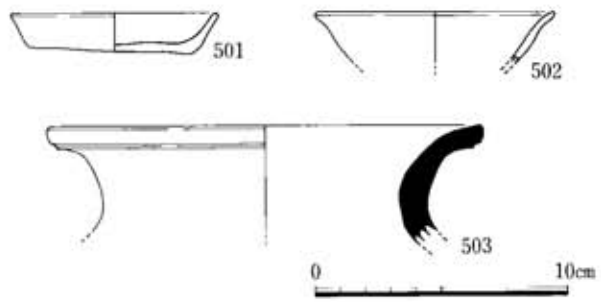


Fig. 109　中世遺構配置図（1/800）、SD068出土遺物（1/3）

2.1cmで、537は復原口径13.5cm、器高3.6cmである。

Tab.7　SD101溝出土土師器観察表

遺物番号	器種	口径	器高	底径	切離	ナデ	圧痕
512	小皿	(7.7)	1.0	(6.2)	イト	○	○
513		8.0	1.2	6.8	イト	○	○
514		(8.0)	1.3	(6.9)	イト		
515		(8.1)	1.5	(5.5)	イト	○	○
516		8.3	1.2	7.0	イト	○	○
517		(8.3)	1.3	(5.9)	イト	○	○
518		8.4	1.1	6.3	イト	○	○
519		8.4	1.2	6.6	イト	○	○
520		(8.5)	1.0	(6.8)	イト		○
521		8.7	1.1	7.3	イト	○	○
522		(8.7)	1.1	(7.8)	イト	○	○
523		(8.7)	1.2	(6.8)	イト	○	○
524		8.7	1.3	6.5	イト	○	○
525		8.8	1.3	6.8	イト	○	○
526	坏	(12.0)	2.6	(9.6)	イト	○	○
527		(13.2)	2.1	(10.0)	イト	○	
528		(13.2)	2.9	(9.1)	イト	○	○
529		13.8	3.2	9.6	イト	○	○
530		14.4	3.5	9.4	イト	○	○
531		(14.6)	3.1	(9.6)	イト	○	○
532		(14.6)	3.5	(10.1)	イト	○	○
533		(14.7)	2.8	(10.6)	イト	○	○

2. 掘立柱建物

SB050掘立柱建物（Fig.110）

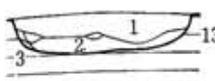
調査区南端中央に位置する。発掘調査時にはSA055としていた遺構で、報告書作成段階で検討した結果推定された掘立柱建物である。図上の再検討によって、SA055はL字形に配置される2棟の掘立柱建物とみなした方がよいと思われるので、西側の全体が判明する3×12間の掘立柱建物をSB055、東側のものをSB050として報告することにする。その理由として、すでに現地においてSA055の西側には対応する南北2列の柱穴列が13基まで確認されていたが、東側に関しては南側の柱穴列に明確に対応する北側の柱穴列がみられないことがまずあげられる。南列についても西から14基目の柱穴が検出されていない。それに対して、13基目の柱穴の間には西端と同様に2基の柱穴が検出されており、さらに後述するように規則的に間仕切りと考えられるような柱穴が確認できる。そこで、SA055の西側は3×12間の掘立柱建物の可能性が高いと推定した。

SA055の東側の部分は南列のみ確認できるが、西側に比べて柱穴間がやや不規則になっている。これをSB055掘立柱建物に密接に関連する柵列ととらえることもできる。しかし、南列に直交する柱穴列を南側に不規則ながら確認することができ、ここでは梁行4間で、西面に庇をもつ南北棟建物、SB050掘立柱建物として報告する。

この2棟の掘立柱建物はほぼ直交するように配置されている。したがって、計画的に同時に建てられてものとみられる。

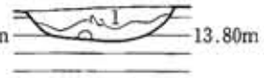
時期については、出土遺物から明確にすることはできなかった。古代のSB020掘立柱建物との切合関係も不明瞭である。主軸方位をみると、奈良・平安時代と判明する掘立柱建物でこの2棟と軸をそろえる建物は確認できない。主軸がほぼ同じ建物としては、調査区北東端に位置するSB199掘立柱建物がある。後述するように、この掘立柱建物は平安時代以降と考えられる。

SD078 No.1



1．暗褐色砂質土（焼土を少量含む）
2．暗褐色土（1より明るい。炭化物を少量含む）
3．黒褐色土

SD078 No.2

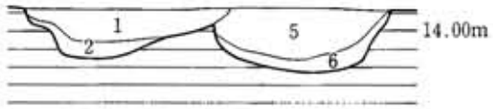


SD187

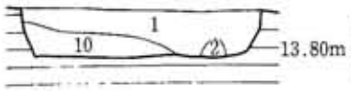
1．暗褐色土
2．黒褐色土
3．暗褐色土
4．暗褐色土（地山土粒を多く含む）

SD101 No.1

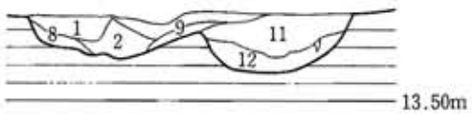
SD101 No.2



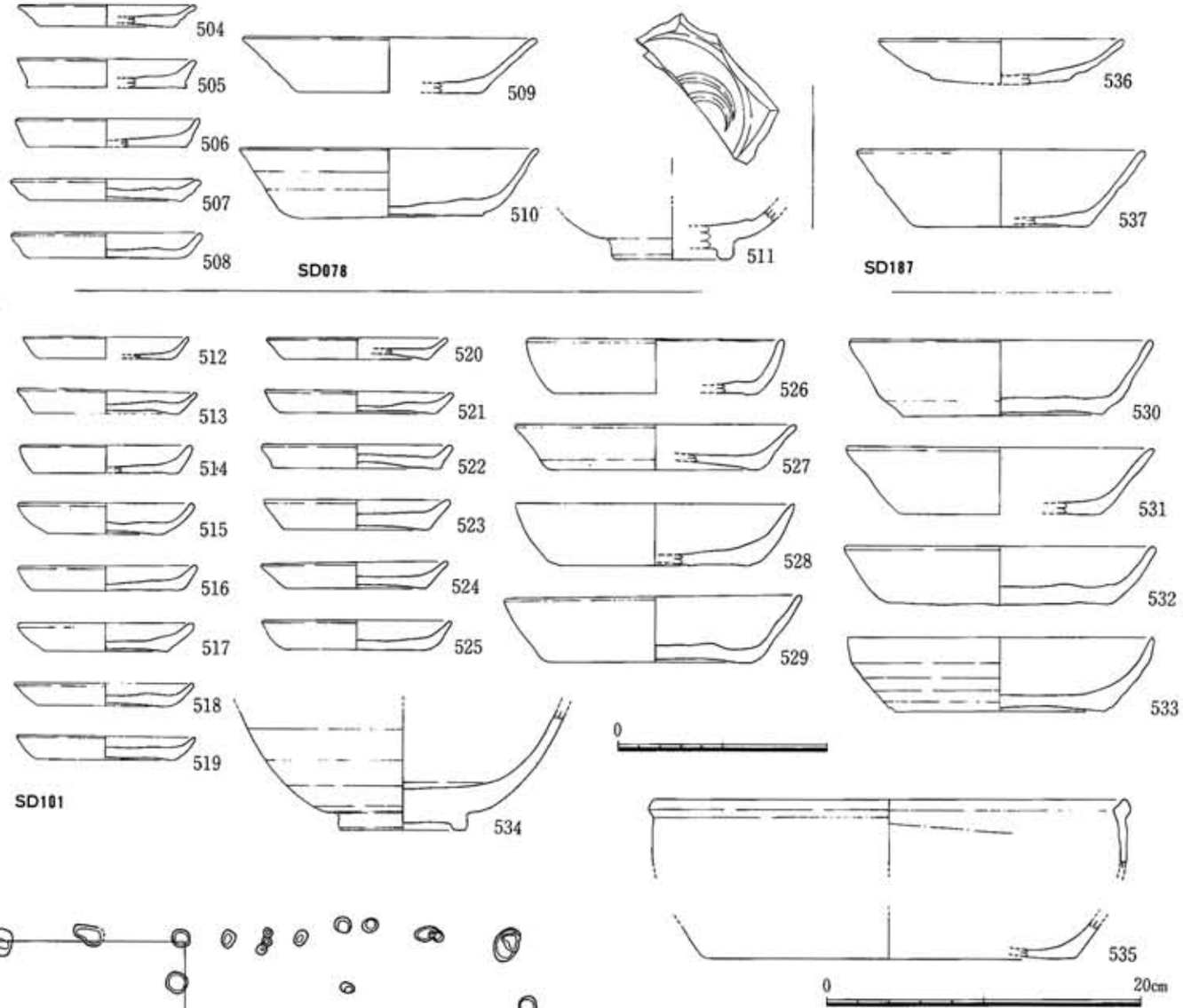
SD101 No.3



SD101 No.4



1．茶褐色土（地山土：黄褐色土粒を含む）
2．茶褐色土（地山土ブロックを多く含む）
3．暗茶褐色土（地山土粒を含む）
4．暗茶褐色土（地山土ブロックを含む）
5．茶褐色土（地山土粒を含む）
6．茶褐色土（地山土ブロックを含む）
7．灰褐色粘土
8．明褐色土（地山土ブロックを多く含む）
9．暗褐色土（地山土ブロックを少し含む）
10．SB088埋土（暗茶褐色土）
11．SK180埋土（暗褐色土）
12．SK180埋土（黒褐色土）



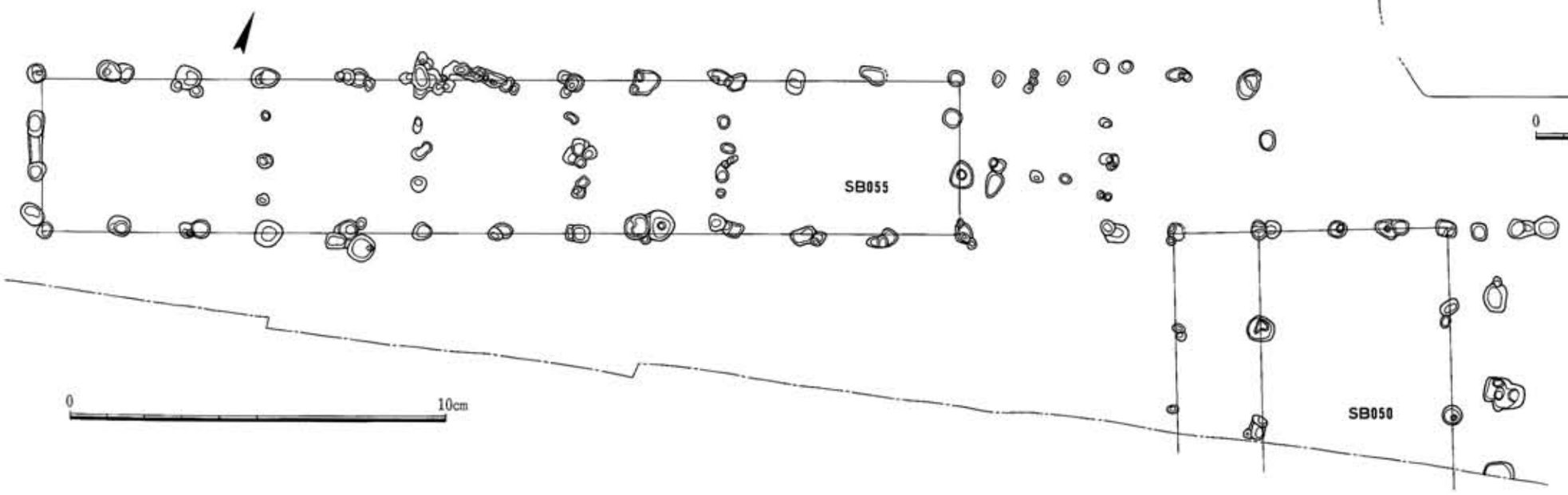


Fig. 110　SD078・101・187溝土層図（1/40）、出土遺物（535；1/4、他；1/3）、SB050・055掘立柱建物（1/150）

そして、SB050・055掘立柱建物とSB199掘立柱建物の間に前述のSD101溝があり、関連性が高いと考えられる。また、柱の掘形も円形であることから、中世のものと推定される。

SB050掘立柱建物は、梁行4間（7.25m）で、主軸をN22°Wにとる南北棟建物である。弥生時代のSB024・418竪穴住居、古代のSB021掘立柱建物と重複する。桁行は3間まで確認でき、南半部が調査区外にある。西面に庇がある。身舎は梁行3間で、柱間距離は東から1.65m、1.2m、2.25mとばらつきがある。梁行の柱間距離についても2.1～3.0mとばらつきがあり、東辺と西辺が正確には対応していない。柱の掘形は径0.5mほどの略円形のものが多い。庇は出1間（2.25m）で、柱の掘形は径0.3mほどのもので身舎部分に比較して小さい。

SB055掘立柱建物（Fig.110）

調査区南端中央西寄りに位置する。SB050掘立柱建物の項で述べたように、発掘調査時にSA055としていた遺構の西側部分である。弥生時代のSB012・022・417竪穴住居、古代のSB020掘立柱建物と重複する。梁行3間（4.1m）、桁行12間（24.6m）で、主軸をN69°Eにとる細長い東西棟建物である。東西両端から4本目の柱から2間ごとに間仕切りの柱穴がある。柱間距離は桁行は2.05mでほぼ等間隔であるが、梁行は平均1.37mであるが、ばらつきがある。柱の掘形は径0.4～0.6mの略円形である。なお、Fig.110にはSB050・055掘立柱建物に関連する可能性がある柱穴を図示している。

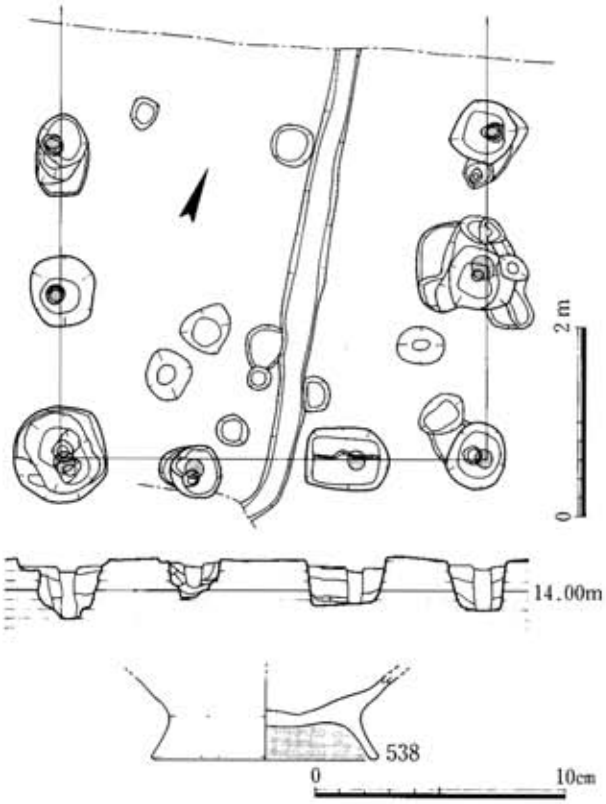


Fig.111　SB199掘立柱建物（1/80）、出土遺物（1/3）

SB199掘立柱建物（Fig.111）

調査区北東端に位置する。弥生時代のSB213掘立柱建物、時期不明のSD207溝と重複する。梁行3間（4.54m）で、主軸をN21°Wにとる南北棟建物と推定される。SB050・055掘立柱建物と主軸方位がほぼそろう。桁行は3間まで確認でき、北半部が調査区外にある。柱間距離は梁行で中間の1間分が1.72mと大きいために不均等で、桁行も1.42～2.02mと不均等である。柱痕跡は17～22cmで、平均18cmである。P1とP8の間に

床束あるいは間仕切りと思われる柱穴がある。柱の掘形は径0.6mほどの略円形で、埋土は褐～黒褐色土が主体である。

538は土師器椀で、復原底径9.0cmである。高台部内側のみ黒色化している。

3. 集石遺構

SX072・074集石遺構（Fig. 112）

調査区北西端に位置する。SX072集石遺構は平面形が0.8×1.74mほどの不整な長方形で、検出面からの深さ約0.45mの掘形に径2～15cmほどの礫石がぎっしり詰まっている。礫石の中には、土師器、瓦器、須恵器、陶磁器の破片が混入している。性格は不明といわざるをえない。

539は土師器鍋で、復原口径30.9cmを測る。徳永分類[(2)]Ⅳ類である。**540**は底部糸切りの土師器小皿で、底径4.2cmである。**541・543**は同安窯系青磁椀Ⅰ－1b類である。**541**は底径5.1cm、**543**は底径4.9cmである。**542**は龍泉窯系青磁椀Ⅰ－4類で、底径5.3cmである。内底見込みにキノコ状の文様を片彫りしている。全面施釉後高台畳付のみ浅く削り取り、高台内側に目跡が残る。

SX074はSX072集石遺構より古い土壙で、集石遺構であったかどうかは不明である。

SX073集石遺構（Fig. 112）

調査区北西端に位置する。掘形の平面形は長軸1.13m、短軸0.63～0.82mの北東隅が不整な長方形で、検出面からの深さ0.25mほどである。上層に2～10cmほどの礫石が2ヶ所に集中しているが、SX072集石遺構ほどぎっしり詰まっているわけではない。礫石の中に土師器、須恵器、陶磁器の破片が混入している。墓の可能性がある。

544は青磁小椀で、底径4.5cmである。内面見込みは釉をカキ取っている。胎土は灰白色で、釉は明緑灰色を呈する。**545**は底部糸切りの土師器坏で、復原底径5.5cmである。

4. 井戸

SE001井戸（Fig. 113）

調査区中央西寄りに位置する。素掘りの井戸で、平面形は1.4×1.66mの不整な楕円形である。南壁と東壁はほぼ垂直に、北壁と西壁は緩やかに立ち上がる。底面の標高は12.85mである。図示していないが、土師器鍋（徳永分類Ⅱb類）、白磁ⅢⅧ類、龍泉窯系青磁椀Ⅰ類が出土している。

SE029井戸（Fig. 113）

調査区南西に位置する。素掘りの井戸で、平面形は径1.5mほどの不整な円形である。調査中に崩落があったために、壁の立ち上がりを土層図からみると、東壁はやや急に立ち上がり、

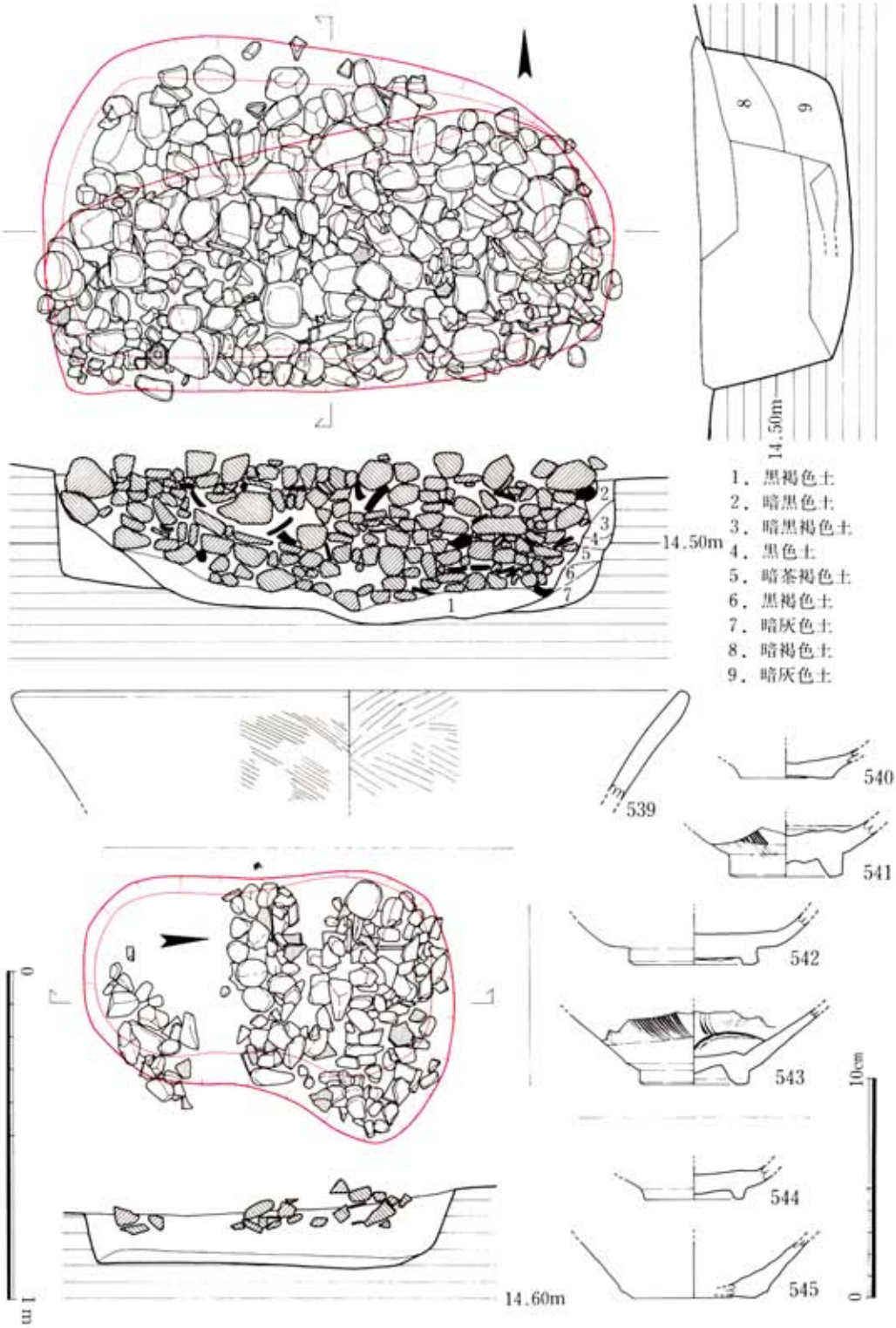


Fig. 112　SX072・073・074集石遺構（1/20）、出土遺物（1/3）

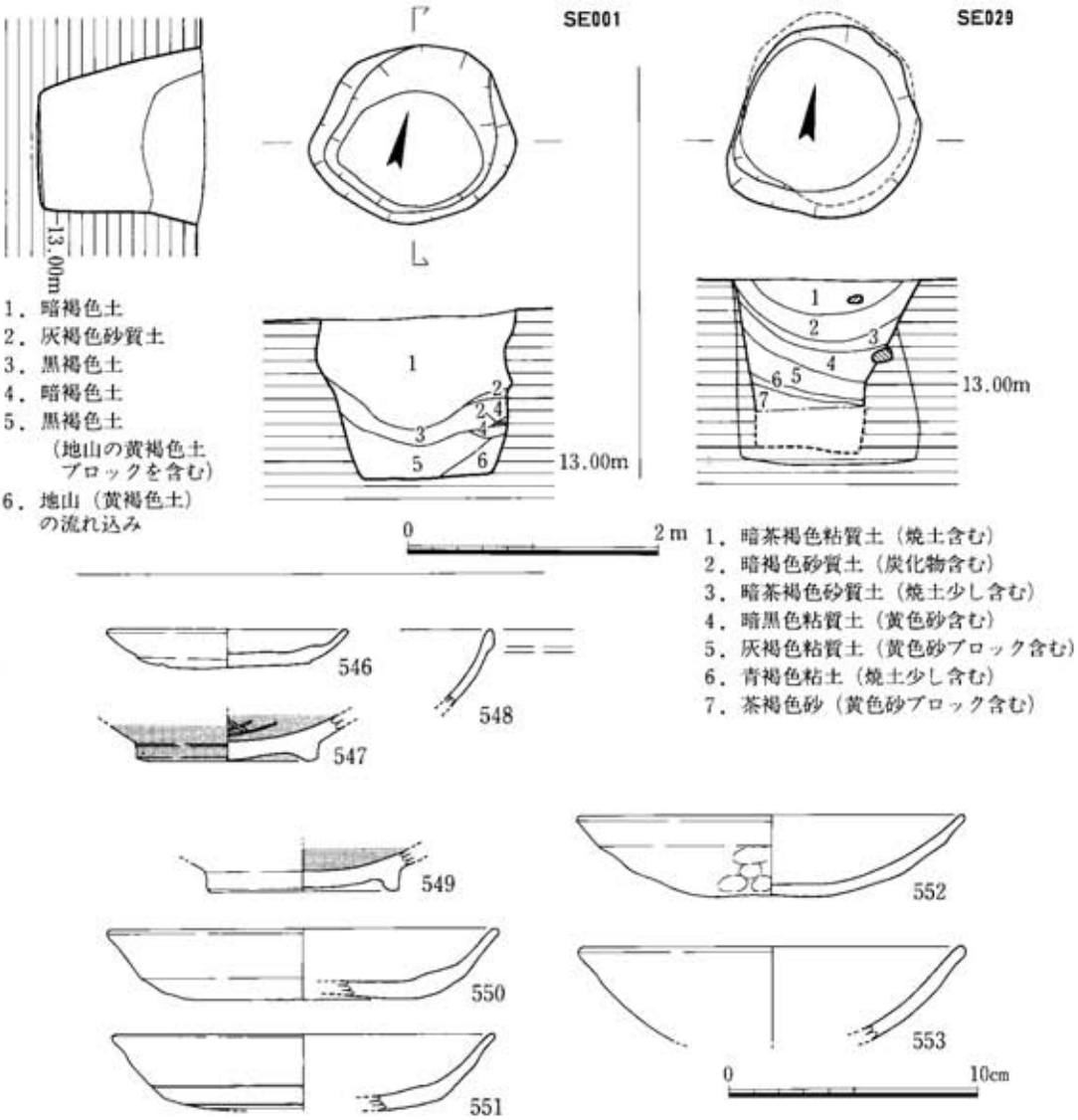


Fig. 113　SE001・029井戸（1/60）、出土遺物（1/3）

西壁は下半部は垂直近くに、上半部はかなり緩やかに立ち上がる。底面の標高は12.40mほどと推定される。

546～**548**は埋土下層から、**549**～**553**は上層からの出土である。**546**は底部ヘラ切りの土師器小皿で、口径9.3cm、器高1.6cmである。板状圧痕がみられる。**547**は黒色土器B類椀で、復原底径7.2cmである。**548**は白磁椀II類である。

549は黒色土器A類椀で、底径7.3cmである。**550**・**551**は底部ヘラ切りの土師器坏である。**550**は復原口径15.4cm、器高2.8cm、**551**は復原口径14.8cm、器高3.1cmで、いずれも板状圧痕がみられる。**552**・**553**は底部ヘラ切りの土師器丸底坏である。**552**は口径15.3cm、器高3.3cmで、**553**

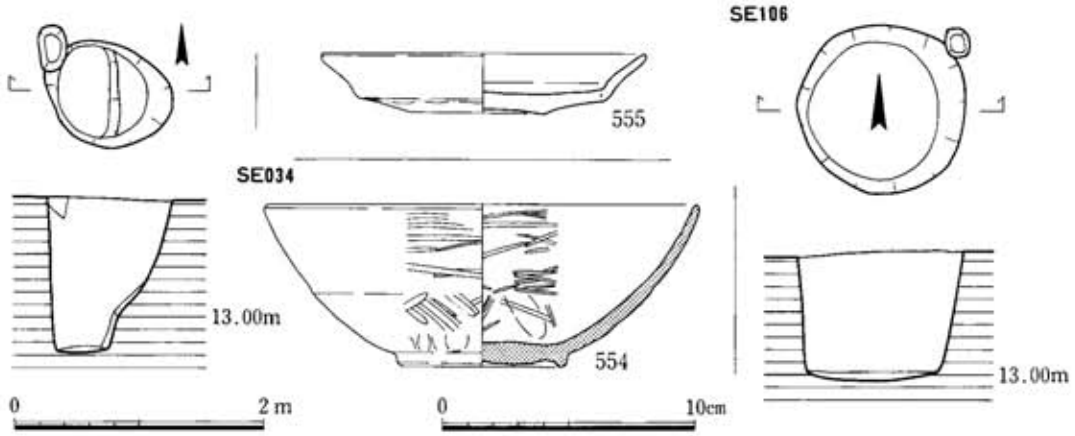


Fig. 114　SE034・106井戸（1/60）、出土遺物（1/3）

は復原口径15.0cmで、いずれも外面に指頭圧痕が残る。

SE034井戸（Fig. 114）

調査区中央南寄りに位置する。素掘りの井戸で、平面形は0.8×1.0mの略円形で、井戸にするにはやや小型である。西壁が緩やかに立ち上がり、その他の壁はほぼ垂直に立ち上がる。底面の標高は12.74mである。

554は瓦器椀で、復原口径16.6cm、器高6.5cmである。内外面にやや雑なヘラミガキを施し、底部内外面に指頭圧痕が残る。底部ヘラ切りで、板状圧痕がみられる。

SE106井戸（Fig. 114）

調査区東側中央に位置する。古代のSB087竪穴住居と重複する。素掘りの井戸で、平面形は径1.3mほどの円形である。壁はやや急に立ち上がり、底面の標高は12.95mである。図示したものの他に、瓦器椀、土師器小皿の破片が出土している。

555は同安窯系青磁皿Ⅰ－1a類である。口径12.7cm、器高2.4cmである。

SE115井戸（Fig. 115）

調査区中央東寄りに位置する。SD101溝より新しいと考えられる。弥生時代のSB085竪穴住居と重複する。素掘りの井戸で、平面形は2.06×2.2mの不整な円形である。壁はほぼ垂直に立ち上がり、底面の標高は12. 92mである。図示したものの他に、白磁椀Ⅴ類、瓦器椀、SK114土壙出土の陶器四耳壺と接合する破片などが出土している。

556は青磁か白磁かの判断が難しいが、ここでは青磁としておく。底径5.1cmの椀で、外面に細かい櫛目が施される。内面見込みに目跡が4ヶ所みられる。胎土は灰白色で、やや青みがか

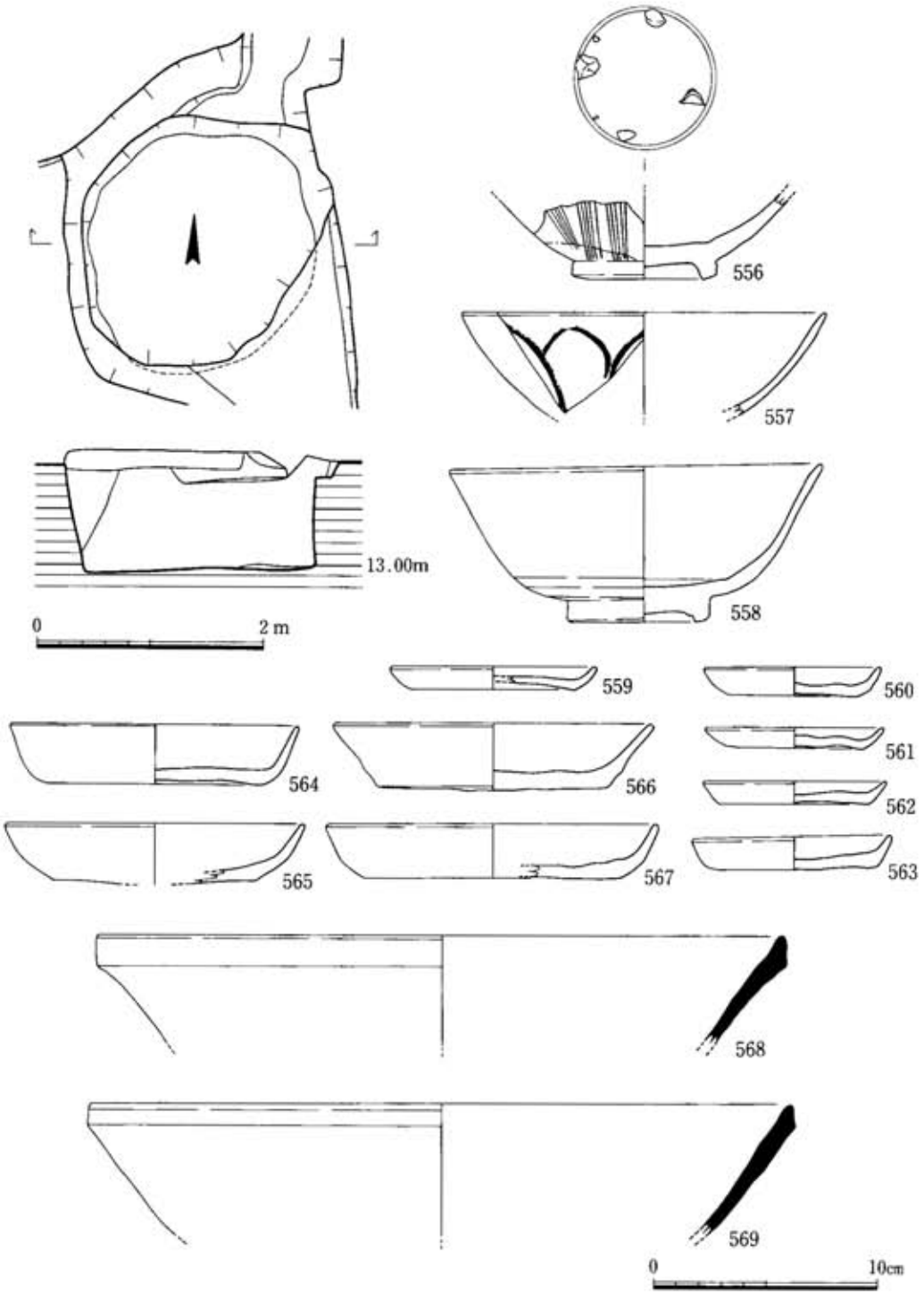


Fig. 115　SE115井戸（1/60）、出土遺物（1/3）

った透明な釉を施している。**557・558**は龍泉窯系青磁椀である。**557**はⅠ－5a類で、復原口径16.2cmである。**558**はⅠ－1類で、口径16.7cm、器高7.1cmである。

559～**563**は底部糸切りの土師器小皿である。**559**は復原口径9.0cm、器高1.0cm、**560**は口径7.8cm、器高1.3cm、**561**は口径7.9cm、器高0.9cm、**562**は復原口径8.2cm、器高1.0cm、**563**は口径8.8cm、器高1.5cmである。いずれも板状圧痕がみられる。

564～**567**は底部糸切りの土師器坏である。**564**は復原口径12.6cm、器高2.6cm、**565**は復原口径13.0cm、器高2.7cm、**566**は口径14.0cm、器高3.0cm、**567**は口径14.5cm、器高2.3cmである。**565・566**には板状圧痕がみられる。

568・569は東播系須恵器捏鉢である。**568**は復原口径30.4cm、**569**は復原口径31.0cmであるが、小破片のために確実ではない。

SE134井戸（Fig.116）

調査区西端中央に位置する。素掘りの井戸で、平面形は1.86×1.95mの隅丸方形である。壁は緩やかに立ち上がり、底面の標高は13.06mである。

570・571は底部ヘラ切りの土師器小皿である。**570**は口径9.1cm、器高1.5cm、**571**は口径9.5

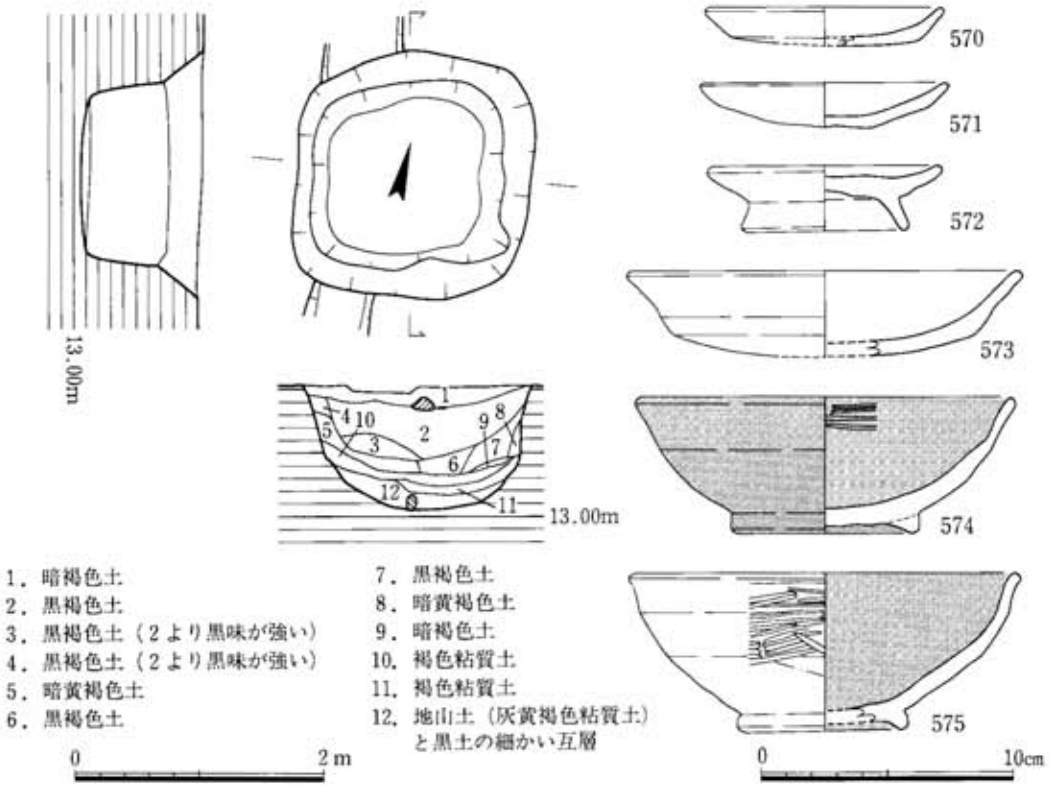


Fig.116　SE134井戸（1/60）、出土遺物（1/3）

cm、器高1.7cmで、ともに板状圧痕がみられる。**572**は土師器高台付小皿で、口径9.0cm、器高2.6cmである。**573**は底部ヘラ切りの土師器坏で、復原口径15.3cm、器高3.4cmである。

574は黒色土器B類椀で、口径14.6cm、器高5.5cmである。内面はヘラミガキで、口縁部内面は丁寧に施される。口縁部外面はヘラミガキが施されているようであるが、不明瞭である。色調や底部の形状は瓦器を思わせるような雰囲気を持つ。**575**は黒色土器A類椀で、口径15.0cm、器高6.3cmである。外面も一部黒色化しているが、一応A類としておく。全体的に黒色化にムラがある。口縁部から体部上半部は丁寧なヘラミガキで、内面もヘラミガキであるが磨滅などのため単位などは不明確である。体部下半部はヘラケズリである。

SE119井戸（Fig.117）

調査区南東隅に位置する。素掘りの井戸で、平面形は径1.3mほどの円形である。壁はほぼ垂直に立ち上がり、底面の標高は12.16mである。奈良時代とみられる土師器、須恵器の細片が相対的に多いが、同安窯系青磁椀の破片が1点出土している。したがって、明確な時期は不明である。

SE305井戸（Fig.117）

調査区東端中央に位置する。弥生時代のSB302竪穴住居と重複する。素掘りの井戸で、平面形は1.88×2.06mの円形である。底面の標高は11.80mで、調査区内の井戸ではもっとも深く掘り下げている。出土遺物がほとんどないために時期は不明である。

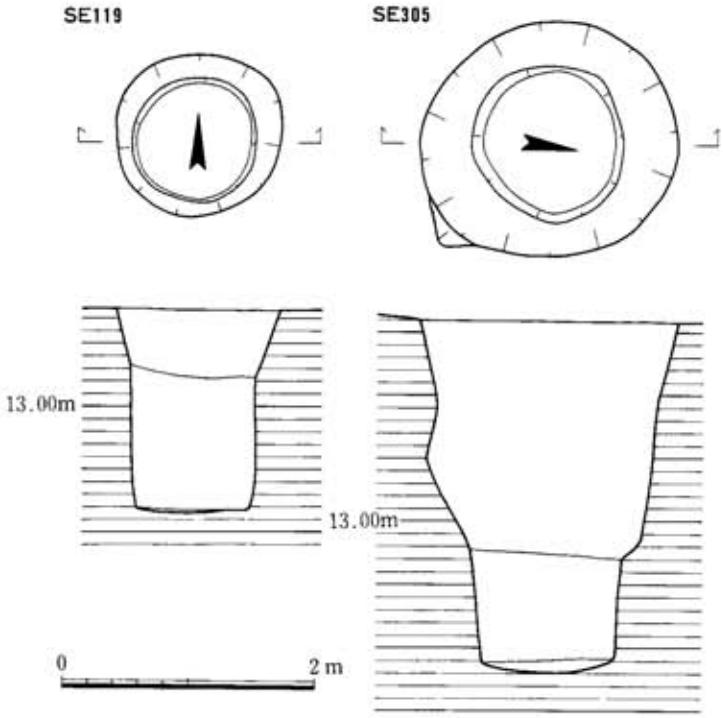


Fig.117　SE119・305井戸（1/60）

5. 土壙

中世の土壙は19基確認されるが、いずれも出土遺物は多くない。その中で比較的まとまって遺物が出土したものや特徴ある遺物を出

土したものを報告することにする。なお、SK036・037・038土壙は時期不明のものである。

SK010土壙（Fig. 118）

調査区中央南寄りに位置する。平面形は3.52×3.9mほどの不整な隅丸長方形と思われるが、残存状況が悪く、特に南西隅は正確ではない。底面は中央部が深くなる。図示したものの他に、東播系須恵器捏鉢が出土している。

576は底部糸切りの瓦器小皿で、復原口径9.3cm、器高1.4cmである。板状圧痕がみられる。**577・578**は龍泉窯系青磁椀Ⅰ－5b類である。**577**は底径5.2cmで、**578**は復原口径15.0cmである。**579**は土師器鍋で、復原口径32.8cmを測る。徳永分類Ⅰ類である。

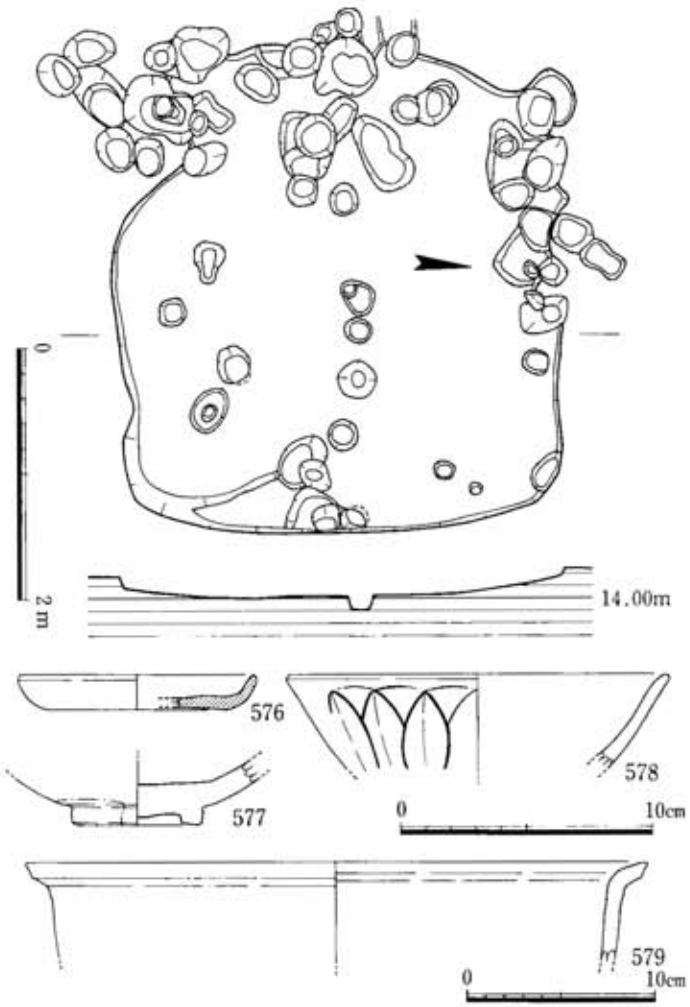


Fig. 118　SK010土壙（1/60）、出土遺物（579：1/4、他：1/3）

SK014土壙（Fig. 119）

調査区中央西寄りに位置する。SK221土壙より新しく、弥生時代のSB005竪穴住居と重複する。相当量の弥生土器が出土しているが、ほぼ完形の土師器小皿が3点出土しており、中世の土壙とした。平面形は隅丸長方形と推定されるが、SB005との重複により西側は不明である。短軸0.96mを測る。

580～582は底部糸切りの土師器小皿で、いずれも板状圧痕がみられる。**580**は口径8.7cm、器高2.1cm、**581**は口径8.7cm、器高1.2cm、**582**は口径8.8cm、器高1.5cmである。**583～586**は弥生土器である。**583**は支脚で、裾径11.2cm、器高9.8cmである。**584**は複合口縁壺で、復原口径16.1cmである。**585**は広口壺で、復原口径12.2

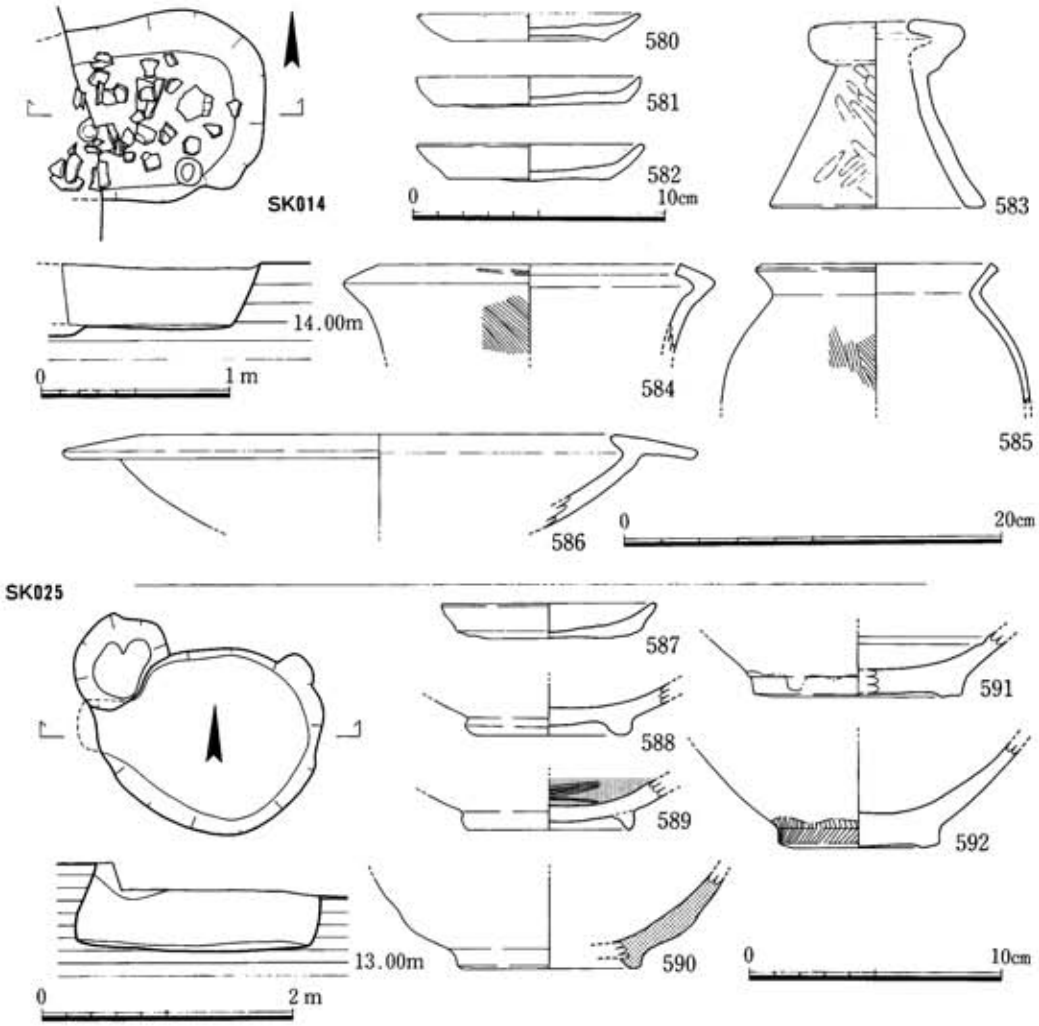


Fig. 119　SK014（1/40）・025土壙（1/60）、出土遺物（583～586：1/4、他：1/3）

cmである。**586**は鋤先状口縁の高坏で、復原口径33.8cmである。

SK025土壙（Fig. 119）

調査区南端中央に位置する。弥生時代のSB418竪穴住居、古代のSB021掘立柱建物と重複する。平面形は1.46×1.76mのやや不整な楕円形である。壁が垂直近くに立ち上がり、底面の標高が13.10mであることから井戸の可能性もある。

587は底部糸切りの土師器小皿で、復原口径8.4cm、器高1.4cmである。板状圧痕がみられる。**588**は土師器椀で、底径5.9cmである。**589**は黒色土器A類椀で、底径6.2cmである。**590**は内面まで黒色化していないので瓦器椀としておく。復原底径6.9cmで、内面はヘラミガキであるが、単位は不明である。**591・592**は白磁椀Ⅳ類である。**591**は底径8.2cmで、釉がはじけている。**592**

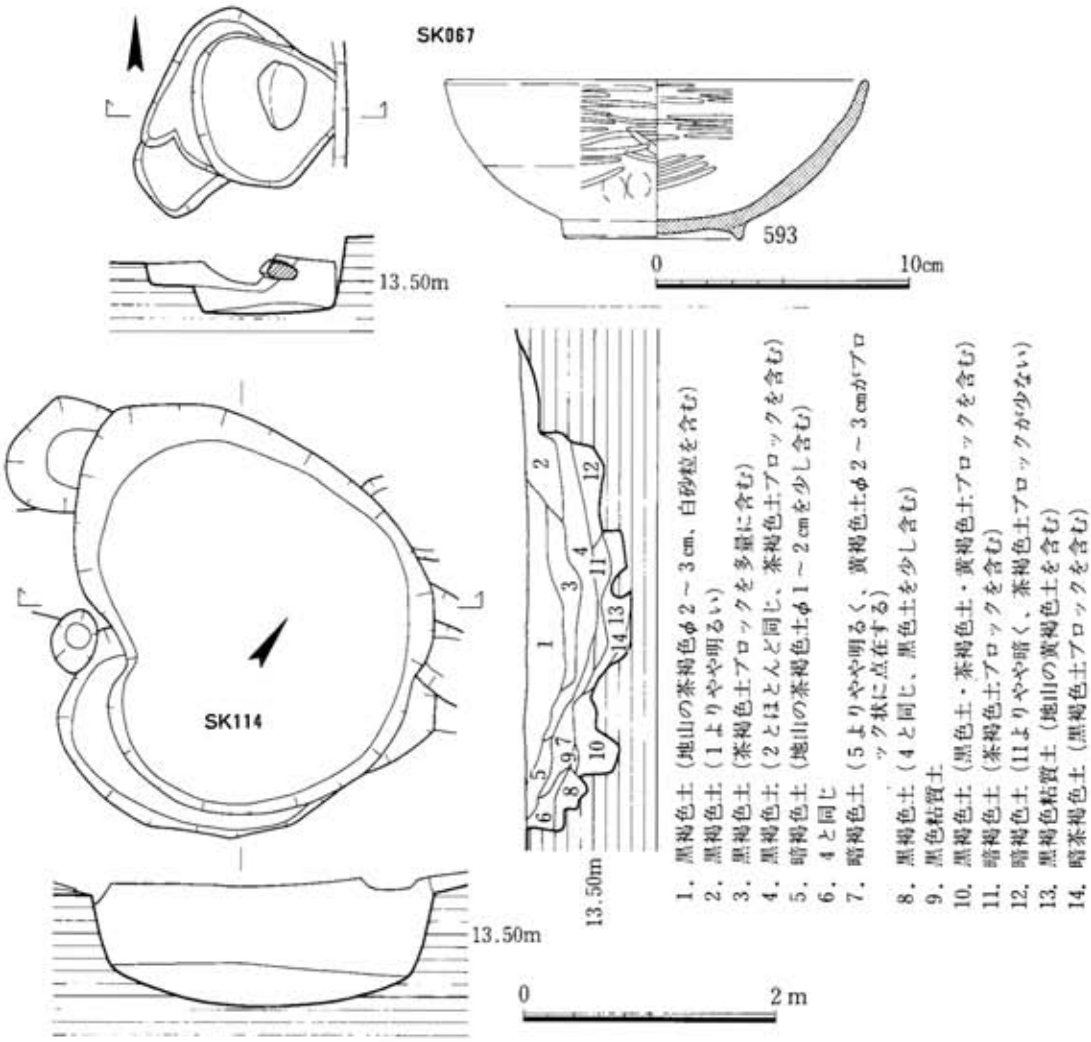


Fig. 120　SK067土壙（1/60）・出土遺物（1/3）、SK114土壙（1/60）

は底径6.4cmである。

SK067土壙（Fig. 120）

調査区中央南寄りに位置する。弥生時代のSB012竪穴住居と重複する。平面形は1.2×1.5mほどの不整な長方形である。38×54cmほどの石が上層で確認されるが、土壙との関連は不明である。ほぼ完形の瓦器椀が1点出土している。

593は瓦器椀で、口径16.4cm、器高6.3cmである。内面と体部上半部にやや雑なヘラミガキが施される。底部外面には糸切り痕と板状圧痕を留める。

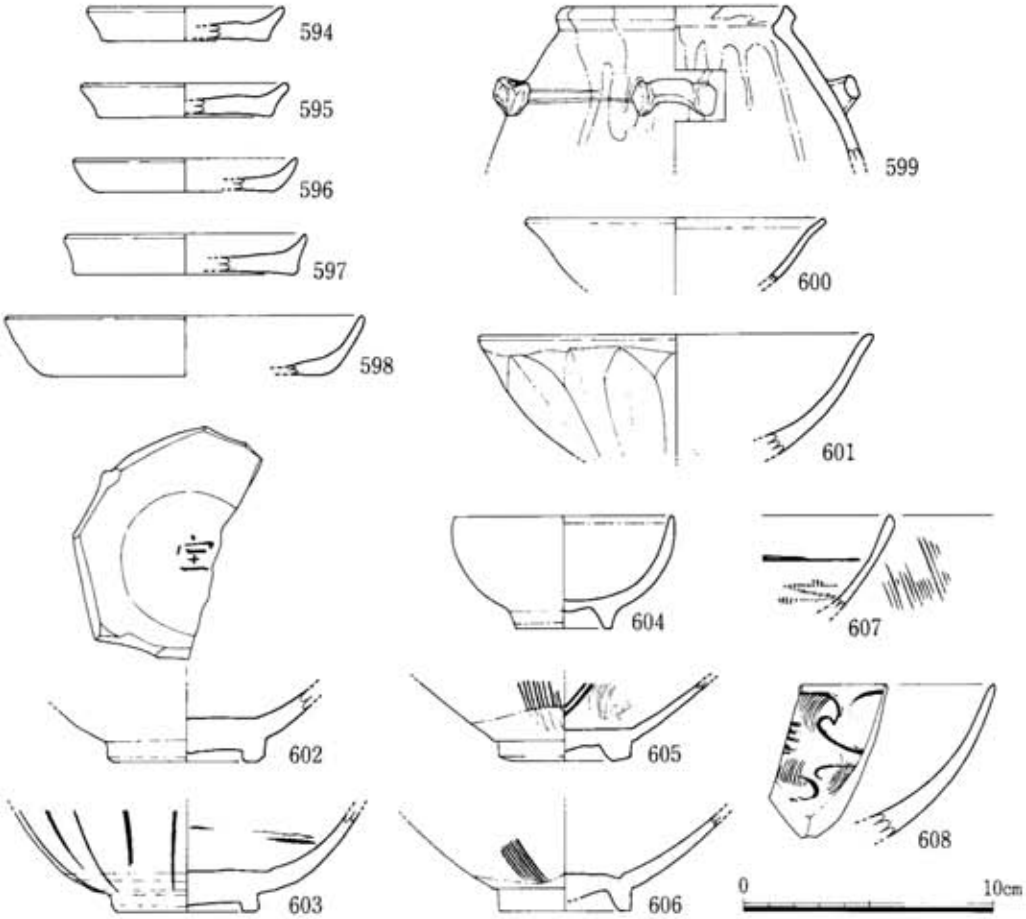


Fig. 121　SK114土壙出土遺物①（1/3）

SK114土壙（Fig. 120～122）

調査区東側中央に位置する。SD101溝より新しいと考えられる。平面形は2.9×3.4mほどの不整な楕円形である。井戸の可能性もあるが、立ち上がりが緩やかで、井戸としては大型すぎると思われるので、土壙とする。図示したものの他に、常滑産甕の小破片が出土している。

594～**597**は底部糸切りの土師器小皿である。**594**は復原口径7.7cm、器高1.4cm、**595**は復原口径8.0cm、器高1.4cm、**596**は復原口径8.7cm、器高1.3cm、**597**は復原口径9.4cm、器高1.6cmであるが、いずれも小破片のため口径は確実ではない。**597**には板状圧痕がみられる。**598**は底部糸切りの土師器坏で、復原口径14.0cm、器高2.4cmである。

599は陶器四耳壺で、復原口径8.7cmである。胴部外面上半に沈線がめぐる。釉は灰緑色で、口縁内外面に褐釉を流す。SE115井戸から出土した破片と接合した。**600**は白磁椀Ⅸ類で、復原口径11.8cmである。**601**～**603**・**608**は龍泉窯系青磁椀である。**601**はⅠ－5b類で、復原口径15.6cmである。**602**はⅠ－5d類で、底径6.2cmである。**603**はⅠ－5a類で、底径5.4cmである。

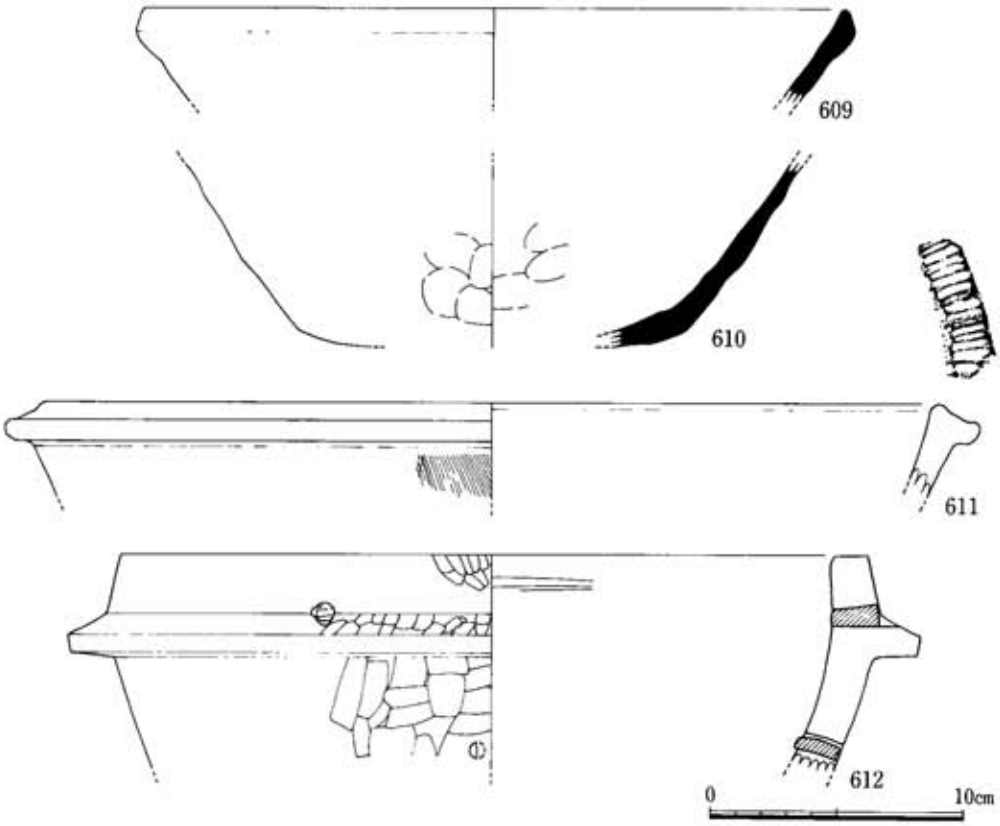


Fig. 122　SK114土壙出土遺物②（1/3）

608はⅠ－3類である。**604**は龍泉窯系とみられる青磁小椀で、復原口径8.4cm、底径3.8cm、器高4.5cmである。口縁部の釉をカキとっている。**605**～**607**は同安窯系青磁椀である。**605**はⅠ－1b類で、底径5.2cmである。**606**はⅠ－1b類と思われる。底径5.2cmで、釉は灰白色を呈する。**607**はⅠ－1b類である。

609・**610**は東播系須恵器捏鉢で、**609**は復原口径27.4cm、**610**は復原底径15.4cmである。**611**は土師器鍋で、復原口径35.4cmを測る。徳永分類Ⅱa類である。**612**は鍔のつくタイプの滑石製石鍋で、復原口径27.0cmである。口縁下2.4、2.7cmのところに孔が開けられており、いずれにも孔内に鉄が遺存している。

SK116土壙（Fig. 123）

調査区中央東寄りに位置する。弥生時代のSB084竪穴住居と重複する。平面形は径1.3mほどの不整な円形である。図示したものの他に、滑石製石鍋片が出土している。

613は龍泉窯系青磁小椀Ⅰ－2類で、復原口径10.9cmである。

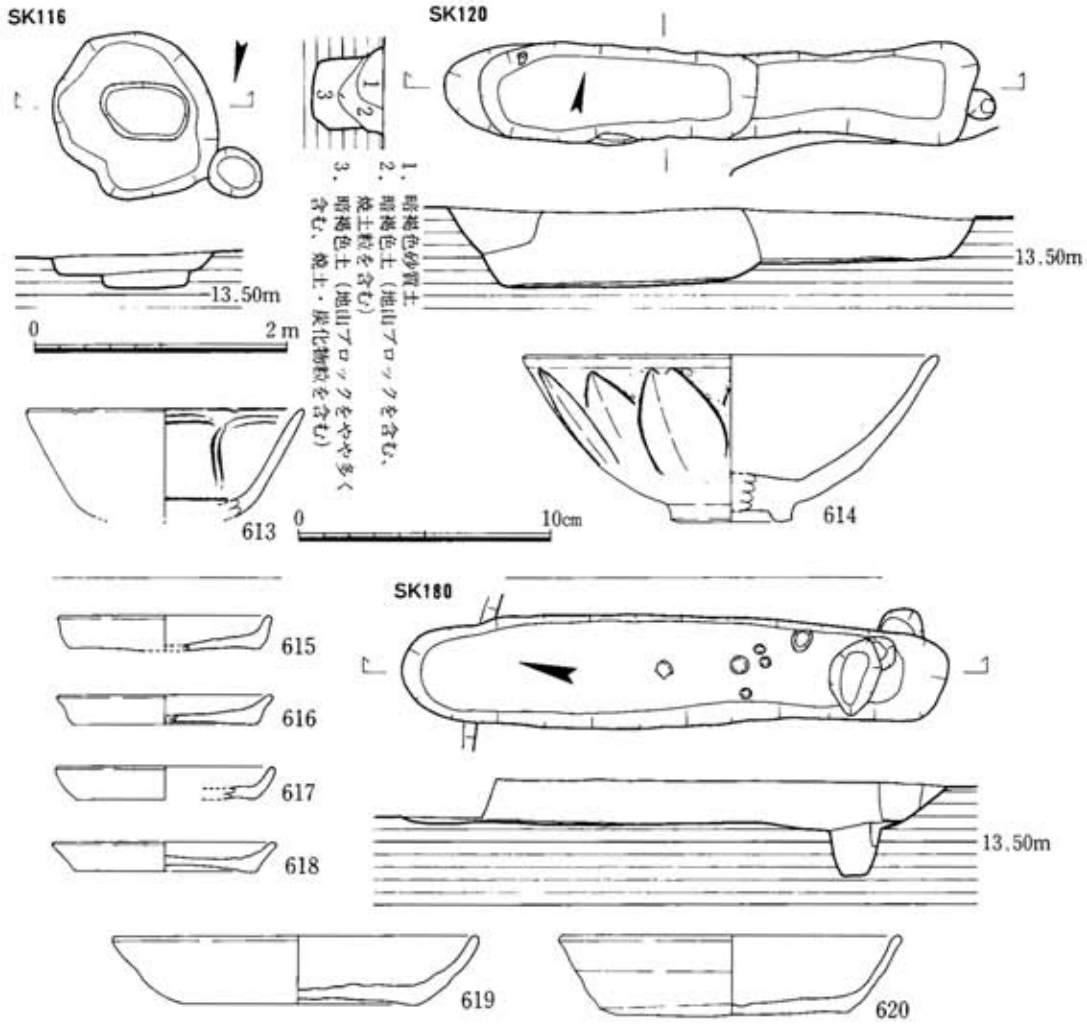


Fig. 123　SK116・120・180土壙（1/60）、出土遺物（1/3）

SK120土壙（Fig. 123）

調査区東端中央に位置する。SK306土壙より新しい。平面形は0.8×4.22mの溝状で、細長い土壙である。壁は長辺ではほぼ垂直に立ち上がる。

614は龍泉窯系青磁椀Ⅰ－5b類で、復原口径16.5cm、復原底径4.8cm、器高6.6cmである。

SK180土壙（Fig. 123）

調査区中央東寄りに位置する。土層図（Fig. 110）からするとSD101溝より古いが、掘り直し以前の溝の一部の可能性もある。弥生時代のSB088竪穴住居と重複する。平面形は0.9×4.44mの溝状で、細長い土壙である。長辺では壁がほぼ垂直に立ち上がる。

615～**618**は底部糸切りの土師器小皿で、いずれも板状圧痕がみられる。**615**は復原口径8.2cm、

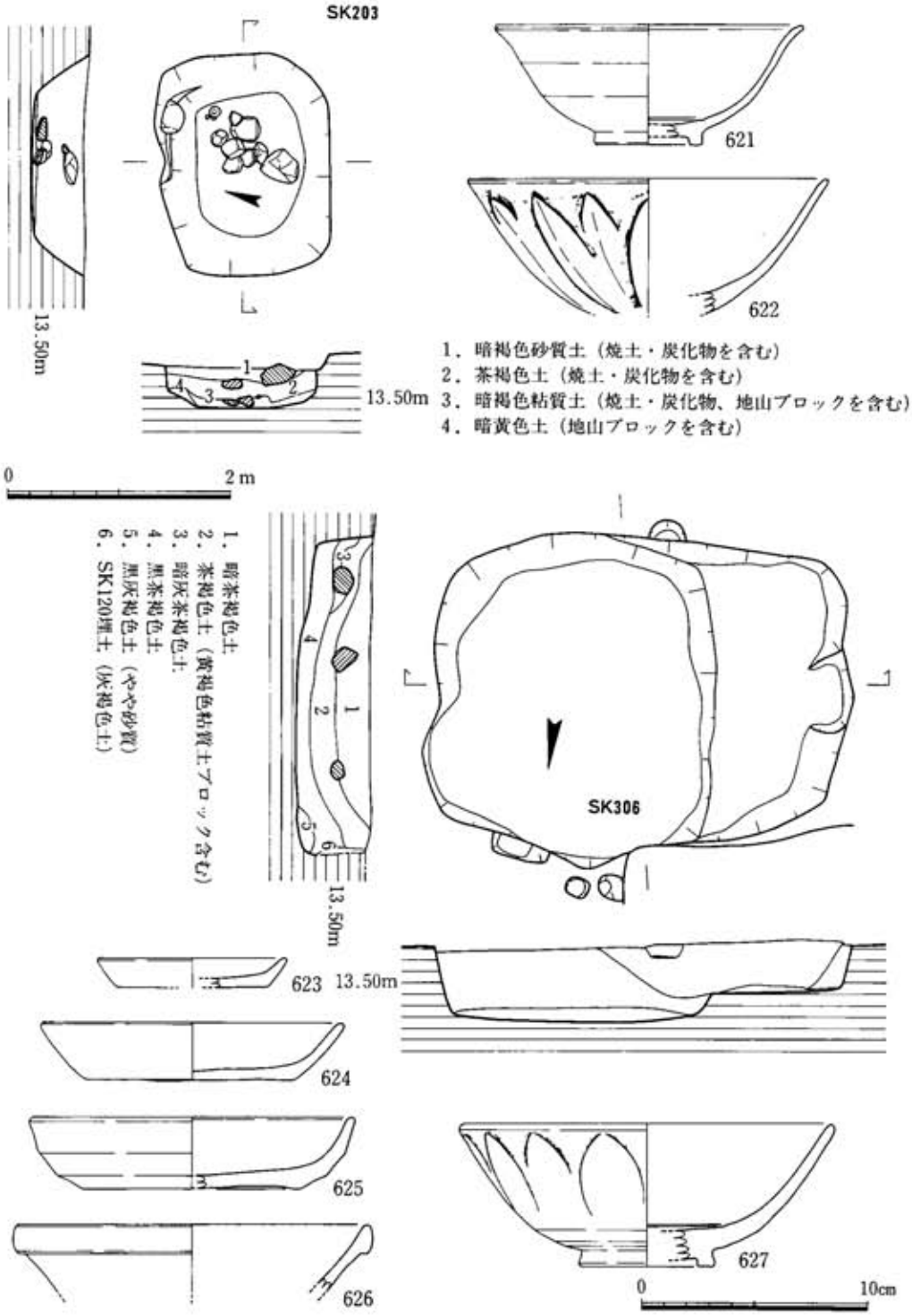


Fig. 124　SK203・306土壙（1/60）、出土遺物（1/3）

器高1.4cm、**616**は復原口径8.3cm、器高1.2cm、**617**は口径8.5cm、器高1.3cm、**618**は口径8.7cm、器高1.2cmである。**619・620**は底部糸切りの土師器坏である。**619**は口径14.2cm、器高2.8cm、**620**は復原口径13.4cm、器高3.2cmで、ともに板状圧痕がみられる。

SK203土壙（Fig.124）

調査区東側中央に位置する。SD101溝との新旧関係は不明で、弥生時代のSB098・099竪穴住居と重複する。平面形は1.52×1.96mの隅丸長方形で、立ち上がりは緩やかである。埋土中に径2～32cmほどの扁平な礫石がみられる。

621は白磁椀Ⅸ－1類で、復原口径13.6cm、器高5.3cmである。**622**は龍泉窯系青磁椀Ⅰ－5b類で、復原口径15.9cmである。

SK306土壙（Fig.124）

調査区東端中央に位置する。SK120土壙より古く、弥生時代のSB308掘立柱建物と重複する。平面形は2.8×3.6mの隅丸長方形で、壁はやや急に立ち上がる。

623は底部糸切りの土師器小皿で、復原口径8.2cm、器高1.3cmである。板状圧痕がみられる。**624・625**は底部糸切りの土師器坏である。**624**は口径13.3cm、器高2.6cm、**625**は復原口径14.2cm、器高3.2cmで、ともに板状圧痕がみられる。**626**は白磁椀Ⅳ類で、復原口径15.5cmである。**627**は龍泉窯系青磁椀Ⅰ－5a類で、復原口径16.2cm、底径5.8cm、器高6.3cmである。

SK036土壙（Fig.125）

調査区南東端に位置する。南側が調査区外にある。SK037土壙とほぼ直交するような位置関係にある。短軸2.05mで、底面はほぼ平坦であり、SK037土壙と同じような形態が考えられる。出土遺物は小破片のみで、時期は不明である。

SK037土壙（Fig.125）

調査区南東端に位置する。弥生時代のSB065竪穴住居と重複する。平面形は2.04×3.92mの隅丸長方形である。出土遺物は小破片のみで、時期は不明である。

SK038土壙（Fig.125）

調査区南端中央東寄りに位置する。弥生時代のSB052竪穴住居、SB220掘立柱建物と重複する。平面形は1.54×3.2mの隅丸長方形である。出土遺物は小破片が多く、時期は不明である。

628は須恵器坏で、復原口径10.7cm、器高3.6cmである。体部に沈線が3条めぐり、底部外縁部のみ回転ヘラケズリである。**629**は龍泉窯系青磁椀Ⅰ－5b類である。

6. 土壙墓

SP046土壙墓（Fig. 126）

調査区南東に位置する。古代のSB222掘立柱建物と重複する。平面形は1.06×1.46mの不整な隅丸長方形である。底面は西～北側がやや高く、壁はやや急に立ち上がる。南西隅に青磁椀が2点副葬されている。

630・631は龍泉窯系青磁椀Ⅰ－4b類である。**630**は口径16.0cm、底径6.1cm、器高6.9cmで、釉は全体の4／5ほど貫入が著しく、発色が悪くなっている。**631**は口径16.1cm、底径6.5cm、器高7.0cmである。

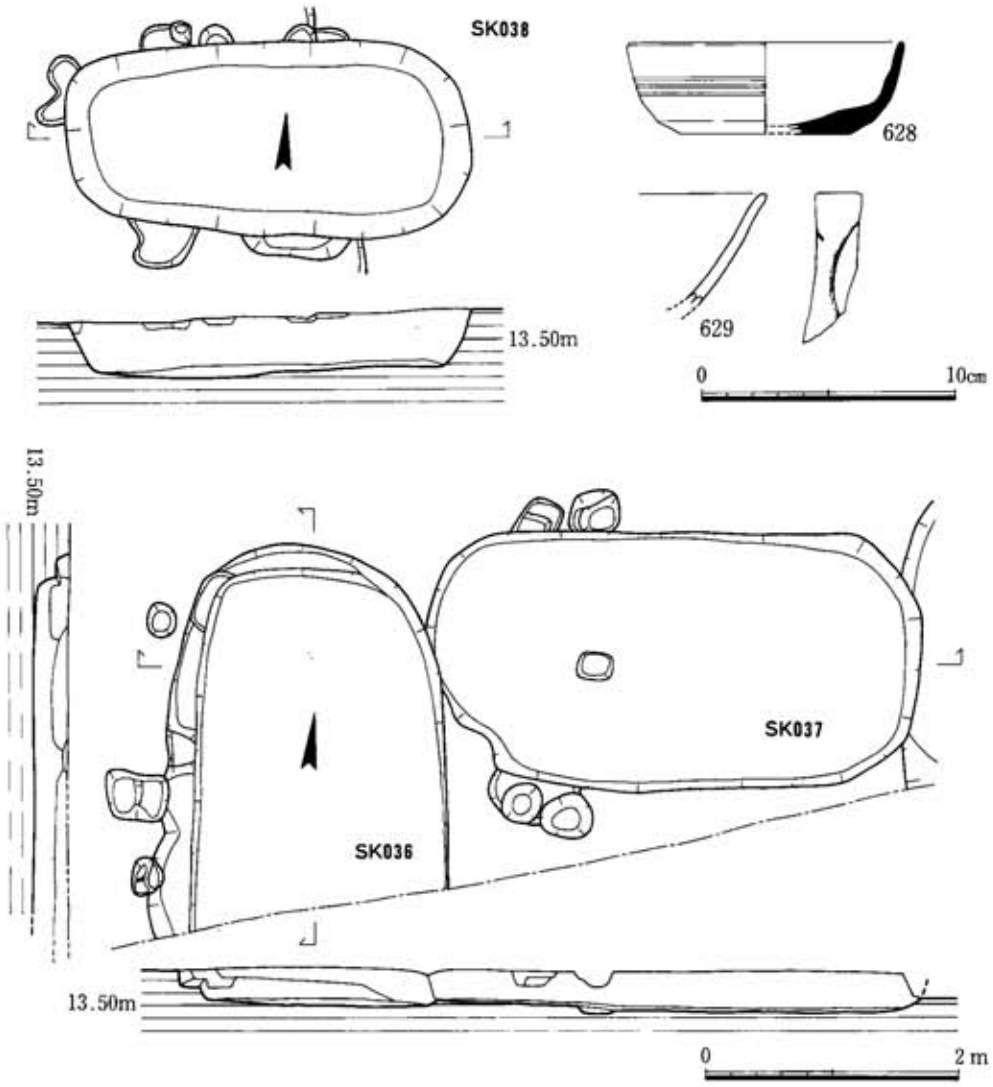


Fig. 125　SK036・037・038土壙（1/60）、出土遺物（1/3）

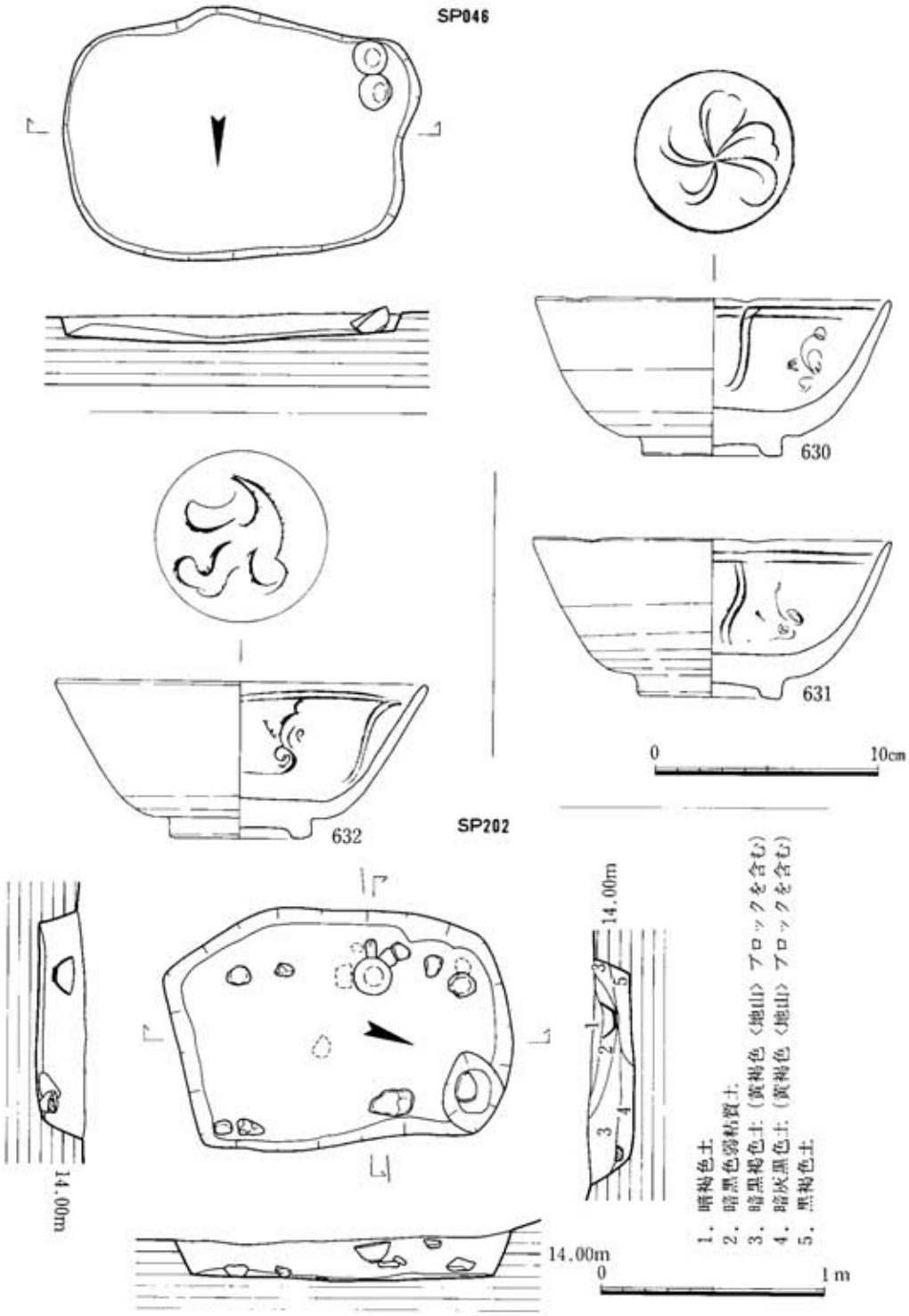


Fig. 126　SP046・202土壙墓（1/30）、出土遺物（1/3）

SP202土壙墓（Fig. 126）

調査区東側中央に位置する。弥生時代のSB099竪穴住居と重複する。平面形は0.97×1.33mの不整な隅丸長方形で、底面はほぼ平坦である。四隅と両長辺に径7～13cmの礫石があり、土層では木棺は不明だが、棺台の可能性がある。西側中央に青磁椀が1点副葬されている。

632は龍泉窯系青磁椀Ⅰ－4a類で、口径16.3cm、底径6.3cm、器高7.0cmである。

7. 小穴・検出面出土遺物（Fig. 127）

633は滑石製で、口径2.3cm、高さ1.7cmの椀状のものを二つ横に連結したものと推定される。Ⅰ区表採。**634・635**は古代のSB094検出面出土の青白磁合子である。**634**は口径5.3cm、器高2.1cmで、口唇部から内面は露胎であるが、天井部内面には釉がかかる。**635**は口径4.4cm、器高2.8cmで、外面上半部と内面全体に釉が施される。**636**は天目茶碗で、復原口径10.6cmである。胎土は灰色で、漆黒色の鉄釉が施される。Ⅱ区P102出土。**637**は白磁皿Ⅸ－2類で、復原口径8.9cm、器高2.4cmである。Ⅱ区P1146出土。**638**は龍泉窯系青磁椀Ⅰ－1類で、口径16.3cm、底径

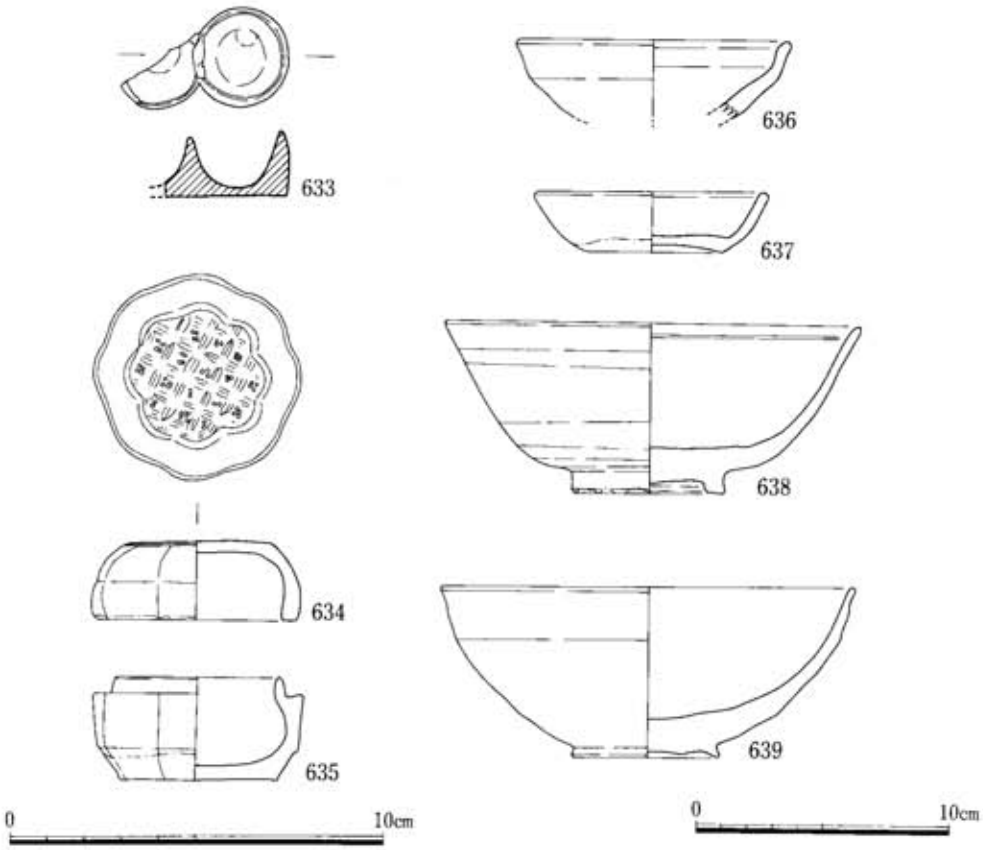


Fig. 127　小穴・検出面出土遺物（633～635：1/2、636～639：1/3）

6.1cm、器高6.8cmである。II区検出面出土。**639**は土師器椀で、口径16.2cm、底径5.8cm、器高6.7cmである。口縁部ヨコナデで、他の部位はナデである。弥生時代のSB019柱穴上層出土。

8. 小結

中世の遺構としては、溝3条、掘立柱建物3棟、集石遺構2基、井戸6基、土壙19基、土壙墓2基を検出した。時期は既存の土師器坏・小皿の編年[3]を参考にすれば、11世紀末～13世紀、15世紀のものが確認される。

11世紀末～12世紀初頭の遺構としては、SE029・134井戸があげられる。可能性のあるものとしてSK025土壙がある。SE134井戸から出土した黒色土器椀は瓦器椀に近い雰囲気をもち、黒色土器の終末期で、瓦器が出現しているか、出現直前の様相を呈している。

これに続く12世紀中葉～13世紀前葉とみられるものに、土壙墓2基がある。いずれにも龍泉窯系青磁椀Ⅰ－4類が副葬されている。確認できたものは2基であるが、検出面から完形に近い青磁椀や青白磁合子などが出土しており、他にも土壙墓があったものと考えられる。以上の時期の遺構は少なく、調査区外にこの時期の主体があると推測される。

13世紀代には、区画と考えられる溝など多くの遺構・遺物が確認される。SD101溝は出土した土師器坏、小皿から13世紀前半～中頃のものと考えられる。細長いSB055掘立柱建物もSD101溝との関係でこの時期の可能性が高い。SB050・055掘立柱建物はL字形に配置され、主軸方位からSB199掘立柱建物もこの2棟と関連性が強く、SB050・055とSB199の間の空間にSD101が配置されているからである。このような中世の細長い掘立柱建物は、福岡市西区清末遺跡群2次調査[4]に類例がある。清末遺跡群では細長い建物3棟がコ字形に配置されている。そのような類例からすると、SB055とほぼ同規模の掘立柱建物が調査区南側に存在する可能性がある。以上のような状況から、13世紀代に調査区一帯が大いに利用されたものと推測される。同様の傾向が西に隣接する東山田一本杉遺跡II・III区、西山田二本松遺跡B区[5]でも認められる。

礫石が詰まった状態で検出された集石遺構はいずれも調査区北西に位置している。出土遺物からやや時期が下った15世紀代と推測される。性格についてはまったく不明といわざるをえず、今後の類例の増加に期待したい。

〈註〉

1 大和町教育委員会 1992『東山田一本杉遺跡・西山田天神遺跡・西山田二本松遺跡・西山田三本松遺跡』大和町文化財調査報告書第13集
2 徳永貞紹 1990「肥前における中世後期の在地土器」『中近世土器の基礎研究』Ⅵ
3 山本信夫 1990「統計上の土器—歴史時代土師器の編年研究によせて—」『九州上代文化論集』
佐賀県教育委員会 1991『本村遺跡』佐賀県文化財調査報告書第102集
4 福岡市教育委員会 1992『入部III』福岡市埋蔵文化財調査報告書第103集
5 佐賀県教育委員会 1995『東山田一本杉遺跡』佐賀県文化財調査報告書第125集

西山田三本松A遺跡
（にしやまださんぼんまつ）

遺跡名：西山田三本松A遺跡（略号　NYS－A）
所在地：佐賀郡大和町大字川上字三本松

西山田三本松A遺跡

Ⅰ　遺跡の概要

1．遺跡の立地環境

西山田三本松A遺跡は大和町大字川上字西山田に在って、嘉瀬川が脊振山地から平野部に流れ出るあたりの西岸に形成された標高約14mの扇状地上に位置する。調査前、一帯は主に畑地として耕作され、また一部は水田に利用されていた。

嘉瀬川西岸のこの地区ではこれまであまり調査例がなく、このたびの九州横断自動車道建設に関わる一連の調査でようやくその様相の一端が知られるようになった。調査区の東側に連続する西山田三本松B遺跡・西山田二本松遺跡・東山田一本杉遺跡では、弥生時代前期末を中心とした甕棺墓地および後期の大規模な集落、さらには奈良・平安時代を中心とした大型掘立柱建物や倉庫等からなる建物群および集落跡が調査され、弥生時代以来、嘉瀬川渓口部の西岸に居住した地域勢力の存在が明らかになってきている。

この地区における集団の性格を考える場合、弥生時代に関して無視できないのは嘉瀬川を挟んで向かい合う東岸の惣座遺跡の存在である。惣座遺跡は佐賀平野中部における弥生後期の中核的集落の一つと目される多重環壕集落であり、これら西岸地区の弥生後期集落も大局的には同じ地域勢力としてその外郭を構成する集団であろうと考えられる。また、奈良・平安時代では、竪穴住居跡を主体とする集落が分散的に形成される。一方、企画性に富んだ配置の掘立柱建物跡群や溝が存在し、さらに「厩」、「郡」等のヘラ書き土器や帯飾りなどの出土から、やはり嘉瀬川東岸に相対峙する肥前国庁跡に関連した官衙的機能、あるいは居館等の特殊な施設の存在が想定される。『肥前風土記』に登場し、現在でも地名として残る山田郷の一部をなすものであろう。この間、古墳時代に関する知見は少ないが、本遺跡の北側山麓部には、県下最大の船塚前方後円墳をはじめ、小隈山、男女神社、水上の各前方後円墳が存在しており、古墳時代においてもやはり有力な地域豪族の勢力地であったことがわかる。

このように、本遺跡は弥生時代以来、常に佐賀平野における有力地域の一つであった嘉瀬川東岸の惣座遺跡や肥前国庁跡と関わりを持ちながら形成された西岸遺跡群の一角を占める点で注目される遺跡である。

2．遺構の分布状況

西山田三本松A遺跡は、広く捉えれば、東側に接する西山田三本松B遺跡Ⅰ区と一括すべきものである。これは弥生時代、奈良・平安時代のいずれについても言える。

検出した遺構は、大まかに言えば弥生時代と奈良・平安時代の2時期である。他に古墳時代

Fig. 1　西山田三本松A遺跡遺構配置図

に遡る遺物も出土しているが、土壙２基以外に遺構の存在は明確でない。

まず弥生時代では、時期はほぼ後期前半に限られる。竪穴住居跡10棟、掘立柱建物跡17棟、土壙２基を検出した。全体としては集落跡の性格がつよい。この内、竪穴住居跡は調査区の南側から東側に偏って分布する。平面プランで分けると長方形６棟、方形３棟である。長方形の場合、東西主軸の４棟が東西に分かれ、南北主軸のSB015・SB016の２棟がその間に位置する形をとる。方形プランに比べて比較的小形である。また、竪穴住居跡10棟の内６棟がピット状遺構を付設する。

掘立柱建物跡は、全体的に見ると調査区西半で２群を形成するほか、SB028とSB026が調査区の東辺と南辺にそれぞれ単独で存在する。形態は２間×１間が13棟、１間×１間が４棟で、そのうちでは２間×１間東西棟が圧倒的に多く12棟を数える。注目すべきは西北部にあってSB007～SB011・SB022・SB027・SB030・SB031の９基からなる群棟の存在である。９基はさらにその中で４群に分かれ、しかも各々１～２回の建て替えが認められる。これらの建物の性格は基本的に倉庫と考えられ、整然と配置されたものでないにせよ、ある一定期間には最大４棟が南北に建ち並んだ、いわば群倉のような景観をなしていたと考えられる。先後関係は、SB031→SB030以外は不明であるが、まず、２間×１間の建物が西面を揃えるように並び、各々建て替えはその東側にやや位置を移していったと推測される。

奈良・平安時代では、掘立柱建物跡７棟・周溝状遺構４基・土壙１基・井戸跡１基を検出した。このうち掘立柱建物は同地区の中心的となる居館のような特殊な性格の建物と考えられる。また、調査区東辺では３間×２間の総柱の掘立柱建物跡３棟SB017・SB018・SB019が軸線を10°前後西に傾けながら南北に並ぶ。厳密な企画性はないが、恐らく同時期に計画的に配置されたであろう群倉の形態を示すものである。方位が西山田三本松B遺跡Ⅰ区のSD110や同Ⅱ区SD206・SD207等の区画溝にほぼ一致することから、同じ地割りに基づくものと考えられる。その他、SB007は１棟のみ西辺に離れるが、先の３棟とほぼ同じ３間×２間であり、同時期かと見られる。他２棟は３間×２間、または２間×２間総柱で、柱並び揃わずしかも小規模である。周溝状遺構には方形、正円形、楕円形、不整楕円形が各１基ずつ見られる。このうち方形の１基は柱穴の配置からみて建物があったと考えられる。時期、性格は確定できないが、他遺跡の類例からみて平安時代頃に下る周溝基の可能性がつよい。

Tab.1　西山田三本松A遺跡遺構一覧表　　＊「旧番号」は調査時の遺構番号、(　)はBOX工事区

遺構番号	種　別	構　造　等	時　代	旧番号	Fig.
SB001	掘立柱建物跡	東西棟（５間×４間）、方位N74°E	奈良	SB001	13
SB002	掘立柱建物跡	不整南北棟（２間×２間）、方位N27°W	不明	SB002	1
SE003	井戸跡	円形	奈良か	SB003	17
SX004	方形周溝状遺構	東辺台形気味の方形	平安か	SX004	11

遺構番号	種　別	構　造　等	時　代	旧番号	Fig.
SX005	円形周溝状遺構	南北長楕円形	平安か	SX005	11
SX006	円形周溝状遺構	西辺直線気味の不整楕円形	平安か	SX006	12
SB007	掘立柱建物跡	東西棟（2間×1間）、方位N66° E	弥生後期	SB007	6
SB008	掘立柱建物跡	東西棟（2間×1間）、方位N70° E	弥生後期	SB008	7
SB009	掘立柱建物跡	東西棟（2間×1間）、方位N74° E	弥生後期	SB009	6
SB010	掘立柱建物跡	東西棟（2間×1間）、方位N79° E	弥生後期	SB010	6
SB011	掘立柱建物跡	東西棟（2間×1間）、方位N79° E	弥生後期	SB011	7
SB012	竪穴住居跡	方形	弥生後期	SB012	2
SB013	竪穴住居跡	長方形東西棟	弥生後期	SB013	3
SB014	竪穴住居跡	方形	弥生後期	SB014	3
SB015	竪穴住居跡	長方形南北棟	弥生後期	SB015	3
SB016	竪穴住居跡	長方形南北棟	弥生後期	SB016	4
SB017	掘立柱建物跡	総柱南北棟（3間×2間）、方位N11° W	奈良か	SB017	14
SB018	掘立柱建物跡	総柱南北棟（3間×2間）、方位N 8° W	奈良か	SB018	14
SB019	掘立柱建物跡	総柱南北棟（3間×2間）、方位N10° W	奈良か	SB019	15
SB020	竪穴住居跡	長方形東西棟	弥生後期	SB020	4
SB021	竪穴住居跡	方形	弥生後期か	SB021	5
SB022	掘立柱建物跡	方形東西棟（1間×1間）、方位N66° E	弥生後期		6
SB024	掘立柱建物跡	南北棟（2間×1間）、方位N29° W	弥生後期	SB024	8
SK025	土壙	不整隅丸長台形	古墳後期	SK025	16
SB026	掘立柱建物跡	東西棟（2間×1間）、方位N77° E	弥生後期	SB026	8
SB027	掘立柱建物跡	南北棟（1間×1間）、方位N66° E	弥生後期か	SB027	7
SB028	掘立柱建物跡	南北棟（2間×1間）、方位N90° W	弥生後期	SB028	9
SB029	竪穴住居跡	方形	弥生後期	SB029	5
SB030	掘立柱建物跡	東西棟（1間×1間）、方位N65° E	弥生後期か	SB030	7
SB031	掘立柱建物跡	東西棟（1間×1間）、方位N71° E	弥生後期か	SB031	7
SK032	土壙	隅丸長方形	奈良	(SK002)	16
SK033	土壙	長方形	弥生後期	(SK003)	16
SX034	円形周溝状遺構	円形	平安か	(SX004)	12
SB036	掘立柱建物跡	東西棟（2間×1間）、方位N74° E	弥生後期	(SB006)	9
SB037	掘立柱建物跡	東西棟（2間×1間）、方位N70° E	弥生後期	(SK007)	9
SB038	掘立柱建物跡	総柱南北棟（3間×2間）、方位N14° W	奈良か	(SB008)	15
SB039	掘立柱建物跡	南北棟（2間×1間）、方位N10° W	弥生後期か	(SB009)	10
SB040	掘立柱建物跡	東西棟（3間×1間）、方位N62° E	不明	(SB010)	1
SB041	竪穴住居跡	長方形東西棟	弥生後期	(SB011)	5
SK042	土壙	方形	弥生後期	(SK012)	1
SB043	竪穴住居跡	長方形東西棟	弥生後期か	(SB013)	5
SB044	掘立柱建物跡	南北棟（1間×1間）、方位N21° W	弥生後期	(SB014)	10
SB045	掘立柱建物跡	東西棟（2間×1間）、方位N56° E	弥生後期	(SB015)	10
SK046	土壙	不整半月形	古墳後期	(SK001)	16

II 遺 構

1．弥生時代

調査区内で検出した遺構は、竪穴住居跡10棟、掘立柱建物跡17棟、円形及び方形周溝状遺構4基、土壙3基の計34基である。弥生後期の集落跡である。

竪穴住居跡10棟はいずれも削平のため遺存状態が悪く、壁の高さはせいぜい20cm程度しか残っていない。住居跡内の遺物もSB015とSB020で比較的まとまって土器等が出土したほかは概して少なく、ようやく時期が推定できる程度である。時期はすべて後期前半～中頃に納まると推定する。掘立柱建物跡17棟は、出土遺物は殆どないが、2間×1間を基本とする平面形および柱穴の構造から、竪穴住居が存続した時期に並行する倉庫群と推定する。群在する傾向をもち、とくに北側に在って並倉の状況を示す9棟の存在が注目される。円形周溝状遺構3基の性格は不明、方形周溝状遺構1基は建物跡に伴うものと考える。いずれも残りが浅い。時期はやはり後期の内と推定する。

(1) 竪穴住居跡

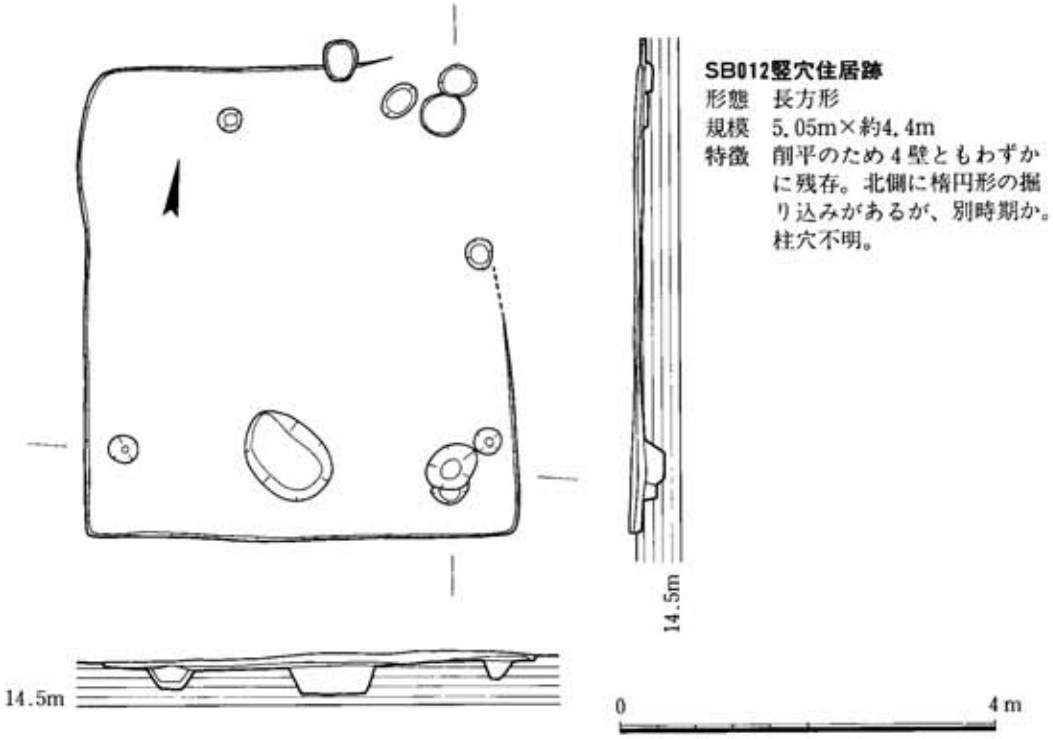
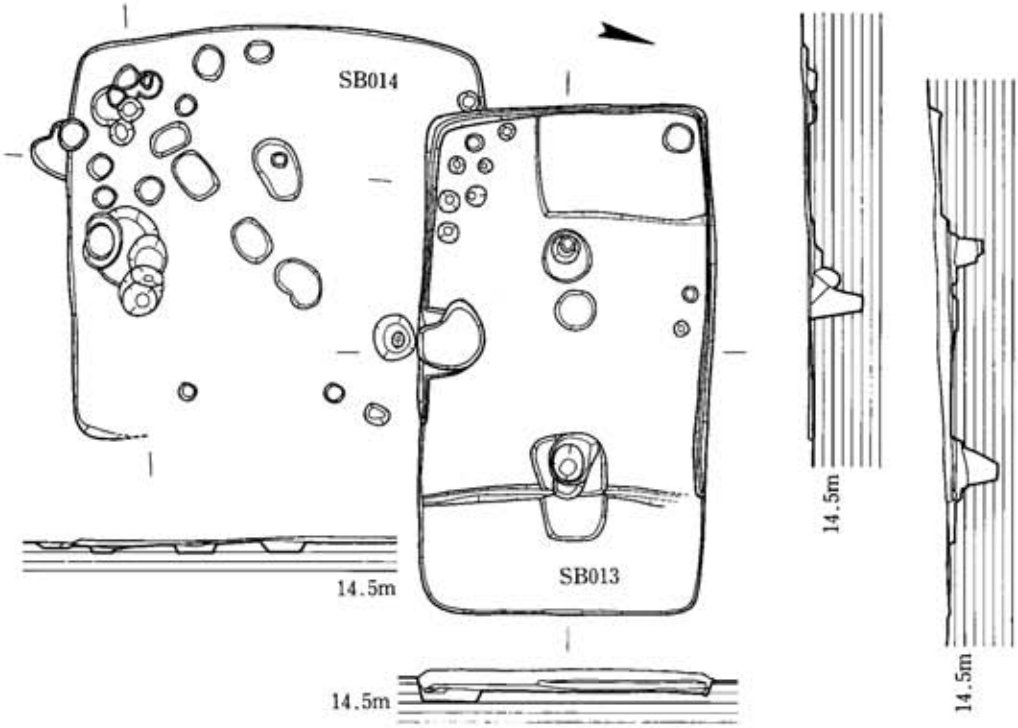
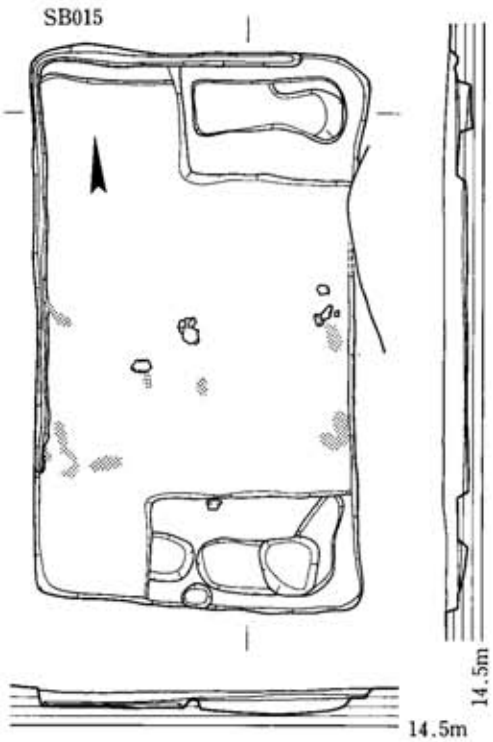


Fig. 2 SB012竪穴住居跡





SB013竪穴住居跡

形態　長方形

規模　5.36m×3.08m

特徴　東西両側にベット状遺構付設。中央やや西寄りに炉跡、柱穴は東西に2個。南壁際中央に入口施設に関わる掘り込みあり。周溝を巡らす。SB014に切られる。

SB014竪穴住居跡

形態　方形

規模　約4.5m×約4.4m

特徴　削平のため4壁ともわずかに残存。中央に炉跡。柱穴不明。床面全体が荒らされているが、北壁ちかくには円形掘り込みをもつ。SB013を切る。

SB015竪穴住居跡

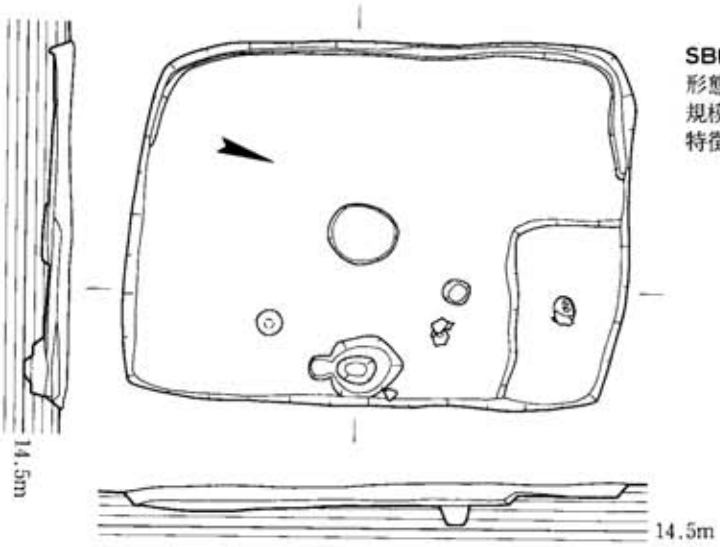
形態　長方形

規模　5.88m×3.00m

特徴　東西両側にベット状遺構付設。ベット上に掘り込みをもつ。柱穴不明。西壁から北壁にかけては周溝を巡らす。床面広範に焼土が散らばる。SX006周溝と切り合うが先後不明。

0　4m

Fig. 3　SB013・014・015竪穴住居跡

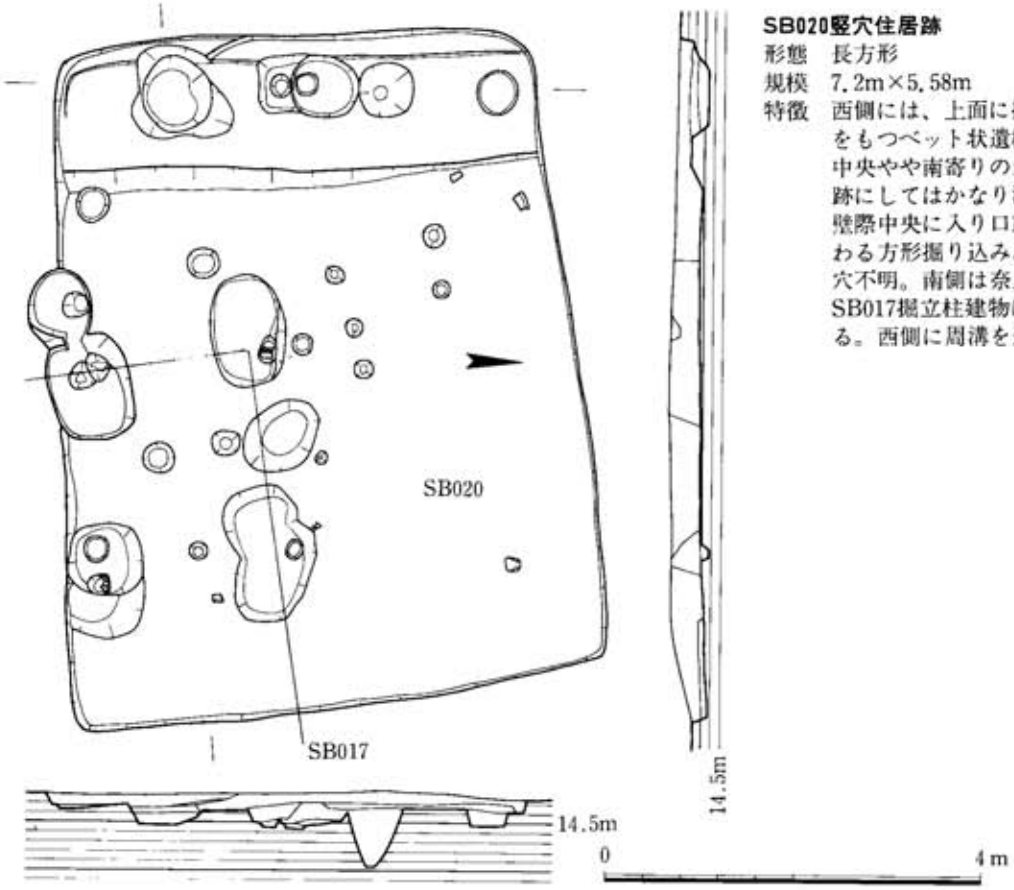


SB016竪穴住居跡

形態　長方形

規模　5.28m×3.87m

特徴　東北隅にベット状遺構付設。中央に炉跡、柱穴不明。東南壁際中央に入口施設に関わる円形掘り込みあり。西壁際に周溝を巡らす。ベット上および床上一部に土器片散在。



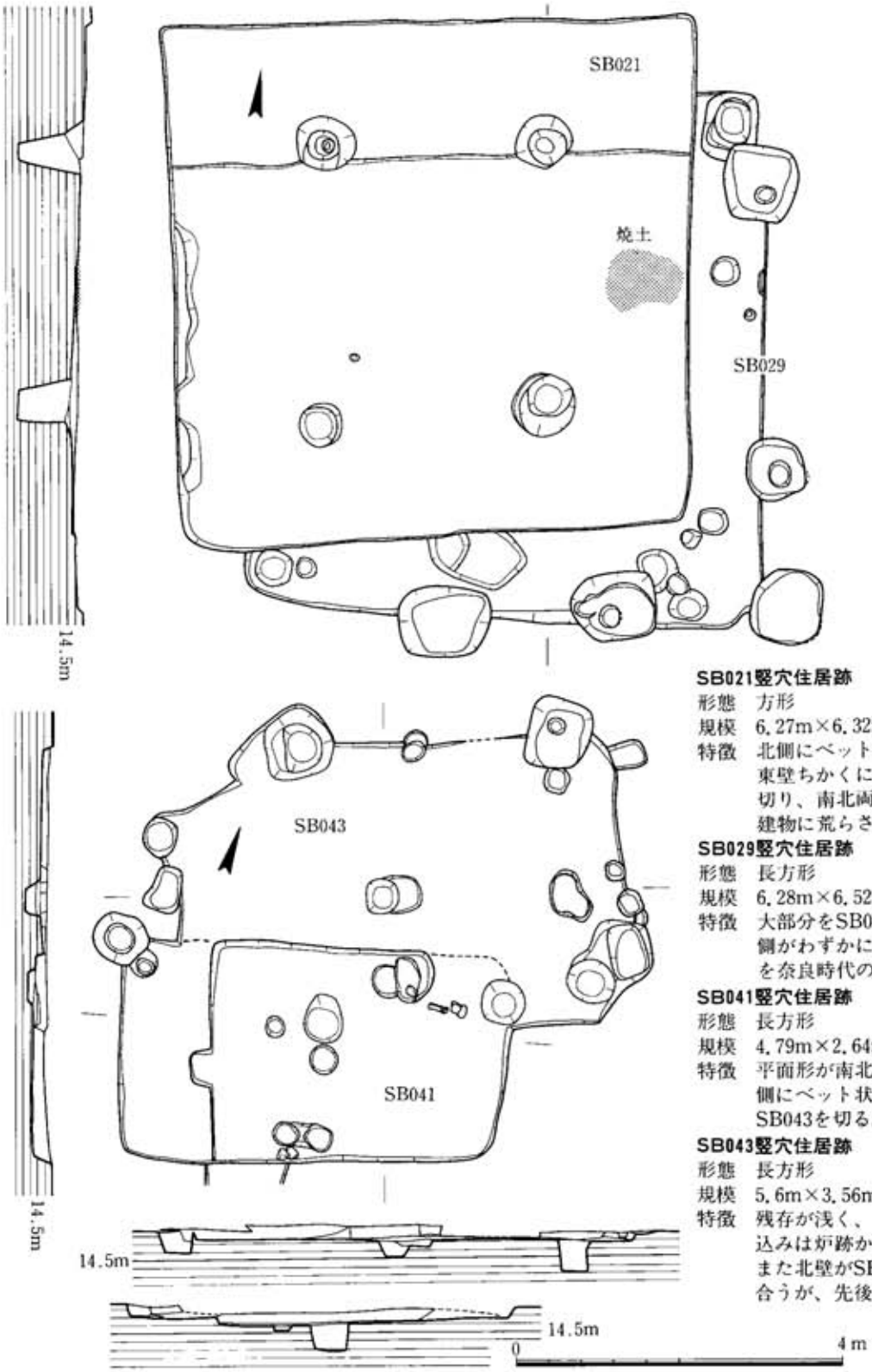
SB020竪穴住居跡

形態　長方形

規模　7.2m×5.58m

特徴　西側には、上面に掘り込みをもつベット状遺構付設。中央やや南寄りの土壙は炉跡にしてはかなり深い。南壁際中央に入り口施設に関わる方形掘り込みあり。柱穴不明。南側は奈良時代のSB017掘立柱建物に切られる。西側に周溝を巡らす。

Fig. 4　SB016・020竪穴住居跡



SB021竪穴住居跡

形態　方形

規模　6.27m×6.32m

特徴　北側にベット状遺構付設。柱穴4個。東壁ちかくに焼土が残る。SB029を切り、南北両側は奈良時代の掘立柱建物に荒らされている。

SB029竪穴住居跡

形態　長方形

規模　6.28m×6.52m

特徴　大部分をSB021に切られ、東側と南側がわずかに残る。詳細不明。南側を奈良時代のSB018に切られる。

SB041竪穴住居跡

形態　長方形

規模　4.79m×2.64m

特徴　平面形が南北に長い特徴をもつ。南側にベット状遺構付設。柱穴不明。SB043を切る。

SB043竪穴住居跡

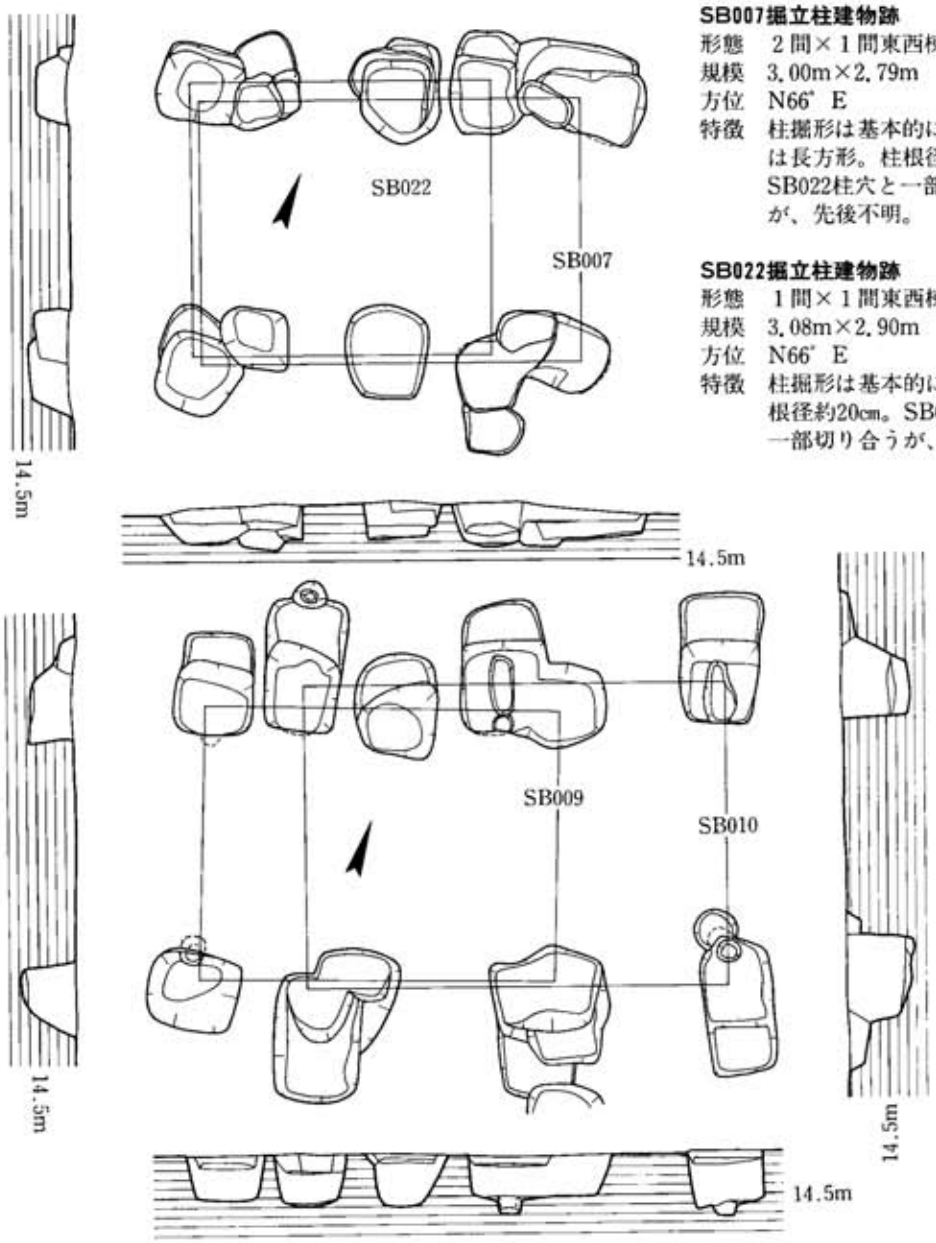
形態　長方形

規模　5.6m×3.56m

特徴　残存が浅く、詳細不明。中央の掘り込みは炉跡か。SB041に切られる。また北壁がSB044掘立柱建物と切り合うが、先後不明。

Fig.5　SB021・029・041・043竪穴住居跡

(2) 掘立柱建物跡



SB007掘立柱建物跡
形態　2間×1間東西棟
規模　3.00m×2.79m
方位　N66° E
特徴　柱掘形は基本的に方形または長方形。柱根径約15cm。SB022柱穴と一部切り合うが、先後不明。

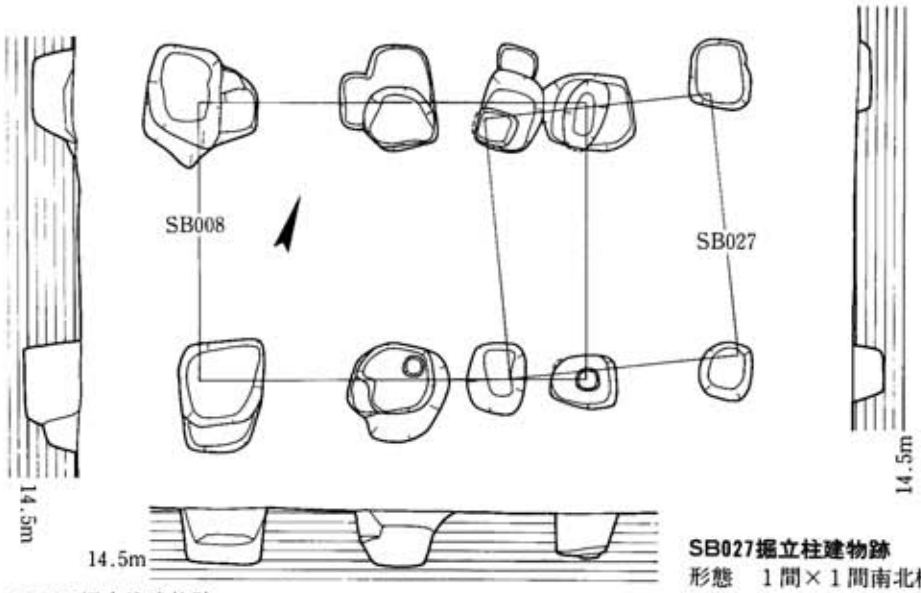
SB022掘立柱建物跡
形態　1間×1間東西棟
規模　3.08m×2.90m
方位　N66° E
特徴　柱掘形は基本的に方形。柱根径約20cm。SB007柱穴と一部切り合うが、先後不明。

SB009掘立柱建物跡
形態　2間×1間東西棟
規模　3.73m×2.88m
方位　N74° E
特徴　柱掘形は基本的に方形。柱根径約20cm。SB010柱穴と一部切り合うが、先後不明。

SB010掘立柱建物跡
形態　2間×1間東西棟
規模　4.44m×3.19m
方位　N79° E
特徴　柱掘形は基本的に2段掘り長方形。柱根径約20cm。SB009と柱穴と一部切り合うが、先後不明。

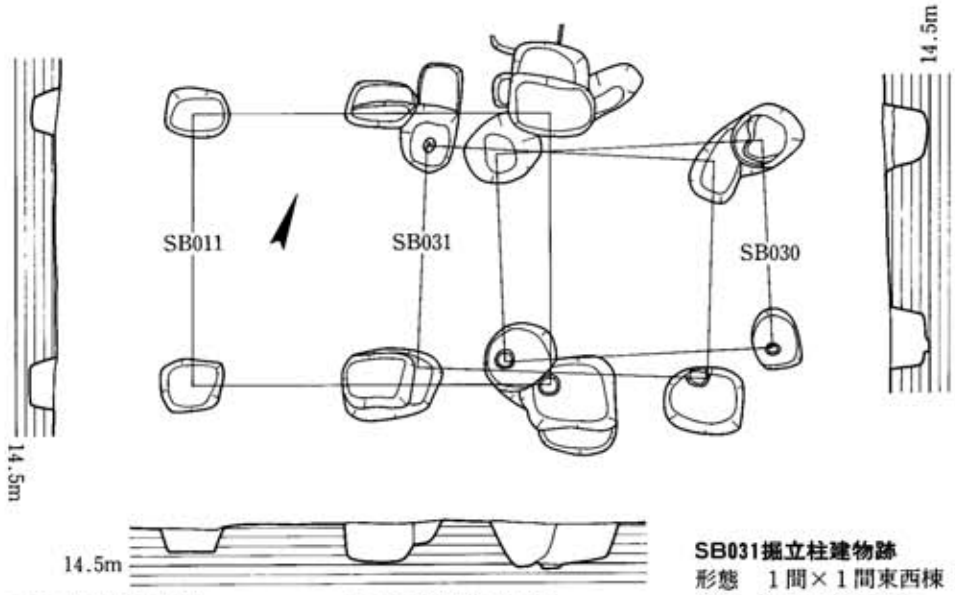
0　4m

Fig. 6　SB007・022・009・010掘立柱建物跡



SB008掘立柱建物跡
形態　2間×1間東西棟
規模　4.11m×2.92m
方位　N70°E
特徴　柱掘形は基本的に2段掘りの長方形。柱根径約15cm。

SB027掘立柱建物跡
形態　1間×1間南北棟
規模　2.76m×2.42m
方位　N66°E
特徴　柱掘形は基本的に方形。柱根径約20cm。



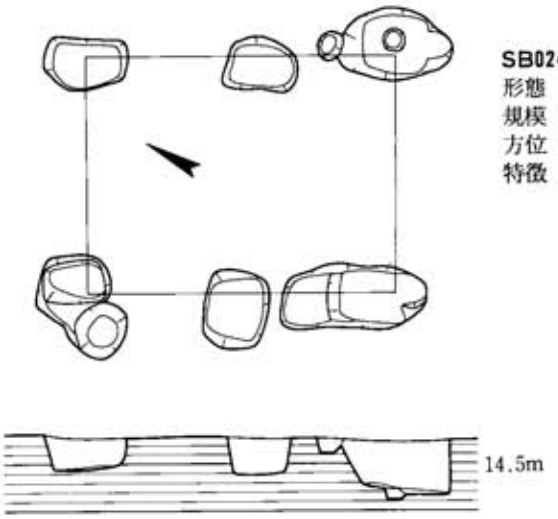
SB011掘立柱建物跡
形態　2間×1間東西棟
規模　3.77m×2.87m
方位　N79°E
特徴　柱掘形は基本的に2段掘りの方形または長方形と見られる。柱根径不明。SB030およびSB031との先後不明。

SB030掘立柱建物跡
形態　1間×1間東西棟
規模　2.82m×2.22m
方位　N65°E
特徴　柱掘形は不整円形。柱根径約20cm。SB031柱穴を切る。

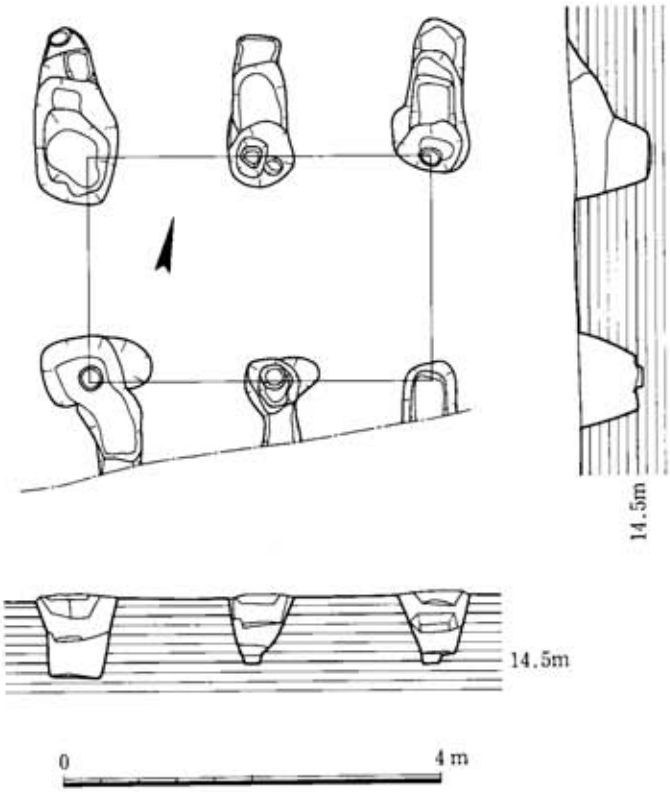
SB031掘立柱建物跡
形態　1間×1間東西棟
規模　3.04m×5.85m
方位　N71°E
特徴　柱掘形は基本的に2段掘りの方形または長方形。柱根径不明。SB030柱穴に切られる。

0　4m

Fig.7　SB008・027・011・030・031掘立柱建物跡

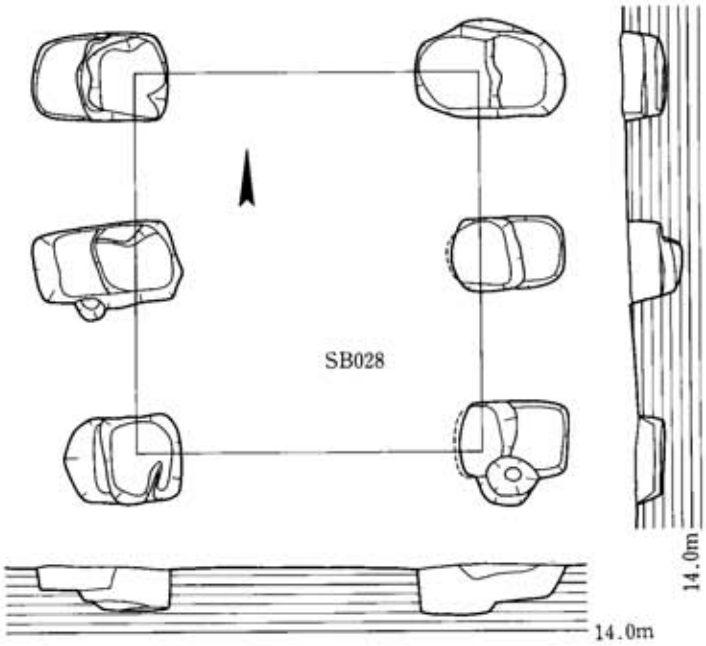


SB024掘立柱建物跡
形態　2間×1間南北棟
規模　3.24m×2.49m
方位　N29°W
特徴　柱掘形は基本的に2段掘りの長方形と見られるが、形状も並びも不揃い。柱根径不明。柱穴がSB043竪穴住居およびSK025土壙と一部切り合うが、先後不明。



SB026掘立柱建物跡
形態　2間×1間東西棟
規模　3.60m×2.40m
方位　N77°E
特徴　柱掘形は基本的に2段掘りの長方形と見られる、一定して建物の外側方向を溝状に斜めに掘り込む。柱根径約20cm。柱穴埋土中から弥生後期前半の完形の甕1点出土。

Fig. 8　SB024・026掘立柱建物跡



SB028掘立柱建物跡

形態　2間×1間南北棟
規模　3.98m×3.64m
方位　N90°W
特徴　柱掘形は2段掘りの長方形。柱根径不明。柱穴がSB013竪穴住居東壁と一部切り合うが、先後不明。

SB036掘立柱建物跡

形態　2間×1間東西棟
規模　4.88m×3.05m
方位　N74°E
特徴　柱掘形は基本的に2段掘りの長方形。柱根径不明。SB037と重複するが、柱穴の切り合いがなく、先後不明。

SB037掘立柱建物跡

形態　2間×1間東西棟
規模　3.62m×3.05m
方位　N70°E
特徴　柱掘形は基本的に2段掘りの長方形。柱根径不明。

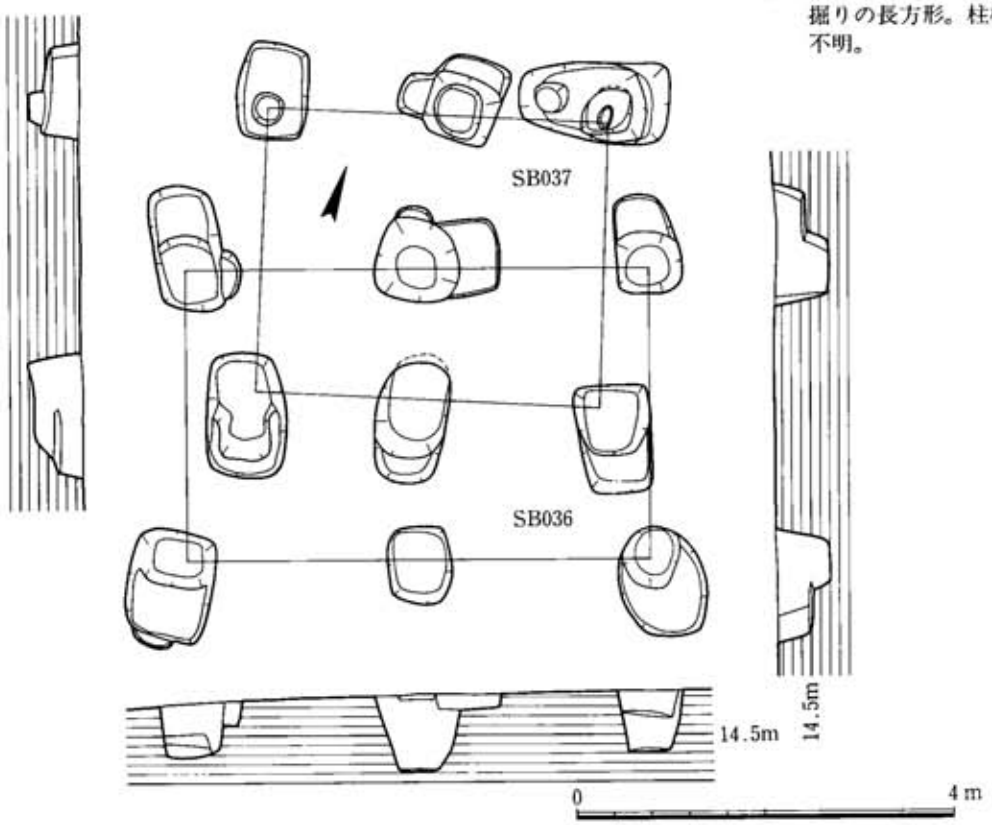
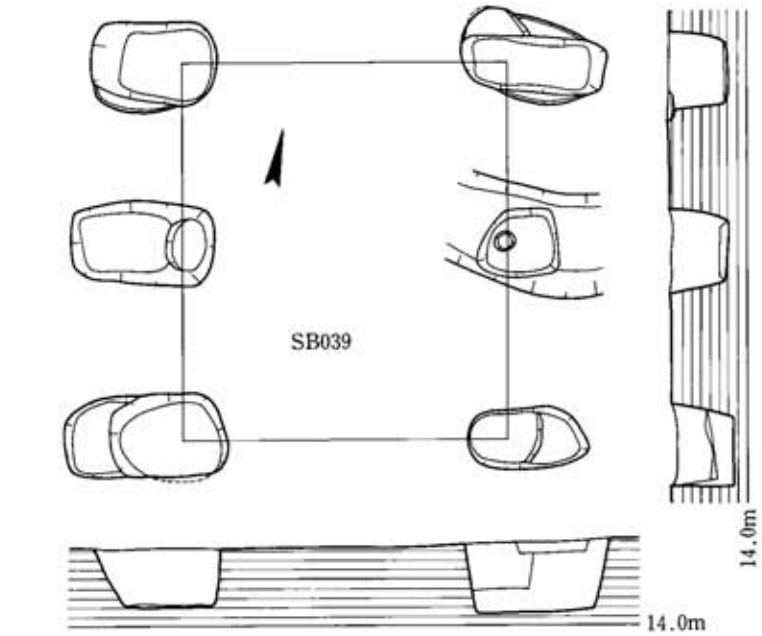


Fig. 9　SB028・036・037掘立柱建物跡



SB039掘立柱建物跡

形態　2間×1間南北棟
規模　3.99m×3.40m
方位　N10° W
特徴　柱掘形は基本的に2段掘りの長方形。柱根径不明。SX34円形周溝に切られる。

SB044掘立柱建物跡

形態　1間×1間南北棟
規模　4.75m×3.78m
方位　N21° W
特徴　柱掘形は基本的に方形。柱根径不明。SB045掘立柱建物の柱穴を切る。

SB045掘立柱建物跡

形態　2間×1間東西棟
規模　3.30m×3.08m
方位　N56° E
特徴　柱掘形は基本的に2段掘りの長方形。柱根径不明。SB044掘立柱建物の柱穴に切られる。

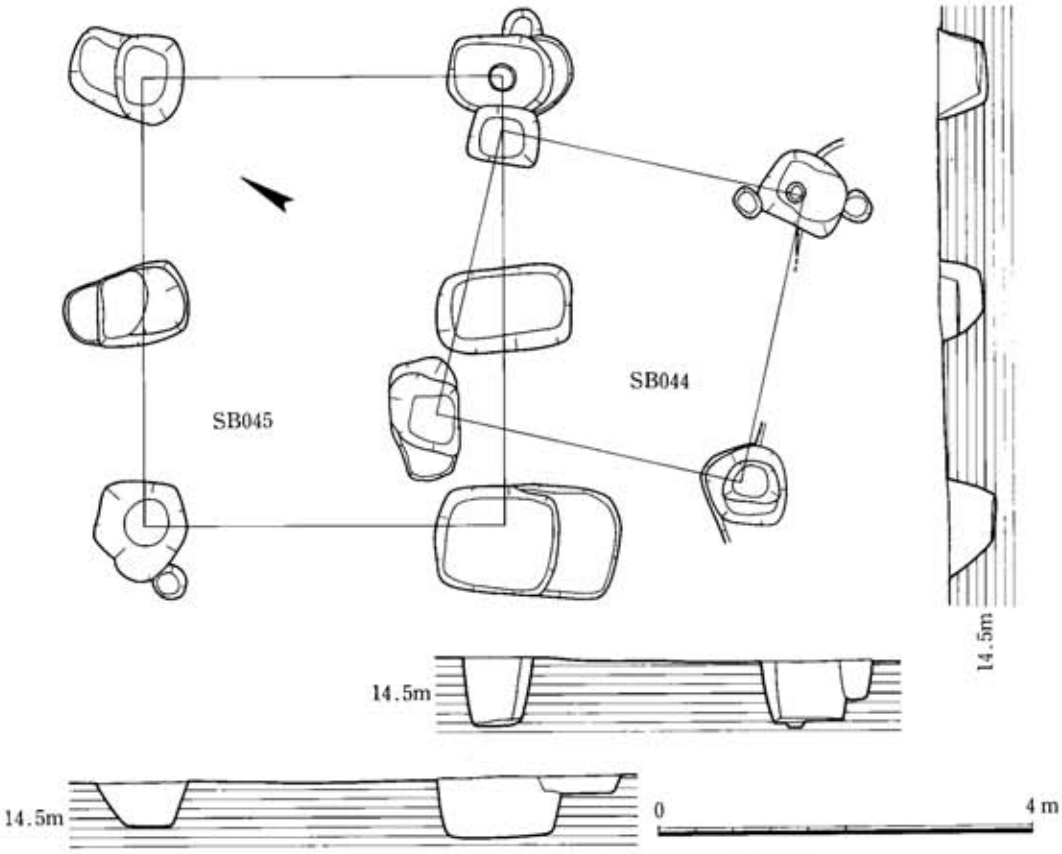


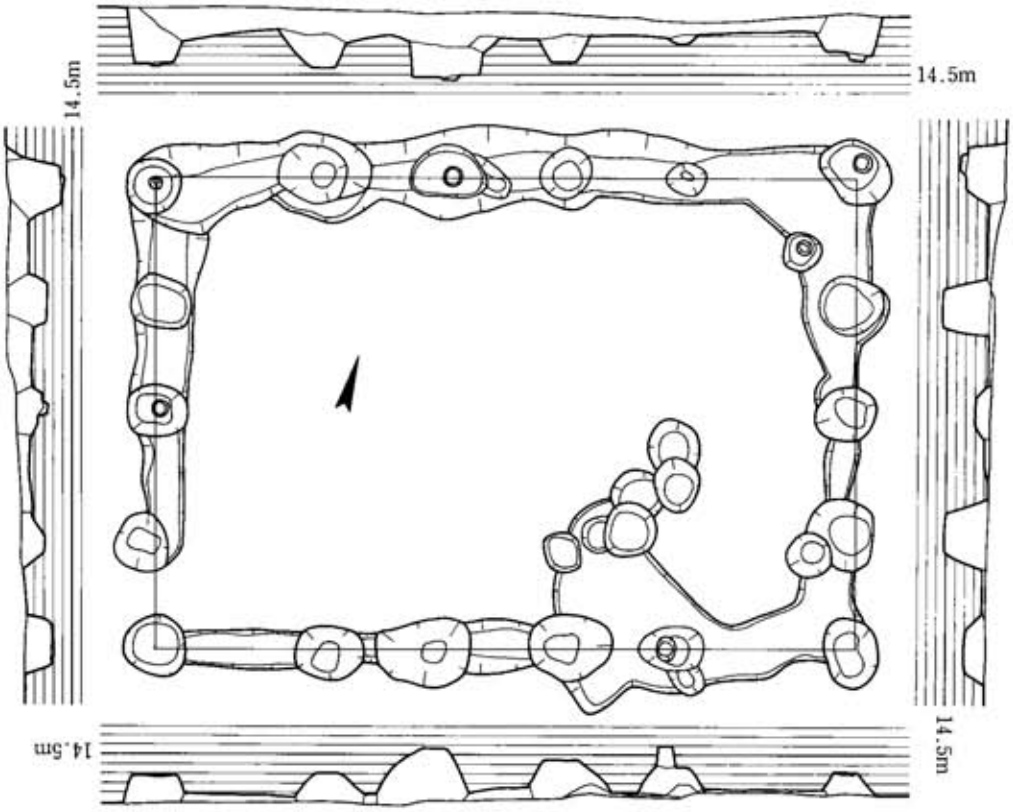
Fig. 10　SB039・044・045掘立柱建物跡

2．奈良・平安時代

奈良時代では、掘立柱建物跡７棟・方形及び円形周溝状遺構４基・土壙１基・井戸跡１基を検出した。

掘立柱建物のうちではSB001が同地区の中心的な性格をもつ建物と見られ、東辺に並ぶ総柱掘立柱建物跡３棟及び西辺のSB038がこれと近接した時期の倉庫群かと考えられる。詳しい時期は明確ではないが、他の土壙及び井戸が奈良時代に属し、また、同調査区における出土遺物の状況とも合わせ、これらの建物も奈良時代を中心とすると推定する。ただし、北辺のSB002とSB040については平安時代以降に下る可能性もある。周溝状遺構は平安時代頃に下る周溝墓かと推定する。

(1)　掘立柱建物跡

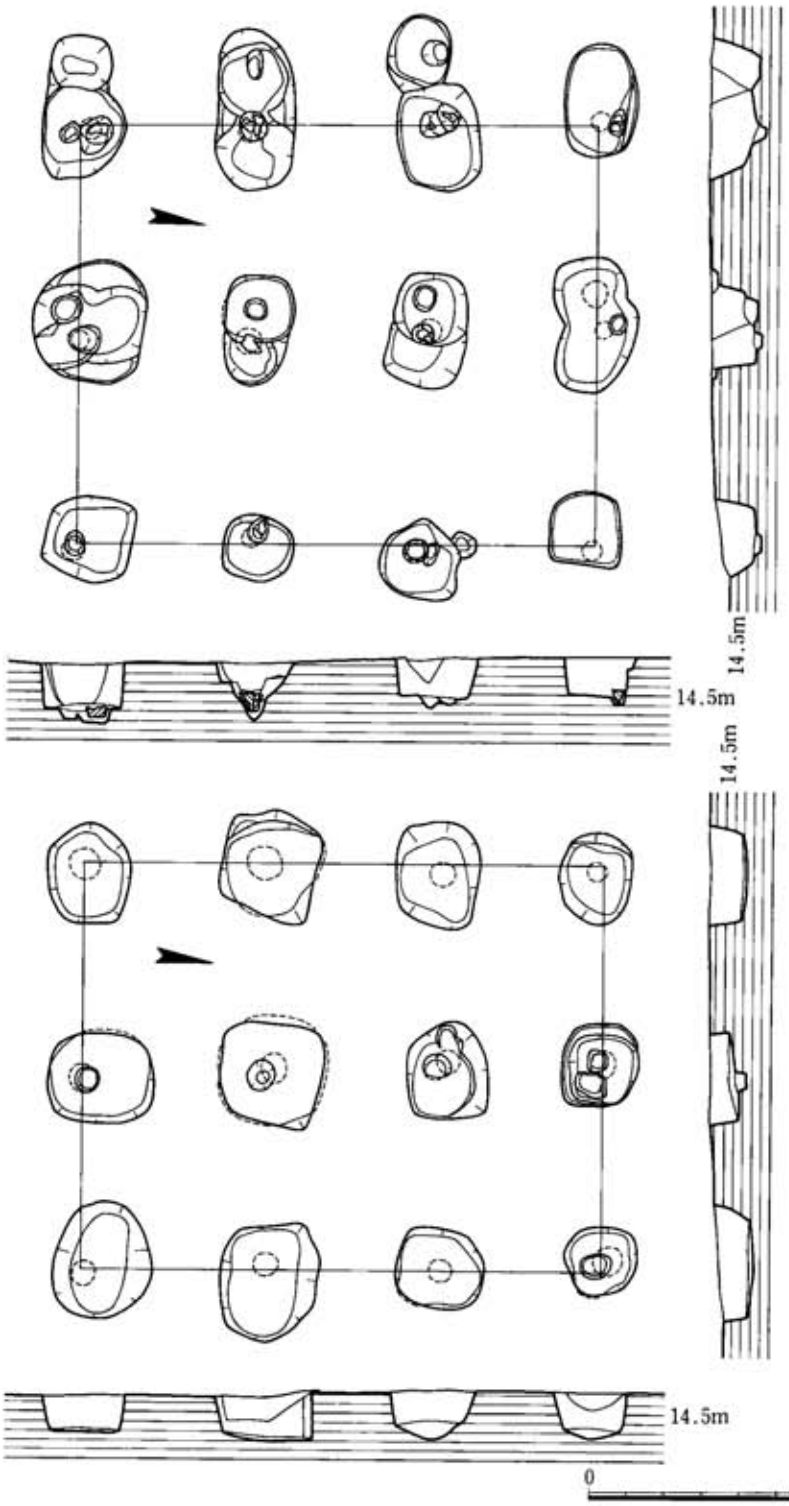


SB001掘立柱建物跡
形態　５間×４間東西棟
規模　7.39m×4.98m
方位　N74°E

特徴　調査区の北側に単独で位置し、規模は最も大きい。柱列の上面は布掘り状にし、各柱掘形は不整円形で形状深さ共に不揃い。柱根径約20cm。

0　4 m

Fig. 11　SB001掘立柱建物跡



SB017掘立柱建物跡

形態　3間×2間総柱南北棟

規模　5.47m×4.52m

方位　N11°W

特徴　柱掘形は基本的に隅丸方形。柱根径約20cm。桁行の中央と西側の柱列に見られる別の柱列は建て替えを示すと見られ、東側柱列を基準に西側へ柱間で1尺ずつ拡張している。SB018掘立柱建物と東側の桁行柱列および方位をほぼ揃えて並ぶ。

SB018掘立柱建物跡

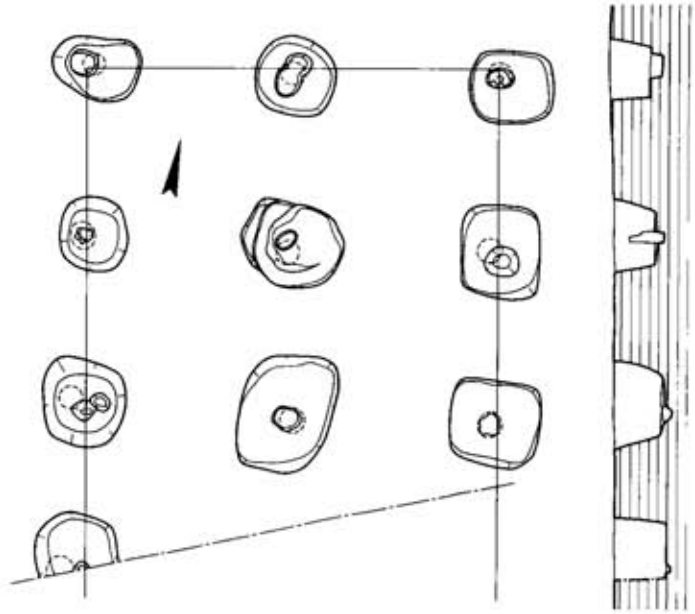
形態　3間×2間総柱南北棟

規模　5.48m×4.28m

方位　N8°W

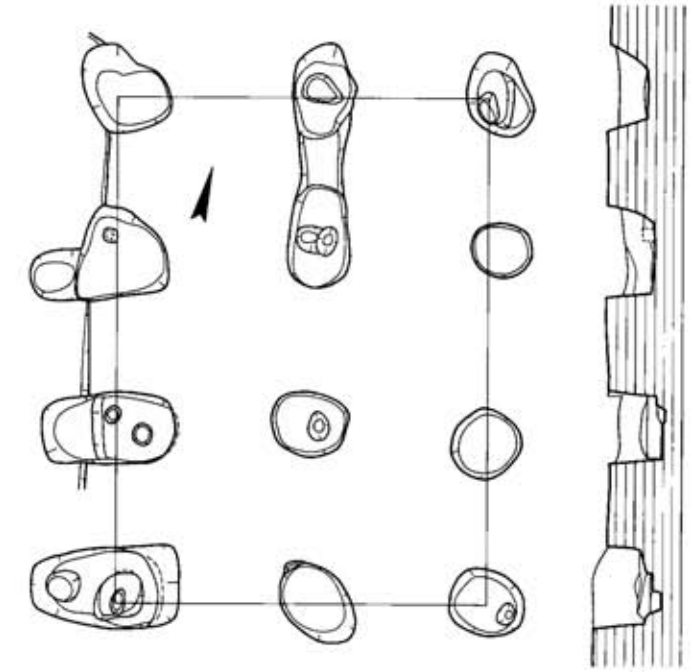
特徴　SB017と東側の桁行柱列および方位をほぼ揃えて並ぶ。柱掘形は基本的に隅丸方形。柱根径約20cm。

Fig. 12　SB017・018掘立柱建物跡



SB019掘立柱建物跡

形態　3間×2間総柱南北棟
規模　5.28m×4.36m
方位　N10°W
特徴　SB017・SB018と方位を揃えて並び、両棟を意識した配置だがやや東にずれる。建て替えなし。柱掘形は基本的に隅丸方形。柱根径約20～25cm。南側は調査区外。



SB038掘立柱建物跡

形態　3間×2間総柱南北棟
規模　5.35m×3.96m
方位　N14°W
特徴　柱掘形は隅丸方形または円形で不揃い。柱根径不明。西桁行柱列に規模を縮小して建て替えた跡が認められる。

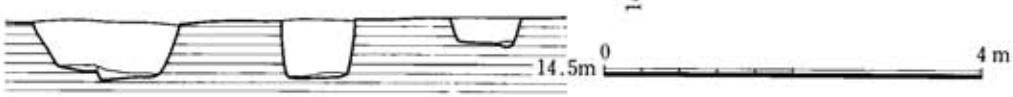
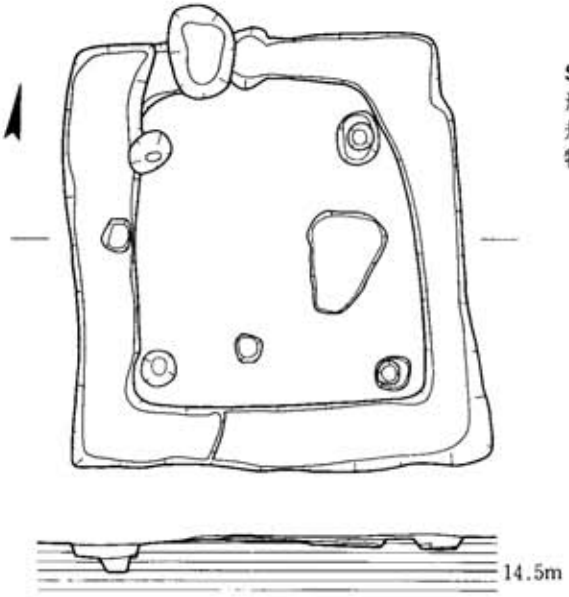
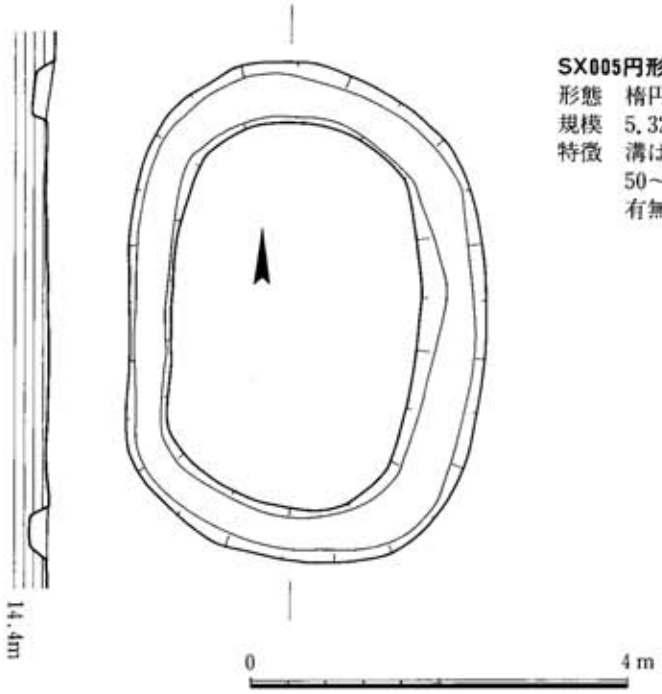


Fig. 13　SB019・038掘立柱建物跡

(2) 周溝状遺構

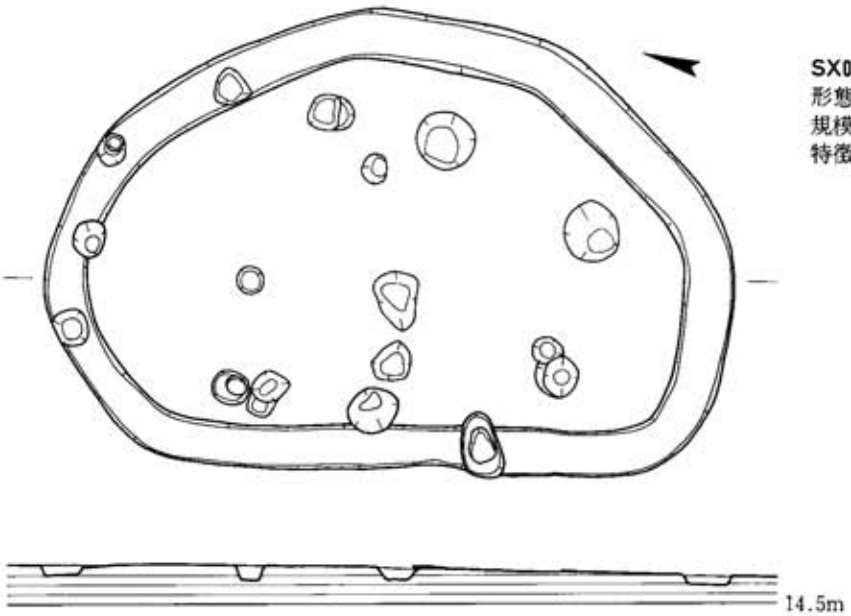


SX004方形周溝
形態　方形
規模　4.56m×4.12m
特徴　底が平坦な溝が浅く残存。溝幅約70cm。4隅の小穴が柱穴の可能性があり、祠堂のような特殊な建物があったと考えられる。

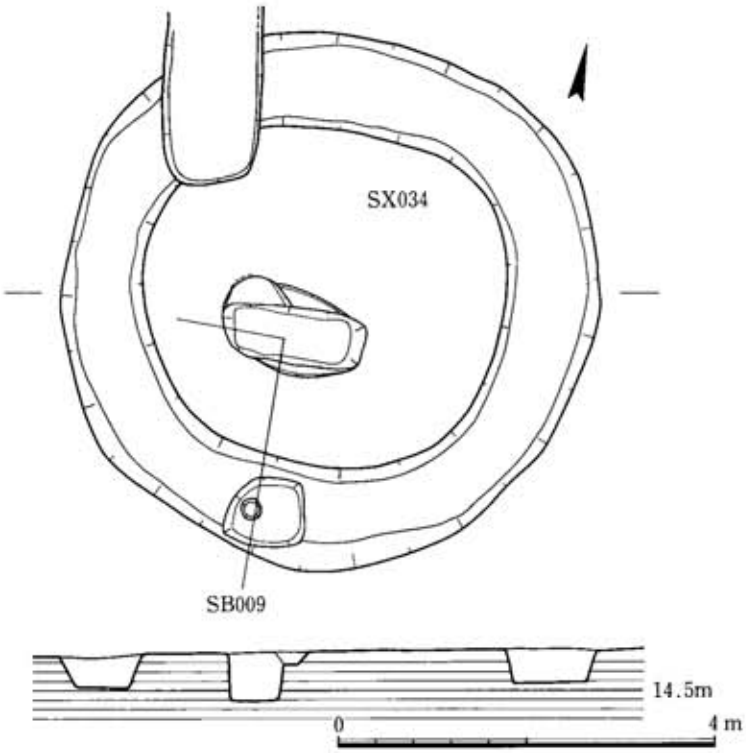


SX005円形周溝
形態　楕円形
規模　5.32m×3.76m
特徴　溝は浅く残存し、底は平坦。溝幅約50～70cm。削平のため「主体部」の有無が確認できず性格不明。

Fig. 14　SX004・005周溝状遺構



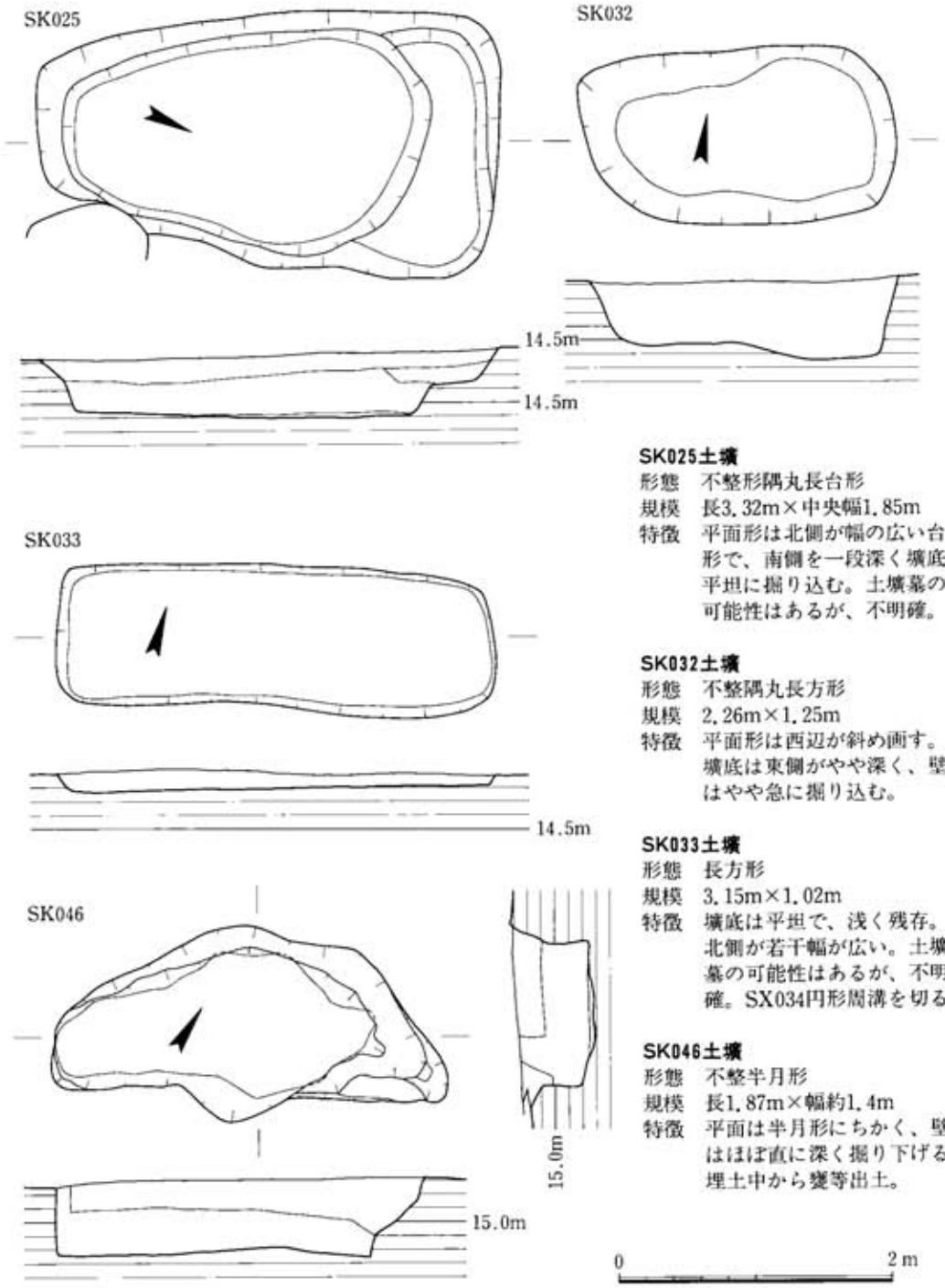
SX006円形周溝
形態　不整楕円形
規模　7.32m×4.85m
特徴　溝は浅く残存し、底は平坦。溝幅約0.55m。周溝墓の可能性が考えられるが、「主体部」の有無不明。域内の小穴が柱穴になるとすれば、建物跡の可能性もある。



SX034円形周溝
形態　円形
規模　東西径5.77m
特徴　溝は浅く残存し、底は平坦。溝幅約0.85m。周溝墓の可能性が考えられるが、「主体部」の有無不明。SK033土壙に切られる。SB039掘立柱建物を切る。

Fig. 15　SX006・034周溝状遺構

(3) 土　壙



SK025土壙
形態　不整形隅丸長台形
規模　長3.32m×中央幅1.85m
特徴　平面形は北側が幅の広い台形で、南側を一段深く壙底平坦に掘り込む。土壙墓の可能性はあるが、不明確。

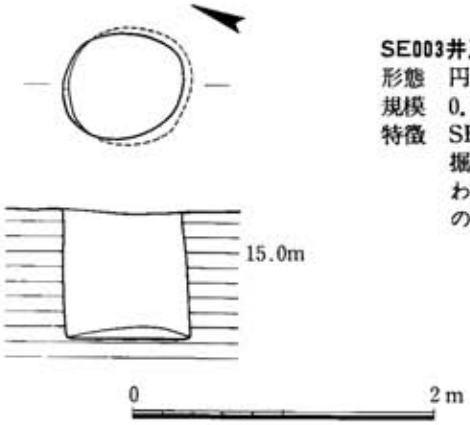
SK032土壙
形態　不整隅丸長方形
規模　2.26m×1.25m
特徴　平面形は西辺が斜め画す。壙底は東側がやや深く、壁はやや急に掘り込む。

SK033土壙
形態　長方形
規模　3.15m×1.02m
特徴　壙底は平坦で、浅く残存。北側が若干幅が広い。土壙墓の可能性はあるが、不明確。SX034円形周溝を切る。

SK046土壙
形態　不整半月形
規模　長1.87m×幅約1.4m
特徴　平面は半月形にちかく、壁はほぼ直に深く掘り下げる。埋土中から甕等出土。

Fig. 16　SK025・032・033・046土壙

(4)　井戸跡



SE003井戸跡
形態　円形
規模　0.7m×0.8m
特徴　SB001掘立柱建物の西南側に単独で掘られており、同建物に伴うかと思われる。深さ約0.9m残存。木枠等の遺存なし。

Fig. 17　SE003井戸跡

III　遺　物

1．弥生時代

遺構の上面が著しく削平されていたため残存する遺物の量は概して少なく、全体の組成がわかるような資料に恵まれなかった。土器は弥生後期前半～中頃を中心とするものと考えられる。土器以外では石器およびガラス小玉が若干出土した。

(1)　土　器

比較的まとまった点数が出土したSB015とSB020竪穴住居跡２棟の土器群のみ図示する。

SB015竪穴住居跡からは甕・壺・鉢・器台・支脚が出土した。甕は肩があまり張らずに長胴化するが、未だ口縁部は明瞭に屈曲し、底部は安定した平底を残す。壺・鉢には中形と小形が見られ、口縁部の屈曲は台付鉢13を除いて比較的明瞭であるが、底部は丸底化の傾向を示すものが見られる。また、器台は受部が上位で開き、外面調整にタタキ目が出現している。

SB020竪穴住居跡出土品は残存する器種が一部にすぎない。高坏・鉢・椀のみ図示する。高坏17は口縁部が鋤先状に開く中期形の形態を残す、椀２点は粗製を含む小形品。鉢２点は大形で、20は突帯１条を巡らせ、底部は丸底化傾向が著しい。

これら２棟の竪穴住居跡出土の土器は口縁部や底部の特徴に未だ中期的な要素を残すものの、タタキの出現や一部の丸底化に新しい様相を見せはじめていることから、後期前半～中頃にかかる時期の複雑な状況を示すものと言えよう。

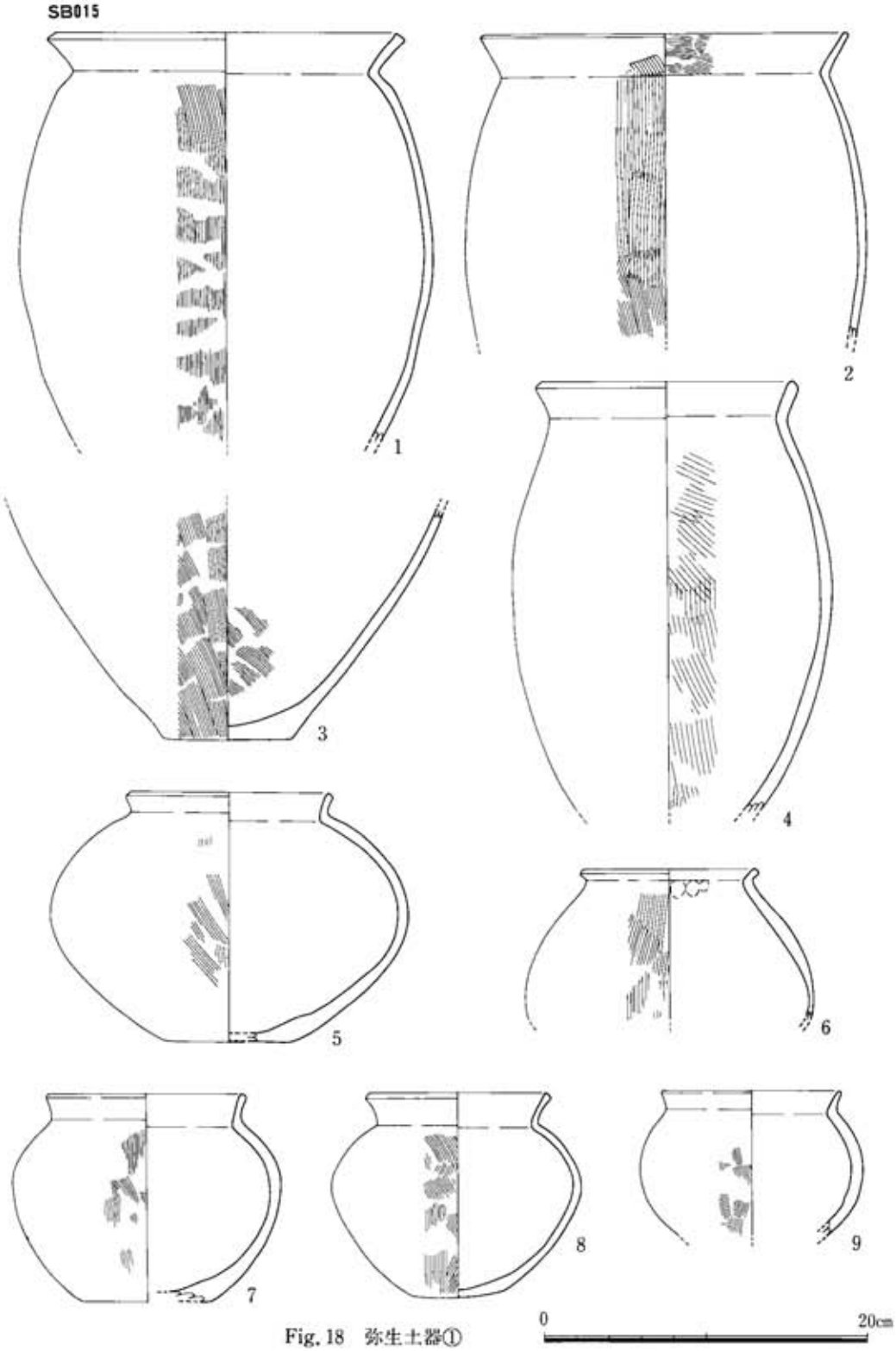


Fig. 18　弥生土器①

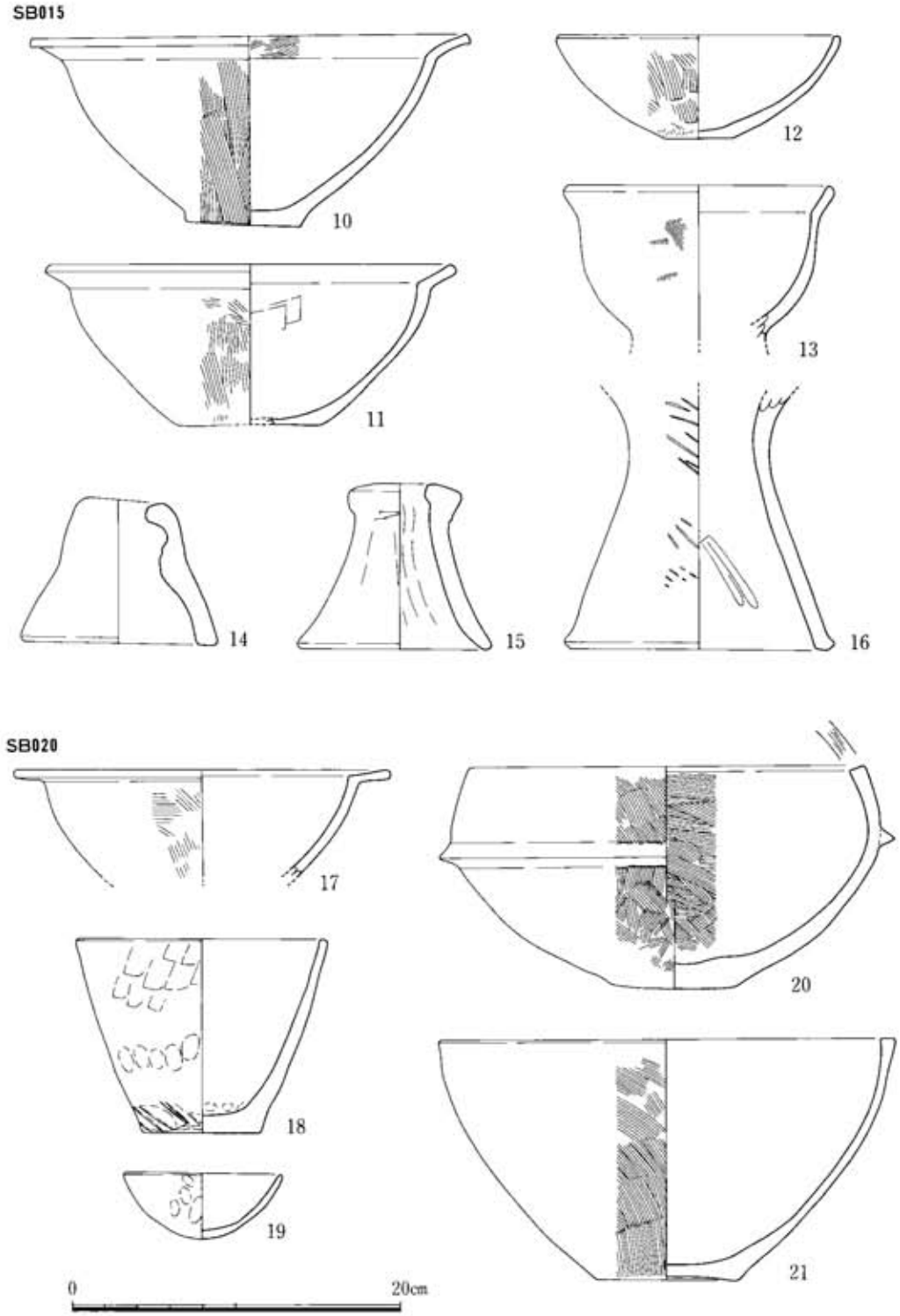


Fig. 19　弥生土器②

Tab.2　弥生土器観察表

※「図番号」下段数字は遺物登録番号

図番号	出土遺構	種別	法量cm	形態・技法等の特徴
1 90000913	SB015	甕	口径　20.6 器高	体部は肩があまり張らずに下位がすぼまる気配をみせ、口縁部は「く」字に折れ、外反気味に開く。胴部は外面ハケ目のあとナデ、内面ナデ、口縁部ナデ。淡黄褐色。
2 90000913	SB015	甕	口径　22.5 器高	体部は肩があまり張らず、口縁部は「く」字に折れ直線的に開く。胴部は外面ハケ目、内面ナデ。口縁部ハケ目のあとナデ。茶褐色。
3 90000918	SB016	甕	底径　7.8 器高	底部のみ残。体部外面ハケ目、内面ハケ目のあとナデ。褐色。
4 90000919	SB016	甕	口径　15.3 器高	胴部は中位デ張り、全体に細身。口縁部は不明瞭に折れて急に立つ。胴部は内外面ハケ目のあとナデ、口縁部ナデ。淡灰褐色。
5 90000902	SB015	壺	口径　12.0 器高　15.1	胴部は低くつぶれ、中位上でつよく張る。やや不安定な平底。口縁部は明瞭に折れ直線的に短く立つ。胴部は外面ハケ目のあとナデ、内面および口縁部ナデ。明茶褐色。
6 90000903	SB015	壺	口径　10.4 器高	胴部は下膨らみで頸部がつよく締まり、口縁部は短く折れて外反。胴部は外面ハケ目、内面ナデ。口縁部ナデ。明茶褐色。
7 90000901	SB015	壺	口径　11.6 器高　12.7	胴部は丸味帯びてやや肩が張り、平底。口縁部は明瞭に折れ直線的に立つ。胴部は外面ハケ目のあとナデ、内面ナデ。口縁部ナデ。明茶褐色。
8 89010074	SB015	壺	口径　10.7 器高　12.5	胴部は丸味帯びて中位のやや上で張り、不安定な平底。口縁部は「く」字に折れ外反気味に開く。胴部は外面ハケ目のあとナデ、内面ナデ。口縁部ナデ。黄褐色。
9 89010075	SB015	壺	口径　10.8 器高	胴部は球形に張り、口縁部は「く」字に折れ薄い器壁で短く開く。胴部は外面ハケ目のあとナデ、内面ナデ。口縁部ナデ。茶褐色。
10 89010069	SB015	鉢	口径　26.1 器高　11.2	体部は安定した平底から湾曲しながらやや浅く立ち上がり、口縁部は折れて外反気味に大きく開く。体部外面および口縁部内面ハケ目、他ナデ。茶褐色。
11 90000905	SB015	鉢	口径　24.0 器高　9.5	体部はやや稜を失った平底から立ち上がり上位で急に湾曲。口縁部は明瞭に折れ直線的に開く。体部は外面ハケ目、内面は上位ヘラケズリ、下位ナデ。口縁部ナデ。明褐色。
12 89010073	SB015	鉢	口径　16.6 器高　6.2	底部は不安定な平底から湾曲しながら立ち上がる。体部は外面ハケ目、内面および口縁部ナデ。黄褐色。
13 90000717	SB015	台付鉢	口径　15.6 器高　9.4	台付鉢。体部は湾曲して急に立ち上がり、口縁部は不明瞭に折れて開く。内外面ハケ目のあとナデ。明灰褐色。
14 90000914	SB015	支脚	底径　11.5 器高　8.6	体部裾は直線的に開き、上端は内側に肥厚して口部をつくる。内外面とも粗くナデ。外面に煤付着。黄褐色。
15 89010067	SB015	支脚	底径　11.0 器高　9.9	体部裾は外反しながら開き、上端は両側に肥厚して口部をつくる。体部外面ヘラナデ、内面粗くナデ。外面に煤付着。黄茶色。
16 90000012	SB015	器台	底径　15.4 器高	体部は裾が直線的に開き、口縁部が緩やかに大きく外反。体部は外面タタキ目のあとナデ、内面ナデ。明褐色。
17 90000022	SB020	高坏	口径　22.3 器高	坏部は丸く湾曲しながら立ち上がり、口縁部は明瞭に折れ平坦にちかく開く。脚部を欠失。坏部は外面ハケ目、内面ナデ。口縁部ナデ。明褐色。
18 90000925	SB020	椀	口径　14.9 器高　11.4	体部は安定した平底から直線的に開いて立ち上がり、口縁部やや内方にめくれる。体部内外面ナデ。淡褐色。
19 90000923	SB020	小形椀	口径　9.3 器高　4.0	粗製の手捏ね土器。丸底から体部湾曲。内外面ナデ。淡黄褐色。
20 90000921	SB016	大形鉢	口径　23.4 器高　13.3	底部は小さく不安定。体部は湾曲して立ち上がり上位でつよく張り、口縁部内傾。胴部最大径に三角突帯。体部内外面および口唇部にハケ目。明褐色。
21 90000920	SB016	大形鉢	口径　27.1 器高　14.4	体部は安定した底部から湾曲して立ち上がり、口唇部はナデて平坦につくる。体部は外面ハケ目、内面ナデ、口縁部付近ナデ。

(2) 石　器

石剣１点のほか、石包丁と砥石の残欠が数点出土した。

22はSB020竪穴住居跡出土の凝灰岩製石包丁。約半分が残存し、その側端を折損している。残存長5.5cm。**23**はSB011竪穴住居跡出土の凝灰岩製石包丁。完形にちかいが刃部の半分を欠く。残存長12.6cm、幅4.4cm。

24はSX006楕円形周溝状遺構の周溝埋土中から出土した。石剣あるいはその未製品かと考えられ、上下端とも折損している。断面は鎬をもたない扁平な作りで、脊は幅広く平坦にし、両側刃部との間にかすかに稜をつくる。残存長9.6cm、幅5.0cm、厚1.1cm。明灰色の頁製。

25はSB015竪穴住居跡出土の砥石。きめの細かい粘板岩を用いている。表裏両面は極端に湾曲しており、曲刃の研磨に使用、さらに側面片方も利用されている。

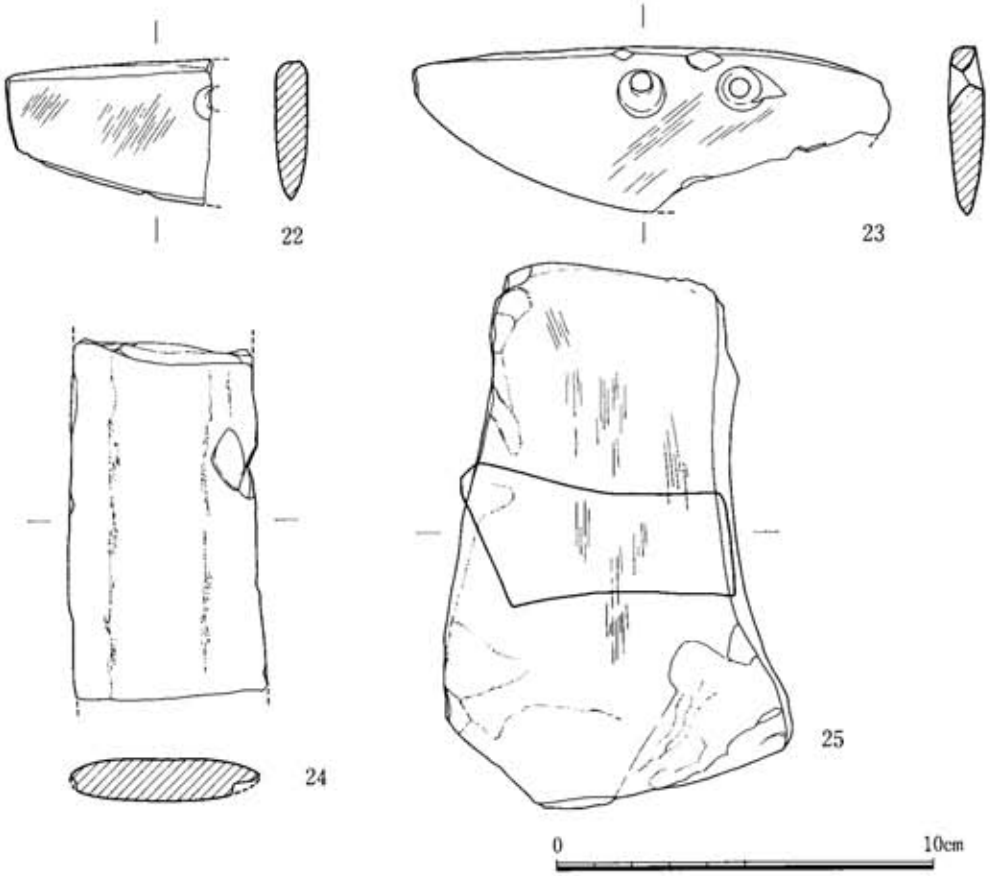


Fig.20　石器

(3) 玉　類

いずれも竪穴住居跡埋土中から検出されたもので、SB020からガラス管玉1点、ガラス小玉6点、その他SB014からガラス小玉1点、SB017から碧玉製管玉1点、ガラス小玉1点、SB021からガラス小玉2点が出土した。

このうち、**34**管玉は深緑色の碧玉製で全長1.5cm、外径0.5cm。片側からの穿孔と見られる。また、ガラス類は全てコバルトブルーに発色しており、**26**ガラス管玉は全長1.1cmを計る。

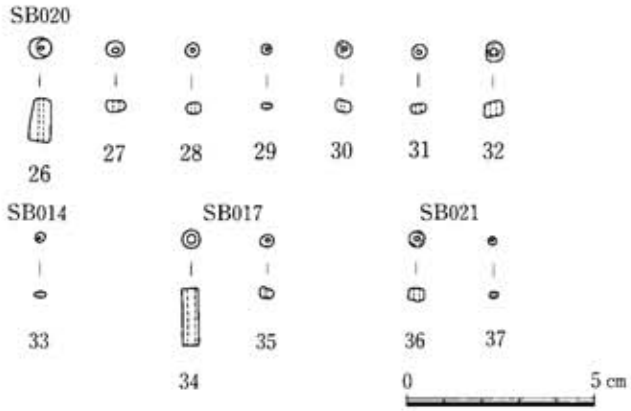


Fig. 21　玉類

2．奈良・平安時代

検出された遺構が掘立柱建物跡と一部土壙に限られこともあって、出土した遺物は須恵器と土師器のみで、点数も少ない。同地区の遺構の時期をある程度推定させるものとして一部を図示しておく。

(1) 土師器・須恵器

図示した資料のうち、**38**・**39**・**40**は須恵器、他は土師器である。

38坏身は内傾した短いたちあがりが付き、**39**蓋は天井部から体部にかけて丸味をもつ。ともに6世紀末の特徴をもつが、便宜上ここに挙げておく。**40**蓋は口縁部が短く立って天井部外面にヘラ記号をもつ。8世紀に位置付けられる。

土師器のうち、**41**はふっくらとして深めの大形椀、**44**は口縁部が稜をなして長く直立する小形の椀。**42**・**43**は丸底気味の坏である。また、**45**高坏は坏部は不明であるが、脚部は裾が短く開く。これらの土師器も8世紀のうちに含められるものであろう。

Tab. 3に個々の観察を挙げておく。

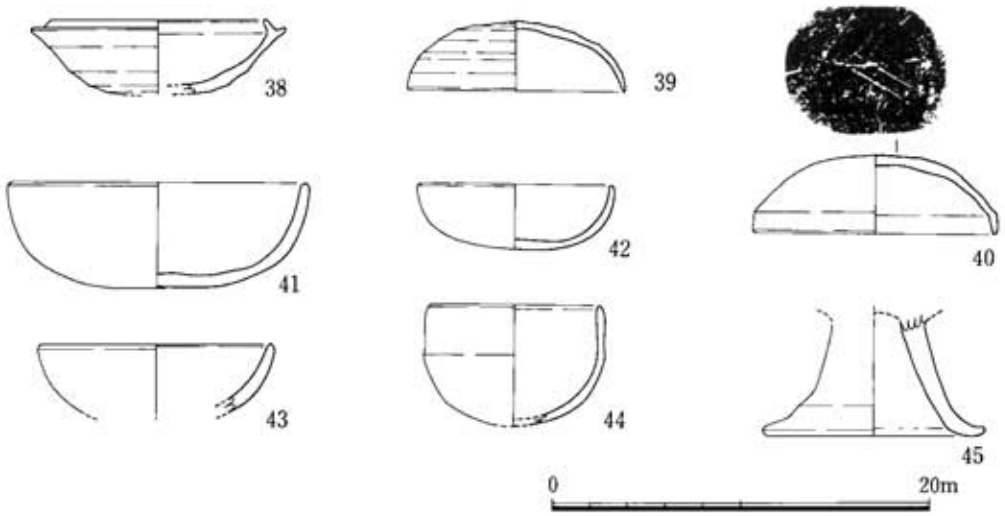


Fig. 22　土師器・須恵器

Tab. 3　土師器・須恵器観察表

※「図番号」下段数字は遺物登録番号

図番号	出土遺構	種別	法量cm	形態・技法等の特徴
38 90001303	SK025	須恵器 坏	口径　11.4 器高　3.9	体部は深く、不安定な底部から直線的に開き、つよく内傾した短いたちあがりをもつ。外面底部から体部2分の1へラケズリ、他ナデ。灰色。
39 90001301	SK025	須恵器 蓋	口径　11.3 器高　3.7	天井部は丸味をもち体部が湾曲してそのまま口縁部をつくる。天井部外面へラケズリ、他ナデ。灰色。
40 90001302	SB020	須恵器 蓋	口径　12.6 器高　4.1	体部は丸い天井部から湾曲して下り、稜をなして口縁部が短く立つ。天井部外面にヘラ記号あり。調整不明瞭。焼成不良で、軟質。淡灰褐色。
41 90001328	SK001	土師器 碗	口径　15.5 器高　5.5	体部は丸底から湾曲して立ち上がる。体部内外面ナデか。内面赤色、外面黄褐色。
42 90001327	SK001	土師器 坏	口径　10.0 器高　3.0	体部は深く、丸底から湾曲して口縁部が直に立ち上がる。内外面ナデ。淡茶褐色。
43 90001331	SK001	土師器 坏	口径　12.2 器高	体部は丸底気味の底部から湾曲して立ち上がる。体部内外面ナデ。淡褐色。
44 90001326	SK001	土師器 埦	口径　8.8 器高　6.3	脚部は裾が急に外反。坏部不明。外面丹塗り磨研。内面へラケズリ。淡黄褐色。
45 90001330	SK001	土師器 高坏	底径　10.9 器高	脚部は裾が急に外反。坏部不明。外面丹塗り磨研。内面へラケズリ。淡黄褐色。

西山田三本松B遺跡

にしやまだ　さんぼんまつ

遺跡名：西山田三本松B遺跡（略号　NYS－B）
所在地：佐賀郡大和町大字川上字三本松

西山田三本松B遺跡

Ⅰ　遺跡の概要

1．主な遺構の分布状況

西山田三本松A遺跡と西山田二本松遺跡A区とに挟まれた、東西幅約300mの区間に当たる。遺跡名は行政地区名に基づくものであり、また、今回は工事に合わせて調査区をⅠ・Ⅱ・Ⅲと呼んだが、あくまで便宜的なものにすぎない。地域全体としては嘉瀬川西岸の東山田一本杉遺跡から西山田三本松A遺跡まで続く、弥生後期及び奈良・平安時代を中心とした一連の遺跡の一部と見てよいであろう。地形的にも同様な立地環境にある。

Ⅰ～Ⅲ区を通して全体的に概観すると、まず弥生時代では竪穴住居群を中心として２つの地区に大きく分けられる。一つはⅠ区の竪穴住居跡14棟及び掘立柱建物跡５棟等からなる一群、もう一つはⅢ区の竪穴住居跡15棟及び掘立柱建物跡２棟等からなる一群である。前者は広く捉えれば西側に接する西山田三本杉A遺跡の弥生時代遺構群と同一のものと見るべきであろう。両地区は約100m離れているが、ともに弥生後期前半～中頃を中心としており、ほぼ同時期に併存した小集団の存在を示すものと考えられる。

次に、奈良・平安時代では、この一帯に一定の基準に基づく地割りが行われた結果、企画性をもって配置された溝、道路、掘立柱建物跡等が出現する。これらの遺構は、Ⅰ～Ⅲ区を東西に走るSD101大溝によって南北に仕切られ、さらにⅡ区の中央にあって両側にSD206とSD207溝をもつ南北道路で東西に大きく分けられる。仮にⅠ区及びⅡ区西半部の遺構群を「西区」、Ⅱ区東半部及びⅢ区の遺構群を「東区」と呼んで区分することにしよう。

まず「西区」では、南辺部に大形掘立柱建物群が集中して建てられ、これらを囲うように西傾20°を基準として北側にSD101東西溝、西側にSD110南北溝、東側にはSD206・SD207の両側溝をもつ南北道路が通る。SD101の場合は、Ⅲ区のSD302に繋がるSD109溝が先に掘られた後に大溝に改変され、さらに流水によって線形が崩れていったと考えられる。SD110溝東縁とSD207西縁との間は約54m離れている。掘立柱建物群は重複することが多く、時期別にどのような構成をとるかは明確でないが、２時期以上にわたることは明らかである。形態は各種の東西棟あるいは南北棟がみられ、大型建物ではSB119のみ総柱構造である。このうち共通性が見られるのは、SB118・SB119・SB277の３棟で、建物方位は西傾20°の地割りに合わせ、柱掘形も大型の方形である。SB126・SB128・SB129・SB265の３棟も方位は近似するが、柱掘形はそれらより一回り小さい。SB118とSB265は東西に並ぶかのように見えるが、柱列の接近状況からみて同時期ではない。これらの建物は奈良時代のうちに幾度か建て替えられながらも、先の区画溝及び地割りに方位等を規制されたことは明らかである。他の掘立柱建物跡は柱掘形

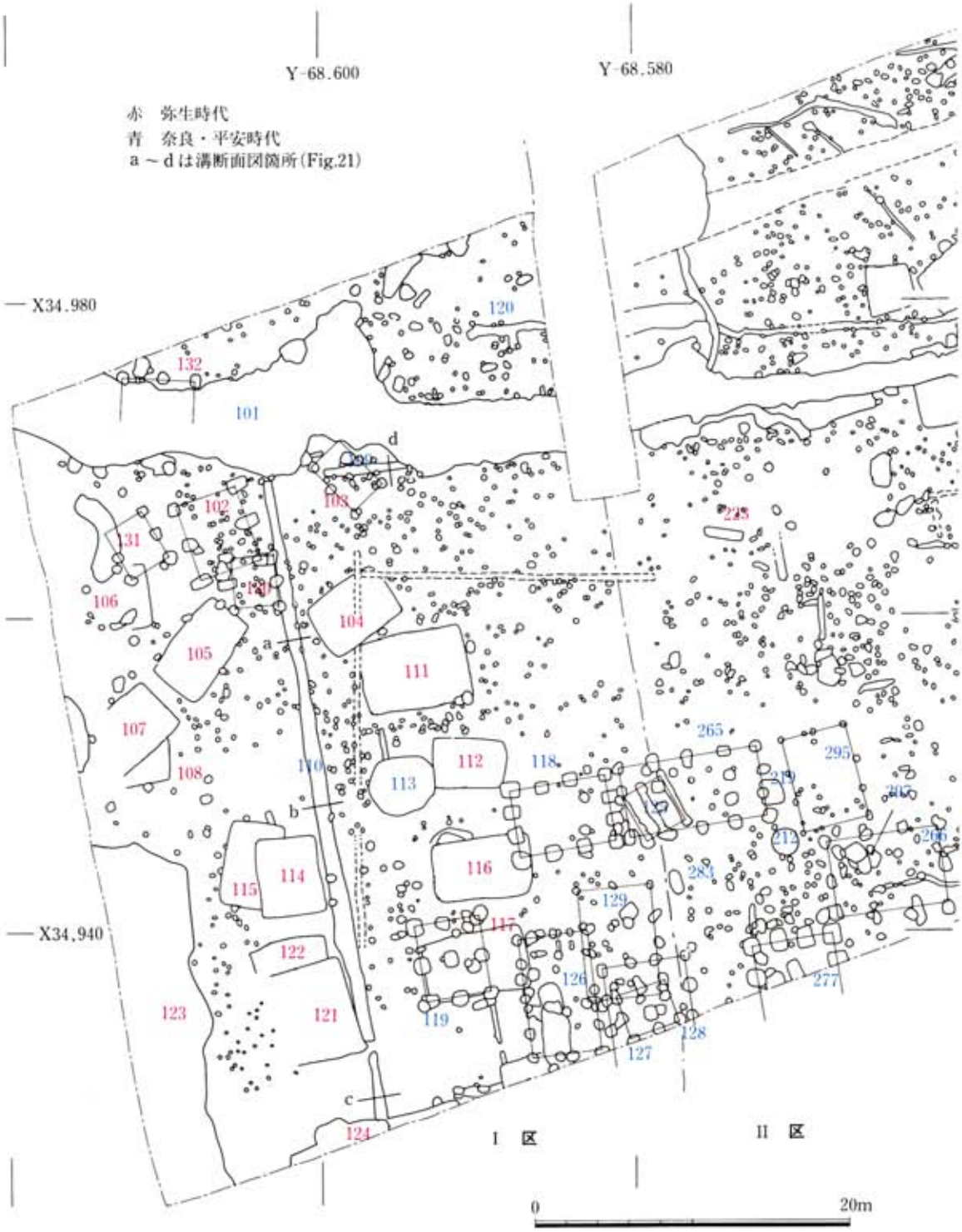


Fig. 1　西山田三本松B遺跡Ⅰ区・Ⅱ区遺構配置図

が小形で、配置に企画性が乏しい。その他の遺構では、カマドをもつ竪穴住居跡がII区の中央付近に分散している。

一方、「東区」で特に注目されるのは、II区東半及びIII区の北辺にあるSD304方形区画溝の存在である。東西幅106mは奈良期の1町に当たり、屋敷地割りのような形態をもつ。区画内の全容は明らかでないが、検出した遺構ではIII区にあって東西に並ぶSB449・SB450掘立柱建物2棟とその南面のSB452柱列がこれに伴うと見られる。II区のSB310は両面廂の大型掘立柱建物で南面及び東西両側を柱列で囲まれるが、SD304溝を切っており、同時期ではない。II区中央の南北道路を基準として見た西傾約20°の地割りの中では、SD304溝が西傾18°でこれにちかく、一連の地割りに沿う区画溝と考えられる。したがってSB310掘立柱建物は、SD304溝が埋まった後の新しい地割りに基づく建物跡である。

他に地割りに関係する遺構では、III区南辺のSD288とSD289が道路側溝と考えられるほか、これらと全く別の方位をもつIII区のSD506・SD511溝等がある。また、カマドをもつ竪穴住居跡及び企画性に乏しい掘立柱建物跡が、弥生時代の竪穴住居群と重なるように分散している。

2．各地区の遺構

(1) I区の遺構

検出した遺構は弥生時代と奈良・平安時代に限られる。

弥生時代では後期前半～中頃を中心とした竪穴住居跡14棟・掘立柱建物跡5棟、円形土壙1基がある。竪穴住居跡はSB121が方形である以外は全て長方形で、方位は一定せず、小さな広場を囲むように配置されている。14棟のうち8棟がベット状遺構を付設する。SK113円形土壙も竪穴住居跡に類する特殊な建物遺構であろう。掘立柱建物跡はいずれも2間×1間で、SB102が際立って大型である。竪穴住居群の北側に集中しており、付属する高床倉庫群と考えられる。また、調査区西南隅のSX123土壙は南北に長い大型の掘り込みで、埋土中から弥生後期前半～中頃の土器が多量に出土した。生活に伴う土器等の廃棄に利用された土壙であろう。

奈良・平安時代では溝4条と掘立柱建物跡6棟がある。時期は奈良時代を中心とする。溝はSD110南北溝が西傾20°の地割りに伴うものであり、SD109もこれに関係する東西溝であろう。SD109はII区のSD302に繋がる溝で、その後、SD101大溝に改変されたと考えられる。SD101はかなりの水量のある大溝で、9世紀まで機能したようである。SD120はII区のSD232に続くやや不定方向の東西溝である。掘立柱建物跡群は調査区東南隅にあってII区の西南隅建物群と一群をなす。SB119のみ総柱構造では大型で2間×2間南北棟。SB118は唯一東西棟の3間×3間でII区のSB265と東西に並ぶが柱列の接し方からみて同時期ではないと思われる。SB126とSB129は各々4間×2間、3間×2間の南北棟で、桁行柱列の切り合いから見て前者が新し

い。共に建物方位は西傾グループに属す。SB128も、桁行は不明であるが、方位は同じく西傾20°グループに属し、近接した時期の建て替えと考えられる。その他の建物では、SB125とSB127が2間×2間の小形総柱で、SB125は掘形上面が布掘りの特徴をもつ。共に方位は大きく西に傾き、同時期と見られる。SB127がSB129の柱穴を切ることから、先の一群の建物に後続する時期のものとしてよいであろう。

Tab.1　西山田三本松B遺跡Ⅰ区遺構一覧表　※「旧番号」は調査時の遺構番号

遺構番号	種別	構造等	時代	旧番号	Fig.
SD101	溝	東西大溝	奈良～平安	SD001	1
SB102	掘立柱建物跡	南北棟（2間×1間）、方位21°W	弥生後期	SB002	8
SB103	掘立柱建物跡	東西棟（2間×1間）、方位50°W	弥生後期	SB003	8
SB104	竪穴住居跡	長方形東西棟	弥生後期	SB004	3
SB105	竪穴住居跡	長方形	弥生後期	SB005	3
SB106	竪穴住居跡	長方形東西棟	弥生後期か	SB006	1
SB107	竪穴住居跡	長方形	弥生後期	SB007	4
SB108	竪穴住居跡	方形	弥生後期	SB008	4
SD109	溝	東西溝、方位93°E	奈良	SD009	1
SD110	溝	南北溝、方位10°W	奈良	SD010	1
SB111	竪穴住居跡	長方形東西棟、鉄器片出土	弥生後期	SB011	4
SB112	竪穴住居跡	長方形東西棟	弥生後期	SB012	5
SK113	土壙	大形円形、鉄鏃・刀子・鉄滓出土	奈良	SX013	20
SB114	竪穴住居跡	長方形南北棟	弥生後期	SB014	5
SB115	竪穴住居跡	長方形南北棟	弥生後期	SB015	5
SB116	竪穴住居跡	長方形東西棟、鉄滓出土	弥生後期	SB016	6
SB117	竪穴住居跡	長方形東西棟、不明鉄器片出土	弥生後期	SB017	7
SB118	掘立柱建物跡	東西棟（2間×1間）、方位N80°E	奈良か	SB018	18
SB119	掘立柱建物跡	総柱南北棟（2間×2間）、方位N78°E	奈良か	SB019	18
SD120	溝	東西溝、方位86°E、SD232に続く	奈良	SD020	1
SB121	竪穴住居跡	方形	弥生後期か	SB021	6
SB122	竪穴住居跡	方形	弥生後期か	SB022	6
SK123	土壙	不整形落ち込み、土器等多量出土	弥生後期	SX023	1
SB124	竪穴住居跡	方形	弥生後期	SB024	1
SB125	掘立柱建物跡	総柱南北棟（2間×2間）、方位N61°E	奈良か	SB025	26
SB126	掘立柱建物跡	南北棟（4間×2間）、方位N7°W	奈良か	SB026	17
SB127	掘立柱建物跡	東西棟（2間×1間）、方位N63°E	奈良か	SB027	19
SB128	掘立柱建物跡	南北棟（4間×3間）か、方位N79°E	奈良か	SB028	19
SB129	掘立柱建物跡	南北棟（3間×2間）、方位N82°E	奈良か	SB029	19
SB130	掘立柱建物跡	南北棟（2間×1間）、方位N3°W	弥生後期か	SB030	8
SB131	掘立柱建物跡	南北棟（2間×1間）、方位N29°W	弥生後期か		8
SB132	掘立柱建物跡	東西棟（2間×？）か、方位N97°W	弥生後期か		1

(2) II区の遺構

主に奈良・平安時代の遺構が分布する。

弥生時代では竪穴住居跡等は見当らず、東南隅のSX306円形周溝状遺構1基だけである。SX306は外径約3.8mで周溝墓の可能性もあるが、上面削平のため性格は不明である。奈良・平安時代の遺構は、溝35条・掘立柱建物跡8棟・柱列2列・竪穴住居跡7棟・井戸跡2基、土壙26基である。時期は奈良時代を中心とする。

溝のうち地割りに関係するものでは、SD302がI区のSD109の続きであり、その後I区から伸びるSD101大溝に掘り直される。中央を約21°西傾して南北に並走するSD206とSD207は内法幅3.0m（10尺）の道路側溝と見られ、それぞれ北側のSD270とSD294に続く。東南隅のSD288・SD289も同じ方位の道路側溝であろう。但し、幅は約2.3mと狭い。東北隅のSD304はIII区に続く屋敷地割り状の区画溝で、幅約1.0m。18°西傾する。時期は8世紀後半から9世紀前半である。既に述べたように、20°西傾地割りに基づくものと考えられ、その埋没後にSB310掘立柱物跡が柱列に囲まれて出現する。他に直線溝では南辺のSD287東西溝、東寄りSD241南北溝があるが、方位はそれぞれ西傾76°、8°で時期は異なると考えられる。その他にも多くの溝はあるが、正方位に対して斜行あるいは不定方向に走ることから、本来の地割りが消滅した後に掘削された可能性がつよい。

掘立柱建物跡のうち西南隅の一群では、SB265が両面廂の4間×3間東西棟で大型、SB277は梁間3間の南北棟で柱掘形がとくに大きく、共に20°地割りに合う。SB266は3間×2間の大型東西棟であるが、前2棟と傾きが異なる。SB295もさらに西に傾き、柱穴は小形、SB267は一群から東に離れる。これらの建物のうちには地鎮具を埋めたものが見られ、蓋を被せた大形坏がSB265から1個、SB266から2個出土した。東北隅の一群ではSB310が両面廂の3間×2間大型東西棟で、SA311柱列が南面と東西両側をコ字形に曲がってこれに伴う。柱穴がやや小形のSA313柱列はその建て替えであろう。いずれも82°西傾する。SD304を切ることから、同区画建物群の系譜に連なる建物群の中心的な建物であったと考えられる。その他、SB307南北棟も区画内の建物ではあるが、北側が調査区外となるためどのグループに属すか不明である。また北辺にSB305は柱掘形の上面が布掘りで、方位は大きく西に傾く。

竪穴住居の多くは掘立柱建物群に替わって出現したと思われるが、とくに明確な群をなさない。いずれも方形プランで大部分がカマドを付設し、規模は大小様々である。

土壙は一帯に無数に掘られている。遺構と呼べるのは26基ほどであるが、SK211方形土壙やSK212円形土壙のように形が整ったものは少なく、殆どは性格が不明である。井戸跡はSB310西脇にSE308がある。

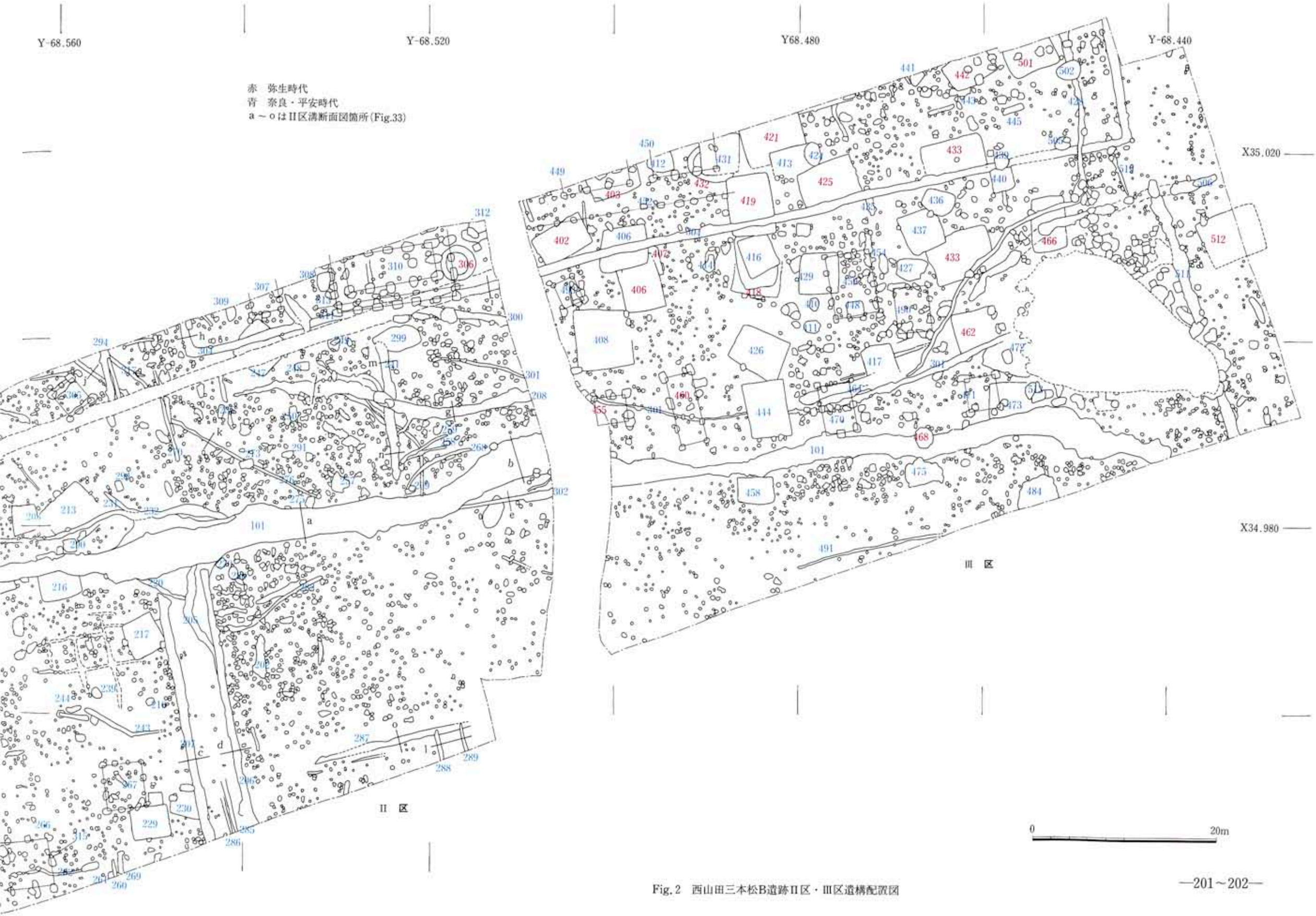


Fig. 2　西山田三本松B遺跡II区・III区遺構配置図

Tab.2　西山田三本松B遺跡Ⅱ区遺構一覧表　※「旧番号」は調査時の遺構番号、（　）はBOX工事区

遺構番号	種別	構造等	時代	旧番号	Fig.
SD101	溝	東西大溝	奈良～平安	SD004	2
SK202	土壙	不整溝状土壙	奈良	SK002	30
SB203	竪穴住居跡	不整方形	奈良	SB003	22
SD205	溝	不定南北溝	奈良	SD005	2
SD206	溝	南北溝、方位N11°W、SD207との幅4m	奈良	SD006	2
SD207	溝	南北溝、方位N11°W	奈良	SD007	2
SD208	溝	不定東西溝、刀子・鉄滓出土	奈良	SD008	2
SD209	溝	不定南北溝、刀子片・鉄輪・鉄滓出土	奈良か	SK009	2
SK210	土壙	円形	奈良か	SK010	2
SK211	土壙	方形	奈良か	SK011	31
SK212	土壙	円形、鉄滓出土	奈良	SK012	31
SB213	竪穴住居跡	方形	奈良	SB013	22
SK214	土壙	不整長方形	奈良か		2
SK215	土壙	不整楕円形	奈良か	SK019	31
SB216	竪穴住居跡	方形	奈良	SK215･219	23
SB217	竪穴住居跡	方形	奈良	SB017	24
SD220	溝	不定東西溝	奈良～平安	SD20･78･81	2
SD221	溝	不定南北溝	奈良か	SD021	2
SD223	溝	東西溝、T字形鉄器出土	奈良	SD023	1
SK224	土壙	楕円形	奈良か	SK024	2
SD227	溝	南北溝	奈良	SD027	2
SB229	竪穴住居跡	長方形東西棟、鉄滓出土	奈良	SB029	24
SB230	竪穴住居跡	方形、一部残	奈良	SB030	24
SD231	溝	SD232と合流	奈良	SD031	2
SD232	溝	不定東西溝、鉄片出土	奈良	SD032	2
SK234	土壙		奈良か	SK034	2
SK235	土壙	楕円形	奈良か	SK035	2
SK239	土壙	楕円形	奈良か	SK039	31
SD241	溝	南北溝、方位N7°W、鉄滓出土	平安	SD041	2
SD243	溝	不定東西溝	奈良か	SD043	2
SK244	土壙	不整楕円形	奈良か	SK044	32
SB247	竪穴住居跡	方形	奈良か	SB047	23
SK248	土壙	長方形	奈良か	SK248	32
SK249	土壙	楕円形	奈良か	SK049	2
SK250	土壙	隅丸長方形、鉄鏃片出土	奈良か	SK050	32
SK257	土壙	不整形	奈良か	SK057	32
SD258	溝	不定東西溝	奈良か	SD058	2
SD259	溝	不定東西溝	奈良か	SD059	2
SD260	溝	南北溝	奈良	SD060	2

遺構番号	種別	構造等	時代	旧番号	Fig.
SK261	土壙	楕円形、鉄器片出土	奈良	SK061	2
SD262	溝	不定東西溝	奈良	SD062·SD64	2
SB265	掘立柱建物跡	東西棟（4間×2間）、東西廂（出1間）、方位N9°W	奈良か	SB065	26
SB266	掘立柱建物跡	東西棟（3間×2間）、方位N81°E	奈良	SB066	25
SB267	掘立柱建物跡	南北棟（3間×3間）、方位N6°W	奈良か	SB067	27
SD268	溝	不定東西溝	奈良か	SD068	2
SD269	溝	南北溝	奈良か	SD069	2
SD270	溝	南北溝、SD260に続く	奈良か	SD070	2
SK273	土壙	長方形	奈良か	SK073	32
SK275	土壙	不整楕円形	奈良か	SK075	2
SD276	溝	西北一東南溝、方位N64°W	奈良か	SD075	2
SB277	掘立柱建物跡	南北棟（？×2間）、方位N13°W	奈良	SB077	27
SK279	土壙	隅丸長方形	奈良か	SK079	2
SK280	土壙	楕円形	奈良か	SK080	32
SD282	溝	不定東西溝	奈良か	SD082	2
SK283	土壙	楕円形	奈良か	SK097	2
SD285	溝	南北溝	奈良	SD085	2
SD286	溝	南北溝	奈良か	SD086	2
SD287	溝	南北溝、方位N76°E	奈良	SD087	2
SD288	溝	南北溝、方位N14°W、SD289との幅2.4m	奈良か	SD088	2
SD289	溝	南北溝	奈良か	SD089	2
SK290	土壙	方形	奈良か	SK090	32
SK291	土壙	不整楕円形	奈良か	SK091	2
SK293	土壙	長方形	奈良か	SK093	32
SD294	溝	南北溝、SD207に続く	奈良か	SK094	2
SB295	掘立柱建物跡	南北棟（3間×2間）、方位N13°W	奈良か	SB095	29
SK297	土壙	複数回掘込み	奈良	SK097	32
SK299	土壙	大形楕円形	奈良	SK099	30
SD300	溝	東西溝、方位N82°W	奈良か	SD100	2
SD301	溝	不定東西溝	平安	SD101	2
SD302	溝	東西溝、方位N81°E	奈良か	SD102	2
SD304	溝	方形区画溝、方位N76°E	奈良か	SD104	2
SB305	掘立柱建物跡	東西棟（2間×1間）、方位N52°E	奈良か	SB105	25
SX306	円形周溝状遺構	外径3.8m	弥生後期か	SX106	28
SB307	掘立柱建物跡	南北棟か（？×2間）、方位N14°E	奈良か	SB107	29
SE308	井戸	円形	奈良か	SE108	31
SE309	井戸	楕円形	奈良	SE109	31
SB310	掘立柱建物跡	東西棟（5間×2間）、方位N82°E	平安前期か	SB110	28
SA311	柱列	東西棟	平安前期か	SB111	28
SB312	竪穴住居跡	方形、隅のみ検出	平安前期か	SB112	2

遺構番号	種別	構造等	時代	旧番号	Fig.
SB313	柱列	6間、方位N82°E	奈良か	SB110	28
SD314	溝		奈良か	(SD048)	2
SK315	土壙	不整楕円形土壙	奈良か	(SK078)	2
SD316	溝	不整東西溝	奈良か		2
SD317	溝	西北－東南溝	奈良か		2

(3)　III区の遺構

弥生時代と奈良・平安時代の遺構が見られる。

弥生時代では後期前半～中頃を中心に、竪穴住居跡15棟・掘立柱建物跡2棟・円形周溝状遺構1基がある。竪穴住居跡は長方形プランを基本とし、ベット状遺構を付設するものが多い。調査区の中ではとくに明確な群は認められず、やや北側に寄って分布する。掘立柱建物跡は西部にあって、SB460が3間×2間で南北に長い長棟、SB455は2間×1間東西棟と見られる。

古墳時代については、竪穴住居跡等から7世紀に遡る須恵器も希に出土しているが、共伴遺物は8世紀であり、他に遺構が存在する可能性もあるが明らかではない。

奈良・平安時代では溝11条・竪穴住居跡11棟、掘立柱建物跡7棟、柱列1列・土壙20基がある。時期は奈良時代を中心とする。

溝はSD101がII区から直線的に伸び、東側で南に曲がる。方形区画溝SD304もII区から続いて東側で北に直角に曲がる。地割りに関係する直線溝は他にSD506東西溝とSD511南北溝が調査区の東側で交差するが方位は大きく西に傾き、他の地割り溝との関係は不明である。不定方向に走る小溝のうちでSD301はII区のSD208から続くものであろう。

掘立柱建物跡は2群に分かれる。一つは調査区の西北隅にあってSB499とSB450の2棟が東西に並び、その南面にSA452柱列をもつ。SD304区画溝に伴う建物遺構と考えられる。但し、SA452柱列は2棟の建物の南面だけで終わり、II区までは続かないようである。SB493は時期的にはこれと関係なく、SD304区画溝外に単独で位置する。もう1群は調査区中央の4棟で、4間×3間、3間×2間、2間×2間、1間×1間の各形態が見られる。いずれも南北棟で建物方位はSB490のみ真北にちかく、他は15°前後西に傾く。

土壙はII区と同様、数多く分布しており、その多くは奈良時代に属すと見られる。SK412・SK440・SK448は方形竪穴ともいえる形状をもち、またSK424・SK468・SK502は比較的整った大型の円形または楕円形の掘り込みである。長方形プランのSK443・SK445は土壙墓状であるが、副葬品等は一切なく、その可能性は少ないように思われる。東南部のSK475・SK484・SK513は何回も掘り込まれた結果形成された不整形の大型土壙で、廃棄壙として集中して掘られたものかと考えられる。但し、埋土中からの土器類の出土は少ない。

以上、Ⅲ区の遺構でもとくに注目されるのは、Ⅱ区東半から続く北辺のSD304区画溝とそれに伴うとみられる建物群の存在である。奈良時代における国府の出現と軌を一にする現象であり、官衙的あるいは在地豪族の居館的建物群、双方の可能性を考える必要があろう。但し、区画の中心部が今回の調査区から北側に外れており、将来の調査を待ってその性格が明らかになることを期待する。

Tab.3　西山田三本松B遺跡Ⅲ区遺構一覧表　※「旧番号」は調査時の遺構番号、（　）はBOX工事区

遺構番号	種別	構造等	時代	旧番号	Fig.
SD304	溝	方形区画溝、方位N76°W、鉄器出土	奈良～平安	SD001	2
SB402	竪穴住居跡	長方形東西棟	弥生後期	SB002	9
SB403	竪穴住居跡	方形	奈良か	SB003	9
SD101	溝	東西溝	奈良～平安	SD004	2
SB405	竪穴住居跡	方形、鉄鎌出土	奈良	SB005	35
SB406	竪穴住居跡	長方形南北棟	弥生後期	SB006	13
SB407	竪穴住居跡	方形	弥生後期	SB007	13
SB408	竪穴住居跡	方形	奈良	SB008	35
SK410	土壙	楕円形、鉄滓出土	奈良か	SK010	2
SK411	土壙	楕円形、ふいご羽口・鉄滓出土	奈良	SK011	2
SK412	土壙	方形、刀子・釘出土	奈良	SK012	2
SB413	竪穴住居跡	長方形東西棟	奈良	SB013	2
SK414	土壙	不整楕円形	奈良か	SK014	2
SB416	竪穴住居跡	長方形南北棟	奈良か	SB016	2
SB417	竪穴住居跡	方形	弥生後期	SB017	15
SB418	竪穴住居跡	方形	弥生後期	SB018	2
SB419	竪穴住居跡	長方形南北棟	弥生後期	SB019	10
SB421	竪穴住居跡	方形	弥生後期	SB021·SB22	2
SK423	土壙	隅丸長方形	奈良か	SK023	2
SK424	土壙	楕円形、鉄滓出土	奈良	SK024	41
SB425	竪穴住居跡	方形	弥生後期	SB025	11
SB426	竪穴住居跡	長方形、鉄滓・粘土塊出土	奈良	SB026	36
SK427	土壙	不整形	奈良	SK027	41
SD428	溝	不定南北溝	奈良	SD028	2
SB429	竪穴住居跡	方形、鉄滓・粘土塊出土	奈良	SB029	37
SB431	竪穴住居跡	方形、鉄滓出土	奈良	SB031	34
SX432	円形周溝状遺構	一部残、推定外長径約4m	弥生後期	SB032	16
SB433	竪穴住居跡	長方形東西棟	弥生後期	SB033·SB34	10
SD435	溝	不定南北溝	奈良か	SD035	2
SK436	土壙	隅丸長方形	奈良か	SK036	41
SB437	竪穴住居跡	方形	奈良か	SB037	34

遺構番号	種別	構造等	時代	旧番号	Fig.
SB438	竪穴住居跡	長方形東西棟	弥生後期か	SB038	2
SK439	土壙	円形	奈良か	SK039	42
SK440	土壙	方形	奈良	SK040	42
SK441	土壙	楕円形	奈良か	SK041	2
SB442	竪穴住居跡	長方形東西棟	弥生後期	SB042	11
SK443	土壙	長方形	奈良か	SK343	2
SB444	竪穴住居跡	長方形南北棟、鉄滓・鉄片・銅片出土	奈良	SB044	36
SK445	土壙	長方形	奈良か	SK045	2
SK448	土壙	方形	奈良	SK048	2
SB449	掘立柱建物跡	東西棟（4間×2間か）、方位N80°E	奈良か	SB049	2
SB450	掘立柱建物跡	東西棟（4間×2間か）、方位N82°E	奈良か	SB050	2
SA452	柱列	12間か。西半N82°E、東半N86°E	奈良か	SB052	2
SK454	土壙	楕円形	奈良	SK054	42
SB455	掘立柱建物跡	東西棟（2間×？）か、方位N79°E	弥生後期	SB055	14
SB458	竪穴住居跡	長方形東西棟	弥生後期	SB058	2
SB459	掘立柱建物跡	南北棟（4間×3間）、方位N9°W	奈良か	SB059	38
SB460	掘立柱建物跡	南北棟（3間×1間）、方位N19°W	弥生後期	SB046	14
SB462	竪穴住居跡	方形	弥生後期	SB062	12
SD464	溝	東西溝	奈良か	SD064	2
SD301	溝	不定東西溝	奈良か	SD065、?	2
SB466	竪穴住居跡	長方形南北棟	弥生後期か	SB066	11
SK468	土壙	円形	奈良か	SK068	42
SB470	掘立柱建物跡	南北棟（2間×2間）、方位N8°W	奈良か	SB070	39
SB471	掘立柱建物跡	南北棟（1間×1間）、方位N9°W	奈良か	SB071	39
SB472	竪穴住居跡	方形、鉄滓出土	奈良	SB072	2
SB473	竪穴住居跡	方形	奈良か	SB073	2
SK475	土壙	不整楕円形、鉄片出土	奈良	SK075~SK83	43
SK484	土壙	不整円形	奈良	SK084	43
SB490	掘立柱建物跡	南北棟（3間×2間）、方位N4°W	奈良か		2
SD491	溝	東西溝	奈良か		2
SD492	溝	東西溝	奈良か		2
SB493	掘立柱建物跡	南北棟（1間×1間）、方位N24°W	奈良か		2
SB501	竪穴住居跡	長方形東西棟	弥生後期	(SK001)	12
SK502	土壙	楕円形	奈良か	(SK002)	42
SK505	土壙	円形	奈良か	(SK005)	2
SD506	溝	東西溝、方位N74°E	奈良か	(SD006~08)	2
SD511	溝	南北溝、方位方位N19°W	奈良か	(SD011)	2
SB512	竪穴住居跡	長方形東西棟	弥生後期か	(SB012)	13
SK513	土壙	複数回掘り込み	奈良か		2
SD519	溝	南北溝	奈良か		2

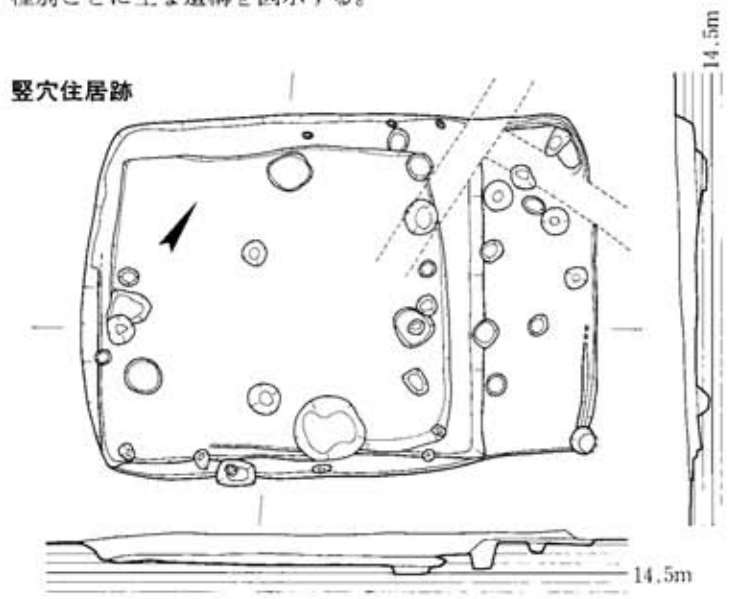
II　遺　構

1．弥生時代

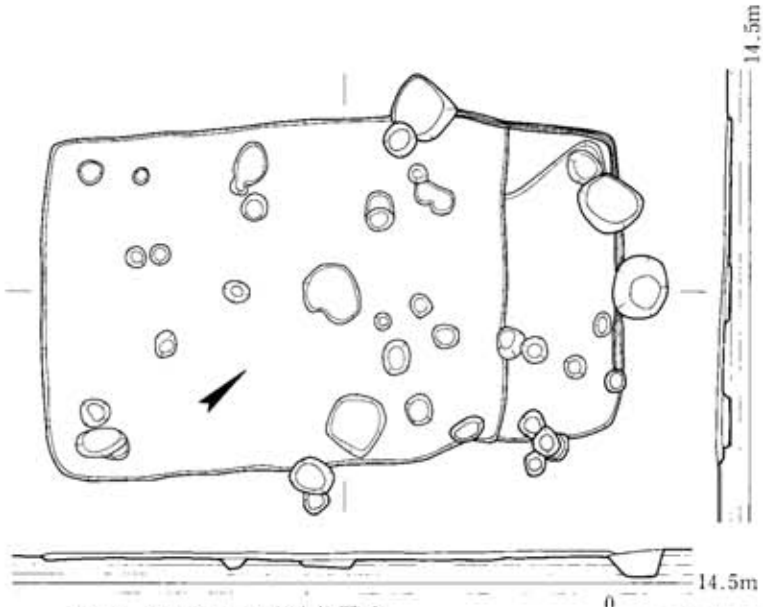
(1)　I区の遺構

弥生後期後半を中心として、竪穴住居跡14棟・掘立柱建物跡５棟、円形土壙１基がある。以下、種別ごとに主な遺構を図示する。

a．竪穴住居跡



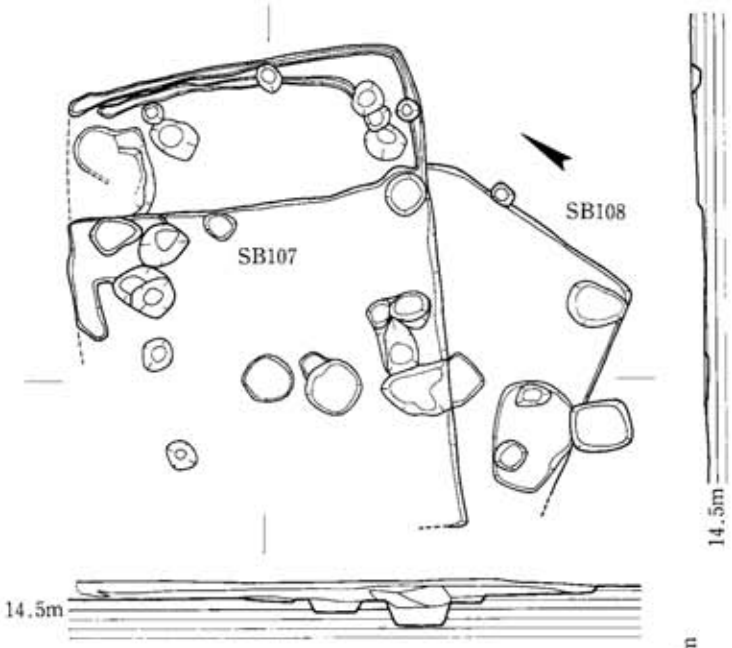
SB104竪穴住居跡
形態　長方形
規模　5.40m×3.84m
特徴　４辺を拡張し、東側にベット状遺構付設。東壁から南壁際に一部周溝を巡らす。南壁中央の掘り込みは入口部施設か。柱穴不明。



SB105竪穴住居跡
形態　長方形
規模　6.10m×3.66m
特徴　東北側にベット状遺構付設。東北壁から北隅壁際に一部周溝を巡らす。中央に円形炉。柱穴不明。

0　4m

Fig. 3　SB104・105竪穴住居跡

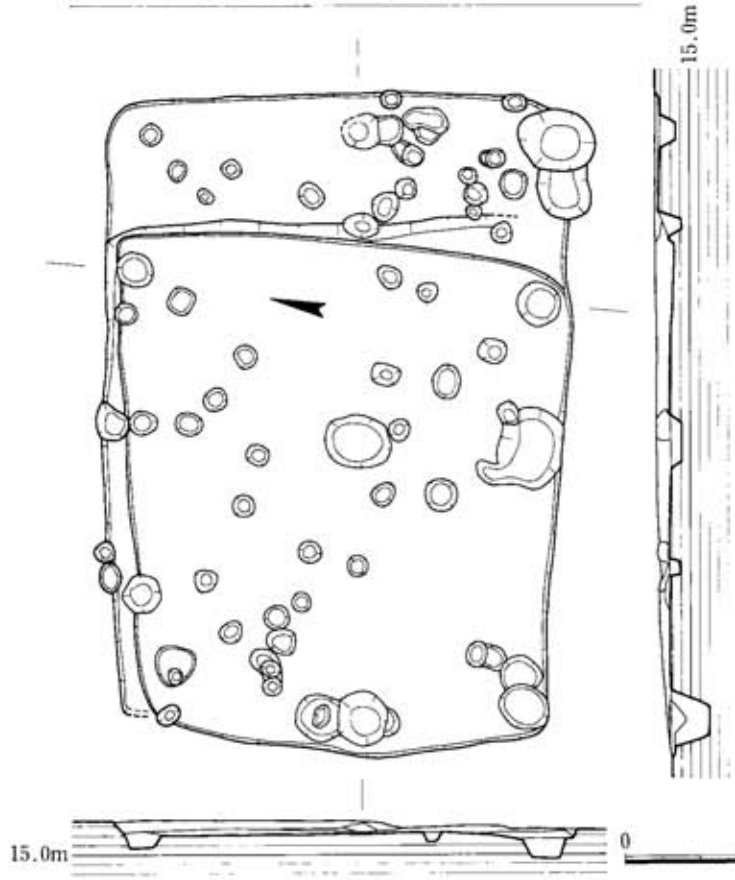


SB107竪穴住居跡

形態　長方形
規模　約5.2m×3.86m
特徴　東北側にベット状遺構を付設し、周溝を巡らす。中央に円形炉。南壁中央の掘り込みは入口部施設か。柱穴不明。SB108竪穴住居を切る。

SB108竪穴住居跡

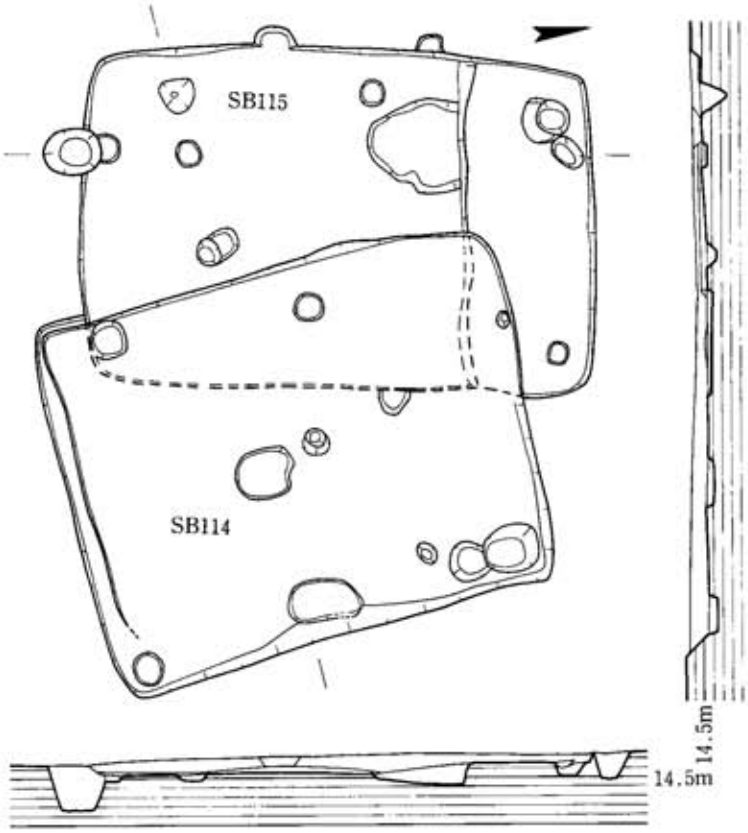
形態　長方形か
規模　不明
特徴　北側の大部分をSB007竪穴住居に切られ、詳細不明。



SB111竪穴住居跡

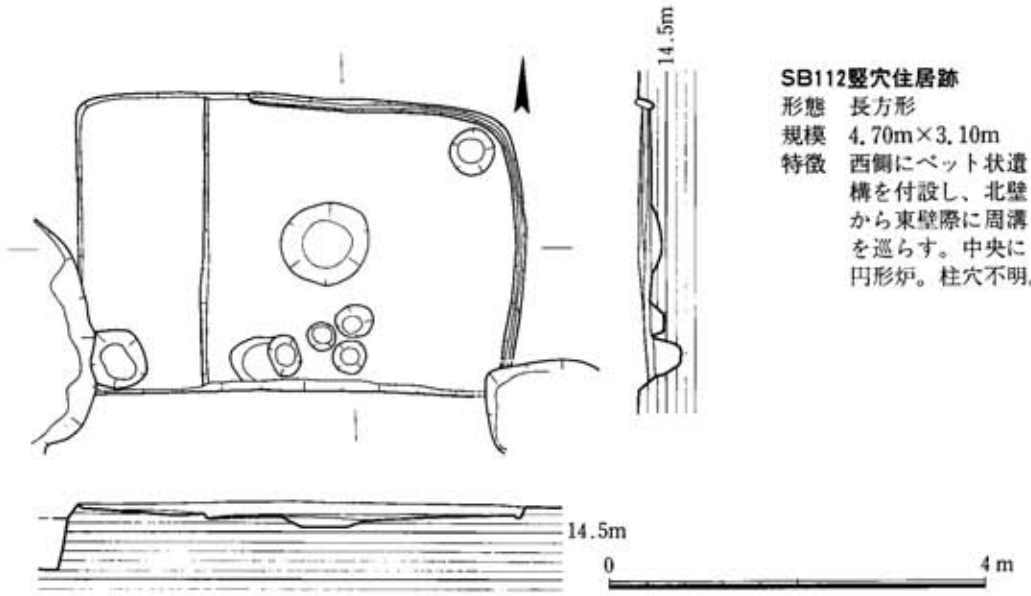
形態　長方形
規模　7.00m×4.90m
特徴　東側にベット状遺構を付設。中央に円形炉。南壁中央の掘り込みは入口部施設か。柱穴不明。

Fig. 4　SB107・108・111竪穴住居跡



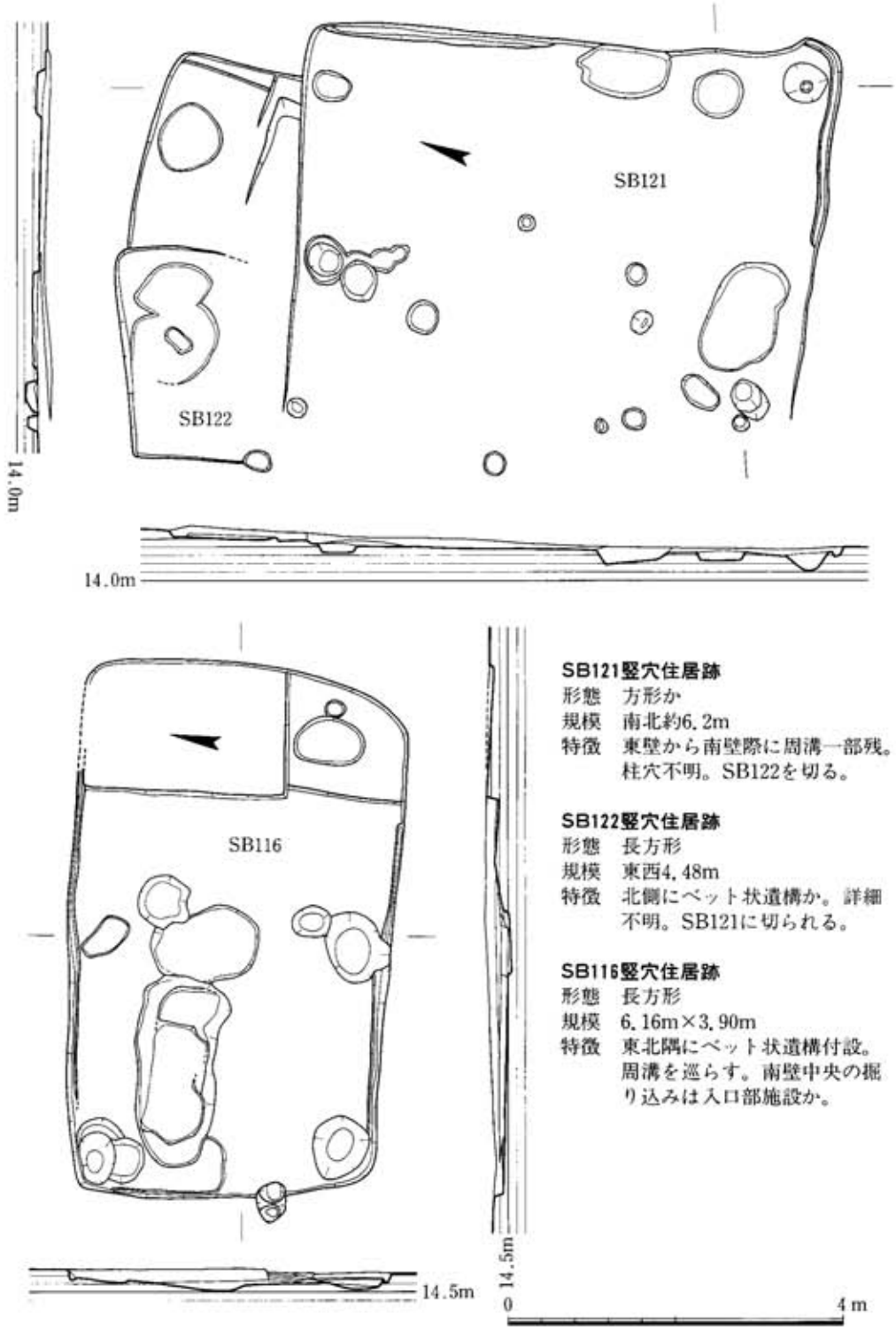
SB114竪穴住居跡
形態　長方形
規模　4.82m×3.96m
特徴　南側壁際に周溝を巡らす。中央に円形炉。南壁中央の掘り込みは入口部施設か。柱穴不明。

SB115竪穴住居跡
形態　長方形
規模　5.42m×3.40m
特徴　北側にベット状遺構付設。柱穴不明。東側をSB114に切られる。



SB112竪穴住居跡
形態　長方形
規模　4.70m×3.10m
特徴　西側にベット状遺構を付設し、北壁から東壁際に周溝を巡らす。中央に円形炉。柱穴不明。

Fig. 5　SB114・115・112竪穴住居跡

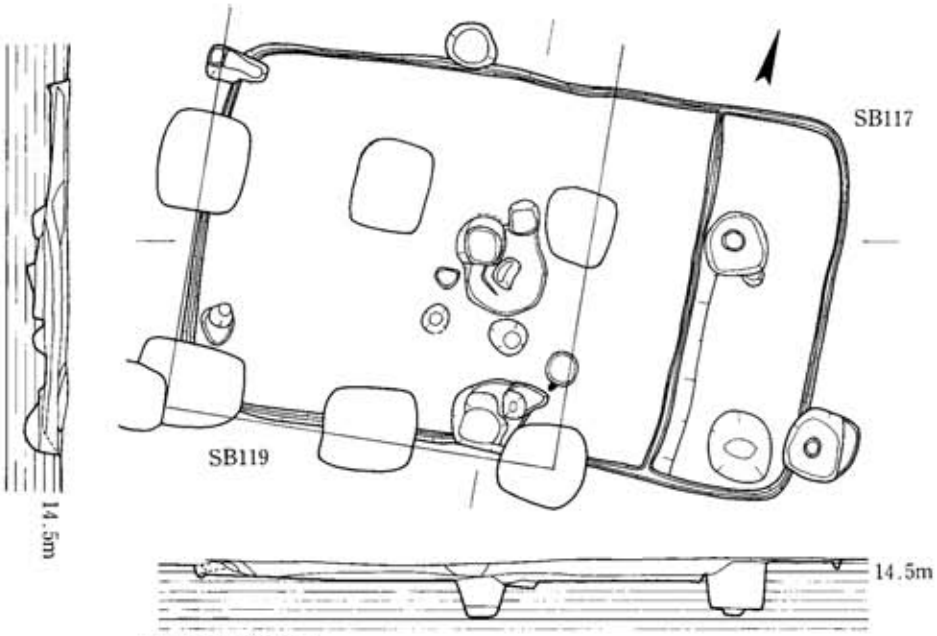


SB121竪穴住居跡
形態　方形か
規模　南北約6.2m
特徴　東壁から南壁際に周溝一部残。柱穴不明。SB122を切る。

SB122竪穴住居跡
形態　長方形
規模　東西4.48m
特徴　北側にベット状遺構か。詳細不明。SB121に切られる。

SB116竪穴住居跡
形態　長方形
規模　6.16m×3.90m
特徴　東北隅にベット状遺構付設。周溝を巡らす。南壁中央の掘り込みは入口部施設か。

Fig. 6　SB121・122・116竪穴住居跡



SB117竪穴住居跡

形態　長方形
規模　6.76m×4.00m
特徴　東側にベット状遺構。中央に円形炉あり。周溝を巡らす。南壁中央の掘り込みは入口部施設か。上面を奈良時代のSB117・SB119に切られる。

Fig. 7　SB117竪穴住居跡

SB102掘立柱建物跡

形態　2間×1間南北棟
方位　N21°W
規模　4.98m×3.76m
特徴　大形建物跡。柱掘形は2段長方形。柱根径約25cm。東南側柱穴が一部SB130掘立柱建物の柱穴を切る。

B103掘立柱建物跡

形態　2間×1間東南一西北棟
方位　N50°W
規模　4.04m×2.56m
特徴　柱掘形は不整方形または円形。北隅柱をSD101溝に切られる。

SB130掘立柱建物跡

形態　2間×1間南北棟
方位　N3°W
規模　3.24m×2.73m
特徴　柱掘形は基本的に2段長方形か。柱根径不明。西北側柱穴が一部SB102掘立柱建物の柱穴に切られる。

SB131掘立柱建物跡

形態　2間×1間東南一西北棟
方位　N29°W
規模　3.40m×2.82m
特徴　柱掘形は方形または円形。北西隅柱を荒らされている。SB106竪穴住居との切り合い関係不明。

b．掘立柱建物跡

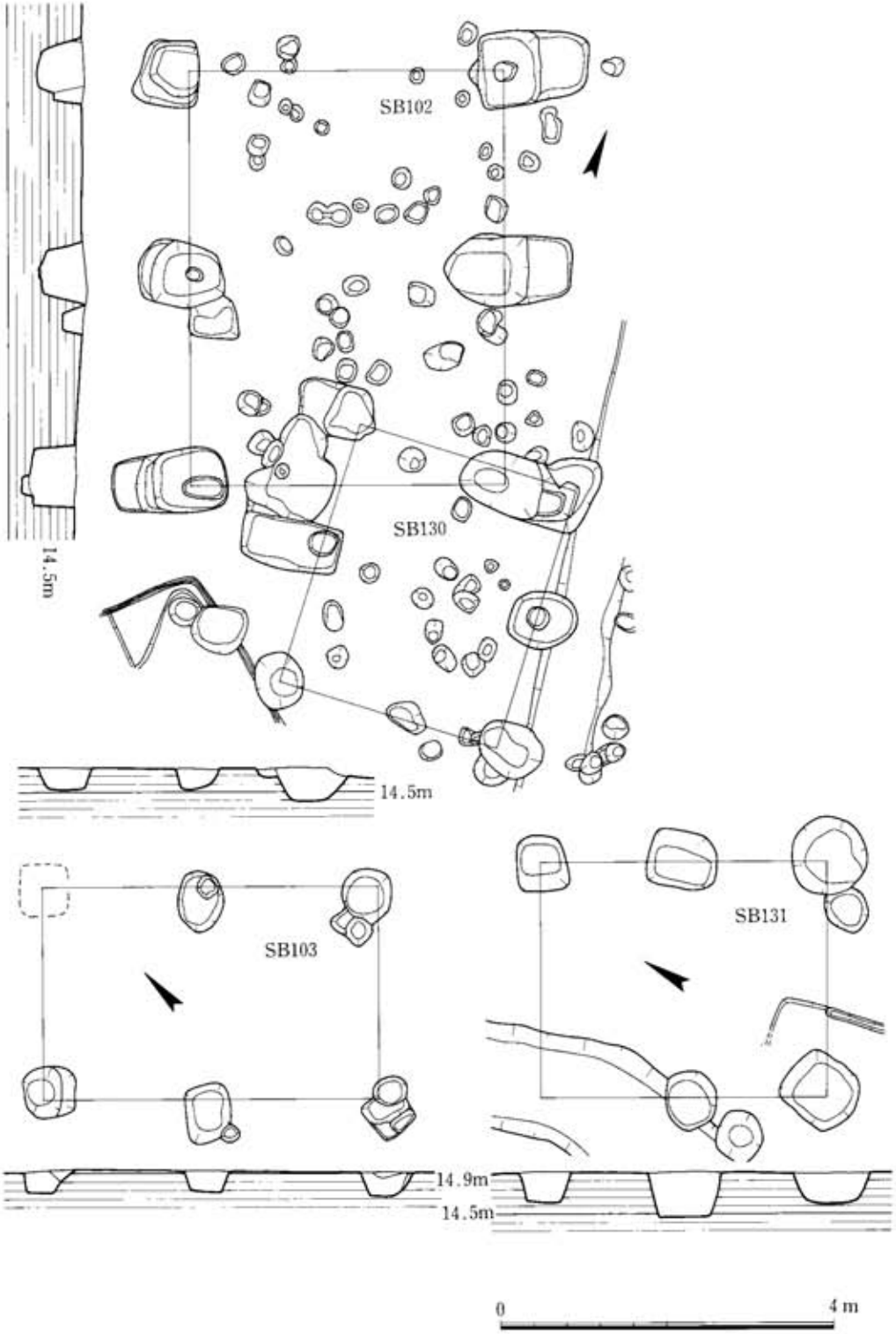
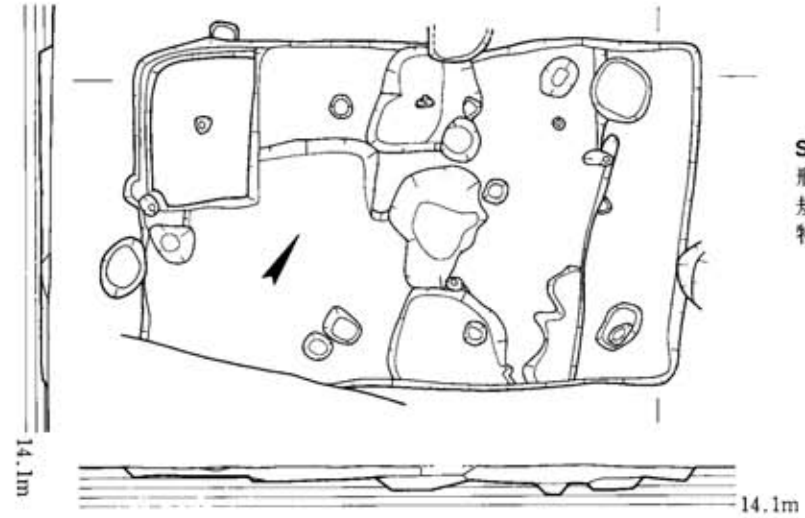


Fig. 8　SB102・130・103・131掘立柱建物跡

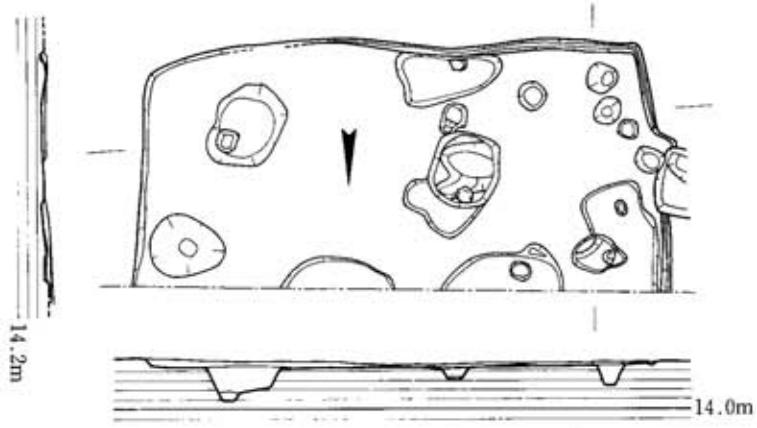
(2) Ⅲ区の遺構

弥生時代では後期後半を中心に、竪穴住居跡15棟・掘立柱建物跡２棟・円形周溝状遺構１基がある。以下、種別ごとに主な遺構を図示する。

a．竪穴住居跡



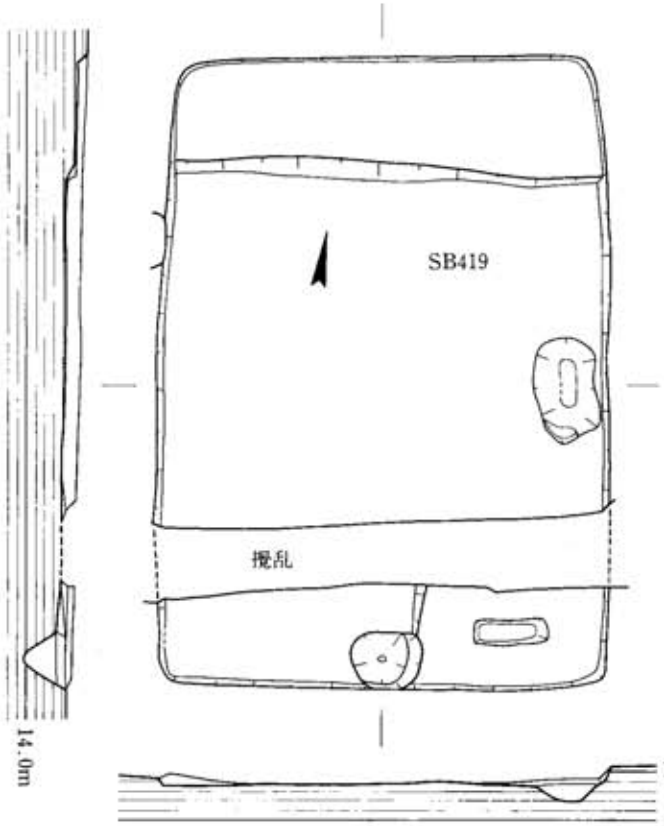
SB402竪穴住居跡
形態　長方形
規模　5.80m×3.64m
特徴　西隅と東北辺にベット状遺構付設。中央に不整形炉。西北壁際の掘り込みは入り口施設か。柱穴等不明。



SB403竪穴住居跡
形態　長方形か
規模　東西4.86m
特徴　西壁から南壁際に周溝が巡る。上面を奈良時代のSB449・SB450に切られる。北側は調査区外。

0　4m

Fig. 9　SB402・403竪穴住居跡



SB419竪穴住居跡

形態　長方形
規模　6.68m×4.78m
特徴　北側にベット状遺構付設。南壁際中央に円形掘り込みとその脇に浅い溝、東壁際に楕円形の入り口施設をもつ。南側をSD304に切られる。床面上から土器多数出土。

SB433竪穴住居跡

形態　長方形か
規模　東西約6.6m
特徴　西南隅にベット状遺構付設。中央に円形炉。北側に周溝を巡らす。西側から柱北側にかけての高まりは拡張の跡か。柱穴不明。北側をSD304に切られる。

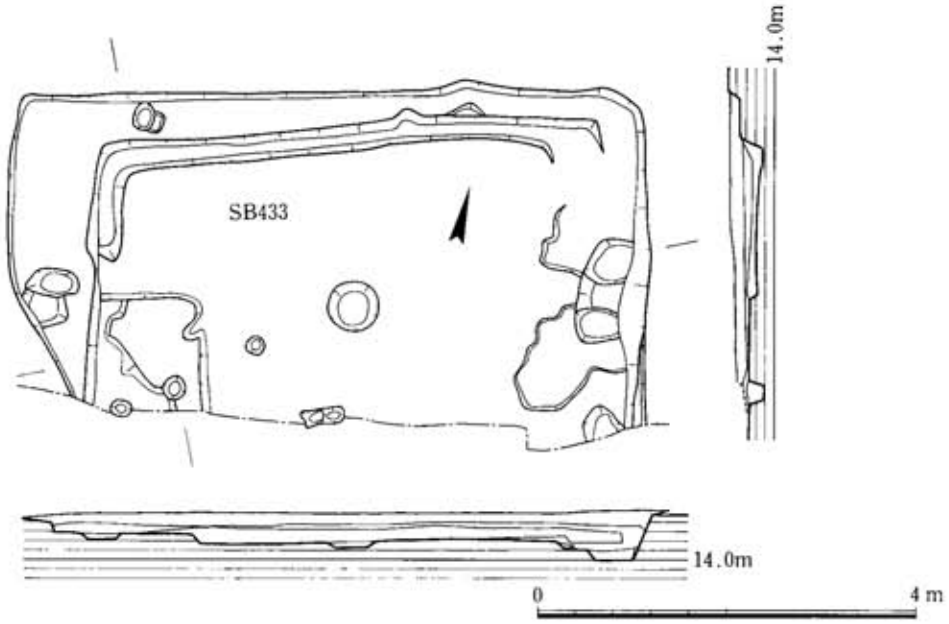
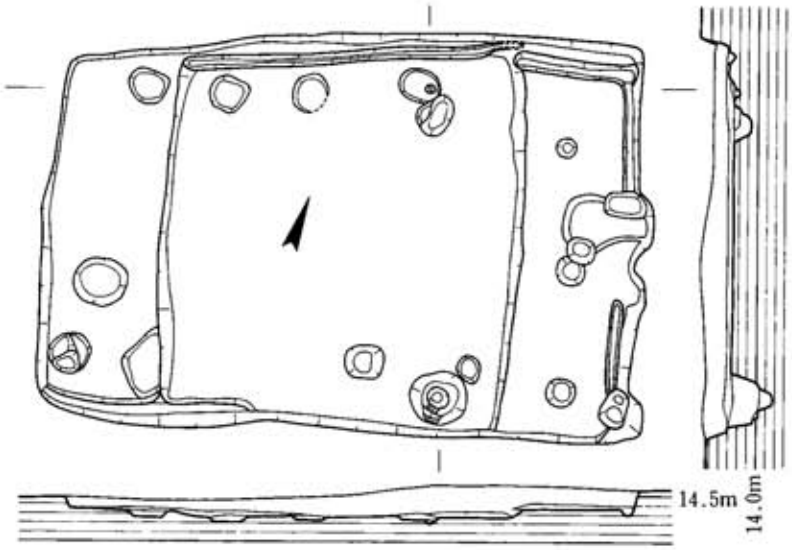
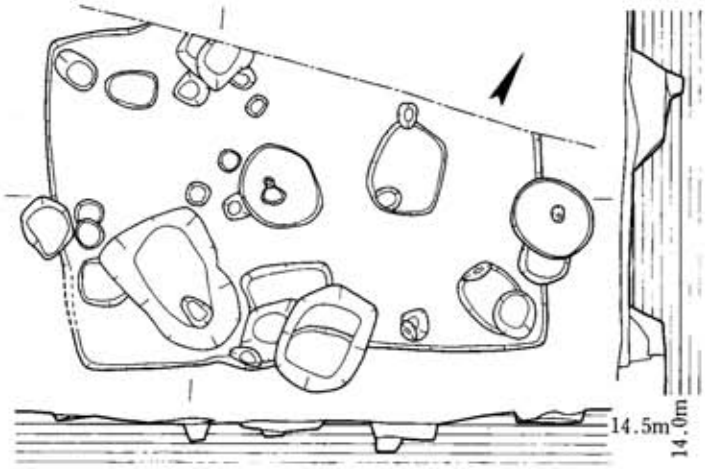


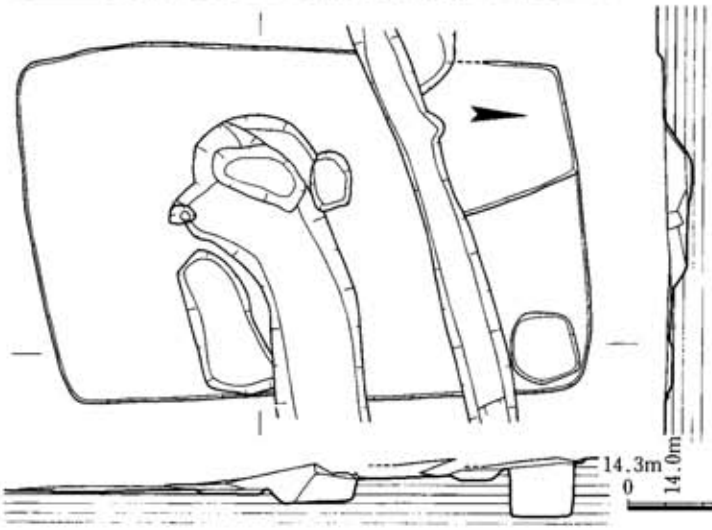
Fig. 10　SB419・433竪穴住居跡



SB425竪穴住居跡
形態　長方形
規模　6.28m×4.2m
特徴　東西両側にベット状遺構付設。東壁および北壁、南壁際の一部に周溝を巡らす。柱穴不明。北側をSD304に切られる。

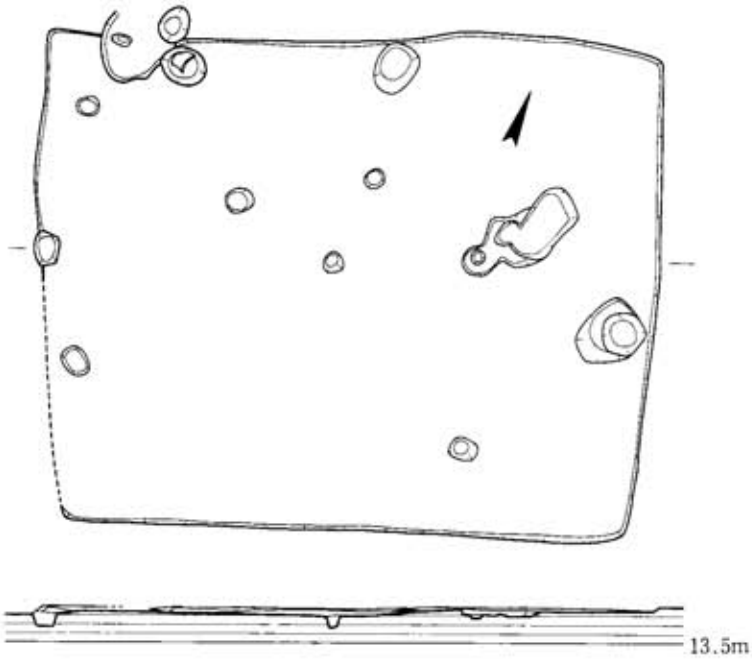


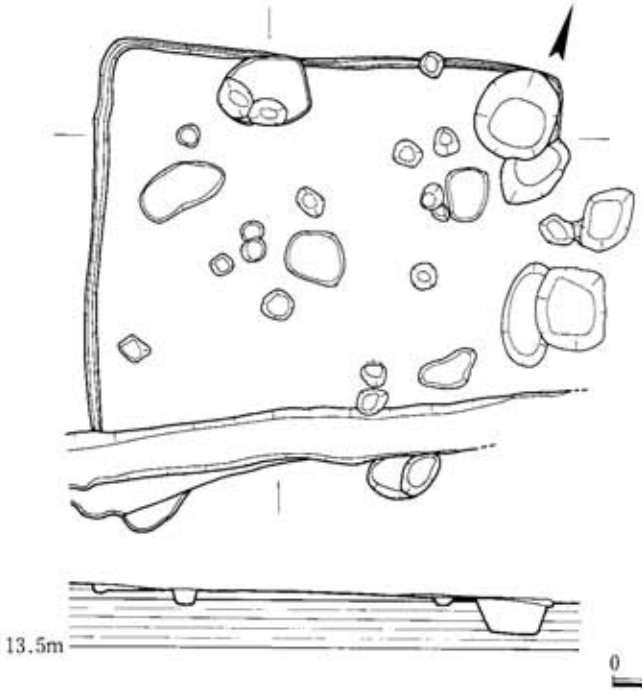
SB442竪穴住居跡
形態　長方形
規模　5.16m×約3.6m
特徴　床面は別時期の掘り込みれが多く、詳細不明。中央に円形炉。北側は調査区外、北西隅をSB342に切られる。



SB466竪穴住居跡
形態　長方形
規模　5.84m×3.72m
特徴　北側がベット状に高まり、東北隅に円形掘り込みをもつ。SD428溝とSD506溝に切られる。

Fig. 11　SB425・442・466竪穴住居跡

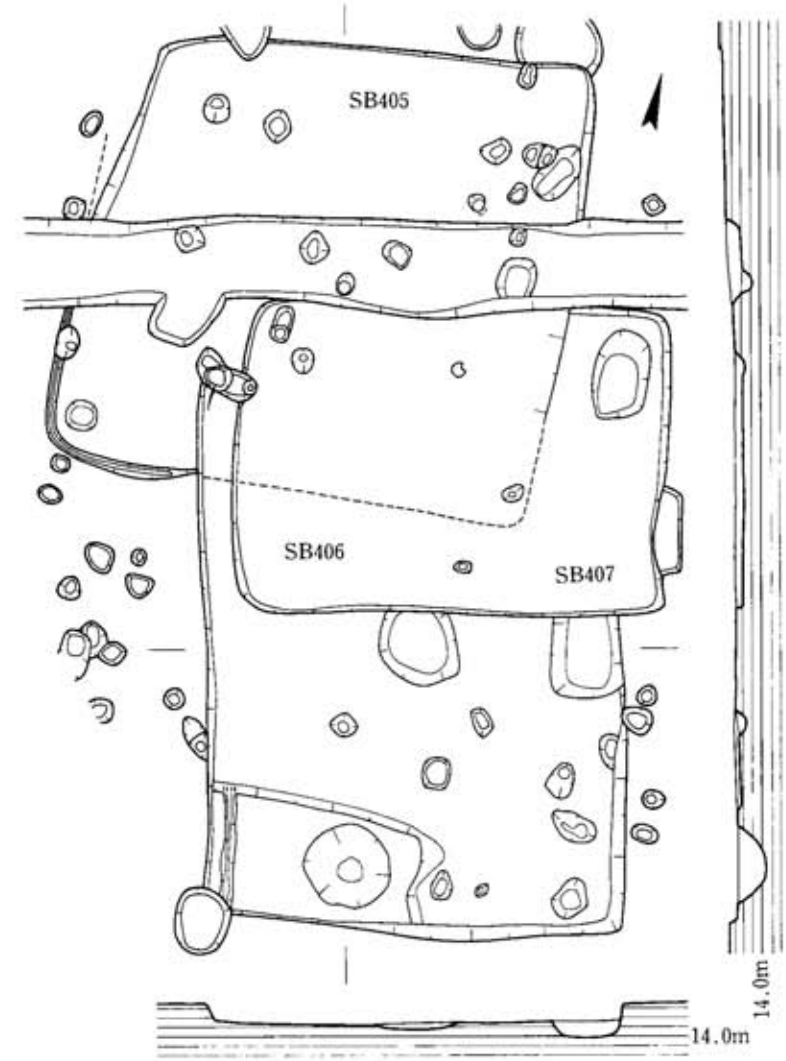




SB501竪穴住居跡
形態　長方形
規模　6.56m×5.12m
特徴　削平が著しく、柱穴等詳細不明。北側は調査区外。

SB462竪穴住居跡
形態　不明
規模　不明
特徴　削平が著しく、北辺および西辺の周溝でかろうじて住居跡とわかる。南側はSD301溝に切られる。

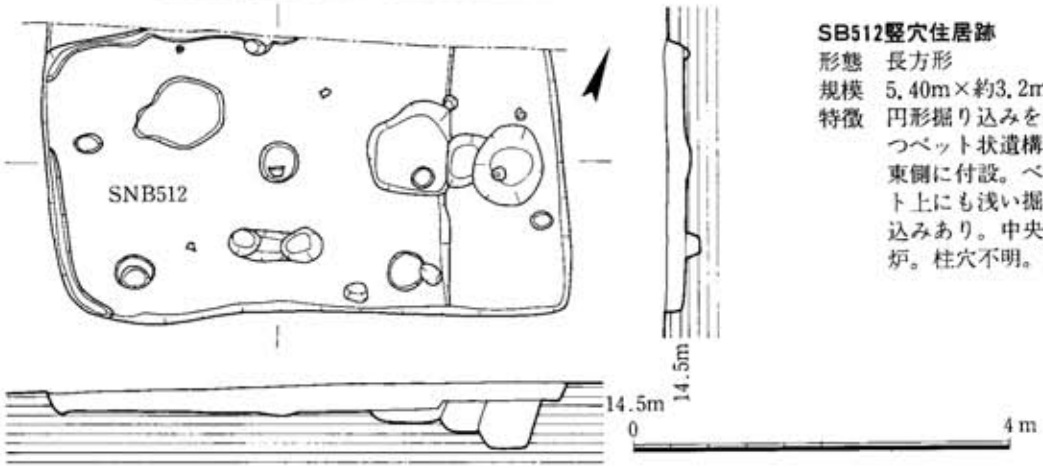
Fig. 12　SB501・462竪穴住居跡



SB405
（奈良時代）

SB406竪穴住居跡
形態　長方形
規模　4.52m×約3.2m
特徴　円形掘り込みをもつベット状遺構を西南隅に付設。中央に円形炉。東壁際の長方形掘り込みは入り口施設か。柱穴不明。SB406竪穴住居を切り、北側は奈良時代のSB405竪穴住居に切られる。

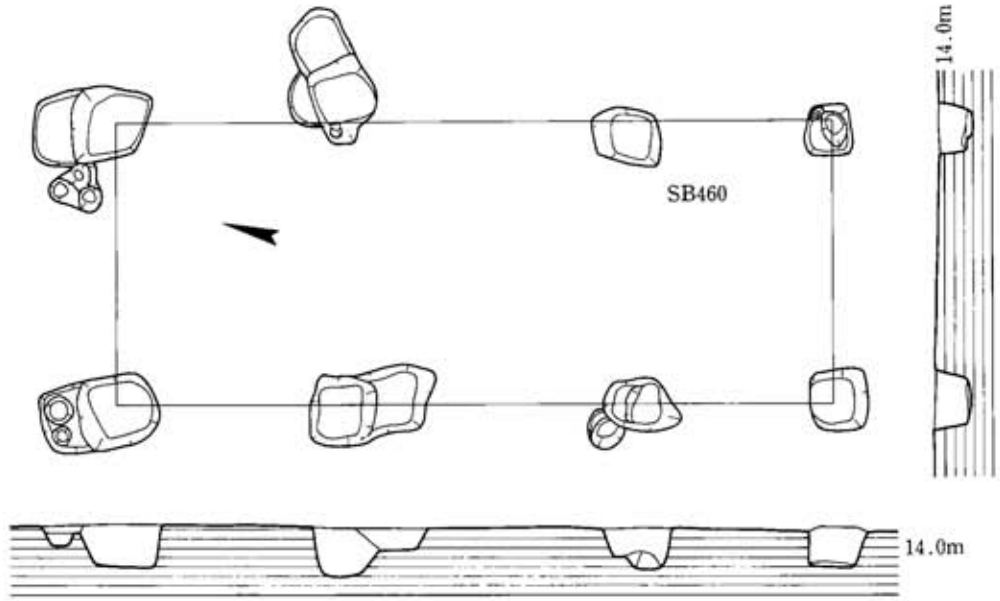
SB407竪穴住居跡
形態　長方形
規模　約6.6m×4.36m
特徴　東北隅に楕円形掘り込みをもつ。柱穴不明。SB407竪穴住居を切り、北側は奈良時代のSB405竪穴住居に切られる。

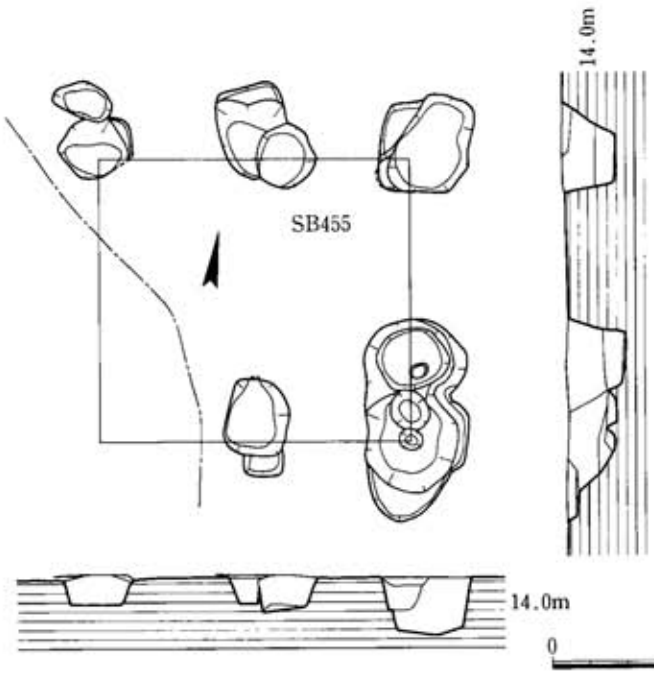


SB512竪穴住居跡
形態　長方形
規模　5.40m×約3.2m
特徴　円形掘り込みをもつベット状遺構を東側に付設。ベット上にも浅い掘り込みあり。中央に炉。柱穴不明。

Fig. 13　SB406・407・512竪穴住居跡

b．掘立柱建物跡

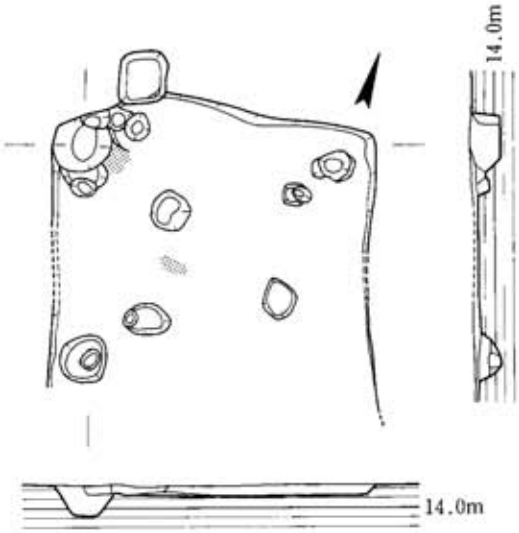




SB460掘立柱建物跡
形態　3間×1間南北棟
規模　7.60m×3.00m
方位　N19°W
特徴　柱掘形不揃いであるが、基本的に長方形2段か。柱根径約20cm。東桁行柱穴が奈良時代のSD301に切られる。

SB455掘立柱建物跡
形態　2間×1間東西棟
方位　N81°E
規模　3.30m×2.96m
特徴　西側は調査区外となるが東西2間か。柱掘形不揃いであるが、基本的に長方形と思われる。柱根径約30cm西南隅をSD301に切られる。

Fig. 14　SB460・455掘立柱建物跡



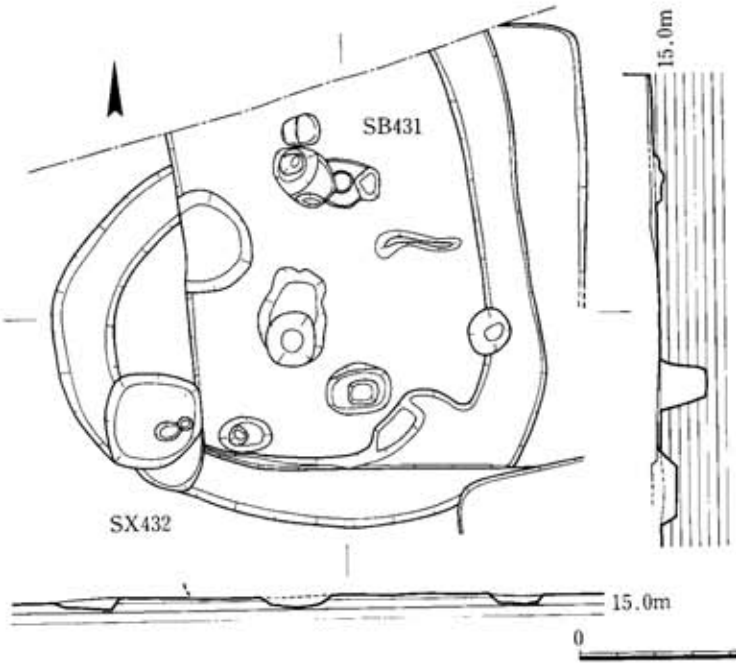
SB417竪穴住居跡

形態　方形
規模　東西3.3m
特徴　削平のため南壁不明。中央付近に焼土。柱穴は東南隅を除く3隅に残存。

0　4m

Fig. 15　SB417竪穴住居跡

c．周溝状遺構



SX432円形周溝

形態　不整楕円形
規模　東西外径約5.0m
特徴　東側の大部分がSB431竪穴住居に削られて残りが浅く形状不明確。東側が直線的に走るように見えるが、完周する可能性が高い。溝幅約0.6m。

0　4m

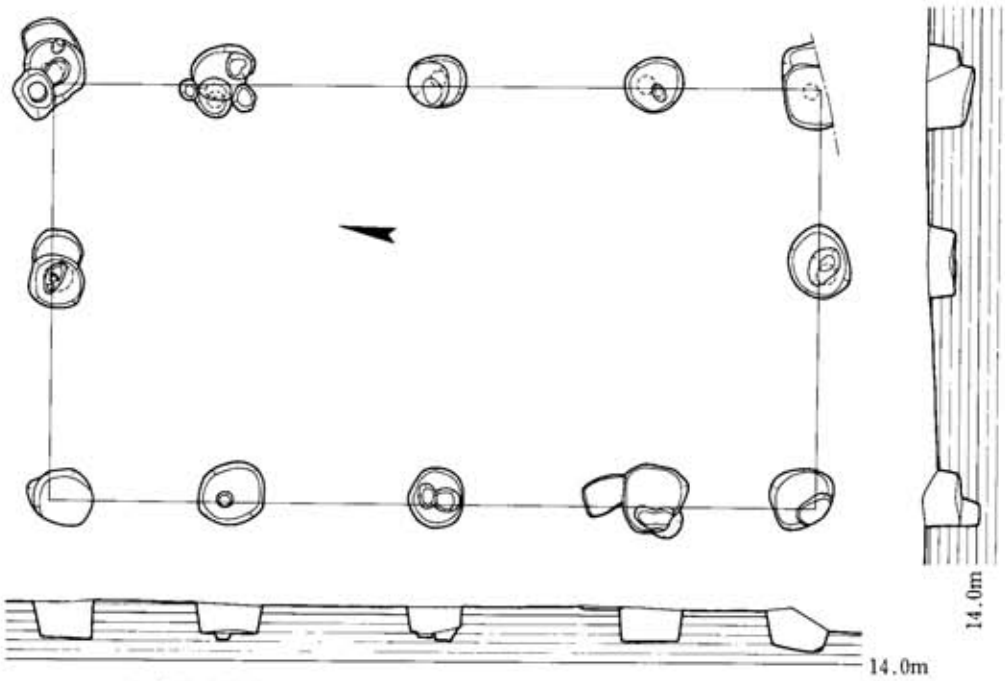
Fig. 16　SX432周溝状遺構

2．奈良・平安時代

(1)　I区の遺構

奈良・平安時代では溝4条と、掘立柱建物跡7棟がある。全体の遺構配置としては北辺をSD101溝が東西に走り、西をSD101に、北をSD109直線区画溝に囲まれてI区東南隅からII区西南隅にかけて掘立柱建物跡の一群がある。掘立柱建物跡群は、全体として軸が西に傾き比較的企画的な配置をとるかのように見えるが、方位の多少の違い及び切り合いから明らかな時期差が認められる。時期はSD101溝が鎌倉時代まで機能していたと推定されるが、掘立柱建遺跡群をはじめとするその他の遺構は主に奈良時代を中心とすると考えられる。

a．掘立柱建物跡



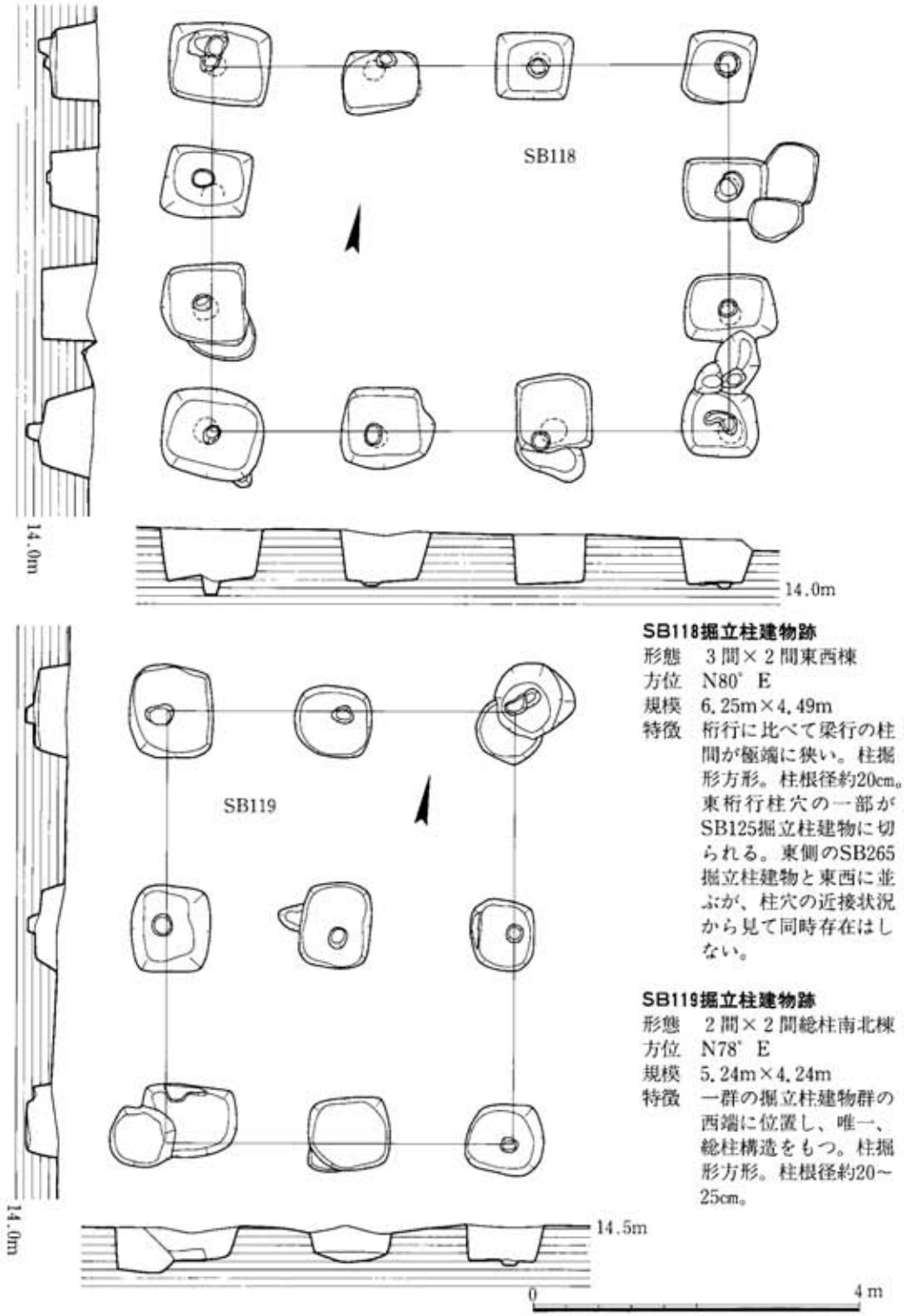
SB126掘立柱建物跡

形態　4間×2間両面廂南北棟
方位　N7°W
規模　8.10m×4.38m

特徴　柱間からみて南北両側には出6尺の廂が付くと思われる。柱掘形は円形、柱根径約20～25cm。東側桁行柱列がSB129掘立柱建物の柱穴を切る。

0　4m

Fig. 17　SB126掘立柱建物跡



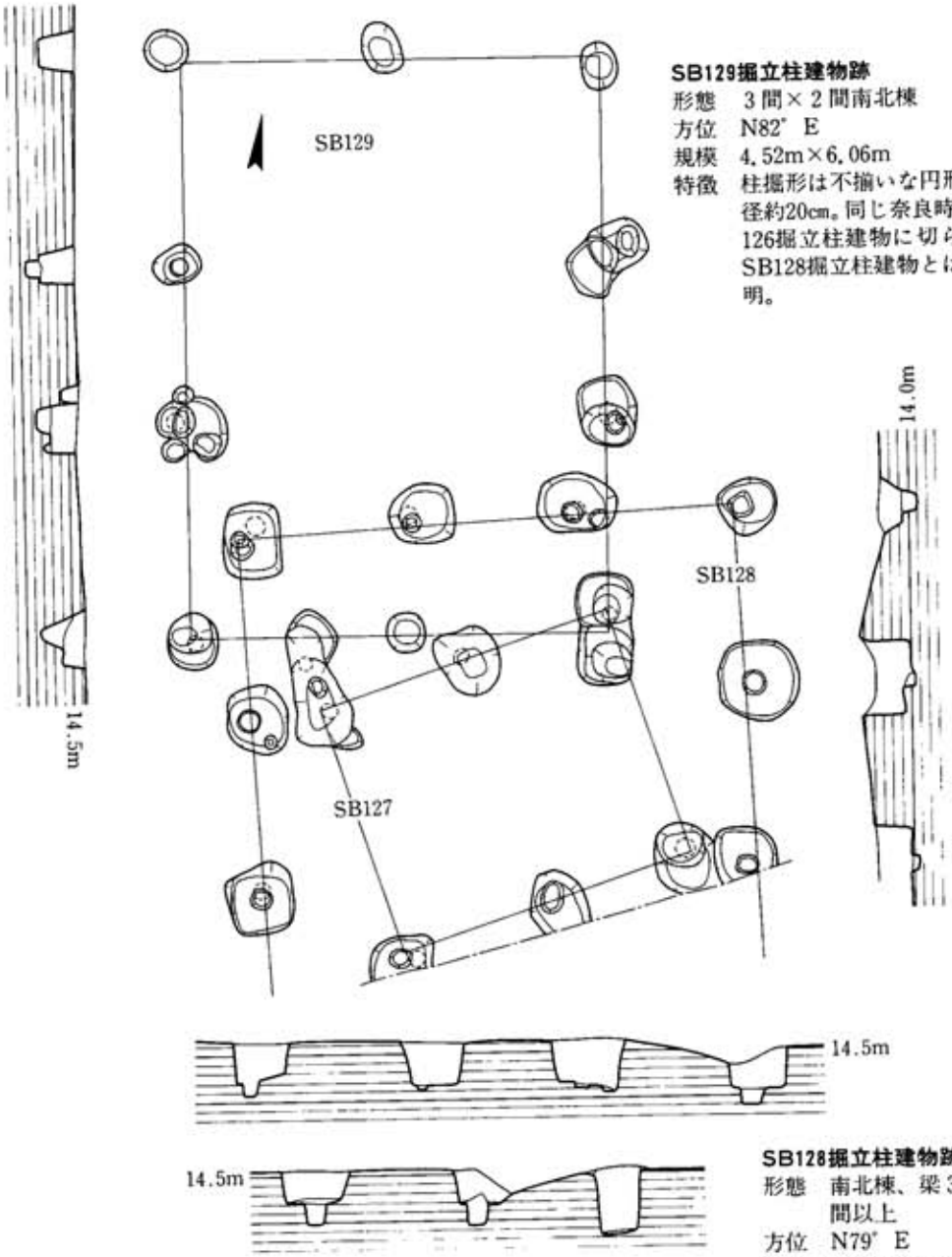
SB118掘立柱建物跡

形態　3間×2間東西棟
方位　N80°E
規模　6.25m×4.49m
特徴　桁行に比べて梁行の柱間が極端に狭い。柱掘形方形。柱根径約20cm。東桁行柱穴の一部がSB125掘立柱建物に切られる。東側のSB265掘立柱建物と東西に並ぶが、柱穴の近接状況から見て同時存在はしない。

SB119掘立柱建物跡

形態　2間×2間総柱南北棟
方位　N78°E
規模　5.24m×4.24m
特徴　一群の掘立柱建物群の西端に位置し、唯一、総柱構造をもつ。柱掘形方形。柱根径約20～25cm。

Fig. 18　SB118・119掘立柱建物跡



SB129掘立柱建物跡
形態　3間×2間南北棟
方位　N82° E
規模　4.52m×6.06m
特徴　柱掘形は不揃いな円形。柱根径約20cm。同じ奈良時代のSB126掘立柱建物に切られる。SB128掘立柱建物とは先後不明。

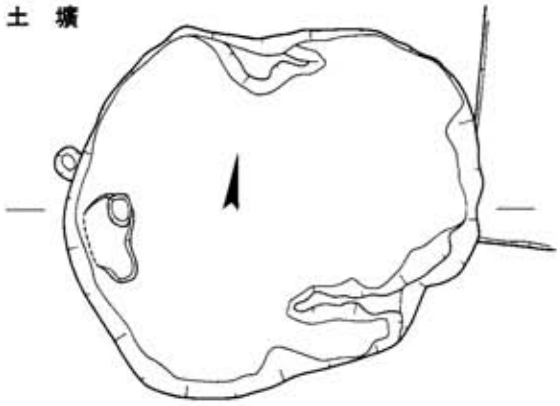
SB128掘立柱建物跡
形態　南北棟、梁3間×桁2間以上
方位　N79° E
規模　5.32m×3.84m
特徴　柱掘形は不揃いで方形または円形。柱根径約20cm。同じ奈良時代のSB129掘立柱建物と重複するが、先後不明。

SB127掘立柱建物跡
形態　2間×1間東西棟（弥生後期）
方位　N63° E
規模　3.27m×2.76m
特徴　柱掘形は円形または長方形2段掘り。柱根径約20cm。奈良時代のSB128掘立柱建物と重複し、柱穴の一部をSB129掘立柱建物柱穴に切られるcm。

0　4m

Fig. 19　SB127・128・129掘立柱建物跡

b．土　壙



SK113土壙
形態　円形
規模　径3.6～4.4m
特徴　やや不整形な円形で、壙底は平坦。貯蔵用竪穴か。

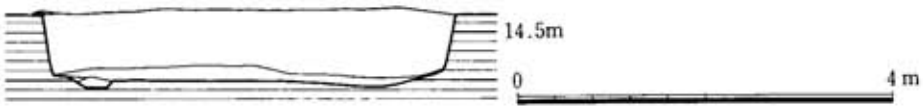


Fig. 20　SK113土壙

c．溝

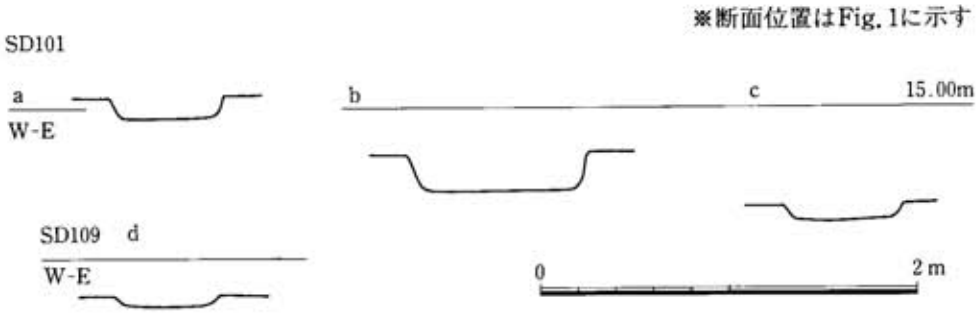
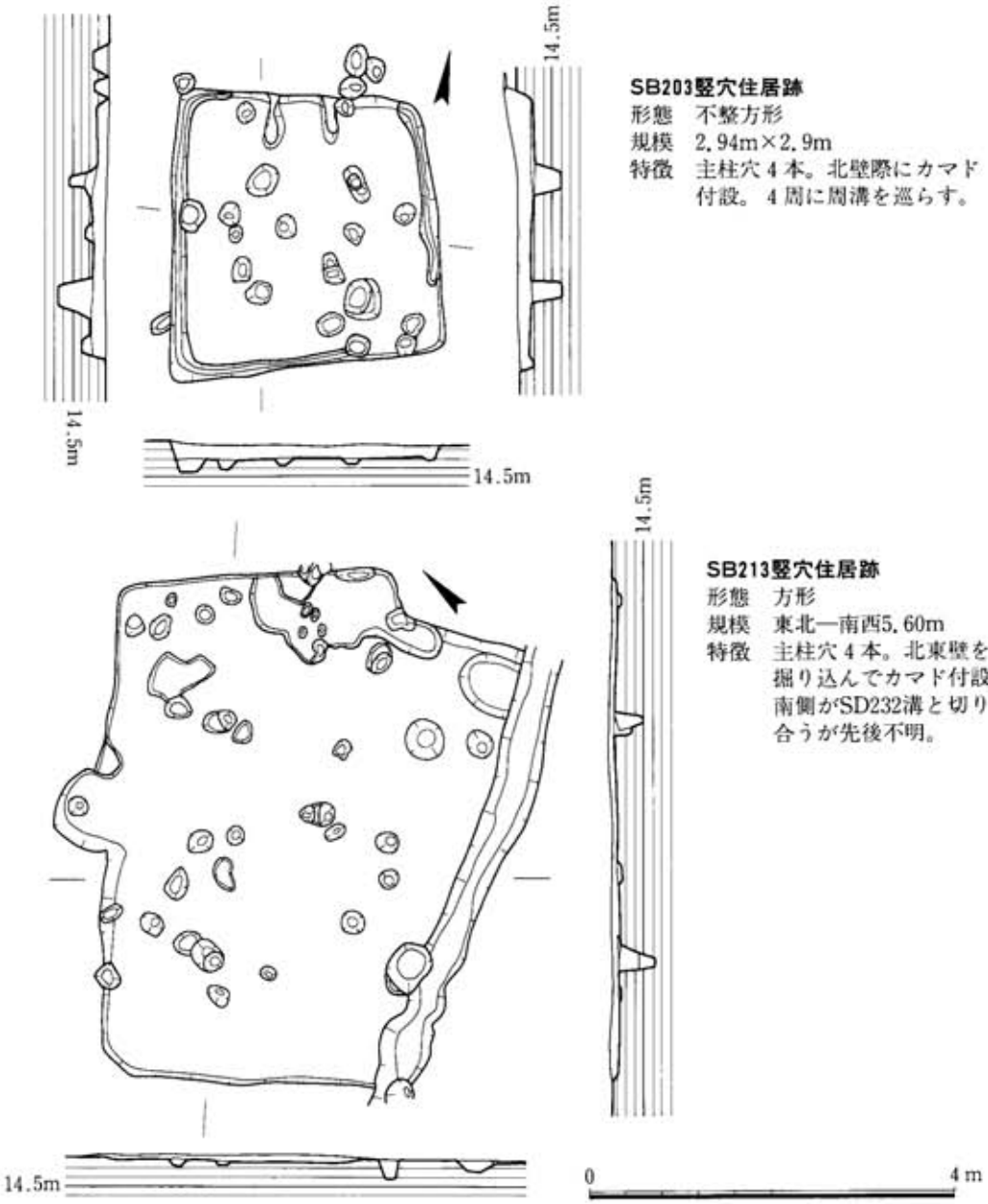


Fig. 21　I区溝断面図

(2)　II区の遺構

奈良・平安時代では、溝35条、掘立柱建物跡8棟、柱列2列、竪穴住居跡7棟、井戸跡2基、土壙1基がある。主な遺構としては、西南隅にI区から続く掘立柱建物跡の一群があってその東方は両側にSD206とSD207溝をもつ道で区画される。また、北東辺には屋敷地割り状の区画溝があって、この溝と切り合い、柱列で囲まれた大形掘立柱建物跡がある。竪穴住居跡は全体として調査区の中央付近に分布する。これらの建物跡及び区画溝の時期は奈良時代を中心とする。

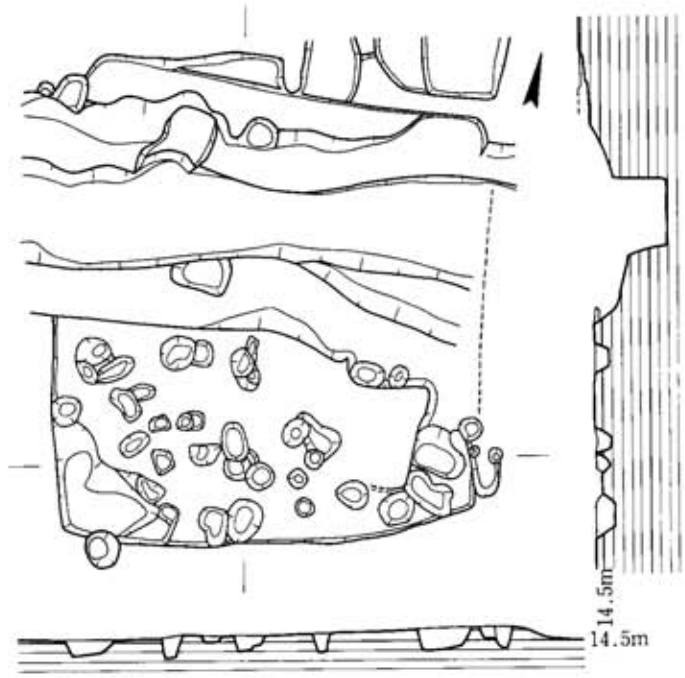
a．竪穴住居跡



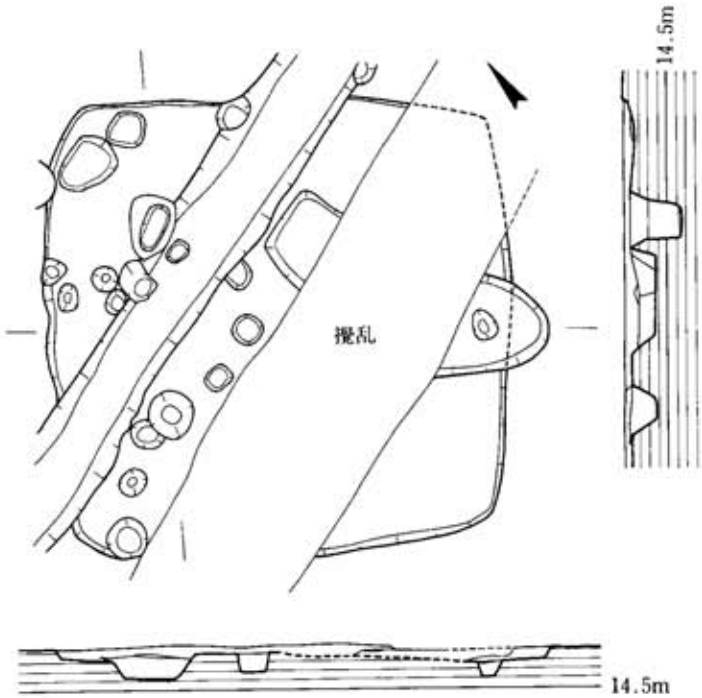
SB203竪穴住居跡
形態　不整方形
規模　2.94m×2.9m
特徴　主柱穴４本。北壁際にカマド付設。４周に周溝を巡らす。

SB213竪穴住居跡
形態　方形
規模　東北―南西5.60m
特徴　主柱穴４本。北東壁を掘り込んでカマド付設。南側がSD232溝と切り合うが先後不明。

Fig. 22　SB203・213竪穴住居跡



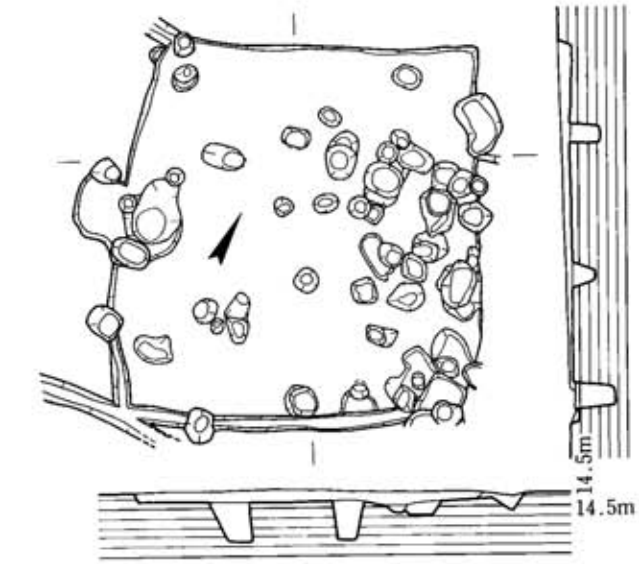
SB216竪穴住居跡
形態　方形
規模　5.16m×約4.6m
特徴　削平が著しく、床面の状況不祥。SD101溝に切られる。



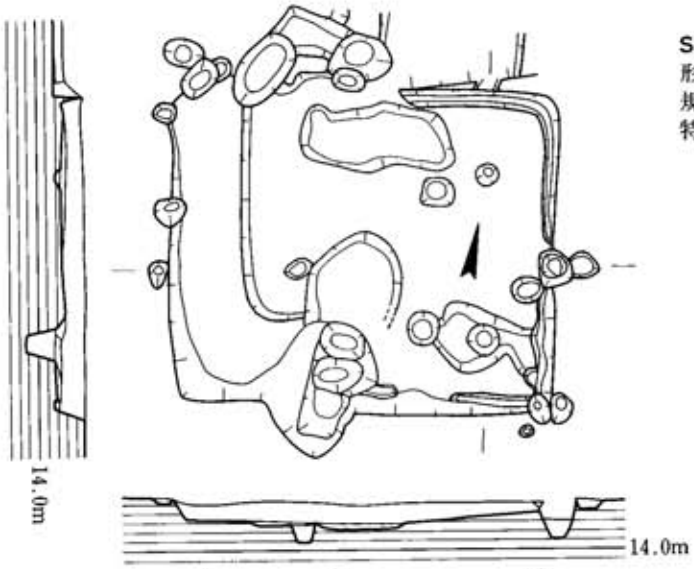
SB247竪穴住居跡
形態　方形
規模　4.86m×4.8m
特徴　主柱穴は4本と思われるが撹乱が著しく、床面の状況不祥。SD304に切られる。

0　4m

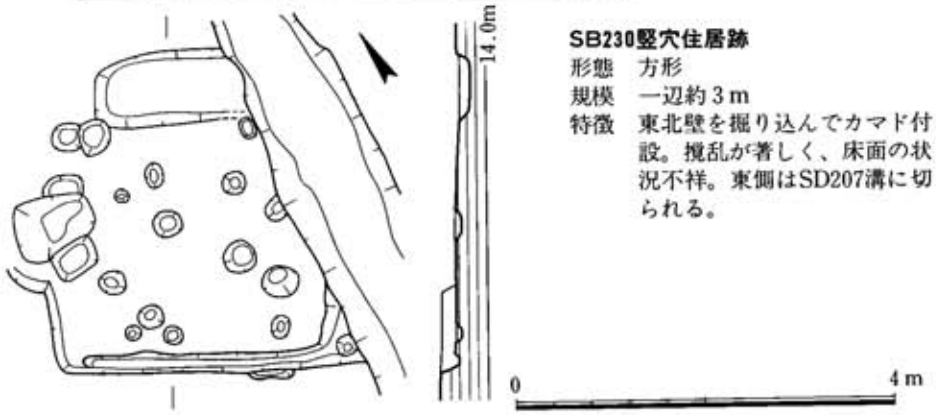
Fig. 23　SB216・247竪穴住居跡



SB217竪穴住居跡
形態　方形
規模　4.06m×3.86m
特徴　主柱穴4本か。撹乱が著しく、床面の状況不祥。



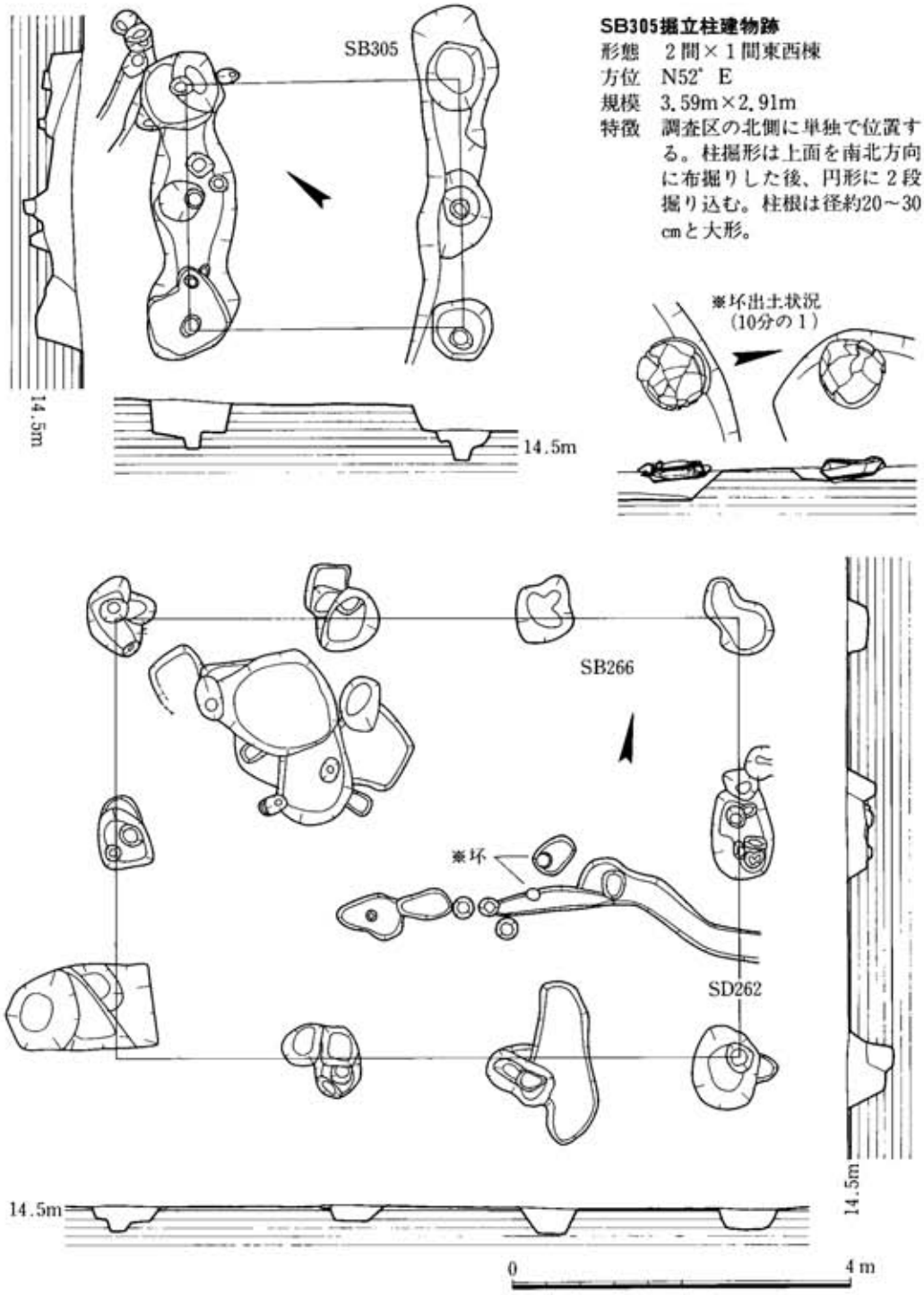
SB229竪穴住居跡
形態　方形
規模　4.04m×3.44m
特徴　東北壁中央にカマド付設。削平が著しく、床面の状況不祥。西北隅がSB267掘立柱建物柱穴と切り合うが、先後不明。



SB230竪穴住居跡
形態　方形
規模　一辺約3m
特徴　東北壁を掘り込んでカマド付設。撹乱が著しく、床面の状況不祥。東側はSD207溝に切られる。

Fig. 24　SB217・229・230竪穴住居跡

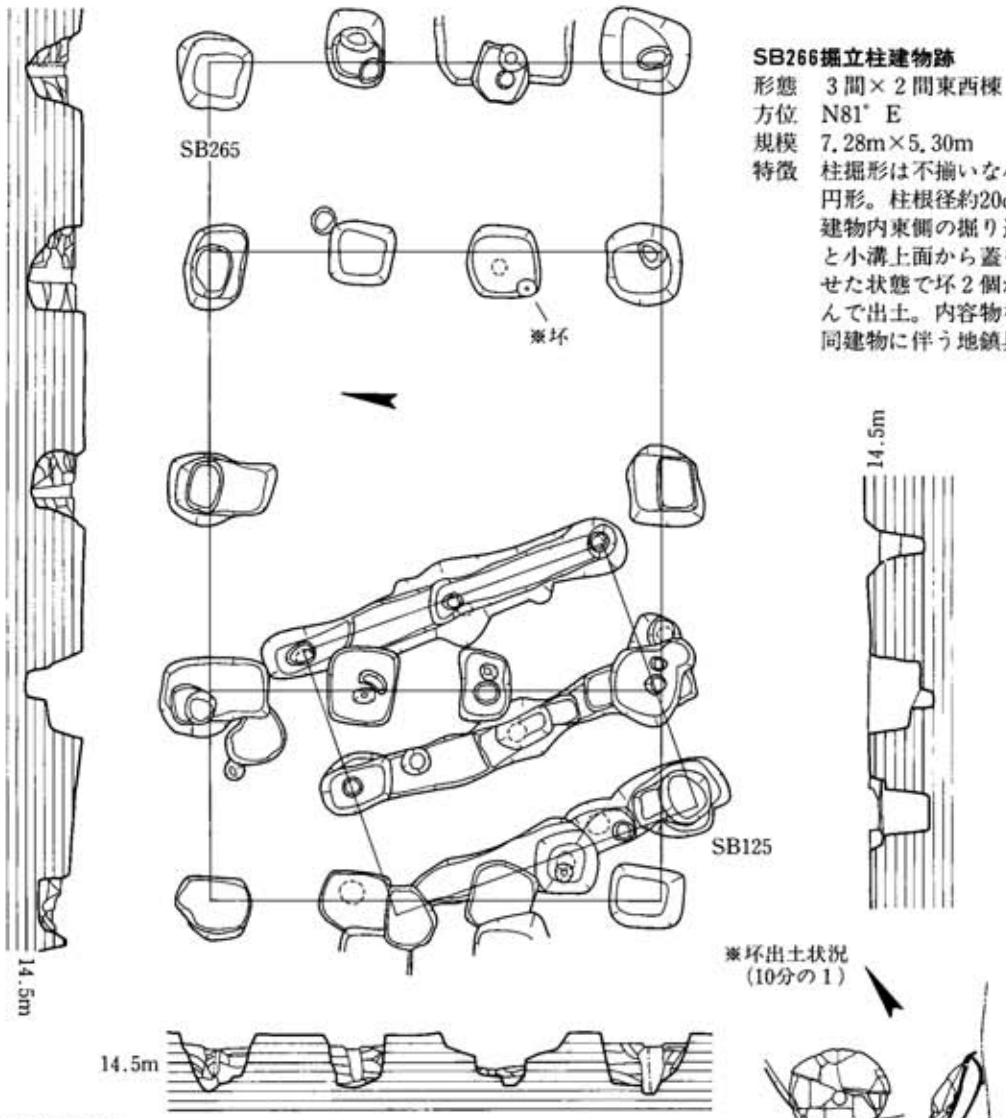
b．掘立柱建物跡



SB305掘立柱建物跡

形態　２間×１間東西棟
方位　N52° E
規模　3.59m×2.91m
特徴　調査区の北側に単独で位置する。柱掘形は上面を南北方向に布掘りした後、円形に２段掘り込む。柱根は径約20～30cmと大形。

Fig. 25　SB305・266掘立柱建物跡



SB266掘立柱建物跡
形態　3間×2間東西棟
方位　N81°E
規模　7.28m×5.30m
特徴　柱掘形は不揃いな小形円形。柱根径約20cm。建物内東側の掘り込みと小溝上面から蓋を被せた状態で坏2個が並んで出土。内容物なし。同建物に伴う地鎮具か。

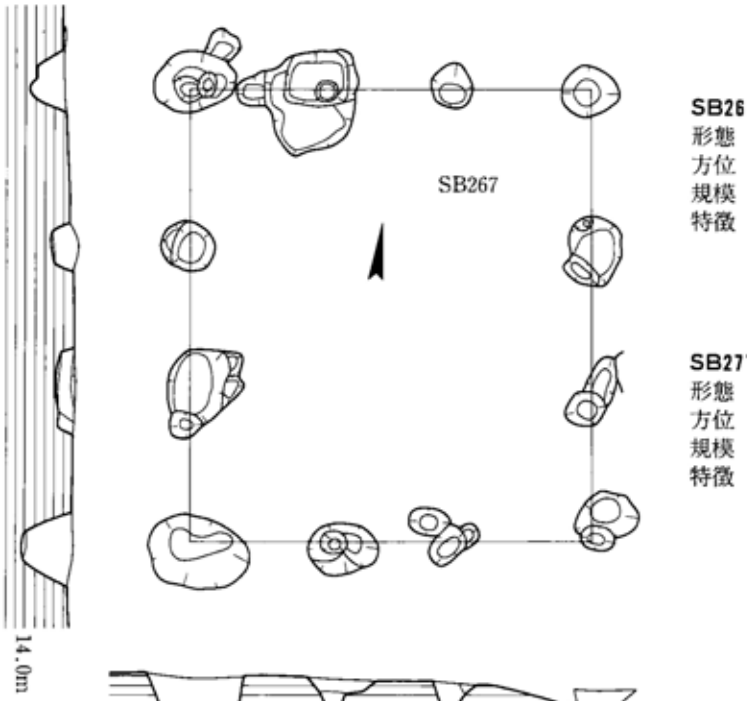
SB265掘立柱建物跡
形態　4間×3間両面廂東西棟
方位　N9°W
規模　8.87m×4.72m
特徴　東西両側に出各7尺の廂をもつ。桁行に比べて梁行の柱間が極端に狭い。柱掘形は方形。柱根径約15cm。西側は同じ奈良時代のSB125掘立柱建物に切られ、東側柱穴の一部はSK211土壙に切られる。東側の身舎梁間柱穴の上面から蓋を被せた大形坏1個出土。地鎮具か。

14.5m

SB125掘立柱建物跡
形態　2間×2間総柱南北棟
方位　N61°E
規模　3.35m×2.96m
特徴　柱掘形は上面を南北方向に布掘りした後、2段の隅丸方形または円形に掘り込む。柱根径不明。SB265掘立柱建物の柱穴を切る。

0　4m

Fig. 26　SB265・125掘立柱建物跡



SB267掘立柱建物跡

形態　3間×3間南北棟
方位　N 6° W
規模　4.75m×4.24m
特徴　柱掘形は不揃いな小形円形。柱根径不明。SB229竪穴住居と切り合うが先後不明。

SB277掘立柱建物跡

形態　南北棟
方位　N13° W
規模　梁5.08m
特徴　柱間からみて東西が梁間か。柱掘形は方形。柱根径約15～20cm。南側の大部分は調査区外。

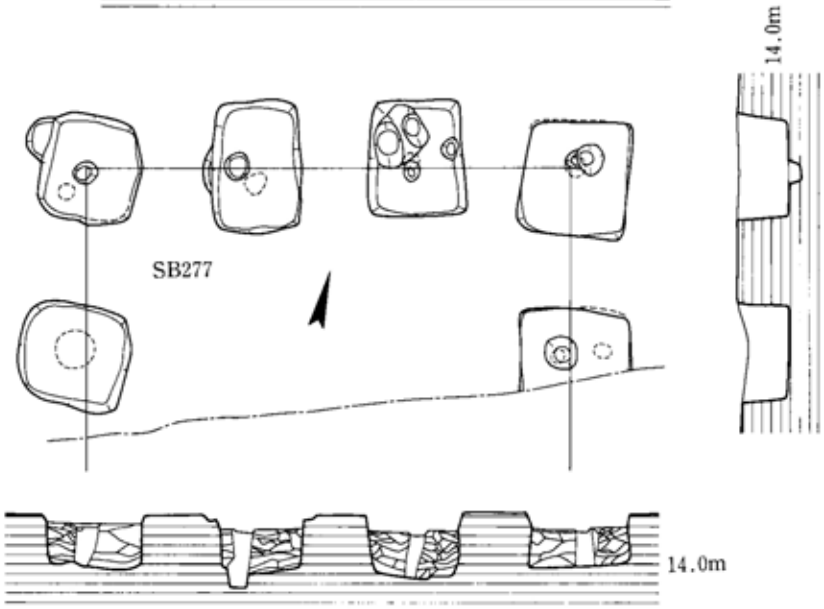
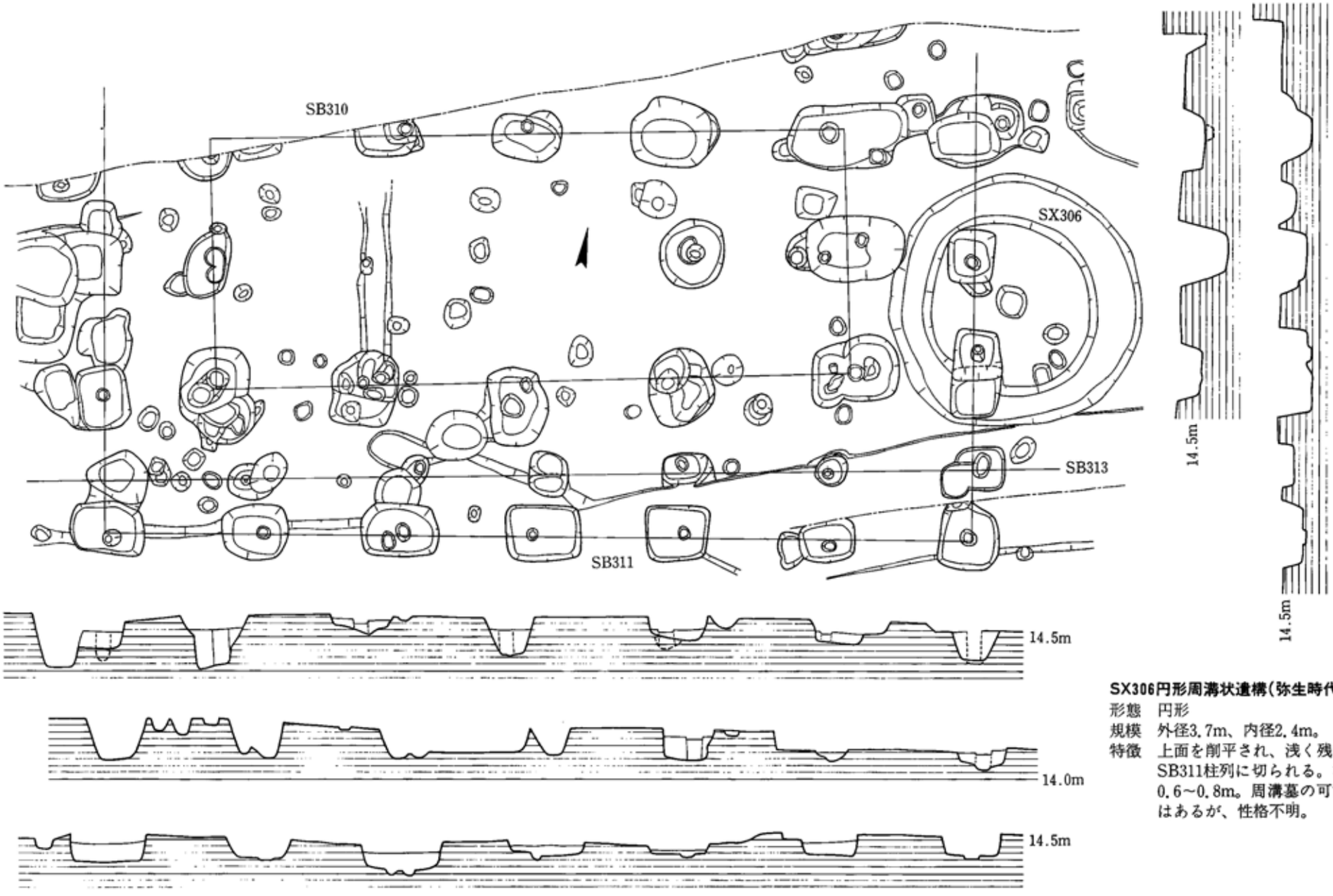


Fig. 27　SB267・277掘立柱建物跡



SX306円形周溝状遺構（弥生時代か）
形態　円形
規模　外径3.7m、内径2.4m。
特徴　上面を削平され、浅く残存。SB311柱列に切られる。溝幅0.6～0.8m。周溝墓の可能性はあるが、性格不明。

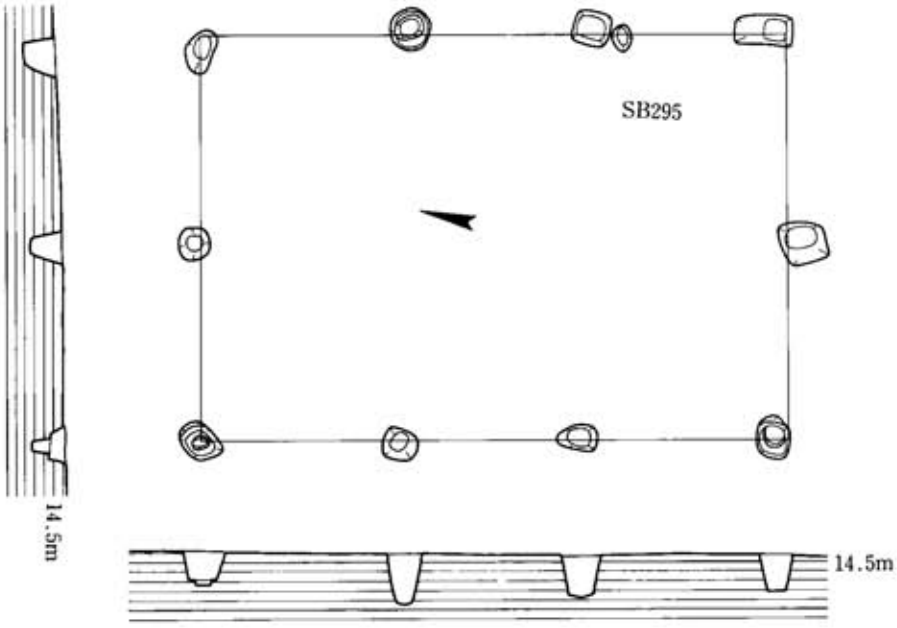
SB310掘立柱建物跡
方位　N82°E
形態　5間×2間両面廂東西棟
規模　11.12m×3.60m
特徴　東西に出8尺の廂が付く。北側にも廂が付く。北側にも1間の庇が付く可能性があるが、調査区外のため不明。柱掘形は基本的に方形。柱根径約30本来、SB311がこれに伴うと見られる。

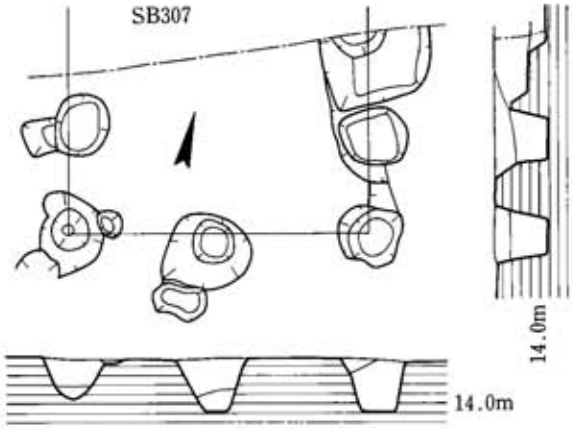
SB311柱列
形態　柱列　東西6間、南北3間
方位　N80°E
規模　東西12.96m、南北6.04m
特徴　SB310掘立柱建物の南面から東面に直角に曲がってこれを囲む。西側も曲がる可能性があるが、その場合はSB310の廂は東側だけとなる。柱掘形は基本的に方形。柱根径約25cm。

SB313柱列
形態　東西柱列6間
方位　N80°E
規模　東西12.96m
特徴　SB311柱列の建替えと推測されるが、切り合いがなく不明。柱掘形はやや小形の方形。柱根径約20cm。

0　4m

Fig. 28　SB310掘立柱建物跡、SB311・313柱列、SX円形周溝状遺構





SB295掘立柱建物跡

形態　3間×2間南北棟
方位　N13° W
規模　6.21m×4.29m
特徴　柱掘形は不揃いな小形円形。柱根径不明。

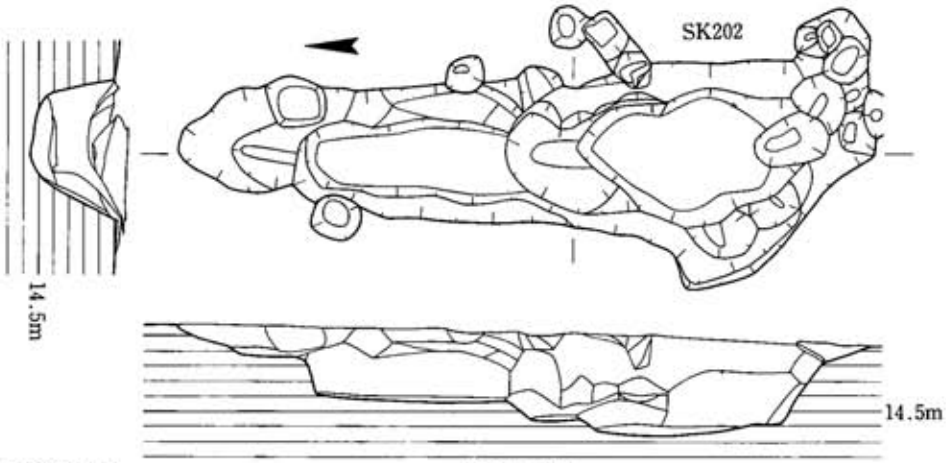
SB307掘立柱建物跡

形態　南北棟か
方位　N14° W
規模　梁3.18m
特徴　柱掘形は不揃いな小形円形。柱根径不明。北側は調査区外。

0　4 m

Fig. 29　SB295・307掘立柱建物跡

c．土壙・井戸跡



SK202土壙
形態　溝状長楕円形
規模　長3.4m、幅約1m
特徴　全体に溝状。南側を1段深く掘り下げる。廃棄壙か。

SK299土壙
形態　楕円形
規模　5.1m×2.7m
特徴　壙底は全体に鍋底状に深く掘り下げ、東壁がかぶさる。本来袋状か。SD241溝を切る。

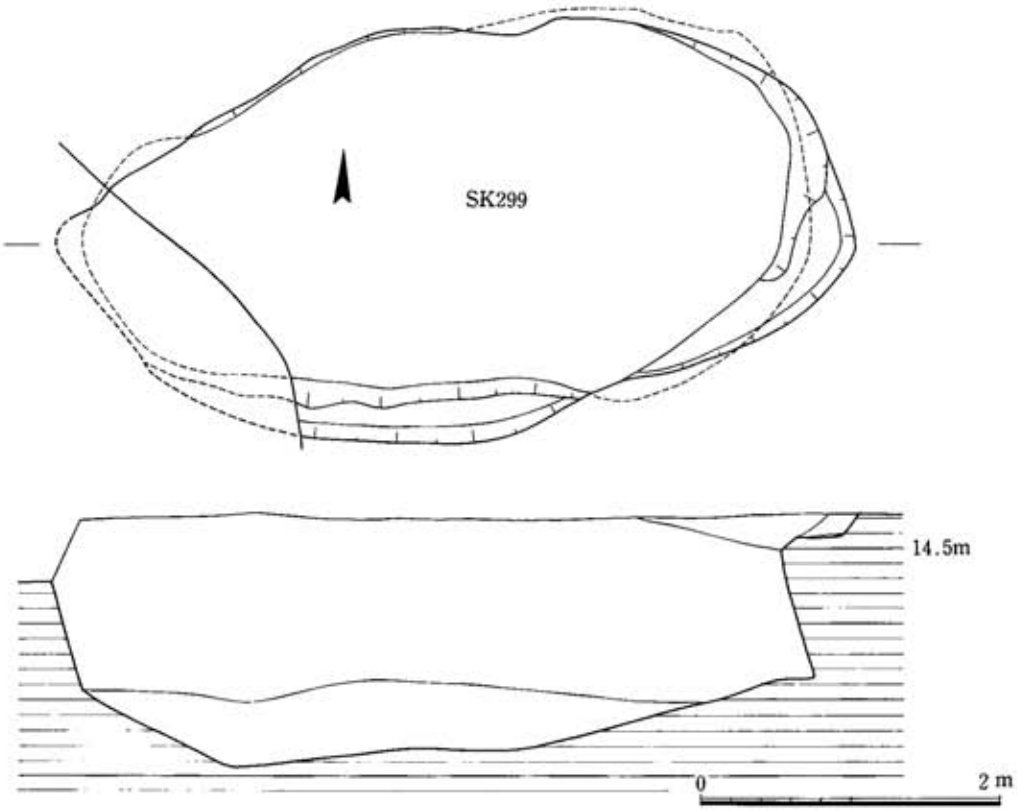
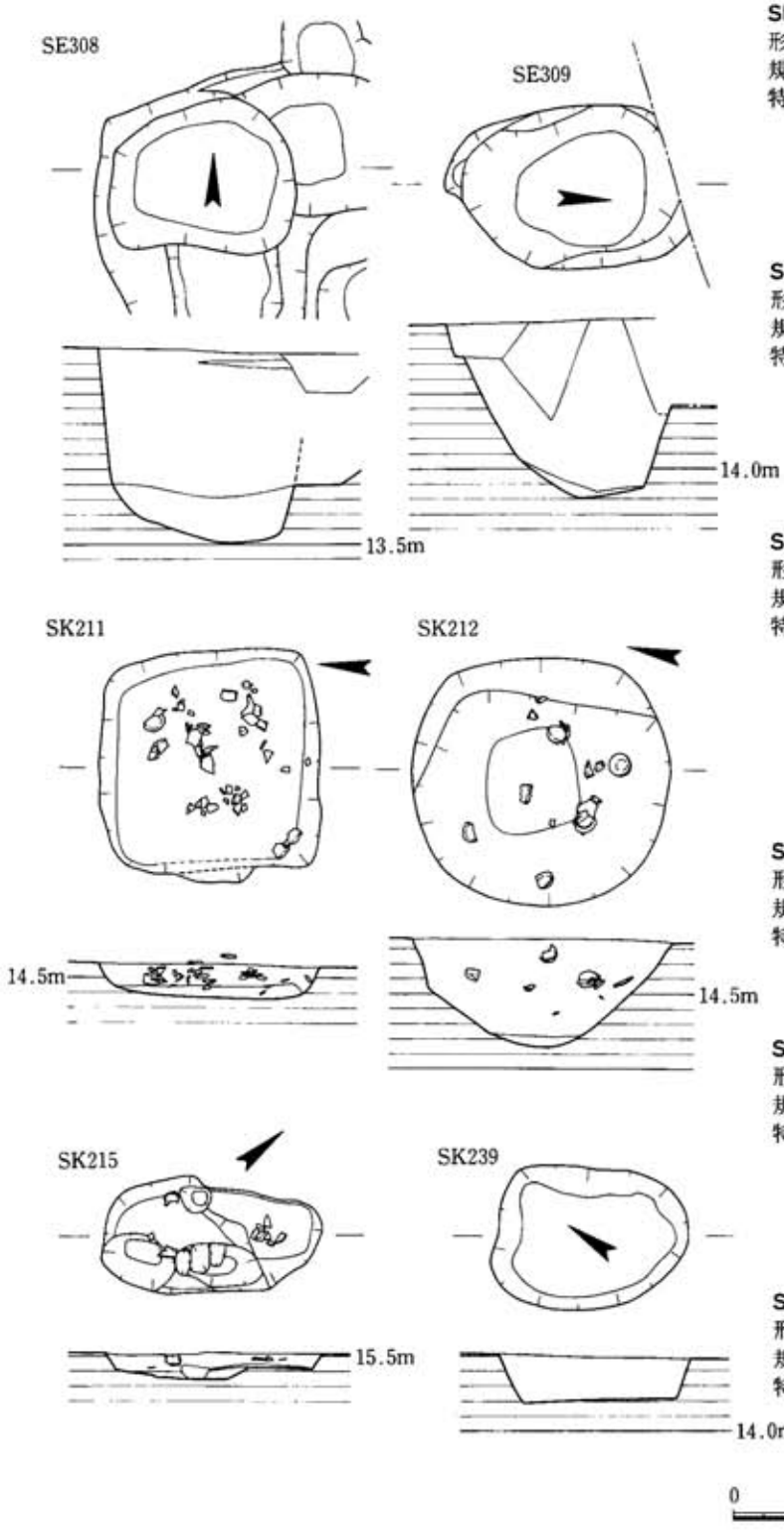


Fig. 30　SK202・299土壙



SE308井戸跡
形態　不整楕円形
規模　1.35m×1.0m
特徴　上面はSB310掘立柱建物と切り合うが、先後不明。平面形は西側に角が付く。深さ約1.3m。木枠等の遺存なし。

SE309井戸跡
形態　楕円形
規模　1.08m×約1.6m
特徴　壁面はやや斜めに深く掘り下げる。深さ約1.2m。井戸跡と思われるが、木枠等の遺存がなく不明確。

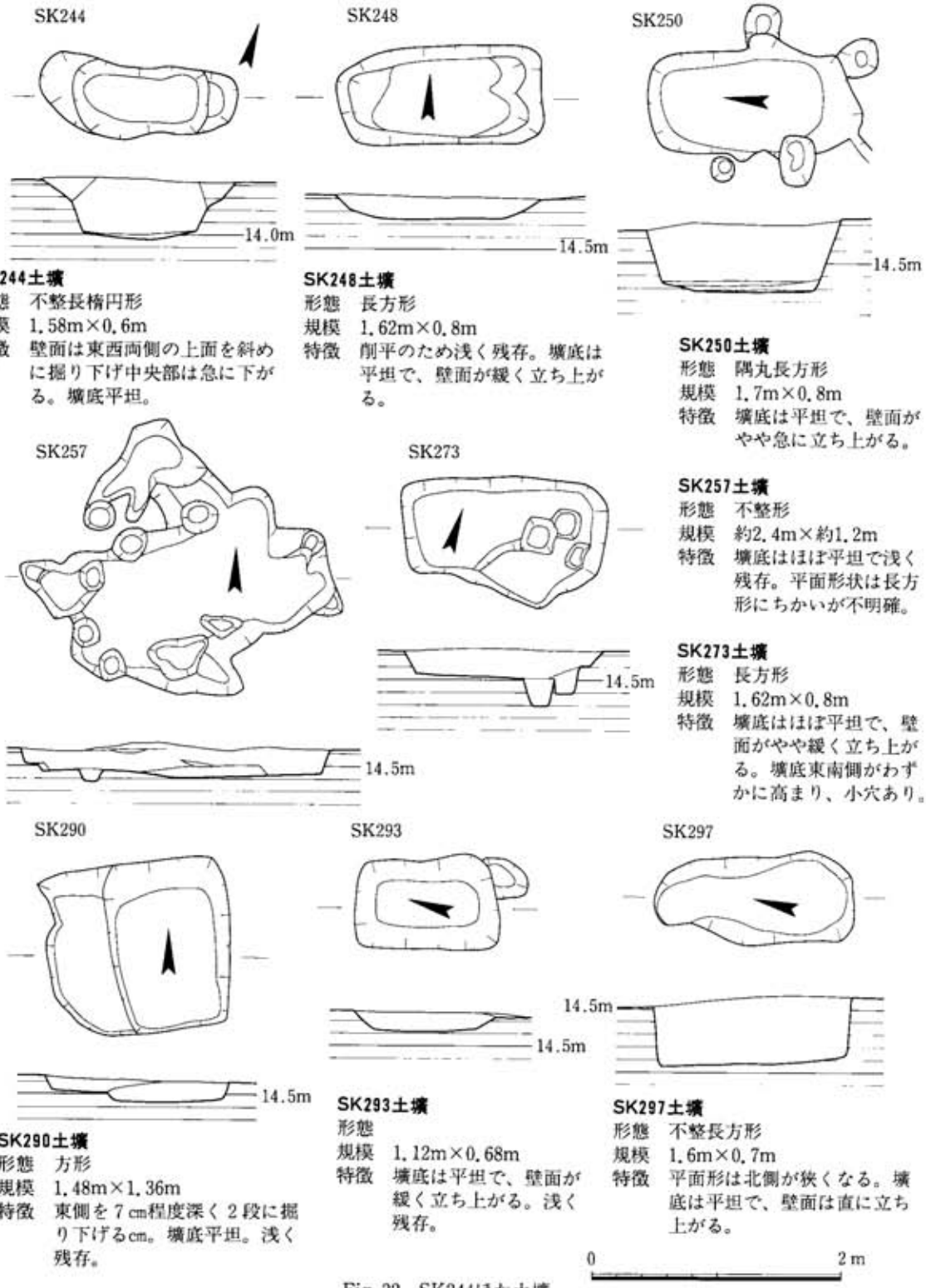
SK211土壙
形態　方形
規模　1.47m×1.42m
特徴　壁面は緩く立ち上がり、壙底平坦。壙底から20cm前後浮いた状態で土器多数出土。時期は平安末～鎌倉。奈良時代のSB265掘立柱建物を切る。

SK212土壙
形態　円形にちかい隅丸方形
規模　1.72m×1.63m
特徴　壙底は鍋底状に深く掘り込む。埋土中に土器やや多く混入。

SK215土壙
形態　不整楕円形
規模　1.48m×0.78m
特徴　南側を一段深く掘り下げる。土壙底はほぼ平坦。壙底からやや浮いた状態で土器やや多く出土。

SK239土壙
形態　不整楕円形
規模　1.28m×0.94m
特徴　壁面はやや急に掘り下げ、壙底平坦。

Fig. 31　SE308井戸跡ほか土壙



SK244土壙
形態　不整長楕円形
規模　1.58m×0.6m
特徴　壁面は東西両側の上面を斜めに掘り下げ中央部は急に下がる。壙底平坦。

SK248土壙
形態　長方形
規模　1.62m×0.8m
特徴　削平のため浅く残存。壙底は平坦で、壁面が緩く立ち上がる。

SK250土壙
形態　隅丸長方形
規模　1.7m×0.8m
特徴　壙底は平坦で、壁面がやや急に立ち上がる。

SK257土壙
形態　不整形
規模　約2.4m×約1.2m
特徴　壙底はほぼ平坦で浅く残存。平面形状は長方形にちかいが不明確。

SK273土壙
形態　長方形
規模　1.62m×0.8m
特徴　壙底はほぼ平坦で、壁面がやや緩く立ち上がる。壙底東南側がわずかに高まり、小穴あり。

SK290土壙
形態　方形
規模　1.48m×1.36m
特徴　東側を7cm程度深く2段に掘り下げるcm。壙底平坦。浅く残存。

SK293土壙
形態
規模　1.12m×0.68m
特徴　壙底は平坦で、壁面が緩く立ち上がる。浅く残存。

SK297土壙
形態　不整長方形
規模　1.6m×0.7m
特徴　平面形は北側が狭くなる。壙底は平坦で、壁面は直に立ち上がる。

Fig. 32　SK244ほか土壙

d．溝

※断面位置はFig. 2に示す

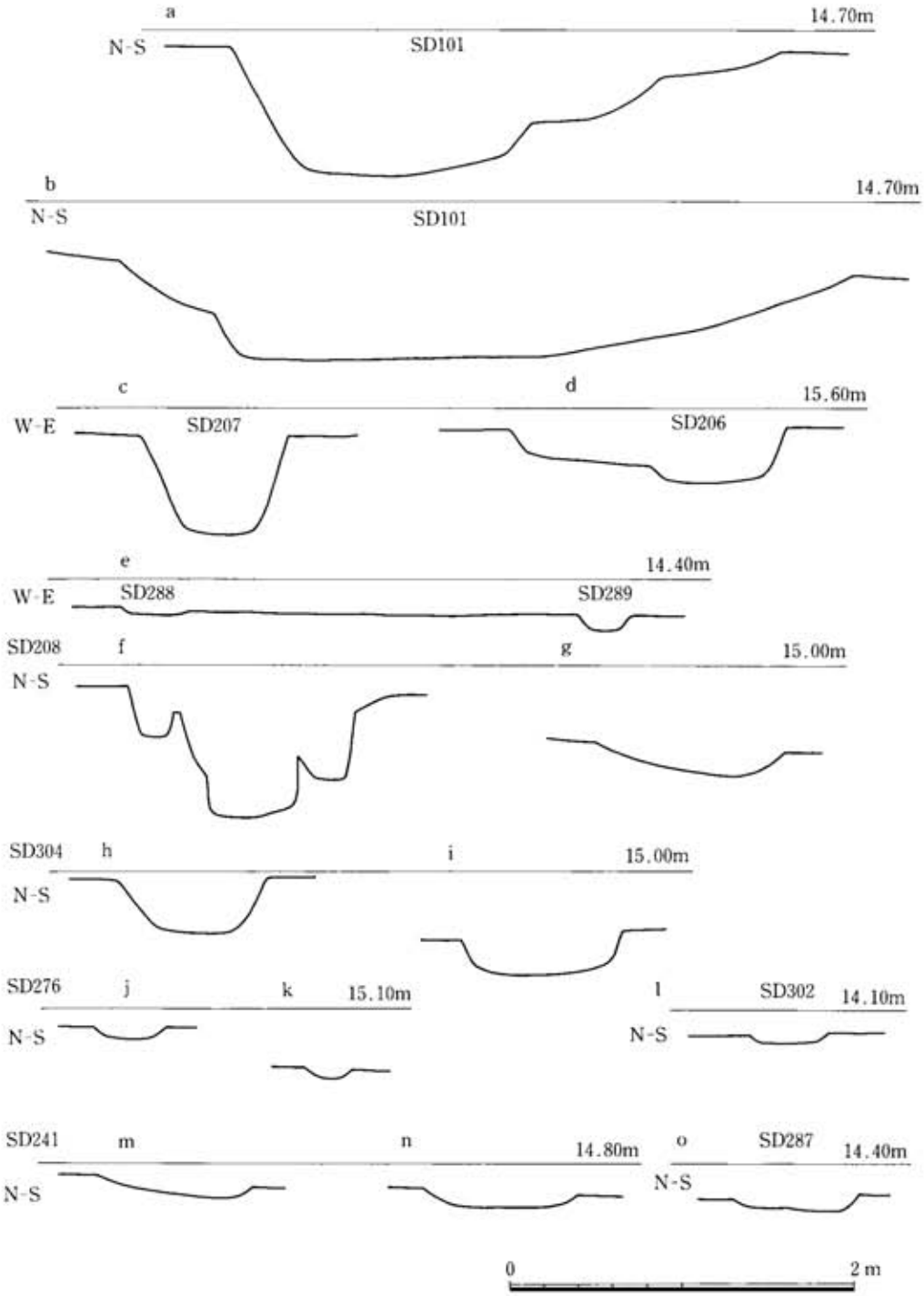
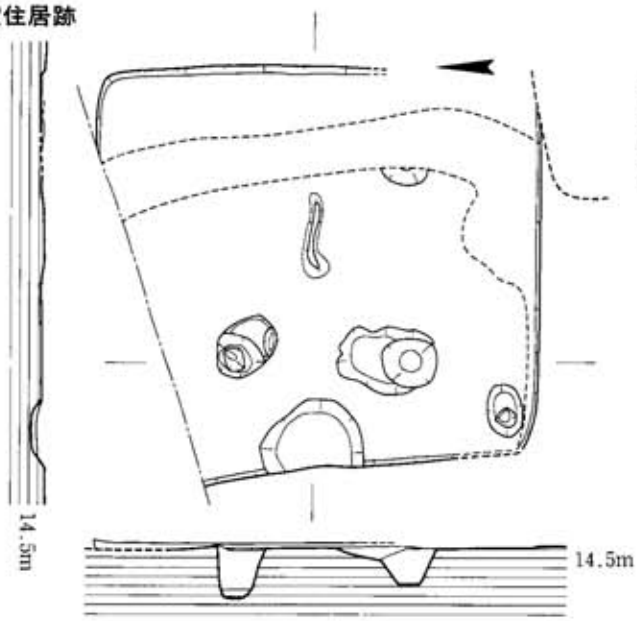


Fig. 33　II区溝断面図

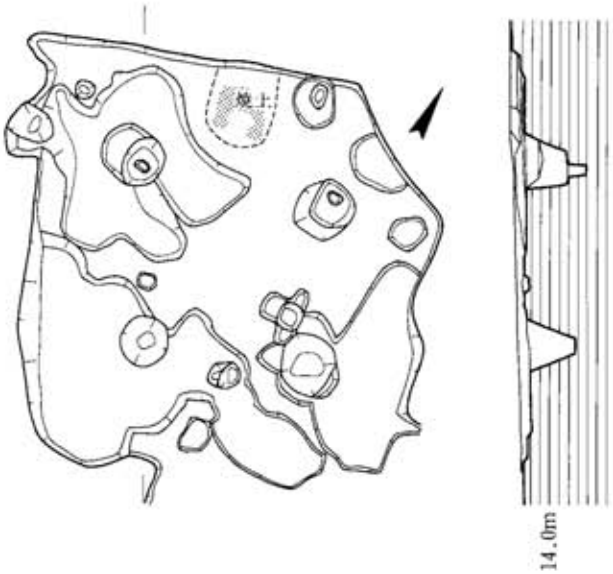
(3) Ⅲ区の遺構

奈良・平安時代では、溝11条、掘立柱建物跡７棟、竪穴住居跡11棟、柱列１基、土壙20基がある。主な遺構としては、Ⅰ区から続く北辺のSD304区画溝は東端で曲がり、東辺に方位を違えたSD511直線区画溝がある。企画性のある掘立柱建物跡は見られず、かわって竪穴住居跡がSD101大溝の北側に集中して造られている。時期は奈良時代を中心とする。

a．竪穴住居跡



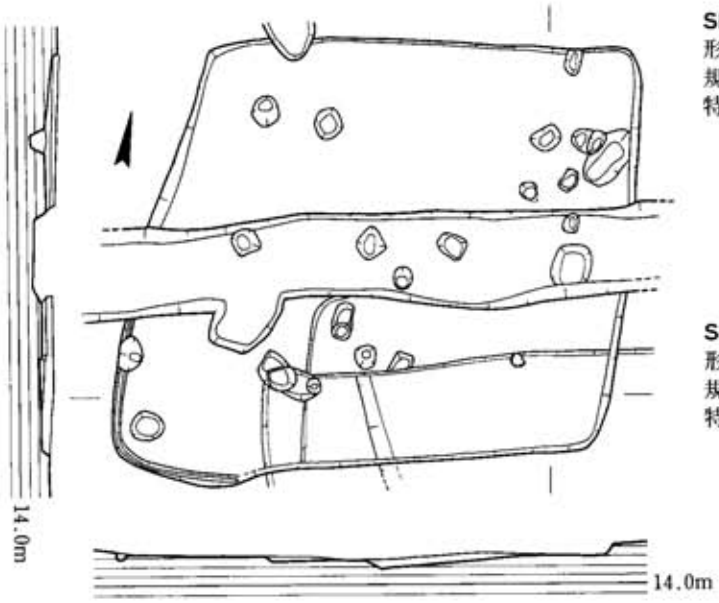
SB431竪穴住居跡
形態　方形
規模　4.2m×4.6m
特徴　削平のため壁が浅く残存。主柱穴４本のうち東北隅が荒らされている。西壁際中央の土壙中に焼土あり。カマド施設。



SB437竪穴住居跡
形態
規模　一辺約4.4m
特徴　削平のため壁の残存がが浅く、形状不明確。主柱穴４本。北壁際中央にカマド付設。

0　4 m

Fig. 34　SB431・437竪穴住居跡



SB405竪穴住居跡

形態　方形

規模　5.2m×4.52m

特徴　削平のため平面形不整形に見えるが、本来方形か。西南隅に一部周溝残。東南部がSB416竪穴住居と切り合う。柱穴不明。中央を東西にSD304に切られる。

SB408竪穴住居跡

形態　方形

規模　6.08m×6.24m

特徴　壁面が浅く残存。西壁に比べて東壁がやや狭い。4周に周溝が巡る。主柱穴4本。北壁際中央にカマド付設。

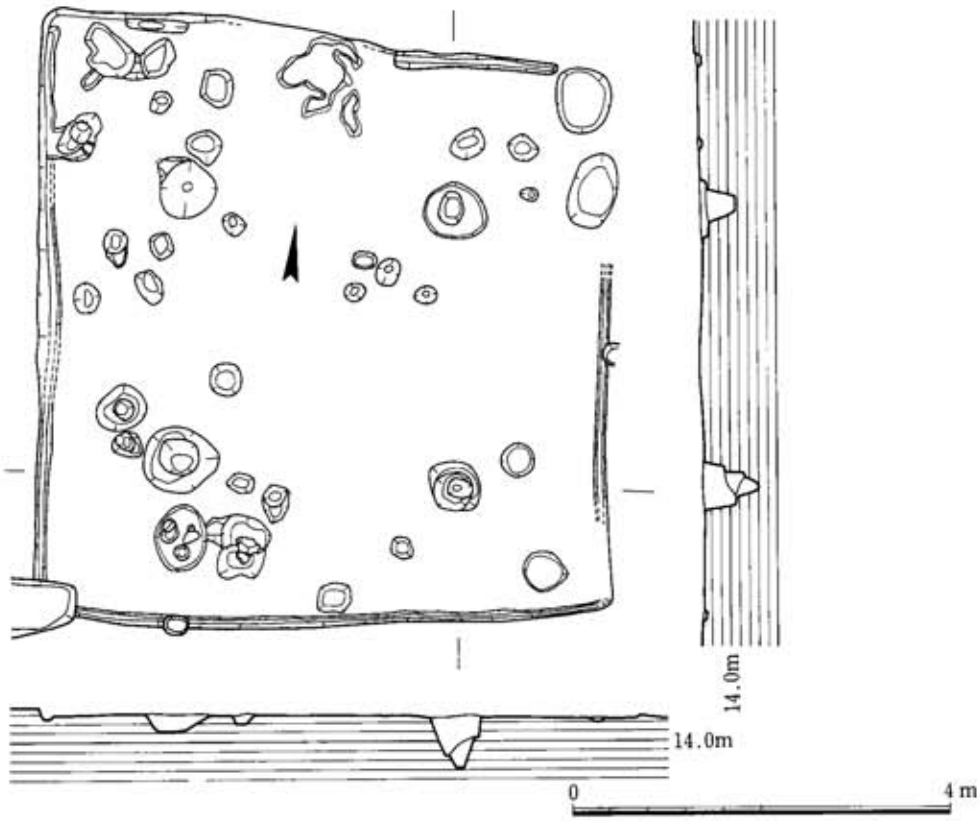
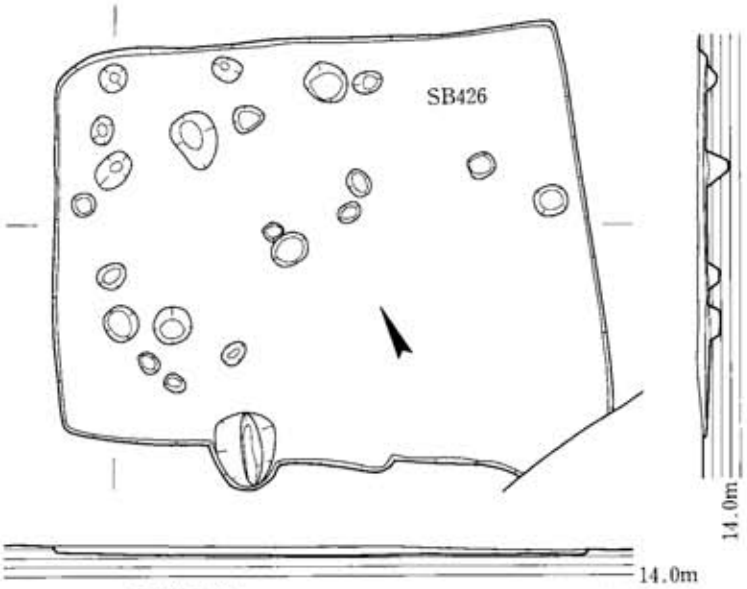


Fig. 35　SB405・408竪穴住居跡



SB426竪穴住居跡

形態　長方形

規模　5.7m×4.4m

特徴　平面形は台形に見えるが、東側が削平のため不明確。柱穴不明。南壁の西寄りにカマド付設。南隅をSB444竪穴住居と切り合うが先後不明。

SB444竪穴住居跡

形態　長方形

規模　6.00m×4.32m

特徴　主柱穴4本。東壁際の中央にカマド付設。東南隅に深さ約20cmの不整円形の掘り込みをもつ。

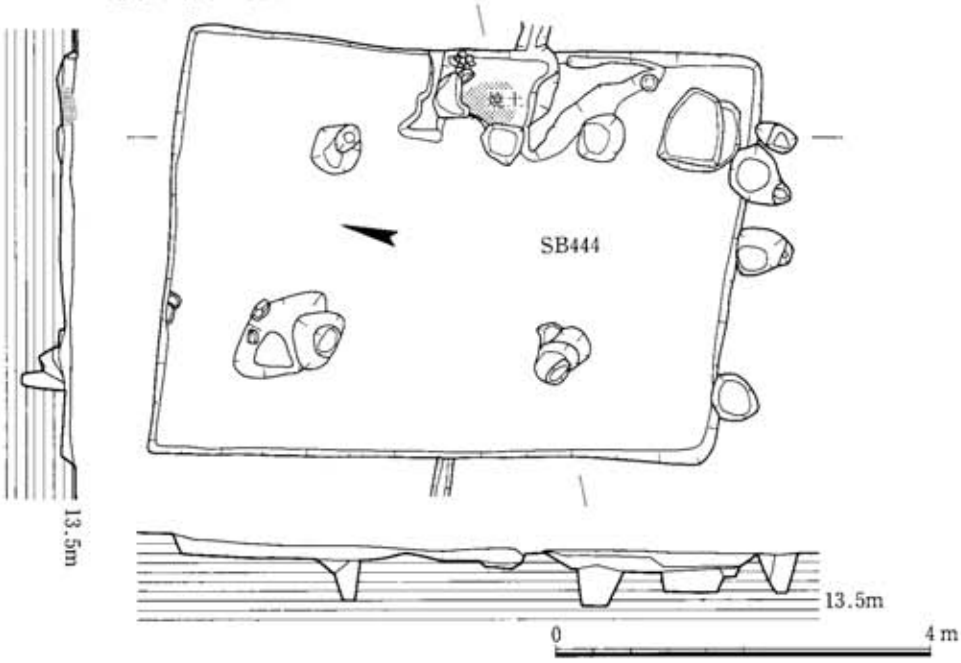
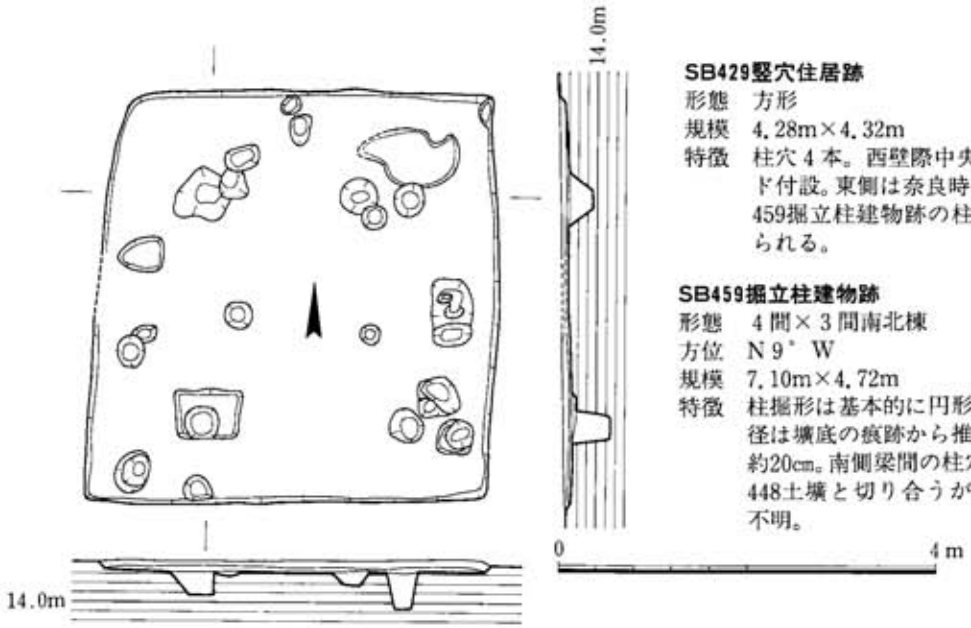


Fig. 36　SB426・444竪穴住居跡



SB429竪穴住居跡

形態　方形
規模　4.28m×4.32m
特徴　柱穴4本。西壁際中央にカマド付設。東側は奈良時代のSB459掘立柱建物跡の柱穴に切られる。

SB459掘立柱建物跡

形態　4間×3間南北棟
方位　N 9° W
規模　7.10m×4.72m
特徴　柱掘形は基本的に円形。柱根径は壙底の痕跡から推定して約20cm。南側梁間の柱穴がSK448土壙と切り合うが、先後不明。

Fig. 37　SB429竪穴住居跡

b．掘立柱建物跡

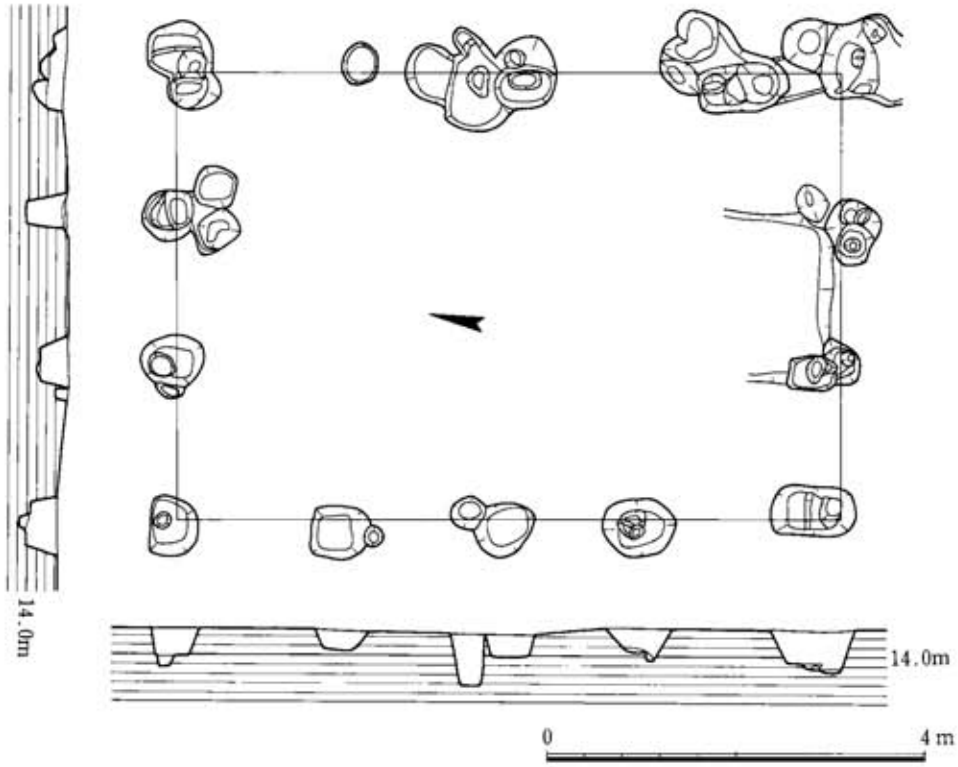
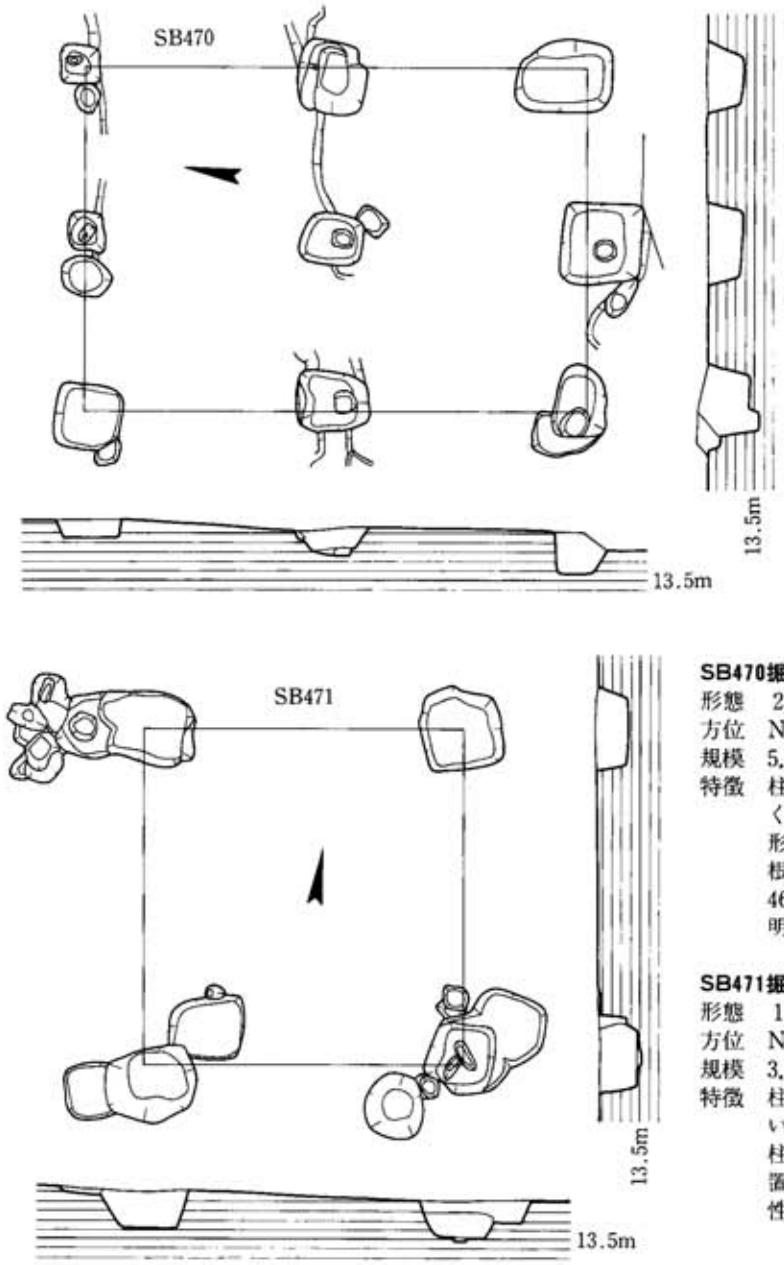


Fig. 38　SB459掘立柱建物跡



SB470掘立柱建物跡

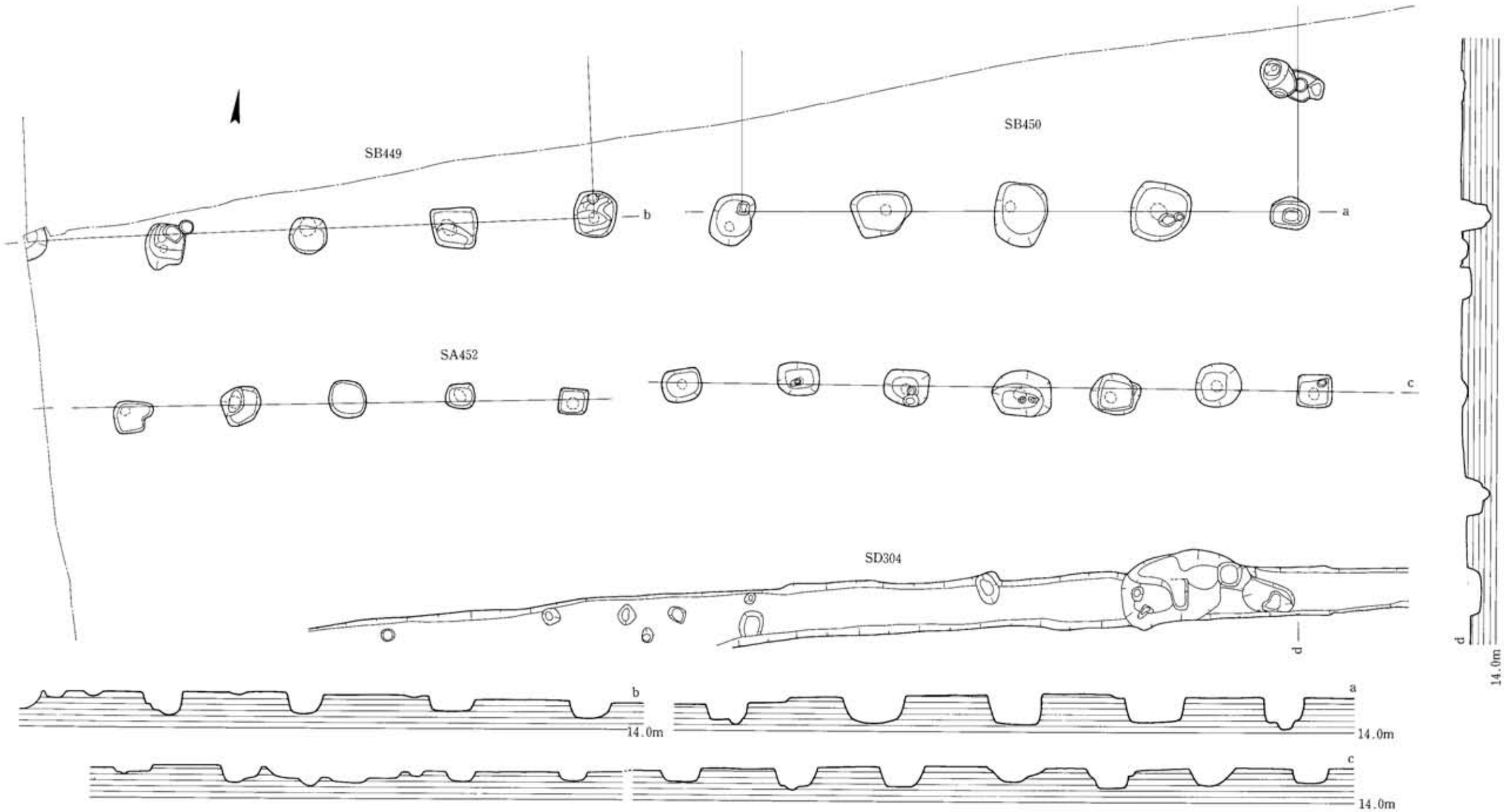
形態　2間×2間総柱南北棟
方位　N 8° W
規模　5.26m×3.60m
特徴　柱間は桁行に比べて梁間が狭くなる。柱掘形は基本的に方形。南辺の並びが乱れる。柱根径約15cm。SD301およびSD464溝と切り合うが、先後不明。

SB471掘立柱建物跡

形態　1間×1間南北棟
方位　N 9° W
規模　3.34m×3.56m
特徴　柱間は桁行に比べて梁間が狭い。柱掘形は基本的に方形。柱根径約20cm。西側に若干位置をずらして建て替えの可能性もあるが不明確。

0　4 m

Fig. 39　SB470・471掘立柱建物跡



SB449掘立柱建物跡
形態　4間×（2）間東西棟　特徴　SB450とほぼ前面を揃えて東西に並ぶ。北側は不明だが、梁間2間か。柱掘形は基本的に方形。柱根径約20cm南側前面に約3.0m離れて同時期の築地と見られる柱列がある。SD101とは方位が異なり、別時期か。
方位　N80°E
規模　9.65m×α

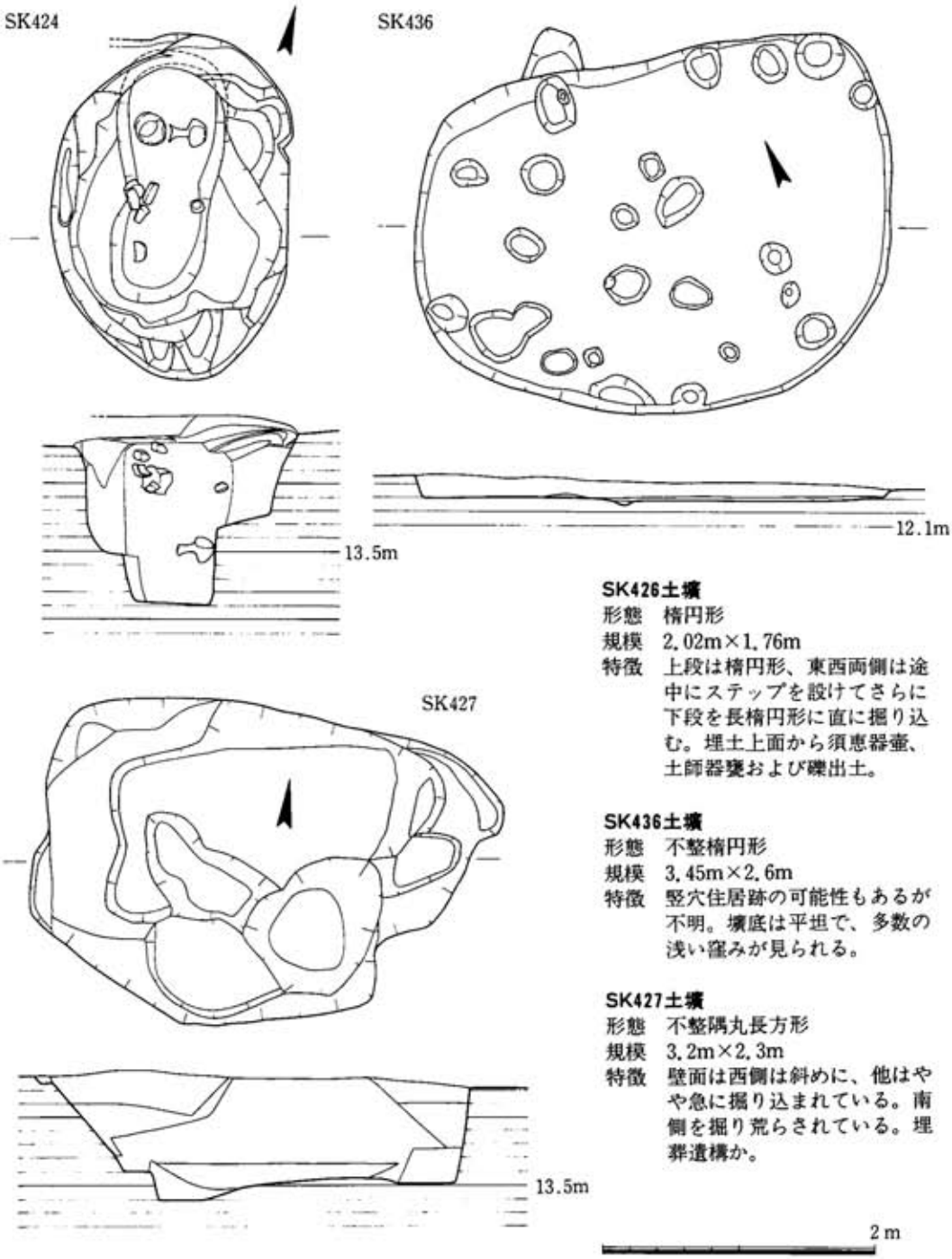
SB450掘立柱建物跡
形態　4間×（2）間東西棟　特徴　北側は不明だが、SB449と同構造と見て、梁間2間か。柱掘形は基本的に方形。柱根径約20cm。南側前面に約3.0m離れて同時期の築地と見られる柱列がある。SD101とは方位が異なり、別時期か。
方位　N82°E
規模　9.65m×α

SA452柱列
形態　11間以上　特徴　SB449及びSB450に伴う築地柱列と見られ、西端は少なくともう1間続く可能性が強い。両建物の前面中央に位置する柱穴を境に東西で柱列の方位が異なる。入り口の構造に関わるものか。柱掘形は本的に方形。柱根径約15cm。
方位　西半N82°W、東半N84°W
規模　全長20.5m以上

Fig. 40　SB449・450掘立柱建物跡、SA452柱列

0　4m

c．土壙

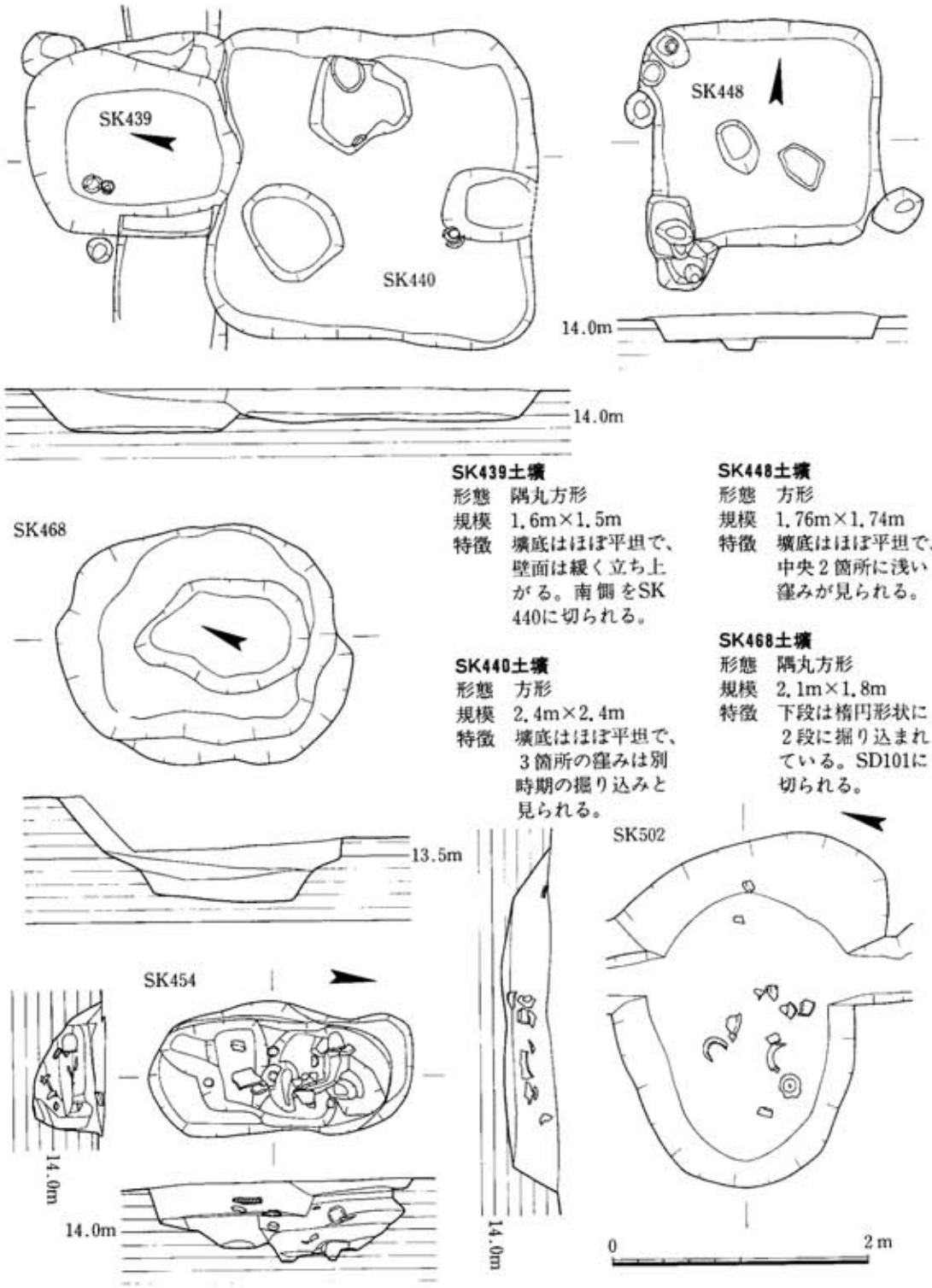


SK426土壙
形態　楕円形
規模　2.02m×1.76m
特徴　上段は楕円形、東西両側は途中にステップを設けてさらに下段を長楕円形に直に掘り込む。埋土上面から須恵器壷、土師器甕および礫出土。

SK436土壙
形態　不整楕円形
規模　3.45m×2.6m
特徴　竪穴住居跡の可能性もあるが不明。壙底は平坦で、多数の浅い窪みが見られる。

SK427土壙
形態　不整隅丸長方形
規模　3.2m×2.3m
特徴　壁面は西側は斜めに、他はやや急に掘り込まれている。南側を掘り荒らされている。埋葬遺構か。

Fig. 41　SK424・436・427土壙



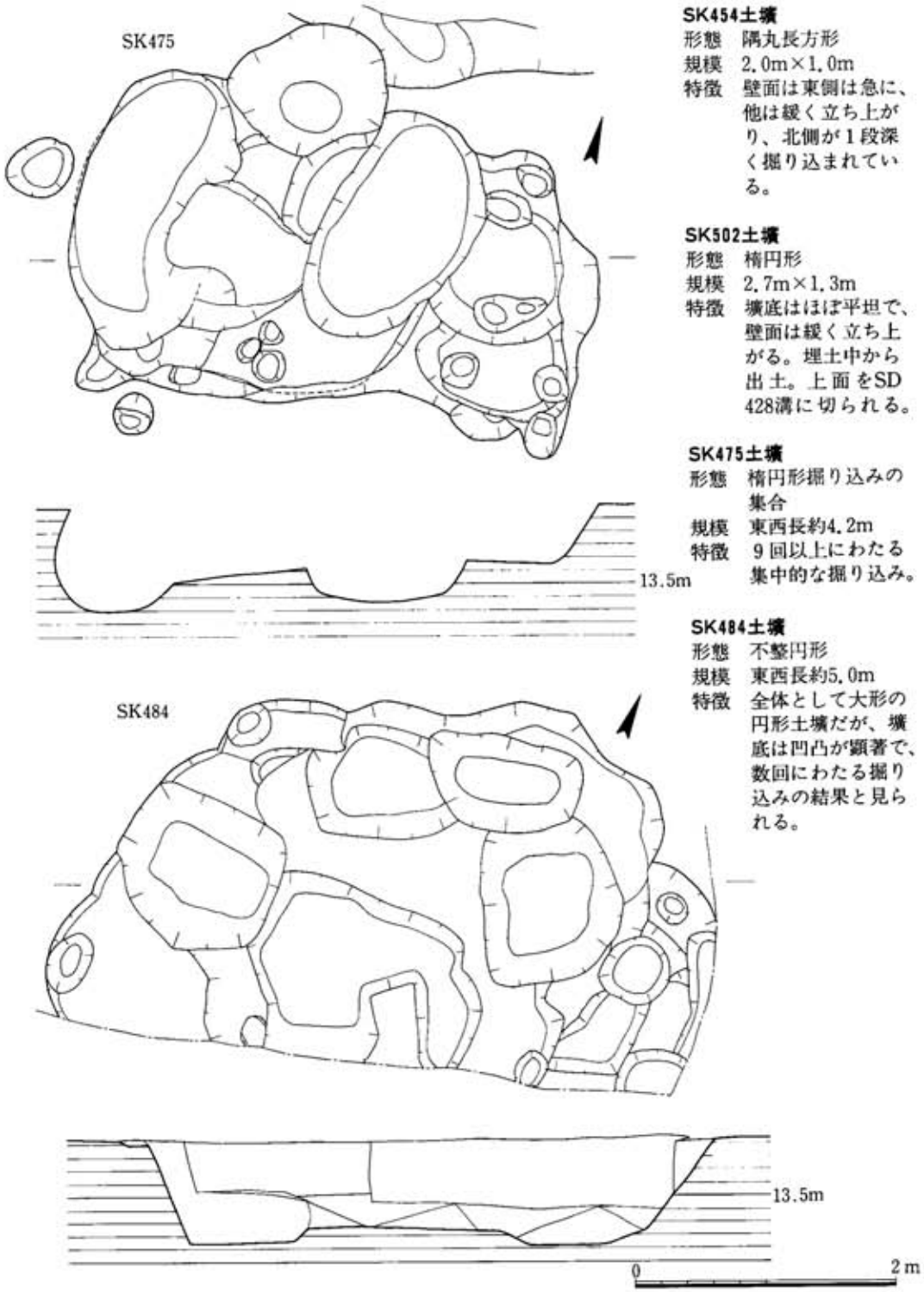
SK439土壙
形態　隅丸方形
規模　1.6m×1.5m
特徴　壙底はほぼ平坦で、壁面は緩く立ち上がる。南側をSK440に切られる。

SK440土壙
形態　方形
規模　2.4m×2.4m
特徴　壙底はほぼ平坦で、3箇所の窪みは別時期の掘り込みと見られる。

SK448土壙
形態　方形
規模　1.76m×1.74m
特徴　壙底はほぼ平坦で、中央2箇所に浅い窪みが見られる。

SK468土壙
形態　隅丸方形
規模　2.1m×1.8m
特徴　下段は楕円形状に2段に掘り込まれている。SD101に切られる。

Fig. 42　SK439ほか土壙



SK454土壙
形態　隅丸長方形
規模　2.0m×1.0m
特徴　壁面は東側は急に、他は緩く立ち上がり、北側が1段深く掘り込まれている。

SK502土壙
形態　楕円形
規模　2.7m×1.3m
特徴　壙底はほぼ平坦で、壁面は緩く立ち上がる。埋土中から出土。上面をSD428溝に切られる。

SK475土壙
形態　楕円形掘り込みの集合
規模　東西長約4.2m
特徴　9回以上にわたる集中的な掘り込み。

SK484土壙
形態　不整円形
規模　東西長約5.0m
特徴　全体として大形の円形土壙だが、壙底は凹凸が顕著で、数回にわたる掘り込みの結果と見られる。

Fig. 43　SK475ほか土壙

d．溝

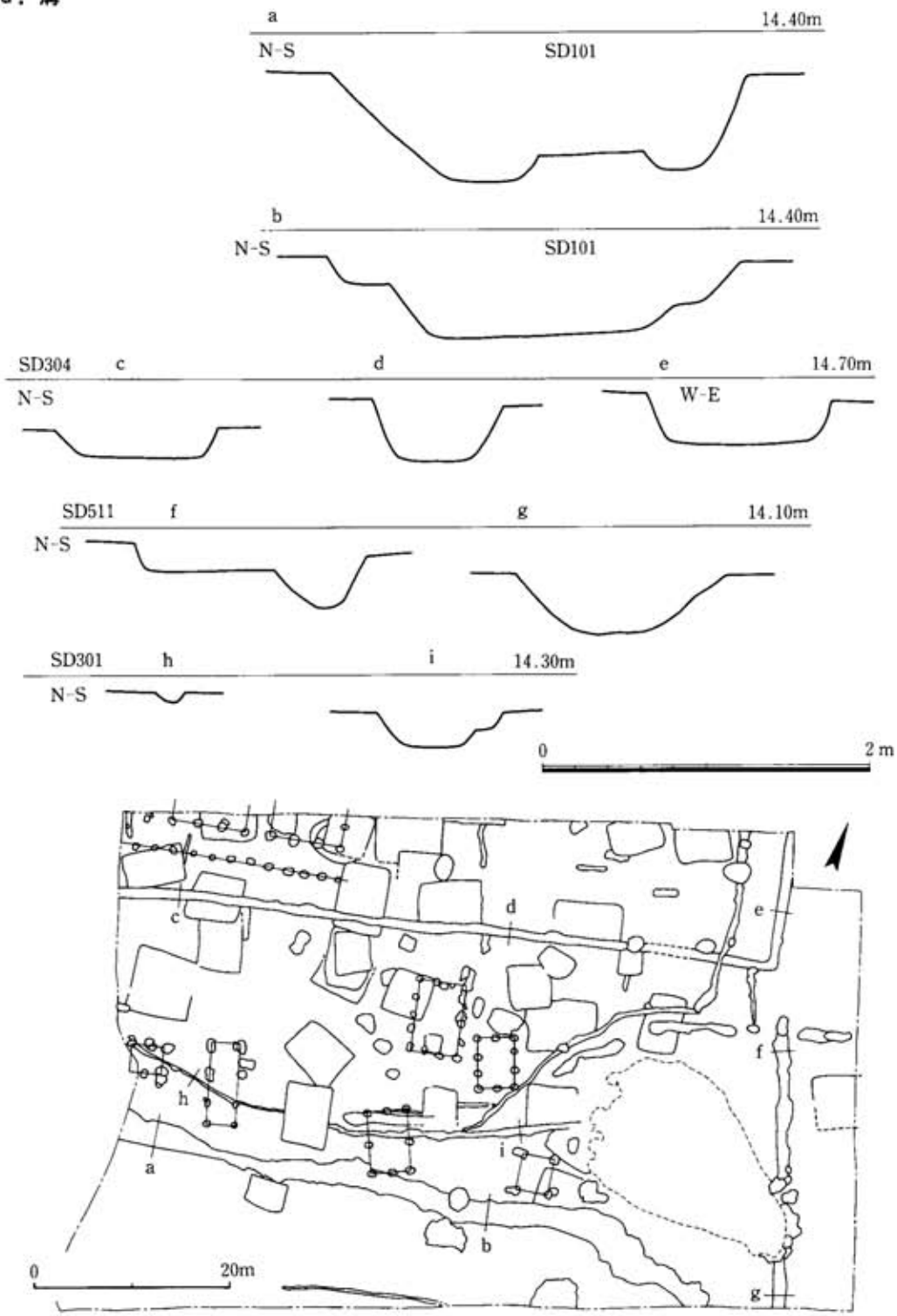


Fig. 44　Ⅲ区溝断面図

Ⅲ　遺　物

1．弥生時代

Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ区から土器、石器、鉄器、玉類が出土した。

土器はⅠ区のSK123土壙からの出土が大部分で、外に多くの竪穴住居跡からも出土しているが、削平が著しいため量は比較的少ない。Ⅱ区からも小量出土しているが、弥生期の明確な遺構が見られないので、ここでは図示しない。種別は生活用の土器が殆どである。Ⅰ区のSK123土壙では甕棺片も混入していたが、元位置を保つ甕棺等は見られない。時期は弥生後期前半～終末にわたるが、主体は後期前半から中頃にあって、終末期に下るようなものは極めて限られる。このことは、東方に位置する東山田一本杉遺跡の集落跡が後期後半を中心に営まれたことと対照的であり、嘉瀬川西岸地域としてみれば、その中で集落の変遷に時代的な重心移動がありえたことを示すものである。

石器は石包丁、石斧、砥石などが出土したが点数は少なく、また、いずれも破損品である。

鉄器は土壙や後世の溝などから出土したが、少数で形状を残すものが見られないのでここでは図示しない。

玉類はガラス小玉を中心に、多くの竪穴住居跡や土壙から出土している。ただし、遺構全体の残りが浅いことからみて殆どは埋土中に混入したものと考えられ、必ずしも大部分の竪穴住居跡で小玉が一般に用いられていたということにはならないであろう。

以下、Ⅰ区、Ⅱ区、Ⅲ区の順にごとに図示する。

(1)　Ⅰ区の遺物

Ⅰ区では竪穴住居跡、土壙等から土器、石器、鉄器、玉類が出土した。土器は圧倒的に大部分がSX123土壙からの出土である。

a．土器

SK123土壙からの出土土器は大部分が生活用土器で、外に小量の甕棺片が混入していた。

図示した甕棺のうち、**1**は大形で、口縁部はく字形に屈曲して口縁下と胴下位に突帯を巡らせ、底部は未だ明瞭な平底で後期初頭の特徴をもつ。これに対して**2**の小形甕棺は口縁部の屈曲及び底部の平底がやや甘くなる。

同様に、生活用土器にも若干の時期差が見られる。甕には大形**3**・**4**、中形**5**、小形**6**～**9**、短胴甕**10**・**11**がある。このうち**7**は台付甕。後期前半を主体としながらも、中形、小形甕には

後期中頃に下るものも含まれる。壺は、大形**12**～**15**・**18**のうち**12**は退化した鋤先状口縁、**14**・**15**は複合口縁で後期中頃に下る。中形のうち**16**・**17**は長頸、**19**・**20**球胴短頸壺。小形壺**21**～**32**には球胴く字口縁、長頸、無頸などの各種がある。高坏には鋤先口縁の**33**～**35**、口縁部が屈曲して立つ**36**～**38**、直に開く**39**、口縁部が内湾するやや小形の**40**といった４タイプが見られる。時期は後期前半から後期中頃に渡る。鉢**41**～**60**には大、中、小の各種及び手捏土器があり、全体として丸底化が目立つ。器台**61**～**69**では**61**・**62**が後期でもやや古い形態をもつ。**68**は口縁上面に円形浮文を飾る。支脚は、大形で袋状口縁の**70**・**71**、小形品には山形**72**・**73**、沓形**71**、袋状口縁の**75**・**76**、鼓形**77**・**78**の各種がある。**72**にはタタキ目調整が見られる。これらの鉢、器台及び支脚の時期も後期前半から後期中頃である。

このように、SK123土壙出土土器には後期前半から後期中頃までのものが混在しているが、その出土状況から見て、後期中頃に一括して廃棄されたものと考えられる。

その他、竪穴住居跡出土の土器もあるが、遺構削平のため量は少ない。比較的まとまって出土したSB111・SB112・SB117竪穴住居跡のもののみ図示する。時期は後期前半から後期中頃を中心とする。検出面からの表採ではあるが、１点のみジョッキ形土器の破片**93**が見られる。

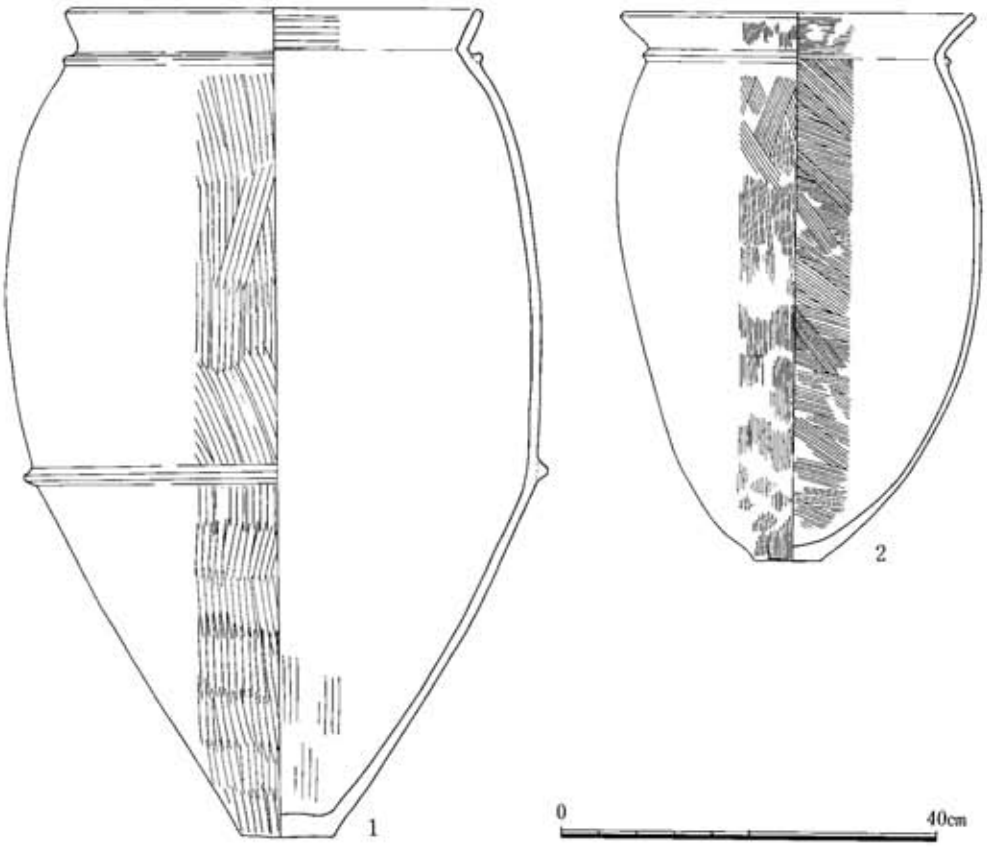


Fig. 45　Ⅰ区SX123出土弥生土器①

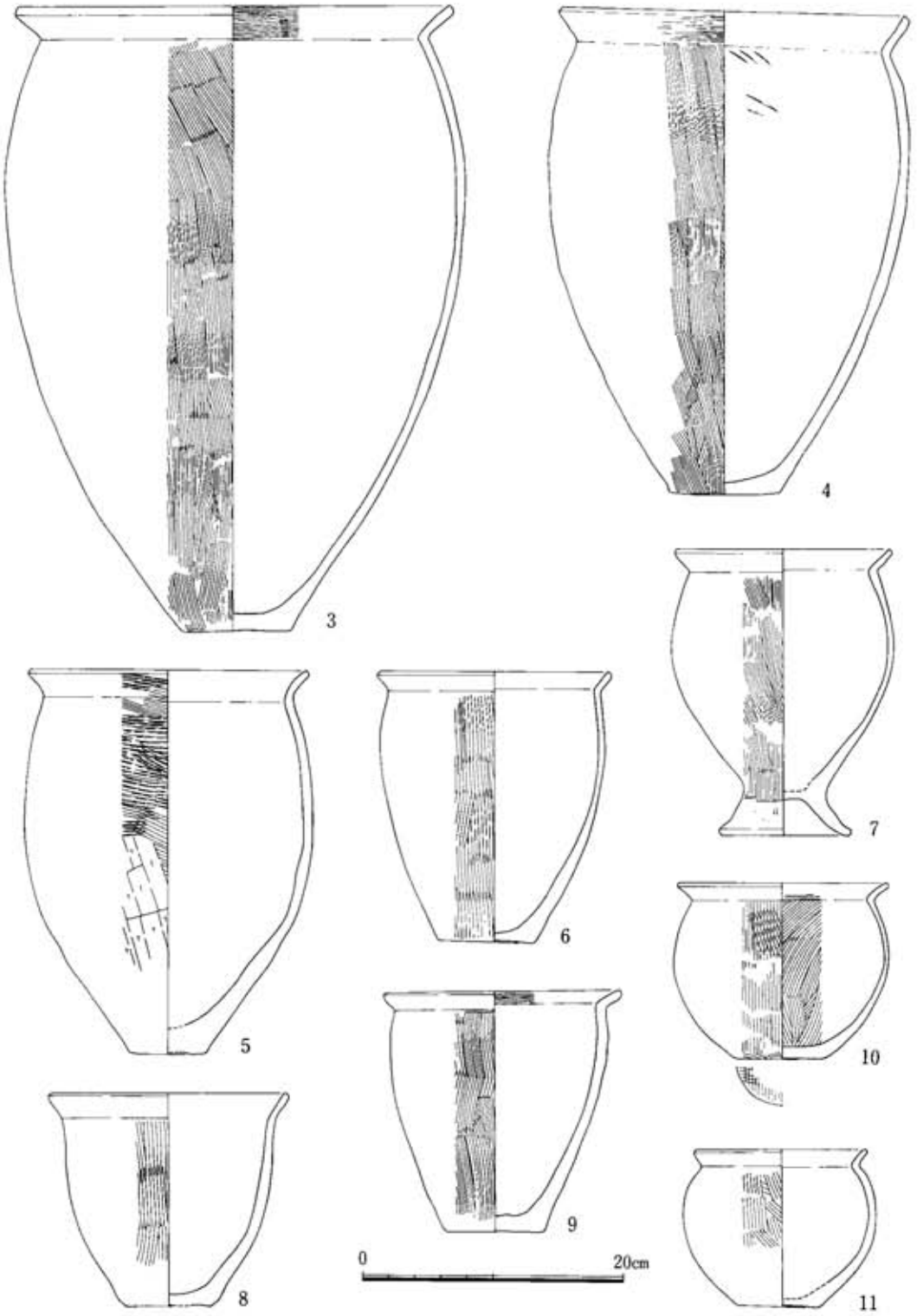


Fig. 46　Ⅰ区SX123出土弥生土器②

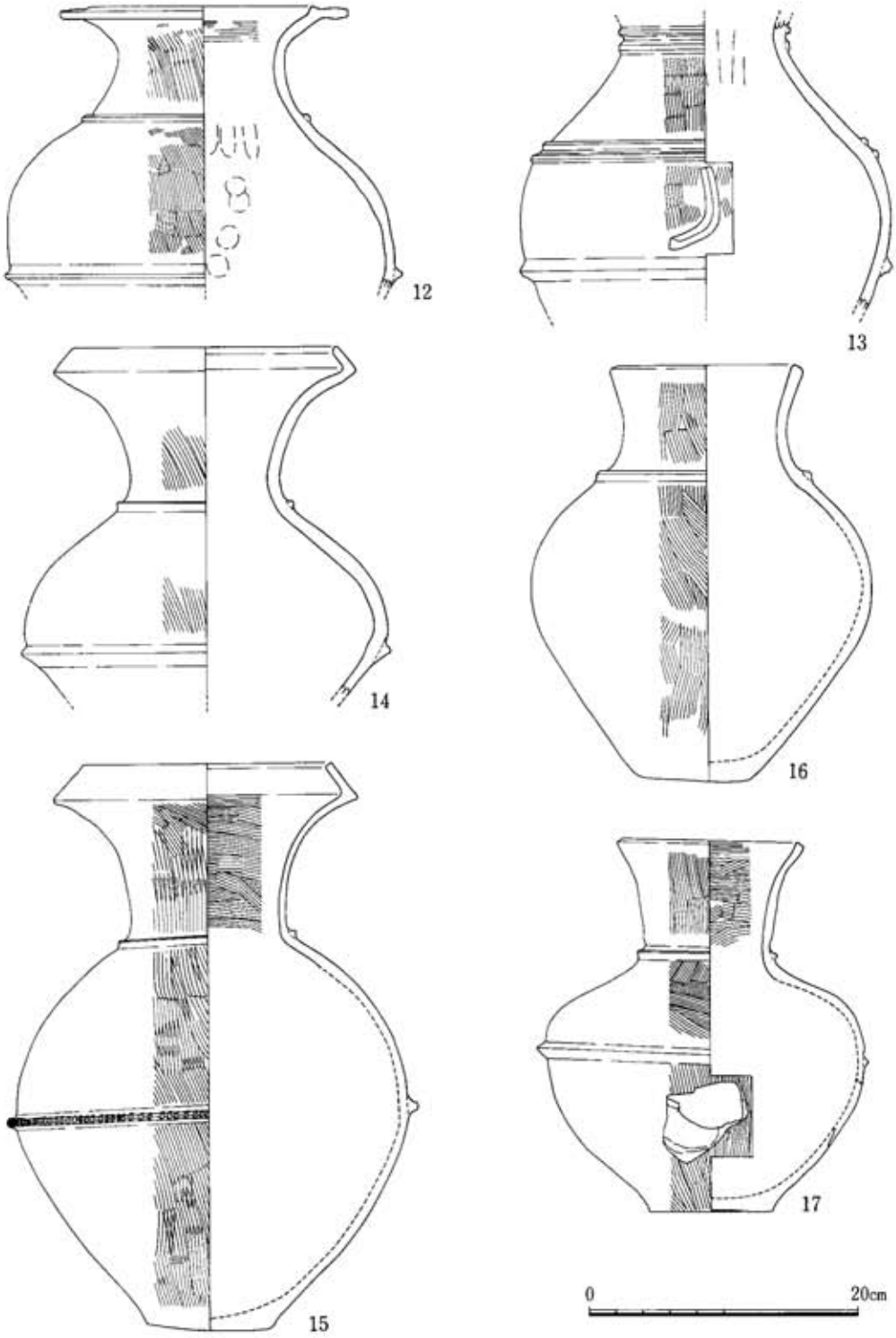


Fig. 47　I区SX123出土弥生土器③

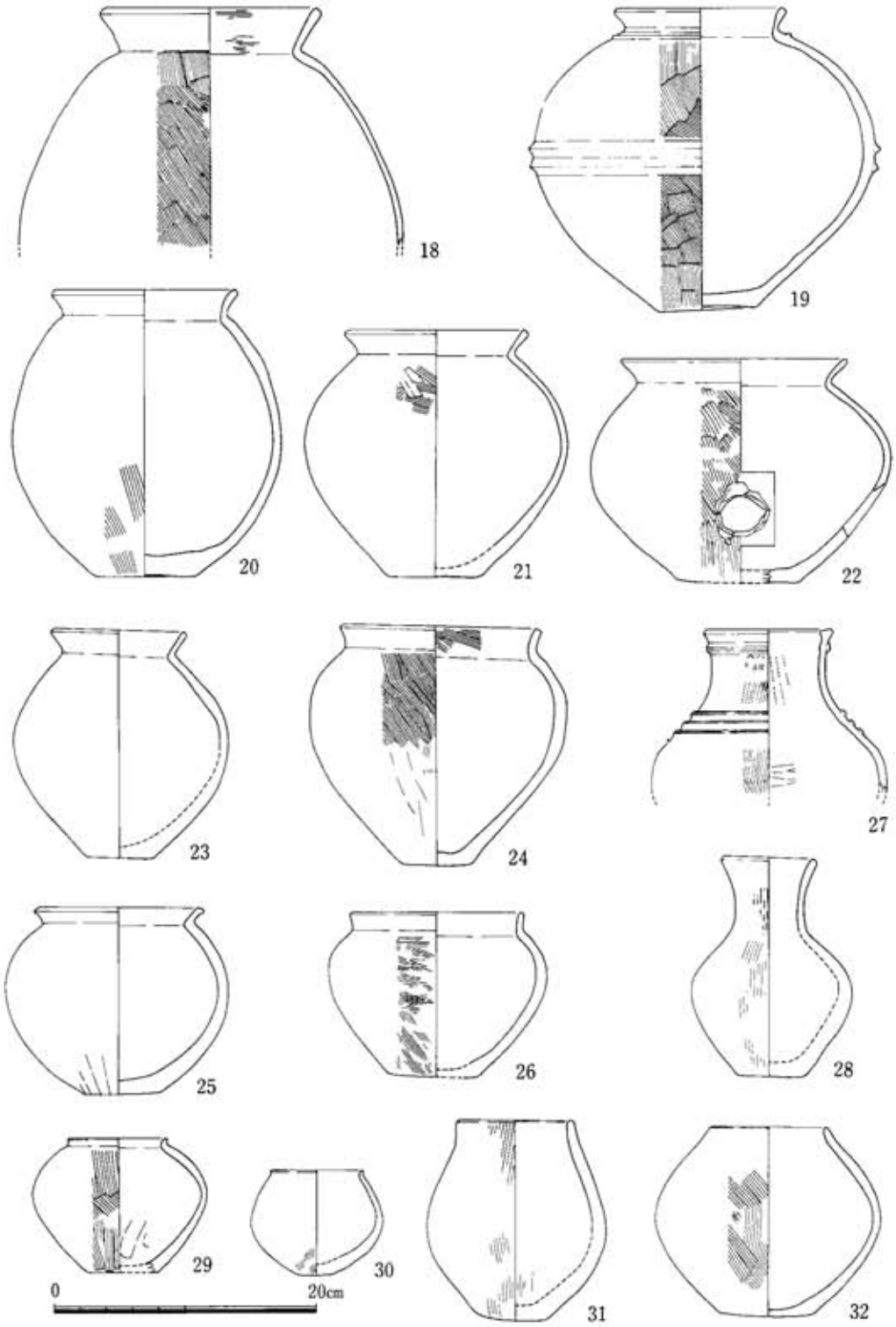


Fig. 48　I区SX123出土弥生土器④

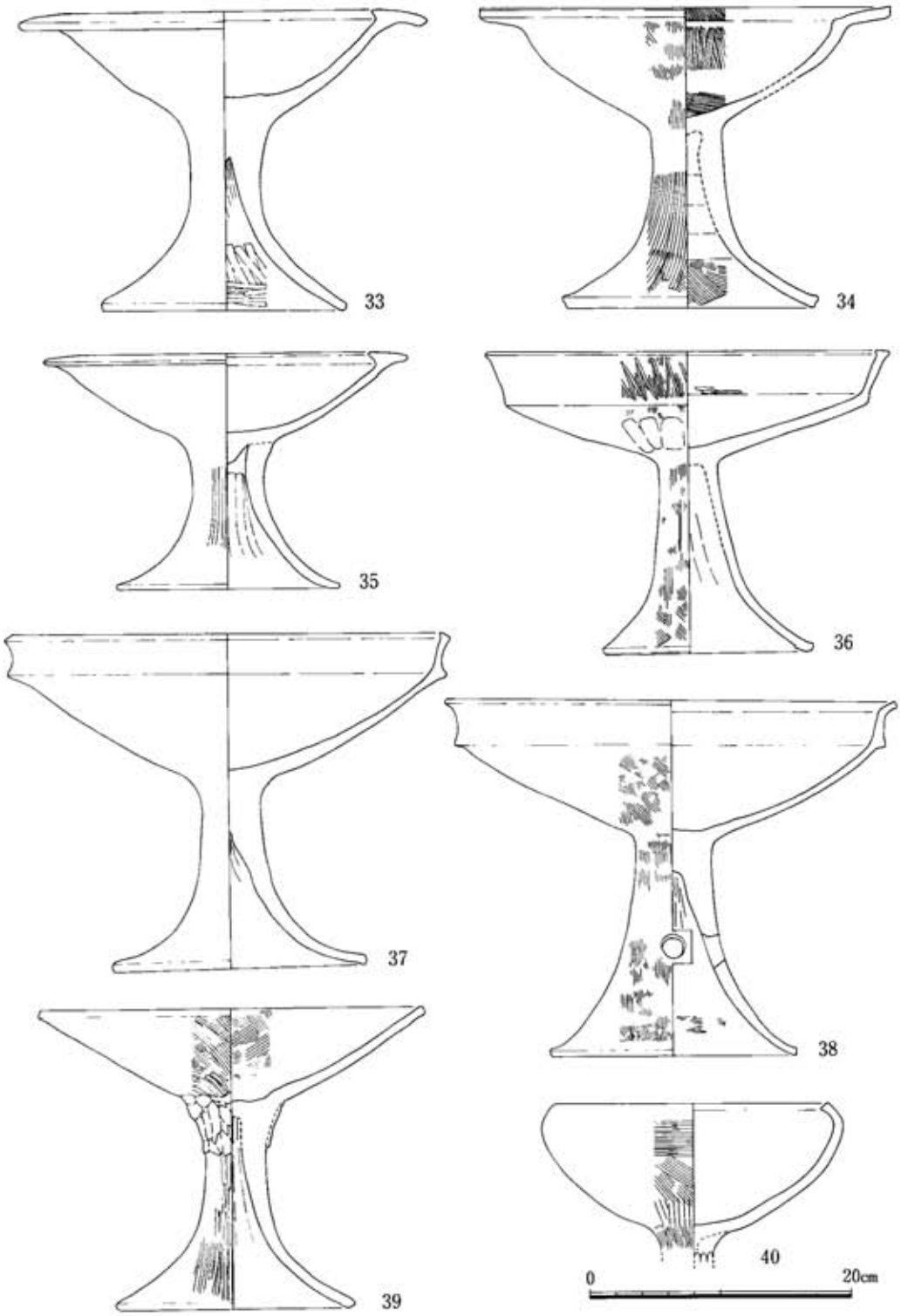


Fig. 49　I区SX123出土弥生土器⑤

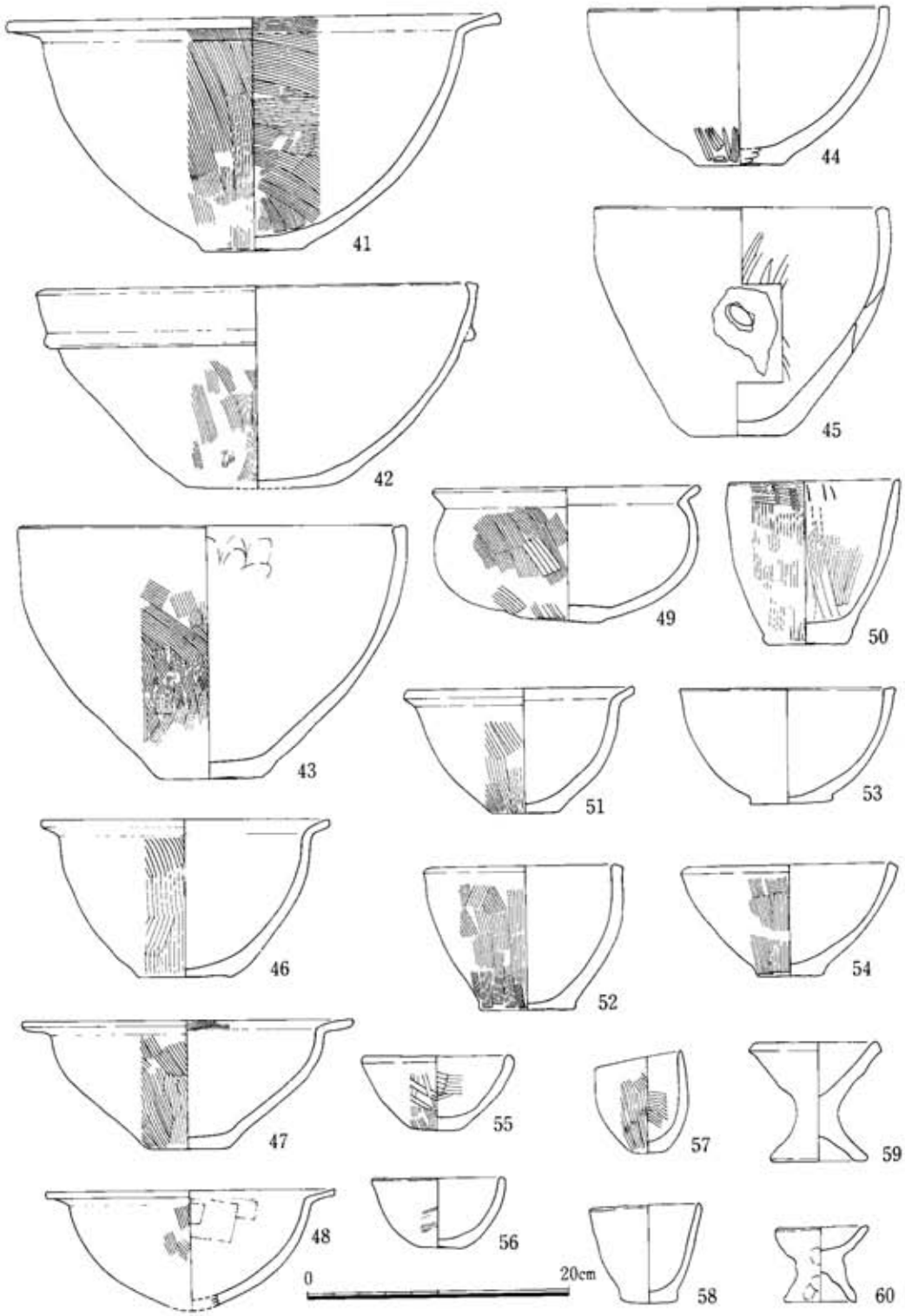


Fig. 50　Ⅰ区SX123出土弥生土器⑥

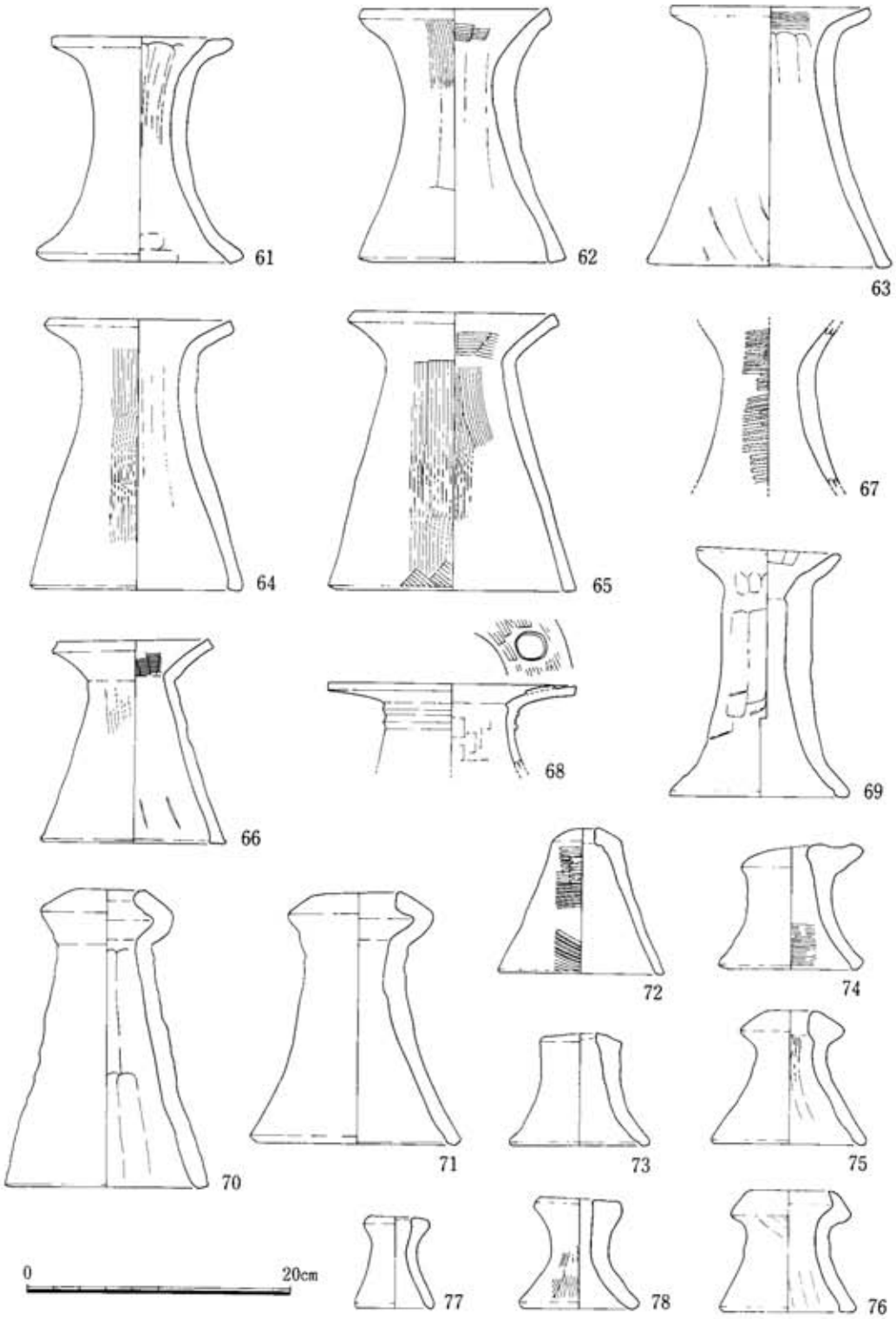


Fig. 51　I区SX123出土弥生土器⑦

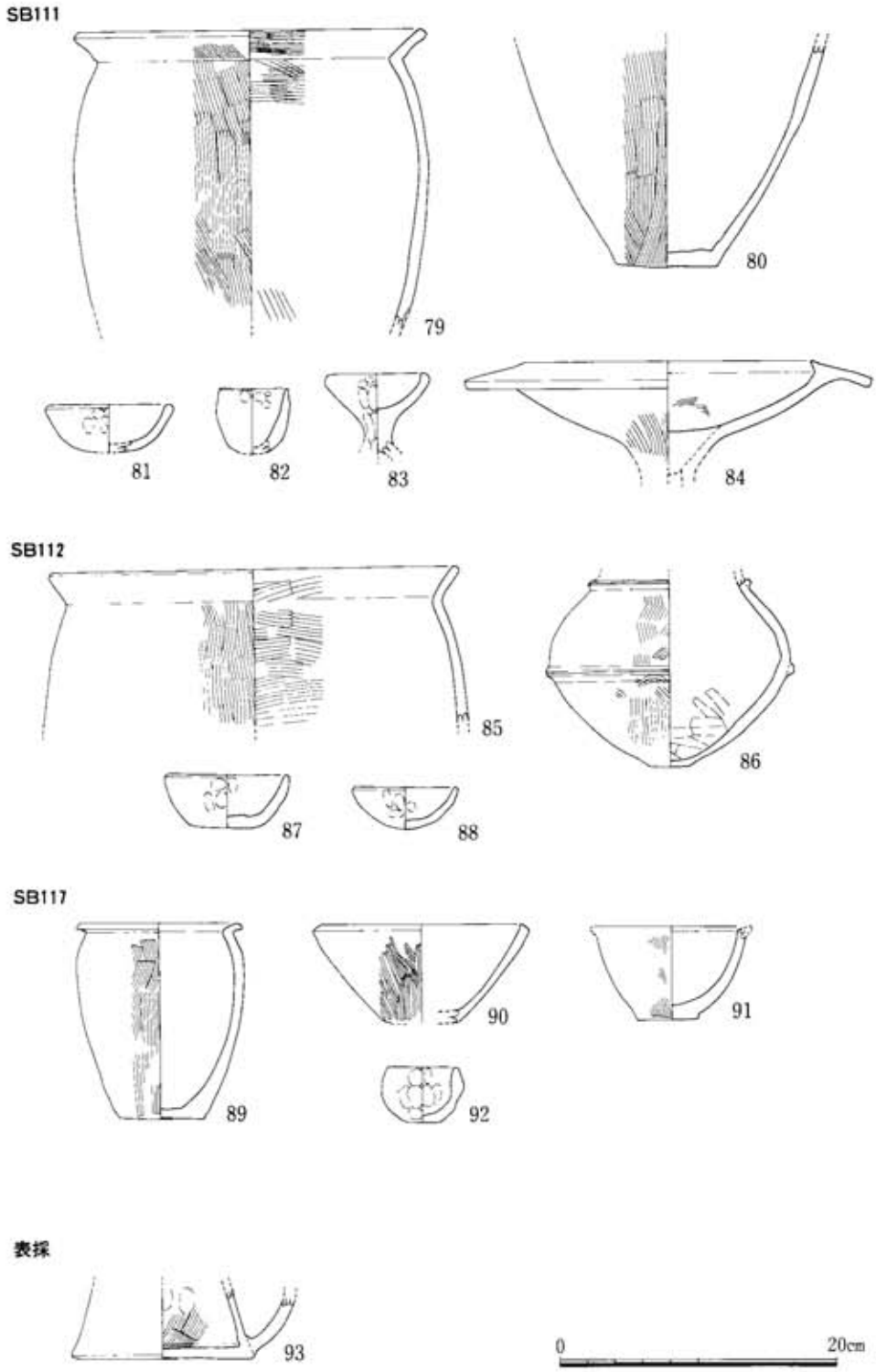


Fig. 52　1区竪穴住居跡出土弥生土器

Tab. 4　I区出土弥生土器観察表

※　「図番号」下段数字は遺物登録番号

図番号	出土遺構	種別	法量cm	形態・技法等の特徴
1 88001772	SK123	甕棺	口径　42.6 器高　87.0	体部は砲弾形で下位がすぼまり、小さな平底。全体に歪む。「く」字口縁で、口縁下と胴中位下に台形突帯。外面に粗いハケ目、内面ハケ目のあとナデ。茶褐色。
2 88001760	SK123	大形甕	口径　36.9 器高　57.4	大きく開いた「く」字口縁で口縁下に三角突帯。体部は砲弾形で小さな平底。外面はハケ目のあとかるくナデ、内面にハケ目を残す。黒褐色で外面一部に煤付着。
3 89009759	SK123	大形甕	口径　32.9 器高　47.4	口縁部はやや外反気味の「く」字口縁で、体部は上位に最大径をおき、平底。体部外面にハケ目、内面はハケ目のあとナデ、口縁部内面にハケ目を残す。茶褐色。
4 89009765	SK123	中形甕	口径　25.8 器高　37.1	口縁部は「く」字形に折れ、体部はあまり張らず安定した平底。体部外面にハケ目、内面はハケ目のあとナデ、口縁部外面にハケ目を残す。外面黒褐色、内面褐色。
5 88020025	SK123	中形甕	口径　21.0 器高　29.2	口縁部は不明瞭に折れて外反し、体部は張りがよわい。全体に厚手でやや粗製。外面は粗いハケ目のあと体部下位へラケズリ、内面はハケ目のあとナデ。褐色。
6 88001764	SK123	小形甕	口径　17.2 器高　20.5	口縁部は短く「く」字に折れ、体部はあまり張らず大きめの平底をつくり下位厚手。体部外面にハケ目を残し、他はナデ仕上げ。茶褐色で外面上位に煤付着。
7 88001734	SK123	小形甕	口径　16.1 器高　21.8	台付甕。口縁部は「く」字に折れて大きく開き、体部は中位やや上で大きく膨らむ。体部外面はハケ目のあとかるくナデ、他はナデ仕上げ。明茶褐色。
8 88001992	SK123	小形甕	口径　17.7 器高　16.2	口縁部は不明瞭に折れ、体部はあまり張らず大きめの平底をつくる。体部やや厚手。体部外面にハケ目を残し、他はナデ仕上げ。明るい褐色。
9 88001948	SK123	小形甕	口径　17.2 器高　18.3	口縁部は短く「く」字に折れて開き、体部はあまり張らず大きめの平底。全体に厚手でロ形歪む。体部外面と口縁内面にハケ目、他はナデ仕上げ。茶褐色で外面に煤付着。
10 88001769	SK123	小形甕	口径　15.7 器高　13.5	短胴甕。口縁部は外反気味に「く」字に折れ、体部は球形で安定した平底をつくる。体部は内外面ハケ目のあと外面ナデ。底部にもハケ目。茶褐色で、外面に煤付着。
11 89009709	SK123	小形甕	口径　12.7 器高　11.9	短胴甕。口縁部は短く「く」字に折れ、体部は球形で安定した平底をつくる。内外面ハケ目のあと体部外面下位ナデ。灰褐色で、外面に煤付着。
12 88001752	SK123	大形壷	口径　21.2 器高	口縁部は上面平坦を意図し、頸部から胴部にかけてS字形をつくる。台形突帯を胴頸間に2条、胴部中位やや下に1条巡らす。内外面ハケ目のあと内面ナデ仕上げ。茶褐色。
13 88002110	SK123	大形壷	胴径　27.0 器高	頸部から胴部にかけてS字形をつくる。台形角突帯を胴頸間2条、胴部にに2+1条巡らす。胴部にJ形の粘土貼り付けあり。内外面ハケ目のあと内面ナデ仕上げ。黄褐色。
14 88001973	SK123	大形壷	口径　19.0 器高	「く」字形の複合口縁から頸部が急にすぼまり、胴部は頸部と稜をなし球形にちかく張る。頸胴間と胴部中位に三角突帯各1条。外面にハケ目痕あり。淡褐色。
15 89009743	SK123	大形壷	口径　18.0 器高　41.5	「く」字形の複合口縁から頸部が急にすぼまり、胴部は中位がつよく張る。頸胴間と胴部中位やや下に三角突帯各1条巡らす。外面頸胴部と頸部内面にハケ目残る。淡褐色。
16 88001996	SK123	中形壷	口径　14.1 器高　30.5	頸部がやや開いて直行し、そのまま口縁部となる。胴部は中位やや上がつよく張り、やや不安定な平底をつくる。頸胴間に三角突帯。外面ハケ目。褐色。
17 89009730	SK123	中形壷	口径　12.9 器高　27.4	頸部が開きながら直行し口縁部をつくり、胴部は低く横につよく張る。頸胴間と胴部中位に三角突帯各1条。外面と頸部内面にハケ目残る。胴部下位に内側から穿孔。褐色。
18 88001758	SK123	大形壷	口径　15.9 器高	口縁部は球形胴部から「く」字に折れて開く。胴部外面ハケ目、胴部内面および口縁部なで仕上げ。茶褐色。
19 88001737	SK123	中形壷	口径　12.2 器高　22.7	口縁部は「く」字に折れ、端部肥厚。胴部は球形につよく張り、頸胴間に三角突帯2条を巡らす。胴部外面に丁寧なハケ目を残す。茶褐色。
20 88002004	SK123	中形壷	口径　13.6 器高　21.5	口縁部は「く」字に折れて外反気味に開き、胴部は球形に膨らみ安定した厚い平底。胴部外面はハケ目のあとナデ仕上げ。茶褐色。

図番号	出土遺構	種別	法量cm	形態・技法等の特徴
21 88002003	SK123	中形壺	口径　13.0 器高　18.5	口縁部は「く」字に折れ、胴部は中位やや上に最大径をおく。胴部外面はハケ目のあとナデ仕上げ。茶褐色。
22 88001742	SK123	中形壺	口径　16.6 器高　16.8	口縁部は「く」字に折れ、胴部は低くつぶれて中位やや上に最大径をおき安定した平底をつくる。胴部外面はヘラミガキ、他ナデ仕上げ。胴部下位に内側から穿孔。茶褐色。
23 89009714	SK123	小形壺	口径　9.7 器高　17.1	口縁部は「く」字に折れて頸部がつよく締まり、胴部は中位が張る。外面摩滅のため調整不明瞭。焼成不良で軟質。灰褐色。
24 89009764	SK123	小形壺	口径　14.2 器高　18.1	胴部は上位肩が張り、口縁部は緩く折れて直立気味に立つ。底部は小さくやや不安定。胴部外面はハケ目のあと下位ヘラなで。内面は口縁部にハケ目を残し他ナデ。茶褐色。
25 88001968	SK123	小形壺	口径　12.0 器高　14.0	口縁部は「く」字形に短く折れ、球形胴部をもつ。全体に厚手。内外面ともヘラナデ仕上げ。黄褐色。
26 88001738	SK123	小形壺	口径　12.7 器高　12.5	胴部は上位肩が張り、口縁部は急に折れて直立。摩滅のため調整不明瞭ながら、胴部外面にハケ目残る。明茶褐色。
27 88001800	SK123	小形壺	口径　9.3 器高	胴部は上位がつよく張り、頸部は緩く直立気味に立ち上がり、口唇部をナデて平坦につくる。口縁部下と頸胴間に凹形突帯を巡らす。外面ハケ目のあとナデ。淡茶褐色。
28 89009708	SK123	小形壺	口径　6.6 器高　16.5	長頸壺。胴部は肩が張り、頸部は緩く折れて外反気味に立ち上がる。胴部やや厚手。外面にハケ目痕残る。淡茶褐色。
29 88001920	SK123	小壺	口径　7.4 器高　10.1	胴部は上位が張り、口縁部は短く折れて立ち先端を薄くナデる。外面ハケ目、内面ナデ仕上げ。茶褐色。
30 88001767	SK123	小壺	口径　6.8 器高　7.8	無頸小壺。胴部は不安定な底部から立ち上がって下位が張り、口縁部はナデて短く外反する。外面底部付近にハケ目残る。明茶褐色。
31 89009712	SK123	小壺	口径　8.5 器高　15.0	無頸壺。胴部は不安定な底部から立ち上がって下位が張り、口縁部は緩く立ち上がる。全体に厚手。内外面にハケ目残る。茶褐色。
32 88002005	SK123	小形壺	口径　8.4 器高　14.2	無頸壺。胴部は中位がつよく張り、上位が内傾して口縁部をつくる。底部は平底だが、大きさのわりにやや不安定。外面ハケ目のあとナデ、内面ナデ仕上げ。明褐色。
33 88001743	SK123	高坏	口径　30.6 器高　22.6	坏部口縁は鋤先状で外端下傾。脚は筒部から裾部までラッパ状に開く。坏部はヘラミガキと思われるが磨耗のため調整不明瞭。脚部は内外面ともヘラケズリ。茶褐色。
34 88001733	SK123	高坏	口径　30.9 器高　22.7	坏部口縁はL字状で外端やや上向。脚は筒部から裾部までラッパ状に開く。坏部は内面ヘラミガキ、外面ハケ目のあとナデ。脚部は内外面ともハケ目残る。明茶褐色。
35 88001917	SK123	高坏	口径　27.4 器高　17.7	坏部口縁は鋤先状。脚は筒部から裾部までラッパ状に開く。坏部はヘラミガキと思われるが磨耗のため調整不明瞭、一部ハケ目残る。脚部は外面ハケ目。茶褐色。
36 88001732	SK123	高坏	口径　29.0 器高　22.9	坏部は口縁部が折れて直線的に立ち、脚部は小さくラッパ状に開く。坏部内面ヘラケズリ、外面はハケ目ナデの上にヘラ描き暗文。脚部はハケ目のあとナデ。明茶褐色。
37 88001739	SK123	高坏	口径　32.1 器高　25.3	坏部は上端外面に稜を作り屈曲口縁に見せ、端部外反。脚部はラッパ状に開き、裾が大きく開く。磨耗のため調整不明。茶褐色。
38 88001744	SK123	高坏	口径　33.8 器高　26.9	坏部は上端外面に稜を作り屈曲口縁に見せる。脚部はラッパ状に裾が開き、透孔1個を穿ける。坏部は内面ナデ、外面および脚部はハケ目のあとナデ。淡茶褐色。
39 88001745	SK123	高坏	口径　28.6 器高　22.7	坏部は口縁まで直線的に大きく開き、脚部はラッパ状に開く。坏部は内外面ともハケ目下端タタキ目。脚部は外面ヘラミガキ、坏接合部ナデツケ。淡茶褐色。
40 89009728	SK123	高坏	口径　20.4 器高	坏部は深く、口縁部が内側に巻き込むように内湾。外面ハケ目、口縁部から内面にかけてナデ。脚部欠失。茶褐色。

図番号	出土遺構	種別	法量cm	形態・技法等の特徴
41 88001928	SK123	大形鉢	口径 37.2 器高 17.6	口縁部は折れて大きく外に開き、体部は丸みを帯びて深く、安定した平底をつくる。内外面ともハケ目。茶褐色。
42 88001994	SK123	大形鉢	口径 32.0 器高 15.3	口縁部は内湾する体部からそのまま立ち上がり、やや不安定な大きな平底。口縁下に突帯1条を巡らす。外面はハケ目のあとナデ、内面ナデ仕上げ。明茶褐色。
43 88001999	SK123	大形鉢	口径 28.9 器高 19.3	体部は深く、口縁部は直行気味に立ち上がる。口唇部はかるくナデる。外面ハケ目のあと口縁部と体部下位ナデ、内面ナデ。茶褐色。
44 88001768	SK123	中形鉢	口径 22.5 器高 11.8	口縁部は体部から伸びてやや急に立ち上がる。内外面ナデ仕上げで、外体部の底部付近にヘラミガキ。茶褐色。
45 88001997	SK123	中形鉢	口径 20.8 器高 17.5	やや粗いつくりの深鉢。口縁部は体部からやや内湾気味に立ち上がり、口唇部はかるくナデる。体部に内側から1箇所孔を穿ける。外面ナデ、内面ヘラナデ。茶褐色。
46 88002034	SK123	中形鉢	口径 21.8 器高 12.0	口縁部は折れて外に開き、体部は比較的深く、安定した平底をつくる。体部は外面ハケ目、内面ナデ、口縁部はナデて仕上げる。黄褐色。
47 88001960	SK123	中形鉢	口径 24.7 器高 9.8	口縁部は水平にちかく折れて外に開き、体部は浅く、やや不安定な平底をつくる。体部は外面内ハケ目、内面ヘラナデ、口縁部は内面にハケ目を残す。淡褐色。
48 88002997	SK123	中形鉢	口径 22.0 器高 8.9	口縁部は折れて大きく外に開き、体部は比較的浅く、尖り気味の丸底をつくる。体部は外面に一部ハケ目を残し、内面ヘラナデ、口縁部ナデ。焼成やや不良で褐色。
49 88001784	SK123	中形鉢	口径 19.8 器高 10.2	口縁部は「く」字に折れ、体部は低くつぶれて外に張り、不安定な平底をつくる。体部外面ハケ目、他ナデ仕上げ。茶褐色。
50 88001781	SK123	小形鉢	口径 12.6 器高 12.4	粗製深鉢。体部から口縁部にかけて直行。内外面ハケ目のあとかるくナデ。茶褐色。
51 88001962	SK123	小形鉢	口径 16.9 器高 9.6	口縁部は短く折れて外に開き、体部は比較的深くやや厚手。体部外面ハケ目、内面および口縁部ナデ。淡褐色。
52 88001780	SK123	小形鉢	口径 13.7 器高 10.9	粗製深鉢。体部は緩く立ち上がり、口縁部直行。体部は外面ハケ目のあとナデ、内面ヘラナデ、口縁部ナデ。茶褐色。
53 88009727	SK123	小形鉢	口径 16.0 器高 8.7	体部は比較的深く、丸味をもって立ち上がり、口縁部付近で直行。内外面ともナデ仕上げ。淡褐色。
54 88001777	SK123	小形鉢	口径 15.2 器高 8.4	体部はあまり膨らまずに立ち上がり、口縁部付近と底部肥厚。外面ハケ目、内面ナデ仕上げ。茶褐色。
55 88001988	SK123	小鉢	口径 10.8 器高 5.7	粗製。口縁部はかるくナデ、底部はやや不安定な平底。内外面ともハケ目のあと口縁部ナデ。褐色。
56 88001981	SK123	小鉢	口径 9.8 器高 5.3	体部はやや急に立ち上がり、不安定な平底。内外面ともハケ目のあとナデ。褐色。
57 89009736	SK123	小鉢	口径 6.5 器高 7.8	体部から口縁部が直立し、不安定な平底。全体に歪む。内外面ともハケ目のあと口縁部ナデ。褐色。
58 89009735	SK123	小鉢	口径 8.0 器高 7.6	粗製。体部から口縁部にかけて直線的に立ち上がり、不安定な平底内外面ともナデ。褐色。
59 89009740	SK123	小鉢	口径 9.0 器高 9.1	台付小鉢。体部は直線的に開き、台部は裾が大きく高く開く。つくりは厚手。内外面ともヘラナデ。褐色。
60 89009739	SK123	小鉢	口径 6.7 器高 5.7	粗製台付小鉢。体部は浅く、台部は裾があまり開かず高い。内外面ともナデ。褐色。

図番号	出土遺構	種別	法量cm	形態・技法等の特徴
61 88002039	SK123	器台	口径　12.6 器高　17.0	体部は鼓形器台の形制をわずかに残すが、口縁部、裾部も大きく開く。内外面ともナデ仕上げ。茶褐色。
62 88002050	SK123	器台	口径　13.9 器高　19.3	体部裾が直線的に開き、口縁部は緩やかに外反する。内外面上位にハケ目を残し、他ナデ仕上げ。茶褐色。
63 88002043	SK123	器台	口径　14.8 器高　19.7	体部裾が直線的に開き、口縁部は急に大きく外反する。口縁部内面にハケ目を残し、他ナデ仕上げ。暗灰褐色。
64 88002051	SK123	器台	口径　13.7 器高　20.5	体部裾はやや湾曲気味に開き、口縁部はやや急に外反する。体部外面にハケ目を残し、他ナデ仕上げ。暗褐色。
65 88001789	SK123	器台	口径　15.0 器高　21.1	体部裾が直線的に開き、口縁部は「く」字にちかく急に折れる。内外面ハケ目のあと口縁部および体部内面下位ナデ。茶褐色。
66 89009741	SK123	器台	口径　11.2 器高　14.5	小形器台。体部裾が直線的に開き、口縁部は「く」字にちかく急に折れる。口縁部内面と体部外面一部にハケ目を残し、他ナデ。褐色。
67 88002022	SK123	器台	口径 器高	口縁部および裾部は緩やかに開くか。外面は粗いハケ目、内面ナデ。淡褐色。
68 88001750	SK123	器台	口径　18.5 器高	装飾を施した精製器台片。口縁部は内面に稜をつくって水平にちかく外反、上面に円文を貼る。口縁下に2条突帯。体部内面へラケズリ、他はハケ目のあとナデ。茶褐色。
69 88002045	SK123	器台	口径　10.2 器高　19.0	粗製。体部は筒状に細長く伸びる。内外面とも粗く指またはヘラナデ。褐色。
70 88002046	SK123	器台	口径　4.7 器高　22.7	体部は直線的に高く開き、袋状口縁部をつくる。内外面ともナデ。茶褐色。
71 89009742	SK123	器台	口径　5.6 器高　19.1	体部は緩やかに裾が開き、袋状口縁部をつくる。内外面ともナデ。茶褐色。
72 88002019	SK123	支脚	底径　12.2 器高　11.1	体部は直線的に開き、上面に円孔を穿ける。外面は粗いハケ目、内面ナデ。褐色。
73 88009703	SK123	支脚	底径　5.9 器高　8.5	体部上位は直に立ち上がり上面に円孔を穿け、裾部が緩く開く。内外面ともナデ。茶褐色。
74 89009723	SK123	支脚	底径　9.6 器高　9.2	体部上位は直に立ち上がり、上面は片側に嘴形突起をもち円孔を穿ける。裾部は緩く開く。内面裾部にハケ目、他ナデ。茶褐色。
75 89009718	SK123	支脚	底径　11.3 器高　10.1	体部裾は直線的に開き、口部は突起状に稜をもって外に張り、上面に円孔を穿ける。内外面ともナデ。茶褐色。
76 89001795	SK123	支脚	底径　9.8 器高　9.2	体部裾は緩く開き、口部は袋状に稜をもって外に張り、大きな円孔を穿ける。内外面ともナデ。茶褐色。
77 88001975	SK123	支脚	底径　8.1 器高　8.5	鼓形。内外面ともナデ。黒褐色。
78 88001974	SK123	支脚	底径　5.4 器高　7.1	鼓形ながら裾が大きく開く。外面一部にハケ目を残して内外面ともナデ。淡褐色。
79 89009648	SB111	中形甕	口径　24.6 器高	口縁部は「く」字に折れ、体部は張りが少ない。内外面ともハケ目のあと体部内面へラナデ。淡褐色。
80 89009649	SB111	中形甕	底径　7.2 器高	体部は平底から緩く立ち上がる。79と同形か。体部外面ハケ目、内面へラナデ。明褐色。

図番号	出土遺構	種別	法量cm	形態・技法等の特徴
81 89009652	SB111	小鉢	口径 8.5 器高 3.4	体部は丸く立ち上がる。丸底。手捏ねで内外面ユビオサエ、ナデ。焼成不良で褐色。
82 89009653	SB111	小鉢	口径 4.0 器高 4.7	丸底から体部直行。手捏ねで内外面ユビオサエ、ナデ。明褐色。
83 89009651	SB111	小鉢	口径 6.5 器高	台付。体部は比較的浅く、台部は裾が高く開く。手捏ねで内外面ユビオサエ、ナデ。明褐色。
84 89009650	SB111	高坏	口径 29.2 器高	坏部のみ一部残。口縁部は撥先状で端部下向。坏部は浅い。内外面ともハケ目のあとナデ。脚部との接合は坏底部内面から臍状に粘土を充塡。濃茶褐色。
85 89009657	SB112	中形甕	口径 29.3 器高	口縁部はややあまく「く」字に折れ、体部はあまり張らない。内外面ともハケ目のあと口縁部ナデ。茶灰色。
86 89009656	SB112	壺	胴径 17.7 器高	胴部は中位がつよく張り、不安定な小平底。頸胴間と胴部中位に凹形突帯を各1条。頸部は内傾して長く伸びるか。外面ハケ目のあとナデ、内面ユビ、ヘラナデ。茶褐色。
87 89009654	SB112	小鉢	口径 8.6 器高 3.8	平底から体部がやや急に立ち上がる。直行。手捏ねで内外面ユビオサエ、ナデ。褐色。
88 89009655	SB112	小鉢	口径 7.1 器高 3.0	丸底から体部が湾曲して立ち上がる。手捏ねで内外面ユビオサエ、ナデ。茶褐色。
89 89009700	SB117	小形甕	口径 11.4 器高 14.0	体部はあまり膨らみがなく口縁下が最大径となり、安定した平底。口縁部は短く急に折れる。体部は外面ハケ目、口縁部および体部内面ナデ。茶褐色。
90 89009699	SB117	鉢	口径 14.0 器高 7.1	やや不安定な平底から体部が直線的に開いて伸びる。器壁は上位肥厚。外面は粗くヘラミガキ、内面および口縁部ナデ。褐色。
91 89009697	SB117	鉢	口径 11.4 器高 6.8	体部は安定した平底から湾曲して立ち上がって深く、口縁部はナデて外にめくれるか。外面ハケ目のあとナデ、内面ナデ。茶褐色。
92 89009698	SB117	小鉢	口径 4.8 器高 4.0	丸底から体部が湾曲して立ち上がる。手捏ねで内外面ユビオサエ、ナデ。茶褐色。
93 89009749	検出面	把手付碗	底径 13.2 器高	ジョッキ形。広底で体部はつよく内傾して立ち上がる。底部ちかくに把手基部。全体に薄手精良なつくり。外底部と体部内面はハケ目のあとナデ、体部外面ナデ。淡茶褐色。

b．石器

主に竪穴住居跡から、石包丁、石斧、紡錘車、砥石が出土した。Ⅰ・Ⅲ区を合わせて示す。

94～99は石包丁。図示した6点に見られるように、形態には、脊の両側端部を研ぎ落とした94・95・97と、脊が直線をなす96・99、及び両側端部を脊と直角に切り落とした98の3タイプがある。**94**は刃一部が破損、他はいずれも半分ちかくを欠失しており、そのため廃棄されたものと見られる。**94**は全体の整形がやや雑である。穿孔が一方に偏っているが、破損等による再加工の結果かあるいは加工途中に一方を短く削る必要があったものであろう。横幅11.3cm、縦幅4.7cm、厚さ0.8cm。凝灰岩。Ⅲ区表面採集。**95**は薄い板石を使用しており、面がやや湾曲している。紐通し孔は脊の近くに小さく穿ける。横幅は残存長約7.5cm、縦幅5.1cm、厚さ0.5cm。緑泥片岩。SB415竪穴住居跡出土。**96**は研ぎ減りによるものか、刃幅が薄くなっている。横幅残存長約7.0cm、縦幅3.6cm、厚さ0.7cm。緑泥片岩。SB419竪穴住居跡出土。**97**は残存長9.5cm、縦幅5.0cm、厚さ0.8cm。凝灰岩。SB472竪穴住居跡出土。**98**は両側端を切り落とした特殊なタ

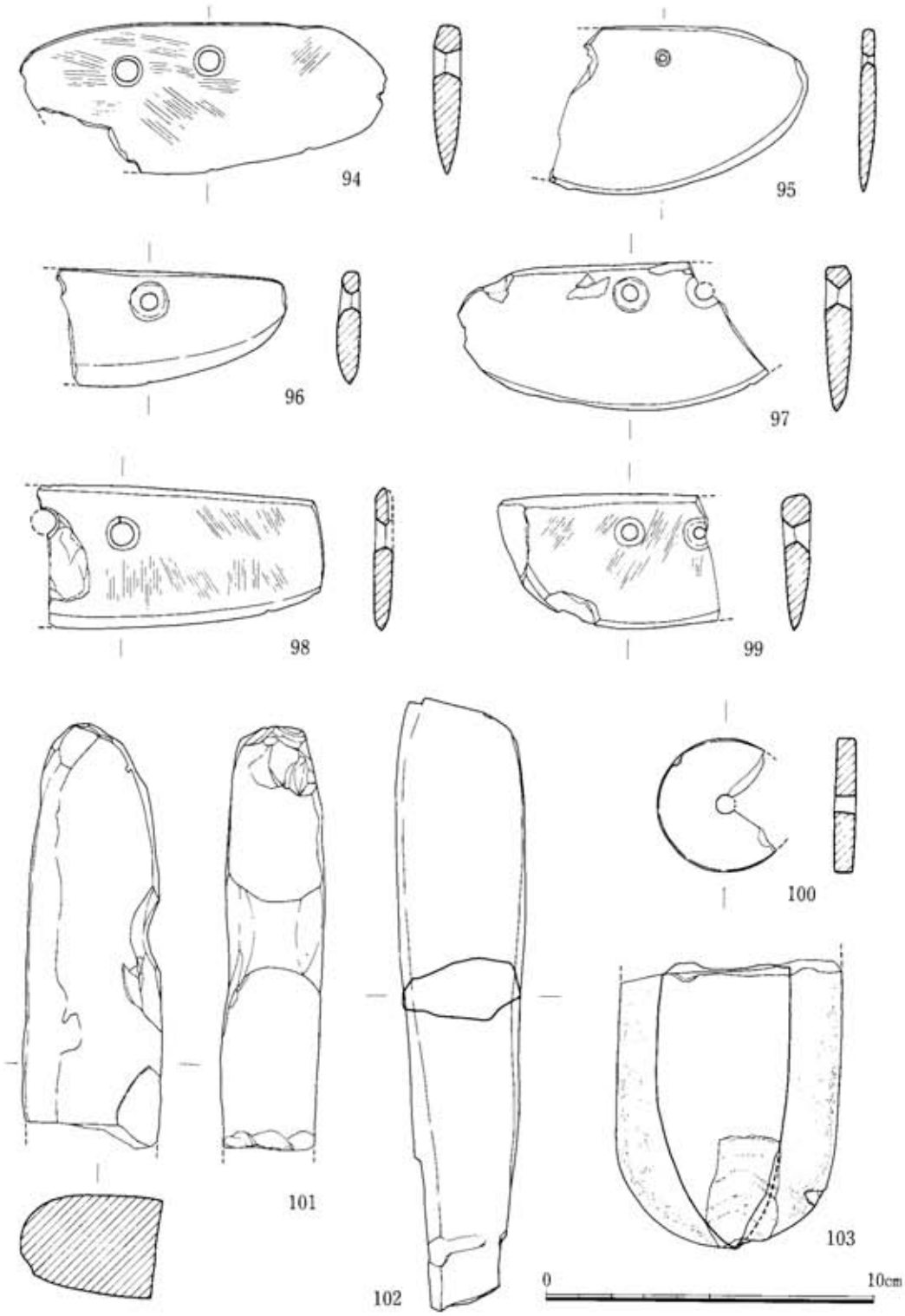


Fig. 53　Ⅰ区・Ⅲ区出土石器

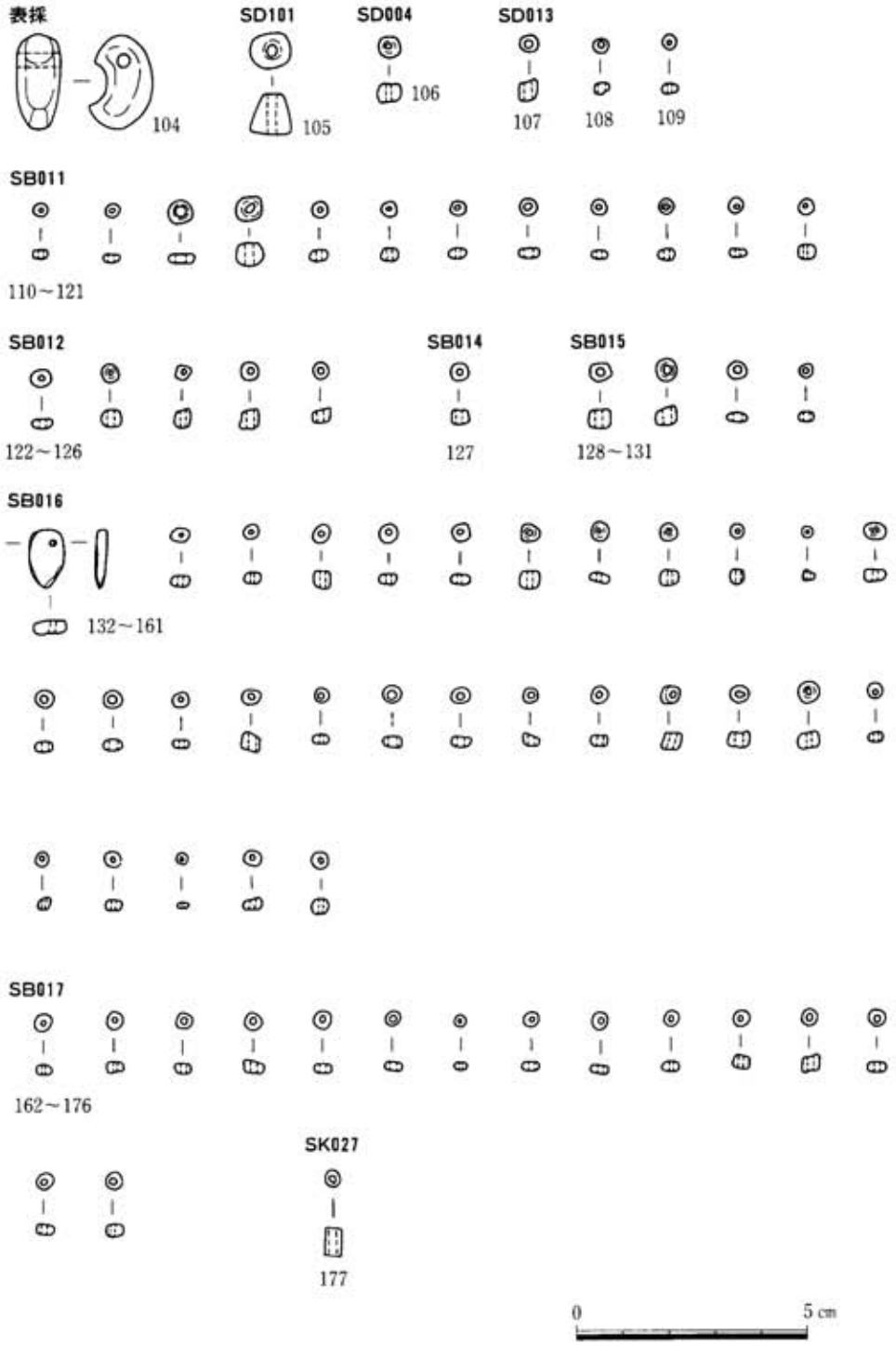


Fig. 54　I区出土玉類

イプで脊幅が異様に長い。横幅残存長約8.9cm、縦幅4.4cm、厚さ0.6cm。凝灰岩。SB409竪穴住居跡出土。**99**は刃部が両端で急にカーブして脊にあたる。横幅残存長7.8cm、縦幅4.1cm、厚さ0.9cm。凝灰岩。SK423土壙出土。

100は緑泥片岩製の紡錘車。両面及び周縁は丹念に磨いて丸く仕上げている。約4分の1を欠失する。外径4.1cm、中心孔径0.5cm。SB414竪穴住居跡出土。

101は泥岩製の抉入柱状石斧で、1点のみ出土している。脊側は平坦に調整し、頭部寄りに浅く抉りを施す。反対側の面には丸味をもたせる。頭部は荒割り調整をそのまま残し、刃部は折損している。残存長12.9cm、厚さ3.2cm。SK484土壙出土。

102は硬質泥岩製の砥石。図の下端を欠損し裏面は剝離によって薄く残存しているが、もともと細長い棒状の砥石として使用されていたと考えられる。残存長18.7cm。SB419竪穴住居跡から出土。**103**は太形蛤刃石斧の残欠。刃部は鋭利に研がれ、使用時の欠損が見られる。横断面は楕円形を呈す。残存長8.8cm、幅6.8cm、厚さ3.8cm。今山産の玄武岩を使用している。SK123土壙から後期の多量の土器に混じって出土した。

c．玉類

竪穴住居跡を中心に、勾玉1点、管玉2点、垂飾1点の他、ガラス小玉が多数出土した。

勾玉**104**は表採のため、帰属不明。石材は蛇文岩かとみられる。いくぶん黄緑色がかった濁りのつよい白色を呈す。小形品ながら丹念によく研磨されている。頭部から下端部まで比較的整った弧を描き、両端が尖る特徴をもつ。全長2.1cm。管玉のうち、**105**は縦断面が台形で小玉にちかい特殊な形をもつ。石材は濃緑色の蛇文岩を使用。長さ0.9cm、径0.9cm。SD104溝出土。**177**は深緑色をした細形の管玉である。長さ0.6cm、径0.35cm。SK027土壙出土。垂飾**132**はブルーの薄いガラス板をハート形に整形し、頭部に小孔を穿った小形品。長さ1.2cm、幅0.8cm、厚さ0.25cm。SB016竪穴住居跡からガラス小玉と共に出土した。ただし、セットかどうかは不明である。

その他は全てガラス小玉。色調はコバルトブルーを主とし、稀にスカイブルー、草色のものが混じる。径約3、4mm。SB011、SB016、SB017竪穴住居跡から比較的まとまって出土したほか、他の竪穴住居跡、溝、土壙からも数点ずつ出土している。

(2)　Ⅲ区の遺物

竪穴住居跡を中心に、土器のほか若干の石器及びガラス小玉が出土した。ここでは土器のみ図示するが、SB419竪穴住居跡から後期前半を中心とする時期の土器が比較的まとまって出土した以外は点数が少ない。

a．土器

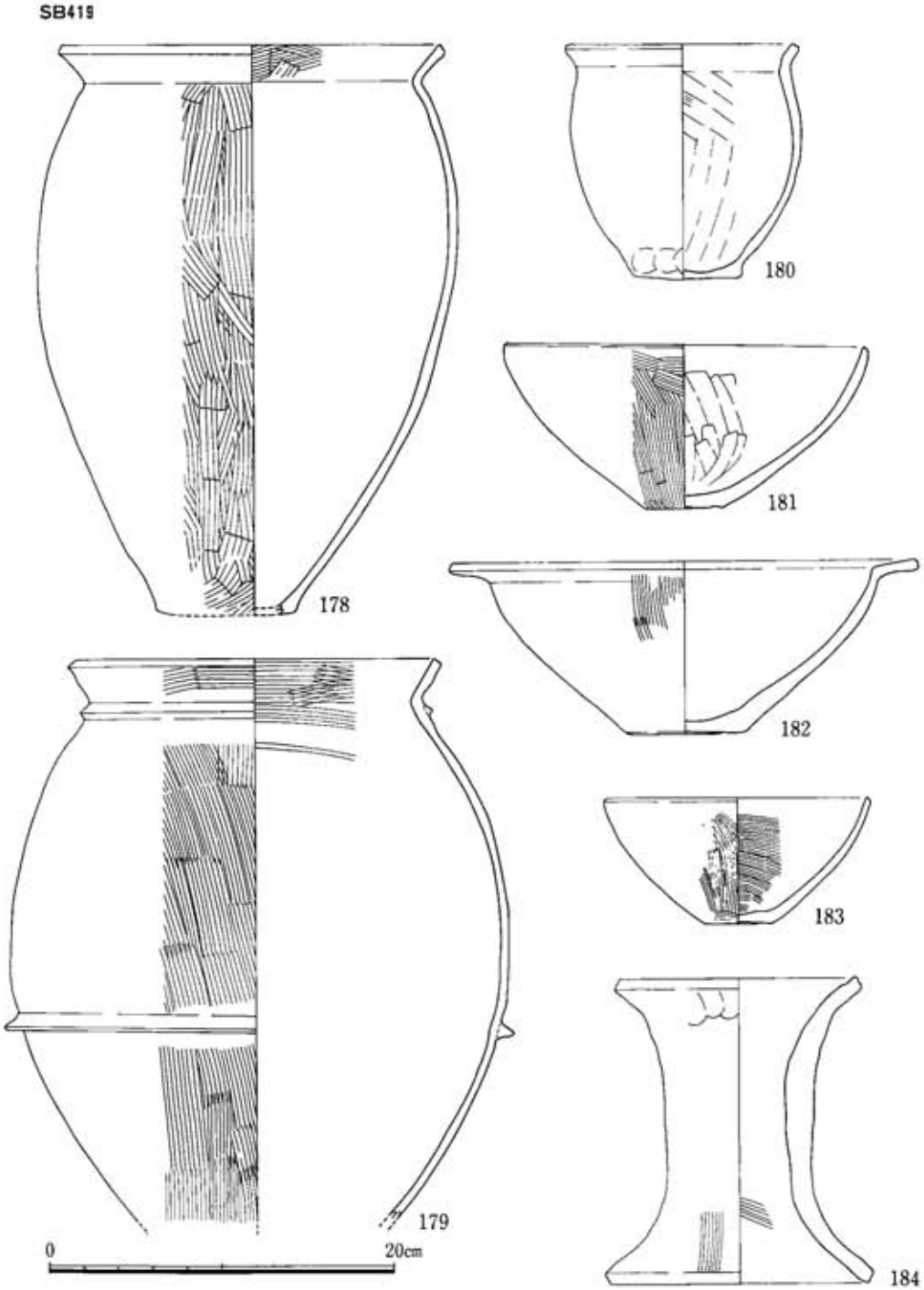


Fig. 55　Ⅲ区竪穴住居跡出土弥生土器①

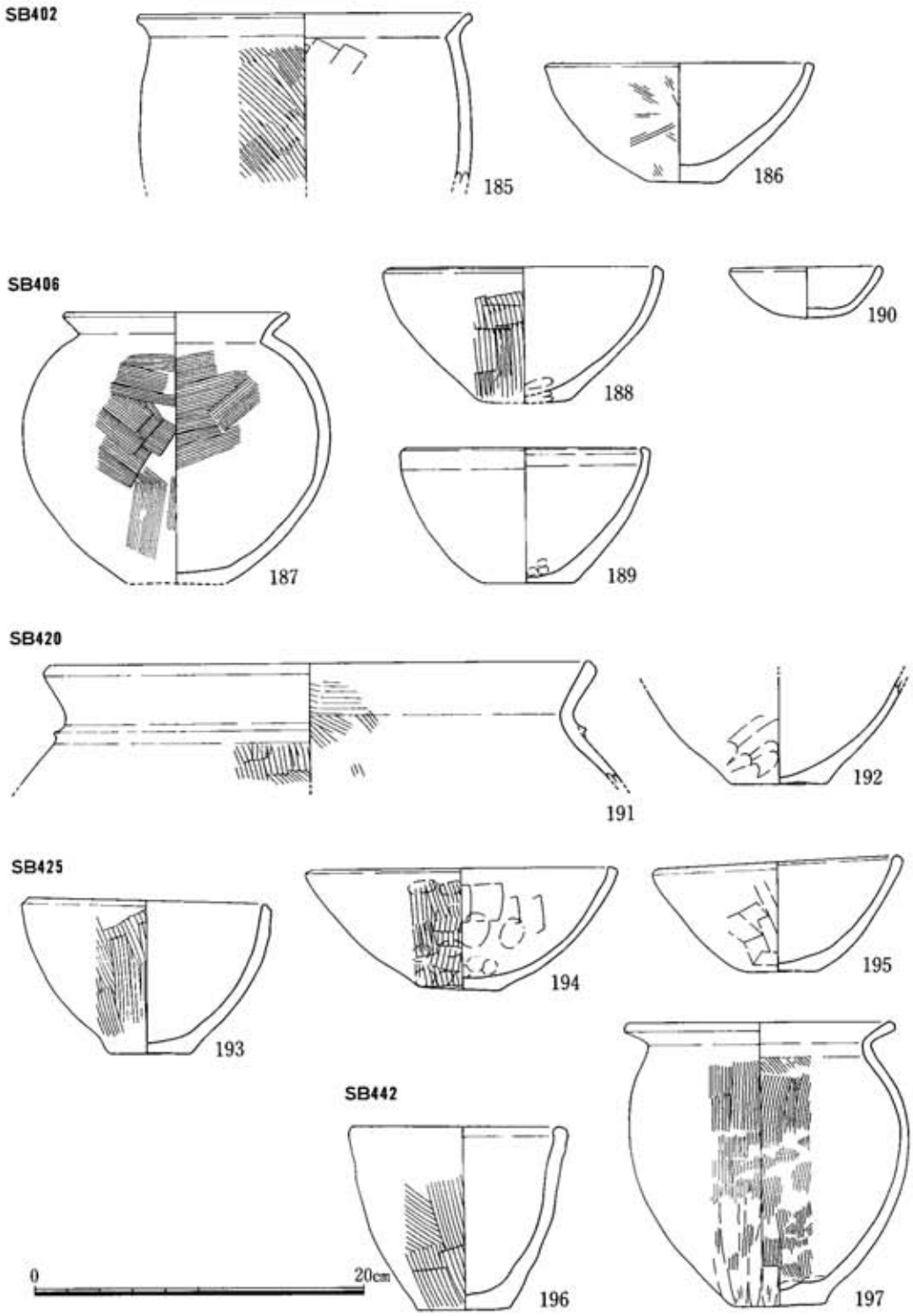


Fig. 56　Ⅲ区竪穴住居跡出土弥生土器②

Tab.5　Ⅲ区出土弥生土器観察表

※「図番号」下段数字は遺物登録番号

図番号	出土遺構	種別	法量cm	形態・技法等の特徴
178 91000453	SD019	中形甕	口径　21.6 器高　32.8	口縁部は「く」字に折れ、体部は中位上で張り、やや不安定な平底をつくる。体部外面ハケ目、内面ナデ、口縁部内面のあとナデ。褐色。
179 90003288	SD019	中形甕	口径　21.4 器高	口縁部は「く」字に折れ、体部間に三角突帯。体部は口縁部に比べて大きく膨らみ、中位下に突帯。口縁部ハケ目、体部は外面ハケ目、内面ナデ。橙色。
180 90003282	SD019	小形甕	口径　13.5 器高　13.5	口縁部は体部から不明瞭に屈曲して外反。全体に歪み、やや粗製。内外面ともハケ目のあとナデか。淡褐色。
181 89009775	SD019	鉢	口径　20.7 器高　9.5	体部は比較的浅く、小さ目の平底から緩く開いて立ち上がる。体部は外面ハケ目、内面ヘラナデ。褐色。
182 90003283	SD019	鉢	口径　27.2 器高　9.9	体部は比較的浅く、平底から緩く開いて立ち上がり、口縁部は平坦にちかく折れる。体部は外面ハケ目のあとナデ、内面ナデ。褐色。
183 91001815	SD019	鉢	口径　15.0 器高　7.3	体部は緩く湾曲して立ち上がり、小さめの平底をつくる。内外面ハケ目のあと口縁部ナデ。橙色。
184 90003286	SD019	器台	口径　14.4 器高　17.5	体部は中位で直に立ち、口縁部と裾が緩く開く。内外面とも一部ハケ目を残してナデ仕上げ。淡橙色。
185 90003395	SB302	中形甕	口径　19.7 器高	口縁部はあまり開かず「く」字に折れ、外面では屈曲がよわい。体部は張りが少ない。体部は外面ハケ目、内面は口縁部付近ヘラケズリ、他ナデ。褐色。
186 90003397	SB302	鉢	口径　15.1 器高　7.1	体部は緩く湾曲して立ち上がり、やや不安定な平底をつくる。外面ハケ目痕あり、内面ナデか。明褐色。
187 91000568	SB306	壺	口径　13.3 器高　16.4	体部は球形で不安定な平底。口縁部は急に折れて薄く外反気味に開く。体部は外面ハケ目、内面ハケ目のあと下半ナデ。口縁部ナデ。黄褐色。
188 90003392	SB306	鉢	口径　15.8 器高　7.2	体部は緩く湾曲して立ち上がり、やや不安定な平底をつくる。外面ハケ目、口縁部から内面ナデ。明茶褐色。
189 90003391	SB306	鉢	口径　14.0 器高　8.1	体部は緩く湾曲して立ち上がり、深く、口縁部で内湾気味となる。やや不安定な平底をつくる。外面ハケ目痕あり、内外面調整不明。明茶褐色。
190 90003393	SB306	小鉢	口径　8.8 器高　3.1	丸底気味の底部から体部が浅く立ち上がる。内外面ナデ。明褐色。
191 91000954	SB320	大形甕	口径　31.2 器高	体部は張りがつよく、口縁部は不明瞭に折れ、屈曲部に三角突帯1条巡らす。内外面ハケ目のあと口縁部と体部内面ナデ。橙色。
192 91000498	SB320	甕	底径　5.6 器高	底部付近のみ残。平底で体部は球形に膨らむか。体部は内外面ナデ。橙色。
193 89009774	SB325	鉢	口径　14.1 器高　9.3	体部は深く、緩く湾曲して立ち上がる。底部は安定した平底。外面ハケ目、内面ナデ。濃褐色。
194 90003401	SB325	鉢	口径　17.6 器高　7.3	体部は浅く、緩く湾曲して立ち上がる。底部はやや不安定な平底。外面ハケ目、内面上半ヘラケズリ、下半ナデで一部ハケ目残る。黄褐色。
195 89010003	SB325	鉢	口径　14.1 器高　7.0	不安定な平底から体部が緩く立ち上がる。外面ヘラケズリ、内面ナデ。明褐色。
196 91000658	SB342	鉢	口径　12.4 器高　10.9	体部は深く、安定した平底から急に立ち上がる。体部外面ハケ目、体部内面および口縁部ナデ。黒褐色。
197 89009915	SB342	甕	口径　15.6 器高　17.0	体部は中位やや上でつよく張り、口縁部は内面で稜をもたずに屈曲して開く。体部は内外面ハケ目のあと外面下位ヘラケズリ、口縁部ナデ。茶褐色。

2．奈良・平安時代

竪穴住居跡、掘立柱建物跡、溝、土壙から須恵器及び土師器を中心として若干の磁器が混じり、他に石器類と鉄器が小量出土した。削平のため竪穴住居跡からの出土は少なく、SD101を中心に溝からの出土が多くを占める。

須恵器及び土師器は奈良時代を主体とする。一部、７世紀及び平安時代から中世に及ぶものが見られるが量は少なく、出土遺構は溝に限られる。これは、同遺跡がⅠ区～Ⅲ区を通して弥生時代以降はしばらく土地利用がなされず、古墳時代終末期になって再び集落形成が始まり、奈良時代に向かうことを示すものであり、奈良時代になって嘉瀬川東岸に肥前国庁が出現することと軌を一にするものであろう。また、SD101のううな大溝では、平安時代以降に下る土師器及び須恵器、さらには磁器が混じることから、一部の溝は平安時代以降も土地区画溝や道路の存続に伴って長い期間機能していたことを物語っている。

土師器は坏類を主体に高坏、甕、鉢、甑等がある。Ⅰ区～Ⅲ区を東西に流れるSD101大溝からの出土が多く、他にSK412土壙から比較的まとまって出土した。その中で注目されるのは、Ⅱ区のSB266掘立柱建物跡の範囲内にある小壙及び小溝から出土した大形の蓋付坏である。いずれも内容物は検出されなかったが、出土状況からみて掘立柱建物に伴う鎮壇具の可能性がつよい。同様な大形蓋付坏は、Ⅰ区のSB128竪穴住居跡付近からも出土している。時期はいずれも奈良時代に属す。また、人名等を記した墨書土器が数点見られる。

須恵器は、遺跡全体が奈良時代を中心とすることから比較的多いが、やはりSD101溝からの出土が大部分を占める。坏類を主体に、高坏、壺、甕等が見られる。その内には、判読不可能ではあるが、墨書土器及びヘラ描き土器が数点が含まれ、国庁周辺ならではの地域的特殊性を示している。磁器類はSD101溝から青磁片が数点出土した。他に土器類ではふいご羽口が１点のみ、SD101溝から出土しているほか、竪穴住居跡等から土錘が小量出土している。

石器は石帯、紡錘車、砥石が出土した。とくに石帯は、丸鞆と鉈尾の各１点があり、これも肥前国庁跡に近く位置する本遺跡の特殊性を示すものである。

鉄器は竪穴住居跡、土壙及び溝から点数はかなり出土しているが、量は少ない。鎌、刀子、など農工具のほかに、鉄鏃、さらには鎹、釘といった建築材が見られる。

(1)　Ⅰ区の遺物

竪穴住居跡、掘立柱建物跡及び溝等から土師器、須恵器のほか、若干の鉄器片が出土したが遺構上面が削平されていたこともあって量は少ない。時期は奈良時代を中心とする。

ここで比較的まとまった量が出土したSD101溝の土師器、須恵器を中心に図示する。

a．土師器・須恵器

SD101

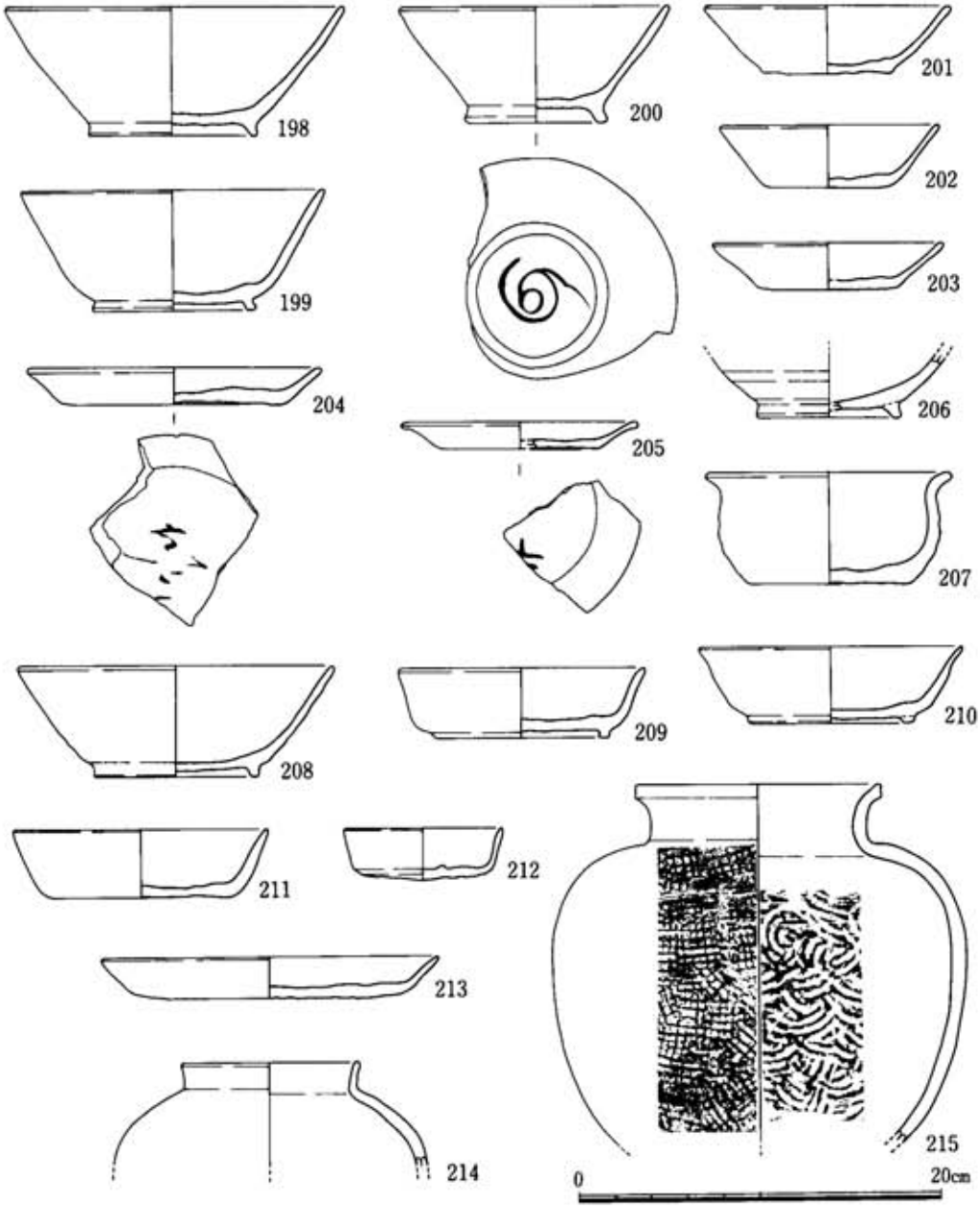


Fig. 57　I区溝出土土師器・須恵器①

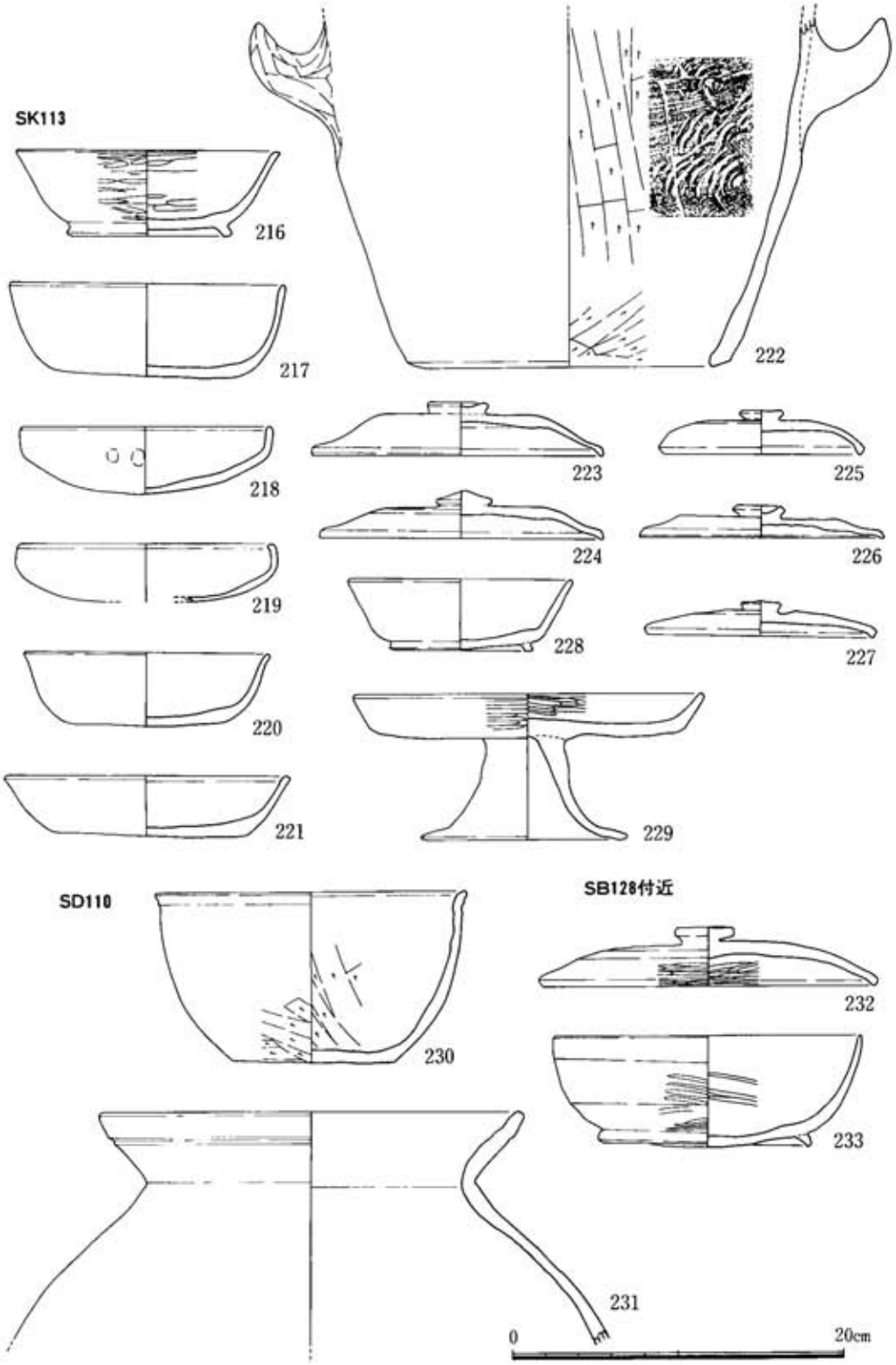


Fig. 58　Ⅰ区溝出土土師器・須恵器②

Tab.6　I区出土土師器・須恵器観察表

※　「図番号」下段数字は遺物登録番号

図番号	出土遺構	種別	法量cm	形態・技法等の特徴
198 88002155	SD101	土師器 坏	口径　18.3 器高　7.0	体部は深くやや湾曲して立ち上がり、高台はやや外方に張る。内外面ナデ。茶褐色。
199 88002156	SD101	土師器 坏	口径　16.5 器高　6.6	体部は深く直線的に立ち上がり、高台はやや底部内側に入ってやや外方に張る。内外面ナデ、外底部へラケズリ。茶褐色。
200 88002172	SD101	土師器 鉢	口径　14.8 器高　6.3	体部は直線的に開いて立ち上がり、高台は外方に張る。内面の底部中央に渦状の墨描きあり。内外面ナデ。黄茶褐色。
201 88002151	SD101	土師器 坏	口径　13.3 器高　3.7	体部はやや湾曲気味立ち上がる。内外面ナデ。外底面に板目痕。橙褐色。
202 88002136	SD101	土師器 坏	口径　11.8 器高　3.4	体部は直線的に立ち上がる。内外面ナデ。底部へラ切り離しナデ。橙褐色。
203 88002157	SD101	土師器 坏	口径　12.5 器高　2.6	体部は直線的に立ち上がる。内外面ナデ。底部へラ切り離しナデ。淡褐色。
204 88002170	SD101	土師器 坏	口径　16.1 器高　2.0	体部は短く直線的に立ち上がる。内外面ナデ。底部へラ切り離し。底外面に不明墨書。茶褐色。
205 88002169	SD101	土師器 碗	口径　12.6 器高　1.4	体部は浅く、外反気味に開いて立ち上がる。底内面に墨書があるが、読めず。内面および体部外面ナデ、底外面へラケズリ。淡茶褐色。
206 88002142	SD101	土師器 坏	底径　7.8 器高	体部は湾曲して立ち上がり、高台がやや外方に張る。外底面および体部外面下位へラケズリ、他ナデ。茶褐色。
207 88002164	SD101	土師器 坏	口径　13.0 器高　6.1	広く安定した底部から体部が湾曲して立ち上がり、口縁部外反。体部内外面および口縁部ナデ。底部へラ切り離しナデ。茶褐色。
208 88002165	SD101	須恵器 坏	口径　17.5 器高　6.0	体部は深く直線的に立ち上がり、高台が直に立つ。内外面ナデ。底部へラ切り離し。灰色。
209 88002144	SD101	須恵器 坏	口径　13.3 器高　3.8	体部は急に直線的に立ち上がり、底部やや内側に入って高台が直に立つ。内外面ナデ。外面灰褐色、内面茶褐色。
210 88002126	SD101	須恵器 坏	口径　14.4 器高　4.1	体部は直線的に立ち上がり、底部やや内側に入って低い高台が立つ。底外面へラ切り離しのあとへラケズリ。体部内外面ナデ。灰色。
211 88002161	SD101	須恵器 坏	口径　13.8 器高　3.7	体部は直線的に急に立つ。内外面ナデ。灰色。
212 88002133	SD101	須恵器 坏	口径　8.6 器高　2.8	体部は直線的に急に立つ。体部内外面ナデ、底外面へラケズリ。灰色。
213 88002189	SD101	須恵器 坏	口径　18.2 器高　2.2	体部は底部からやや不明瞭に屈曲して直線的に立ち上がり、短く開く。内外面ナデ、底外面へラケズリ。灰褐色。
214 88002145	SD101	須恵器 壺	口径　9.7 器高	胴部は肩が丸く張り、口縁部が短く直立する。内外面ナデ。灰色。
215 88002174	SD101	須恵器 壺	口径　13.2 器高	胴部は肩が張り、口縁部は直立から外反して開く。胴部は外面格子タタキ目、内面同心円文、口縁部ナデ。灰褐色。
216 89009687	SX113	土師器 坏	口径　15.6 器高　5.1	体部はほぼ直線的に立ち上がり、口縁部付近でわずかに外反気味。高台はやや外方に張る。体部内外面へラミガキ、外底面へラ切り離し。茶褐色。
217 89009673	SX113	土師器 坏	口径　16.4 器高　5.6	底部は広く、体部は急に湾曲したのち直線的に立ち上がる。体部は内外面ナデか、底外面へラ切り離しのあとナデ。濃茶褐色。
218 89009663	SX113	土師器 坏	口径　14.8 器高　4.1	底部は湾曲した不安定な丸底で、体部は急に折れて直行。体部内外面ナデ、底部は外面へラケズリ、内面ナデ。濃茶褐色。

図番号	出土遺構	種別	法量cm	形態・技法等の特徴
219 89009665	SX113	土師器 坏	口径　15.1 器高　3.5	底部は不安定な平底で、体部は湾曲しながら立ち上がり、口縁部内湾気味。体部内外面ナデ、底部は外面ヘラケズリ、内面ナデ。濃褐色。
220 89009669	SX113	土師器 坏	口径　14.6 器高　4.4	体部はほぼ直線的に立ち上がり、口縁部付近でわずかに外反気味。体部内外面ナデ、底部は外面ヘラ切り離しのあとナデ、内面ナデ。濃茶褐色。
221 89009668	SX113	土師器 坏	口径　16.9 器高　3.6	体部は底部から不明瞭に折れて直線的に立ち上がる。体部内外面ナデ、底部は外面ヘラ切り離しのあとナデ、内面ナデ。濃茶褐色。
222 89009646	SX113	土師器 甑	底径　17.1 器高	天井部のつまみは上部が窪む。体部は平坦な天井部から急に曲がり下り、口縁部が短く立つ。天井部外面ヘラケズリ、他ナデ。明茶褐色。
223 89009660	SX113	土師器 坏蓋	口径　17.3 器高　3.2	天井部のつまみは上部が窪む。体部は平坦な天井部から急に曲がり下り、口縁部が短く立つ。天井部外面ヘラケズリ、他ナデ。明茶褐色。
224 89009662	SX113	土師器 坏蓋	口径　16.9 器高　2.8	体部は緩くカーブを描きながら立ち上がり、両側に把手が付く。外面平行タタキ目、内面同心円文の上からヘラケズリ。明褐色。
225 89009679	SX113	須恵器 坏蓋	口径　11.6 器高　2.6	体部は天井部からなだらかに下り、口縁部が短く立つ。外面は天井部から体部2分の1ヘラケズリ、他ナデ。灰色。
226 89009677	SX113	須恵器 坏蓋	口径　14.4 器高　1.9	天井部のつまみは上部が窪む。体部は平坦な天井部から低くつぶれて下り、口縁部が短く立つ。天井部外面ヘラケズリ、他ナデ。灰色。
227 89009678	SX113	須恵器 坏蓋	口径　13.4 器高　2.1	天井部に宝珠つまみ。体部は天井部からなだらかに下り、口縁部が短く立つ。天井部外面ヘラケズリ、他ナデ。灰色。
228 89009682	SX113	須恵器 坏	口径　13.2 器高　4.3	体部は直線的に立ち上がり、高台は底部のやや内側に入って立つ。内外面ともナデ。灰白色。
229 89009688	SX113	土師器 高坏	口径　20.7 器高　8.7	坏部は浅く、体部が短く立ち上がる。脚部は裾が大きく開く。坏部内面および体部ヘラミガキ、底外面外側ヘラケズリ、中央ナデ。脚部ナデ。橙褐色。
230 89009645	SD110	須恵器 鉢	口径　18.4 器高　10.3	底部は広く安定し、体部は湾曲しながら急に立ち上がり、口縁部が短く外にめくれる。体部は内外面下半ヘラケズリ、上半ナデ、底外面ナデ。灰色。
231 89009644	SD110	須恵器 壺	口径　25.0 器高	口縁部は「く」字に折れ、沈1条を巡らす。胴部は肩があまり張らずに膨らむ。口縁部ナデ、胴部は外面平行タタキ目、内面同心円文。灰色。
232 89009753	SB128	土師器 坏	口径　19.8 器高　3.5	上面平坦な宝珠つまみ。体部は低くつぶれ、天井部がなだらかに下って口縁下端が稜をなす。外面ヘラケズリの後ヘラミガキ、内面ヘラミガキ。砂粒を含む。褐色。
233 89009754	SB128	土師器 坏	口径　18.3 器高　6.7	体部は丸底気味の底部から湾曲して急に立ち上がり、やや外に張った低い高台が付く。外面ヘラケズリの後ヘラミガキ、内面ヘラミガキ。砂粒を含む。褐色。

(2)　Ⅱ区の遺物

土師器、須恵器、土錘のほか、砥石、石帯、紡錘車、鉄器が出土した。

土師器及び須恵器は、やはりSD101溝からの出土が多く、他の溝及び竪穴住居跡、土壙等からも出土しているが、ここでは比較的まとまった出土を見た遺構を中心に図示する。地割りに関するSD207直線溝からの出土遺物をはじめ奈良時代を中心とする須恵器、土師器が多い。とくに注目されるのはSB266及びSD262から出土した地鎮具の可能性のある蓋付坏で、時期は奈良時代を中心とする。

石帯は丸鞆と鉈尾の各1点が、それぞれSD304とSD101から出土した。

以下、須恵器・土師器、石器、鉄器の順に図示する。

a．土師器・須恵器

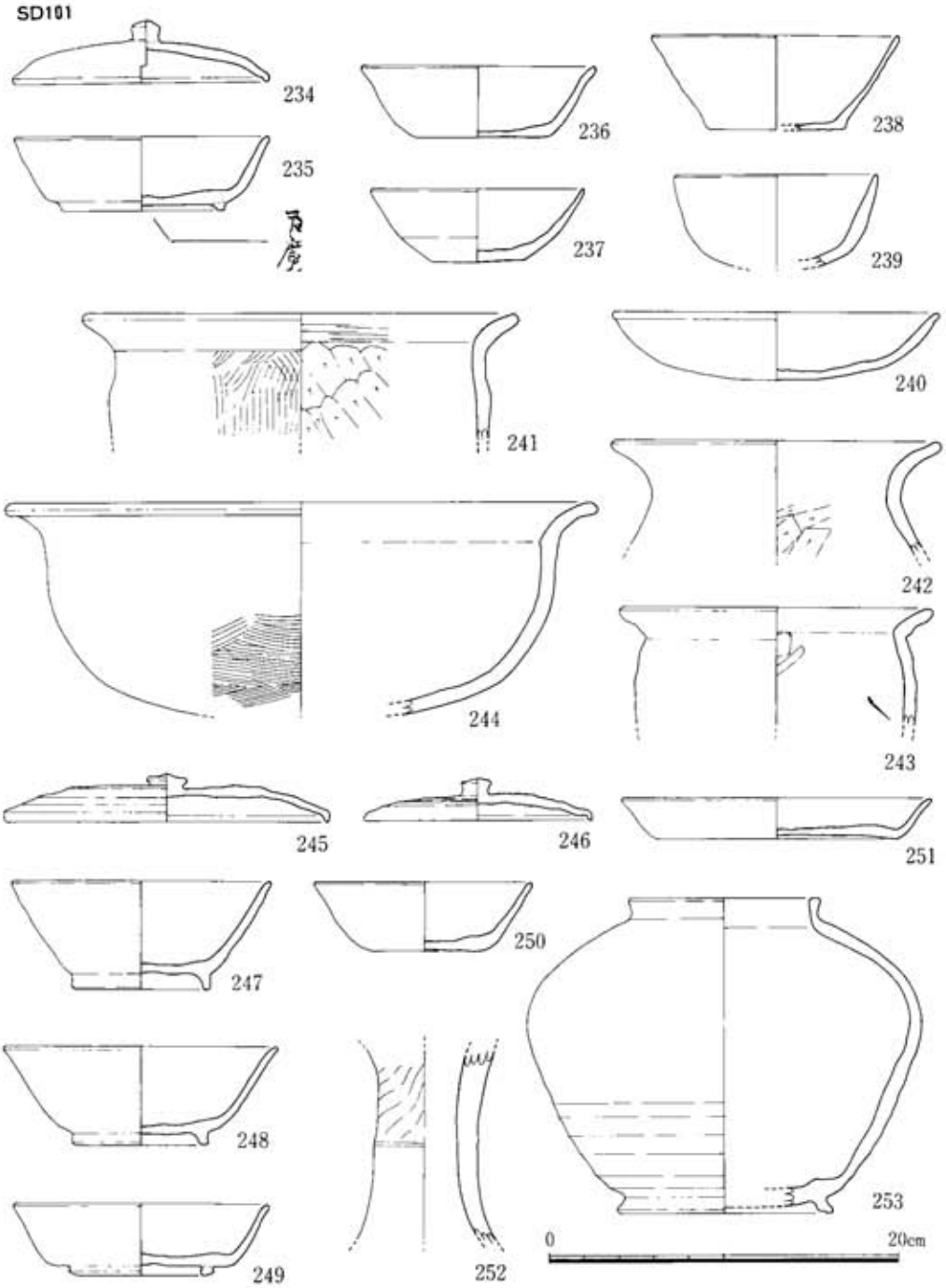


Fig. 59　II区溝出土土師器・須恵器①

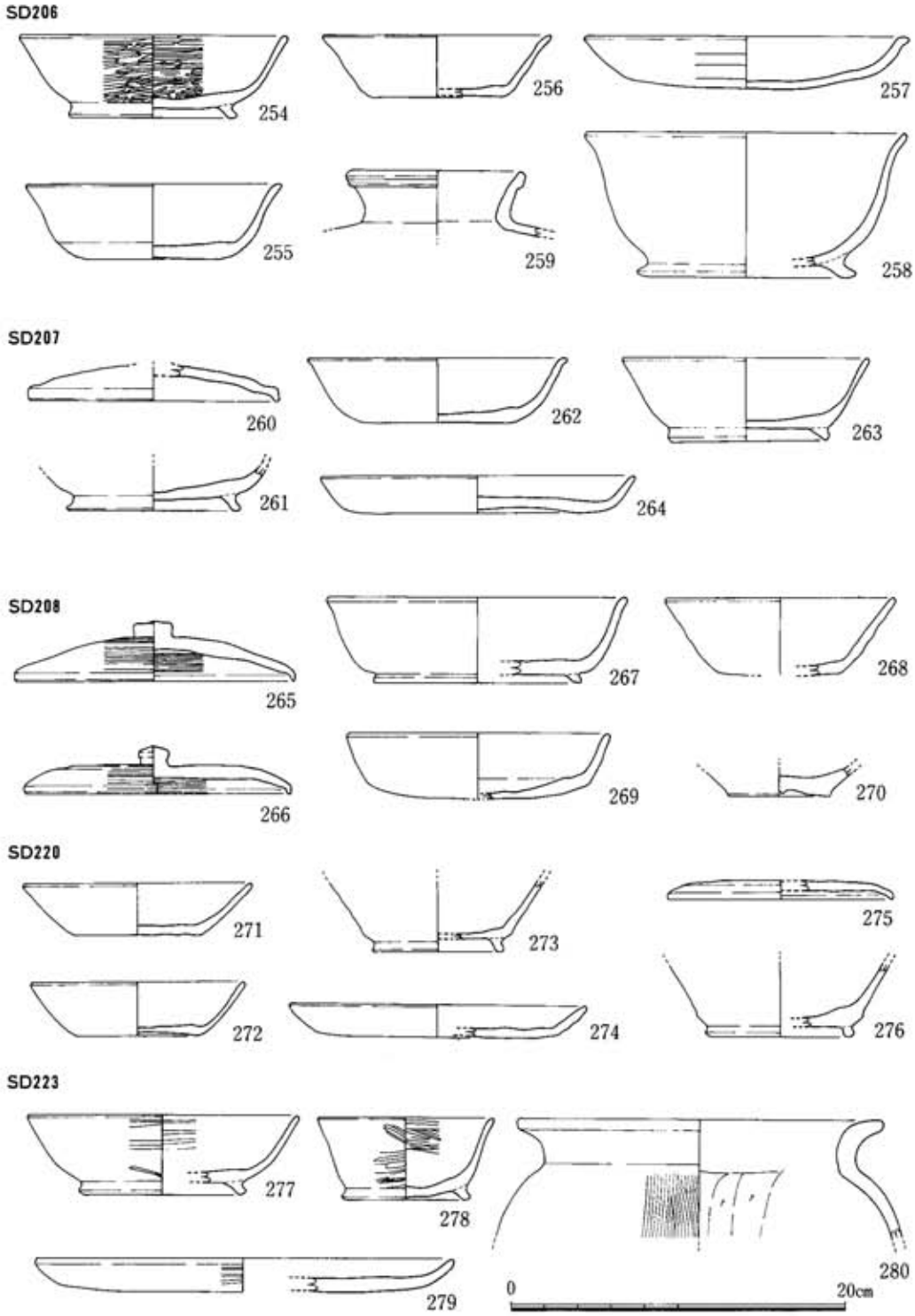


Fig. 60　Ⅱ区溝出土土師器・須恵器②

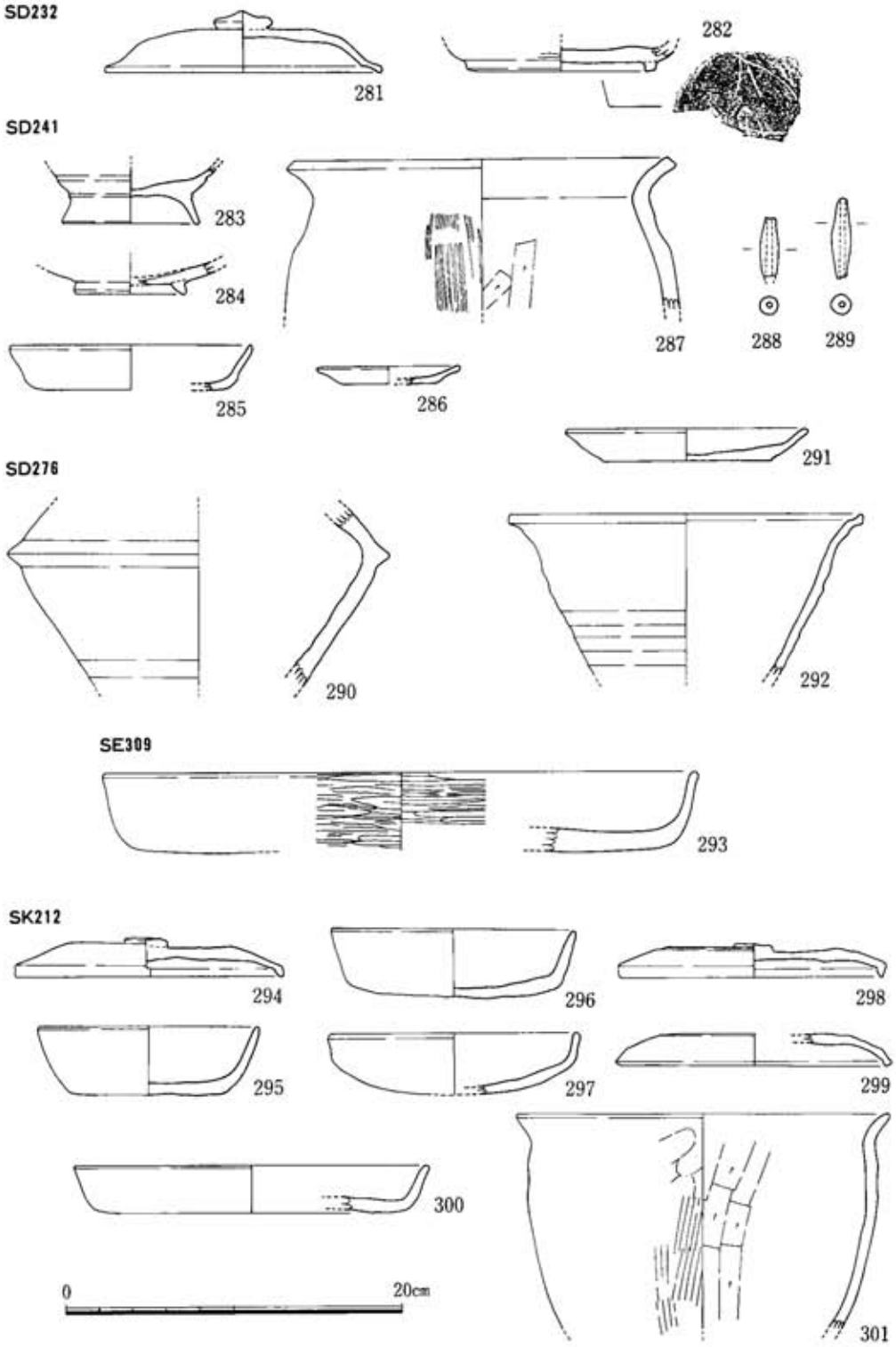


Fig. 61　II区溝出土土師器・須恵器③

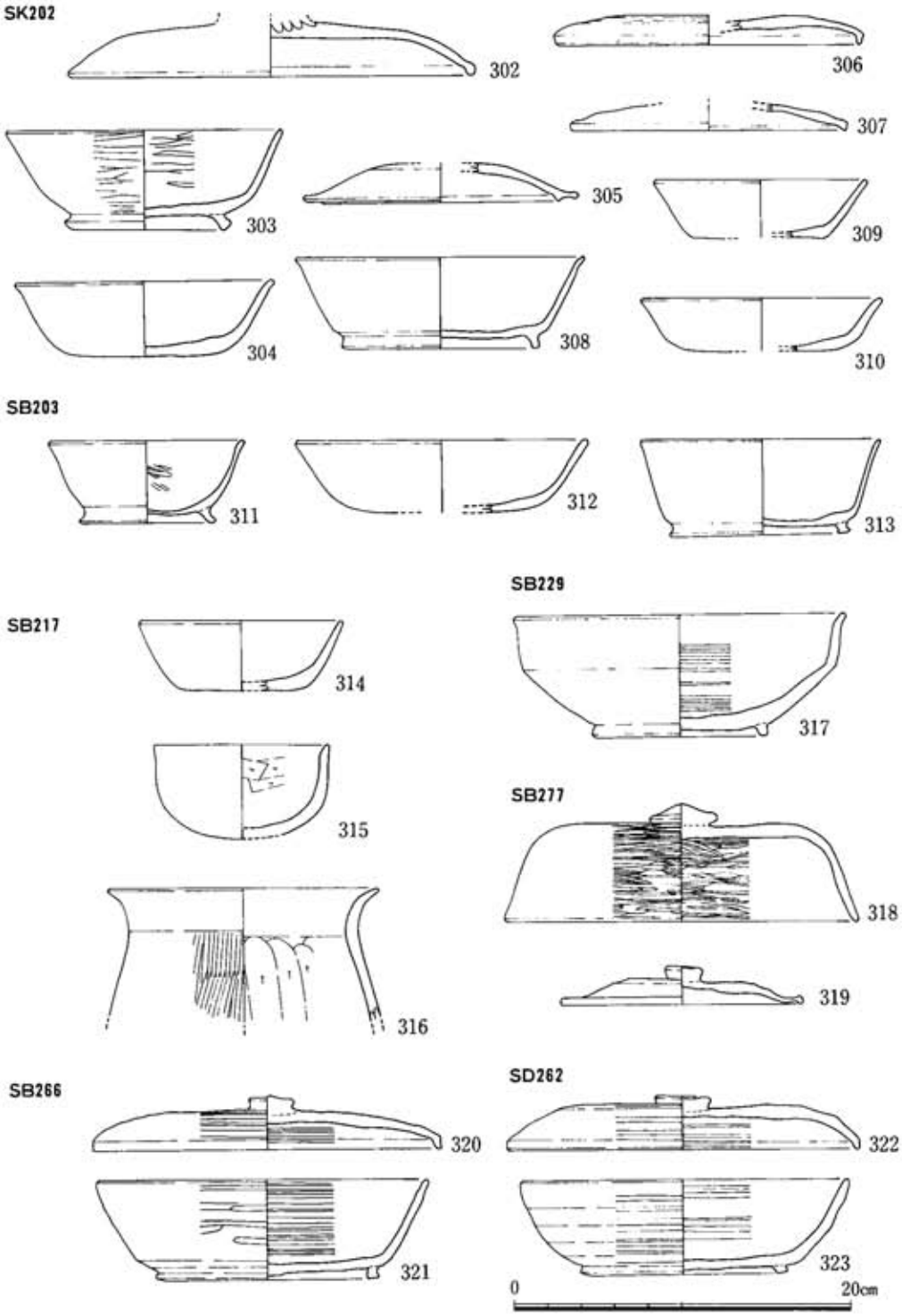


Fig. 62　Ⅱ区溝出土土師器・須恵器④

Tab.7　II区出土土師器・須恵器観察表

※　「図番号」下段数字は遺物登録番号

図番号	出土遺構	種別	法量cm	形態・技法等の特徴
234 90000979	SD101	須恵器 坏蓋	口径　14.2 器高　3.5	天井部に小さな宝珠つまみ。体部は天井部からなだらかに下り、口縁端部に稜。天井部ヘラケズリ、他ナデ。黄灰色。
235 89009641	SD101	土師器 坏	口径　14.2 器高　4.2	体部は直線的に立ち上がり、高台は低くつぶれる。内底面および体部内外面ナデ、外底面ヘラ切り離し。茶褐色。外底面に墨書。「□廣」か。
236 90001342	SD101	土師器 坏	口径　13.0 器高　4.0	体部は直線的に立ち上がり、口縁部やや外反。内底面および体部内外面ナデ、外底面ヘラ切り離し。明黄褐色。
237 90001340	SD101	土師器 坏	口径　11.8 器高　4.5	体部は湾曲しながら立ち上がる。内底面および体部内外面ナデ、外底面ヘラ切り離し。明茶褐色。
238 90000972	SD101	土師器 坏	口径　13.8 器高　5.3	体部は底部と稜をなして直線的に立ち上がり、器壁が薄い。内底面および体部内外面ナデ、外底面はヘラ切り離しで板目痕残る。褐色。
239 90001136	SD101	土師器 坏	口径　11.4 器高　5.2	体部は不安定な丸底気味の底部から直線的に立ち上がる。内外面ともヘラナデ。褐色。
240 90000977	SD101	土師器 坏	口径　18.2 器高　3.8	底体部は一体に湾曲して浅く開く。口縁部ナデ、底体部は外面ヘラケズリ、内面ナデ。褐色。
241 90001565	SD101	土師器 甕	口径　23.9 器高	口縁部は体部から緩く外反。体部は外面ハケ目、内面ヘラケズリ。口縁部は内面にハケ目を残してナデ。褐色。
242 90001913	SD101	土師器 甕	口径　18.2 器高	体部は上位がつよく絞まり口縁部が大きく外反。体部は外面ハケ目、内面ヘラケズリ。口縁部ナデ。茶褐色。
243 90001165	SD101	土師器 甕	口径　17.3 器高	口縁部は体部から「く」字に折れて外反気味に開く。体部は外面ナデ、内面ヘラケズリのあとナデ。口縁部ナデ。褐色。
244 90001143	SD101	土師器 鉢	口径　32.8 器高　11.9	底体部は一体に湾曲して深く立ち上がり、口縁部は内面に稜をなして外反。底体部は外面ハケ目、内面ヘラケズリ。口縁部ナデ。褐色。
245 90001140	SD101	須恵器 坏蓋	口径　17.9 器高　2.7	天井部に宝珠つまみ。体部は平坦な天井部からなだらかに下り、口縁端部が短く立つ。外面は天井部から体部にかけてヘラケズリ、他ナデ。灰白色。
246 90001189	SD101	須恵器 坏蓋	口径　12.7 器高　2.4	天井部に雑な宝珠つまみ。体部低くつぶれては天井部からなだらかに下り、口縁端部が短く立つ。外面は天井部から体部2分の1ヘラケズリ、他ナデ。灰色。
247 90000976	SD101	須恵器 坏	口径　14.6 器高　6.1	体部は深く直線的に立ち上がり、高台が直に立つ。体部ナデ、底部は内面不定方向ヘラケズリ、外面ヘラ切り離し。灰色。
248 90001909	SD101	須恵器 坏	口径　15.1 器高　5.6	体部は深く直線的に立ち上がり、口縁部やや外反。高台は底部のやや内側に入る。底外面は不定方向ヘラケズリ、他ナデ。灰色。
249 90001339	SD101	須恵器 坏	口径　14.1 器高　4.0	体部は底部から急に折れて直線的に立ち上がり、低くつぶれた高台が底部の内側に入って付く。底外面ヘラ切り離し、他ナデ。灰白色。
250 90000970	SD101	須恵器 坏	口径　12.1 器高　3.9	体部は底部からやや急に折れて直線的に立ち上がる。低くつぶれた高台が底部の内側に付く。底外面ヘラ切り離し、他ナデ。灰白色。
251 90001559	SD101	須恵器 坏	口径　17.4 器高　2.3	体部は底部から急に折れて短く直線的に立ち上がり、口縁部やや外反。底外面ヘラ切り離しのあとナデ、他ナデ。褐灰色。
252 90001569	SD101	須恵器 高坏	口径 残高　10.8	脚筒部のみ残。中位に沈線1条巡る。内外面ナデ。黄灰白色。
253 90001142	SD101	須恵器 壺	口径　10.4 器高　17.7	体部は肩がつよく張り、口縁部が短く直立。高台は外方にやや開いて立つ。体部外面下半ヘラケズリ、他ナデ。焼成不良で黄褐色。
254 90001351	SD206	土師器 坏	口径　15.7 器高　4.9	体部は比較的浅く立ち上がり、高台が外方につよく張る。体部内外面ヘラミガキ、底外面ヘラ切り離し。茶褐色。
255 90001422	SD206	土師器 坏	口径　15.0 器高　4.5	体部は比較的浅く立ち上がり、口縁部やや外反気。底内面および体部ナデ、底外面はヘラ切り離しのあと不定方向ヘラケズリ。明褐色。
256 90001578	SD206	土師器 坏	口径　13.4 器高　3.7	体部は底部から急に折れて直線的に立ち上がり、口縁部やや外反気味。底内面および体部ナデ、底外面は不定方向ヘラケズリ。明褐色。
257 90001359	SD206	土師器 坏	口径　18.8 器高　3.1	底体部は浅く一体に湾曲して開き、口縁部がナデてめくれる。口縁部ナデ、底体部は不定方向ヘラケズリ。茶褐色。
258 90001576	SD206	土師器 鉢	口径　18.6 器高　8.6	体部は深く、底部から湾曲しながら急に立ち上がり、口縁部外反。高台は低く外方に大きく開く。体部は内外面ナデ。茶褐色。

図番号	出土遺構	種別	法量cm	形態・技法等の特徴
259 90001449	SD206	須恵器 壺	口径　10.0 器高	胴部は肩がつよく張り、口縁部は外反気味に開き、玉縁口縁をつくる。口縁部ナデ、胴部は外面タタキ目のあとナデ、内面同心円文。黄褐色。
260 90001170	SD207	土師器 坏蓋	口径　11.7 器高	天井部から体部にかけて緩く湾曲して下り、口縁端部が短く立つ。つまみ欠失。内外面ヘラミガキ。茶褐色。
261 90001172	SD207	土師器 坏	底径　10.0 器高	体部はやや急に立ち上がり、高台は底部の内側に入って外方に張る。底内面および体部内外面ナデ、底外面ヘラケズリ。茶褐色。
262 90001171	SD207	土師器 坏	口径　15.0 器高　3.8	体部は緩く立ち上がって口縁端部やや外反。底外面ヘラケズリ、他ナデ。茶褐色。
263 90001349	SD207	土師器 坏	口径　14.4 器高　5.0	体部は直線的に立ち上がり、高台は低く外方に張る。底外面ヘラ切り離し、他ナデ。茶褐色。
264 90001352	SD207	須恵器 皿	口径　18.4 器高　2.2	体部は底部から不明瞭に折れて短く立ち上がる。底外面ヘラ切り離し、他ナデ。焼成不良で灰白色。
265 90001357	SD208	土師器 坏蓋	口径　16.5 器高　3.7	天井部宝珠つまみ。体部は平坦な天井部からなだらかに下り、口縁部が短く立つ。外面は天井部ヘラケズリのあと体部まで回転ヘラミガキ、内面回転ヘラミガキ。茶褐色。
266 90001355	SD208	土師器 坏蓋	口径　15.7 器高　2.8	天井部宝珠つまみ。広い天井部から体部がなだらかに下り、口縁部が短く立つ。外面は天井部ヘラケズリのあと体部まで回転ヘラミガキ、内面回転ヘラミガキ。黄褐色。
267 90001175	SD208	土師器 坏	口径　17.5 器高　5.1	体部はやや急に立ち上がって口縁部外反。高台は底部の内側に入って低く外に張る。底内面および体部内外面ヘラミガキ、底外面ヘラケズリ。茶褐色。
268 90001177	SD208	須恵器 坏	口径　13.4 器高　4.6	体部は底部から急に折れて直線的に立ち上がる。体部は内外面ナデ、底外面は不定方向ヘラケズリ。黄灰色。
269 90001353	SD208	須恵器 坏	口径　15.3 器高　3.9	底部は湾曲して不安定、体部は底部から急に折れて直線的に立ち上がる。体部および底内面ははナデ、底外面はヘラ切り離し。焼成不良で黄褐色。
270 92002325	SD208	青磁 碗	底径　6.0 器高	底部のみ残。胎土は灰白色、釉調は緑黄色。
271 90001429	SD220	土師器 坏	口径　13.6 器高　3.1	体部は底部から急に折れて直線的に立ち上がる。底外面はヘラ切り離し、他ナデ。黄灰色。
272 90001428	SD220	土師器 坏	口径　12.6 器高　3.2	体部は底部から急に折れて直線的に立ち上がる。底外面はヘラ切り離し、他ナデ。底外面に板目痕。褐色。
273 90001432	SD220	土師器 坏	底径　7.8 器高	体部は底部から急に折れて直線的に立ち上がり、高台が底部のやや内側に入って付く。内外面ナデ。黄褐色。
274 90001430	SD220	土師器 皿	口径　17.4 器高　1.9	体部は底部から不明瞭に折れて短く立ち上がる底外面ヘラ切り離し、他ナデ。褐色。
275 90001435	SD220	須恵器 坏蓋	口径　13.2 器高	体部は低くつぶれる。天井部外面ヘラケズリ、他ナデ。灰色。
276 90001434	SD220	須恵器 坏	底径　4.4 器高	体部は底部から急に折れて直線的に立ち上がり、低くつぶれた高台が付く。底外面ヘラケズリ、他ナデ。灰色。
277 90001437	SD220	土師器 坏	口径　16.2 器高　4.7	体部は比較的浅く立ち上がり、高台が外方につよく張る。体部内外面ヘラミガキ、底外面ヘラケズリ。茶褐色。
278 90001423	SD223	土師器 坏	口径　10.4 器高　4.9	体部は急に直線的に立ち上がり、口縁部やや外反。高台が外方につよく張る。体部内外面ヘラミガキ、底外面ヘラケズリ。褐色。
279 90001436	SD223	土師器 皿	口径　24.8 器高　2.0	体部は底部から不明瞭に折れて短く立ち上がる。内面ナデ、体部外面ヘラミガキ、底外面不定方向ヘラケズリ。褐色。
280 90001438	SD223	土師器 甕	口径　21.8 器高	体部は肩がつよく張り、口縁部は肥厚し、体部内面で稜をなして大きく外反。体部は外面ハケ目、内面ヘラケズリ、口縁部ナデ。
281 90001424	SD223	土師器 坏蓋	口径　16.2 器高　3.7	宝珠つまみ。天井部は高く、体部がなだらかに下り、口縁部は内面に稜をもって一旦外に反ねる。天井部から体部外面ヘラミガキ、内面ナデ。褐色。
282 90001496	SD223	土師器 坏	底径　10.2 器高	高台は底部のやや内側に入って短く直に立つ。底部外面ヘラ切り離しのあとナデ、内面ヘラミカガキ。底部外面にヘラ記号。茶褐色。
283 91000427	SD241	土師器 坏	底径　8.1 器高	体部は直線的に立ち上がり、高台が高く開く。高台底部ナデ、他ナデ。茶褐色。

図番号	出土遺構	種別	法量cm	形態・技法等の特徴
284 91000428	SD241	土師器 坏	底径 6.4 器高	体部は底部からそのまま湾曲して大きく外に開き、高台が短く立つ。内外面ナデ。黄灰色。
285 91000435	SD241	土師器 坏	口径 14.1 器高 2.7	体部は底部から急に直線的に立ち上がる。体部は内外面ナデ。淡茶褐色。
286 91000436	SD241	土師器 小皿	口径 8.1 器高 1.0	体部は底部から急に折れて、外反気味に開く。底部外面ヘラ切り離し、他ナデ。
287 91000429	SD241	土師器 甕	口径 22.2 器高	口縁部は体部がややすぼまって「く」字に折れ、外反気味に開く。体部は外面ハケ目、内面ヘラケズリ。口縁部ナデ。茶褐色。
288 95001521	SD241	土錘	器長 3.5 器幅 1.2	手捏ねで両端を細く仕上げる。灰色。
289 95001522	SD241	土錘	器長 4.9 器幅 1.2	手捏ねで両端を細く仕上げる。明茶褐色。
290 91000393	SD276	須恵器 壺	胴径 23.2 器高	胴部は算盤珠形に屈曲して張り、突帯を巡らす。胴部は外面下位ヘラケズリ、他ナデ。灰白色。
291 91000397	SD287	土師器 坏	口径 14.1 器高 1.9	体部は底部と稜をもって直線的に開いて立ち上がる。底部外面ヘラ切り離し、底部内面および体部内外面ナデ。明茶褐色。
292 01000396	SD287	土師器 鉢	口径 20.7 器高	体部は深く直線的に立ち上がり、口縁部は外反したあと端部がナデて鋭く立ち上がる。体部外面下位ヘラケズリ、上位および内面ナデ。淡茶褐色。
293 90001463	SE309	土師器 盤	口径 34.9 器高 4.6	大形盤。体部は底部と稜をつくらずに急に立ち上がり、口縁端部をまるめる。器壁は底部中央が厚く、体部を薄くする。底部および体部の内外面ともヘラミガキ。明茶褐色。
294 90001411	SK212	須恵器 坏蓋	口径 15.6 器高 2.3	やや潰れた宝珠つまみ。平坦な天井部から体部は急に下り、口縁部が短く折れて立つ。天井部外面ヘラケズリ、他ナデ。灰色。
295 90000981	SK212	土師器 坏	口径 12.8 器高 4.1	体部は底部から急に折れて深く立ち上がる。底部外面はヘラ切り離しのあとナデ、底部内面および体部内外面ナデ。明茶褐色。
296 90001410	SK212	土師器 坏	口径 14.2 器高 4.2	体部はやや不安定な平底から急に折れて直線的に立ち上がる。底部はヘラ切り離しのあとナデ、底部内面および体部内外面ナデ。明黄褐色。
297 90001181	SK212	土師器 坏	口径 14.4 器高 3.6	体部はやや丸味をもった底部から急に折れて短く直に立ち上がる。底部は外面ヘラケズリ、他ナデ。明黄褐色。
298 89100030	SK212	須恵器 坏蓋	口径 15.5 器高 2.1	潰れた宝珠つまみ。体部は低い天井部からなだらかに下り、口縁部が短く折れて立つ。天井部外面ヘラケズリ、他ナデ。白灰色。
299 90001179	SK212	須恵器 坏蓋	口径 15.6 器高 1.9	体部は低い天井部からなだらかに下り、そのまま口縁部をつくる。天井部ヘラケズリ、他ナデ。焼成不良で灰白色。
300 90001182	SK212	土師器 盤	口径 20.6 器高 2.8	体部は底部から急に折れて直線的に立ち上がる。内外面ともナデ。明黄茶褐色。
301 90001412	SK212	土師器 甕	口径 22.0 器高	体部は張りが少なく、口縁部は不明瞭に折れて外反気味に開く。体部外面ハケ目、内面ヘラケズリ。口縁部ナデ。褐色。
302 90001366	SK202	土師器 蓋	口径 23.6 器高	つまみ欠失。体部は天井部からなだらかに下り、玉縁状の口縁部をつくる。磨耗のため調整不明。淡茶褐色。
303 90001367	SK202	土師器 坏	口径 16.2 器高 5.9	体部は底部から急に折れて深く直線的に開き、高台が底部の内側に入って外方に開いて立つ。体部内外面ヘラミガキ、底部外面ヘラ切り離し。白灰色。
304 90001372	SK202	土師器 坏	口径 15.1 器高 4.5	体部は底部から急に折れて直線的に立ち上がり、口縁端部やや外にめくれる。底部外面ヘラケズリ、内面ナデ。体部内外面ともナデ。黄茶褐色。
305 90001374	SK202	土師器 坏蓋	口径 13.8 器高 2.3	つまみ欠失。天井部は丸く体部がなだらかに下り、口縁端部は外に反ねて内面に返りをもつ。天井部外面ヘラケズリ、他ナデ。灰色。
306 90001452	SK202	須恵器 坏蓋	口径 17.6 器高 1.8	つまみ欠失。体部は低い天井部からなだらかに下り、口縁部が短く折れて立つ。天井部外面ヘラケズリ、体部外面および内面ナデ。灰色。
307 90001451	SK202	須恵器 坏蓋	口径 15.9 器高 1.5	つまみ欠失。体部は低い天井部からなだらかに下り、そのまま口縁部をつくる。天井部ヘラケズリ、他ナデ。灰色。
308 90001453	SK202	須恵器 坏	口径 16.8 器高 5.4	体部は底部から急に折れて直線的に立ち上がり、口縁端部やや外にめくれる。底部外面ヘラ切り離し、体部内外面ともナデ。灰色。

図番号	出土遺構	種別	法量cm	形態・技法等の特徴
309 90001367	SK202	須恵器 坏	口径　12.3 器高　3.4	体部は底部と稜をなして折れて直線的に立ち上がる。底部外面ヘラ切り離し、他ナデ。灰色。
310 90001371	SK202	須恵器 坏	口径　13.9 器高　3.2	体部は底部から不明瞭に折れて立ち上がり、端部やや外にめくれる。底部外面ヘラ切り離しのあとナデ、他ナデ。体部外面に板目痕。淡白灰色。
311 90001356	SD203	土師器 坏	口径　11.3 器高　4.9	体部は底部から丸味をもって急に立ち上がり、口縁端部やや外反。高台が外方に開いてやや高く立つ。体部は内面ヘラミガキ、内面不明。底部外面ヘラ切り離し。明茶褐色。
312 90001481	SD203	土師器 坏	口径　17.0 器高　4.3	体部は底部からやや不明瞭に折れて直線的に立ち上がる。底部は外面ヘラケズリ、他ナデ。体部内外面ともナデ。明褐色。
313 90001347	SD203	須恵器 坏	口径　13.9 器高　5.6	体部は底部から急に折れて直線的に深く立ち上がり、口縁端部やや外反気味外。高台は低くやや外に開いて立つ。底部外面ヘラケズリ、他ナデ。明茶灰色。
314 90001491	SB217	須恵器 坏	口径　11.8 器高　4.1	体部は底部から急に折れて直線的に深く立ち上がる。底部外面ヘラ切り離し、他ナデ。白灰色。
315 90001155	SB217	土師器 坏	口径　10.2 器高　5.4	体部は丸底から内湾気味に立ち上がり、口縁端部内側をナデて鋭い口唇部をつくる。内面ヘラケズリ、外面ナデか。明黄茶褐色。
316 90001493	SB217	土師器 甕	口径　15.8 器高	胴部は上位が絞まり、そのまま外反して口縁部をつくる。胴部外面ハケ目、内面ヘラケズリ。口縁部ナデ。茶褐色。
317 90001156	SB229	土師器 鉢	口径　19.2 器高　7.2	体部は直線的に開いて立ち上がったのち上位で折れて直に立ち、口縁部が短く外反。低い高台が立つ。体部内外面と底内面ヘラミガキ、底部外面ヘラ切り離し。明茶褐色。
318 90001348	SB277	土師器 蓋	口径　20.5 器高　6.9	宝珠つまみ。体部は深く、平坦な天井部から急に湾曲して直線的に下る。体部および天井部内外面とも丁寧なヘラミガキ。砂粒は殆ど含まず精製。橙色。
319 90001157	SB277	須恵器 坏蓋	口径　13.9 器高	宝珠つまみ。天井部低く潰れ、体部は平坦な天井部からなだらか下り、口縁部は外に反ねて玉縁状の端部をつくる。天井部外面ヘラケズリ、他内外面ナデ。白灰色。
320 90001376	SB266	土師器 坏蓋	口径　20.7 器高　3.2	宝珠つまみ。天井部から体部にかけて低くなだらかに下り、口縁部が短く折れて立つ。天井部ヘラケズリ、他は内外面回転ヘラミガキ。砂粒は殆ど含まず精製。外面黄灰色
321 90001377	SB266	土師器 坏身	口径　19.4 器高　5.9	体部は深く直線的に立ち上り、高台は底部のやや内側に入って直に立つ。底部外面は回転ヘラケズリのあとナデ、体部および底部内面は回転ナデ。精製。明黄褐色。
322 90001378	SB262	土師器 坏蓋	口径　20.5 器高　3.1	宝珠つまみ。天井部から体部からなだらかに下り、口縁部が短くやや折れて立つ。天井部ヘラケズリ、他は内外面回転ヘラミガキ。砂粒は殆ど含まず精製。明黄褐色。
323 90001379	SB262	土師器 坏身	口径　17.7 器高　5.6	体部は深くやや湾曲気味に立ち上り、高台は底部のやや内側に入る。底部外面は回転ヘラケズリのあとナデ、体部および底部内面は回転ナデ。精製。明黄褐色。

b．石器

竪穴住居跡、土壙及び溝から帯飾り２点、紡錘車２点の外、砥石が出土した。

324は石帯の丸鞆に当たる。石材はやや茶の混じった暗灰色をベースに白色の細かい岩脈が樹枝状の文様をなす。裏表両面を滑らかに研磨し、側面は表面に向かってやや角度を付け、下端を直に、その周囲は弧状にやや粗く整形し磨いている。裏面には帯に装着するための小穴を不統一に３対穿ける。横幅3.4cm、縦幅2.4cm、厚さ0.7cm。SD304溝出土。

325は石帯の銙尾。石材は蛇文岩かと見られ、幾分縞目のある暗緑色を呈す。両側端を弧状に作っていたと見られるが、片側を欠失する。裏表両面を滑らかによく研磨し、側面は表面に向かってやや角度を付けて形を整えている。裏面には帯に装着するための小穴が片側のみ１対残る。横幅残存長3.7cm、縦幅3.7cm、厚さ0.6cm。SD101溝出土。

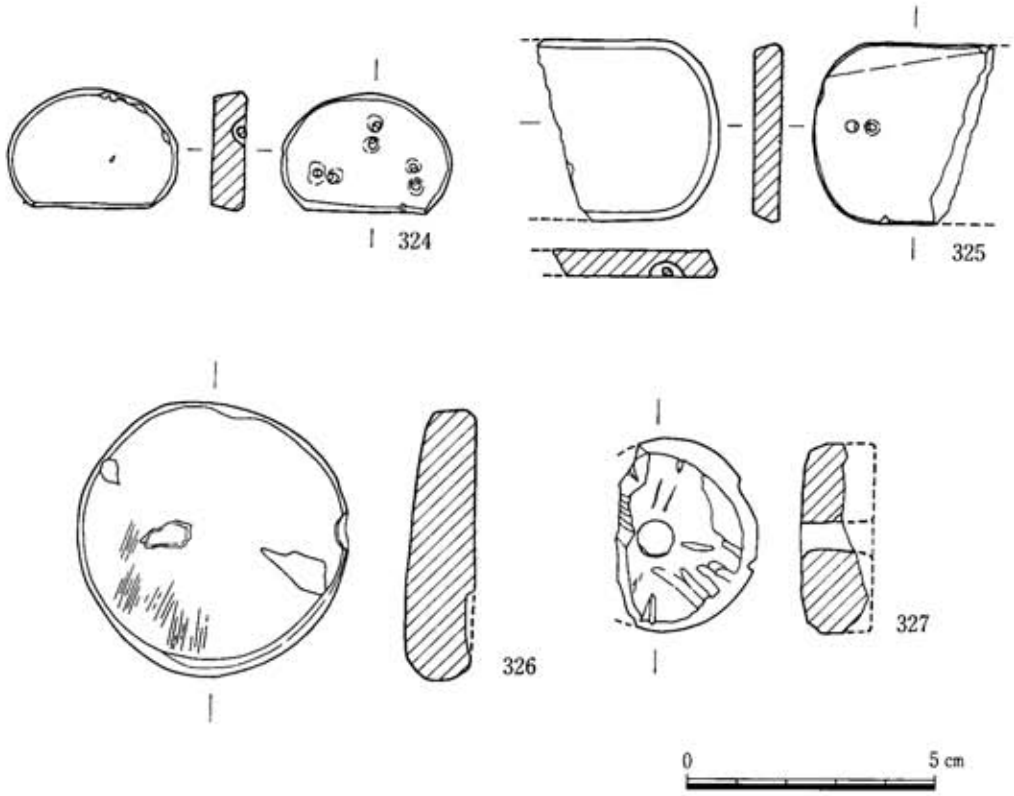


Fig. 63　II区出土石帯・紡錘車

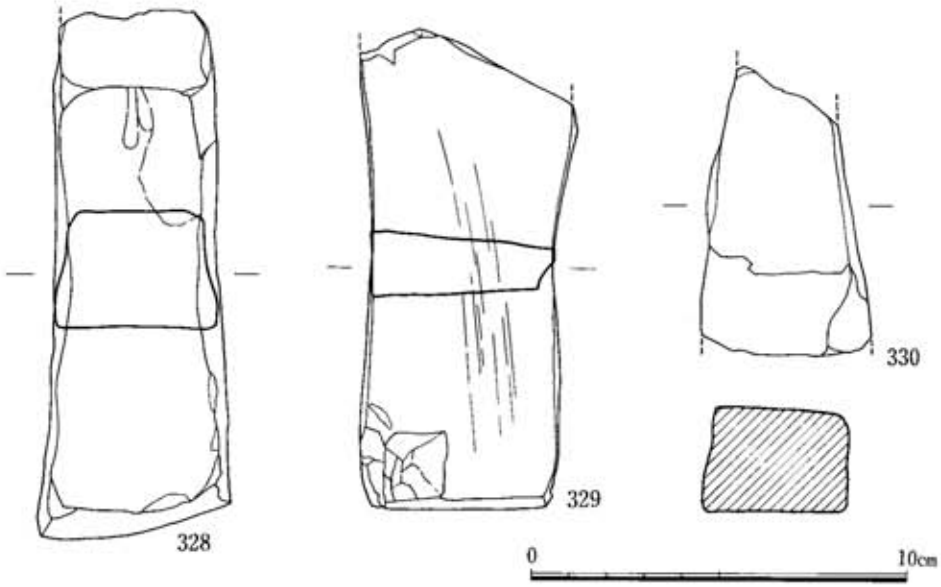


Fig. 64　II区出土砥石

326は紡錘車の未製品と見られる。滑石製で、両面を不均一に粗く研磨し、周縁の形を整えただけで終わっている。径約5.5cm、中心部厚1.3cm。SB413竪穴住居跡出土。**327**紡錘車は滑石製で、残存面には不明瞭ながら粗い放射状の刻みで飾っている。全体に欠損が著しい。外径3.9cm、中心孔径0.8cm。SB413竪穴住居跡出土。

328は方柱状の砂岩製砥石。全体を粗く整形し、図の表裏両面を使用する。残存長14.0cm、厚さ約3.2cm。SD101溝出土。**329**は扁平な板状の粘板岩製砥石。4面を使用しているが、端部の片方を欠損している。残存長12.7cm、幅約5.8cm、厚さ約1.5cm。SB444竪穴住居跡から出土。**330**は方柱状の砂岩製砥石で、半部のみ残存する。残存長7.7cm、SD101溝出土。

c．鉄器

竪穴住居跡及び溝から出土した鉄器3点を図示する。

332は大形の刀子。脊が直に伸びる直刃であるが、研ぎ減りのためか鋒に向かって刃幅が次第に狭くなる。刃部先端と茎端を欠失する。残存部長16.6cm、刃基部幅2.0cm。SD408溝出土。**333**は曲刃鎌。鋒が短く緩く曲がる。全長が短く基部を折り曲げていないことから、再加工の可能性もある。残存長8.3cm、基部幅2.3cm。SB477竪穴住居跡出土。**334**はT字形の不明鉄器。断面方形で図の上辺片方の端部が細くなる。鏃に類するものと推測する。上辺長7.4cm、縦長5.2cm。SD423溝出土。

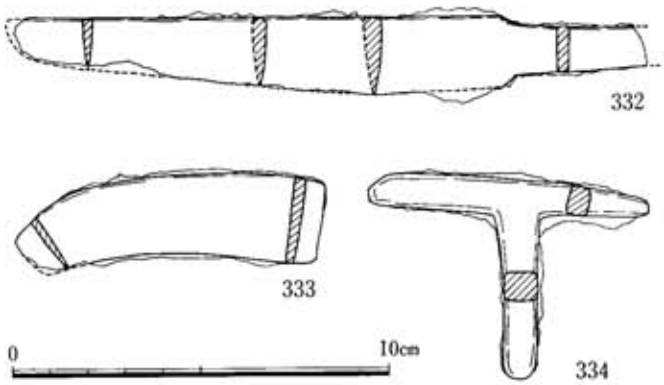


Fig.65　Ⅱ区出土鉄器

(3)　Ⅲ区の遺物

土師器、須恵器、土錘のほか、若干の鉄器片が出土した。土師器及び須恵器は、溝及び竪穴住居跡、土壙等から出土したが、ここでは主なものを図示する。SK412土壙から比較的まとまった量の出土を見た。北辺にある屋敷地割の直線区画溝SD304からの出土遺物をはじめ奈良時代を中心とする須恵器、土師器が多い。鉄器は形状のわかるその一部を図示する。

a．土師器・須恵器

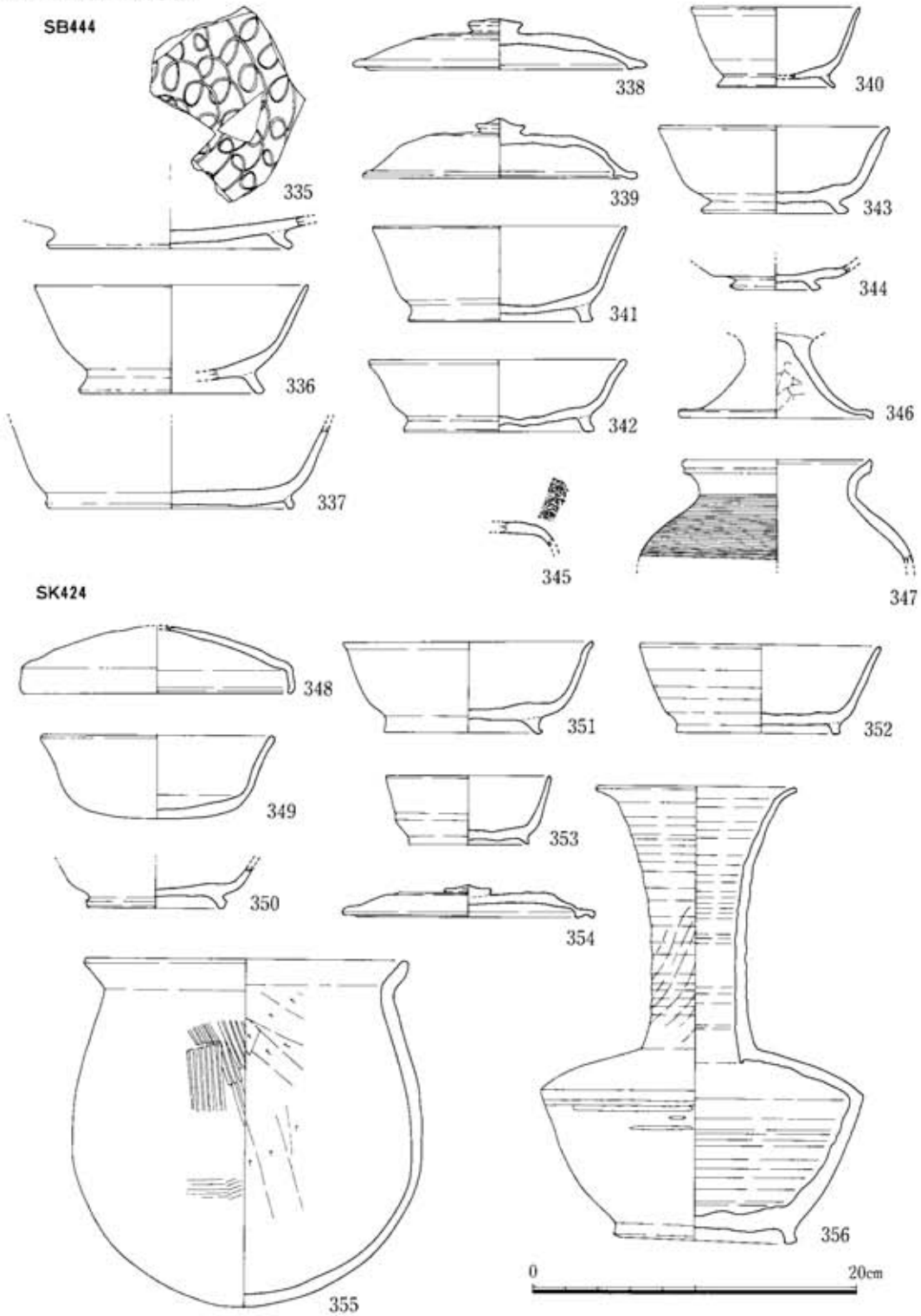


Fig. 66　Ⅲ区出土土師器・須恵器①

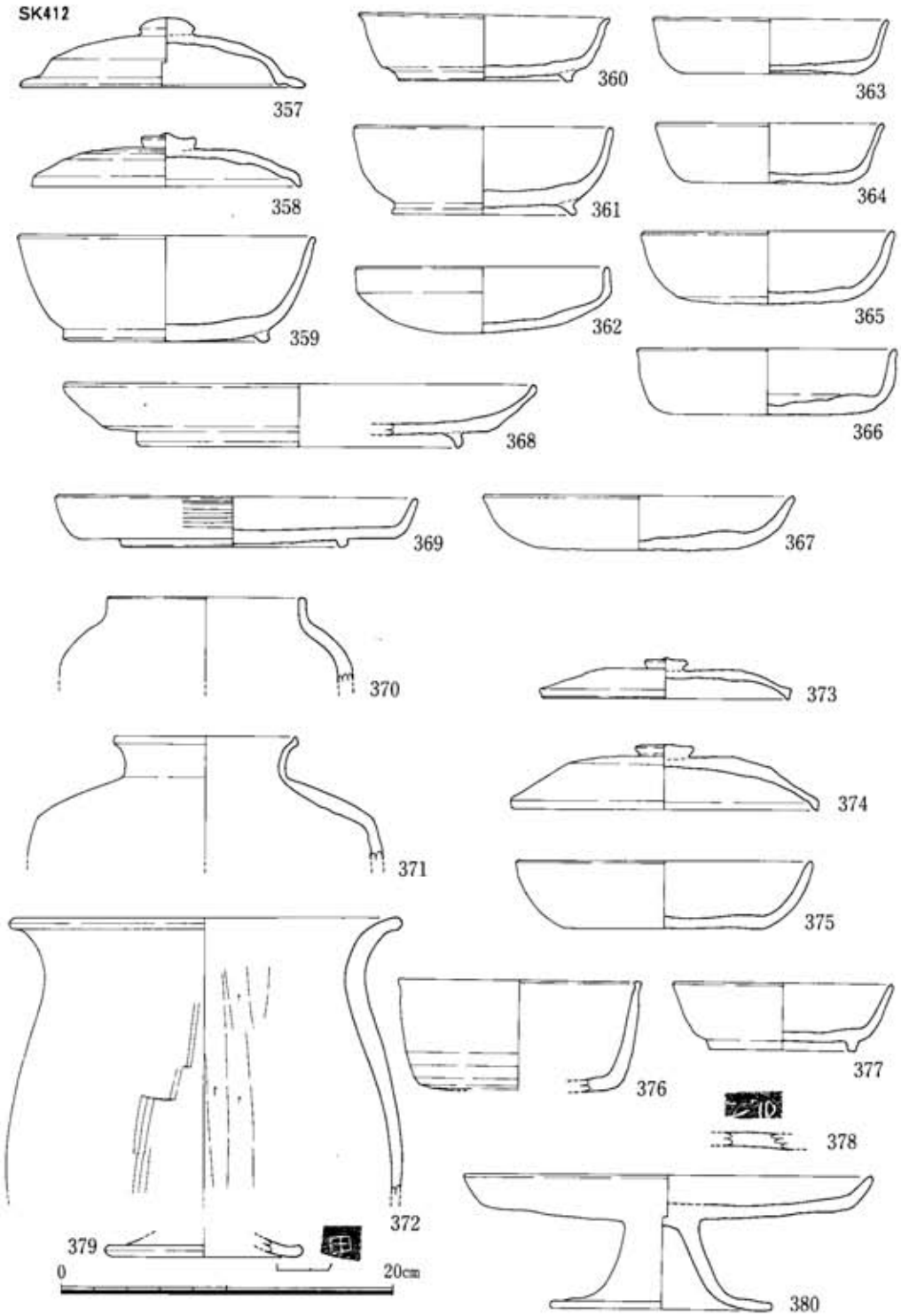


Fig. 67　Ⅲ区出土土師器・須恵器②

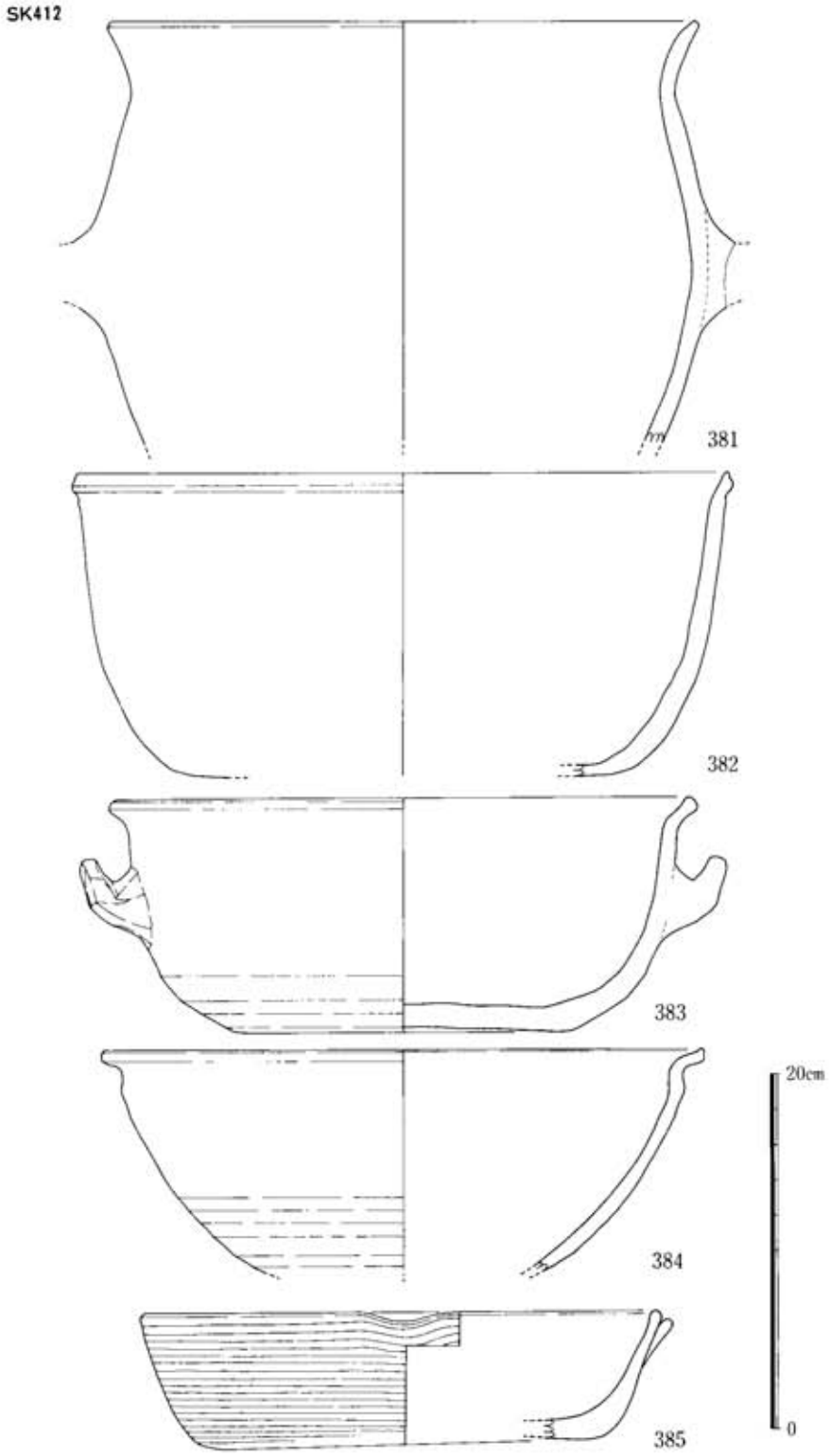


Fig. 68　Ⅲ区出土土師器・須恵器③

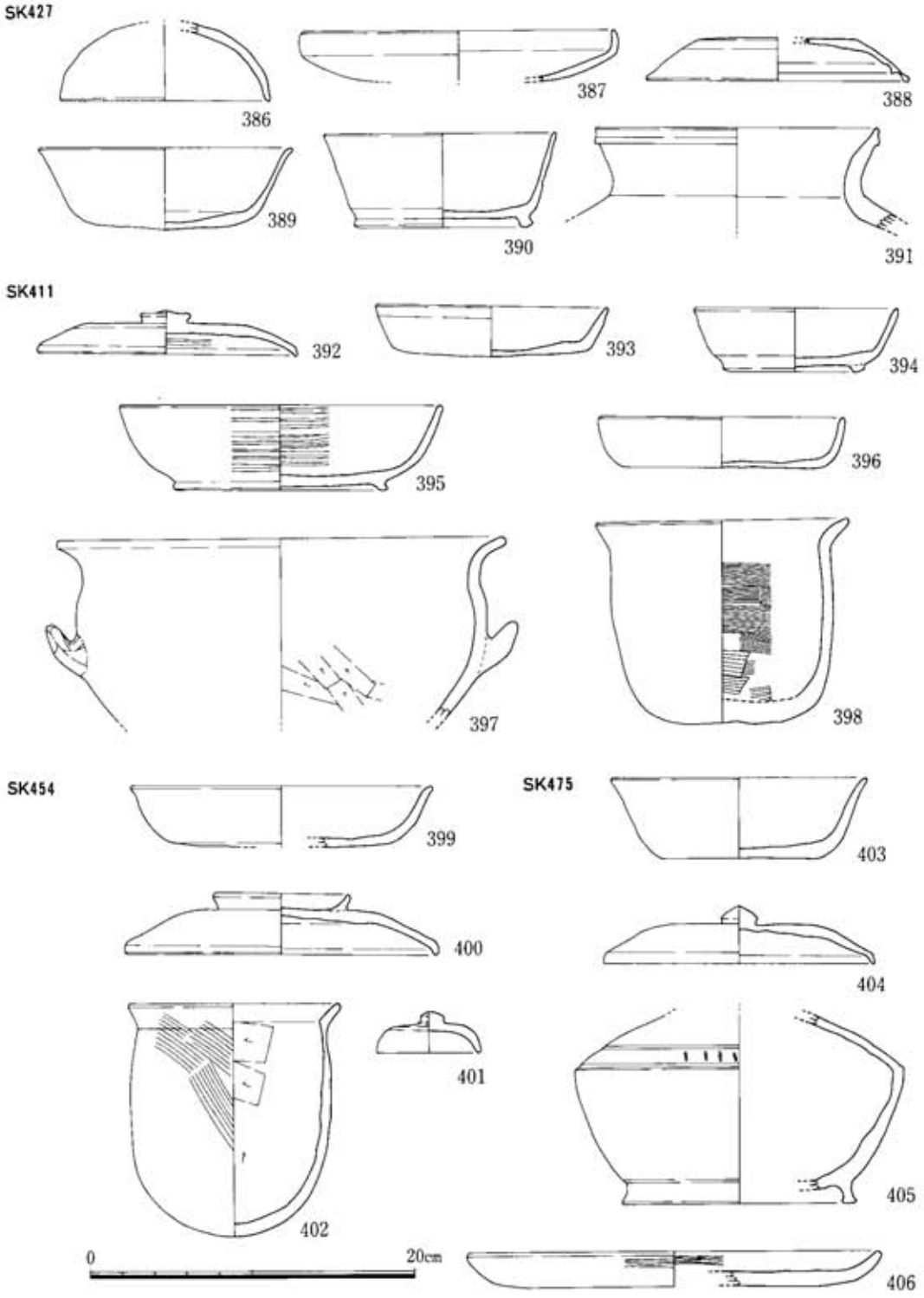


Fig. 69　Ⅲ区出土土師器・須恵器④

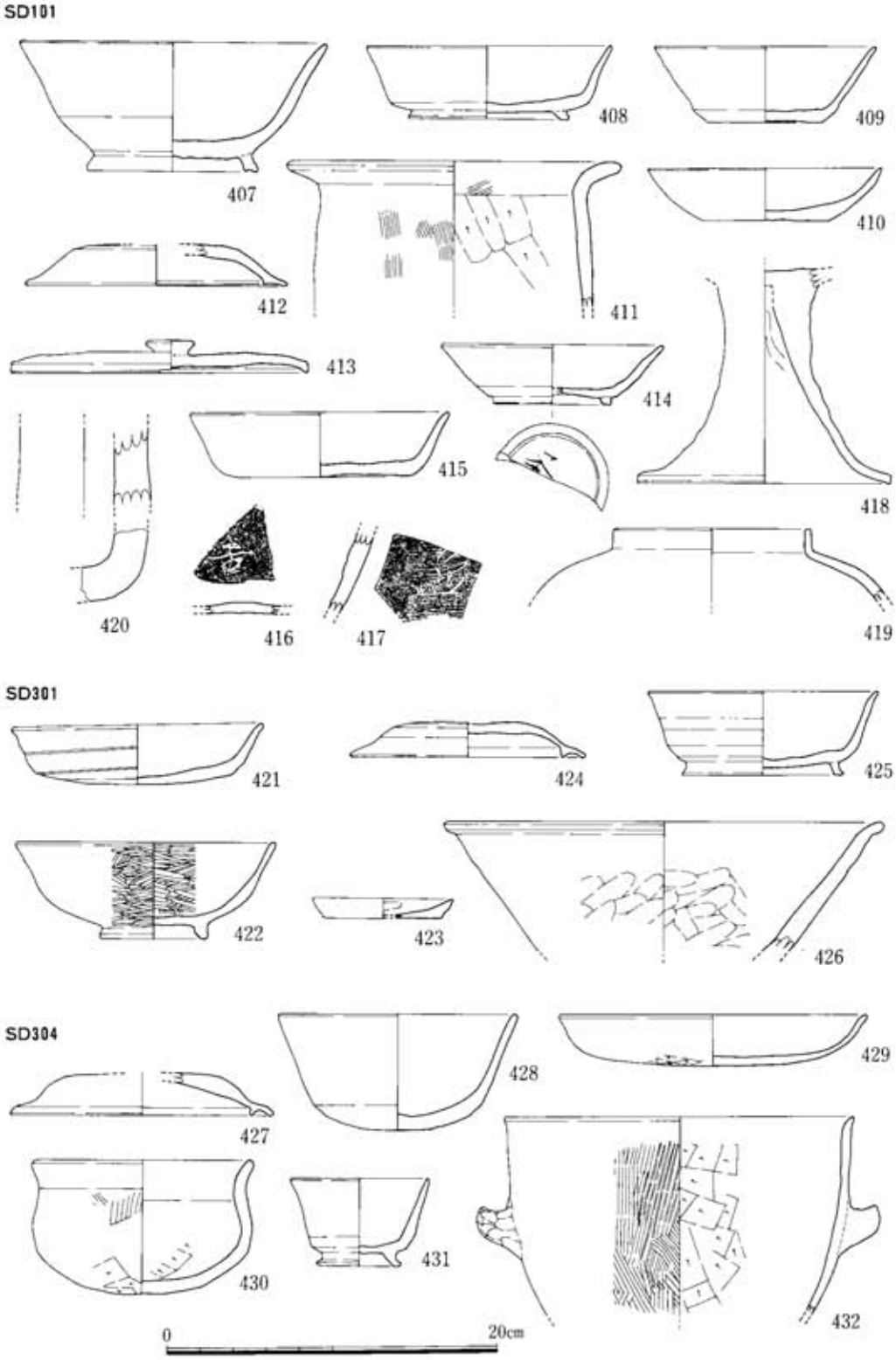


Fig. 70　Ⅲ区出土土師器・須恵器⑤

Tab. 8　Ⅲ区出土土師器・須恵器観察表

※　「図番号」下段数字は遺物登録番号

図番号	出土遺構	種別	法量cm	形態・技法等の特徴
335 91001985	SB444	土師器 皿	底径　14.4 器高	底部は湾曲気味で、高台は外に反ねながら低く開く。底部内面に螺旋状ヘラ描き暗文。底部内外面ナデ。橙色。
336 91000460	SB444	土師器 坏	口径　16.4 器高　6.6	体部は深く、底部から不明瞭に屈曲して立ち上がり、高台は大きく外に開く。体部外面下半ヘラケズリのあとナデ。他ナデ。明褐色。
337 91000461	SB444	土師器 坏	底径　14.7 器高	体部は深く、直線的に急に立ち上がり、法量の大きさ不釣り合いな薄い高台が付く。底部外面ヘラ切り離し、他ナデ。外面灰白色、内面淡黄茶褐色。
338 91000651	SB444	須恵器 坏蓋	口径　15.9 器高　2.9	宝珠つまみ。体部は天井部からなだらかに下り、口縁部内面にごく短い返りが付く。天井部外面ヘラケズリ、他ナデ。灰色。
339 91001981	SB444	須恵器 坏蓋	口径　16.4 器高　3.7	宝珠つまみ。天井部は高く、体部は急に湾曲して下る。口縁部は端部が外に反ね、内面に返りが付く。天井部外面ヘラケズリ、他ナデ。灰色。
340 91000458	SB444	土師器 坏	口径　10.2 器高　4.9	体部は深く、直線的に急に立ち上がり、高台は大きく外に開く。体部の外面底部付近ヘラケズリ、他ナデ。
341 91000462	SB444	須恵器 坏	口径　15.2 器高　5.8	体部は深く、直線的に急に立ち上がり、高台がやや開いて立つ。内外面ともナデ。外面灰色、内面紫灰色。
342 91000634	SB444	須恵器 坏	口径　15.5 器高　4.4	体部は比較的浅く、直線的に急に立ち上がり、高台が外に開き気味に立つ。底部外面ヘラ切り離し、他ナデ。褐灰色。
343 91000635	SB444	須恵器 坏	口径　14.0 器高　5.3	体部は直線的に急に立ち上がり、口縁部でわずかに外反気味。高台は底部の内側に入って外に開く。底部外面にヘラ記号。内外面ナデ。灰白色。
344 91001954	SB444	須恵器 坏	底径　5.6 器高	体部は緩く立ち上がる気配をみせ、高台は底部の内側に入って小さく低く開く。内外面ナデ。内面灰白色、外面暗灰色。
345 91001988	SB444	土師器 坏蓋	裾口径 器高	天井部外面に不明ヘラ描き文字あり。
346 91000468	SB444	土師器 高坏	裾径　22.6 器高	高台脚部は大きく外反して裾が開き、端部が稜で立つ。内外面ナデ。橙色。
347 91000639	SB444	須恵器 壺	口径　11.4 器高	胴部は肩が張り、頸部が短く立ち、口縁部は外反して端部の稜が立つ。胴部は外面カキ目、口縁部ナデ。灰色。
348 91002269	SK424	土師器 坏蓋	口径　16.0 器高　4.1	天井部は丸味をもって体部と一体化し、口縁部が明瞭に屈曲して立つ。天井部外面ヘラケズリ、他ナデ。黄橙色。
349 89009913	SK424	土師器 坏	口径　13.8 器高　5.1	底部は丸味をもち、体部は屈曲して外反気味に立ち上がる。体外面ナデか。茶褐色。
350 91002270	SK424	土師器 坏	底径　8.0 器高	高台は底部の内側に入ってやや開く。底部外面ヘラ切り離し、他ナデ。黄茶褐色。
351 91000640	SK424	須恵器 坏	口径　15.0 器高　5.6	体部は底部から屈曲してやや湾曲しながら立ち上がり、高台は底部のやや内側に入って開く。底部外面ヘラ切り離し、他ナデ。褐灰色。
352 91000642	SK424	須恵器 坏	口径　14.7 器高　5.4	体部は底部から屈曲して直線的に立ち上がり、高台が直に立つ。底部外面ヘラ切り離し他ナデ。褐灰色。
353 91000641	SK424	須恵器 坏	口径　9.8 器高　4.1	体部は底部から屈曲して直線的に急に立ち上がり、高台が短く立つ。底部外面ヘラ切り離し、他ナデ。暗灰色。
354 89009914	SK424	須恵器 坏蓋	口径　13.3 器高　1.9	低く潰れた宝珠つまみ。天井部は低く、体部は天平担な天井部から急に下り、口縁部が外に反ねて内面に返りが付く。天井部外面ヘラケズリ、他ナデ。褐灰色。
355 8910001	SK424	土師器 甕	口径　19.1 器高　21.2	胴部は丸底で上位が締まり、口縁部はやや不明瞭に屈曲して開く。胴部は外面ハケ目、内面ヘラケズリ。口縁部ナデ。砂粒を多く含む。黄橙色。
356 89009912	SK424	土師器 壺	口径　11.9 器高　27.6	長頸壺。胴部は肩が稜をもって張り、安定した高台が付く。頸部は外反しながら長く伸び、そのまま口縁部が大きく開く。内外面ナデ仕上げ。白灰色。
357 90000987	SK412	土師器 坏蓋	口径　17.0 器高　4.2	つまみは上面が丸く太い。天井部は高く丸く、体部は屈曲して下り、口縁部が外に反ねて内面に返りをもつ。天井部外面ヘラケズリ、他ナデ。褐色。
358 90000957	SK412	土師器 坏蓋	口径　15.9 器高　3.2	つまみは低く潰れる。体部は天井部から湾曲してなだらかに下り、口縁端部が短く折れて立つ。天井部外面ヘラケズリ、他ナデ。明褐色。
359 90001364	SK412	土師器 坏	口径　17.5 器高　6.3	体部は底部から緩く屈曲してやや湾曲しながら立ち上がり、低い高台が立つ。底部外面ヘラ切り離し、体部内外面ナデか。橙色。

図番号	出土遺構	種別	法量cm	形態・技法等の特徴
360 90000956	SK412	土師器 坏	口径 14.5 器高 3.9	体部は比較的浅く、底部から屈曲してやや湾曲しながら立ち上がり、口縁部が外方にめくれる。底部のやや内側に低い高台。底部と体部内外面ナデ。明黄橙色。
361 90000958	SK412	土師器 坏	口径 15.3 器高 5.2	体部は底部から屈曲してやや湾曲しながら急に立ち上がり、口縁部が外方にめくれる。高台は短く外方に開いて立つ。底部および体部内外面ともナデ。茶褐色。
362 90000959	SK412	土師器 坏	口径 14.7 器高 3.9	底部は丸味をもち、体部は屈曲して直に立ち上がる。底部および体部内外面ともナデ。淡黄褐色。
363 90001401	SK412	土師器 坏	口径 13.7 器高 3.3	体部は底部から屈曲して直線的に急に立ち上がる。底部外面ヘラ切り離し、他ナデ。黄褐色。
364 90000994	SK412	土師器 坏	口径 13.3 器高 3.5	体部は底部から屈曲して直線的に急に立ち上がる。底部外面ヘラ切り離し、他ナデ。黄褐色。
365 90000983	SK412	土師器 坏	口径 14.6 器高 4.3	体部は底部から緩く湾曲して立ち上がる。底部外面は不定方向ヘラケズリ。底部内面および体部内外面ナデ。褐色。
366 90000960	SK412	土師器	口径 15.6 器高 3.9	体部は底部から屈曲して直線的に急に立ち上がる。体部内外面および底部内面ナデ。底部外面に網状の敷物痕。淡黄褐色。
367 90000985	SK412	土師器 盤	口径 18.2 器高 3.3	体部は浅く、底部から緩く湾曲して立ち上がる。底部外面はヘラ切り離しのあとナデ。底部内面および体部内外面ナデ。明黄褐色。
368 90002017	SK412	土師器 盤	口径 27.8 器高 3.7	体部は底部と稜をなして直線的に開いて立ち上がり、口縁端部がやや内方にめくれる。高台は底部の内側に入って立つ。底部外面ヘラケズリ、他ナデ。黄褐色。
369 90001403	SK412	土師器 坏	口径 21.3 器高 3.1	体部は浅く、底部から屈曲して直線的に急に立ち上がり、高台は底部の内側に奥まって短く立つ。底部外面は不定方向ヘラケズリ、他ヘラミガキ。黄褐色。
370 91001895	SK412	土師器 壺	口径 11.2 器高	胴部は肩が張り、口縁部は短く直立。内外面ともナデ。暗黄褐色。
371 91001894	SK412	須恵器 壺	口径 10.7 器高	胴部は肩位が屈曲。口縁部は外面で折れて外反気味に立ち上がり口縁端部がナデて稜を上に向ける。内外面ともナデ。淡黄褐色。
372 90001404	SK412	土師器 甕	口径 23.0 器高 2.4	体部は膨らみがなく、口縁部緩く大きく外反。体部ハケ目、内面ヘラミガキ。口縁部ナデ。茶褐色。
373 90000982	SK412	須恵器 坏蓋	口径 14.6 器高 2.4	潰れた宝珠つまみ。体部は低く、平坦な天井部からなだらかに下り、口縁端部はナデて肥厚し稜で立つ。天井部外面ヘラケズリ、他ナデ。灰色。
374 90001381	SK412	須恵器 坏蓋	口径 16.2 器高 3.0	潰れた宝珠つまみ。体部は天井部と一体化してなだらかに下り、口縁端部は短く折れて立つ。天井部外面ヘラケズリ、他ナデ。淡灰褐色。
375 90000991	SK412	須恵器 坏	口径 17.2 器高 4.0	体部は底部から屈曲して湾曲しながら立ち上がる。底部外面ヘラ切り離しのあとナデ。底部内面および体部内外面ナデ。灰色。
376 91001880	SK412	須恵器 坏	口径 14.1 器高	体部は底部から屈曲して直線的に急に立ち上がり、口縁部はナデて薄い。外面は体部下半から底部にかけてヘラケズリ、他ナデ。底部内面および体部内外面ナデ。灰色。
377 90000997	SK412	須恵器 坏	口径 12.8 器高 4.0	体部は底部から屈曲して直線的にやや急に立ち上がり、高台は底部のやや内側に入って直に立つ。底部外面ヘラ切りはないのあとナデ。灰色。
378 92002324	SK412	須恵器 坏蓋	口径 器高	天井部に不明ヘラ描き文字あり。
379 92002323	SK412	土師器 高坏	底径 11.0 器高	脚部裾が大きく開く。脚部内面にヘラ描き文字「田」あり。内外面ナデ。明茶褐色。
380 90001407	SK412	土師器 高坏	口径 24.0 器高 8.0	坏部は浅く、体部が屈曲して短く開き、脚部は裾が平坦にちかく開く。坏部は内外面ともヘラミガキ、脚部内外面ともナデ。黄橙色。
381 90001406	SK412	土師器 甑	口径 32.6 器高	体部は中位のやや上で膨らみ、両側に把手をもつ。口縁部は体部から反転して緩く大きく外反。内外面ともナデ。橙褐色。
382 91001912	SK412	土師器 鉢	口径 36.2 器高 16.9	体部は深く、薄い底部から屈曲して急に立ち上がり、口縁端部はナデてやや外反。体部は内面縦方向のヘラミガキ、内面ナデ。明茶褐色。把手および底部欠失。
383 91001914	SK412	土師器 鉢	口径 31.8 器高 13.0	体部は平底から緩く屈曲して急に立ち上がり、口縁部は短く折れて外反。体部両側に粗くナテた把手が付く。内外面ともナデ。橙色。
384 91001913	SK412	土師器 鉢	口径 33.2 器高 16.4	体部は深く、小さな底部から湾曲気味に立ち上がり、口縁部付近で複雑に折れて、短く外方に開く。体部外面下半ヘラケズリ、他ナデ。橙色。

図番号	出土遺構	種別	法量cm	形態・技法等の特徴
385 90001365	SK412	土師器 鉢	口径　28.4 器高　7.4	体部は浅く、平坦な底部から屈曲して直線的に急に立ち上がり、片口をもつ。体部は外面カキ目調整、内面ナデ。橙色。
386 91002145	SK427	須恵器 坏	口径　12.8 器高	天井部は高く、体部、口縁部まで丸く一体化。天井部へラケズリ、他ナデ。灰褐色。
387 91002144	SK427	土師器 坏	口径　18.8 器高	底体部は丸味をもち、口縁部は屈曲して短く直行。体部外面へラケズリ、他ナデ。明褐色。
388 91002133	SK427	須恵器 坏	口径　15.8 器高	天井部は平坦で、体部が屈曲して下ってそのまま口縁部をつくり、内面をナデで返りをもつ。天井部へラケズリ、他ナデ。灰色。
389 91002142	SK427	土師器 坏	口径　15.5 器高　5.0	底部はやや不安定で、体部は緩く屈曲して直線的にたちあがり、口縁端部がやや外方にめくれる。底部外面へラケズリ、他ナデ。橙色。
390 91002139	SK427	土師器 坏	口径　14.1 器高　5.7	体部は深く、底部から屈曲して直線的に急立ち上がる。底部外面下半へラケズリ、他ナデ。明赤褐色。
391 91002132	SK427	須恵器 甕	口径　17.0 器高	口縁部は張りのつよい胴部から屈曲して外反気味に開き、端部はナデで稜が立つ。口縁部内外面ナデ。灰色。
392 91001714	SK411	土師器 坏蓋	口径　15.7 器高　2.2	潰れた宝珠つまみ。天井部は低く、体部がなだらかに下り、口縁端部が短く立つ。天井部へラケズリ、他回転へラミガキ。橙色。
393 91001711	SK411	土師器 坏	口径　14.0 器高　3.1	底部はやや不安定で、体部は浅く、底部から屈曲して直線的に立ち上がる。底部外面へラケズリ、他ナデ。明赤褐色。
394 91000643	SK411	須恵器 坏	口径　12.2 器高　3.9	体部は底部から屈曲して直線的に急立ち上がり、底部のやや内側に入って低い高台が付く。底部外面へラ切り離し、他ナデ。褐灰色。
395 91001715	SK411	土師器 坏	口径　19.4 器高　5.2	体部は比較的浅く、底部から緩く屈曲して立ち上がり、底部やや内側に入って高台が低くやや外方に張る。体部外面へラミガキ。橙色。
396 91001708	SK411	須恵器 坏	口径　14.7 器高　3.1	体部は底部から屈曲して直線的に急に立ち上がる。底部外面へラ切り離し、他ナデ。灰色。
397 91001725	SK411	土師器 鉢	口径　27.0 器高	体部は上位で締まり、口縁部が緩く大きく外反。タイプ両側に粗くナデた把手が付く。体部は内外面へラケズリ、口縁部は内外面ナデ。橙色。
398 91001716	SK411	土師器 鉢	口径　15.1 器高　12.4	体部は直に立ち、口縁部は屈曲して外反気味に開く。体部は外面縦方向のへラケズリ、内面ハケ目。橙色。
399 91000656	SK454	土師器 坏	口径　18.6 器高　3.7	体部は比較的浅く、底部から緩く屈曲して立ち上がり、口縁端部やや外にめくれる。底部外面へラケズリ、他ナデ。褐色。
400 89010002	SK454	土師器 蓋	口径　18.8 器高　3.8	天井部に大きな環状のつまみが付く。体部はなだらかに下り、口縁端部が短く折れて立つ。調整不明瞭。橙色。
401 91000644	SK454	須恵器 蓋	口径　6.3 器高　2.5	突起状つまみ。体部は天井部から急に屈曲して短く立つ。内外面ナデ。黒色。
402 91000659	SK454	土師器 甕	口径　11.9 器高　14.2	底部は完全な丸底で体部は直行し、口縁部派内面で減入り用に屈曲して開く。体部外面ハケ目、内面へラケズリ。褐色。
403 91002148	SK475	土師器 坏	口径　15.4 器高　4.9	体部は深く、底部から屈曲して急に立ち上がり、口縁部やや外反気味。底部へラ切り離し、他ナデ。黄橙色。
404 91002226	SK475	須恵器 坏蓋	口径　16.4 器高　3.5	宝珠つまみ。体部は平坦な天井部からなだらかに下り、口縁端部が短く立つ。天井部へラケズリ、他ナデ。灰色。
405 91002228	SK475	須恵器 壺	底径　11.5 器高	胴部は上位が稜をなしてつよく張り、径が広く安定した高台が付く。胴部肩位に沈線２状に挟まれてへラ描列点文。胴部外面下半へラケズリ、他ナデ。灰色。
406 91001721	SK475	土師器 盤	口径　13.3 器高　2.2	体部は浅く、緩く短く立ち上がる。体部は内外面へラミガキ、底部は内面ナデ、外面へラケズリ。橙色。
407 91000405	SD101	土師器 坏	口径　18.7 器高　10.1	器体は大振。体部は深く、底部から緩く屈曲して直線的に立ち上がり、高台が外方に開いて立つ。底外面から体部外面の底部付近までへラケズリ、他ナデ。橙色。
408 91000403	SD101	土師器 坏	口径　14.6 器高　4.5	体部は底部から屈曲して直線的に急立ち上がり、口縁部やや外反気味。底部の内側に入って高台がつよく外方に張る。底部外面へラ切り離しのあとナデ、他ナデ。明橙色。
409 91000411	SD101	土師器 坏	口径　13.2 器高　4.6	体部は深く、底部から屈曲して直線的に立ち上がる。底部外面へラ切り離し、他ナデ。淡黄橙色。

図番号	出土遺構	種別	法量cm	形態・技法等の特徴
410 91000401	SD101	土師器 坏	口径 14.1 器高 3.2	体部は底部から緩く屈曲し、湾曲して立ち上がる。底部外面ヘラ切り離しのあとナデ、他ナデ。黄橙色。
411 91000505	SD101	土師器 甕	口径 19.0 器高	胴部は張りがなく、口縁部は緩く外反気味して大きく開く。胴部はハケ目のあとナデ、内面ヘラケズリ。口縁部ハケ目のあとナデ。茶褐色。
412 91002199	SD101	須恵器 坏蓋	口径 15.4 器高	体部は深く、平坦な天井部がやや急に下って口縁端部が外方に反ね、内面に短い返りをもつ。天井部ヘラケズリ、他ナデ。灰色。
413 91002184	SD101	須恵器 坏蓋	口径 17.6 器高 2.0	つまみは上面平坦。天井部は低く潰れ、口縁端部が稜で立つ。天井部ヘラケズリ、他ナデ。青灰色。
414 92002383	SD101	須恵器 坏	口径 13.2 器高 3.6	体部は底部から屈曲して直線的に開き、短い高台が直に立つ。底外面に不明ヘラ描きあり。底部外面から体部外面の底部付近までヘラケズリ、他ナデ。青灰色。
415 91000412	SD101	土師器 坏	口径 15.2 器高 3.8	体部は底部から屈曲して直線的に立ち上がる。底部外面ヘラ切り離し、他ナデ。橙色。
416 92002384	SD101	土師器 坏蓋	口径 器高	ヘラ描き文字あり。
417 92002385	SD101	須恵器 坏蓋	口径 器高	体部下位外面に不明ヘラ描き文字あり。
418 92000242	SD101	須恵器 高坏	底径 15.3 器高	一部のみ残。粗い砂粒を含む。外面灰色または橙色、内面橙色に焼けている。
419 92000241	SD101	須恵器 壺	口径 11.4 器高	胴部は肩が丸く張り、口縁部が短く直立。口縁部付近内外面ナデ。白灰色。
420 91000551	SD101	ふいご 羽口	筒径 7.9 器高	残欠。粗い砂粒を含む。外面灰色または黄橙色、内面橙色に焼けている。
421 89009947	SD301	土師器 坏	口径 14.9 器高 3.7	体部は不安定な底部からわずかに稜をなして立ち上がり、口縁部はやや外にめくれる。外底部ヘラ切り離し、内底部及び体部内外面回転ナデ。黄灰色。
422 91001829	SD301	瓦器碗	口径 15.4 器高 5.8	高台は小さく、体部は湾曲しながら緩く開いて立ち上がる。内外面黒色人ラミガキ。
423 91000997	SD301	土師器 小皿	口径 8.3 器高 1.2	体部は内面指押さえて立ち上げる。内外面ナデ。橙色。
424 91000992	SD301	須恵器 坏蓋	口径 11.6 器高 2.1	体部は天井部からなだらかに下り、口縁端部は外方に反ねて内面に返りをもつ。天井部ヘラケズリ、他ナデ。灰色。
425 91000991	SD301	須恵器 坏	口径 14.0 器高 5.0	体部は底部から屈曲して直線的に急に立ち上がり、口縁端部がやや外方にめくれる。高台はやや底部内側に入る。底外面にヘラ記号あり。底外面ヘラケズリ、他ナデ。灰色。
426 91000826	SD301	瓦器 鉢	口径 26.2 器高	体部は直線的に開き、口縁部は短くやや外反。内外面ナデ、指オサエ。淡黄橙色。
427 91000987	SD304	須恵器 坏蓋	口径 15.6 器高	体部は天井部からなだらかに下り、口縁端部は外方に反ねて内面に返りをもつ。天井部ヘラケズリ、他ナデ。灰色。
428 9100171	SD304	須恵器 碗	口径 14.2 器高 7.0	丸底。体部は深く、底部から緩く湾曲して立ち上がったのち、直線的に伸びる。底部外面ヘラケズリ、他ナデ。灰色。
429 91000988	SD304	須恵器 坏	口径 18.6 器高 3.1	底部は丸味があり不安定。体部は緩く湾曲して浅く立ち上がる。底部外面ヘラケズリ、他ナデ。淡黄橙色。
430 91000986	SD304	土師器 碗	口径 12.8 器高 8.1	体部は丸底で上位がやや絞まり、口縁部が緩く外反。底部は内外面ともヘラケズリのあとナデ、他は体部外面上位にハケ目を一部残してナデ。橙色。
431 89009950	SD304	土師器 坏	口径 8.2 器高 5.3	体部は直線的に立ち上がり、高台はやや高く開いて立つ。体部外面の下端ヘラケズリ、他ナデ仕上げ。橙色。
432 91000989	SD304	土師器 甑	口径 21.0 器高	体部は緩く湾曲しながら立ち上がり、直口縁となる。体部上位の両側に把手が付く。体部外面ハケ目、内面ヘラケズリ。口縁部ナデ。明赤褐色。

b．鉄器

竪穴住居跡及び土壙から出土した３点を図示する。

433は曲刃鎌。着柄基部は刃部に対してやや鈍角に折り曲げられ、先端部約３分の１が緩やかに内湾する。刃部は両刃かと見られ、研ぎ減りのため幅が狭くなっている。先端と刃部を少々欠損する。残存長16.2cm、基部幅2.7cm。SB405竪穴住居跡出土。**434**は刀子。両刃と見られ、茎部には柄の木質一部と責具の鉄輪が残存する。研ぎ減りによって刃部は幅が狭くなり、また、茎端部を欠失する。残存長7.8cm、SK012土壙出土。**435**は鋏。断面方形の鉄棒をコ字形に曲げ、両先端を薄くつくる。木質が一部残る。縦長9.2cm、横幅6.8cm。SB434竪穴住居跡から出土した。

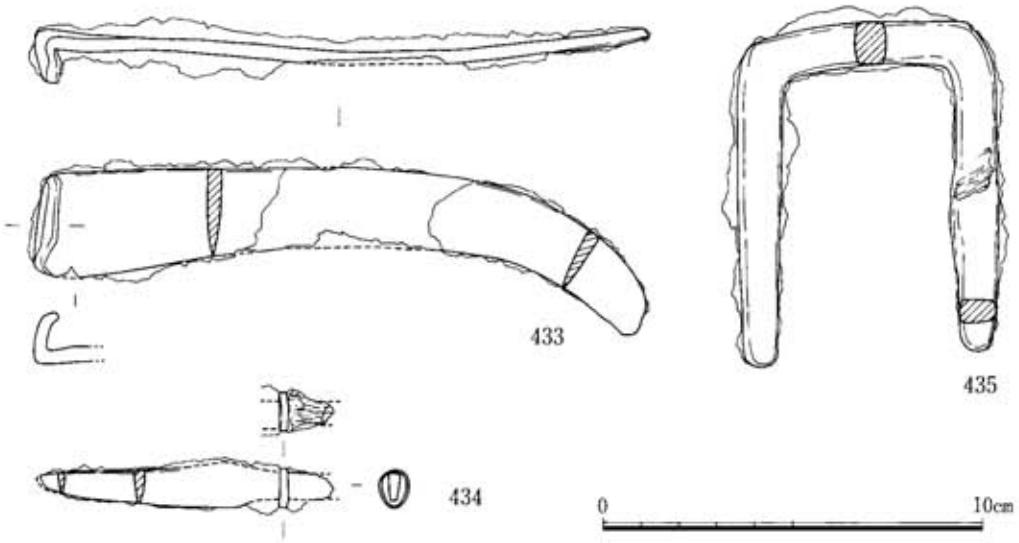


Fig.71　Ⅲ区出土鉄器

大久保三本松遺跡（概要）

おおくぼさんぼんまつ

遺跡名：大久保三本松遺跡（略号　OKB）
所在地：佐賀郡大和町大字川上字三本松

大久保三本松遺跡（概要）

遺跡は山麓部の舌状低丘陵先端に位置する。標高約18m。南側はそのまま扇状地に移行するため、傾斜はわずかで、丘陵端とは気付かない程である。遺跡の東端は約３mの段差をもつ急崖となつて水田がしばらく続く。調査路線内に限って言えば、東側は西山田三本松A遺跡までは約２km離れてその間に遺跡は殆どなく、また、西側も今山八幡原遺跡などがあるが、遺構密度は比較的薄く、遺跡としては孤立した感がある。

遺跡は奈良・平安時代前期を中心とした集落跡である。他に北辺のSD045溝付近を中心に縄文時代の遺物が比較的多く分布することから若干広げて掘り下げたが、同時期の明確な遺構は認められなかった。奈良・平安時代では溝10条、竪穴住居跡19棟、掘立柱建物跡16棟、井戸跡６基、土壙３基を検出した。西山田二本松遺跡・西山田三本松遺跡と地理的に近く、また時期も重なるので、参考資料として概要を紹介しておく。

溝11条のうち、地割り等の区画に関係すると見られるものでは、SD042が西傾25°の南北南溝、SD041は西傾約18°の南北溝で浅く残存して北側に続くと見られる。また、調査区の西側にはSD030・SD031・SD032・SD42・SD043がある。いずれも角をなして屈曲する区画的な溝で、相互に関係するものと考えられるが、性格は不明である。時期についても明確でなく、後世に下る可能性も否定できない。

竪穴住居跡は、調査区の東北部を除いて一定のまとまりある分布を示す。全てが方形プランで、規模はSB013のみ１辺６m前後と大型であるが、拡張によるものである。他は１辺４、５m前後が一般的で、少数ながら１辺３m前後の小型竪穴住居跡も見られる。19棟のうち10棟が、原則としてその北側にカマドを付設する。削平のため明らかではないが、カマドの存在を推定させる焼土が床面壁際に見られるものを含めると14棟に及び、74%がカマドをもつことになる。カマドを付設するもののうち、SB002・SB003・SB013・SB016・SB019には壁面を掘り込んだ煙道が残存しており、また、SB003・SB016では火床に甕が残っていた。特異な例ではSB013が拡張に合わせてカマドも造り替えていることが観察でき、SB002の場合は北壁際とは別に東壁際にもカマドをもつが、これも造り替えの結果かと考えられる。

掘立柱建物跡16棟は全体として竪穴住居跡の分布と重なる形で分布し、明らかな例では竪穴住居跡を切って造られている。したがって、全体の傾向としては、竪穴住居群から掘立柱建物群への変遷が考えられる。構造は３間×２間が11棟と最も多く、他には２間×２間が４棟、２間×１間が１棟である。２間×２間の４棟はいずれも総柱で、そのうち中央付近のSB004・SB005・SB006の３棟は西面をほぼ揃えて南北に並ぶことから、同時期あるいは近接した時期の

Fig. 1　大久保三本松遺跡遺構配置図

群倉と見られる。最も多い３間×２間の11棟では特に大型のものは見当らず、最大のSB022でも桁行6.0m程度である。配置は企画性に乏しく、柱掘形は円形を基本とする。

井戸跡はSE033・SE034・SE035が調査区の西辺に集中して掘られ、SE038・SE039・SE040が調査区の東半にやや分散する。

出土遺物は、縄文時代、弥生時代が若干で、他はほぼ奈良・平安時代に限られる。

縄文時代では前期の曽畑式土器と石器を採集した。曽畑式土器の多くは細片であるが、そのうち唯一全体が復元できた深鉢１点のみ佐賀平野では希少な例であるのでFig.2に図示しておく。丸底で胴部上位が締まったのち口縁部やや外反して立つ。外面は太く粗い条痕、内面はナデて口縁部下を鎖状に連続した条痕２条、さらに口唇部を刻目で飾る。SD045付近出土。石器は黒曜石のスクレーパー、石鏃、のほか、磨製石斧が２点出土した。弥生時代では、土器片のほかにガラス小玉数点と石包丁の未製品片が１点出土した程度で、量はごく少ない。

奈良・平安時代では土師器、須恵器が大部分で、他に瓦、土錘、砥石が若干と、SB002竪穴住居跡からは鉄鎌片とふいご羽口片が各１点出土している。土師器・須恵器は大部分の遺構上面が著しく削平されていることもあって、まとまって出土したものは少なく、わずかに時期が推定できる竪穴住居跡、溝、井戸跡等で見るかぎりでは８～９世紀を中心とする。

以上のように、本遺跡は奈良時代から平安時代前期、８～９世紀にかけての集落跡を中心とする遺跡である。掘立柱建物跡の時期は今一つ明確でないが、竪穴住居跡との切り合い関係から見ると、全体の傾向としては奈良時代に竪穴住居跡を中心に集落形成が始まり平安時代前期以降、掘立柱建物跡に変わっていった様相が推定される。嘉瀬川東岸に肥前国庁が出現し、この地域が肥前国の中心地として発展する時期の地域勢力の動向を示す一例として注目される遺跡と言えよう。

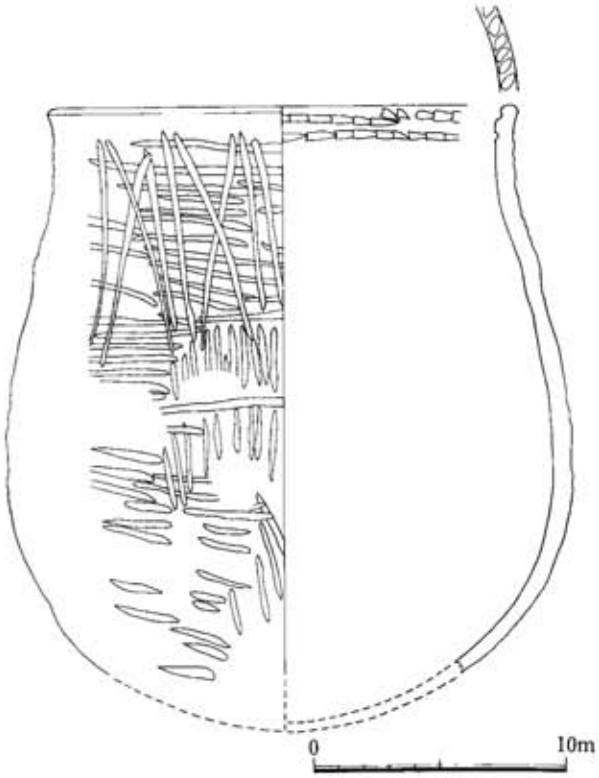


Fig.2　曽畑式深鉢

Tab.1　大久保三本松遺跡遺構一覧表

遺構番号	種別	形態の特徴等	規模（m）	出土遺物等、備考
SB001	竪穴住居跡	方形、焼土（カマドか）	3.7×2.6+α	土師、須恵
SB002	竪穴住居跡	長方形、カマド2付	4.8×3.8	土師、須恵・ふいご、鎌
SB003	竪穴住居跡	方形、カマド付	3.9×3.6	土師、須恵
SB004	掘立柱建物跡	東西棟(2間×2間)、方位N62°E	3.60×3.00	建替1回、SB053が切る
SB005	掘立柱建物跡	東西棟(2間×2間)、方位N61°E	3.30×3.30	建替1回
SB006	掘立柱建物跡	東西棟(2間×2間)、方位N60°E	4.80×3.60	SB055に切られる
SB007	竪穴住居跡	方形、SD030に切られる、焼土	3.8×3.7+α	土師
SB008	竪穴住居跡	長方形、SB056が切る、焼土	4.4×3.8	土師、須恵、砥石
SB009	竪穴住居跡	不整方形、小形、溝に切られる	2.7×2.4	
SB010	竪穴住居跡	方形か、西壁削平、カマド付	3.6×2.4+α	土師、須恵
SB011	竪穴住居跡	方形	5.0×4.8	土師、須恵
SB013	竪穴住居跡	方形、拡張、カマド付	6.4×6.0	土師、須恵・砥石・鉄滓
SB014	竪穴住居跡	方形、SB015が切る、カマド付	3.4×3.1	土師
SB015	竪穴住居跡	楕円形、SB014・023に切られる	2.9×2.9+α	土師、須恵
SB016	竪穴住居跡	隅丸長方形、カマド付	3.6×2.8	土師、須恵
SB017	竪穴住居跡	方形、SE039に切られる、焼土	3.5×3.4	土師、須恵・鉄滓
SB018	掘立柱建物跡	東西棟(2間×2間)、方位N25°W	2.70×2.70	
SB019	竪穴住居跡	隅丸長方形、カマド付	5.0×3.6	土師、須恵、砥石
SB020	竪穴住居跡	方形、SB021を切る、カマド付	3.3×3.2	土師、須恵、土錘、鉄滓
SB021	竪穴住居跡	方形、SB020に切られる	3.2×？	土師、須恵、土錘
SB022	掘立柱建物跡	南北棟(3間×2間)、方位N15°W	6.00×4.50	SB054と切り合う
SB023	掘立柱建物跡	南北棟(3間×2間)、方位N13°W	5.40×3.90	SB014・SB015を切る
SB024	竪穴住居跡	隅丸長方形	4.2×3.6	土師
SB025	掘立柱建物跡	南北棟(3間×2間)、方位N12°W	4.50×3.60	SB017を切る
SB026	掘立柱建物跡	南北棟(2間×1間)、方位N62°E	2.80×2.70	
SK027	土壙	不整形	2.0×1.2	
SK029	土壙	隅丸長方形	1.8×1.5	
SD030	溝	東西―南北に緩く屈曲	幅約0.6	
SD031	溝	東西―南北に屈曲	幅約1.4	
SD032	溝	東西―南北に屈曲	幅約0.6	
SE033	井戸	円形、SE034を切る	0.7×0.7	
SE034	井戸	円形、SE033に切られる	0.7×0.8	
SE035	井戸	円形	0.7×0.7	
SK037	土壙	楕円形	1.9×1.7	土師
SD036	溝	SB013竪穴住居跡の排水溝か	0.4	
SE038	井戸	楕円形	1.1×0.9	
SE039	井戸	楕円形、SB017を切る	2.3×1.5	土師器、須恵器、鉄滓
SE040	井戸	楕円形	1.5×1.1	
SD041	溝	南北直線溝	0.5	土師、須恵

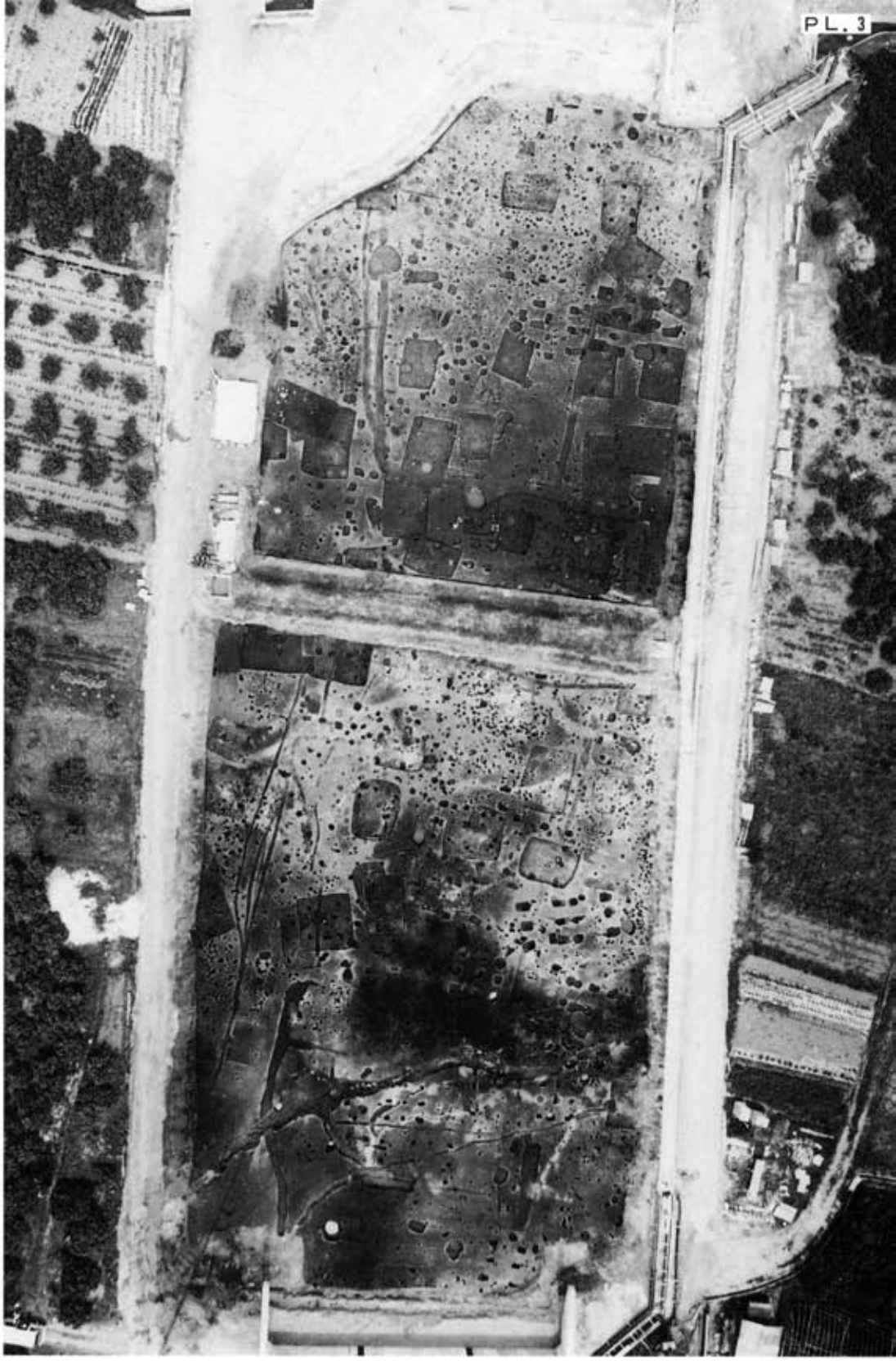
遺構番号	種別	形態の特徴等	規模（m）	出土遺物等、備考
SD042	溝	南北直線溝	幅約0.1	
SD043	溝	東西―南北に屈曲	幅約0.8	
SD044	溝	東西―南北に屈曲	幅約0.4	
SD045	溝	南北曲線溝	幅約0.6	
SD046	溝	南北曲線溝	幅約0.4	
SB047	竪穴住居跡	方形、カマド付	5.0×4.6	土師、須恵
SB048	竪穴住居跡	方形、カマド付	4.1×4.0	土師、須恵
SB050	掘立柱建物跡	南北棟(3間×2間)、方位N18°W	5.40×3.90	
SB051	掘立柱建物跡	南北棟(3間×2間)、方位N17°W	4.20×3.30	
SB052	掘立柱建物跡	南北棟(3間×2間)、方位N5°W	4.80×3.30	
SB053	掘立柱建物跡	東西棟(3間×2間)、方位N80°E	4.80×3.30	SB004を切る
SB054	掘立柱建物跡	東西棟(3間×2間)、方位N66°E	4.80×3.30	SB022と切り合う
SB055	掘立柱建物跡	南北棟(3間×2間)、方位N11°W	4.80×3.60	SB006を切る
SB056	掘立柱建物跡	東西棟(3間×2間)、方位N85°E	5.40×3.90	
SB057	掘立柱建物跡	南北棟(3間×2間)、方位N11°W	3.80×3.30	

図　　版

西山田二本松遺跡A区

西山田遺跡群周辺航空写真〈上北〉

西山田二本松遺跡A区　1.遺跡遠景〈南から〉
2.調査区上空から東方を臨む



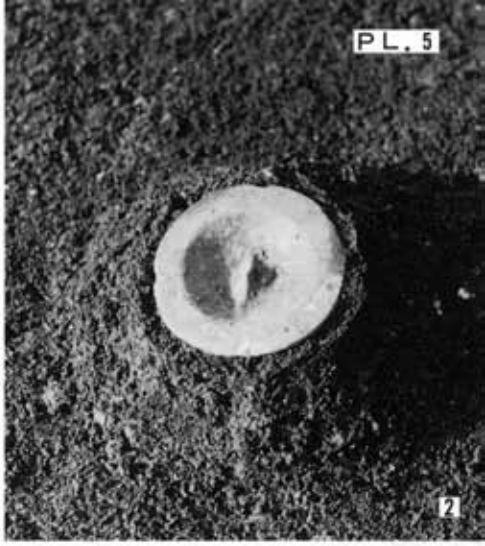
西山田二本松遺跡A区　調査区全景〈上空から〉

西山田二本松遺跡A区

1．調査区北東部〈上空から〉

2．BOX部全景〈南から〉

3．CP部全景〈南から〉



西山田二本松遺跡A区

1.SB002竪穴住居出土銅釦

2.SB002竪穴住居
銅釦出土状況〈南から〉

3.SB002竪穴住居
銅釦出土状況〈南から〉

4.SB004竪穴住居〈北から〉

西山田二本松遺跡A区

1 .SB006・007・008
016・017竪穴住居〈東から〉

2 .SB011・012竪穴住居〈東から〉

3 .SB022竪穴住居〈東から〉

西山田二本松遺跡A区

1 .SB039竪穴住居〈西から〉

2 .SB080竪穴住居〈南東から〉

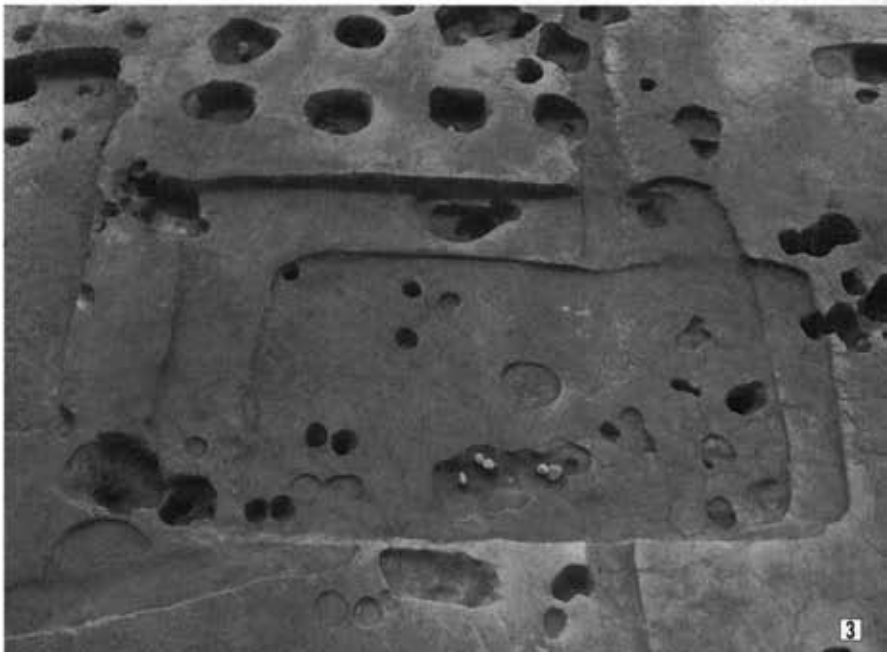
3 .SB088竪穴住居〈北から〉

西山田二本松遺跡A区

1.SB092竪穴住居〈南から〉

2.SB093・095竪穴住居〈東から〉

3.SB155竪穴住居〈東から〉

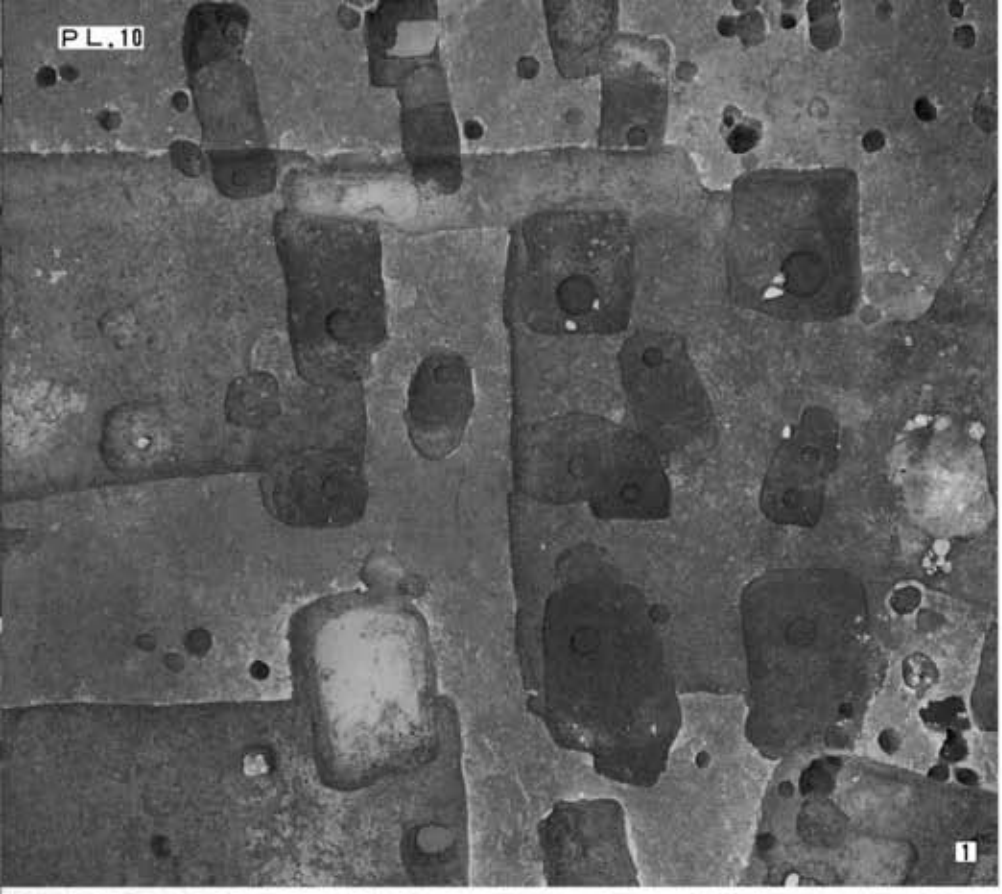


西山田二本松遺跡A区

1 .SB167・168竪穴住居〈東から〉

2 .SB204・205竪穴住居〈東から〉

3 .同上



西山田二本松遺跡A区
1.SB079掘立柱建物〈真上から〉
2.SB110・117掘立柱建物〈北から〉

西山田二本松遺跡A区

1 .SB018・019掘立柱建物
〈北から〉

2 .SX044周溝状遺構
〈北から〉

3 .SK131・132・133土壙
〈南から〉

SB004竪穴住居出土

SB006竪穴住居出土

SB008竪穴住居出土

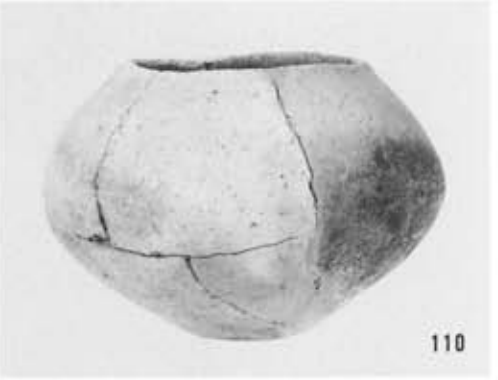
SB009竪穴住居出土

SB012竪穴住居出土

SB016竪穴住居出土

SB017竪穴住居出土

西山田二本松遺跡A区　SB004・006・008・009・012・016・017竪穴住居出土弥生土器



SB085竪穴住居出土

SB089竪穴住居出土

SB088竪穴住居出土

西山田二本松遺跡A区　　SB085・088・089竪穴住居出土弥生土器

西山田二本松遺跡A区　　SB095竪穴住居出土弥生土器

SB122竪穴住居出土

SB167竪穴住居出土

西山田二本松遺跡A区　　SB122・167竪穴住居出土弥生土器

西山田二本松遺跡A区　　SB168竪穴住居出土弥生土器

SB172掘立柱建物出土

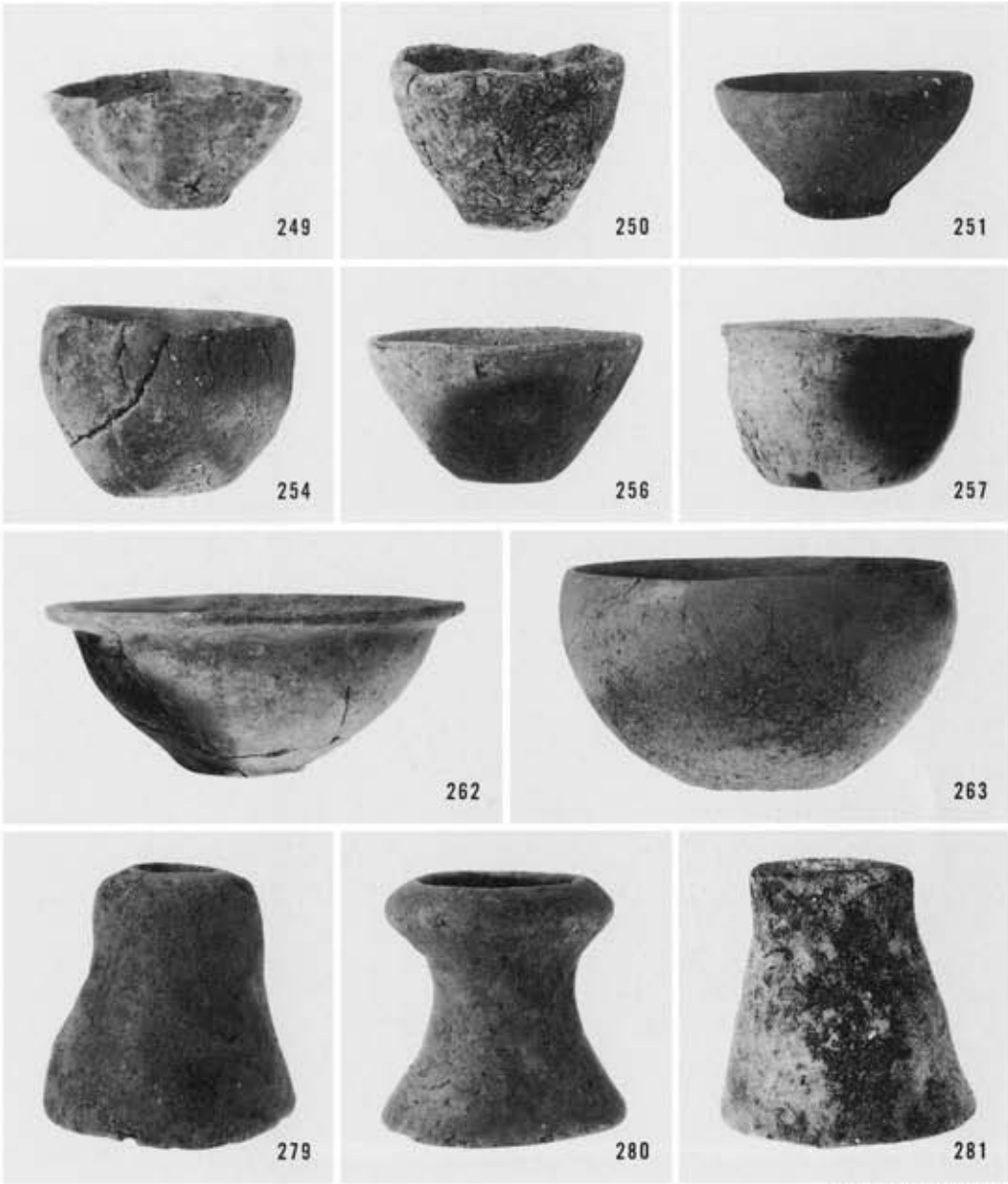
SB190竪穴住居出土

SB205竪穴住居出土

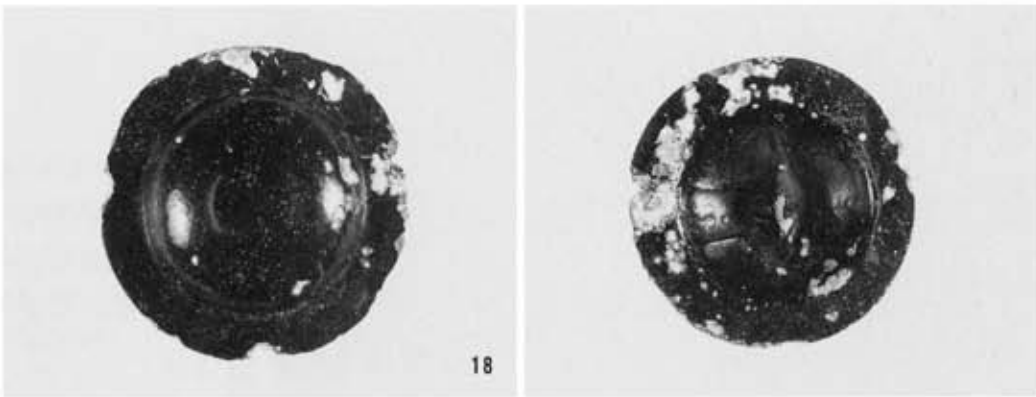
SB419竪穴住居出土

西山田二本松遺跡A区　　SB190・205・419竪穴住居
SB172掘立柱建物出土弥生土器

西山田二本松遺跡A区　　SD058河川跡出土弥生土器 1



SD058河川跡出土



SB002竪穴住居出土

西山田二本松遺跡A区　　SD058河川跡出土弥生土器 2
SB002竪穴住居出土銅釦

西山田二本松遺跡A区

1 .SB026竪穴住居〈南から〉

2 .SB035竪穴住居〈西から〉

3 .SB035竪穴住居
貼床除去後〈北から〉

西山田二本松遺跡A区

1 .SB056・057竪穴住居〈南西から〉

2 .SB087竪穴住居〈南から〉

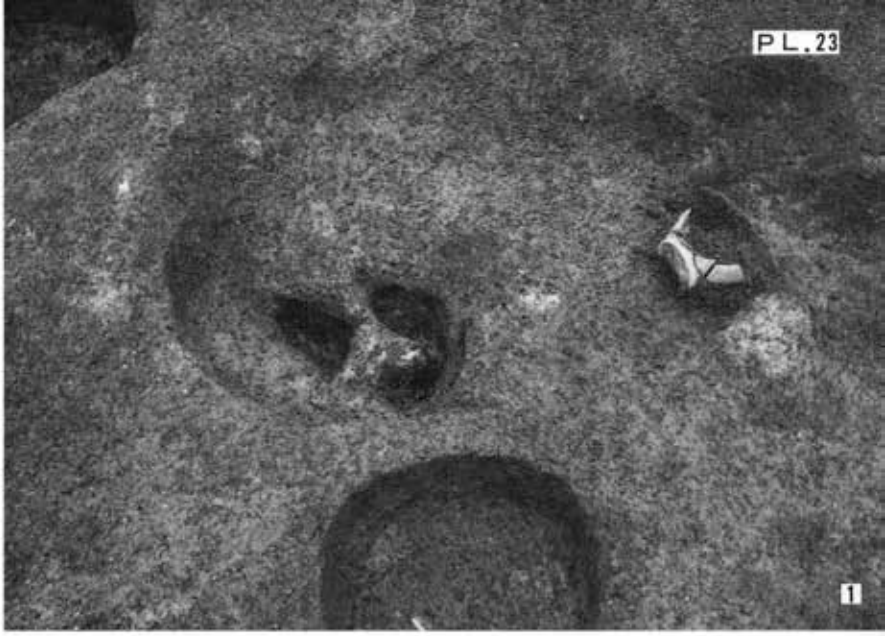
3 .SB094竪穴住居〈真上から〉

西山田二本松遺跡A区

1 .SB105竪穴住居〈南から〉

2 .SB105竪穴住居カマド〈南から〉

3 .SB150・183竪穴住居〈真上から〉



西山田二本松遺跡A区

1 .SB150竪穴住居カマド〈南東から〉

2 .SB183・185竪穴住居〈南東から〉

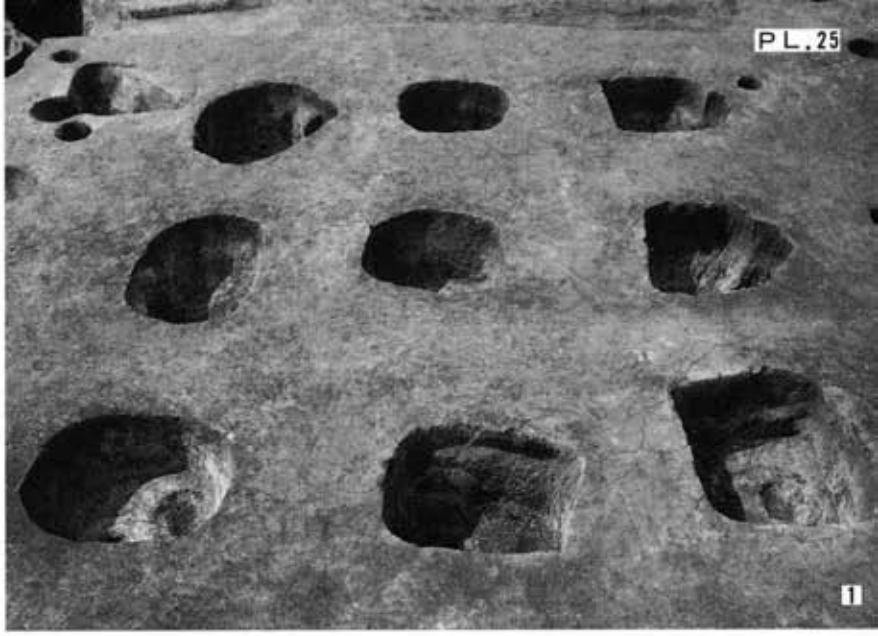
3 .SB183竪穴住居カマド〈南東から〉

西山田二本松遺跡A区

1.SB188竪穴住居〈南から〉

2.SB206・209・210竪穴住居〈南から〉

3.SB206竪穴住居カマド〈南から〉

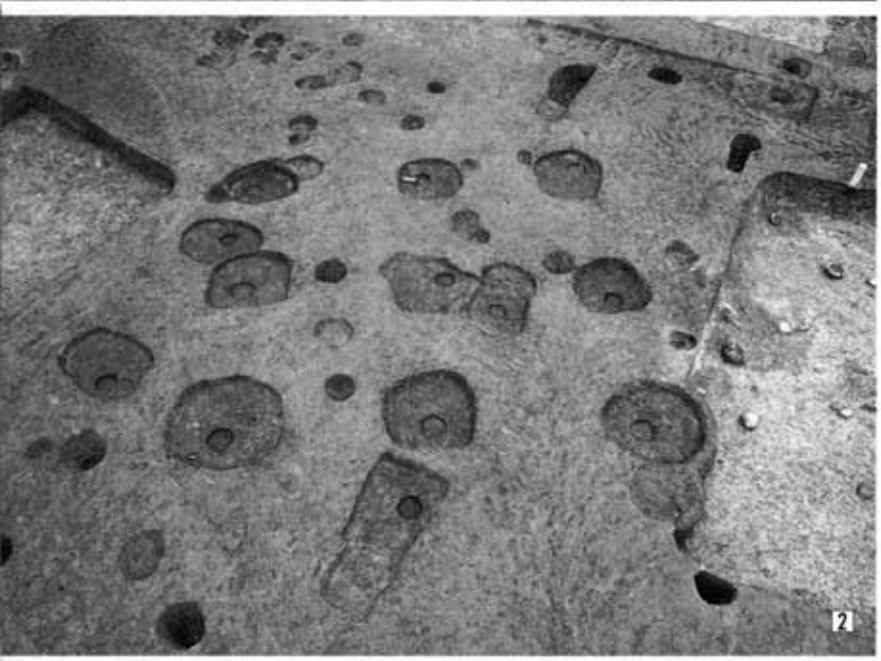


西山田二本松遺跡A区

1 .SB015掘立柱建物〈北から〉

2 .SB021掘立柱建物〈東から〉

3 .SB030掘立柱建物〈東から〉

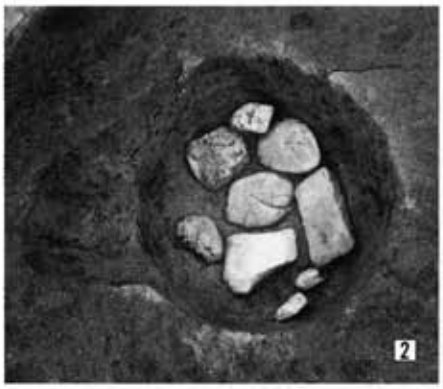


西山田二本松遺跡A区

1 .SB090掘立柱建物〈北から〉

2 .SB091掘立柱建物〈北東から〉

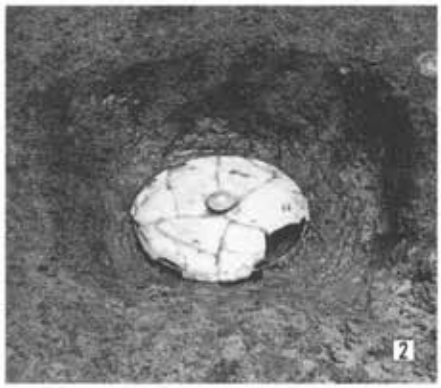
3 .SB103掘立柱建物〈南から〉

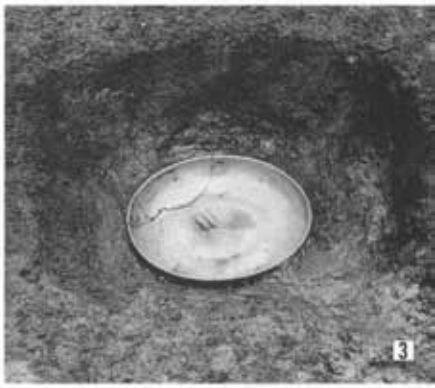


西山田二本松遺跡A区

1.SB113掘立柱建物〈南から〉
2.SB113掘立柱建物 P1〈東から〉
3.SB113掘立柱建物 P9〈東から〉
4.SB113掘立柱建物〈上空から〉

西山田二本松遺跡A区　　1.SB127・128掘立柱建物〈真上から〉
2.SB200・218掘立柱建物〈真上から〉





西山田二本松遺跡A区

1.SB015・030・138掘立柱建物〈北から〉
2.SX181埋納遺構〈西から〉
3.　　同　　〈南から〉
4.SE142井戸〈南西から〉

西山田二本松遺跡A区　　SB035竪穴住居出土土師器・須恵器

SB077竪穴住居出土土師器

SB150竪穴住居出土

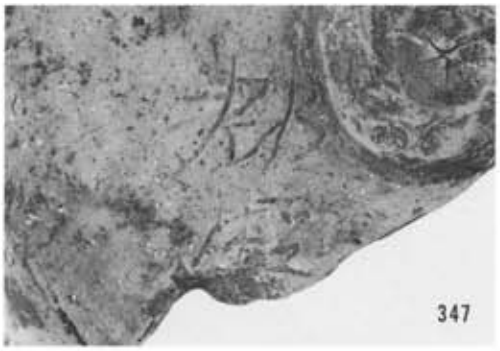
SB183竪穴住居出土

SB186竪穴住居出土

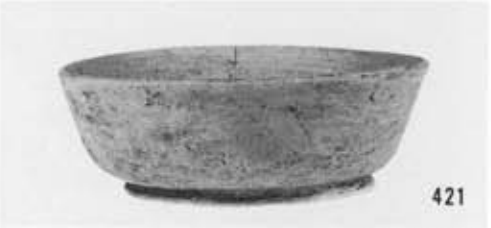
SB030掘立柱建物出土

SB045掘立柱建物出土

西山田二本松遺跡A区　SB077・150・183・186竪穴住居，
SB030・045掘立柱建物出土土師器，須恵器，土製品



ヘラ書き土器



SX181埋納遺構出土　　SX216埋納遺構出土

SE142井戸出土

SE191井戸出土　　SB005竪穴住居内小穴出土

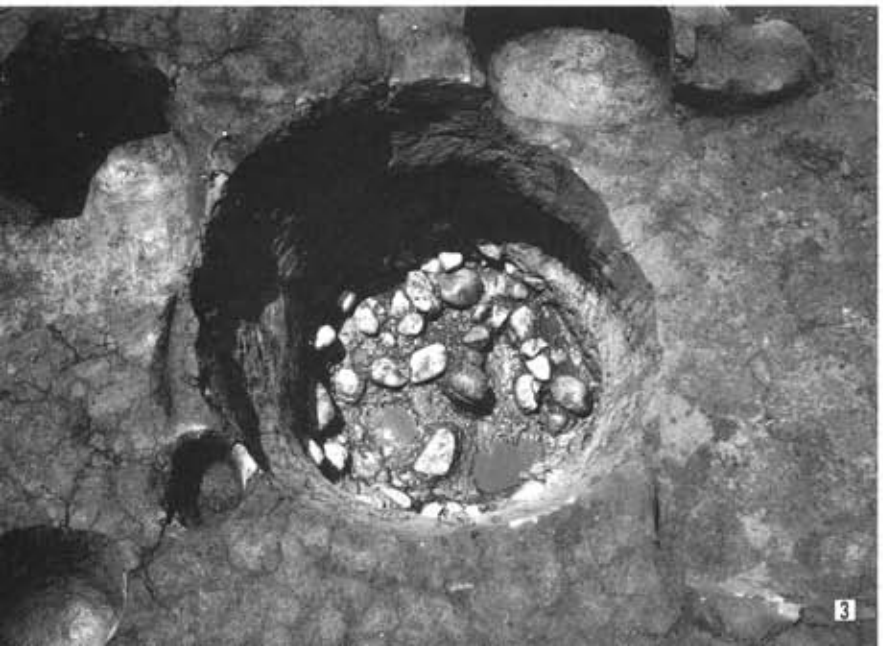
西山田二本松遺跡A区　　ヘラ書き土器、埋納遺構、SE142・191、小穴出土土師器・須恵器

西山田二本松遺跡A区

1.SB055掘立柱建物〈真上から〉

2.SX072集石遺構〈南から〉

3.　　同
　　半截状況〈南から〉

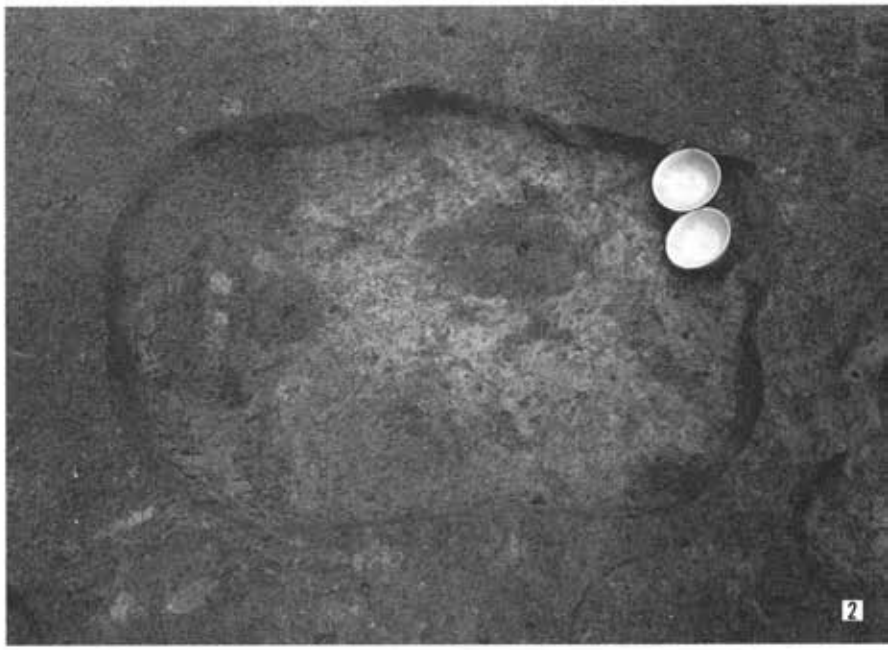


西山田二本松遺跡A区

1.SX073集石遺構〈東から〉

2.SE034井戸〈南から〉

3.SE106井戸〈北から〉

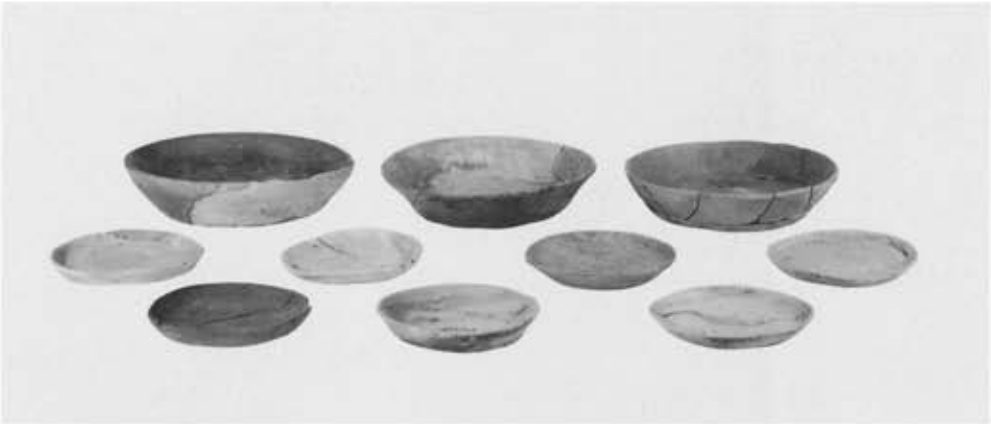


西山田二本松遺跡A区

1.SE134井戸〈南から〉

2.SP046土壙墓〈北から〉

3.SP202土壙墓〈南から〉



SD101溝出土

SK014土壙出土

SE134井戸出土

SE034井戸出戸

SK067土壙出土

西山田二本松遺跡A区　　出土土師器・黒色土器・瓦器

SK114・115土壙出土

検出面出土

SP046土壙墓出土

SP202土壙墓出土

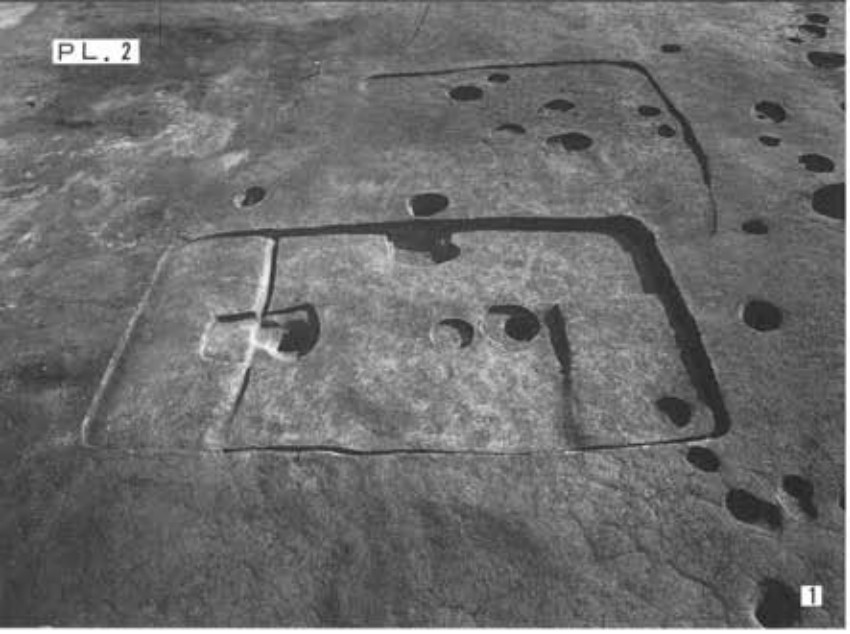
SE115井戸出土

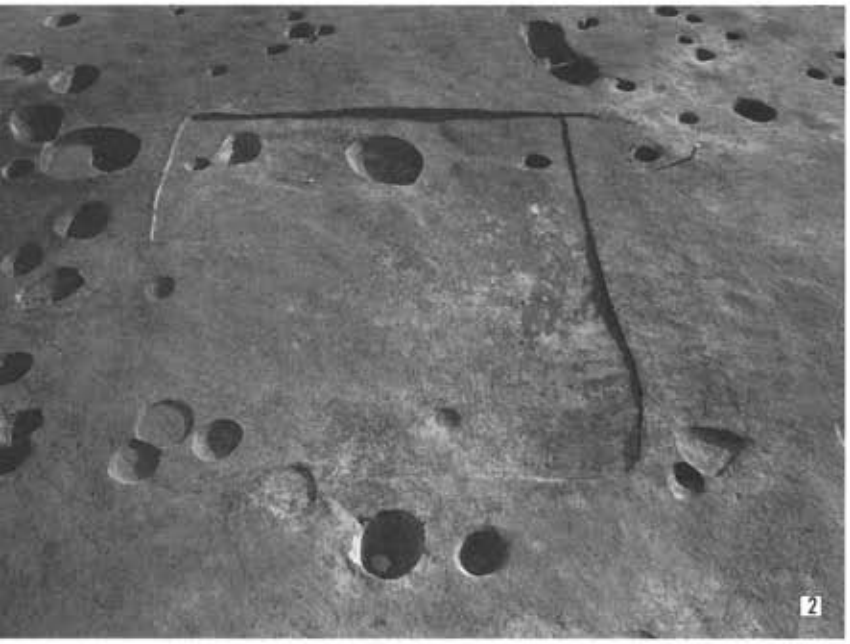
SK120土壙出土

西山田二本松遺跡A区　　出土陶磁器

西山田三本松A遺跡

1．西山田三本松A遺跡調査区全景〈西から〉、2．同〈南から〉



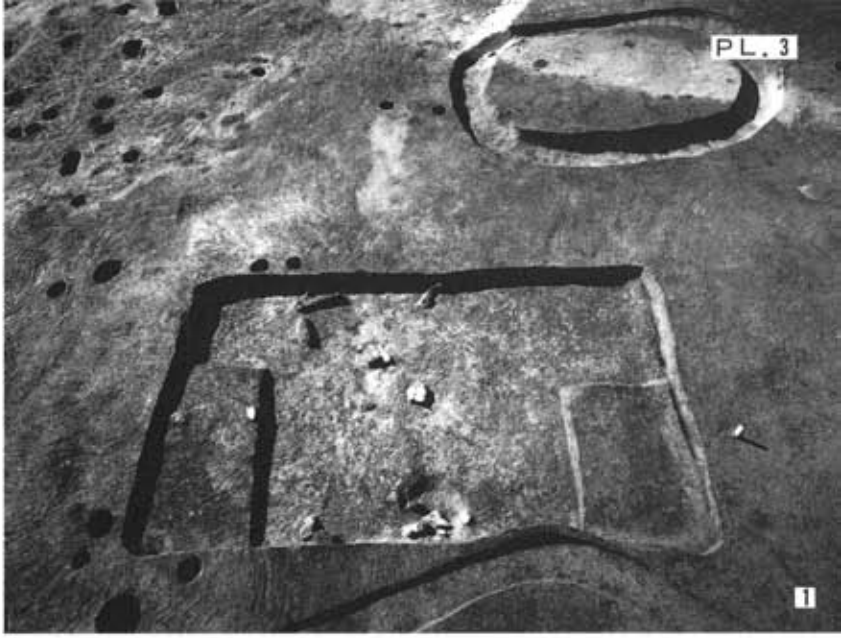


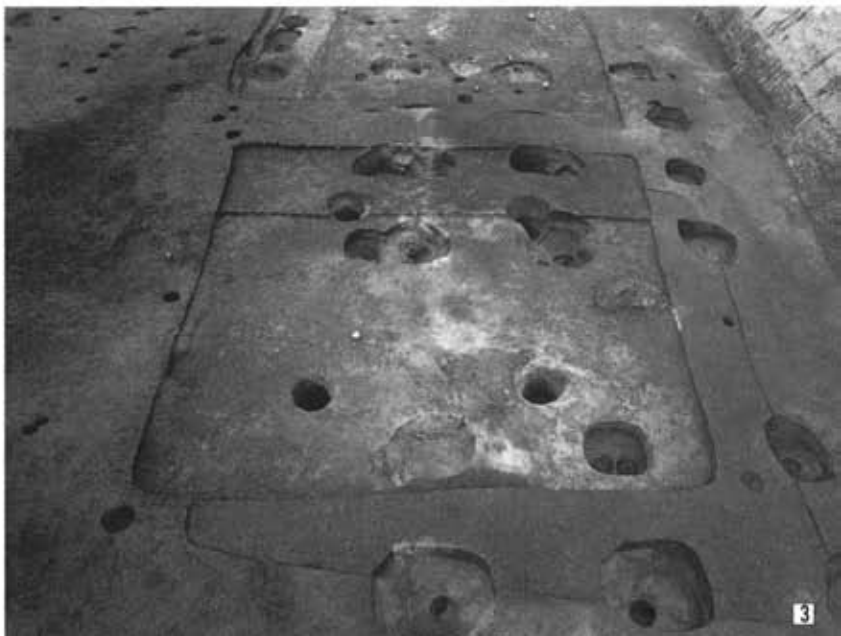
西山田三本松A遺跡

1 .SB013・SB014竪穴住居〈北から〉

2 .SB012竪穴住居〈北から〉

3 .SB041・SB043竪穴住居、SX034
円形周溝状遺構〈東から〉



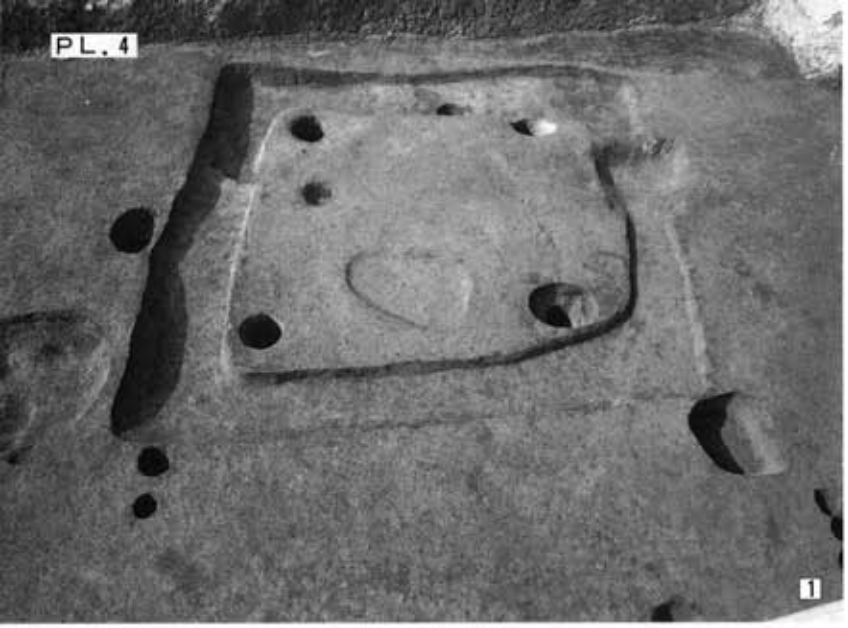


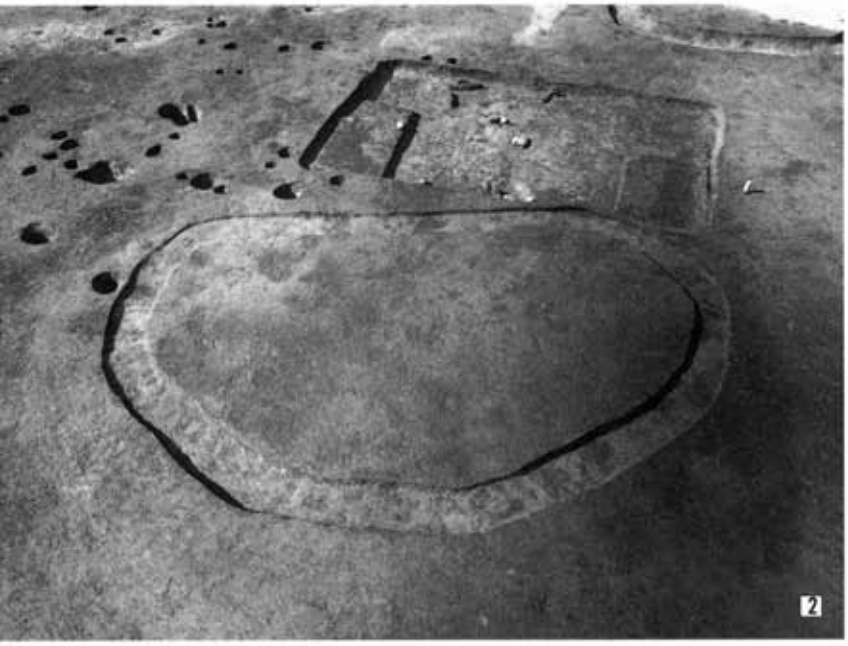
西山田三本松A遺跡

1.SB015竪穴住居、SX005
円形周溝状遺構〈東から〉

2.SB020竪穴住居〈北から〉

3.SB021・SB029竪穴住居〈南から〉





西山田三本松A遺跡

1 .SX004方形周溝状遺構
〈東から〉

2 .SX006円形周溝状遺構
〈東から〉

3 .SX034円形周溝状遺構
〈西から〉

西山田三本松A遺跡

1.北西隅掘立柱建物群〈南から〉

2.SB007掘立柱建物〈東から〉

3.SB009・SB010掘立柱建物〈西から〉

西山田三本松A遺跡

1.SB045掘立柱建物〈北から〉

2.SB036・SB037掘立柱建物〈南から〉

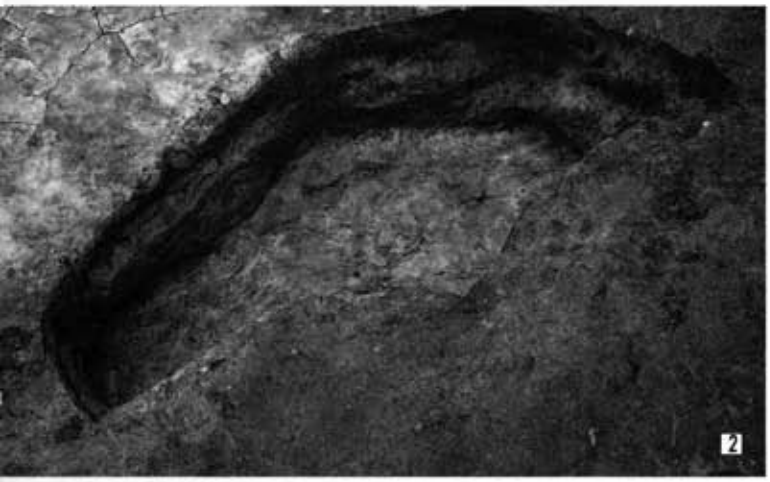
3.SB011掘立柱建物〈西から〉

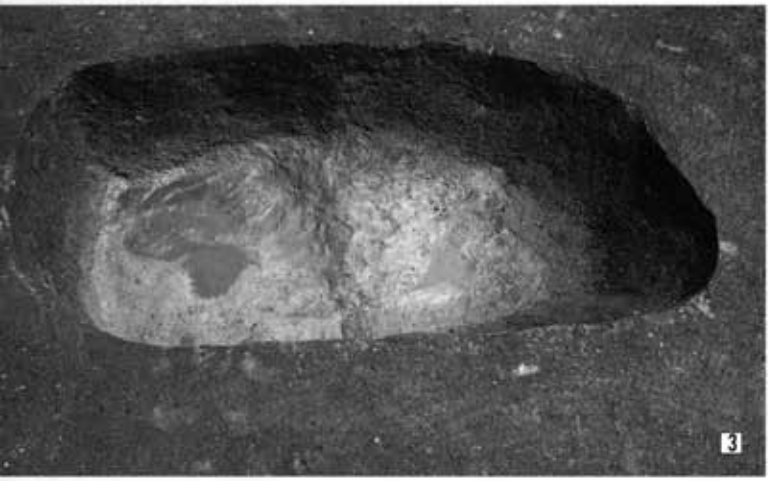
西山田三本松A遺跡

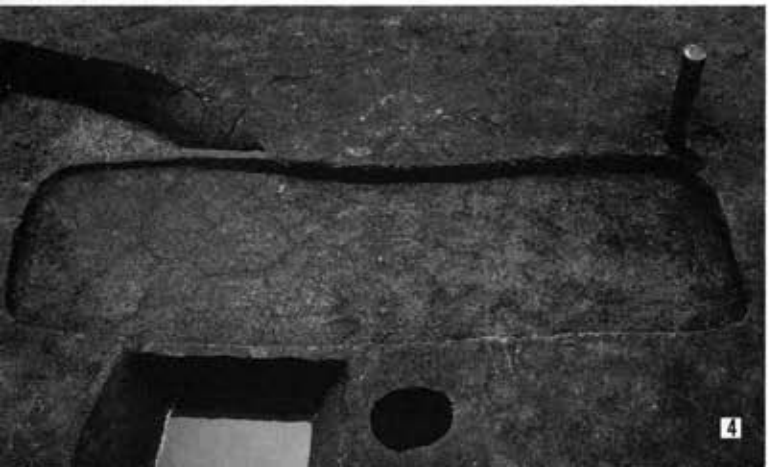
1.SB039掘立柱建物〈西から〉

2.SB024掘立柱建物〈東から〉

3.SB028掘立柱建物〈東から〉







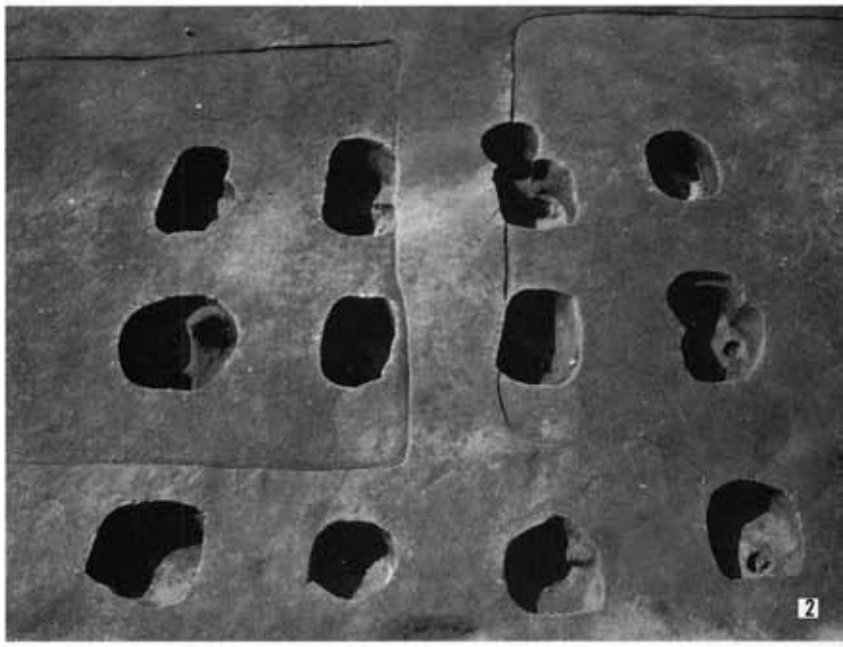
西山田三本松A遺跡

1 .SK025土壙〈東から〉

2 .SK046土壙〈南から〉

3 .SK032土壙〈北から〉

4 .SK033土壙〈東から〉



西山田三本松A遺跡

1 .SB017・SB018・SB019掘立柱建物〈北から〉

2 .SB017掘立柱建物〈東から〉

3 .SB018掘立柱建物〈東から〉

西山田三本松A遺跡

1.SB001掘立柱建物〈南から〉

2.SB038掘立柱建物〈東から〉

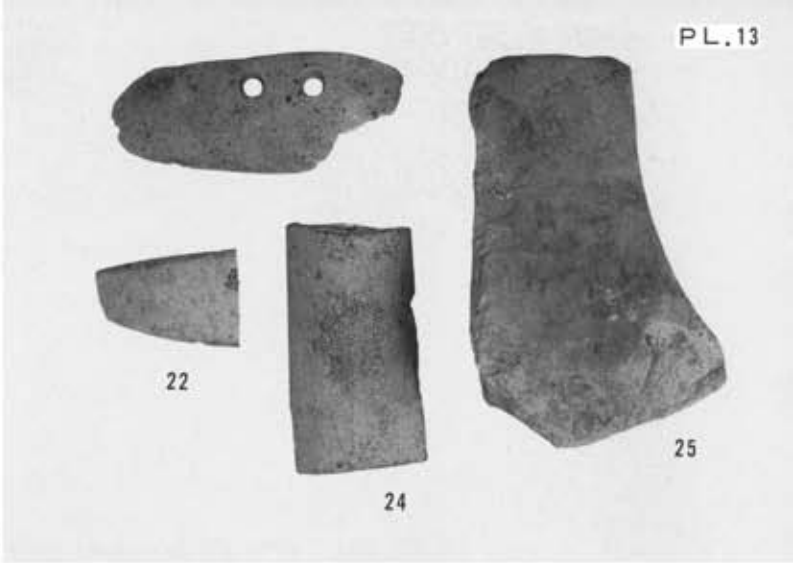
3.SB019掘立柱建物〈東から〉

西山田三本松A遺跡

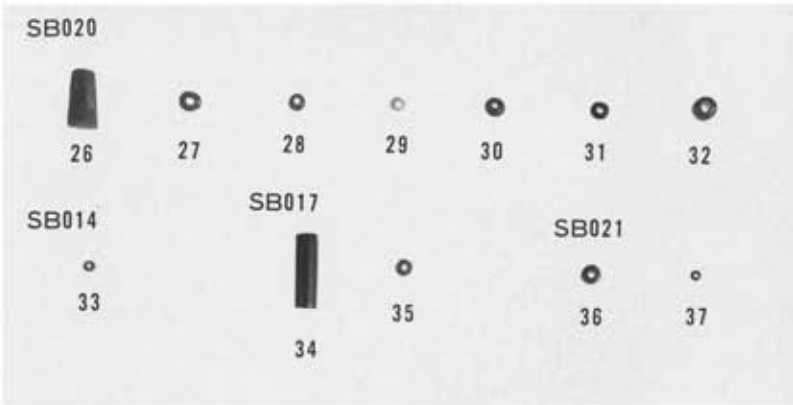
1.SB002掘立柱建物〈東から〉

2.SB010掘立柱建物〈南から〉

西山田三本松A遺跡　弥生土器　7・8・15…1/3、19…1/2　5・10・20・21…1/4



石器



玉類

西山田三本松A遺跡　弥生時代石器・玉類

西山田三本松A遺跡

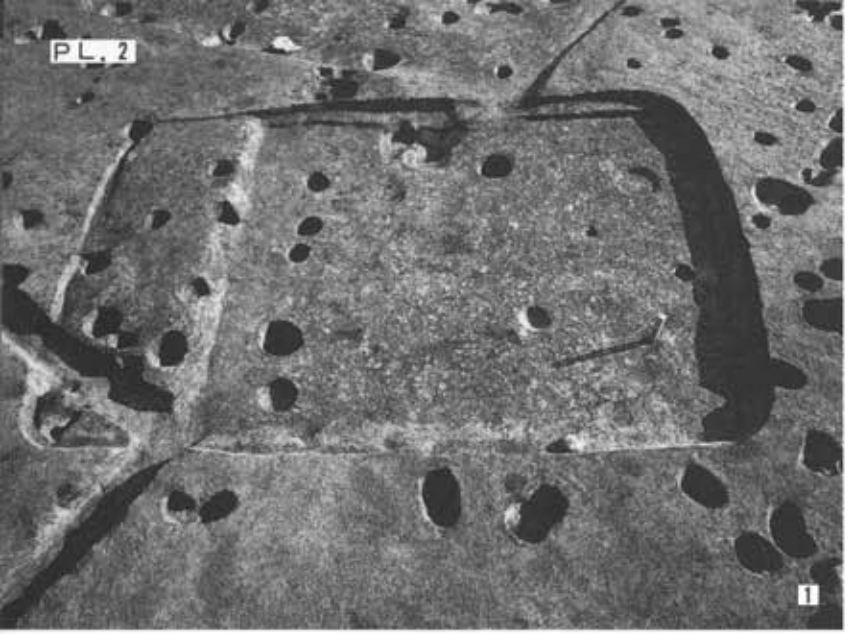
土師器・須恵器　38…1/3、41・44…1/2、42…1/2

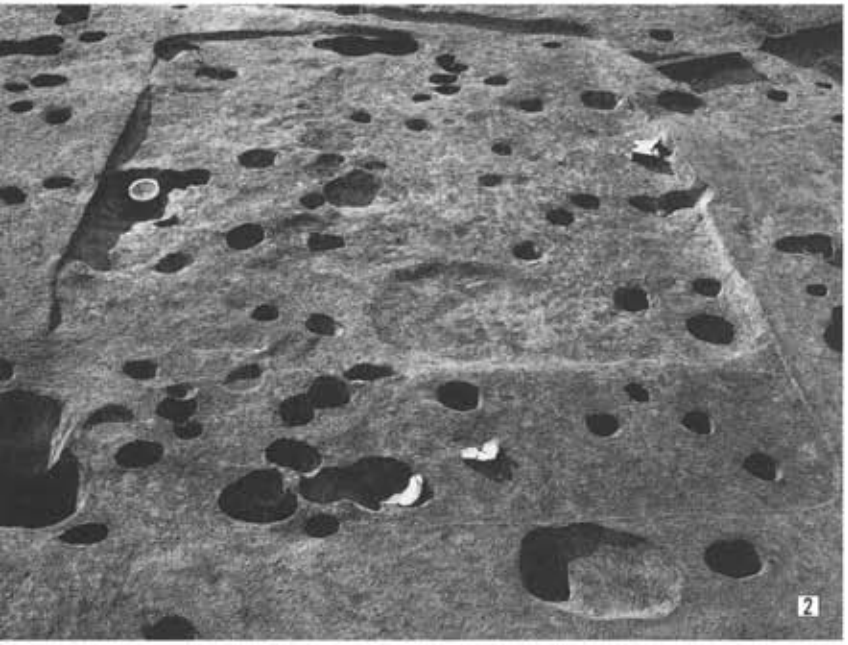
西山田三本松B遺跡

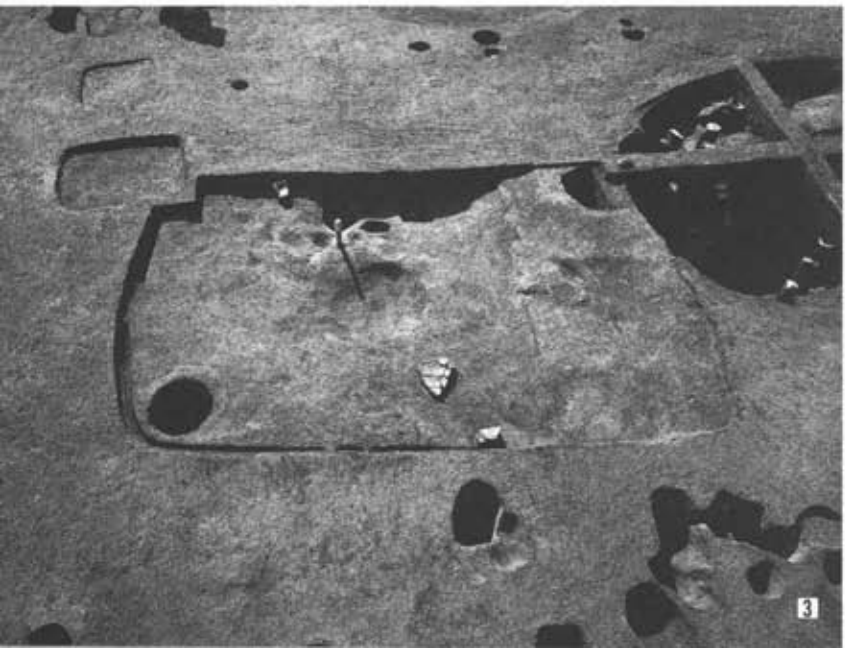
西山田三本松B遺跡

1．I区全景〈南から〉

2．　同　〈南から〉





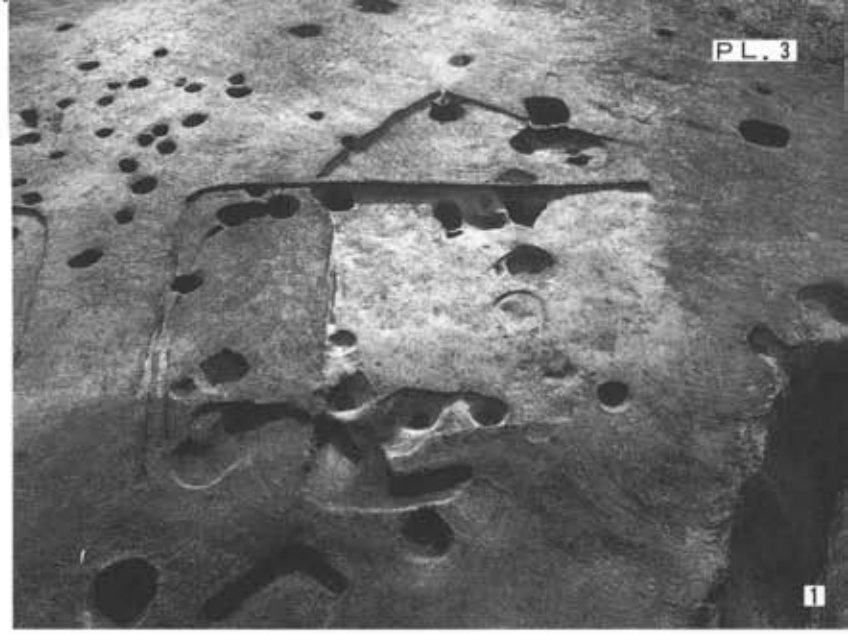


西山田三本松B遺跡

1 .SB104竪穴住居〈北から〉

2 .SB111竪穴住居〈東から〉

3 .SB1'2竪穴住居〈北から〉

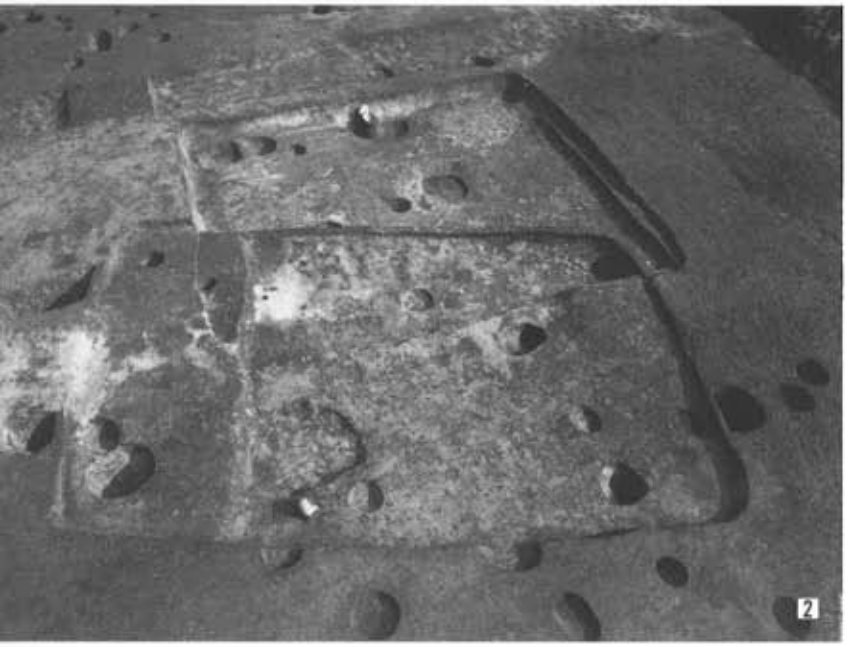


西山田三本松B遺跡

1 .SB107・108竪穴住居〈北から〉

2 .SB116竪穴住居〈北から〉

3 .SB117竪穴住居、
SB119掘立柱建物〈南から〉



西山田三本松B遺跡

1 .SB121・122竪穴住居〈南から〉

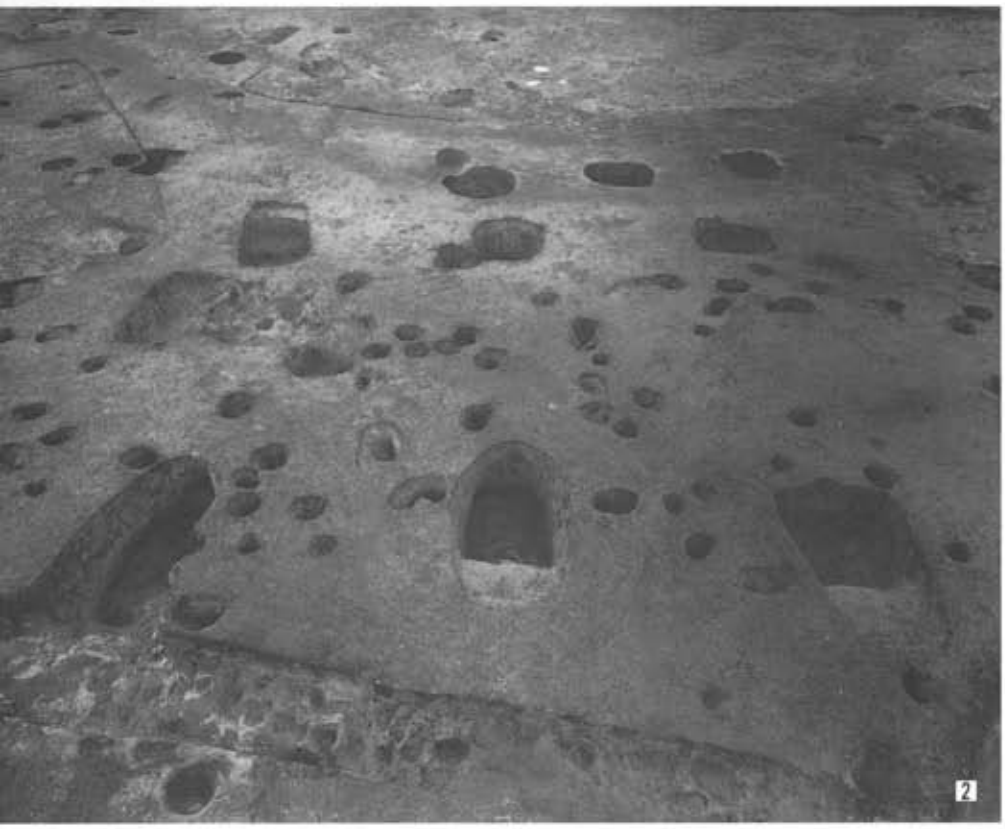
2 .SB114・115竪穴住居〈西から〉

3 .SB105竪穴住居〈北から〉

西山田三本松B遺跡

1．I区東南部〈南から〉

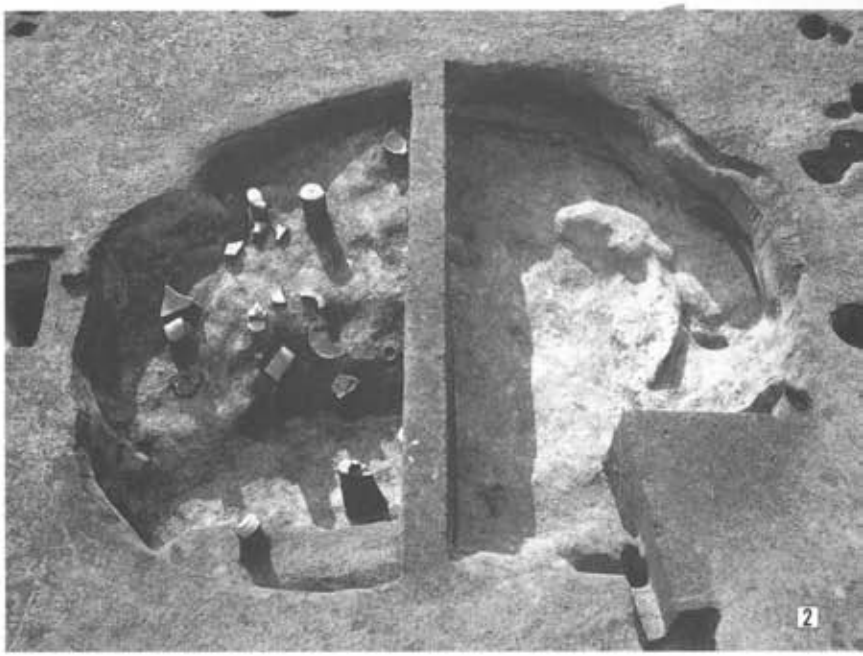
2．I区東南部SB117
竪穴住居付近〈南から〉



西山田三本松B遺跡

1．I区北部掘立柱建物
〈西南から〉

2．SB002掘立柱建物
〈西から〉



西山田三本松B遺跡

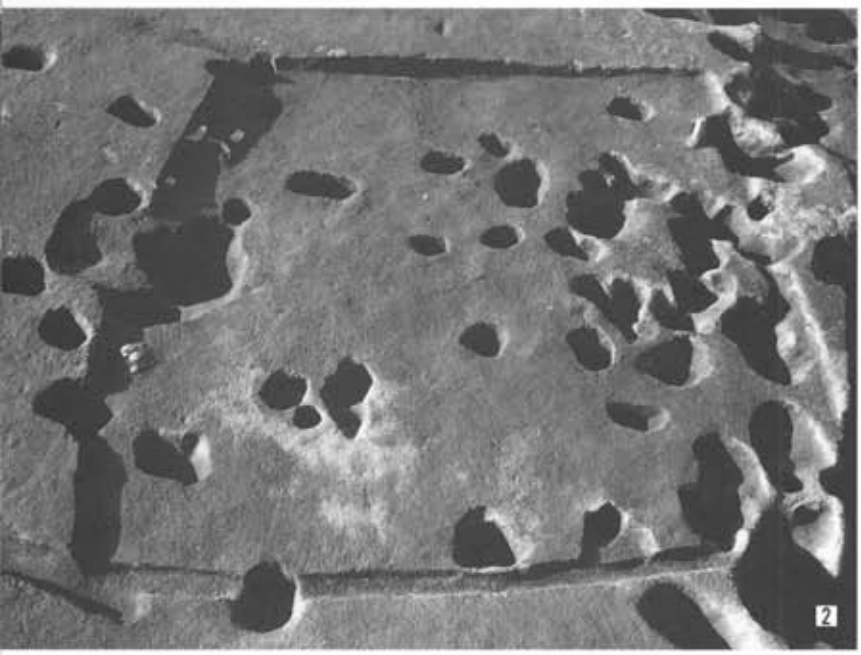
1 .SD101溝〈西から〉

2 .SK113土壙
土器出土状況〈北から〉

3 .SK123土壙
土器出土状況〈南西から〉

西山田三本松B遺跡　1．II区全景〈北から〉　2．同〈南から〉

西山田三本松B遺跡　　1．II区全景〈北から〉　2．同中央部〈南から〉



西山田三本松B遺跡

1.SB203竪穴住居〈南から〉

2.SB217竪穴住居〈南から〉

3.SB229竪穴住居〈北から〉

西山田三本松B遺跡

1 .SB118・125掘立柱建物〈南から〉

2 .SB125掘立柱建物〈南から〉

3 .SB265掘立柱建物〈北から〉

西山田三本松B遺跡

1.SB266掘立柱建物〈東から〉

2.SB277掘立柱建物〈北から〉

3.SB295掘立柱建物〈東から〉

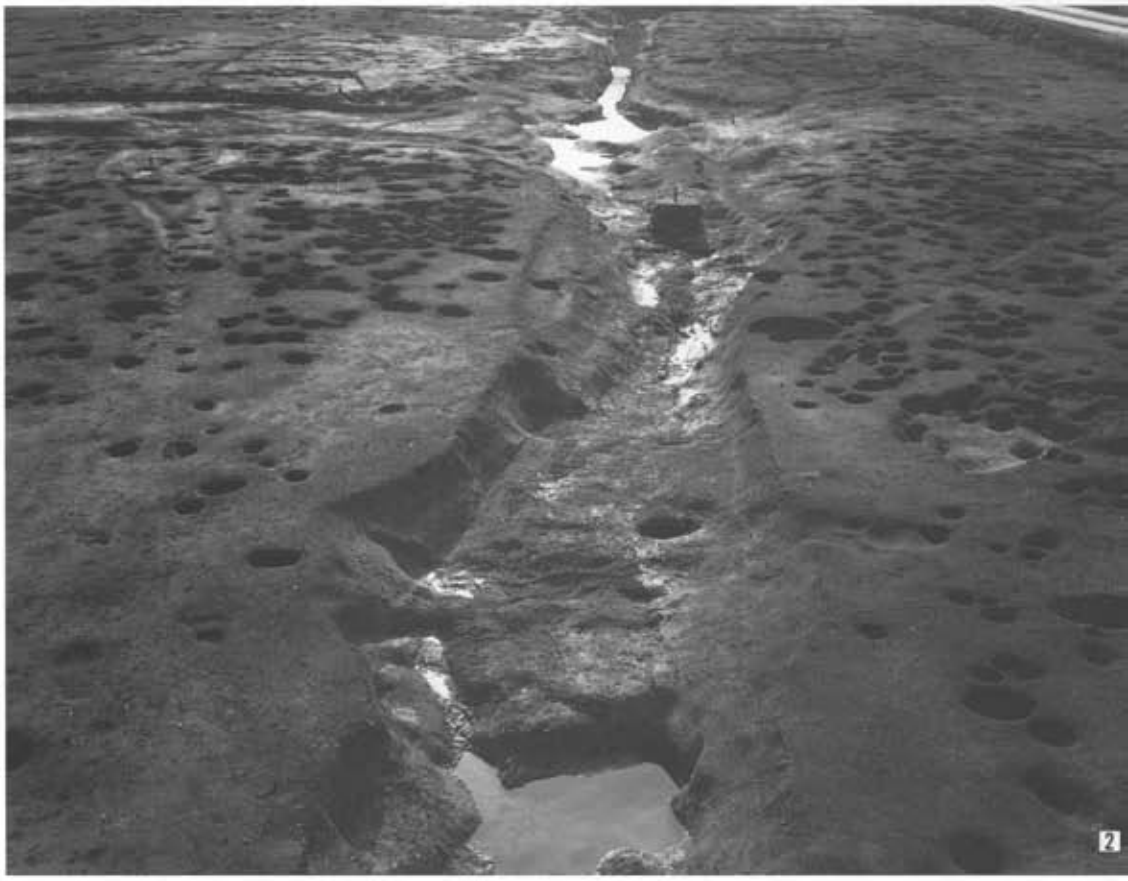
西山田三本松B遺跡　　1.SB266掘立柱建物柱穴内土器出土状況〈西から〉
2.SB128掘立柱建物付近土器出土状況〈北西から〉

西山田三本松B遺跡

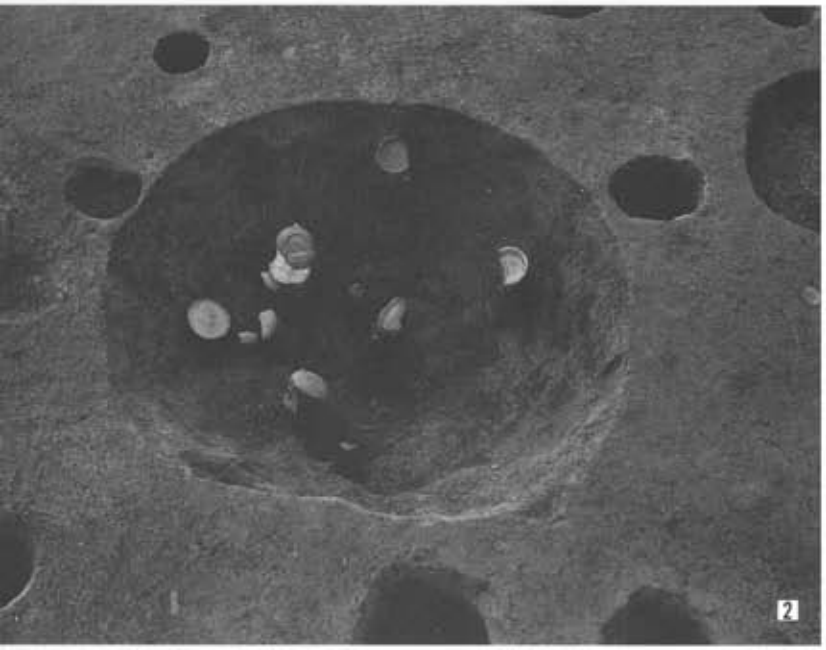
1.SB310掘立柱建物、SB311柱列〈北から〉

2.SB267掘立柱建物〈東から〉

3.SB305掘立柱建物〈北西から〉



西山田三本松B遺跡　　1.SD206・207溝〈北から〉
2.SD101溝〈東から〉

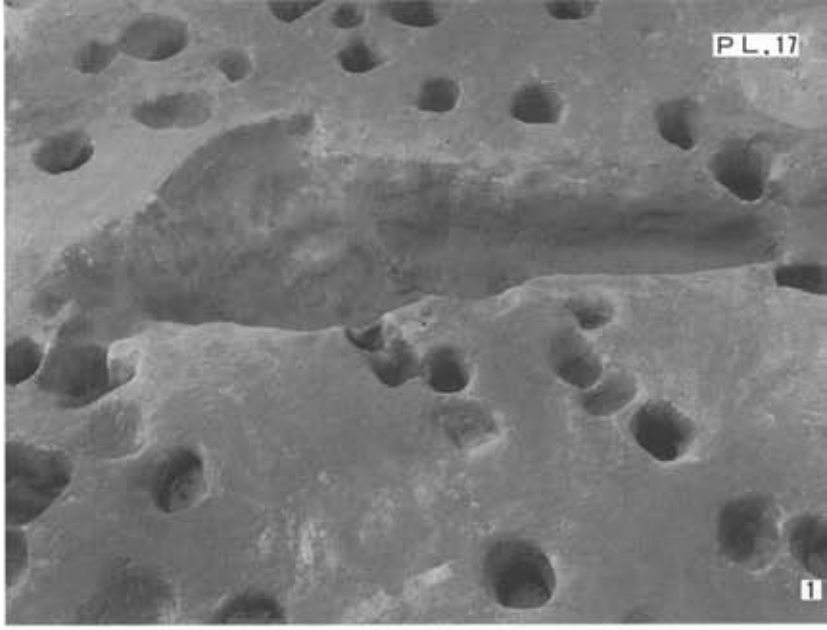


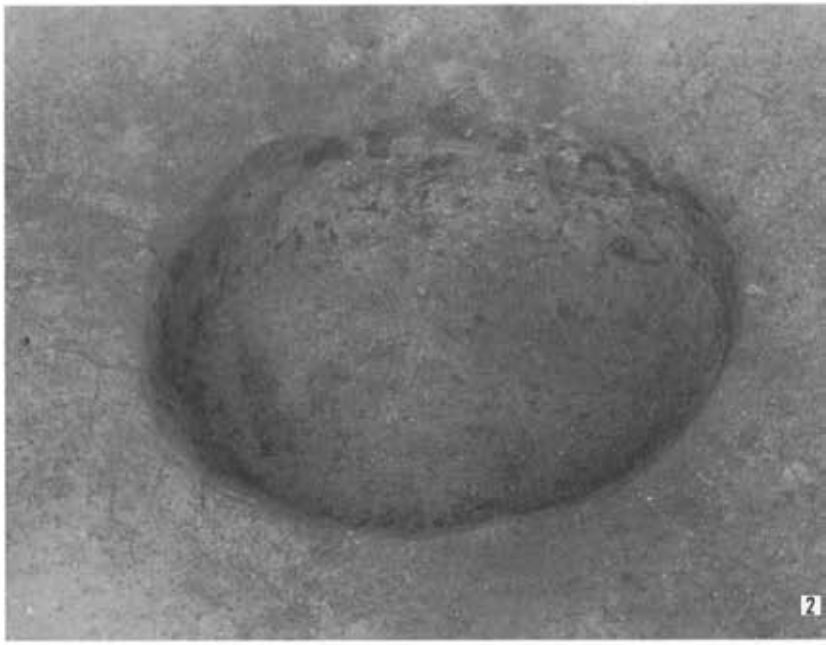
西山田三本松B遺跡

1 .SK211土壙〈西から〉

2 .SK212土壙〈東から〉

3 .SK215土壙〈南東から〉



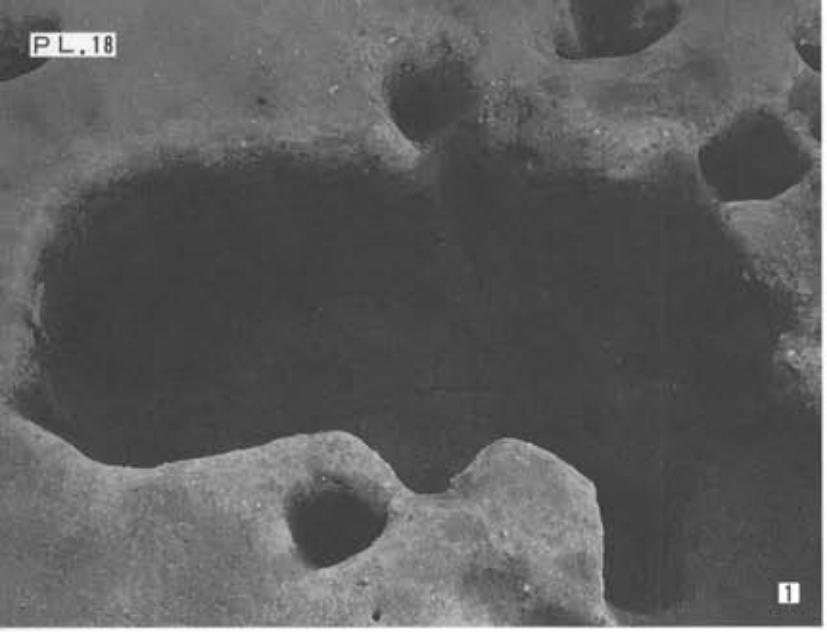


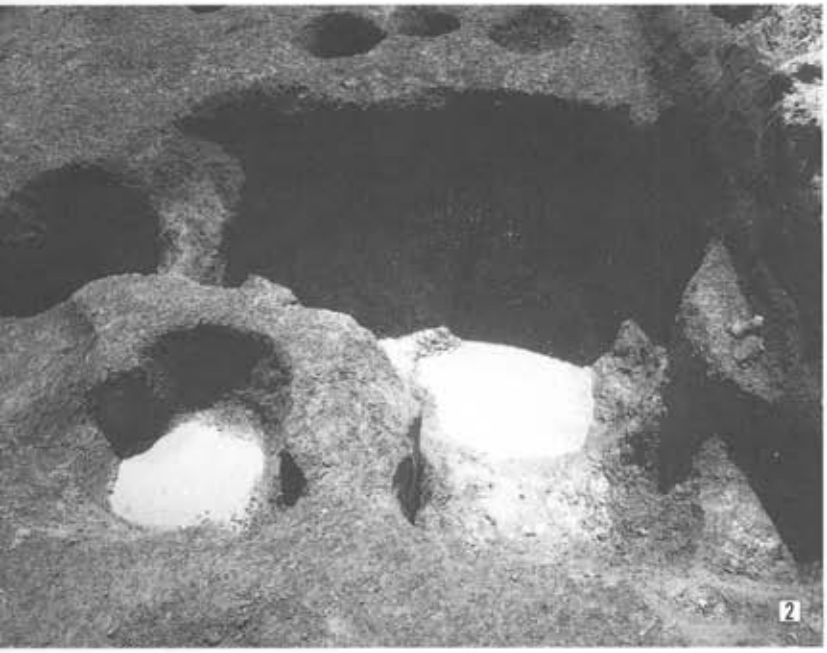
西山田三本松B遺跡

1 .SK202土壙〈東から〉

2 .SK210土壙〈南東から〉

3 .SK215土壙〈東から〉





西山田三本松B遺跡

1.SK250土壙〈東から〉

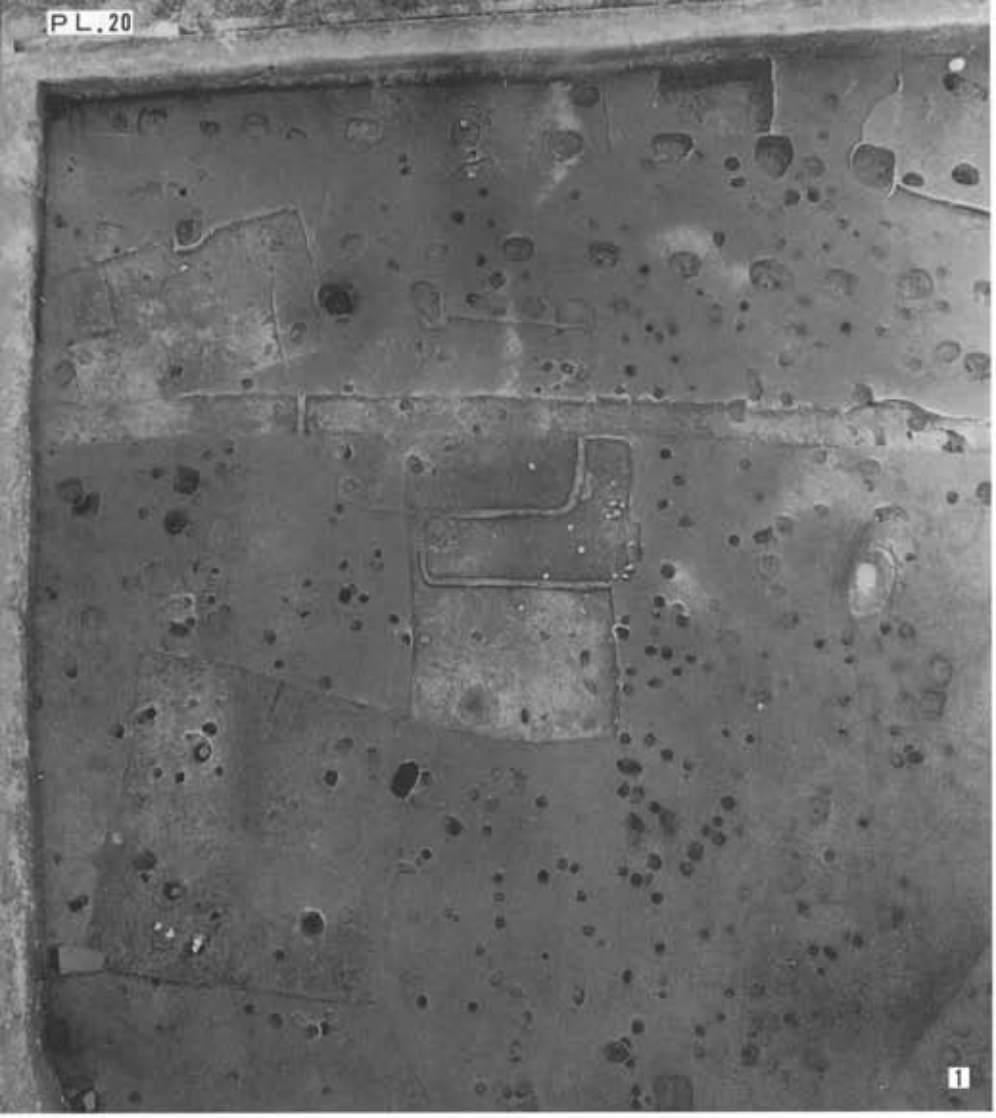
2.SE308井戸〈東から〉

3.SE309井戸〈北から〉

西山田三本松B遺跡

1.III区全景〈西から〉

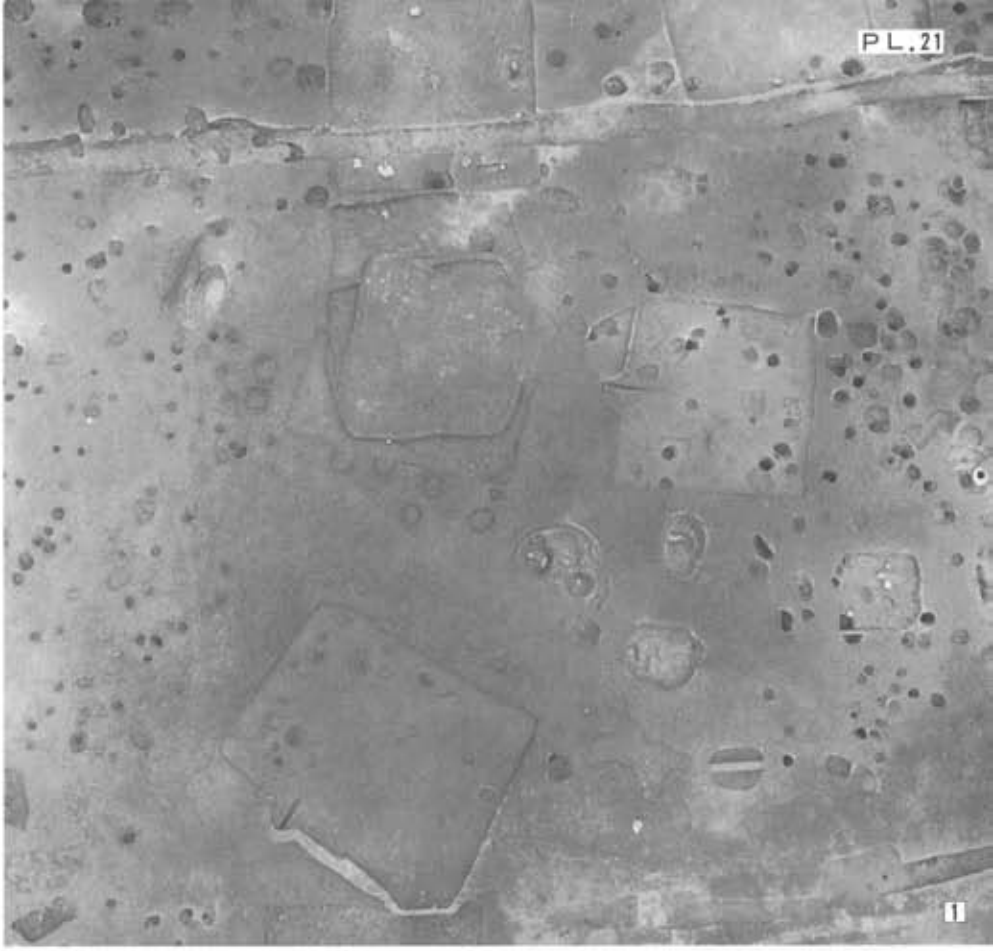
2.同〈南から〉

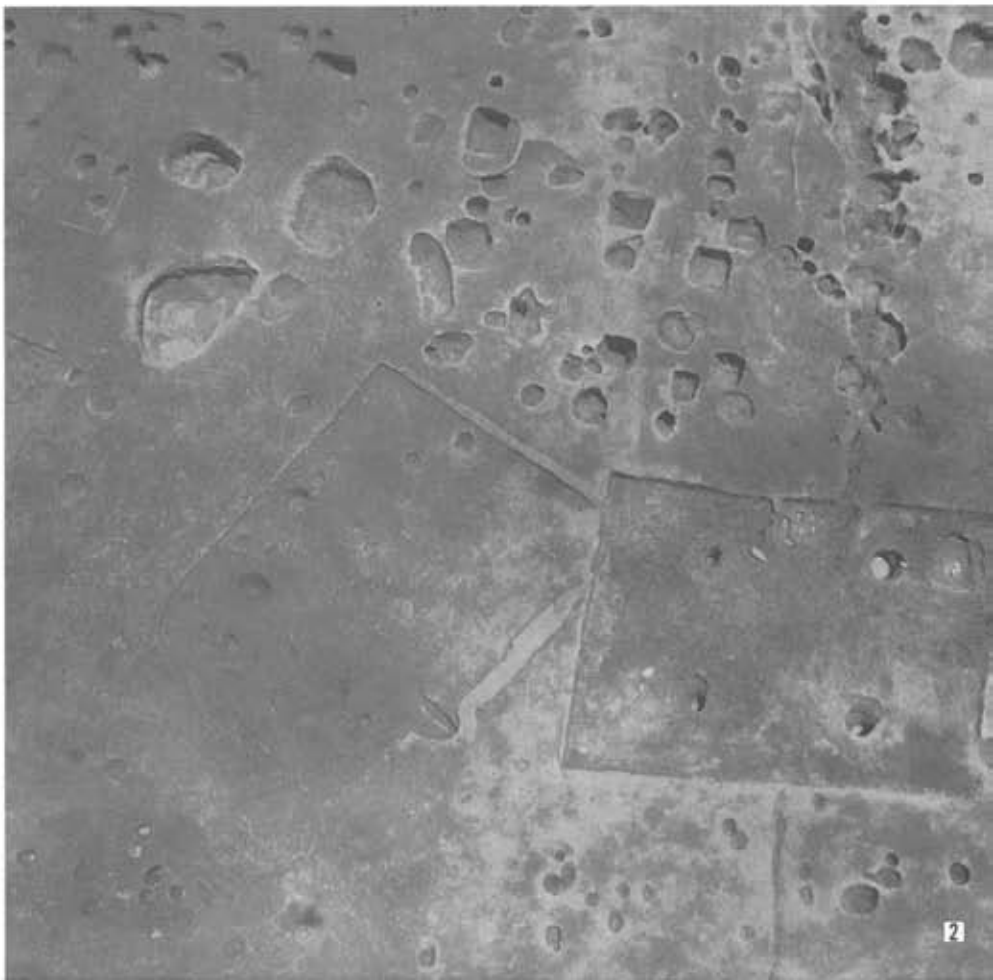


西山田三本松B遺跡

1.Ⅲ区北西部〈南から〉

2.同北辺〈南から〉





西山田三本松B遺跡

1.Ⅲ区中央部〈南から〉

2.同〈西から〉

西山田三本松B遺跡

1.Ⅲ区東北部〈南から〉

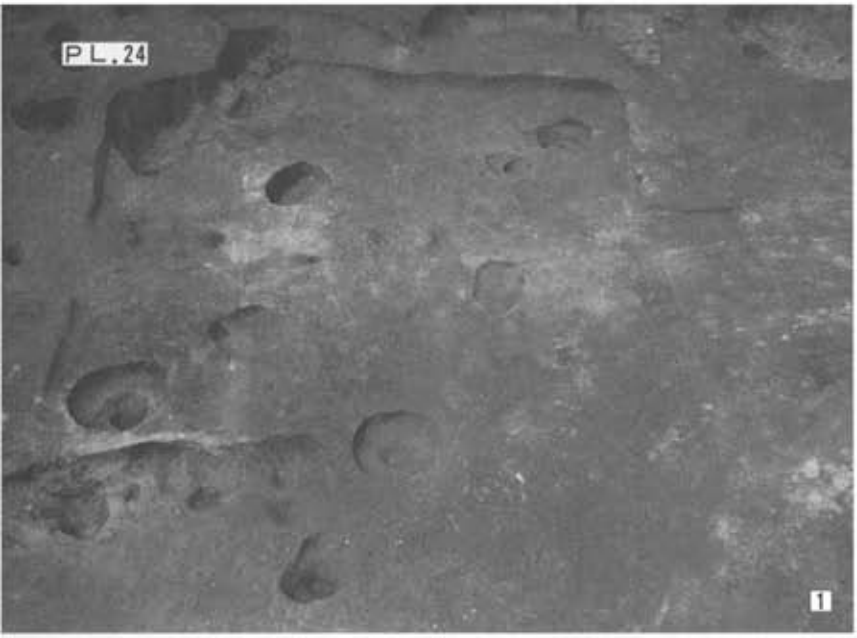
2.同東辺部〈南から〉

西山田三本松B遺跡

1 .SB402竪穴住居〈南から〉

2 .SB406竪穴住居〈東から〉

3 .SB419竪穴住居〈南から〉

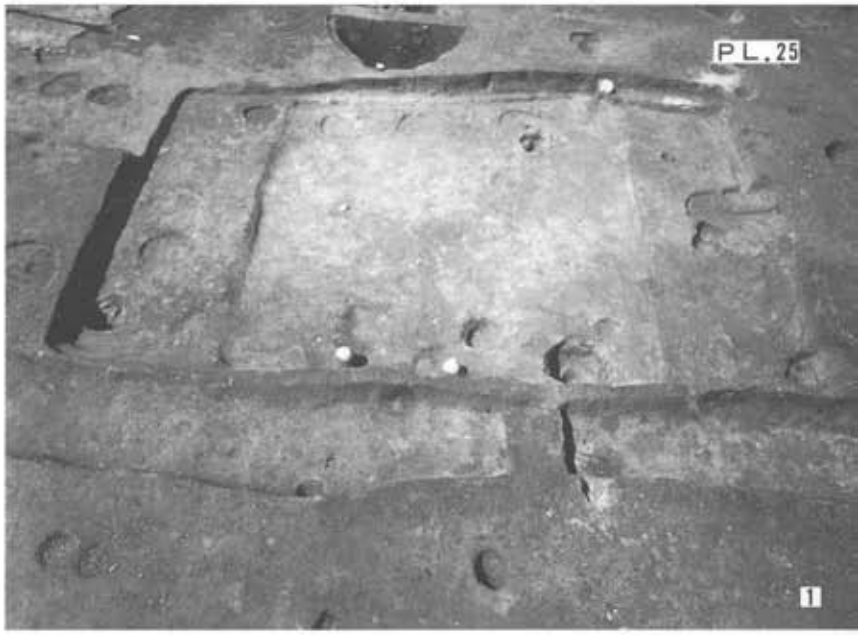


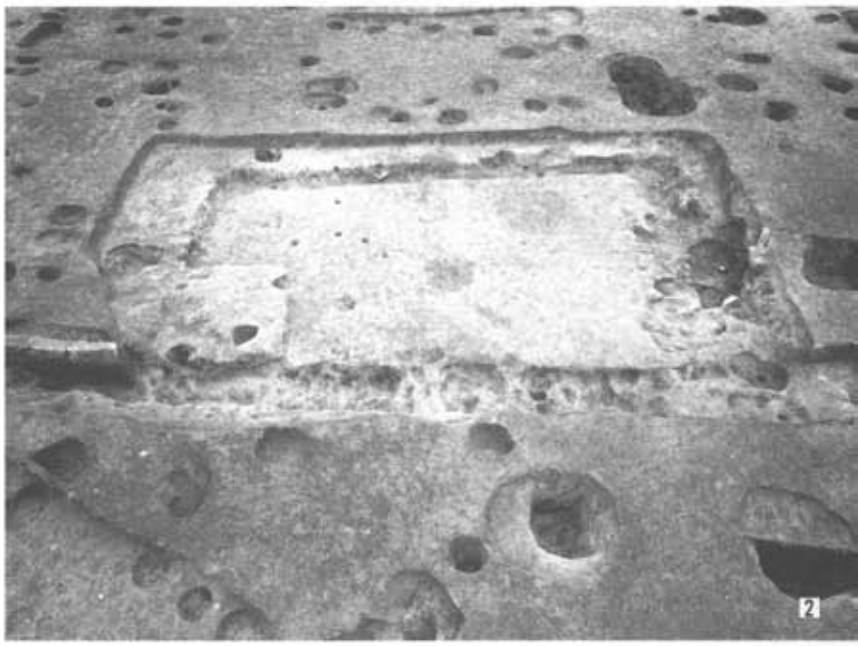
西山田三本松B遺跡

1.SB417竪穴住居〈南から〉

2.SB419竪穴住居〈西から〉

3.SB421竪穴住居〈南から〉



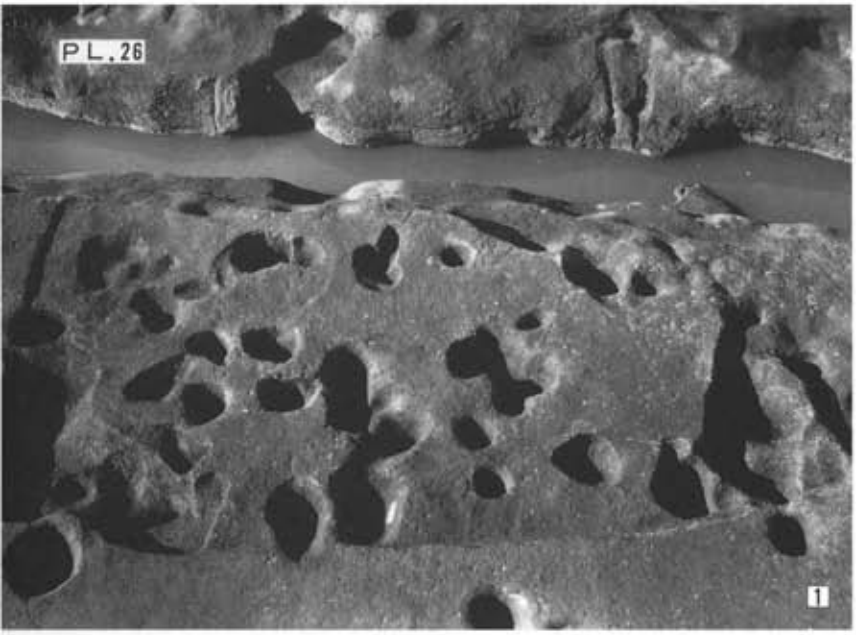


西山田三本松B遺跡

1.SB425竪穴住居〈南から〉

2.SB433竪穴住居〈南から〉

3.SB442竪穴住居〈南から〉

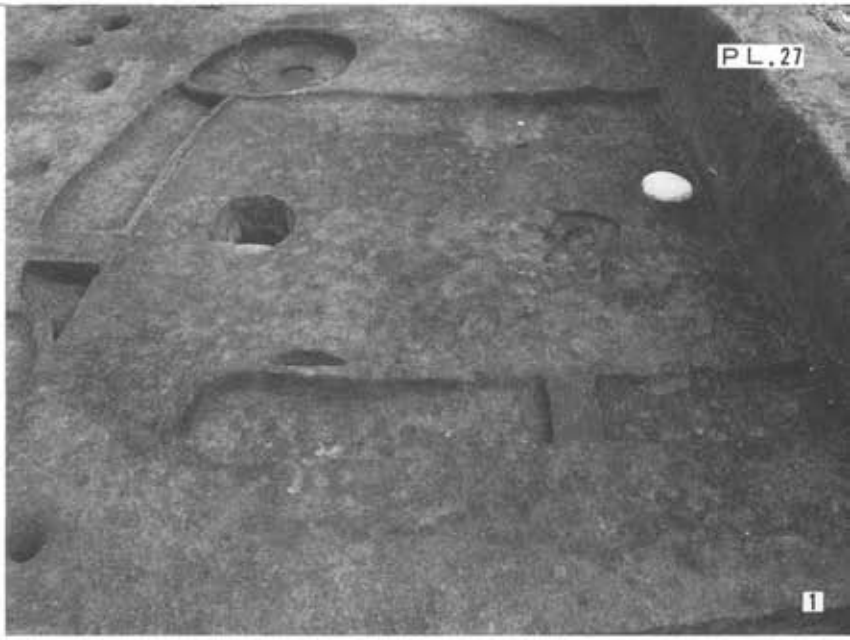


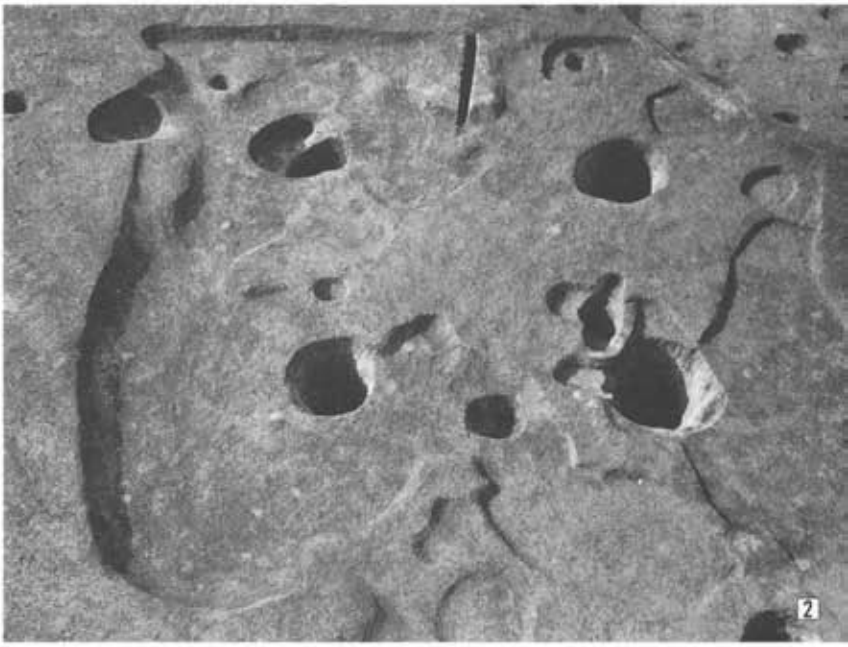
西山田三本松B遺跡

1.SB433竪穴住居〈北から〉

2.SB426竪穴住居〈北東から〉

3.SB429竪穴住居〈東から〉





西山田三本松B遺跡

1 .SB431竪穴住居〈東から〉

2 .SB437竪穴住居〈南から〉

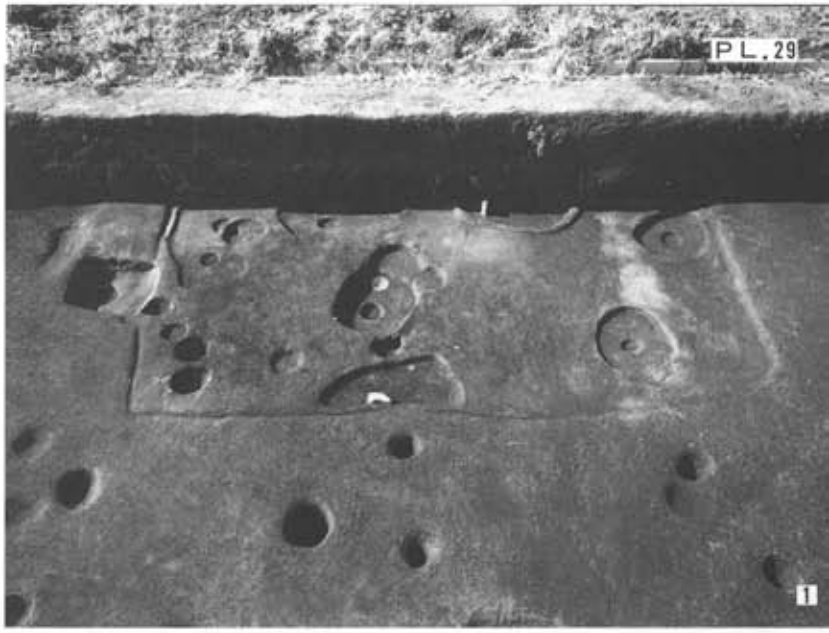
3 .SB444竪穴住居〈西から〉

西山田三本松B遺跡

1 .SB466竪穴住居〈東から〉

2 .SB458竪穴住居〈南から〉

3 .SB512竪穴住居〈南から〉

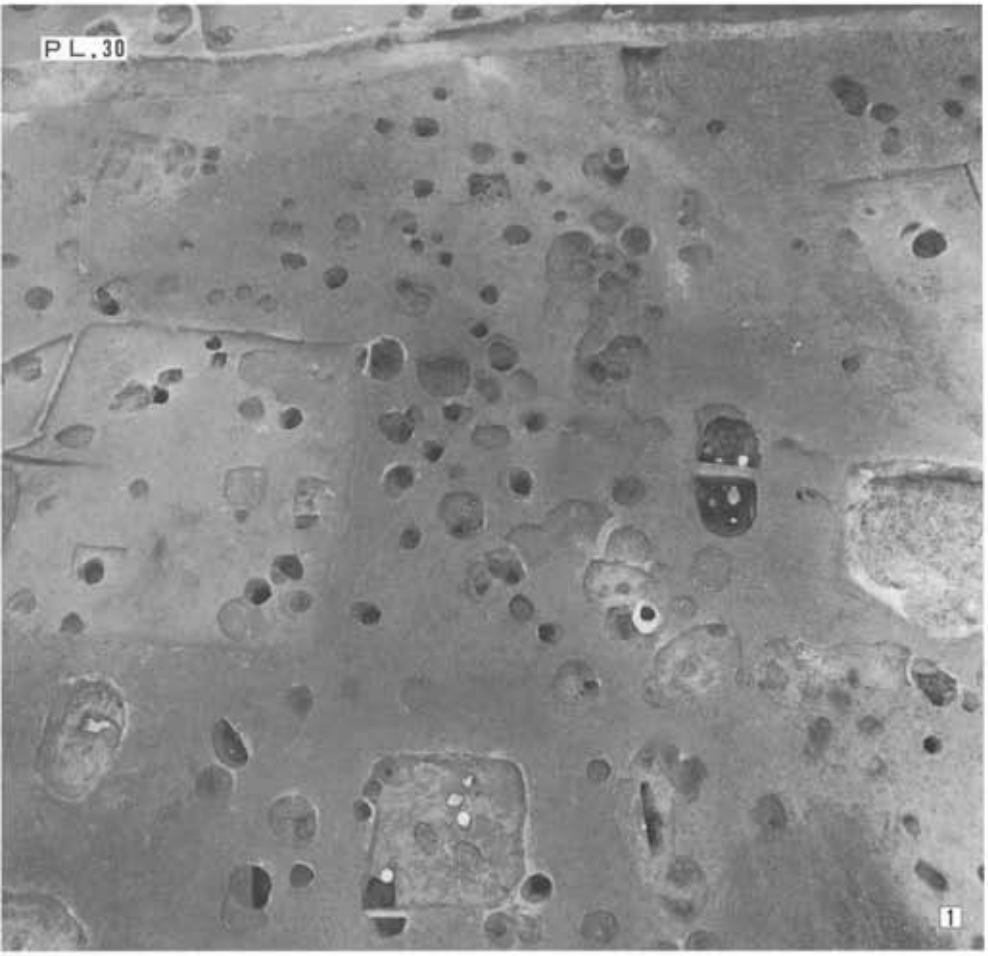


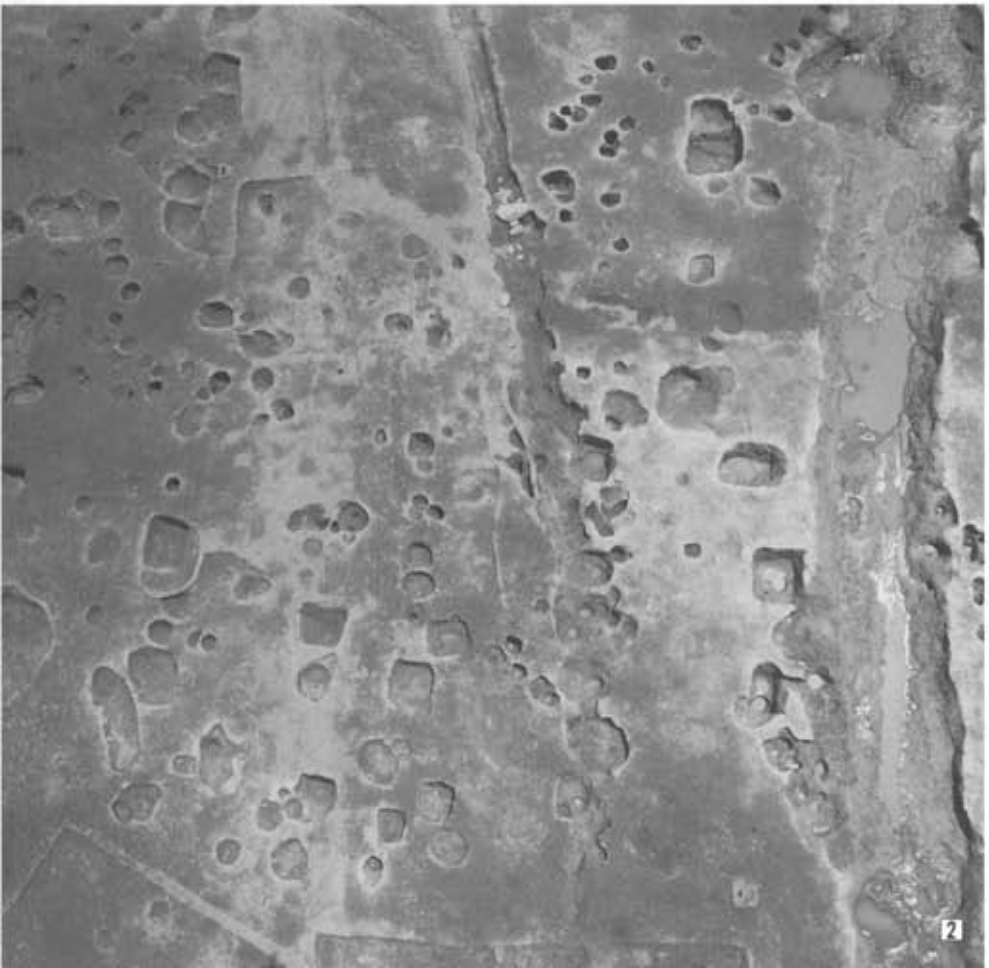
西山田三本松B遺跡

1.SB413竪穴住居〈南から〉

2.SB405・407竪穴住居〈西から〉

3.SB408竪穴住居〈南から〉





西山田三本松B遺跡

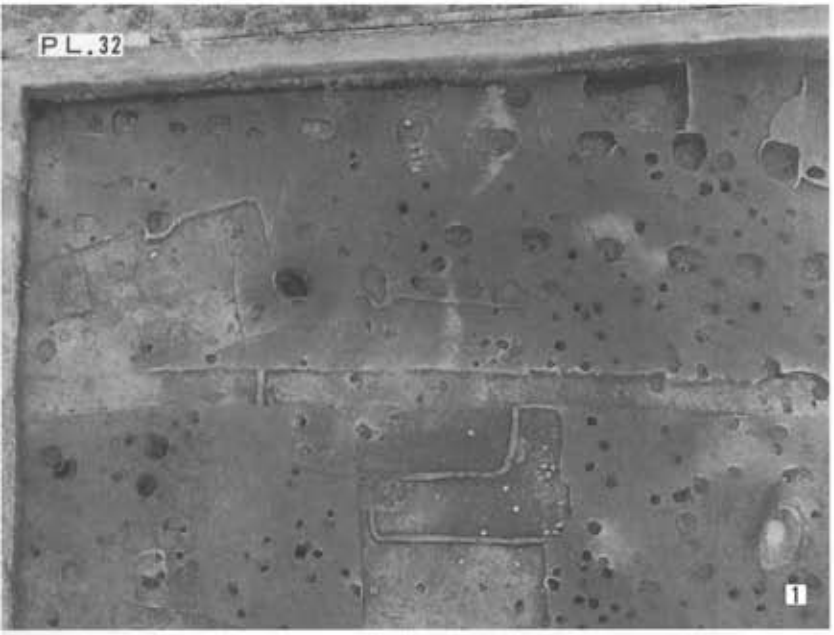
1.III区中央部〈西から〉

2.同北辺部〈南から〉

西山田三本松B遺跡

1.III区西辺部〈南から〉

2.同区東南隅〈南から〉

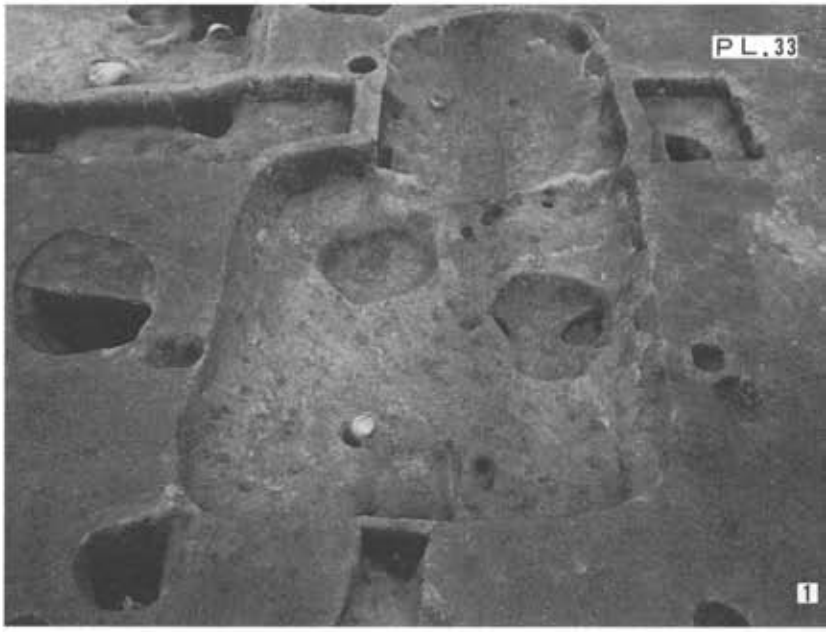


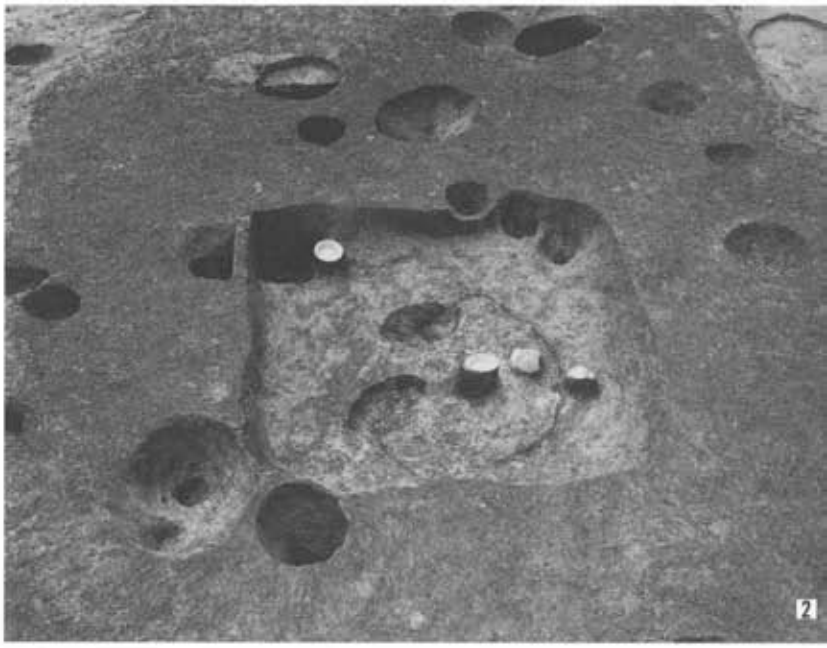
西山田三本松B遺跡

1 .SB450掘立柱建物付近〈南から〉

2 .SB450掘立柱建物〈南から〉

3 .SB449掘立柱建物〈西から〉



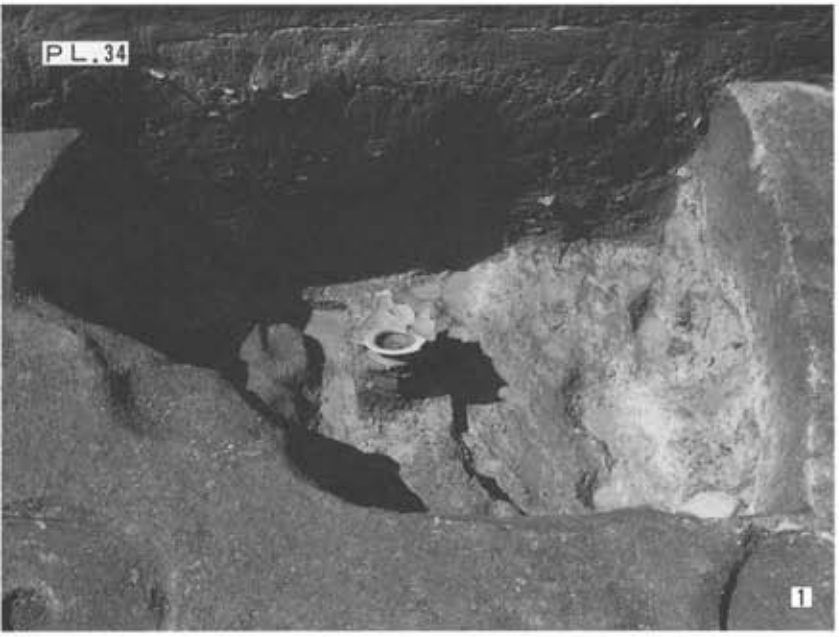


西山田三本松B遺跡

1.SK439・440土壙〈南から〉

2.SK448土壙〈東から〉

3.SK502土壙〈北から〉

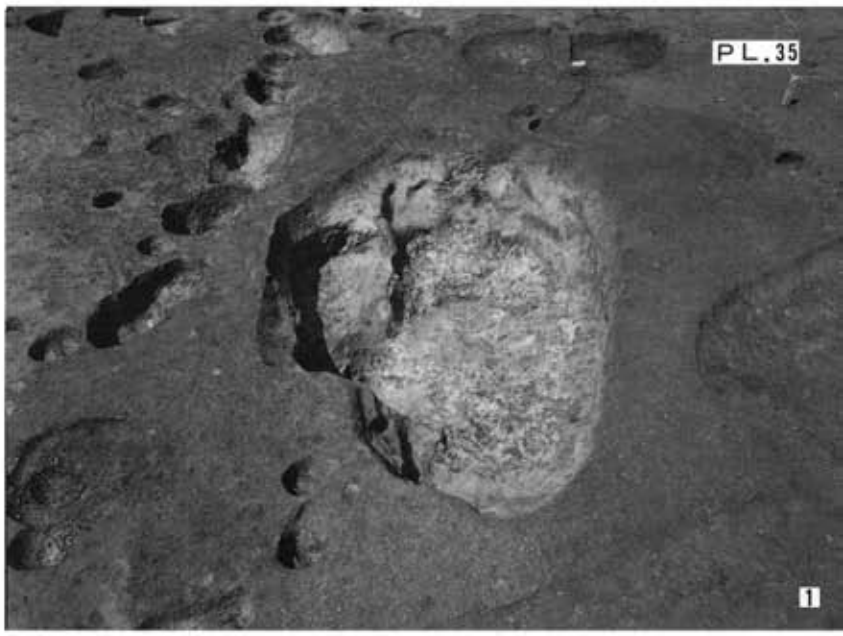


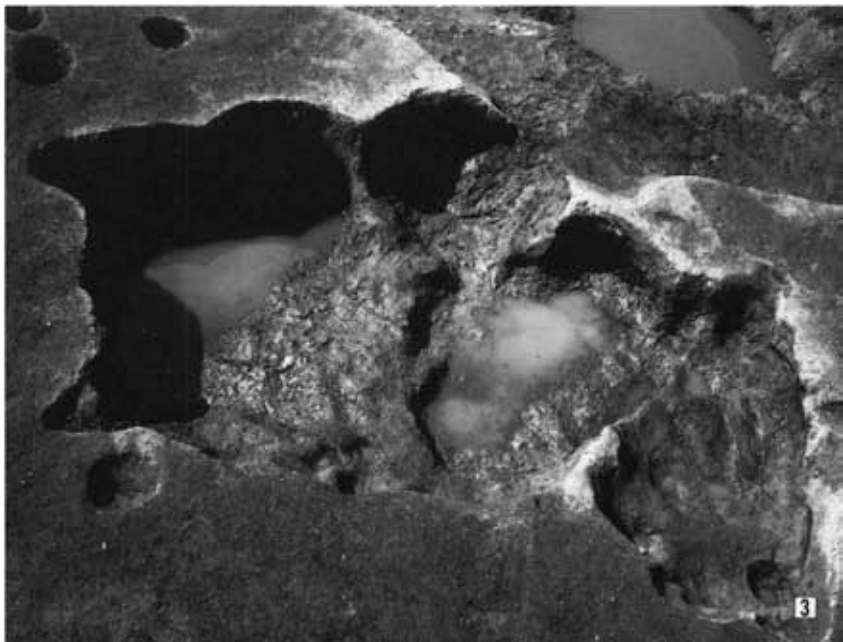
西山田三本松B遺跡

1.SK412土壙〈南から〉

2.SK424土壙〈南から〉

3.SK468土壙〈南から〉



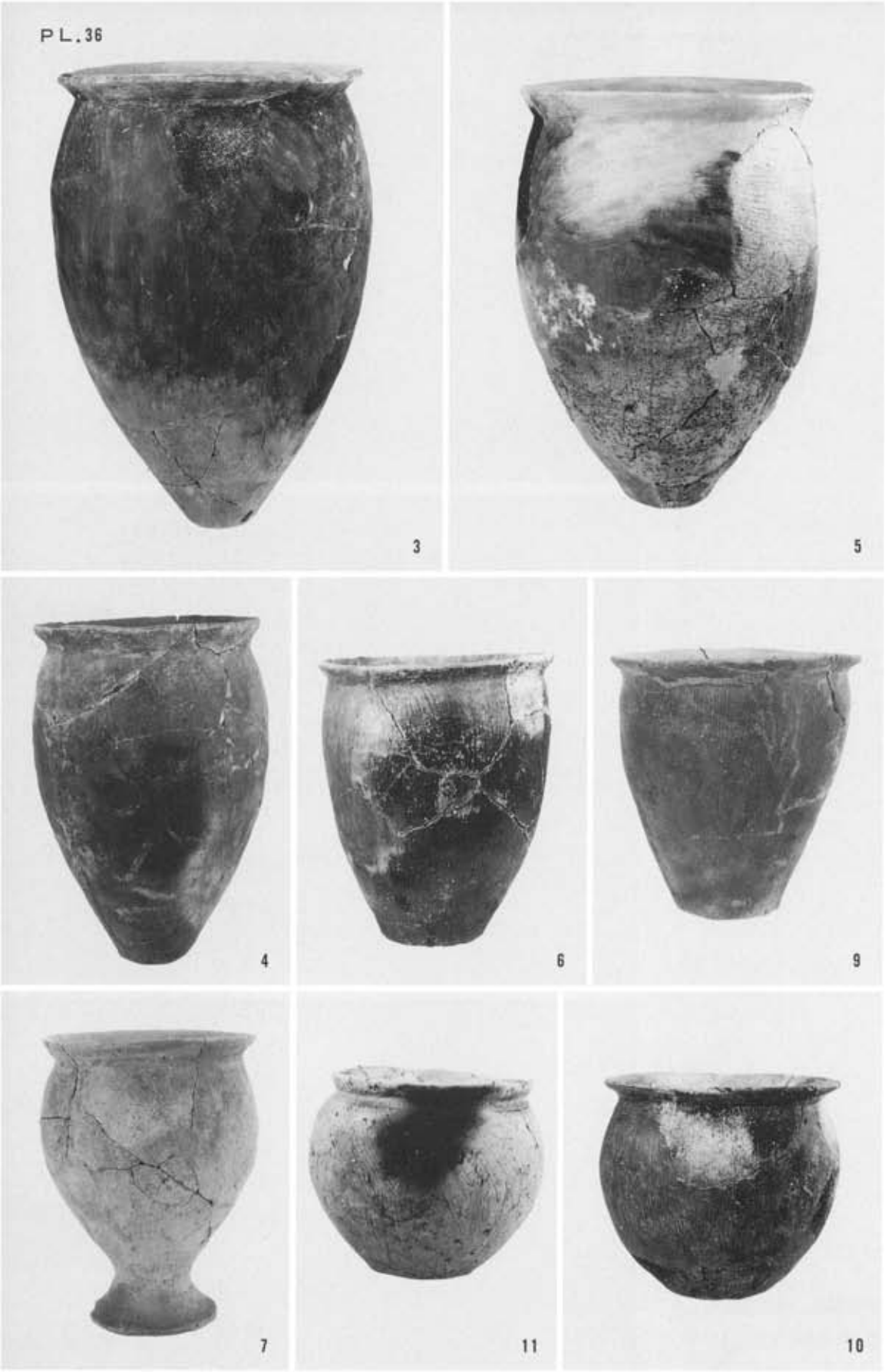


西山田三本松B遺跡

1 .SK427土壙〈東から〉

2 .SK411土壙ほか〈南西から〉

3 .SK475土壙〈南から〉



西山田三本松B遺跡Ⅰ区　SX123土壙出土弥生土器 ①　3…1/6、10・11…1/3　他は1/4

15

16

19

31

22

25

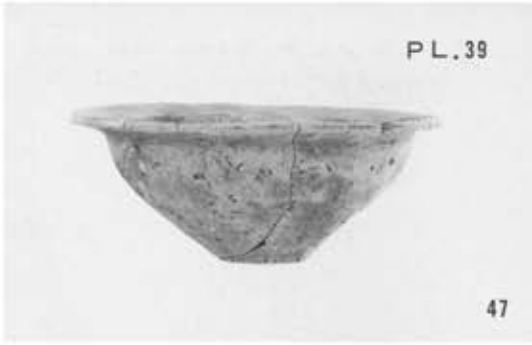
23

26

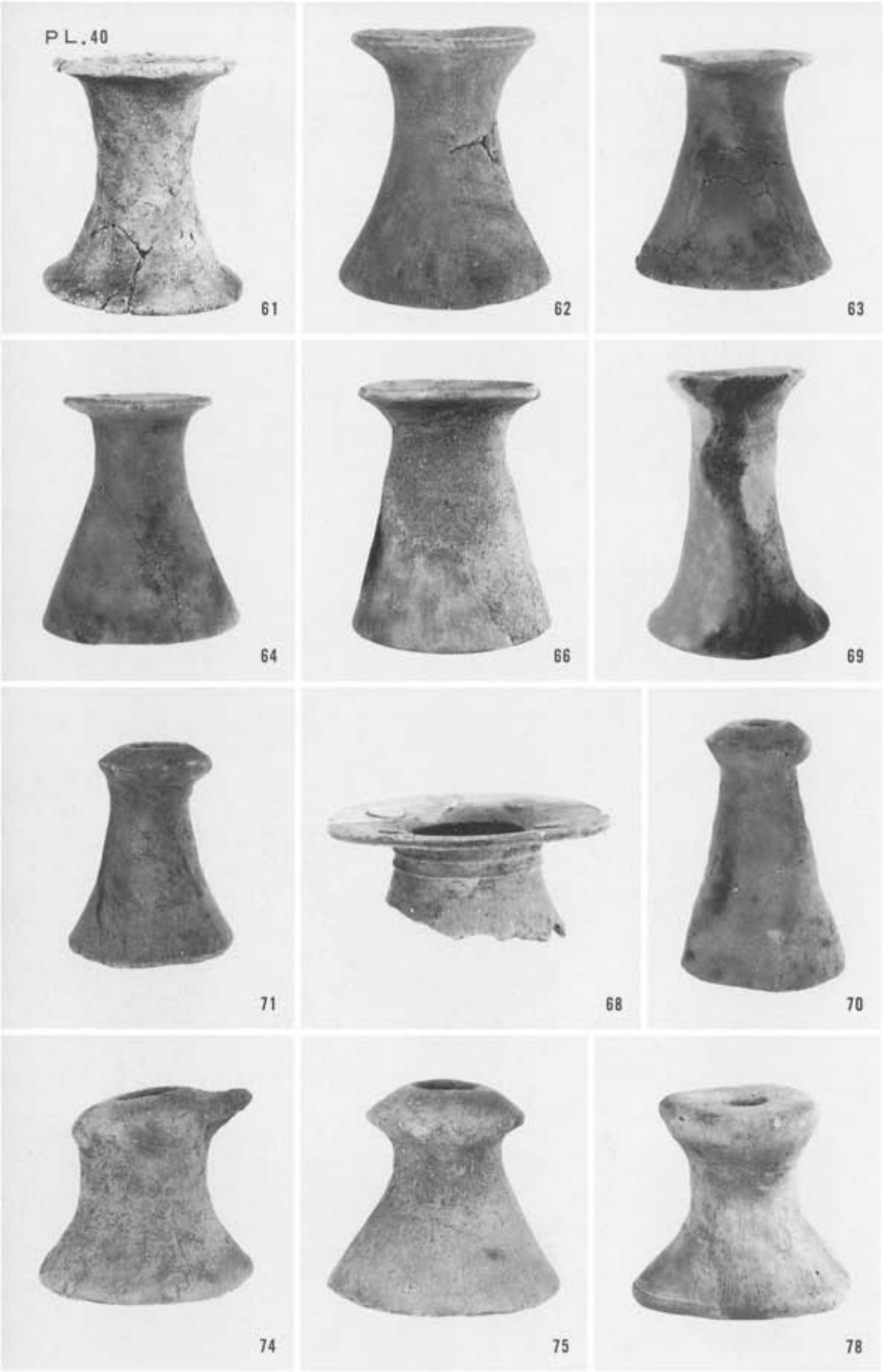
西山田三本松B遺跡Ⅰ区　SX123土壙出土弥生土器　②　15・16・19…1/5、31…1/3、他1/4

西山田三本松B遺跡Ⅰ区

SX123土壙出土弥生土器　③
40…1/4、他1/5

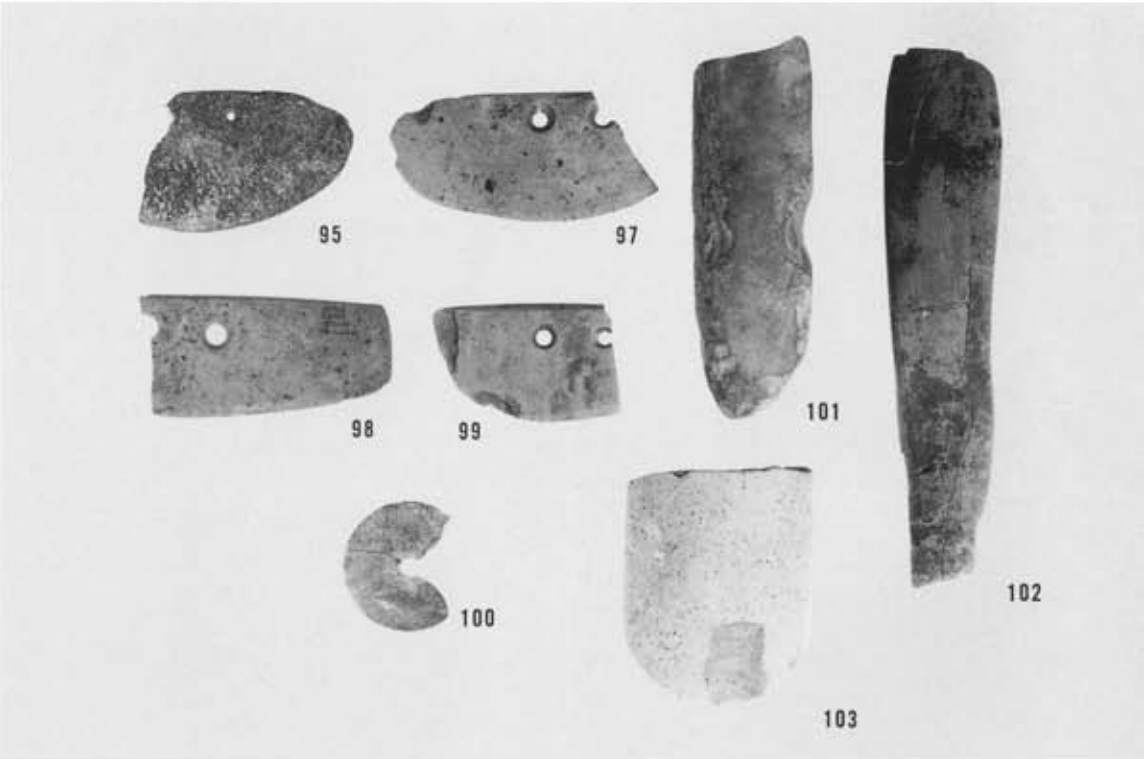


西山田三本松B遺跡Ⅰ区 SX123土壙出土弥生土器 ④ 41・42・43・47…1/5、57・58・60…1/2、53・54…1/3
他1/4



西山田三本松B遺跡Ⅰ区　SX123土壙出土弥生土器　⑤　78…1/2、74・75…1/3、63・64・70…1/5　他1/4

西山田三本松Ｂ遺跡　Ｉ区出土弥生土器
84…1/5、88…1/3、他1/2



西山田三本松B遺跡　　Ｉ区・Ⅲ区出土石器

西山田三本松B遺跡　III区出土弥生土器　178・179…1/5、180・181・187・197…1/4、189・193・196…1/3、190…1/2

199

200

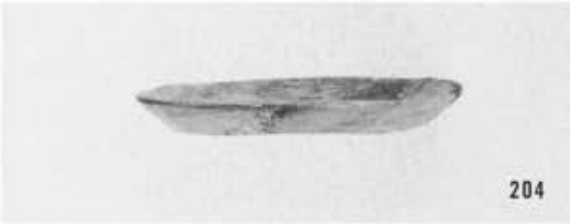
201

202

207

208

209


204

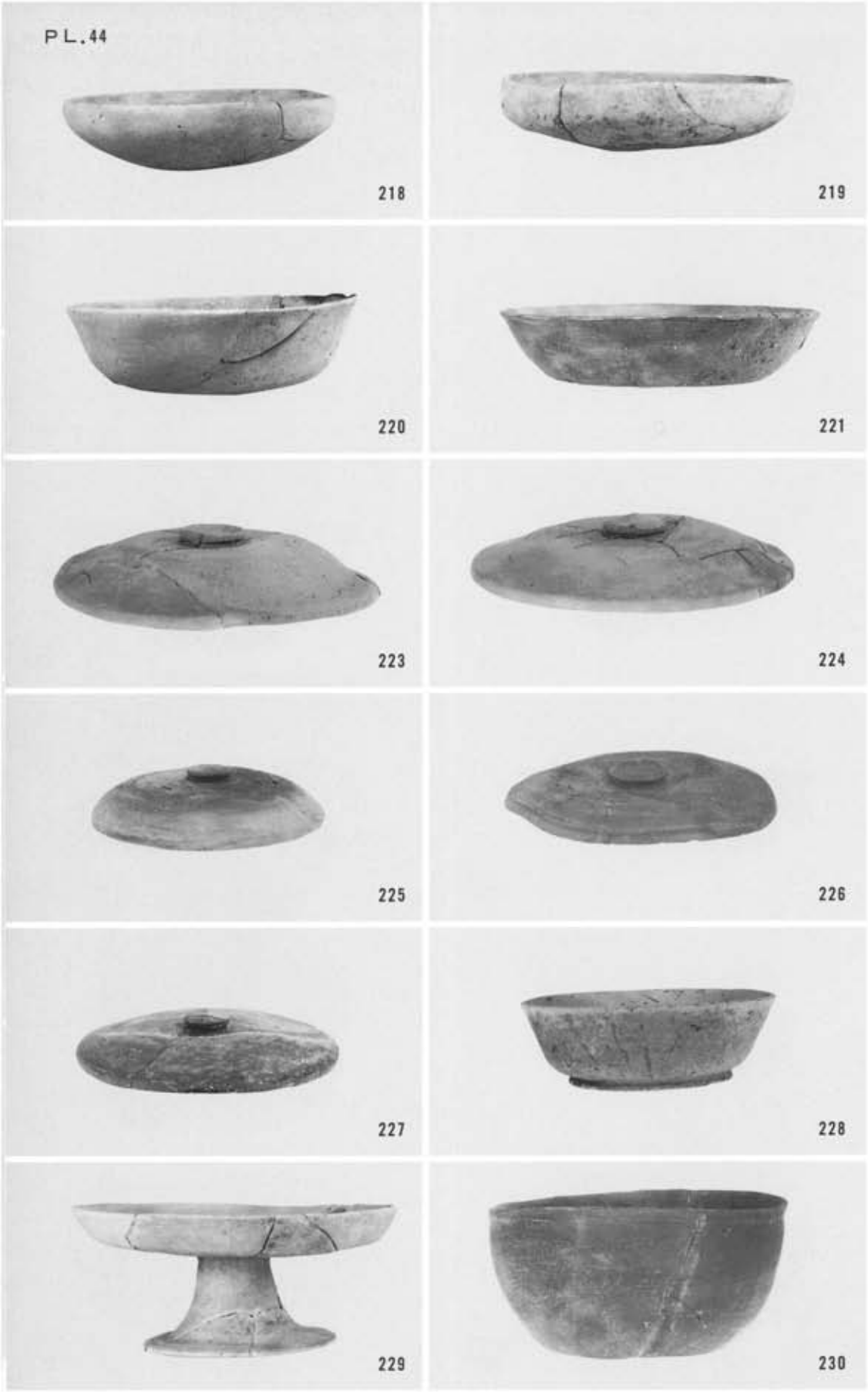
212

215

216

217

西山田三本松B遺跡　　Ⅰ区出土土師器・須恵器　①　215…1/5、200・204…1/4、他1/3



西山田三本松B遺跡　　Ⅰ区出土土師器・須恵器　②　　229・230…1/4、他1/3

234

235

236

237

238

239

240

245

246

249

250

251

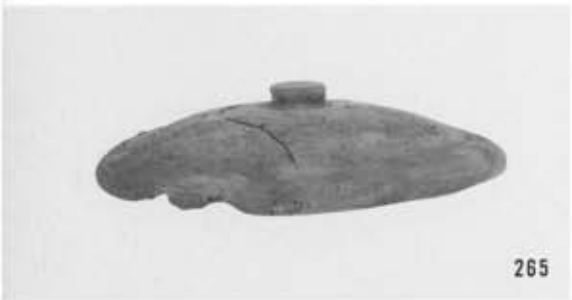
西山田三本松B遺跡　II区出土土師器・須恵器 ①　1/3

254

257

263

264


265

266

278

281

294

295

296

298

西山田三本松B遺跡　II区出土土師器・須恵器 ②　264…1/2、他1/3

303

308

309

311

315

319

317

318

320
(321の蓋)

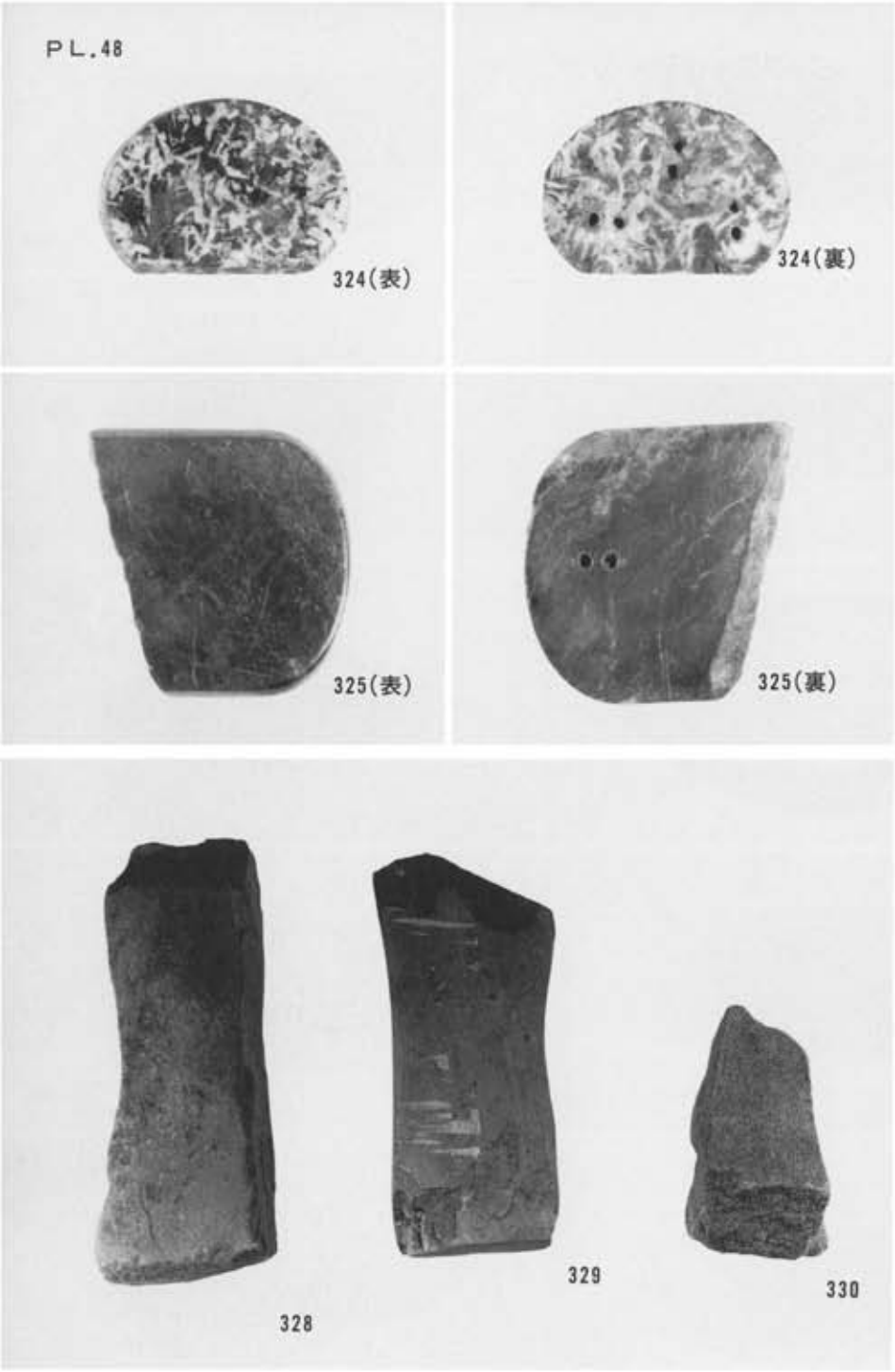
322
(323の蓋)

321

323

西山田三本松B遺跡　II区出土土師器・須恵器　③　315…1/2、303・308・309・311・319…1/3、他1/4

PL.48



石帯

石帯

砥石

西山田三本松B遺跡　II区出土石器

336

338

339

340

341

342

343

349

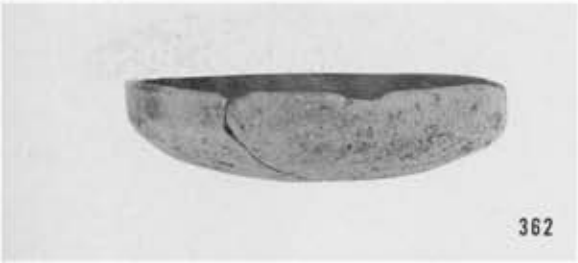
351

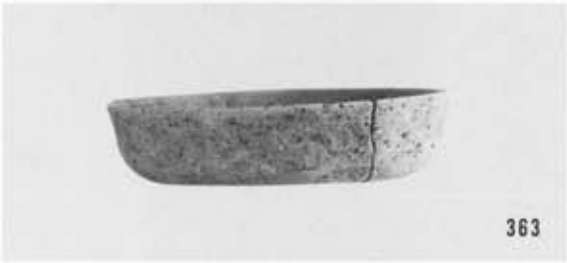
352

353

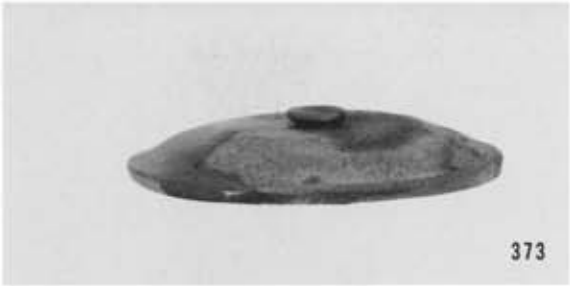
354

西山田三本松B遺跡　III区出土土師器・須恵器 ①　353・340…1/2、338…1/4、他1/3





西山田三本松B遺跡　III区出土土師器・須恵器 ②　364…1/3、359・369…1/4、355・356…1/5、他1/3



西山田三本松B遺跡　III区出土土師器・須恵器 ③　380…1/4、397…1/5、他1/3

398

402

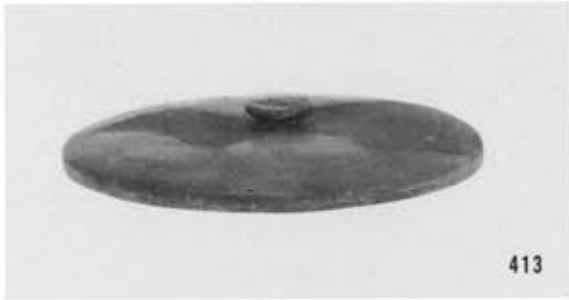
401

404

407

408

410


413

421

422

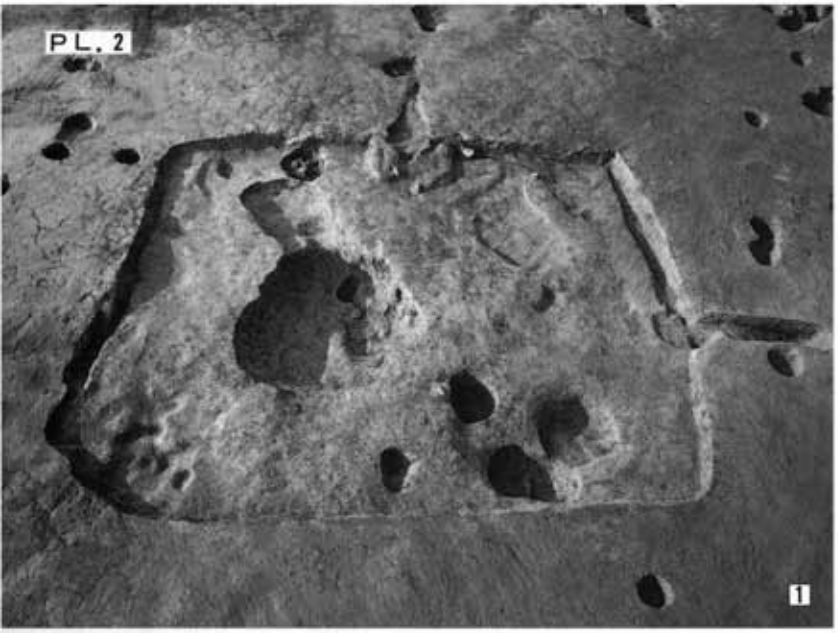
425

431

西山田三本松B遺跡　III区出土土師器・須恵器 ④　401・431…1/2、他1/3

大久保三本松遺跡

大久保三本松調査区全景〈南から〉

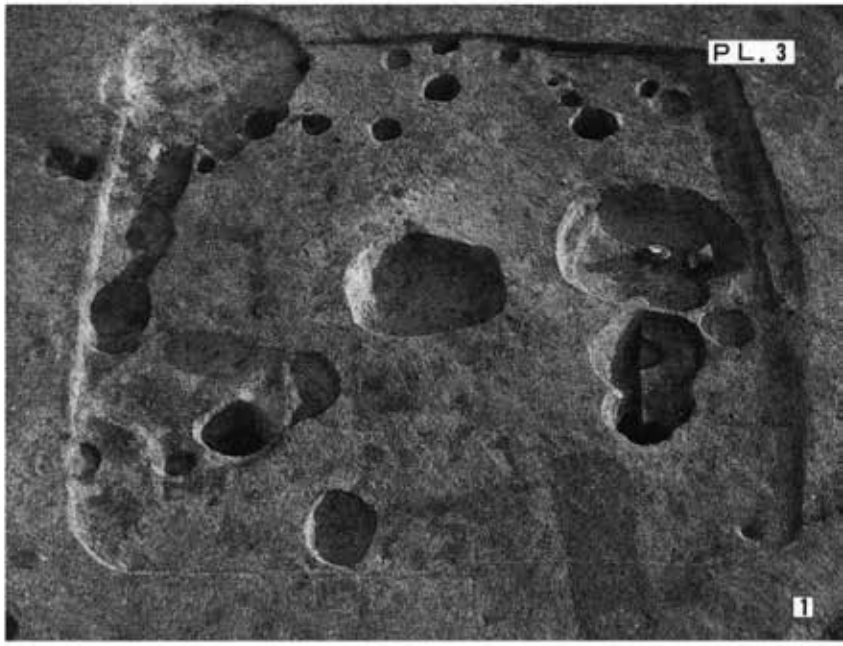


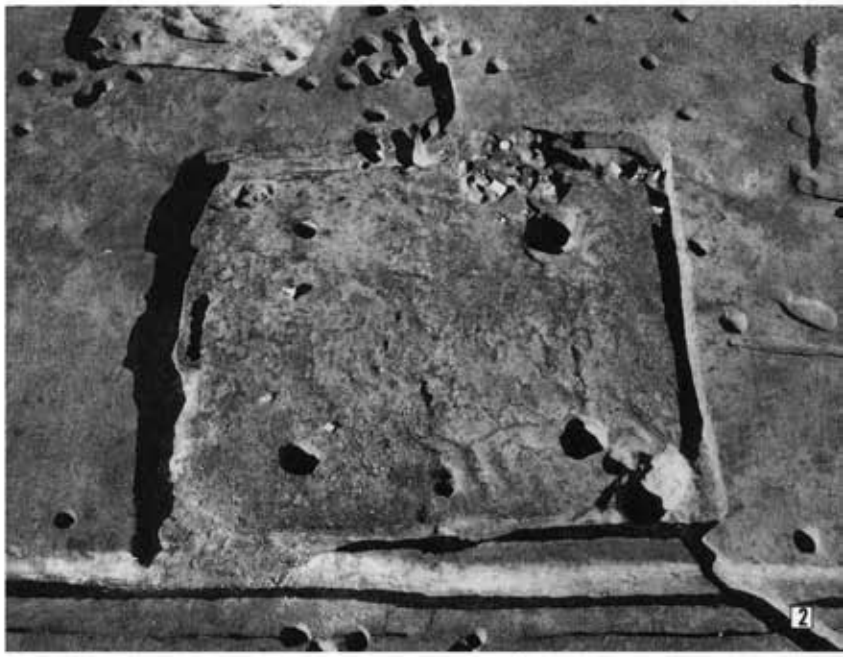
大久保三本松遺跡

1 .SB002竪穴住居〈南から〉

2 .SB003竪穴住居〈南から〉

3 .SB003竪穴住居カマド〈南から〉



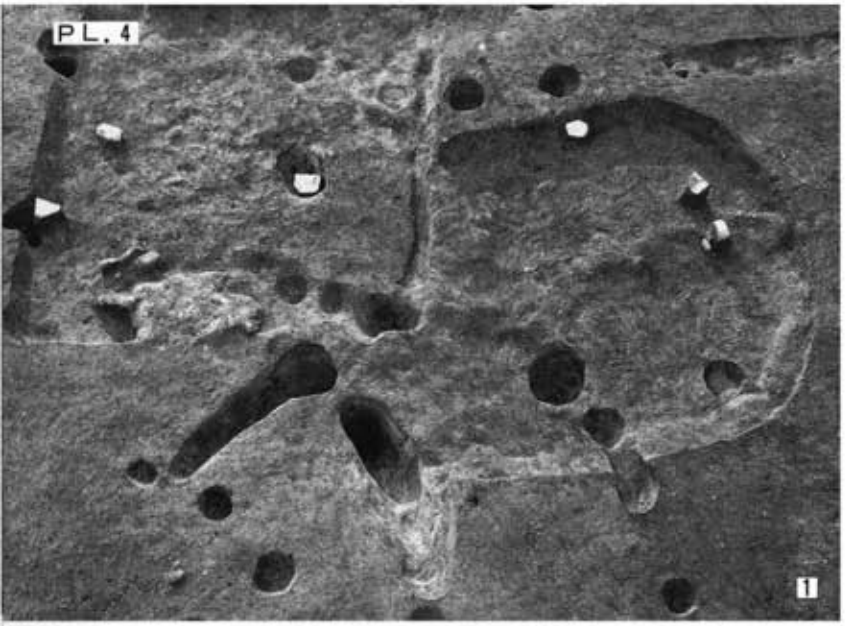


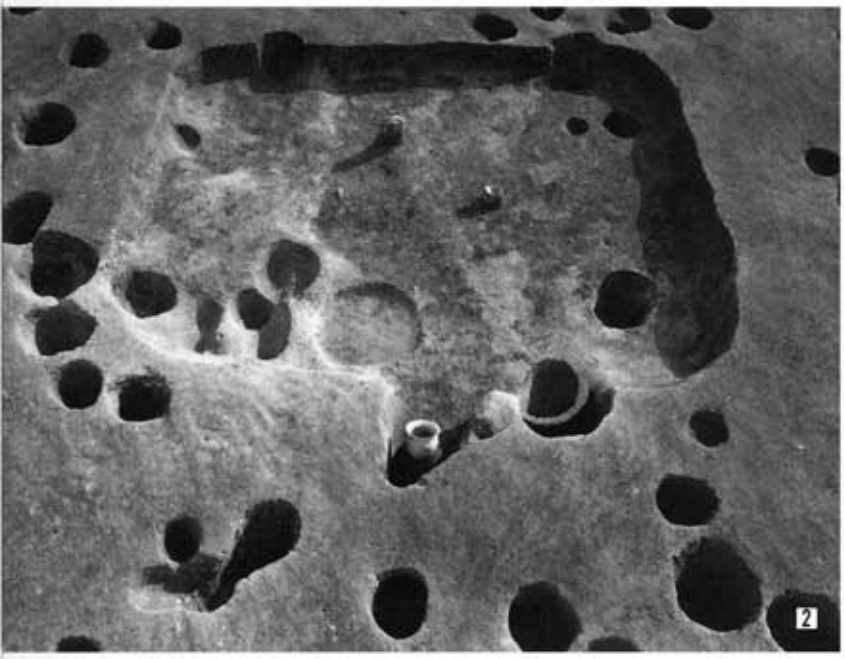
大久保三本松遺跡

1 .SB011竪穴住居〈北から〉

2 .SB013竪穴住居〈南から〉

3 .SB013竪穴住居カマド〈南から〉



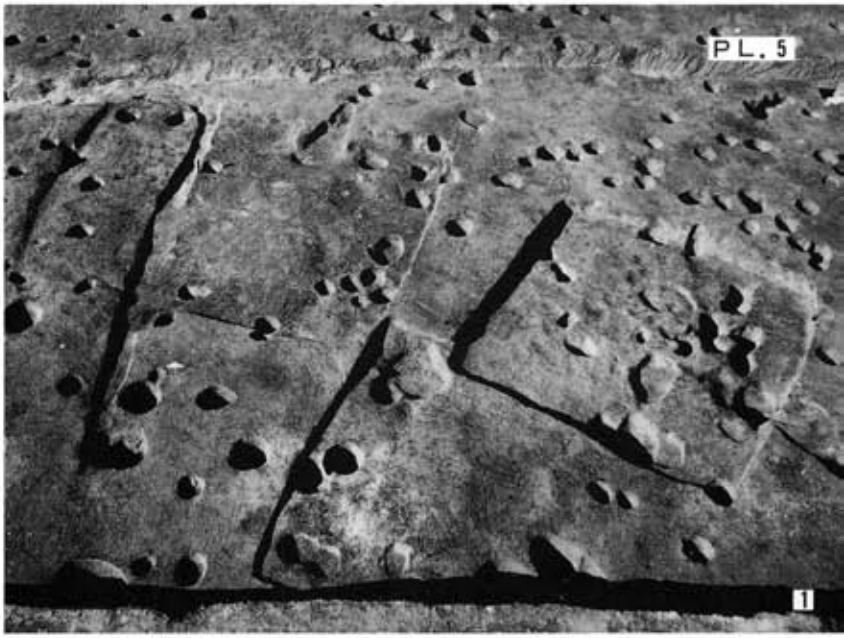


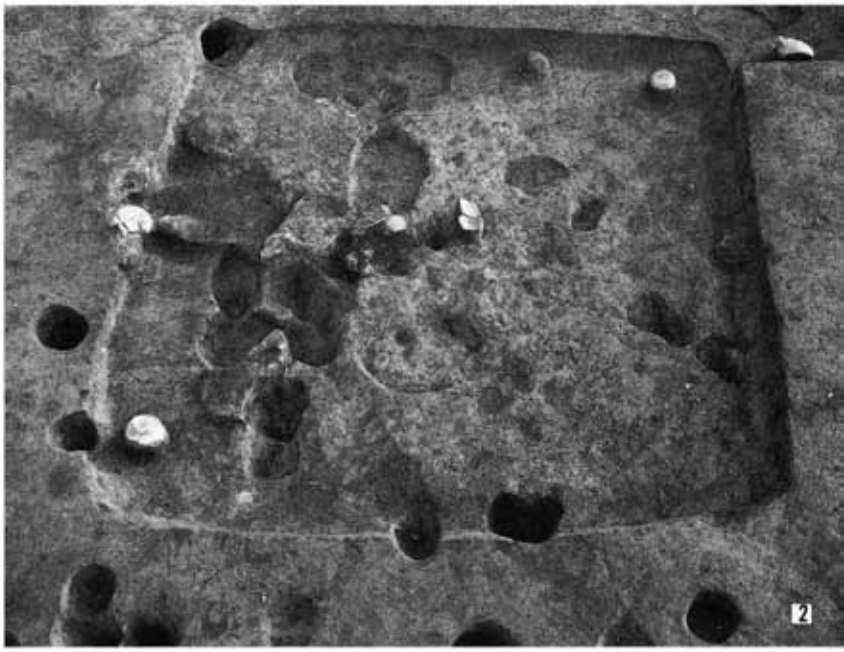
大久保三本松遺跡

1 .SB014・SB015竪穴住居〈東から〉

2 .SB016竪穴住居〈北から〉

3 .SB016竪穴住居カマド〈南から〉



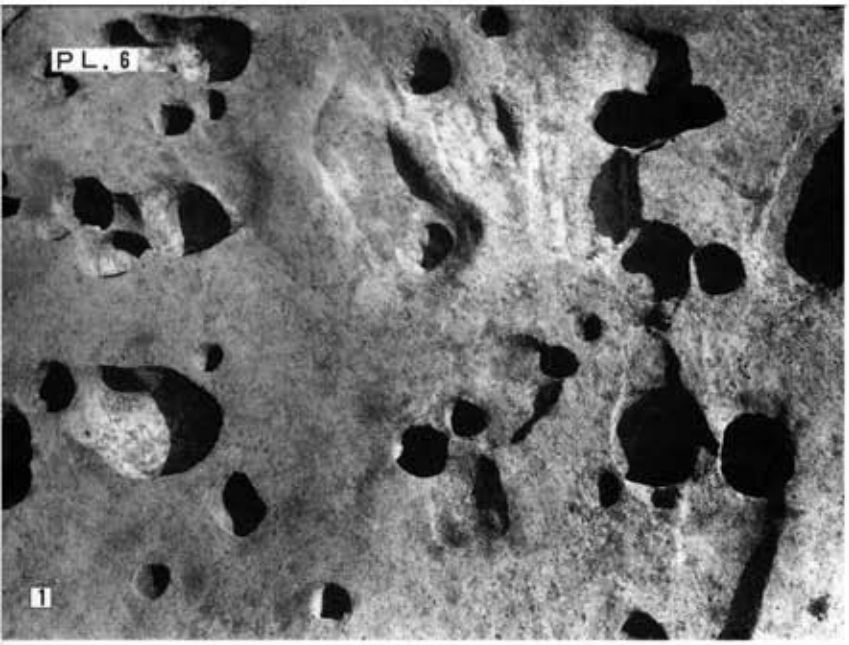


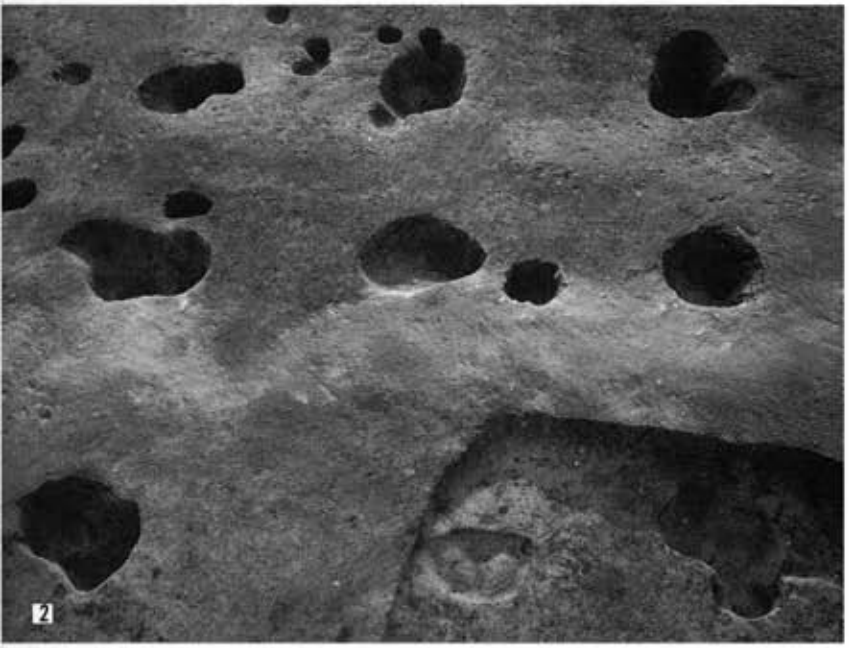
大久保三本松遺跡

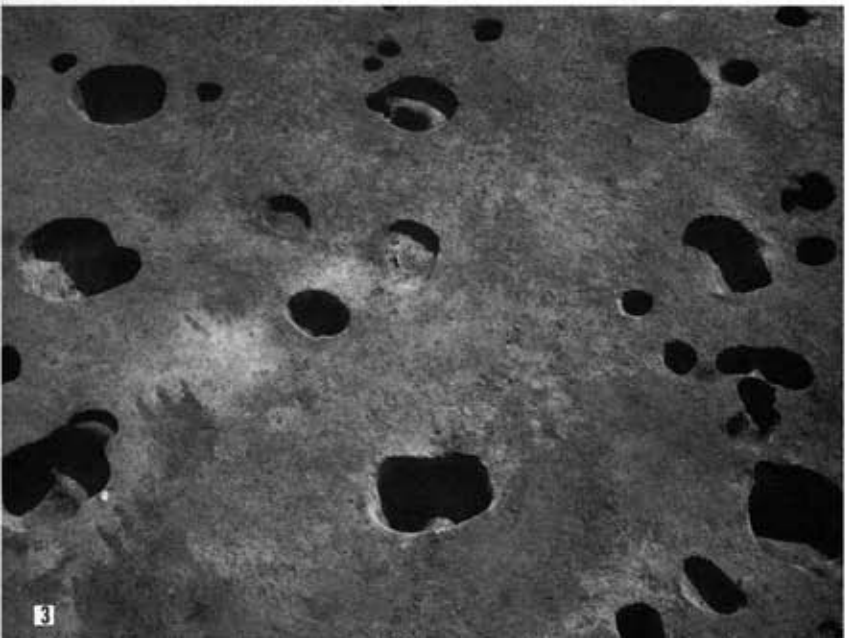
1 .SB019・SB020・SB021竪穴住居〈南から〉

2 .SB020竪穴住居〈北から〉

3 .SB047竪穴住居〈南から〉





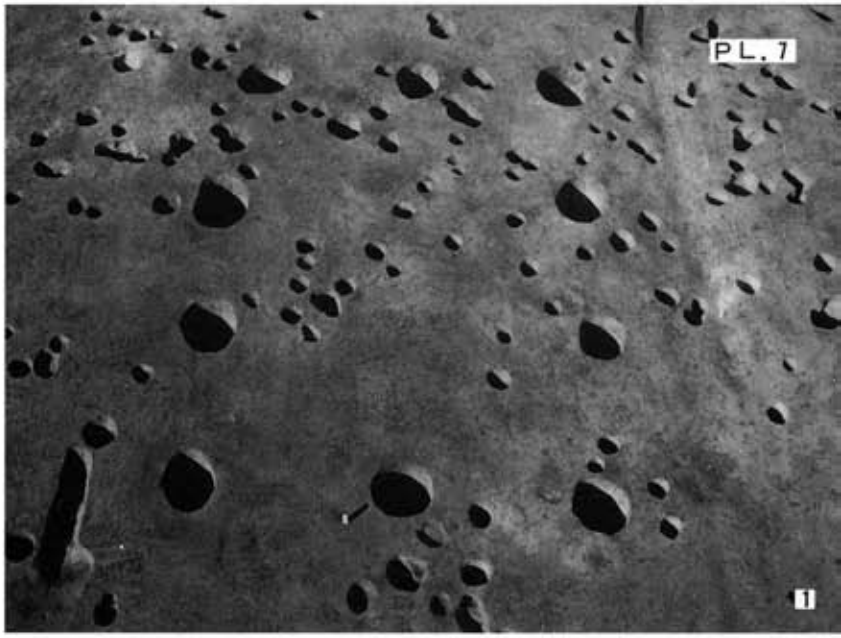


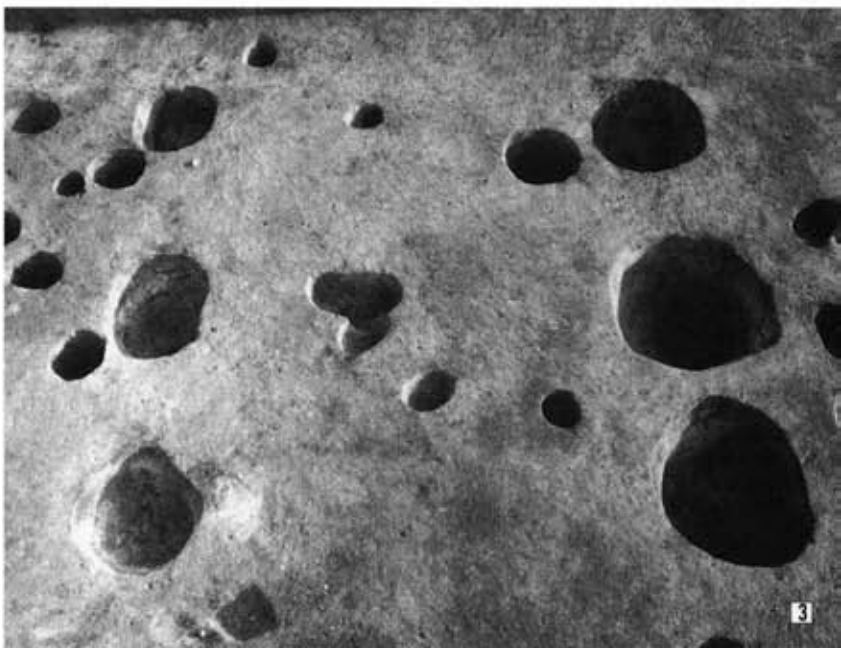
大久保三本松遺跡

1.SB004掘立柱建物〈北から〉

2.SB005掘立柱建物〈東から〉

3.SB006掘立柱建物〈北から〉



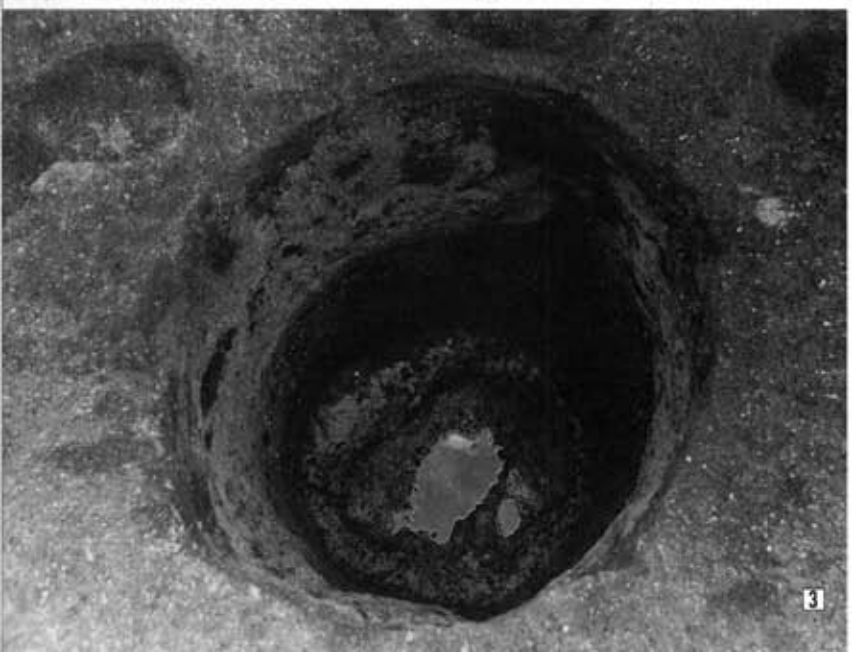


大久保三本松遺跡

1.SB022掘立柱建物〈南から〉

2.SB023掘立柱建物〈北から〉

3.SB026掘立柱建物〈北から〉

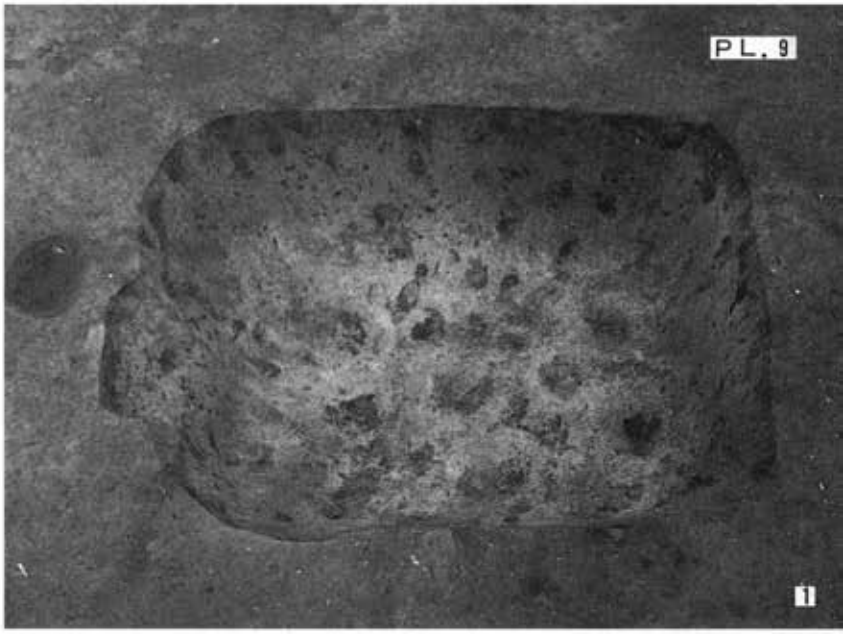


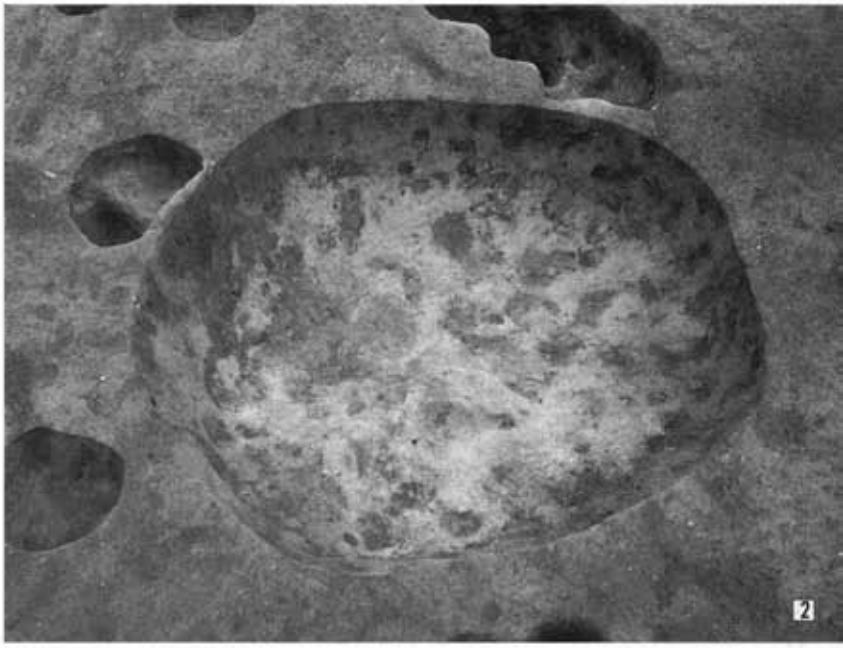
大久保三本松遺跡

1 .SE033・SE034井戸〈東から〉

2 .SE035井戸〈西から〉

3 .SE038井戸〈北から〉





大久保三本松遺跡

1 .SK029土壙〈南から〉

2 .SK037土壙〈北から〉

3 .SD042溝土層断面〈南から〉

佐賀県文化財調査報告書　第128集

西山田二本松遺跡

九州横断自動車道関係
埋蔵文化財発掘調査報告書(19)

平成８年３月27日　印刷
平成８年３月29日　発行

編集　佐賀県教育庁文化財課
発行　佐賀市城内１丁目１－59

印刷　株式会社　宮地印刷
佐賀市長瀬町11－20